THE CENTRAL REVIEW

中央公論

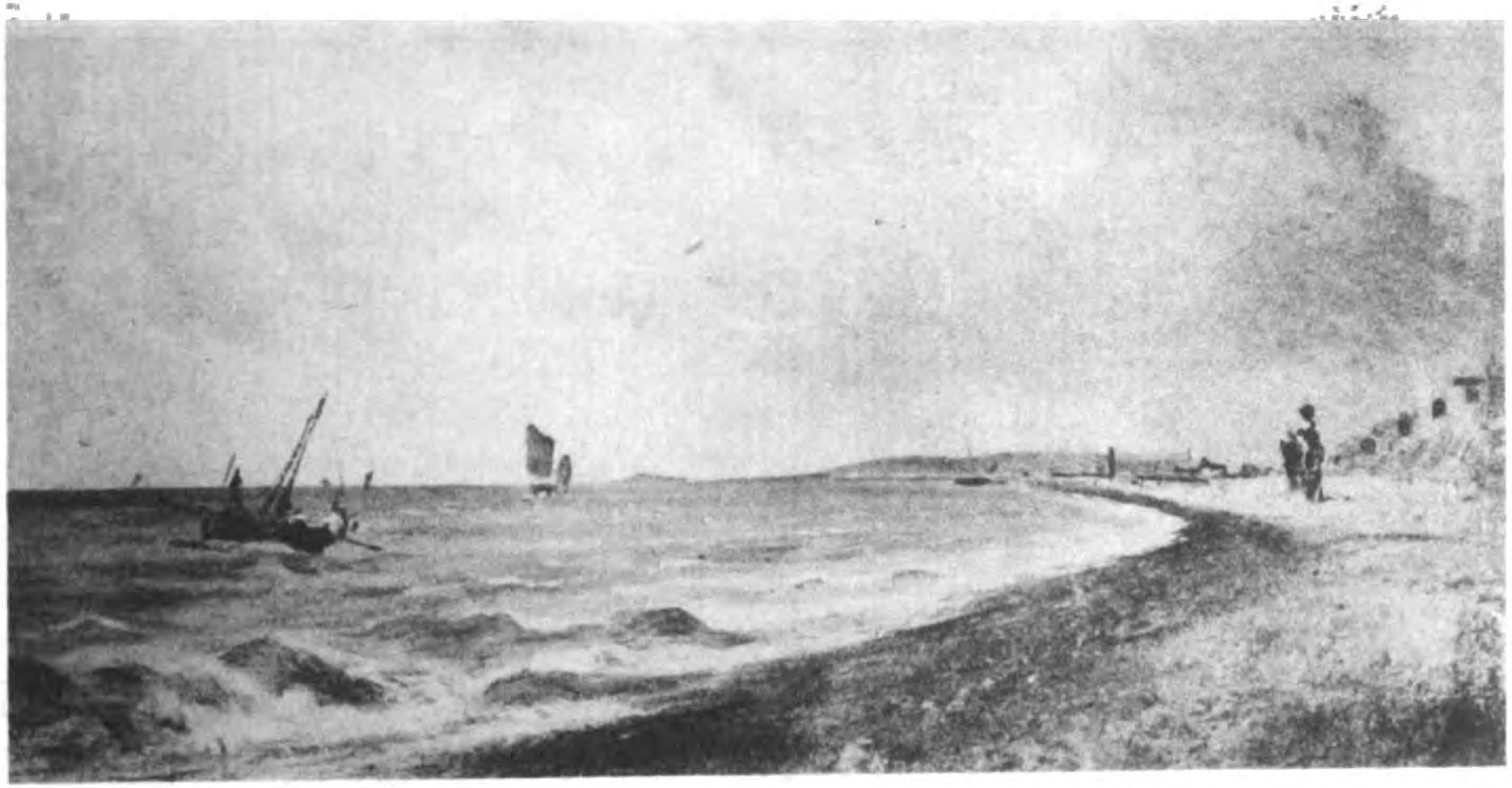
二月號

第三十七年 第二號 第四百五十號

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

▼說苑


書きよい
ペンさき
手の出し
よい直段
プラトン萬年筆
何時までも削らずに書ける
專賣特許の
プラトンシャープ鉛筆
P式一圓以上
A式三圓以上
日本文具製造株式會社特製
中山太陽堂文具部發賣
PLATON



COAST SCENE WITH FISHING BOATS. CONSTABLE

歐米名士の印象

法學士 鶴見祐輔氏著

世界大勢の鳥瞰圖

旋風の如く洪水の如く、歐洲の大戰は根柢から世界の物質文明を覆し、精神文明を動搖せしめた。今や全人類は凡ゆる方面に革新を叫び、世界は到る處感激と暗示に滿ちてゐる。著者この澎湃たる時代思潮に乘じ、廣く世界の眞理を求め、新人の聲を聞くべく、官命を帶びて歐米を漫遊し、幾多各方面の名士に接見し、歸來その深刻なる印象と其の思想を摘錄し、之に嚴正なる批判を加へて本書一卷を著された。行文流麗暢達、髣髴として世界の人物を活寫し興味津々卷を措くを忘れしむ。今や華聖頓會議開會され日本の國際的地位益重きをなさんとする秋、世界の大勢を知らんと欲する人士の必讀の良書たるのみならず、青年諸君の修養の好資料である。

內容一斑

ホワイト・ハウスのお茶(**ウイルソン大統領**)…古代希臘の政治家(**前國務卿ルート**)…上品な老紳士(**國務卿ヒューズ**)…印象のない人(**前國務卿ランシング**)……米國勞働組合首領(**ゴムパース**)…貧民窟の除夜(**ウオールド女史**)…米國新聞王(**ハースト**)…女の政治論(**パーキンス女史**)…ロイドジョージの凱旋(**英國首相ロイド・ジョージ**)…ニュー・ヘヴンに春日遲々(**前大統領タフト**)…御發明な御前樣(**英國外相カーゾン侯**)…衆鳥高飛盡孤雲獨去閒(**米國平和全權ハウス大佐**)滿腹の經綸(**米國商務卿フーヴアー**)…米國溫情主義(**米國鋼鐵王ゲーリー**)…お伽噺の王子樣(**英國皇儲アルバート殿下**)…世界新文明の基調(**文豪ウエルス**)…マルクス以後の第一人(**ラスキー**)…勞働黨內閣の首相は誰(**トーマス**)…佛國溫情主義(**鋼鐵王シユネーダー**)…英國新聞王(**ノースクリフ卿**)・小說家から駐伊大使(**文人チヤイルド**)…退隱富豪の理想鄉(**銀行家ヴアンダリツプ**)…英米反目如何(**銀行家ロバーツ**)…紫藤花下の隱棲(**政治學者エリオット博士夫妻**)

最新刊 寫眞十數葉入

定價三圓五十錢郵稅八錢

四六判總布函入 頗美本

實業之日本社發行

東京市京橋區南鍋町二丁目

振替貯金口座東京三二六番

◇大刷新の◇

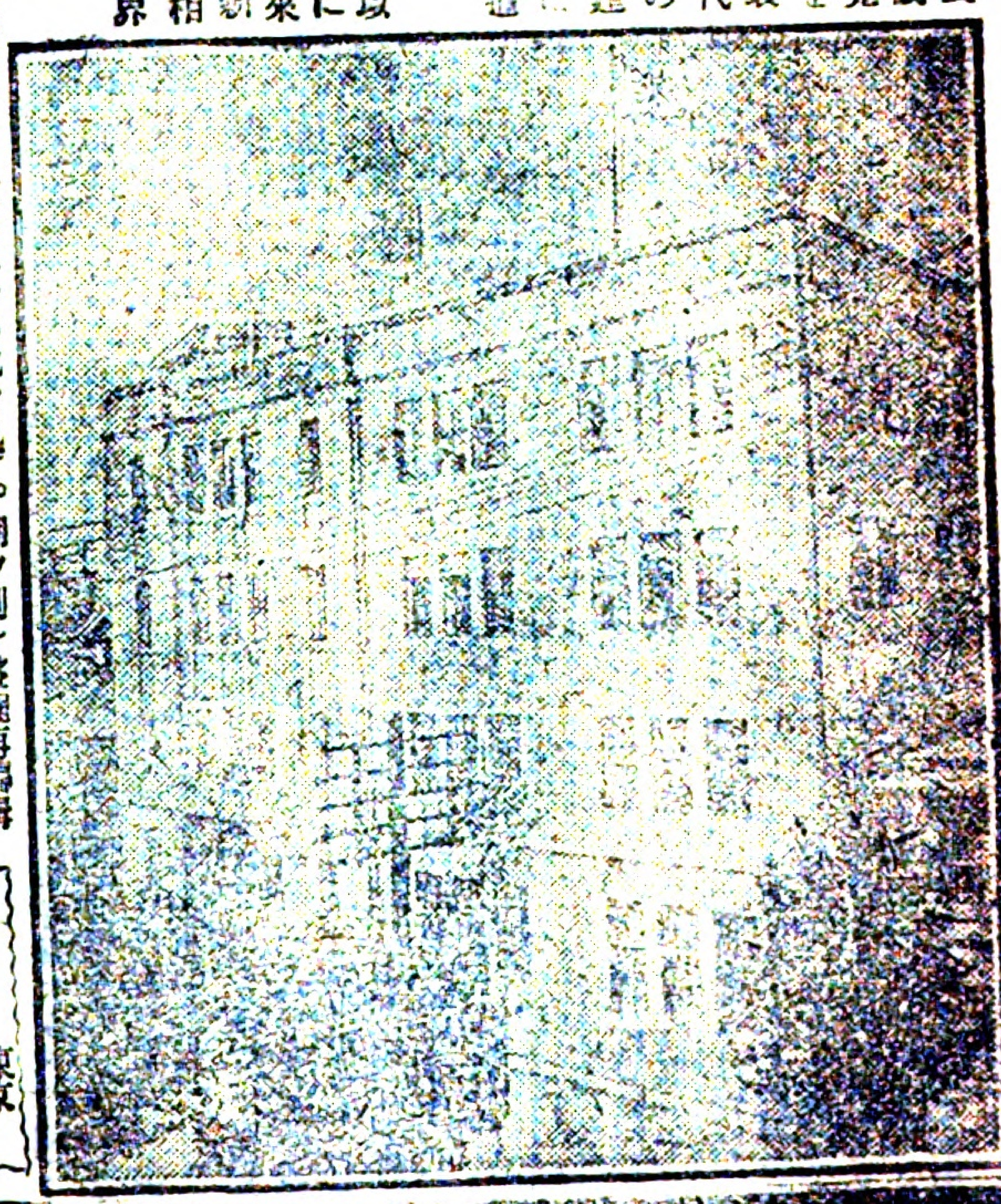
東京朝日新聞

朝刊

創刊以來三十五年間に蓄積し來れる信用と勢力と權威とに、加ふるに世界的に完備せる東洋第一の通信網を以てし、豐富の材料、精選の記事、最新式の編輯法を採る。常に輿論の代表者たり、時代の先驅者たるは世の知る所、今や鐵筋混凝土四層樓の建築新に成り、最新設備の完成と共に内容外觀の充實整頓、斷じて他の追隨を許さゞるものあり。

夕刊

時勢の急轉は朝刊のみを以て滿足するを許さず、新に夕刊を起してその日の出來事を迅速に報道す。朝日新聞の夕刊は洵に金棒なり、朝刊と相俟つて紙面愈整ひ卓然として新聞界を濶歩す。



縮刷版

縮刷版は東京朝日新聞の獨創にして世界にその比を見ず。朝夕刊を整理再編輯して、これを菊判二倍大に縮寫し、詳細なる索引を附して記事を探るに便にす。月一回、毎月十日を以て前月分を發行し、廣告を除くの外は東京朝日に掲載せられたる記事と挿畫と細大一も漏らさゞることとなし。會社、銀行、官廳、學校、圖書館を始め苟も文明的事業に關係ある者の必需品たり。

見本入用の方は郵券封入申込まれたし

發行所

東京京橋區瀧山町

東京朝日新聞社

新聞界の權威

黎明期に方りて

▽何を措いても先づ東京日日新聞を讀まなければならない、何となれば、此の世界の黎明期に當り、地上萬般の事象は悉く網羅されて遺憾なく紙上に展開されてゐるから。而して此の貴き人類の記錄は、即ち文化の過程を語るものであつて吾人は一日も忽がせにすることの出來ないものである。



智見の開發に

▽何を措いても先づ東京日日新聞を讀まなければならない、日に新たなる科學の進步、月に改まる思想の變遷、文藝や美術の新傾向、軍事外交の推移、これらは皆悉く我社の優秀なる報道機關を以て吾人の面前に提供されつゝある、而して此等は我等の生活に取り必要以上の必要であるのだ。

新聞代金

一部	金四錢
一ケ月	金八十五錢
一ケ月地方郵税共前金	壹圓
三ケ月同上	貳圓九拾錢

發行所

東京市丸ノ内

東京日日新聞社

振替口座二八〇〇番

廣告料

五號活字十五字詰	一行	金壹圓拾錢
第一面	一行	金壹圓貳拾錢
場所指定	一行	金貳拾錢増
雜報欄	一行	金貳圓五拾錢

大正十一年

中央公論

二月一日發行

二月號

第卅七年第二號

第四百五號

思想家と實際家との協戮を提唱す

或る人現代の思想界を評して曰ふ、有らゆる進步思想と之を背景とする運動とに面を背けて因習と傳統とに執着するのも固より大に咎むべきだが、歷史を無視し一擧に理想を實現せんとして現狀の破壞を是れ事とするも亦甚だ危險だと。此說一見不徹底を極むるが如くにして實は頗る眞理に富むものがあると思ふ。

舊文明の行き詰りが玆に新に局面の轉換を要求して熄まないことは云ふまでもない。理想世界への憧憬が昨今特に年若き者の血を躍らして居ることは當然のことだ。斯う云ふ時代に於て各方面の社會が、其の實際問題の解決に關してすら、政治家などを差し措いて直接思想家の許に趨りて敎を聽かんとするのは怪むに足らない。見よ、最近流行の諸雜誌は期せずして皆政界先輩の政論などに紙面を割かうとしないではないか。今日は實に思想家全盛の時代である。

而して社會は只漫然として與り聽くだけではない。如何にかして之を實現せんとするの熱情に燃えて居ることは著しい今日の特徵だ。即ち社會改造の實際問題として思想家に其解決を求めて居るのである。思想家は此要求に應じて各種各樣の答案を與へて居るが、其間にまた二つの違つた種類を分つことが出來る。一つは理想の實現は實際の社會の上に進化的にのみ可能だとする者で、他は舊社會を根本的に破壞すると云ふ革命的方法によらずんば新社會の建設は望まれないと觀る者と即ち是れである。此の二つの立場に對し、今日多數者の常識は前者に與することと疑ないが、其當否の論はこゝで吟味することを略しておく。

飜つて之を歷史に徵するに、所謂先覺者が一步時勢に先つて爲に往々身を殺すものあるは、要するに餘りに理想の追求に熱中して實際を無視せるの結果であらう。國民に其の求むべき所を明示して吳れた先覺者として彼は無限の尊敬に値する。而かも社會の發達は段階的にのみ進むものとすれば、彼の說を文字通りに實行するは往々

にして角を矯めんとして却つて牛を殺すと同一の過に陷らぬとも限らない。是れ理想家のとかく實際家から危險視せらるゝ所以である。

社會は多くの場合に於て其恩人を殺すが、其犧牲者の恩人たることとに付ては一點の疑を容れない。蓋し社會は先覺者を殺しつゝ畢竟其蹤を追うて進むものなのである。併し斯の如きは客觀的に觀ての話で、斯う云ふ次第だから社會は先覺者を危險視してドン〳〵始末してもいゝと許す譯には往かない。先覺者が百步進んで居つたればこそ、社會は四十步五十步と段楷的に進步を續けて行けたのである。始めから百步進める者を危險視し百方其活動を阻止するやうでは社會は遂に一步も進み得ぬ運命に陷らう。

加之とかく社會は保守退嬰に安じたがるものだ。特に實際家に於て然りとする。故に社會改造論の進化主義の如きも動もすれば保守的政治家の急進的改革論に對抗するの武器に利用せらるゝ嫌がないでない。それ丈また理想家は益々突飛な議論で猛進すると云ふことになる。此意味に於て、實際政治家の餘りに保守的な態度は却つて實に理想家の急進的な議論を誘發するものだとも云へる。

我國の今日に於て實際政治家の態度の保守退嬰に過ぐるは云ふまでもないが、更に驚くべきは彼等の大多數が現今の時勢に些の理解なく新人の理想と要求とに對して極端に無智であることである。是に於て社會は彼等と現代の問題を語るは木に椽りて魚を求むるよりも難しと觀るに至つた。是れ期せずして思想家の門を叩くに至つた所以である。併し乍ら多くの場合に於て思想家は實際を知らない。知らないと云ふよりも實際に接して居ないと云つた方がいゝ。臨床に經驗なき病理學者の樣なものだ。斯う云ふ人がどん〳〵病名を斷定し藥餌を盛るとすれば其處に一種の危險を伴うと觀るも亦已むを得ないと思ふ。

吾々は斯うした不安の時代をもはや二三年も忍んで來た。今やそろ〳〵本當の途に立ち還つても然るべき時だと思ふ。思想家も反省せよ。實際家も覺醒せよ。日本といふ大船は今や正に彼等の協力によりて舵を取られんことを待つて居る。

中央公論



第卅七年第二號
二月號
第四百五號

當來社會の根本原理

阿部次郎

一

人格的結合の社會は如何なる成員によつて組織せられなければならないか。云ふまでもなくそれは人格によつてである。單に潜在的に人格の資格を具備してゐるのみならず、又自己の威厳を自覺し尊重する人格――換言すれば腹の底からの人格主義者によつてである。吾々は又この事實を、當來の社會は君主人[1]によつて構成されなければならぬと言ひ換へることも出來るであらう。自ら人格となり、他人をも人格とするやうに心掛けること――これが當來社會を建設せむ

と志す者の第一義諦でなければならぬ。

然らば君主人とは何であるか。君主人とは自己の人格の威嚴を信ずる者である、自律の意志に從つて行動する者である、何物に換へても自己の人格を賣る事を肯ぜぬ者である――約言すれば最も深い意味に於いて自由な人[2]である。良心を枉げて他に屈從せぬといふ意味に於いて自由なのみではなくて、自己の慾情にも屈服せずに眞理の命ずるところに從ふといふ意味に於いて自由な人格である。又一切の障害を排して、自己の人格を完全に育て上げて行くことを、最大の義務と感ずる點に於いて自由な人間である。吾々がこの意味に於いて自由な人とならなければ、當來社會の單位は成立つことが出來ない。從つてこの單位の眞正な結合を根本假定とする社會も亦成立つことが出來ない。凡ての人が完全に自由な人となることは固より理想に過ぎないであらうが、其處に一人の自由な人があれば、彼は周圍の人を感化することと社會の組織を改革することとによつて、來るべき社會の少くとも礎石を置くことは出來るであらう。又一人の人が完全に自由になることも要するに理想に過ぎないならば、自由を求むる意志と意志との結合が當來社會の根柢を築かなければならぬ。この意味に於いて君主人の理想が當來社會の規制原理となることは、決して不可能ではないのである。

併し吾々は茲に、自由の本義を理解せぬ人の側から來る一つの疑惑を豫期しなければならない。それは各人が自己の自由を主張することから來る混亂と不一致との憂慮である。さうして自由とはたゞ無制限な我慾の解放を意味するに過ぎないならば、實際彼の憂慮するところは必ず事實となつて現れるに相違ないであらう。併し君主人の本質をなす自由は、我慾の自由ではなくて、云ふまでもなく人格の自由である、眞理と良心との自由である。從つて君主人として自由になるためには、吾々は何よりも先づ我慾から自由にならなければならない。この意味に於いて、深い自己否定のみが本當に吾々の人格を自由にすることが出來る。私を去ること、眞理に則ること、これが君主人にとつて必要缺くべから

ざる修養である。凡そ公けでないところには自由がない――この信念が徹底するとき、我慾の解放から來る混亂と不一致とは、當然に影を潛めなければならぬ。眞と善と美と聖とを追求するの自由が、同じく眞と善と美と聖とを求めむとする他人の自由と矛盾する理由は、何處にもあり得ないからである。寧ろ吾々は、自由に、內外兩面の繫縛に煩さるゝことなく、眞と善と美と聖との追求に漬ることによつて、始めて、同樣に此等のものを求めて來るところの他人の靈魂と邂逅する。故に人格の自由は不一致の根據ではなくて、却つて本當の意味に於ける融合の基礎である。

凡そ君主人は他人に對して如何なる態度をとるであらうか。云ふまでもなく、公けに生きることを解する彼は、自ら求めるところを又他人にも求めるであらう。彼の自ら求めるところは自由である。人格の威嚴を保持增進することである。從つて彼は又他人に對しても、彼等自身の自由と威嚴とを尊重することを要求せずにはゐられないであらう。又彼の自ら求めるところは、自己の生活を眞理に協ふものとすること、眞理に協ふものとすることによつてその人格を無限に伸ばして行くことである。從つて彼の他人に要求するところも亦、眞理に從ふこと、眞理に從ふことによつて限りなく自己を育てゝ行くことでなければならぬ。要するに、他人に對する彼の根本要求は、「諸君も亦君主人となれ」といふ一言に要約されるであらう。君主人は君主人を求める。さうして一切の隣人を悉く君主人とすることによつて、君主人としての彼の幸福も亦始めて全くされる。さればこそ彼は社會的結合の單位となることが出來るのである。

吾々は玆に、道義の世界に於ける君主人と政治上の君主との相異を發見する。政治上の君主は、固より道義の世界に於ける君主人であることも出來るが、彼は政治上の君主であるが故に直ちに道義上の君主人であるといふことは出來ない。暴君は君主であるが君主人ではない、彼は道義上君主人の正反對である。之に反して政治上の臣民は、政治上の臣民であるがまゝに道義上の君主人であるとが出來る。寧ろ奴隷と雖も――例へば羅馬の奴隷エピクテッスのやうに――その

人格の自由を保持することによつて君主人の資格を持ち得るのである。又政治上の君主は、その統治圏內に於ける一切の人が皆その臣民であることによつて、始めて押しも押されもせぬ君主である。之に反して道義の世界に於ける君主人は、決して臣民を持つことを必要とせず、又斷じて奴隷を持つことを許されない。吾々は此等の點に、道義の世界に於ける君主人と政治上の君主との、矛盾せずに而も相異する主要な點を認めなければならない。道義上の君主人が若し臣民であれば、彼はその君主に對しては所謂「君を堯舜にし奉る」ことを最大の義務と感じ、その同類に對しては彼等の人格の自由を增進することを重大な負荷と感ずるであらう。又若し彼が君主であるならば――(道義上の君主人を志すことが君主の最大の義務であり、所謂帝王學の骨髓である)――彼はその臣民を悉く君主人とするために、換言すれば、その國內には人格の威嚴を貶ることを強ひられる者が一人もなく、凡ての人が自由にその良心に從つて生活し得るやうにするために、日夜肝膽を碎かなければならぬ。君主にして君主人を兼ねる者は、ファウストがその最後に云つた美しい言葉のやうに、「自由な民と共に自由な土地の上に住みたい」と、不斷に念じ續けるのが當然である。さうしてこの言葉は、單に政治上の君主のみではなくて又あらゆる君主人の念願でなければならないであらう。此の如き願ひを中心の結合力として一つの社會が組織されるときに――若しくは在來の社會が次第にその倫理的立脚地を高めてこの階段に達するときに、當來の社會は始めて成立する。さうしてこの願が充されることによつて、その社會は漸く完成の域に達する。此の如き社會を夢想することは、今日に於いては甚だ覺束なき白日の夢であるやうに見えるが、併しそれにも拘らず、明かにこの理想を把握して、聰明に現實の事情を支配しつゝ、一歩づゝでもこれに近づけて行くのが吾々の義務でなければならぬ。それは吾々が近づけなければ永久に來る筈がないからである。

吾々は、現在の世界に於いて、幾許の人に君主人を以て許すことが出來るであらうか。他人は知らず自分自身につい

て云へば、私は、微細に考へれば考へるほど、君主人を以て自任するの甚だ容易でないことを覺える。君主人は自己の便益と享樂とのために他人の人格を犯すべきではない。その限りに於いて彼は「自己の享樂を禁止して」他の人格と共に生きることを至上の喜びとしなければならぬ。他人を器械視して自己の便益を購はむとする根性を徹底的に洗ひ落すとは、彼の脱るべからざる義務である、既にこのとも——例へば家庭といふ小さい社會が最も皮肉につきつけて吾々に見せるやうに——甚しき困難であるが、更に深刻なのは、自己の主張の正しきを信じながらもこれを他人に強ゆるとを差控へるほど我を殺すことの困難である。自己の我執を棄てゝ他人の意志を實踐上自律せしめ得るほど——若くは他人を强制するとき純然愛に滿ちた教育的見地を以てすることが出來るほど——博大な無私な心を養成して來ることは、君主人の修業にとつて、恐らく最も必要にして同時に最も不撓の精進を要する點である。多くの偉大な者も、恐らく彼が偉大であるが故に、此點に於いて過つところなきを得なかつた。併し我執のために他人の意志を蹂躙せむとする誘惑に身を委ねるとき、吾々は最良の場合に於いても「お殿樣」の部類に屬する者とならねばならないであらう。他人の心を理解することを得ぬ鈍感者、我執によつて容易に攪亂されるほど薄弱な人格であるといふ非難は、孰れにしても辭することが出來ないであらう。併し更に惡いのは、極めて多くの場合に於いて、自己の利慾若くは我意を遂げるために敢て他人を奴隷扱ひにする者は、彼自身が奴隷であり、奴隷人であるといふことである。自由な人格は、それが自己に關すると他人に關するとを問はず、凡そ利慾の奴隷となることを恥づる。彼は又誠實な所信を捨てゝ——誠實な誤謬によつて必要な迂路を通つて見、權利を捨てゝ——他人の意見に盲從することをも亦恥辱とする。從つて吾々が君主人である限り、吾々は他人に對しても亦此等の恥辱を課すべきではないのである。然るに吾々が自己の便宜を購ふか我意を貫徹することを喜ぶの餘り、他人の面從阿附する醜さを看過することが出來るならば、それは吾々自身もこの方面に於いて十分の

廉恥心を缺いてゐる證據と見らｒなければならぬ。他人の面從と阿諛とを氣樂に受取ることが出來る者は、自分も亦面從阿諛を敢てせぬ譯がないからである。實際彼の奴隷根性を曝露させるためには、唯彼をその長上の前に連れて行けばそれで充分である。部下に對して威張り散らす者は、百中の九十九まで（殘る一部はお殿樣である）長上の前に阿諛して見せるであらう。かくて吾々は、威張る者は奴隷であるといふパラドックスめいた結論を餘儀なくされる。固より自ら持すること高い者は、このやうに安價な奴隷根性に滿足し得ぬこと勿論であるが、それだけに彼の我執と暴虐とは益々彼を不幸にし、この不幸は益々彼の魂を荒立たせるであらう。他人を虐げることは、虐げられる者を不幸にするのみならず、又虐げる者それ自身を不幸にする。この意味に於いて、君主人の自覺に徹底せぬ者の社會は、自ら虐げる點に於いても他に虐げられる點に於いても、その內心に於いては常に悲慘である。所謂官僚主義（ビューロクラシー）は奴隷人によつて組織せらるゝ社會の典型であるが、蔭になり日向になつて吾々の社會を支配しつゝある官僚主義の精神が、如何に憎惡と怨恨と魂の荒廢との種を蒔いてゐるかを思へば、吾々は憮然として自ら省るところなきを得ない。縱令君主人として徹底することは、前述のやうに甚だ困難であるにしても、奴隷人に對する輕蔑と君主人に對する尊敬との觀念が明かにされて、凡ての人が自ら君主人たらむとする意志を持つやうになれば、吾々の現在の不幸は著しく緩和されるであらう。この點から見ても君主人の理想は、もつと嚴かな權威を以て、現在の社會に力強く働きかけて行かなければならぬ。

二

吾々は前節に於いて、當來社會の單位としての君主人の觀念が、既に社會的結合の可能性をその中に含んでゐることを見た。さうしてそれが可能なのは、「君主人は君主人を要求する」から、これをリップス流の言葉を用ゐて換言すれば、

自敬は當然に同情を伴ふからであつた。私は今、君主人の觀念の中から特にこの一面をひき出して、當來の社會は人格的な愛をその結合力とする、と云ひなほして置きたい。

私が茲に人格的な愛と云つて、たゞ一般に愛と云はないのは、愛にも人格的でないものがあり得るからである。人格的でない愛は當來社會結合の原理となる力を缺いてゐるからである。對象を物質的慾望の塊りと見て、その慾望に奉仕することを主要事業とする愛は、畢竟愛者自身が物質主義者であり、彼の利己主義が漸くその家族とか朋黨とかを含むまでに僅かに擴大されたに過ぎないことを示すものである。吾々は此の如き愛の實例を、孫に對する祖母の溺愛や、娘の結婚に對する世間並な母の心配や、偏頗な排他的な愛國心等に於いて發見することが出來る。祖母がもやし兒を作るときのやうに厚着をさせ、豚に喰はせるやうに食物をあてがつて、その愛撫の心を滿さうとするのは、彼女がその孫を人格と見ないで飮みたい着たい食いたいの塊と見てゐる證據である、その間にあらはれる彼女のとろけるやうな溫かさも、飽暖を人生の重要問題と見る彼女自身の立脚地の低さをかくすことが出來ない。又世間並の母が娘の婿をさがすに、地位や財產や容貌を主要の標準にして、此等の點に於いて缺けてゐるとき娘の命がけの戀愛をさへ抑へようとするのは、結局その母自身が虛榮と衣食とのために結婚してゐることの爭ふべからざる證明である。彼女の立脚地は、その娘に向つて「人の落目を見捨てるを里の恥辱とする」といふ娘の嘆をきいて、承知で心中に出してやる遊女の母親にも劣つてゐるのである。久しき世路の經驗を基礎として、物質の缺乏から來る娘の不幸を憂慮する心は甚だ諒とすべきであるが、缺乏の中に於ける愛の幸福や、艱難を凌いで行く正義の喜びを理解せぬ點に於いて、この愛に滿ちた母は猶非難せらるべきである。さうして、世界に對する義務を無視してたゞ國家の物質的膨脹と權力の擴大とのみを主眼とするとき、吾々の愛國心もまたこの種の「私」に伍せさるを得ないであらう。此の如き私愛も固よりその愛の範圍に入り來る若干の人を結合することは出

來る。併しその結合は結局朋黨の結合に過ぎないであらう。朋黨の結合は、相互の私慾に奉仕し合ふ結合である。從つてそれは、內に向つては、これに屬する個人の人格の墮落を伴ひ、外に向つては、より廣き社會的結合を崩壞させる力、若くは來るべき社會の成立を妨害する力とならずにはゐられない。當來社會の結合力となるを得るものは、このやうな物質的な私な愛ではなくて、公けな人格的な愛である。對者を利慾の塊と見ずに一個の人格と見るところに成立する敬愛である。

然らば人格的な愛とはどんな愛であるか。吾々は更に立入つてこの問題を考へなければならない。一言で云つて見れば、それは人格に對する人格の愛である。人格として自覺した主體が、人格であり人格であることを要する對象に向つて感ずる愛である。從つてそれは自他を共に人格として完成せしめむとする愛でなければならぬ。人格として完成せしめるために必要である限り、對象を暖めたり包んだり、物心兩面に涉つて彼が必要とするところのものを提供したりするやうに配慮すると共に、又人格の尊嚴を維持するに必要ならば、これを苦め鞭ち勵まし、これに窮乏と死との義務を課することをさへ憚らずに、共に苦み共に惱まむとする愛こそ本當に人格的な愛と云ふことが出來るであらう。社會的結合の根據となるものは、直接に云へば隣人の愛であるが、隣人の愛は、それが人格價値に對する愛を基礎とすることによつて、始めて人格的愛の名に價するものとなり得る。[4] 人格の先驗的要素を結合の基礎とするところに——宗教的な言葉を用ゐれば「神の義」を中心として人と人との結合を全くせむとするところに、この愛と物質的な愛との根本的な差別がある。

ダンテは、あらゆる正しき愛の基礎となるものを、至高の世界に對する愛——[5]「いと高き球の愛」と名けた。今、この言葉の中から特殊に宗教的な意味を除いて、これを「至高の價値に對する愛」と呼ぶことにすれば、吾々にとつても、あらゆる正しい愛はこの一つの愛の上に築かれなければならぬ。凡そ力あるもの、豐かなもの、調和せるもの、清いもの、

純なもの、深いもの、高いもの、特に聖なるものゝ愛にひかれて、至高の價値を求める涯なき巡禮の旅に上るこゝろを知る者のみが、始めて正しき私ならぬ愛に堪へるであらう。その途上に於いて同じく至高の價値を求むる他の巡禮に逢ふとき、其處には共通の目標によつて結ばれる同類の愛が――君主人と君主人との間に於ける深い親愛が生れて來る。又無邪氣に自覺なくして而も淸らかな者を見るとき、吾々は聖地を飾る草木が世界の到るところに惠まれてゐることを思つて心の躍りを覺える。さうしてこの目標を追ふことを拒んで異れる途に踏み入らうとする者に對してさへ、吾々は彼の素質の善を信じてその善を呼び醒ます義務を感ずるであらう。至高の價値に對する愛を基礎にすることによつて、祖母は始て隣家の子を嫉視することなしにその孫を愛するを得、母は始めて娘の心願を蹂躪することなしにその幸福を願ることを得、愛國者は始めて自國の精神的墮落と隣國の禍とを招ぐことなしにその國を愛することが出來る。何となれば、目標となる至高の價値が、促進すべきものと抑制すべきものと、はぐゝむべきものと洗ひおとすべきものと、生かすべきものと殺すべきものとの差別を、公けな意味に於いて吾々に教へて呉れるからである。

(6) 至高の價値に對する愛の特色は、それが「侶を除外する」ことを必要とせぬところにある。それは、一つには、凡ての善は他人と共有することによつて寸毫も損はれることがないからであるが、單にそればかりではなくて、吾々が本當にこの立脚地に立つとき、侶と分つことによつて必然に自己の得分を減ぜなければならぬ物質的所有に於いてすら、吾々は侶を除外する必要を感ぜぬやうになるであらう。眞正な愛によつて自己の所有を隣人にわかつとき、その愛は吾々の缺乏に堪へる力を倍加し、これによつて生ずる隣人との內面的結合の喜びはその缺乏の苦を補つて餘りあるからである。愛を以て貧を共にするとき、共同の貧は、物資に滿ち足らへる人が到底想像し得ぬ程度に吾々の親愛を深くする。この事實から推想すれば、愛を以て共に餓死するとき、吾々の親みは恐らく極度の深さに達することが出來るであらう。侶

よりこれほど徹底して私を征服し、これほど純乎として物質以上の境に心を置くことは甚だ容易でない。吾々に、自己及び子孫の他日のために物質を貯蓄せむとするこゝろ——從つてその限りに於いて侶を除外せむとするこゝろを容易に脱却することが出來ない。併し正しき愛は物心の兩面に渉つて侶を除外せぬところにあるといふ信念を持ち、この信念に鞭たれながら生活する者の社會と、力に任せて占有し私慾に任せて侶を除外することを各人の權利と思惟して、この思想に甘やかされて生活する者の社會と、この兩者の間に雲泥の差を生じて來ることは勿論である。

更に立入つて考へを進めるに、至高の價値に對する愛は單にその侶を除外する必要がないばかりではない。それは積極的にその侶を必要とする愛であること、既に上來の論述によつても明かであるであらう。至高の價値を愛するものは、固よりあらゆる形に於けるその顯現を愛せなければならない。彼より高き侶は、彼を高めるために彼にとつて必要である。彼と志を等しくする侶は、その努力に於いて協同するために彼にとつて必要である。さうしてその敵を内面的に征服することは、その侶を多くすることを要するが故に彼にとつて必要であるであらう。至高の價値に對する愛を中心として結合せる社會は、言葉の最も廣く最も純粹な意味に於いて一つの「教會」である。この教會に屬する者は、同胞としての共同作業と、「未信者のために」すること（Pro pagan da）との二つの側を通して、その社會の鞏固と擴張とを念としなければならぬ。この結合は人格と人格との内面的結合である。この愛は獨立せる人格と獨立せる人格とをその本質に於いて繋ぐセメントである。從つて個人的利害の一致と不一致とは、この愛が深くなればなるほど、かくて結合された社會を左右する力を失つて行くであらう。何となれば、この愛に深入りするとは、とりもなほさず私慾を超克することを意味してゐるからである。

固より私が智者となることは直ちに他人を智者とすることではない。又私が私自身の徳を積むことは直ちに他人を有

徳にすることだとも云ひ難からう。他人は彼自身の努力によつて、自ら——私の智徳を參考にして——その智徳を積まなければならぬ。吾々が彼のためにするを得るのは、たゞ彼自身の努力を援助することのみである。この意味に於いて私が私自身の智徳を深くすることゝ、手を下して他人の智徳を敎育することとは、二つの異れる働である。故に吾々は人格的の意味に於いても、自己のためにずることと他人のためにすることとの間に、或程度の差別があることは認めなければならぬ。前者も至高の價値に對する愛の一つであるが、これを隣人の愛と名けることはむつかしい。さうすれば其處には、社會的結合の根據となることを得ぬ至上價値の愛——一種の精神的利己主義や獨善主義もあり得るやうに見える。(7)吾々はこの事實を如何に解すべきであらうか

この問題を考へるためには、吾々は、社會は人格完成の機關として意義があるので、人格は社會の手段としてのみ存在するものではないことを想起して置かなければならぬ。凡ての個人が至上價値を自己の生活に體現せむとする努力を禁止するやうな社會は、人類の向上にとつて邪魔になるばかりである。故に吾々は凡ての人が人格的の意味に於いて「自己のために」する權利を充分に尊重しなければならぬ。さうして、或人の或時期に於いては、集中して自己のためにする權利をも亦明かに承認しなければならぬ。寧ろ凡ての人に無造作な群居を要求せぬこと、彼自身の內面的必要に從つて孤獨と特別小社會を組織することゝの權利を許すこと——換言すれば「一人居ること及び二人居ること」(Einsamkeit und Zweisamkeit) の意義に對して徹底せる理解を持つこと——これが人格愛を基礎とする社會の特徵である。併しそれにも拘らず、人格として「自己のために」する者は、到底精神的利己主義者若くは獨善主義者となることが出來ないであらう。それは、吾々が人格として自己のために求めるものは、當然他の人格のためにもなゝべきものに相違ないからである。吾々が自己の中に體現し得た價値は、たゞ他人にこれを用ゐようとする意志さへあれば、必ず彼にも亦

役立たなければならないからである。さうして吾々が至上の價値に深入りすればするほど、他人の價値に對する愛は自然に開け——從つて進んで「他人のため」にせむとする愛は求めずして湧いて來なければならぬ。この意味に於いて、至上の價値に對する愛は融通無礙である。人がこの立場を明瞭に把握してゐる限り、「他人」に通ずる「自己」の門戸は、常に開いて春風に吹かれてゐるであらう。

三

既に當來社會の根本原理は、人格の自由と愛とにあるとすれば、この社會の——若くはこの社會を準備する社會の——制度が如何なる根本主義の上に立たなければならないかも、おのづから明かであるであらう。專制主義は、假令それが如何なる善意を以て運用されるにせよ、統治せらるゝ人格の自律と、この自律からのみ生れ得る內面的結合とを妨害するが故に理想に叶はない。又或る特權階級の保護と隆盛とを目的とする貴族主義は、陰に陽にこれに屬せぬ人達の人格を蹂躪するが故に不道德である。當來社會の制度は、あらゆる人格を自由にして、これに最も多く相互に愛し合ふ機會を與へることを目的としなければならぬ。この意味に於いて、それは當然にデモクラティックであるべきである。

併し人格主義の是認するデモクラシーは、輿論若くは多數決の絕對權威によつて個人の服從を强要する制度であつてはならない。縱令輿論を形成する一要素として凡ての人はこれに參加することが出來るにしても、吾々の良心を以て信ずるところが如何なる場合にも徹頭徹尾輿論と合致することは、何人も望み得ぬところである。從つて輿論に服從することを絕對の義務とするとき、あらゆる人は、それ〴〵異つた點に於いて、その良心を拋棄すること、換言すれば人格の自由を束縛されることを感ぜなければならぬ。この意味に於けるデモクラシーは變形せる專制主義である。この意味

に於いてデモクラティックな社會は、主人と奴隷との社會の一形態である。それは一人若くは少數の強者の代りに「多數者(ポロイ)」といふ新式な暴君を据えたに過ぎないのである。ゲーテが「自由と平等とは兩立しない」といつた言葉は、充分の強さに於いてこの社會に適用されるであらう。私が此處に云ふデモクラシーとはかういふ社會を意味するのではない。それは凡ての人が――從つて貴族のみではなくて如何なる平民も――その良心に從つて生活することを保證される社會である。又凡ての人が――從つて貴族のみではなくて如何なる平民も――自己の人格を育てたり伸ばしたりする機會を、それ〴〵の才能に應じて與へられる社會である。偉大な者からその大きさを奪ふことによつて、團栗として平等な人を造らうとする社會ではなくて、あらゆる人が最高の程度にその人格を伸ばす權利を平等に保證する社會である。約言すれば、あらゆる人を――從つて貴族のみではなくて如何なる平民をも――自由な人格を持つ者として平等に取扱ふ社會である。固よりこの社會に於いても、人はその社會全體の意志に――若しその意志が多數決によつて決定されるならば多數の決議に――服從して行動しなければならないであらう。併しそれは、個人の良心が多數決以外に存立の餘地を持つてゐないからではなくて、社會も亦自律しなければならないから――個人は社會そのものの自己決定を妨げる權利を持つてゐないからである。從つてこの社會に於いては、輿論に反して自己の所信を形成する自由や、この所信を公表して正面から輿論と戰ふ自由や、十分の情熱を傾けて社會に忠言を呈する自由が、飽までも尊重されなければならぬ。故に此の如き社會は、當然に、所信の爭ひに滿ちた社會――人格として敬愛する公敵に滿ちた社會となるであらう。併しそれだけに、それは、凡ての人がその心の全力をあげて關與し得る社會(パーテー)であり、從つて又、最高可能の程度に於いて人格的結合の親密な、生氣の潑剌たる社會でなければならぬ。人格主義はこの意味に於いてデモクラティックな社會的立法を要求する。

さうしてこの社會が平俗なデモクラシイと相異するもう一つの點は、それが敬虔の感情を――ニイチェの所謂「距離の感情」の要求するところにある。吾々の社會が若し至高の價値に對する愛を中心として結合さるべきであるならば、この社會に於いては當然に、價値の少い者は價値の多い者を尊敬し、價値の優れた人格は價値の低い人格を導くべき義務を負はなければならぬ。優れた者を瞻仰する素直さを失つた者も、優れた價値を持ちながらその價値を自重することを忘れた者も、共にこの社會の根本主義に背く罪人である。故にこの社會は賤民の放恣なるデモクラシーとは正反對の位置に立つものである。この社會は純粹な人格價値に從ふ內面的階級によつて秩序を與へられなければならぬ。ただ人格の價値を除いて人間の品格を定むべき外部的人工的階級の意味を無視するところに、又凡ての人が自己と絕對價値との甚しき懸隔を自覺して、遜れる心を以て兄弟として抱き合ふところに、この社會に於ける人權の平等は成立する。

四

或人は云ふであらう――汝の云ふやうな社會は地上の何處にも存在しない、又存在したためしがなかつた、汝の云ふところは悉く白日の夢に過ぎないと。誠に完全な意味に於いては、それは嘗て何處にもなかつた。[8] 併し道義の世界に於いては、それがなかつたといふことは、それが噓だといふことの證據にはならない。それがなかつたからこそ、吾々は一歩でもこれに近づくために益々努力しなければならないのである。さうして光が泥に映つてゐるといふやうな意味では、それは現に世界の到るところに與へられてゐる。最も利己的な社會に於いてすら、人格の尊敬と愛とは、その結合力の隱れたる一部分を形成してゐるであらう。それだからこそ吾々はこの泥濘の中にあつても、兎に角生きてゐるに堪へるのである。この光を大きく、益々大きくして行くことは、凡ての人が現代に對して負うてゐるところの義務である。

又或人は云ふであらう――人間を動かす原動力となる者は要するに物慾と性慾とである。汝が眸を凝らして人格と愛とを叫ぶも、社會は汝の主張に從つては動いて行かぬであらう。汝は憐むべき空想家に過ぎないと。併し彼が如何に唯物史觀を力說するにせよ、私といふ一個の人間の靈魂の歷史を構成する原動力が、單に物慾と性慾とのみではないことは誰よりも私自身が最もよくこれを知つてゐる。少くとも私といふ一人の人間がこの世界に存在してゐるあひだ、論者の主張はその普遍的妥當性を誇ることが出來ないであらう。固より私は物慾と性慾とによつて動かされることも亦極めて深い人間である。併し私が單に是等の動機に從つてのみ生活する限り、私の心には眞正の幸福がないことを私は知つてゐる。私が精神の幸福と靈魂の平和を欲求する限り、私の生活が至高の價値に對する愛を原動力として形成されなければならぬことは、體驗によつて到底動かすことが出來ない。故に、社會は實際私の希望に從つて動いて行かぬでもあらうが、若しそれが私の希望する方向に動いて行かぬならば、この社會に生息する人類が永遠の不幸に苦まなければならぬことも、亦脱れ難き運命であるであらう――私はどうしてもかう考へずにはゐられないのである。私は、この不幸な運命を愛する人々に對しては、差當り云ふべき言葉もない。併し若しこの社會を眞正に幸福なものにすることが吾々の衷心の願であるならば、吾々はどうしてもこれを人格の尊重と愛との方向に動かして行かねばならぬのである。さうして人類によつて構成せらるゝ歷史が結局人類の幸福と矛盾する方向に向ひ行くべきことは甚だ信じ難い。迂餘曲折する歷史の進行が如何なる迷路を通して吾々を導き行かむとするか、それは凡眼の容易に豫測し得べき限りではないが、併し終局の大方向が私の希望する方面にあるべきことは、私の心から信ぜむと欲するところである。それともかく希望しかく信ずることは、攝理に反抗する高慢であるであらうか。私も私の反對者も、この問題に最後の解決を與ふべき權利は持つてゐない。吾々はたゞ首をさしのべて、この判決を永遠の眞理の法廷に待たうと思ふ。

(一)「倫理學の根本問題」第二章、七四—五。これも亦リップスの倫理學中最も優れた一節である。この點に於いて、彼はニイチエの君主道德（Herrenmoral）と奴隷道德（Sklavenmoral）との說を、カントの立場から解釋しかへたと見ることが出來るであらう。但し私はこの場合、彼の根本精神に從ひながら、多少の點に於いてその說を補ひ、又應用の範圍を廣くした。

(二)拙著「ニイチエのツアラツストラ、解釋並ひに批評」、第五章、一〇二—一〇七。「倫理學の根本問題」第四章。

(三)「合本三太郎の日記」中、「奉仕と服從」（五六六—五九八）參照。

(四)中央公論大正十年二月號、「人格主義、戒律主義、主觀主義」參照。

(五)神曲「煉獄」第十五歌。「思想」大正十一年二月號。「ダンテ雜話」。

(六)以下私の考察は殆んどリップスの導を離れる。それがリップスの根本精神と矛盾するものでないことは云ふまでもないが、彼の倫理學は愛の問題に觸れることが割合に少いのである。併しリップスの導きと離れるといふのは、凡そ先蹤と離れるといふ意味でないことは勿論である。讀者は、ダンテやゲーテやニイチエやトルストイ等にあらはれてゐる基督教精神の影響を、私の文章の到るところに發見することが出來るであらう。「ニイチエのツアラツストラ」第九章參照。

(七)この問題については、「二つの途」（合本三太郎の日記、四五八—四八三）、「ニイチエのツアラツストラ」第六章參照。

(八)「改造」大正十年十二月號、「理想主義のために」參照。

武力的競爭から國際經濟的競爭へ

法學博士　堀江歸一

軍備擴張の競爭

歐洲諸國が海に陸に兵備を盛にして、攻防の用に供へたのは、一朝夕の事でない。一國が軍備を擴張する場合には、必ず目標とする假裝敵國があり、敵國の實力を壓倒するに足りるまで、擴張の程度を上らしめなければ、已まないが、一方に假裝敵國の方でも、對手國の爲す儘に任せて、置いたならば、何時其武力に威壓されるかも知れない危險が伴はさるを得ないので、一國の軍備擴張は必ず他國の軍備擴張を誘致し 自他互に相競つて、其極まる所なきに至らしめるのである。歐洲戰爭前英獨兩國の間に行はれた海軍競爭、獨露兩國間若しくは佛獨兩國間に行はれた陸軍競爭の如き、此顯著なる事例であり、又近年日米兩國互に海軍を擴張して、太平洋上に權力を張らんとするが如きも、亦一種の軍備競爭と見られるであら 。軍備が相對的關係に居るものであり、而して從來の國際間に於ける關係を以つてしては、其始めは些細なる出來事に過ぎないと思はれた事件も國民の利害や、感情が纒綿するに隨つて、兩國間に容易ならざる紛爭の種子と爲り、武力を用いなければ、解決するを得ない事態を惹起すことのある以上は、諸國が假想敵國を作つて、軍備維持の標準を其國の兵力を凌ぐ程度に置くと云ふのは、當然の數であつたし、又一國の力を以つて、他に當るを得ない場合には、利害を同じうする國と同盟したり、協約を締結したり、所謂連衡合縱の方法を取ることも、自然の道と解された。

軍閥や軍國主義の發生

斯くて國際間に出現した一の現象は所謂武裝的平和であつて、假令ひ平和は維持されるとしても、關係國は互に身を具足甲冑に固めて、他を睥睨して居る、若しも對手國の方に乘ず可き隙があつたならば、直に之を捉へて 武力的壓迫を加へよう

として已まない。卽ち武裝的平和の維持されるのは、關係國の軍事的實力が相匹敵して居る場合に限られるのであつて、少しでも、權力の平衡に破綻が生じたならば、武裝的平和も一擲されると云ふ危險なる狀態に居つた。殊に武裝的平和の下に、諸國が兵を練り、武を講じて居り、武力を用いて、國を防護する一事を以つて、國家唯一の職務とする場合には、必ず其處に職業的軍人の存在を告げざるを得ない。彼等は少年時代から將來の敎育を授けられ、日本で能く人々に唱へられる所謂軍人的精神なるものを鼓吹され、稍や長じて、業を卒れば、軍閥中の一人として、他の社會との關係を成る可く疎遠にし、軍閥と云ふ狹い天地に蹈蹐する。一旦軍閥から離れたならば、衣食の計を全うすることにすら覺束ない、自分の立身榮達を謀るには、何としても軍閥と云ふ社會を廣くする外に、處す可き道がないとしたならば、彼等職業的軍人が事に觸れ、物に應じて國民に好戰的感情を煽揚し、殊更に國際的關係の危機を誘導して、軍備の重んず可く、頼る可きものであることを實體的に感得させ、更に進んでは攻勢的に軍備を用いて、軍閥の勢の及ぶ所を大にし、軍人として自己の利益を擧げようとする傾向の著しきに至るは、論を俟たない。斯くて年々歳々巨額の國帑は軍事上の用に供され、現に我國の如き大正十年度の豫算に就て見ると、經費總額十五億六千二百五十四萬二千餘圓の内、陸海軍經費は七億六千一百七十八萬一千餘圓の多きに上り、正に經費總額に對して約四割九分に當つて居る有樣である。而して平生斯く國帑の多くを蠶食し、消耗して居る軍備が攻勢的にせよ、守勢的にせよ、實戰に用いられた場合には、如何なる結果を生ずるかと云へば、平生の經費に幾十倍する負擔を財政に及ぼし、國民經濟を攪亂する弊大ならざるを得ない。而して軍備の國民經濟に及ぼす影響は軍事費として支辨される經費の金額卽ち財政上に於ける直接負擔のみに依つて、測る可きものではない、更に職業的軍人として、多數の將校を養成し、然も彼等は軍人以外の生業には全く不適當と爲るような人間に養成され勝ちに爲り、豫備後備退役に編入された彼等の後半世をして國家の恩給に依頼して、衣食する遊民たらしめることの如き、年々多數の壯丁を兵役に徵募して、其れだけ生産的勞働者の供給を減じ、漸く徵募された壯丁をして兵馬の間に馳驅させて、他日生業に復する際に、多少の妨碍を及ぼしこそすれ、何等の資する所なからしめる其上に、兵役を終つた後に於ても、豫備の兵籍に居る間は、時々召集を受けて、短期服役の義務を負はされることの如き、軍備が國民經濟に及ぼす影響の顯著なるものである。

軍備の經濟的價値

玆に於てか、一部の學者は軍備なり、軍事費なり經濟上の關係から、擁護しようと試みる一方に、一部の政治家は軍備を經濟上の事實に利用しようとして、已まなかつたのである。前者は如何なる議論を立てたかと云へば、軍隊は人に統一組織の如何に重んず可きかを教へる、隨つて兵役を終了した國民は他日本來の生業に復する場合に於ても、規律あり、訓練ある從業員と爲るを得るとした。然しながら軍隊に於て兵卒に教へる規律訓練なるものは、上長が上長たるの權威を挾んで、下僚に臨む結果として生ずるのであつて、下僚自身の自發的意思に培養されるものでないとしたならば、其下僚が上長の監督を離れ、一個の人として世に處する場合に、何として統一組織の才能を發揮し得るであらうか、大なる疑なきを得ない。戰前の獨逸に於ては、現役を終つた下士兵卒の輩に相當の職業を授けなければならぬことの必要から、彼等を鐵道とか、郵便電信とか云うような國營事業の從業員に採用する方針を取つた。軍隊生活中に養成された規律は彼等日常の執務に於て、外形的に現はれたかも知れないが、事務を行ふ上に於て、甚だしく非常識であり、形式的であり、爲めに彼等に接觸する市民を困惑せしめたことは、爭ふ可からざる事實であつた。國民に規律を重んぜしめるとか、組織あり、統一ある生活を行はせるとか云ふことは、詰り國民教育に求め可き事であつて、軍隊をして偶々斯る効果を擧げようとするが如きは、大なる錯誤とせざるを得ない。

或は軍備の經濟的効果として、海軍が通商上の航路を保護するとか、未開の國土を發見するとか、陸軍が未開國に移住した自國民の生命財産を保護するとか云ふような諸點を擧げる人もある。若しも遠き昔の如く太洋上に海賊船が跋扈して居つた時代であれば、海軍が通商上の航路を保護すると云ふ職分は平時に現はれるが、今日の如き狀態では其然るを得ない、海軍が通商上に與へる保護は戰時に限られるのであるが、歐州戰爭に際して、英國の商船が屢々獨逸潜航艇の脅かす所と爲り、自國海軍の力を以て、之を如何ともするを得なかつた事實に徴すると、私は海軍の通商上に於ける保護の効果なるものが事實に於て、大に割引されたと云ふ感を懷かざるを得ない。海軍の力で、未開國を開發して、通商上の便を擧げようとするが如きは、大正の新時代に於て、コモドル、ペルリの昔を夢みるものであつて、今日は之を望んでも、其實現を果すを得ない。又國民が海外に移住し、然も其地方は軍備も警察も共に不完全であるか、又は絶無であつて、生命財産の安全の託されないような場合に

は、陸軍を駐屯させるなり、附近の河、沿海には軍艦を駐泊させるなりして、保護の任を盡すことは、國民の對外的發展を促す上から考へて、最も必要とする所であつて、軍備に此經濟的効果の存することは、私も明に之を認める。然し此位の効果を得る爲めに、彼の如き巨額の軍事費を費すに至つては、利弊の相如かざること、甚だしとせざるを得ない。

經濟的帝國主義の謬妄

随つて軍備を經濟上の利益に資せしめようとする以上は、之を積極的に又攻勢的に利用して、海外に領土を擴張し、其處に開發された富源を本國に齎し來つて、製造工業に對する供給を潤澤にするとか、或は自國の製造工藝品に對して、最も安全なる販路を開拓するとか、或は自國資本の最も確實に放下運用される道を付けるとか云ふような手段に出でなければならぬことと爲る。是れが所謂經濟的帝國主義と稱されるのであつて、軍備と經濟との間に、動もすれば衝突せんとする利害を相調和する極致であると解された。即ち此主義は軍備が經費を要し、財政上に大なる負擔を加へ、國民經濟に壓迫を及ぼす弊害の伴ふのに顧み、軍備の擴張される一方に、軍備を支持するに足る富源を生ぜしめることを計畫したものであつて、相當の理義が備はれるやに認められたし、又多くの國の立國策を支配した趣があつた。

然しながら經濟的帝國主義の全盛であつたのも、歐洲戰爭までゞあつて、今日に於ては、多くの人には此主義に反對する立場に居らざるを得ないであらう。何故かと云へば、ナポレオン時代に、佛蘭西が歐洲大陸の全土を席捲し、攻略したような場合には、佛蘭西一國として政治的にも、經濟的にも、帝國主義を實行するに憚る所なからしめる次第であるが、今日は強國對立の時代である。一國が軍事上の勢力を利用して、未開國を攻略する場合には勿論、未開國に優越的權勢を收めようとすれば、必ず他國の抗議に接する、之を峻拒して外國に經濟上の威力を張りつゝある間に、軍備に缺陷があつたならば、必ず他國の襲ふ所と爲つて、戰爭を強いられる結果と爲るであらう。經濟的帝國主義の煎じ詰めた所は相對立して居る國と武力を鬪はし、我が倒されるか、彼が倒れるかを決する頂上まで、達しなければ、已まないことゝ爲るのである。現に英獨兩國に就て考へても、兩國互に經濟的帝國主義で、抗爭した結果は、彼の戰爭を誘致し、戰敗國たる獨逸が散々に戰敗の憂目を喫して、數千萬の國民を塗炭の苦みに陷らしめて居る一方に、戰捷國たる英吉利も戰捷を收めるに就て、拂つた代價や、荷つた負擔を顧みた

ならば、得る所の少なくして、失つた所の多きを嘆ぜざるを得ざる次第である。

領土の擴張、異人種に對する統治、新領土に於ける富限の奪取と云ふ諸件は經濟的帝國主義に伴うものであるが、武力を通じて、一國の領土を擴張することが、果して其國に經濟上の利益を與へる所以と爲るであらうか。英國の印度統治の如きは、最も成功したものと稱され、又印度を領有することに依つて、英國の有形的發達に資する所の多かつたのも、爭う可からざる所に屬する、然も印度人の知識が進み、又彼等の間に教育の普及するに随つて、統治の困難は次第に加はる趣の著しきものがあるではないか。一國が人智に於て蒙昧を極める地方を領有した場合には、之を統治することは、容易であるかも知れないが、兎に角既往幾百年に遡る歴史を持ち、曲りなりにも一種の社會的生活を營み來つた一國の領土を武力の聊か勝つた他の國が經略し、後者は覇者の威を以つて、前者に臨み、前者をして新附の民として、後者に事へしめよう、後者の欲する儘に爲す所は前者の利益を犠牲に供するが、前者は之に默從しなければならぬと云ふような關係が生じたとした所で、何處に經濟的價値が伴うであらうか。新附の民は機會だにあれば、侵略國に叛かうとし、侵略國は新附の民の盡く勦滅されるに至らない限り、彼等の總てを武力的監視の下に、置かなければならないであらう。經濟的帝國主義は有形的生活の劣等である未開國民に文明の恩澤を及ぼして、彼等の生活程度を上進させるに至ると云ふ主張は果して幾何の處まで、許され得るものであらうか。或る程度の効果があるとしても、未開國民の自由を檢束して、果して得喪孰れに歸す可きものであるか、疑なきを得ない。今日の如く世界到る所に各國國民の領域が定まり、其れ〳〵一定の地域を劃して、或る民族の定住する狀態と爲り、御伽噺に聞く鬼ケ嶋や、フエヤリー、ランドのようなもの丶ない限り、經濟的帝國主義は之を實行しようとしても、既に行詰つて來たのであつて、随つて軍備に伴う費用や、負擔を償うのに、經濟上に軍備を活用することを以つてしようとするが如きは、企及すかべざる所と爲つたのである。

國策一轉の時機

斯く考察を進めて行くと、歐洲戰爭を通じて、交戰諸國が戰爭の如何に恐る可きものであるかを知り、又戰爭の準備として、軍備擴張に競爭することの如何に愚であるかを感じたのは當然の數である。華聖頓會議に於て、海軍制限の協定が成立し、又海軍十五年休日の決議が承認されたことの如き、要する

に軍備縮小の端緒を開いたものであつて、根本的に軍國主義や、帝國主義を掃蕩しようとするには、陸軍と云はず、海軍と云はず、總ての軍備を撤廢する方針に向はなければならぬ。此理想は將來如何にして達成されるか、又其達成された曉に、國際間に正義を維持し、又之を勵行するには、如何なる機關の力を以つてす可きか、種々の問題に接せざるを得ないが、兎に角武力的競爭の時代は華聖頓會議を以つて、一段落を告げたものと認められる。而して同會議の決議が不徹底であらうと、一時的効果を及ぼすに過ぎないものであるとに拘はらず、海軍力に意想外の縮小が加へられ、續いて陸軍にも海軍と均衡を保つ程度の縮小が行はれるものとしたならば、多額の富と多數の人とが從來拘束されて居つた軍事上の用から解放されて、自由の處置を待つことゝ爲るのである。從來の用から解放された儘に止まつたならば、人は失業者であり、富は消耗するに過ぎない。是れでは不生產的用途が縮小しても、何等經濟の發展に資することを望まれない、斯くて吾人は一歩を進めて、斯く不生產的用途から解放された富や、人を生產的用途に轉換し以つて經濟振興の目的に就かしめなければならぬ。此一事こそ武力的競爭の制限若しくは絕滅に次いで生ずる經濟政策の要訣であると思はれる。

國際間の貿易金融交通

本來經濟の期する所は利用厚生の一事に存する。天の與へる富に人工を加へて、其効用を增進し、生產に寄與した人々に之を公正に分配することに依つて、彼等の生活を豐富にする一事こそ、經濟發展の目標とする所であり、此發展を盛ならしめる一點から考へれば、經濟上に存する國際間の障壁の如きものは、總て之を撤去し、出來る限り、人や物資の交通し、移動する範圍を廣くし、又其機會を滋くして、以つて國際間に分業の行はれることを期し、一國の長所と他國の特色とをして、共に其極まる所を盡さしめなければならぬ道理である。然るに事實は如何であるかと云へば、決して斯る狀態に進んで居らない。現に「マーカンチリズム」を排斥して、自由貿易を主張した「アダム、スミス」の如き人すら、國防の繁榮よりも大切であることを切言し、國防の安全を保つ爲めには、繁榮の或るものを犧牲に供して、顧みなかつた位の次第であり、保護貿易を主張する者に至つては、何處までも國際間に於ける經濟上の障壁を高くし、溝渠を深くしようとしてやまない、而して實際國際經濟上の關係が如何なる方嚮に向つて、動きつゝあつたかと云へば、自由主義の下で國を內外に對して開放し、經濟上に於ける自然の

働きで、諸外國との交通なり、貿易なりを自由にして居つたものは、一の英國あるのみであつて、他の諸國に至つては、必ず或る制度の下に、經濟上に起らんとする自然の發展に掣肘を加へることを忘らなかつた。即ち第一、一國と他國との貿易上の關係が密接に爲つて、前者は後者から生活の必要品や、主要工業の原料品の供給を受けるにように爲ると、必ず之に對して國内自給の、狀態に變することを以つて、經濟的立國の上に於て必要であるとし、外國貿易の自由を制限して、自給主義の實現を謀つた。第二、國際間に資本の移動の自由に行はれ、資本と共に、企業經營に必要なる能力も亦移動することは、近代經濟社會に於て、一の特徴として現はれなければならぬ所である。即ち一國に於ける利子や、利潤が他國に比較して、高いと云ふことは、自ら其國に資本や、企業能力を吸取する理由と爲り、自然利率や利潤を國際的に平均せしめ可き道理であるのに、事實は決して斯の如くでない。是れは資本家の資本を外國に放すに就て、臆病であることも、一原因であるが、同時に資本輸出國が餘り無制限に資本を外國に供給することを不可なりとし、時に其輸出を制限したり、又一旦外國に放下したものを内國に回收する政策を取ることも、此點に於て、與つて力ありとしなければならぬ 而して既に資本輸出國が外國に對して、資本の輸出を制限する以上は、其供給を遮斷された國では、如何に不得意の道であるとしても、自ら資本の自給を謀ると云ふ不利益の狀態を忍ばなければならないのである。

更に國際間に於ける經濟の共通を妨げるのは、海運業の自給政策である。或る一國が海運業の經營に就て、卓越した長所を備へ、又現に多數の船舶と熟練した海員とを持つて居るとしたならば、世界の海運業は此國に託し、此國をして國際間に所謂運送貿易（キャリイング、トレード）を行はせ、他の諸國は自ら其長ずる所に職分を見出すことを可なりとする。斯の如くして自他の利益は自ら其間に舉げられ可き道理であるのに、諸國の爲す所は必ずしもさうではない。自國に海運業を隆興させる素地のあるや否や、海運業と相關聯して、造船業の發達する狀勢が備はつて居るかどうかは、全然之を顧みず、自國の貿易は勿論、他國の貿易までも、自國の船舶に依つて、其行はれることを期して已まない。斯くて自國の海運業を是が非でも、發達せしめる爲めには、啻に斯業に保護金や助成金を與へるに止まらず、沿海貿易を獨占をさせたり、又は物資の輸入を掌る船舶の内外國孰れの所屬であるかに依つて、差別的關税を賦課し、自國海運業を發達せしめるに急であることの結果、却つて自國貿易業者をして貿易の發展上依賴す可き機關の範圍を狹からしめるの弊を免かれないのであ

る。

畢竟戰爭の餘殃なり

斯く國際的分業の利益であるとか、國際共通經濟の必要とか云ふような事が餘程以前から、或る方面に於て、主張されて居つたに拘はらず、事實に於ては、徹底的に國際經濟共通の實は擧げられるに至らない。國際經濟上の關係は所謂不即不離の狀態に居り、貿易も、金融も、交通も今日以上に密接に爲る可くして、密接に爲るを得ないのである。其然る所以は如何なる點に在つたかと云へば、即ち諸國が軍國主義や、帝國主義の下に、何時他國と戰端を開くか、或は他國から戰爭を强いられるか、測り知る可からざることを恐れた一事に外ならない。即ち一旦戰爭と爲つて、國際間の交通の杜絶した場合に、如何なる國が經濟生活を營む上に、最も大なる困難を感じるかと云へば、其れは平生外國に物資の供給を依賴することの多かつた國であつて、英獨兩國が歐洲戰爭中、外は敵國と戰いつゝ、内は食糧不足と云ふ敵と戰い、尙ほ國民をして食物の不足に苦しましめた事例に顧みたならば、事の一斑を解するに足りるであらう。或る時機に於て、戰爭が起るかも知れないとしたならば、戰爭に堪へるだけの力を養つて置くことは、國家存立上極めて必要であつて、食料品なり、原料品なりに對して特に國内自給の政策を適用　なければならぬと考へられ、隨つて外國から低廉なる價格を以つて、是等の物資が輸入され、内國の農業を脅かす勢を示すと、保護關稅に依つて、斯る物資の輸入を遮斷することゝ爲つた。國際金融の關係に於ても、亦同樣であつて、戰爭の將來に勃發する危險が豫想されて居る場合には、如何に國内に資本の供給の過剩を告げて居る國であつても、假想敵國に對して、資本を輸出することを回避するのは勿論、他の諸國に資本を輸出するにしても、成る可く容易に、又確實に回收し得られる國を選び、又同樣の方法を求める結果、放資の程度や、範圍は共に制限されざるを得ない。海運業にしても、平和の斷絕に依つて、何時他國の船舶を利用することの不可能と爲るかも知れず、却つて自國の船舶で、兵員糧食を輸送しなければならないとしたならば、如何なる犧牲を拂つても自國に海運業を維持する必要を生ずるに至るのである。

治に居て亂を忘るるか

「治に居て、亂を忘れず」とは古來我國民の間に傳唱されて、渝らざる諺であるが、今日まで我國は勿論、諸外國の經濟政策を律する基礎と爲つたのも、亦實に此諺であつて、平和の續く

場合には、之に慣れて、世界に向つて、自國の經濟を開放しようとするが、戰爭の將來に襲い來ることに、思を運らすと、直に此趨勢を掣肘すると云ふ趣きを免がれなかつた。斯くて世界の經濟は當然其歸嚮す可き所に歸嚮するを得なかつたのである。然るに今や世界の局面は一變し、一方に國際聯盟に依つて平和の保障されると共に、華聖頓會議に依つて、軍備縮小の實行される時代に爲つて見れば、何れの國にしても、經濟政策の基調は更新されなければならぬ。戰爭の絕無を保證することは何人も之を敢てし得ないであらう。然し平和が將來幾年かに亘つて、列國に依つて、保障され、而して戰爭に必要なる艦船の數量も種類も共に、制限されるとしたならば、吾人は世界的平和の存續を期するに差支あるを見ない。隨つて從來平和の斷絕に顧慮して、國際經濟上の關係に加へられた束縛や、制限の如きは、總て廢除されて、眞實國際間に經濟共通の實を生ず可き道理である。唯玆に考ふ可きは、諸國が此道理を認めて、全世界を一の單位とするまでに、經濟政策の行はれる規模を擴張するであらうか、一個の疑問である。而して當面に世界經濟の局面に現れて居る事實に徵すると、諸國は戰後の經濟的變動に處する策であると稱して、經濟共通の行はれる範圍を狹小にするような處置を行つて居ることが認められる。例へば戰時國內に勃興した幾多の產業を保護する爲め、其事業の產出する物資に競爭する外國輸入品に相當の重い輸入稅を賦課するとか、爲替相場の低廉なる國から輸入される物資に對しては、其相場の低廉に基く輸入の便宜を抹消するに足る程度の輸入稅を賦課するとか、自國又は自國の屬領內に產出される物資中、原料品の如きは、成る可く自國の製造業者をして之を獨占する方針に出でしめようとか、本國と殖民地との間に、特惠關稅の如き制度を設けて、殖民地の市場を專ら本國の製造工藝品に對する販路に充てしめようとか云ふような政策は此適例であつて、是等の事實から見ると、世界の經濟は武力的競爭に伴ふ壓迫を免かれても、尙ほ自由に解放されたものと思はれないのである。

然し斯の如きは戰後世界の經濟に現はれる事相としては、一個の變態であつて、平和の存續に對する保障の確實であればあるだけ、一國の經濟は決して國內に跼蹐す可きものでなく、他國に向つて其力を伸張し、國際間の關係を密接にしなければならぬものである。而して多年軍國主義や、帝國主義の下に、動もすれば一國孤立の方嚮に就かしめられて居つた經濟上の狀態が國際共通の方嚮に向うことゝ爲つたならば、其間に世界の經濟には色々の動搖を來すと共に、或る方面に於ては、國と國との競爭を劇烈にするかも知れない。例へば我國に於て製鐵業

や、染料製造業には餘程强い保護を與へなければ、戰時計畫され、又膨脹したゞけの規模に於て、之を維持することを得ないであらう。而して保護の方法として、最も重要なるものは、外國の優秀であり、又廉價である輸入品に輸入稅を賦課する一事であると云ふことが多くの人々に依つて、考へられて居るようであるが、國際經濟共通の時代に、特に鐵とか、染料とか云ふ一二の物資を我國に於て不利なる條件を以つて、自給しなければならぬ理由は何處にあらうか。唯軍國主義の下に。孤立經濟　近かつた狀態から、一躍共通經濟に移つたならば、忽にして外國の競爭を誘致して、國內に幾多の混亂を招くやも、測り難い譯であつて、國際共通經濟が行はれるとしても、自ら段階があり、又順序があることは論を俟たないが、世界が軍備制限から武裝解除の狀態に進んで行かうと云ふ際に、國民經濟だけが軍國主義の下に、始めて認められる孤立經濟の狀態を墨守し、依然國際間に障壁を設け、然も之を深うせんとするが如きは、辻褄の合はない次第であつて、既に華聖頓會議の決議の成立した今日に於ては、各國經濟政策上の步調を一進して、非軍國主義、排帝國主義に就かなければならないのである。

經濟政策の基調如何

國際經濟共通の主義を徹底的に行はせるに就ては、國際間に物資、資本、船舶並に人の移動の自由を認めることが必要の條件であると共に、門戶解放、機會均等の主義の併せ認められることも、亦極めて必要である。軍備の縮小が華聖頓會議の決議通りに關係諸國に依つて實行され、多額の資本と勞力とが軍事上の束縛から解放されたならば、是等の資本や、勞力は如何なる方面に向つて、運用されるであらうか。戰爭の爲めに、歐米諸國に於ては、產業上の設備にも個人の生活上にも、種々の缺陷の存することは、疑なき事實であるから、是等の解放された資本勞力を以つて、斯る缺陷を補ふのは、自然の順序とも思はれるが、更に斯る缺陷の補塡に依つて、培養された經濟上の實力は如何なる形を以つて、他の諸國に影響を波及するであらうか。第一に認めなければならぬことは、各國共に輸出貿易を增進助長して、有利なる國際貸借上の差額を收めようとする事であつて、英國の貿易表などを見ると、近頃此徵候が現はれて居る。斯る際に我國が多年經濟政策の方針を誤まつて居る結果國內の物價が法外に高く、隨つて生產費の上進甚だしき爲めに、戰時海外に擴張するを得た輸出品の販路も次第に外國の物資に蠶食される一方に、獨逸の廉賣品を始めとして、諸外國の物資が續々內國市場に跋扈する勢を示し來つたことの如き、誠

に時代の趨く所に逆行するものであつて、求めて國際間の經濟的競爭に後れを取るの譏なきを得ない。

第二の國際間に於ける經濟的競爭の一方面は海外未開國に於ける原料品獲得の形に於て、現はれるものと認められる。軍國主義や、帝國主義の時代に於ては、領土の領有とか、優越權の設定とか云ふような排他的方法に依つて、其目的を達することを常としたが、斯る主義の排斥される今後に於ては、最も自然に生ず可き經濟上の關係に依つて、未開地の富源を開發し、自國の共處に放下した資本に對する利子や、收益に對する決濟金として、之を內國に輸入する方法に出でなければならぬ。此關係から支那の如き地中に富源の埋藏されて居ることの多い國が今後國際的の競爭の中心地と爲るのは、論を俟たない。即ち國內に於ける資本の用途を省約して、其一部を海外未開地に移植し、原料品の供給を確保する一事は諸國の最も力を致す所である。此場合に我國の對支外交が常に機會の宜しきを失し、支那官民の感情を害して、排日の口實を釀成し、我國の對支企業をして其伸ぶ可き所、進ましめ可き所まで伸張させるを得ないことは、吾人の認めて、以つて我國の爲めに深憂とせざるを得ない次第である。

第三、歐米諸國は數年間引續いた戰爭の爲めに、經濟上に大なる傷痍を蒙つたが、之を治癒して戰前の、狀態に復舊するに就て、諸國民は何事を爲すであらうか。此點に就ては、諸國は戰後新機械の發明、化學工業の應用、國民能率の增進に全力を盡すに至るであらう。恰もナポレオン戰後、歐洲經濟社會の疲弊困憊を極めつゝある際、最も早く、又最も盛に新機械の發明應用を企てた英國が產業の發達を促し、經濟的優勢の基礎を築き上げた如く、今日以上の三點に於て成功した國こそ、世界に經濟的霸權を稱するに至るであらう。而して我國の國情如何を考へると、機械は必ずしも國民に依つて發明されず、化學工業の發達には見る可きものなく、國民能率の增進に就ても、亦多きを望まれないとしたならば、國際的經濟競爭に於ける我國の將來も危うしとせざるを得ない。

誠に今日は我國民經濟に取つて、危機一髮とも云ふ可き時機である。此危局を一變して、我國民經濟を泰山の安きに置かうとする以上は、上記の三策を遂行しなければならぬ。斯る重大なる時機に臨んで、凡庸愚劣、高橋內閣の如きものが政權を掌握し、時勢の急に應ずるに就て、何等の經綸を示さない、否却つて國民をして岐路に迷はしめるような政治を行うことは、六千萬同胞の災禍とする所であつて、私が飽くまでも、斯る內閣の一日も速に倒壞すること念じて、已まさる所以である。

各國勞働組合聯合團體の國際運動

林 癸未夫

一 戰前の勞働組合國際會議

社會主義者及社會主義を奉ずる勞働者の、最初の國際的團體たる國際勞働者聯合會（International Workingmen's Association）即ち普通第一インターナショナルの名を以て知られてゐるものの、第一回の總會が瑞西ゼネヴで催されたのは一八六六年であつた。これは普佛戰爭に原因する兩國社會主義者の疎隔のために、一八七二年和蘭ヘーグに於ける第五回の總會を名殘として、實質的に瓦解してしまつた。其後十七年を經て國際社會主義者及勞働會議（International Socialist and Labour Congress）即ち現存の第二インターナショナルが其最初の會合を巴里に催したのは一八八九年であつた。然るに右の社會主義者のインターナショナルとは離れて、別に勞働運動のためにする國際的勞働組合會議の第一回總會が瑞西チューリヒで催されたのは一八九七年で、社會主義運動のためにする最初の國際會議よりは、まさしく約二十年を遲れたわけである。かく勞働組合の國際的聯合作用が社會主義者のそれよりも緩慢であつた理由としては次の二つを擧げることができる。其一は勞働組合に關する各國の法制並に組合發達の經路に餘程相違があつて、各國の勞働組合をして其代表者を他國に差遣して、國際的の交渉に應ぜしむることができる程に、其機關の編成が均等に發育してゐなかつたといふこと、其二は有力なる各國の勞働組合の幹部中、社會主義者としての國際運動に參加してゐるものがかなり多かつたゝめに、別に勞働組合のみの立場から國際運動を行ふといふ必要が左程重視されてゐなかつたといふことである。併しながら第一インターナショナルが瓦解して第二インターナショナルが成立するまでの十數年間に、三回試みられた社會主義者及勞働組合員合同の國際會議は次第に此兩者の運動を引離す必要を感ぜしめる原因となつた。一八八三年の十一月、佛蘭西社會主義者中の右翼にあつた社會勞働黨（ポシビリスト）と英國勞働組合

とが巴里で催した會議では、佛蘭西側が頻に政治的社會變革論を主張したのに對して、英國側が飽くまでも勞働組合としての經濟運動を提唱して下らなかつたので、結局どちら附かずの折衷的決議案を通過しなければならなかつた。一八八六年八月の巴里會議では、英佛の外獨逸、墺匈國、白耳義、瑞典、諾威諸國の社會主義者及勞働組合員百七十名が參集したが、此會議に於て社會主義と勞働組合主義との態度の相異は一層明かになつた。獨逸の社會黨代表者は英國の勞働組合代表者を以て反動的勢力の下に在るものと罵り、彼等が果して眞に全英國の無產階級を代表する資格を有するか否かを疑ふと言つた。英國の參列員は之に答へて英國の勞働組合が現に勞働階級の地位の向上のために仕遂げつゝある事業を指摘し、大陸の社會民主主義運動が徒に空論に沒頭して、實質上何等爲すなきを嘲つた。而して英國代表者は到底衆寡敵せざるを見て、工場法に關する討議に加つたゞけで、會議終了を待たずに退去してしまつた。

其翌年サウス・ウエールスのスワンシーで開かれた英國のトレード・ユニオン・コングレスに於て、一八八八年を期し倫敦に於て社會主義者を除いた勞働組合代表者のみの國際會議を開催しやうといふ決議を通過した。之に對して獨逸及墺太利の社會民主黨は、自國の勞働組合に其代表者を差遣しないやうに勸告したので、此兩國からは一人も參列しなかつた。此會議は一八八八年十一月倫敦に開かれて、英國は七十九名、佛蘭西は十八名、和蘭は十三名、白耳義は十名、丁抹は二名、伊太利は一名を出席せしめたが、英國の勞働組合代表者中の十五名は社會主義者であり、他の諸國の參列員も實は大部分社會主義者であつた。併し其議題は專ら勞働組合運動に關する事のみで、佛蘭西代表者の一人から提出した八時間勞働強要手段としての總同盟罷業案の如きは、大多數で立所に葬り去られた。

この倫敦會議は形式に於ては最初の勞働組合國際會議と見られるけれども、實質に於てはやはり社會主義者と勞働組合員との聯合會議であつた。然るに一八九三年の四月、瑞西國内の勞働組合會議に於て、勞働立法に關する問題を討議するために歐洲各國の勞働組合代表者會議を自國内に開催したいといふ決議を通過したのが動機となつて、一八九七年の八月下旬にチユーリヒに於て第一回の國際勞動組合會議が開催される運びとなつた。此會議の目的は主として勞働者保護立法の促進に在つたがゆゑに、「勞働者保護のためにする國際會議」(The International Congress for the Protection of Labour) と呼ばれた、同會議に參列した者は主として勞働者を以て組織されたる團體の代表者ではあつたが、外に勞働者を以て組織されたると否と

を問はず勞働に關する公共的諸團體の代表者並に殊に招聘された學者專門家等も交つてゐたから、純粹の勞働組合會議とは言へなかつた。其出席者總數は三百九十一人、之を國別に示すと左の通りであつた。

英吉利	一〇
佛蘭西	六
獨逸	六六
墺太利	二一
匈牙利	三
伊太利	九
瑞西	二四五
白耳義	一六
露西亞	四
西班牙	一
瑞典	一
和蘭	一
波蘭	五
ルクセンブルグ	二
米國合衆國	一
合計	三九一

此會議に於て決議された事項は(一)日曜休日、(二)女子に對し曜半休、(三)十五歳未滿者の勞働禁止、(四)八時間勞働、(五)女子一週間四十四時間勞働、(六)工業上有害なる原料の使用制限、(七)特別の場合を除くの外夜業の禁止、(八)家庭工業の禁止、(九)分娩前後八週間の休業並に同期間の扶助料支給、(十)男女同一作業に對し同一賃率の支給等であつた。又決議には至らなかつたけれども討論された事項の中には、(一)女子を使用する工場には女子の監督者を置くこと、(二)勞働組合の幹部を法律上の組合代表者として承認すること、(三)男女を問はずあらゆる種類の勞働者の團結權を認め、之に違背した者は處罰すること、(四)平等、直接、無記名の普通選擧法を採用すること(五)言論、文章等の手段を以て上記の勞働者保護立法の速成運動を行ふこと等であつた。

勞働組合國際會議の第二回は一九〇〇年九月十七日から十九日まで巴里に於て開催された。主宰者はC・G・Tで參列者は佛、英、伊、白、瑞典、諾威及瑞西の勞働組合代表者であつた。唯獨逸の勞働組合は同じ月の二十三日から二十七日まで、第二インターナショナルの第五回總會がやはり巴里で開かれることになつてゐたので、之と離れて別に勞働組合の會議を催すことを以て無用な重複だといふ見解を持つたゝめに招集に應じ

なかつた。此會議で討議された事項中最も重要なのは、此會議を今後繼續的に開催する便宜上、其事務を統括するために國際的の事務所を開設しては何うかといふ問題であつたが、次回まで留保されることになつて決定に至らなかつた。尚此會議で討議された問題としては、闘爭手段として總同盟罷業(ゼネラル・ストライキ)の是非如何であつた。佛、白、伊三國の代表者は之に賛成し、瑞西の代表者は之に反對し、英國の代表者はまだ此の如き問題を考慮するの暇がなかつたといふ理由で意見の發表を避けたが、採決の結果多數を以て通過した。勞働時間短縮の必要は滿場一致で可決せられ、毎年五月一日を以て國際的勞働日とするの案も是認された。只消費組合の價値に就ては意見區々に岐れて竟に歸一する所がなかつた。

勞働組合國際會議の第三回は一九〇一年丁抹のコーペンハーゲンに開かれた。これに參列した者はスカンヂナビヤ諸國の外に、英、獨、白及芬蘭の勞働組合代表者であつた。此會議で前回未解決であつた國際事務局設置の件が確定せられ、始めて各國勞働組合中央團體國際事務局(International Secretariat of the National Trade Union Centers)なるものが伯林に置かれることになり、獨逸の自由組合の會長たるカール・レギーンが國際主事に舉げられた。彼の任務は各國勞働團體間の聯絡を保ち、國際會議を招集し、勞働運動に關する各種の統計を作製する等のことであつた。加入團體から此國際事務局の經費を支辨するために醵出する會費は、各團體員一千人に付一箇年僅に五十フエンニヒと定められたが、後に一マーク半に增額された。

勞働組合の國際的聯合運動は此コーペンハーゲン會議に於て始めて一定の組織を有するに至つたので、爾來形式的には此會議を以て第一回と呼ぶことになつてゐる。併し今は實質的の順序に從ふと、次の第四回は一九〇二年に獨逸のスツットガルトに開かれ、本會に於て討議すべき事項を嚴に勞働組合運動に關する諸問題に制限し、政治問題には決して觸れないといふことゝ、本會に加盟する勞働團體は一國一箇に限るといふ原則を決定した。第五回は一九〇三年愛蘭のダブリンで開かれ、毎年一回各國に於ける勞働運動の現勢を國際事務局に通報し、同局に於て之を一括して印刷に附し、各加入團體に報告すべきことを議定した。第六回は一九〇五年和蘭のアムステルダムで開催せられたが、此時は格別の問題もなかつた。第七回は一九〇七年諾威のクリスチアニヤで開催せられ、「大同團結の一般原則に從ひ且雇主の聯合團體が急速に增加しつゝある現狀に鑑みて各國の勞働組合は先づ自國內に於ける同種組合の聯合會に加盟

し、更に同様の理由に依つて共國の勞働組合總聯合團體に加入し、尙進んで「勞働階級の國際的友愛と團結とを促進するがため」各國勞働組合の總聯盟を組織すべきことを勸說した。第八回は一九〇九年巴里で開かれ、本會議は今後隔年に開催すべきこと〻、本會議の目的は各國勞働組合の結合を鞏固にし、勞働組合に關する諸統計を整備し、經濟的鬪爭に於て相互の協力を促進し、且勞働組合運動に直接關係ある諸問題を討議するに在るも、或一國內に於ける勞働組合運動の傾向及方略に關する總ての理論的諸問題は本會の討議から除外さるべきことを議定した。

第九回は一九一一年匈牙利のブダペストで開かれたが、此會で決議された事柄は從來よりも餘程重要なものが多かつた。其第一は從來本會議は各國の勞働組合の中心團體の代表者が時々一堂に相會して意見の交換をするといふに止つて、別に各國の勞働團體が相寄つて永續的の一團體に結合されてゐるわけではなかつたが、此會議に於て初めて、各國に於ける勞働組合運動の自主權を侵害しない範圍內に於て、各國の賃金勞働者の經利利益及正義を擁護增進し、且相互の友愛及團結を助長するの目的を以て、勞働組合の國際的聯合團體を組織すべきことを、各國の勞働組合中心團體に勸告するといふ決議をした。次に此會議は「傭主側の運動は常時間斷なく强固を加へつ〻あるがゆえに、勞働運動の共同一致の必要は益々緊切を加へ來れる」ことを認め、「プロレタリヤの利益を防衞することを以て使命とする勞働組合」は傭主側の勞働組合破壞運動を防壓するに必死の努力を致すべきを高唱し、「此目的を達する手段として、階級鬪爭の經濟的分野に於て、あらゆる種類の賃金勞働者を抱擁すべき」組合組織の促進を圖らなければならないといふ、佛蘭西C・G・Tの提案を可決した。次に又此會議は現存の國際事務局が本會議に加盟したる團體以外の出所から、加盟團體の何れかの委或は特質に危害を及ぼすやうな報道を手に入れた時は、卽時之を共團體に移牒すべきことを決議した。而して最後に此會議は本會に加盟して居る各國の勞働團體中に重大な同盟罷業か勃發して、罷業資金に缺乏を來した場合には、其事情を國際事務局に報告し、事務局は之を各國の加盟團體に移牒して、相互出來るだけの財政的援助をしやうといふ申合せをした。

右の決議中第一の各國勞働組合を聯合した國際的の一團體を組織しやうといふ案は、一九一三年の瑞西チューリヒに於ける第十回會議に於て具體化されて、其翌年から現在の勞働組合國際聯合會（International Federation of Trade Unions）が組織された。これによ米國勞働聯合會（American Federati n

of Labor)も加入し、從來國際主義であつた獨逸のカール・レギーンがやはり聯合會長に推選されて、其本部も亦從來の通り伯林に置かれることになつた。

戰前此勞働組合國際聯合會に加盟してゐた各國勞働團體の組合員數は次の通りである。(一九一二年)

英吉利	八七四、二八一
佛蘭西	三八七、〇〇〇
獨逸	二、五五三、一六二
墺太利	四二八、三六三
伊太利	三二〇、九一二
匈牙利	一一一、九六六
白耳義	一一六、〇八二
和蘭	六一、五三五
丁抹	一〇七、〇六七
瑞典	八五、五二二
諾威	六〇、九七五
芬蘭	二〇、九八九
瑞西	八六、三一三
西班牙	一〇〇、〇〇〇
セルビヤ	五、〇〇〇
ルーマニヤ	九、七〇八
クローチヤ・スラヴォニヤ	五、五三八
ボスニヤ・ヘルチエコビナ	五、五二二
米國	二、〇五四、五二六
計	七、三九四、四六一

右の加入總數七百三十九萬餘人を、一九一二年に於ける世界各國の勞働組合員總數約千六百萬人に比べると約四割六分にしか當つてゐない。それは本會の加入者を各國に於ける勞働組合の聯合團體中の唯一箇に限つたゝめ、佛蘭西　獨逸、米國等に於ては其最大最有力なる團體が之に加盟して居たけれども、英國の如きは眞の意味に於て同國の勞働組合全體を代表して居るトレード・ユニオン・コングレスが加盟しないで、却て罷業資金保險を行ふために新設された勞働組合一般聯合會(此名稱が實質に副はぬために種々なる誤解の因をなした)が之に加盟したゝめ、一九一二年に於てはトレード・ユニオン・コングレスの總會員約二百餘萬人であつたに拘らず、本會加入者は僅に八十七萬餘人に過ぎないことになつてゐる。英國に於ける此變態は後に說くやうに戰後に於て訂正せられた。

二　戰後第一回の勞働組合國際聯合會

勞働組合國際會議の第十一回は一九一五年米國サンフランシスコで開かれる筈であつたが、戰爭のため中止となつた。一九一七年中一回は瑞典勞働組合の斡旋でベルンに於て、一回は和蘭及スカンヂナビヤ諸國の勞働組合の斡旋でストツクホルムに於て、交戰國及中立國の勞働組合の國際會議が企てられたけれども、種々なる故障のために成立たなかつた。

然るに平和克復後一九一九年八月に至つて、一九一三年以來杜絶してゐた勞働組合國際聯合會々議がアムステルダムに於て復活されることになつた。此戰後第一回の總會に出席した者は歐米十四箇國に於ける千七百七十四萬人の勞働組合員を代表する九十二名の人々で、戰前に比べると組合員數に於て約一千萬の增加を示した。

此の會議に於ける最大の事業は新會則の制定であつた。其の要綱は次に示す通りである。それと同時に戰前伯林に在つた國際事務局がアムステルダムに移され、會長としては英國のアツプルトン、第一副會長には佛蘭西のジユーオー、第二副會長には白耳義のマルタン、セクレタリーとしては和蘭のオードギーストとフイメンとがそれぞれ選擧された。左に新會則中の主要なる條項を擧げやう。

(一)組織　本會は各國勞働組合の中央團體の結合より成る。

但各國に於ける勞働組合運動の自主權を侵害せらるゝことなし。

本會に加盟すべき各國勞働組合の中央團體は一國一箇に限る。但本項に除外例を設けんとする時は次回總會の決議を經ることを要す。

(二)本會の目的　國家的及國際的基礎の上に組織されたる勞働團體の利益及努力の增進、勞働組合相互の利益に關する諸問題に對する聯合活動の擴張、國際的罷業破りの防遏、

(三)會議　定期總會は隔年秋季之を開く。會議の時日、場所及議題草案は六箇月以前に事務局より各國加盟團體に之を通知す。各國加盟團體より提出の議案は三箇月以前に之を事務局に通知するを要す。

會議は事務局役員及加盟各國勞働組合中央團體の代表者を以て之を組織す。各國代表者中の一名は本會の費用を以て、其他は各團體の費用を以て參列す。

決議は多數決とし、可否同數なる時は否決とす。投票權の割當は各加盟團體の會員數に應じ次の通りとす。

二十五萬人未滿	一票
二十五萬人以上五十萬人未滿	二票
五十萬人以上百萬未滿	三票

百萬人以上は五十萬人又は其端數毎に一票を加ふ

右の規定に從ふと獨逸十三票、英國十一票、米國九票、佛蘭西四票、白耳義、墺太利、丁抹、和蘭各二票、ルクセンブルグ瑞西、瑞典、諸威 西班牙、チエツコ・スローヴキヤ各一票、合計五十一票である。

(四)會費 加盟團體會員一名に付一箇年英貨半片又は米貨半仙。

三 倫敦の特別總會

戰後第二回の勞働組合國際聯合會々議は會則によれば一九二一年に開かれる筈であつたが、各國に於ける戰後の社會上及經濟上の新形勢は益々急迫を告げつゝあるので、之に對する本會の態度を一定するの必要上、一九二〇年の十一月倫敦に於て特別總會を開催することになつた。此會議に參列した勞働首領の員數と其代表する勞働員數とを國別に示すと次の通りである。

(國名)	(參列者數)	(勞働組合員數)
英吉利	一〇	六、五〇〇、〇〇〇
獨逸	一二	八、五〇〇、〇〇〇
佛蘭西	一三	一、五〇〇、〇〇〇
白耳義	九	七〇〇、〇〇〇
丁抹	五	三〇〇、〇〇〇
諸威	五	一五〇、〇〇〇
瑞典	四	二八一、〇〇〇
和蘭	八	二四〇、〇〇〇
伊太利	五	二、三〇〇、〇〇〇
墺太利	三	八〇〇、〇〇〇
チエツコ・スローヴキヤ	四	七五〇、〇〇〇
匈牙利	二	二一五、〇〇〇
瑞西	一	二二五、〇〇〇
ルクセンブルグ	二	一七、〇〇〇
西班牙	二	二五〇、〇〇〇
波蘭	九	一、一〇八、〇〇〇
加奈陀	一	二六〇、〇〇〇
合計	九五	二四、一〇六、〇〇〇

本會の加盟團體は會則により一國一箇と限られてゐるのであるが、其除外例として一國二團體の加入を認られたのは英國と波蘭とであつた。就中英國では從來勞働組合一般聯合會(General Federation of Trade Unions)が之に加盟してゐたのであつたが、今回別にトレード・ユニオン・コングレス(Trade Union Congress)が共に加盟することになつたのである、本來獨

逸からは一般獨逸勞働組合聯合會（Allgemeiner Deutscher Gewerkschaftsbund)、佛蘭西からはC・G・T、伊太利からはC・G・L、米國からはA・F・Lが之に加盟してゐる以上は、英國から之に加盟すべきものは權衡上から言つても、又實質上から言つてもトレード・ユニオン・コングレスでなければならないことは寸毫も疑ひない所であつた。然るに從來一國一團體の原則に從つて英國から之に加盟してゐたものは、トレード・ユニオン・コングレスよりは遙に組織の小さい、又事實に於て近年英國の勞働組合運動をすこしも代表してゐない勞働組合一般聯合會であつたといふことは、英國の勞働組合自身に取つても、又英國の勞働組合運動の中堅的勢力と直接折衝することを欲する他國の勞働組合に取つても甚だ迷惑なことになつてゐたのである。殊に勞働組合一般聯合會の牛耳を執つてゐるアップルトンは、本來同會が罷業資金の相互保險機關としてトレード・ユニオン・コングレスのために設立されたる補助的團體であるに拘らず、トレード・ユニオン・コングレスの幹部の意向を無視して戰時中恰も自分が英國勞働組合の主流を代表するものであるかの如く振舞つてゐたゝめに、勞働運動のソリダリチーのために尠からぬ妨害をなしたのである。

然るに戰後最初の勞働組合國際聯合會總會に於て、多年其會長であつた獨逸のレギーンが退職すると同時に、其後任としては戰時中聯合國の盟主であつたといふ關係が此處に及んだものか、英國のアップルトンが新會長に擧げられることになつたので、勢ひトレード・ユニオン・コングレスは事實英國勞働運動の主力を代表してゐながら、本會から除け物扱ひを受けなければならぬやうな羽目になつたのである。此不自然な狀態は一九二〇年九月ポーツマウスに開かれたトレード・ユニオン・コングレスの年次總會で問題になり、英國の勞働組合を全體として國際的に代表すべき機關はトレード・ユニオン・コングレスの執行委員會でなくてはならないといふ決議を通過した。其結果勞働組合國際聯合會の加盟者は一國一團體に限るといふ會則に除外例を求めて入會を要求し、さてこそ勞働組合一般聯合會とトレード・ユニオン・コングレスとが相並んで一九二〇年の特別總會に參列することになつたのである。併し元來勞働組合一般聯合會の會員は殆ど全部がトレード・ユニオン・コングレスの會員であるからして、後者が加盟した以上は、前者の加盟は無意義となつたわけであるけれども、從來の歷史を尊重して姑く並存を認めることになつたらしく思はれる。

然るに此倫敦總會の劈頭第一の仕事は復ゝや會長の補缺選擧であつた。何となれば昨年會長に擧げられたばかりのアップル

ドンは開會に先つて、左の如き書簡を事務局セクレタリーのフヰメンに送つて、辭職の意を明かにしたからであつた。

フヰメン君足下――余は玆に勞働組合國際聯合會長の職を辭する旨を足下に通告する。余が此處置を取るに至つた經驗を示すために、余が一九二〇年四月十五日付を以て、米國勞働聯合會長ゴムパース氏に送つた書面の數節を玆に拔萃したい。

余は從來貴兄に對しては何事も包まずお話しするを例としてゐたから、今回も又余の心事を腹臟なく申上げたい。そは餘の儀でない。余が曩に勞働組合國際聯合會長に選擧せられたことが、社會主義若くは其他の政治的の「イズム」に余が左袒したことを意味するものであるとするならば、余は最も强硬に其就任を拒絕したであらうといふことである。余は飽くまでも一個の勞働組合員であつて、決して政治家たるを欲しない。余の所謂勞働組合員とは、出來得る限り最高の價格を以て、其勞働を販賣するの目的を以て、自己の同輩と團結するの權利を主張し且實行する者の謂である。

余は目下非常に思ひ惑うてゐる。若し余が自分の個人的傾向に隨ふならば、余は卽時、社會の安固と總ての階級の福利(余等自身の階級をも含む)とを脅かす所の思想と政策とから、絕緣しなければならぬと考へてゐる。併しながら余自身の委員に對する義務と、米國勞働聯合會に對する余の關係とは、余が斷然たる處置に出る前に、先づ此問題を委員諸氏と貴兄との前に提出することを余に强ゐる。

今や余は委員諸氏の見解を知り、且ゴムパース氏の態度も十分之を明にすることができた。余は必ずしもゴムパース氏が米國勞働聯合會を代表して、勞働組合國際聯合會に就き發表した陳述の全部を裏書きするものではないけれども、余は米國の友人の側に與せざるを得ないことを感ずる。

余の辭職は何れの國の貧者或は弱者に對しても、余の關心を失つたことを意味するのでは決してない。唯それは余が余自身の可とする方法に於て働くべき一身上の自由を失ひたくないこと及余に取つては時世知らずで且根本的に實行不可能と思はれるやうな理論の宣傳に自分の力を注ぎたくないことを、意味するのである。余は政治上の或特別な一派の廣告の中に捲込まれたくない。余は國民の中に平和を說き、各國民の間にも平和を說き、科學的に改造の諸問題を考察し、而して現に此國民を脅威しつゝある所の産業上の危機を如何にして防遏すべきかを研究し且助勢するがために、余の時の大部

分を献ぐるの自由を有したいと思ふのである。希くは余の辭職をして此手紙の日付の日から效力あるものとして貰ひたい。

右のアップルトンの辭表の文書によつても知られる通り、彼の會長辭任はゴムパースと意見交換の結果であつた。而して此兩者の意見は勞働組合國際聯合會の空氣が、其傳統的な方針に悖つて漸次左傾することを嫌忌する點に於て正に符合したのであつた。それは前年のアムステルダム總會には出席した米國勞働聯合會代表者が、此倫敦總會には招集に應じなかつた事實によつて既に十分暗示されてゐた。而して後に說くやうに、一九二一年に至つて米國勞働聯合會は公然本會から脫退を聲明したのであつた。

アップルトンに代つて新に會長に推擧せられたのは、トレード・ユニオン・コングレスの議長であつたゼー・エチ・トーマスであつた。

當今世界に於て名ある勞働首領中、最も保守的な（社會主義的思想を排斥する意味に於て）人を求めるならば、それは疑ひもなくゴムパースにアップルトンである。「黃色」と呼ばるゝ英のトーマスも、佛のジューオーも、獨の故レギーンも、或程度に於ては確に社會主義者である。社會主義者中の最も穩健なる者である。それにも拘はらず、ゴムパースとアップルトンとは何うしても彼等と事を俱にすることができない程に保守的なのである。然らば勞働組合國際聯合會が如何なる程度に左傾したであらうかは、副會長ジューオーの述べた開會の辭の中に先づ之を認めることができる。彼はかういつた。

此歐洲に於ては、軍國主義者の叫喚を沈默せしめ、反動政治家の畫策を挫折せしめ、勞働階級が辛うじて得たる自由を擁護伸張し、團結權に對するあらゆる攻勢を擊破して、社會進化の基礎を確立することが吾人の義務でなくてはならない。併しながら世界を通じて吾人の最高の義務は、吾等が兄弟たる勞働者、吾等よりもヨリ以上に虐使されつゝある兄弟等の救助を求める叫聲に吾等の耳を借すことである。

寔に世界は新しき基礎の上に、團結と協力とを除いては再建し得べからざるものたることを聲明するは吾人の任である。併しながら之は資本家の特權が撤廢せられ、あらゆる大衆の財貨と生產の手段とが社會民衆の手に恢復される迄は實現し得べからざるものである。現今世界を通じて必要なる努力は生命を增すことである。併しながらかゝる努力は社會民衆の要求を滿足せしめることなくしては、實行し得べからさるものである。新しき秩序は軍備の全廢と、原料の國際的分

配と、運輸及生產事業の社會化の上に建設されなくてはならない。然らざれば一切の事物は現　の混亂、不秩序並に日に募り行く慘狀のまゝに存續するにかはないであらう。

ジューオーに續いて本會長のトーマスは、自家の立場を明かにするために、立つて次のやうに述べた。

或部分からは吾等を目するに「黃色」を以てしてゐる。之に對して私は簡單に、吾等は自由なる世界のために、勞働階級の自由と正義とのために戰ひつゝあるものであると答へやう。吾等と吾等を黃色と呼ぶ人々との差異は、必要なる變革が慘憺たる革命によつて仕遂げられるものではないといふことを吾等が信ずるといふ一事である。

四　特別總會の決議

かくて議事に入つた。第一決議案は戰後の世界の新形勢に對する勞働組合の態度と、將來の改造事業に對する其主張とを宣明したものであつた。和蘭のフキメンが提出の理由を說明した後、獨逸のグラスマン、西班牙のバスティロ、伊太利のダラゴナ、加奈陀のハルフォード、諾威のヴォーラン等によつて討議せられ、結局二百七十一萬票對二千百六十萬六千票の多數を以て可決せられた。反對したのは加奈陀、伊太利及諾威であつた。決議の內容は左の通りである。

本總會は世界各國の特權階級及其政府が、陰に陽に勞働者の團結及運動を抑壓せんとする企圖に對して強硬に抗議するものである。

本總會は數箇國に於ける反動政策のために悩まされ又悩みつゝある民衆に對して同情を表明する。而して又匈牙利に於ける「白色恐怖(ホワイトテラー)」に反抗すべき國際的義務を忠實に履行して、反革命軍に武器の輸送を拒絶したる勞働者諸君に對し感謝の辭を呈する。

本總會は露國に對して今尙行はれつゝある軍事的及經濟的壓迫に對し嚴重に抗議するものである。

本總會は勞働組合國際聯合會に加盟せる各國勞働組合の中央團體、各種の國際勞働組合理事會並に何等かの組合組織を有する一切の勞働者が　勞働組合運動の發達、並に吾人の生存及生命をも脅威しつゝある世界的反動政策に對し、あらゆる手段を竭して抗敵するを以て其第一の義務となすべきものたることを茲に聲明する。凡ゆる勞働團體は國家的たると國際的たるとを問はず、各自の勞働狀態の改善に對し組織的努力を繼續する以外に、資本主義及帝國主義に對抗する世界的鬪爭に參加しなければならないものである。

本總會は何よりも先づ軍國主義を徹底的に廢滅すべきことを高唱する。

本總會は各國の勞働組合運動が反動政策に抵抗し吾等の進歩に貢献すべき強毅有效なる武器として、必要に應じ總同盟罷業及國際的ボイコットを敢行すべきことを宣言する。惟ふに吾等の成功は一に懸りて、各國各種の勞働團體の極度の一致團結に俟たなければならぬ。從つて本會は、本會に加盟せる列國の勞働團體並に他の各職業別の國際的勞働團體に對し、前述の諸目的を實現するがために本會に協心戮力すべきことを熱心に勸說するものである。而して又本會は普遍的にして且有效なる宣傳の方法により、反動的勢力を破摧し、戰爭に對して宣戰し、且新社會組織の實現を可能ならしめるために、國際的民衆運動の缺ぐべからざる所以を各國の勞働階級に鼓吹するに勗めるであらう。

第二の決議案は八時間勞働に關するもので、前年ワシントンの國際勞働會議に決議された事項を批准實施することを躊躇しつゝある各國政府及傭主間の態度を攻撃し、若し規定の期間内に之が實施されなければ、國際勞働局に對する勞働組合の援助は之を拒絶するといふ意味を切言したものである。

次に滿場一致を以て通過したる第三の決議案は將來の戰爭防止に關するもので、其内容は次の如きものであつた。

あらゆる戰爭に反對する國際的勞働運動の主張は、資本主義的ブールジョアジーの平和論とは嚴に區別さるべきものである。

本總會は政治的及經濟的に各國民の意志を壓迫せんがために新に設けられんとする一切の武斷的諸制度を欺瞞なりと宣言し且全然之を排斥するものである。

吾等勞働階級は諸國民間の完全にして恒久的なる平和を要求し、且今後再び「最後の戰爭」若くは「戰爭を終息せしむるための戰爭」といふが如き詐言に惑はされないやうにしなければならない。

次に現はれた第四決議案は「工業用原料の國際的分配」といふ、勞働組合運動には比較的緣の遠い、併しながら世界人類の經濟生活に取つては最も關係する所の廣大な一問題であつた。尤も此問題は一九一九年秋のワシントン國際勞働會議の席上に於て、伊太利の勞働代表者たるバルデシによつて提案されたが、四十票對四十三票を以て拒否された。其後國際聯盟の理事會に於て討議の題目とすべきや否やに就て考慮されたが、一票の差で廢棄された。併しながら此問題は各國の產業を國家的利己主義から解放することが、各國民衆の經濟的文化の向上に必

須缺ぐべからざる基礎であるといふ信念から出發して居るものであつて、理想としては何人にも首肯されなければならない眞理の上に立つてゐる。或一國又は數國にのみ存在する原料は、其國に於て獨占すべきものではなくして、各國民全體の共有物として考慮されなければならない。從つて此主義の實現に進むべき最初の階梯としては、國際的勞働團體自體の運動を以てするよりも、寧ろ之を國際聯盟に提案して各國の協賛を求める方針に出るのが至當の順序である。而してそれには國際勞働局の努力に俟つのが最も便宜な方法と思はれる。

これが白耳義のマルタンによつて説明された提案の趣旨であつた。之に應じて先づ猛烈に國際聯盟を攻撃したのが伊太利のバルデシであつた。國際聯盟はワシントン會議に於て決定したる勞働者保護法規の原則を實施するの意圖を有しない、それは單に勝利者の聯盟である。獨逸からあらゆる所持品を剝奪しやうとする特別の目的を以て造られたものに相違ない。かくの如き機關に信頼しやうとするのは根本に於て誤謬であると彼は叫んだ。

次に議長のトーマスは英國勞働者の代表者としての資格を以て、彼に特有の穏健論を吐いた。曰く、如何なる問題もそれが單に國際聯盟に關係して居るといふ點を以て之を拒否する理由とすべきではない。國際聯盟も世界の全國民を抱擁するに至らば、最も有力なる平和の機關たるべき筈である。又しかすることが吾等の目的でなくてはならない。かういふ見地から英國代表者は本決議案に賛成し、同時に國際聯盟の刷新を要求するものである。

之に續いて加奈陀のハルフオードは、本總會が各國内の自然利源の處分方法を議するは各國の主權に干渉するものであるといふ法律的見地から本案に反對した。又瑞西のデユールは本案の主義には賛成するけれども、國際勞働局の如き實力なき機關を通じて之を促進しやうとする手　には反對であると述べた。而して最後に滿場一致を以て通過した決議文中の重要なる辭句を摘錄すると左の通りである。但伊太利及諸威の代表者は國際聯盟と國際勞働局に關する部分には賛成しないといふ條件を附けた。

戰後に於ける各國の經濟的恢復に對し最大至要なる豫備條件の一は、世界の生産する原料を正當公平に分配すること之である。

併しながら各人が世界的共同生活に於て何等の差別的待遇を與へらるゝことなきやう、原料の分配を實行するがために障碍となるのは、資本主義的社會組織の恢復である。從つて

現存社會を解體せしめ、生產と分配とを合理的組織の下に置き、併せて各國民間の完全なる協調を促進するやうに、斷えず努力することが勞働團體の責務である。

而して現今國際聯盟の國際勞働局は本決議の趣旨を實現するに最も適當したる機關なるを信ずるがゆゑに、本會の事務局は直に國際原料分配局の構造を立案し、之を國際勞働局に送達すべきである。

第五決議案は「現下に於ける爲替騰落の危機を救濟する最善の手段の一として、各國の戰爭に原因する負債を一般的に且相互的に抹殺することを勸告する」もので、佛蘭西のジューオーにより提案せられ、伊太利、加奈陀、白耳義は之に反對し、英國は棄權したが、多數を以て通過した。

第六決議案は生產機關の社會化問題で、和蘭のオードギーストによつて提案せられ、獨逸のディスマンによつて贊成せられた後、滿場一致を以て可決された。社會主義と本會との關係は之によつて明にすることができる。其中の主要なる辭句は左の通りである。

本總會は少數なる資本家の權力と財產とを增加するために、勞働階級が富の生產に當るべき理由の全く存在しないことを信ずる。

本總會は生產の增加は唯單に新產業及經濟組織の樹立によつてのみ之を遂行し得べきものたることを宣言する。此場合生產者の努力は資本家の利益を除外したる社會の利益のためにのみ振向けられ、資本主義は最早其私慾のために是等の努力を妨害し又は橫領することを許されないであらう。

勞働者の物質的及道德的生活の改善は右の如き變革が成就された場合に於てのみ唯可能である。

此故に本總會は社會の利益のために、土地及其他の生產機關の社會化を要求するものである。殊に鑛產物(石炭、鑛石、鹽、燐鑛等)諸運搬事業、並に各國のプロレタリアが認めて以て實行可能とする所の一切の生產方法は先づ第一着に之を社會化することが肝要である。

但かくの如き變革は單に產業の管理權を資本主義的國家に移轉することによつてゞなく、相當の勞働團體を通じて各產業に從事する者の全體並に全國民が積極的に管理に參與することによつて成就されなければならない。

即ち此決議の內容は大體に於て一九二〇年夏のゼネヴに於ける第二インターナショナル總會の決議と同樣であることを注意すべきである。

第七決議案は諸國勞農政府によつて支配されてゐる第三イン

ターナショナルの首惱者等が、近頃本會を以て欵を資本主義に通ずる似而非的社會改革論者の集團として嘲罵したのに對する本會の辯解的宣言書で、諸威は本決議を以て反動政策に加擔するが如き誤解を傳へる虞れがあるといふ理由で反對し、伊太利は第三インターナショナルの唱ふる趣旨は必ずしも否定しないが、其爭論の態度には賛同しかねるといふ理由で投票を棄權したゝめに、結局諸威の十五萬票に對する他の諸國の二千二百十二萬二千票で、此決議案は可決せられた。其主要なる數節は左の通りである。

本總會は種々なる事情を綜合するに、第三インターナショナルの本會に對する攻撃は、露國のプロレタリヤによりて發せられたるものにあらず、又彼等は之に對し全く其責任を有せざるものと考へる。しかのみならず本會に對する譏謗的批評と宣戰的口吻とは、全く本會の組織並に行動に就ての彼の無識に基因するか、然らざれば各國勞働團體を破壞せんとする或部分の露骨なる非望に據るものと信ぜられる。本會は本會並に勞働者の國際運動に對し發せられたる誹謗を極力拒否するものである。

本總會は本會並に各國の中央勞働團體が社會改造と資本主義的搾取制度の廢止とに努力しつゝあることを茲に聲明する。但之が實行の方法は各國に於ける習慣、傳統及狀況によつて定むべきである。

此故に本總會は露國勞働者の辛勞と革命的努力とに同情し、彼我の團結を欲求し、且彼等が本會に來り投じて社會的反動政策に對抗するために協同一致して奮鬪せんことを希ふものである。

右の決議に對しては後に至り更に「本總會は一國を統治することゝ、勞働者の國際團體とを支配することゝは、全然兩立すべからざる別箇のものたることを宣言す。此故に一政府の首長等が、假令共産主義者であらうとも、同時に勞働者の國際團體の首長たることを以て、許容すべからざるものと認める」といふ一句を追加して、暗に勞農政府の巨頭等に一矢を酬ゐた。

最後の第八決議案は佛蘭西軍隊のルール石炭地方占領に關する抗議で、之に對する佛、獨、英三國の代表的勞働首領の陳述は、最も重要で且興味あるものであつた。之より先、白耳義のスパーに於ける各國政府の代表者會議に於て、對獨講和條約の實行方法が決定されたが、獨逸が其時の約束によつて一定數量の石炭を佛國に供給すべき義務を忠實に履行しなかつたといふ理由で、佛蘭西軍隊はルール地方を武力を以て占領した。然るに獨逸側では同地方に於ける石炭採鑛量が豫定の數量に達しな

いために、約束を履行することが不可能であると抗辯したので其實狀を調査するために、佛蘭西のジューオーと、白耳義のマルクンと、和蘭のフヰメンとが勞働組合國際聯合會を代表してルールに炭坑を視察し且伯林をも訪問した。本總會に於けるジューオーの陳述によると、ルール地方は人口頗る稠密な上に食物の供給が甚だ不十分で、住民の生活は危機に瀕してゐる。石炭採掘量の不足は畢竟之に原因するもので、決して一部新聞紙の虛報したるが如く、獨逸勞働者の敵愾心に依るものではない。ジューオーはから言つた。「吾々佛蘭西の勞働者は機關銃の脅威の下に就業することを欲せないがゆえに、獨逸の勞働者が又然かすることを期待することはできない。從つてルール占領地區に於ける獨逸の坑夫が就業を拒絕することは當然である。吾等佛蘭西の勞働階級は、獨逸人たる吾等の同胞を後援するがために全力を竭さんとするものである。かくの如き吾等の決意は在來の國民思想に叛くものであることは疑ひない。併しながら之は恐らく近い將來に實行せらるべき重大なる變革の根本主義に合一するものである。」

此佛蘭西勞働界の巨人の好意的聲明に對して答ふべく立つたのが、獨逸勞働組合の統領とも言ふべきレギーンであつた。彼は先づ獨逸の坑夫が祖國の國際的義務を果すために最善の努力をなしつゝあることを述べ、彼等は之がために規定時間外の勤務に服し、健康上の惡影響をも忍んでゐることを報告した後に次のやうに論じた。「吾等獨逸の勞働者は憐まるることを欲しないけれども、領解せられることを欲する。吾等は平和條約を忠實に履行するの意志を有するけれども、除りに聯合國が無理難題を持ちかけるならば、或は履行不可能に了るかも知れない。その場合には獨逸は破滅するであらう。併しながら獨逸の破滅は延ゐて本總會の對過激派決議を全く無效ならしめるやうな事態を釀さないとも限らない。」レギーンがから言つたのは獨逸の赤化をほのめかして暗に聯合國に一威嚇を試みたものと思はれる。彼は尙語をついで、平和恢復後獨逸の勞働組合が佛蘭西の荒廢地恢復作業に當らんことを申出たのに、佛蘭西が之を拒んだ事實を指摘し、「軍國主義は獨逸に於ては既に絕滅した。只吾等は懼る、他の諸國に於ては軍國主義は今尙其威力を揮ひつゝあることを。」と叫んで暗に聯合國對獨方針に非難を加へた。

最後に起つたのは英國勞働運動の大立物たるトーマスであつた。彼の演說は多くの場合にさうであるやうに、勞働首領としてよりも寧ろ政治家としてふさはしいものであつた。彼は先づ英國の政策は平和の基礎の上に世界を改造せんとするに在る。而して其實行方法としては一切の國民を抱擁する國際聯盟の力

に俟つの必要があると言ひ、次にレギーンの軍國主義に對する非難に共鳴し、第一に此非難に値するものは佛蘭西である。併しながら恒久的の平和は各國民が相互の反感を一掃して相融和するにあらざれば到底實現し難い。此故に獨逸に於ける吾等の同僚は須らく獨逸の軍國主義復活に對する他國の懸念を掃拭するに努むべきであると說いた。かくて次の意味の決議は滿場一致を以て可決された。

ルール地方の占領は事態頗る重大で、其結果は反動政策並に軍國主義のために氣勢を添へるに過ぎないであらう。而して國際關係の常調を復歸せしめるためにはゆゝしき障礙を醸すものである。依て本總會はあらゆる手段を悉して此種の行動に反對し、且該地方の勞働者に對する獨裁權の行使を防止せんとするものである。

石炭問題の解決は軍事的占領の能くする所でない。一切の燃料の生產及分配を調節すべき國際的機關の設置を以て甫めて之を解決することができる。

本總會は戰爭の慘禍より炭坑を恢復するの途は、結局一致と平和を基礎とする勞働者團結の力に依るの外はないことを玆に宣言する。

五 勞働組合國際聯合會と第三インターナショナル

倫敦の特別總會で、第三インターナショナルの勞働組合國際聯合會に對する讒謗的批評に關する決議を通過した後、直に同會から之をモスコウに電送すると同時に、更に双方の間の誤解を一掃する目的を以て意見の交換を行ひたいといふことを申込んだ。この穩和なる申込に對する露國からの苛辣なる回答は、一九二一年一月二十八日モスコウから發せられた無線電信により、第三インターナショナル會長たるジノビエフから、國際聯合會の副會長ジューオーに對する公開狀となつて發表された。其内容は次の如く詬罵を以て滿されたものであつた。

貴下等は三千萬の勞働組合員を代表するものだと聲明されたが、失禮ながら紳士諸君よ、其實貴下等は單に少數なる勞働組合の官僚黨を代表せられるに過ぎない。そして根本的の問題に觸れると何時も勞働者を裏切つてブールジョアジーの味方をせられる御仁だ。貴下等は御自分たちが勞働階級のめに公正な意圖と眞摯なる願望を有つてゐるものだと思へと吾等に要求されたが、お氣の毒ながらウッカリ其手に乘るわけには行かない。成程貴下等の「黃色」インターナショナル

の幹部中には自分免許で勞働階級のために竭す誠意を有つてゐるつもりの人はあるかも知れない。併し何もそれがアムステルダム・インターナショナル（勞働組合國際聯合會の別名）の幹部中に實勢力を及ぼす要素となつてゐるわけでは固より無い。

「赤色」勞働組合の最初の世界的會合は本年の五月一日モスコウで開かれる筈になつてゐる。眞にブールジョアジーに反抗して戰ふことを欲する總ての勞働團體は茲に招待される。此會の出席者の資格には何等の制限をも設けないけれども、世界的帝國主義に眞實に反抗するの意圖を有しない者だけは御免を蒙る。從つて帝國主義の手先とも看做すべきアムステルダム・インターナショナルは出席をお斷りする貴下等が此最初の世界勞働組合會議が第三インターナショナルの一勝利であり、同時に又アムステルダムの欺瞞的インターナショナルに對する致命的打擊であることを御覽になるのも蓋し遠くはあるまい。

此侮辱的な公開狀に對する勞働組合國際聯合會の回答は三月の下旬に至つて發せられたが、之に先つて佛蘭西C・G・Tの全國代議員會では、アムステルダム・インターナショナルから脫退して新にモスコウ・インターナショナルへ加盟すべしと主張する左黨の一派と、現狀維持を主張する右黨との間に激烈な論爭を惹起し、結局二十四票に對する八十八票で左黨の敗北に歸した。又獨逸の社會民主黨の勢力の下に在る有力なる勞働組合等は、モスコウ・インターナショナルに反對して、組合內の過激分子を除名するの決議をした。伊太利のC・G・Lの總會では極左黨の主張も極右黨の主張も、共に敗れて、中堅派の提案が大多數を以て通過したが、其案は要するにアムステルダムほど黃色でなく、又モスコウほど赤色でない橙色の新インターナショナルの組織を提唱したものであつた。

三月二十三日に勞働組合國際聯合會の事務局から發表されたジノビエフに對する公開回答文は、主として現下の露國に於ける共產黨の政治運動が勞働組合の經濟運動を沒條理に壓迫しつゝある事實を攻擊したもので、勞農政府の首長等が「既往三個年に亘り、火と劍とを以て勞働組合運動の自由を破壞し」たる行爲を難詰し、且勞働組合聯合國際會は米國勞働聯合會の脫會後に於ても尙二千四百萬の會員を有するに拘らず、モスコウ・インターナショナルは僅に八百萬の會員を有し、しかも其中の七百萬は露國民たるの事實を指摘して、「赤色」の勝利を揚言する彼等の不遜をたしなめたものであつた。

六　米國勞働聯合會の脫退

「黃色」な勞働組合國際聯合會が露國の共產主義者からは「餘りに白つぽい」として攻擊せられてゐる間に、米國の同僚からは「餘りに赤つぽい」として絕緣を申込まれた。一九二〇年秋の倫敦總會の砌、米國勞働聯合會は其代表者を差遣しなかつたのみか、其以前からアムステルダムの國際事務局からの音信に對しては返答さへも送らなかつたので、同會の脫退は既に豫感されてゐたが、果して一九二一年の三月に至つて、A・F・Lの會長ゴムパースは次の三箇條を理由として正式に勞働組合國際聯合會へ脫會の旨を通告した。

（一）本會の新會則は、各國勞働組合の完全なる自主權を保持するといふ年來の主義を全然破壞するものである。

（二）本會の中央理事者から發表せられたる數次の宣言書は、本會を驅つて革命的なる主義を奉ずるものたらしめた。斯くの如きは米國勞働聯合會年來の主張と絕對に相容れないもので、民主的なる理想を以て勞働運動を指導せんとする者の到底認容する能はざる所である。

（三）會則によつて米國勞働聯合會に課せらるゝ所の會費は甚だ多額にして到底負擔に堪へ難い。

右のゴムパースの舉げた脫會の三理由に對しては事務局セクレタリーのオードギーストから一應の反駁書を送つた。それによると、（一）新會則が各國勞働組合の完全なる自主權を奪つたといふのは事實に相違してゐる。何となれば新會則の第三條中に「各國勞働運動の獨立性を害せらるゝことなし」と規定されてゐるからである。（二）會費の件も本會則によつて定められ、且當時米國勞働聯合會代表者も賛成者の一人であつたのであるから、今に至つて之を云爲するは穩當でない。若し之が不可であるといふならば宜しく改正の提案をなすべきである。（三）本會から發した宣言書が革命的であるといふことは全く貴方の不注意から起つた誤解に過ぎない。何となればそれは單に原料品と大なる公共的事業の社會化を主張したのみで、決して一般的な社會主義の實施を要望したものではないからである。

併しながら問題は脫會理由書の辭句の當否によつて左右さるべきものでは固よりなかつた。六月中A・F・Lのデンヴー總會では、形式上復歸案が上議されたけれども、大した議論も起らず脫會說が是認された。

アップルトンの會長辭任とA・F・Lの脫退との間には或連絡があつたやうに思はれる。勞働組合國際聯合會の立場からすれば、アップルトンの去つたことは格別惜むに足らなかつたが、

A・F・Lを失ふことは勞働運動の世界的ソリダリチーといふ上から見て最も遺憾とすべき理由がある。十月下旬ゼネヴに於ける國際聯盟の第三回勞働會議に出席するために、同地に赴いた英、佛、獨、伊、其他數箇國の勞働代表者等は相會して、勞働組合國際聯合會と米國勞働聯合會間の誤解を一掃するために更に適當なる措置を取るべきことを議決した。

一人の生産と彼自身

杉森孝次郎

消費者としての各一人は、消費者としての各他人との比較に於いて、大差を示さない。示しうべき大差を本質的に有しないのだ。けれども、生産者としての各一人は、生産者としての各他人との比較に於いて、本質的には大差を示すべきだ。人は、生産者としての資格に於いて、消費者としての資格に於いてよりも、餘計にかれ自身だ。もしもその人が偉大なる個性の人であるならば、その餘計さは、隨つて高度だ。

同時代の同社會の二人者の間には、たとへば衣食住の消費に於いて大差あるを要しない。ほぼ同じやうなものを、同じくらゐ消費すれば本質的滿足がえられるのだ。一軒の下宿屋に、法科生も、文科生も、理工科生も、結構滿足して眠食できるのを見てもわかる。消費者生活は、個性實現の代表的機會ではないのだ。消費者生活は、實に、手段にすぎないのだ。消費者生活は、古來いやしめられたかたちの物質的生活にさへ近いのだ。

消費者生活は沒個性の生活だ。日本人ならば、晨に味噌汁と飯とあり、午と昏にまた魚菜と飯とあれば、その日本人が、生産者としての資格に於いては、たとひ不倶戴天の間柄ほどにも相隔絶した社會觀、人生觀の抱持者であつてさへも、不自然でもなく、不當然でもなく生活ができる。

消費者生活を機會として個性を實現することが絶對に不可能なわけでは無論ない。生活は、それが人の生活である場合には、要するにその人の個性の實現だ。しかし、消費者生活に於

いて個性を實現する可能は、生産者生活に於いて個性を實現する可能にくらべて、あまりに低弱だ。貧小だ。淺狹だ。たとへば食物に於いて、人々の嗜好が、質及び量の兩面にわたつて多少ありうる。けれども、好みの獸肉や料理に自己の個性の大部分を代表されるやうでは、その人の自己は、大自己ではない。

消費は、他の自己の延長だ。自己以外の存在が、自己以内に招き入れられるかたちだ。音樂の生産者としての作曲者と、曲の實演者としての彈奏者とがオリジナルな、本源的な自己であつて、鑑賞者としての聽衆は、すなはち音樂の消費者としての人々は、音樂の生産者としての人々の多少不完全な再現だ。靜聽者の心理は沒我だ。かれの全心は、かれが現に聽く音樂によつて占領される。かれは、かれの聽く音樂に成りきる。理解がかれのすべてだ。勿論、理解と同時に、また理解の前後に多少の判斷と批評と改作と創造とがありうるけれども、その判斷と批評と改作と創造とは、すでに實は、消費者に於ける生産者の擡頭だ。それはすでに消費者としての作用でも、現象でもない。人は、本質的には單なる消費者にてもありえず、單なる生産者にてもありえないゆゑに、そしてかれはただ消費を手段とする生産者、生産を目的とする消費者としてのみ實質の存在を保ちうるがゆゑに、おのおののかれの消費が、同時的及び連續的に、多少かれの生産に機會と原因とを供給することはすこしも不思議でない。

けれども、一人の生活を、特徴の殊差に隨つて、消費と生産とに區別するならば、消費は、自己の表現ではない。消費は、消費されるものの表現だ。わたくしが林檎をくふ場合を例にとるならば、それはわたくしの表現であるよりも林檎の表現だ。わたくしが雲右衛門を聽いた場合を假定するならば、それはわたくしの表現であるよりも雲右衛門の表現だ。わたくしが啄木の短歌を讀む場合を例に使ふならば、それはわたくしの表現であるよりも、啄木の短歌の表現だ。啄木の表現だ。わたくしが服藥する場合を例に引くならば、それはわたくしの表現であるよりも藥の表現だ。アスピリンをのんで發汗するならば、それはわたくしの表現であるよりもアスピリンの表現であ　のだ。かやうに、消費は、直接にはその消費者の自己實現ではなく、その被消費物の自己實現だ。消費は消費する人の功績ではなく、消費されるもの、功績だ。消費されるときに、物の本質はそれだけ發揮される。人が本質を發揮する方法は、それゆゑに、消費されるにある。すなはち生産にある。なぜかといふに、生産の通　は被消費だ。

生産の概念と消費の概念とは、經濟學に專屬すべきではな　。すべての學に屬すべきだ。スピノーザは思想を生産した。ゲーテはそれを消費した。ゲーテは思想を生産した。カアライルは

それを消費した。マルクスは學説と確信を生産した。レーニンはそれを消費した。レントゲンはX光線の最初の學と術を生産した。現今の醫師と患者はその學と術の成果を消費する。檢事は告發を生産し、辯護士は辯護を生産し、判事は判決を生産する。母は愛を生産し、子供はそれを消費する。「仕事」はみな生産だ。「使用」はみな消費だ。

消費に於いては、消費されるものの特徴が發揮される。生産に於いては、生産する人の特徴が發揮される。一本の棒を、ペンを握つて引いてさへも、その引いた人が現はれる。西洋では印行の代はりに自筆で署名する。それでまちがひがおこらない。印行よりもたしかだ。白紙の上に墨の一線を不用意に生産してさへ、その人の獨特無類性が明らかに實現される。物の言ひかた、せりふ、たちゐふるまひ、しぐさのすゑずゑにも、名優ならずとも人は現はれる。「自作」は「創作」だ。「創作」は前例なく模倣なく、同時代の類同もない、絶對無條件の「唯一」だ。

「創作」は、それが偉大なる「創作」であればあるほど、追隨者は多い。けれども、いかなる追隨者も、偉大なる先例を、追隨者自身の個性を發揮するための機會として、助力として與得し、信用すべきであつて、その先例になることを目的とすべきではない。なぜかといふに、第一方法は眞實に可能だが、第二方法は眞實には不可能だ。

人は、自己の本質に忠實であることに最深、最高、最眞の興味を覺えるやうに出來てゐる。人は自己に忠實であるべきだ。各人は、能ふかぎり常に、能ふかぎり十分にかれ自身であるべきだ。かれ自身である悦びが、人の最大悦でなくてはならん。法悦といふいかがはしいことばを善意に解釋して使ふならば、かれ自身である狀態が、各人の法悦だ。かれ自身であることに比較的有能な人が人生觀上の達人だ。大人格はこれだ。正しい意味の宗教は、また道徳は、人に、かれ自身である必要の自覺と、その自覺の完成とを教へる力でなくてはならん。正しい意味の宗教は、また道徳は、それゆゑに、生産の原則だ。生産の原動力、指導力、内外力だ。神と良心とは、それの別名としてのみ有意義だ。

勞働運動とプロリテリアニズムが、生産者の名に於いて勃興し來たつたのも、思へば時代の進運だ。徒食の壯健者がゐごこちわるくなつたり、ゐられなくなつたりして來たのは、意義ある現象だ。生産せずに消費する一人も社會にあつてはならんのだ。幼者、病者、老者、これらは無論、生産の可能態、反意思的不可能態、既成態であるのだから、社會から優遇されねばならん。人の本質的原則としては、生産が第一必要事だ。生産第

一主義が要求されるのだ。

勞働も、事務も、研究も、隨つて勞働者も、役人も、學者や藝術家も、正しい意味に於いての法悦意識に於いてその勞働、事務、研究に從事すべきだ。それが不可能だとあれば、當人の自覺が不完全か、社會組織が不完全か、その兩者か、いづれかだ。消費を悦び、生産をいやがる狀態は超脱の餘地がある。消費を悦び、生産をそれ以上に悦ぶ狀態が、あるべき狀態だ。飮食、ものみ遊山はすきだが、仕事はきらひだといふ壯健者は、かれ自身を知らず、味はゝない。生きて生きないに等しい。消費は手段だ。生産が目的だ。上記の壯健者は、手段を目的とする。人は働らくために食ふべきだのに、かれは食ふために散歩し、運動し、生存する。自己の消費人に目さめて、自己の生産人に目ざめない。半覺醒だが、醒めた半分は全部手段で、眠る半分が目的の全部だから、價値に於いては殆んど全部の無覺醒だ。

教育は手段だと言ひ放つたら、怒る人があらう。しかし、教育は手段だ。人をして生産者たらしめる準備としての手段だ。小學から大學までの課程と生活は、人をして社會の一員、國家の一員、專門人、職業人としての有能者たらしめる素養だ。教育が手段だといふ思想は、現代人の實行だ。たゞその思想が、隨つてその實行が不完全なだけだ。各々を十分に教育せよ。各能に十分なる開發と訓練を與へよ。さすれば、その各人と各能は、仕事として、生産として、社會奉仕として結果するだらう。教育は手段だ。生産が目的だ。

各人の消費欲を滿足させよ。各人の消費的必要を目がけて十分に供給せよ。然らば各人は仕事の生産者となるだらう。有功に勞働しうるやうに、勞働者に衣食と知識をえさせよと言ひ放つたら、人格無視の暴論として非認されよう。しかし最深、最高の意義に於いては、生産は、社會の必要であるよりもさきに、生産者自身の本質的必要だから、各勞働者をして有功に仕事し、生産せしめるために、社會が、各勞働者をして十分に衣食し、教養せしめるとも、決して不都合ではない。機械に油を與へると同じ意義に於いて勞働者に賃銀を與へ、役人に俸給を與へ、藝術家に謝儀を與へることは、機械と勞働者と役人と藝術家の自身の目的を度外に置き、或ひは犧牲にして、それらを與へる人々だけの目的に用ゐるならば、邪惡だ。しかし、各人と各物の本質我の目的に忠實であることを一必要條件としての擧であるならば、それは正善だ。

心眼を拭ひて古今の大小個人を通觀すれば、かれらは、かれらのおの〳〵は、それだけの數の生産者として映眼する。われらがプレトーを想ふとき、先づ浮かぶ光景はかれの雄篇對話だ。

かれがなにを食つたか、きたかではない。いかなる人々から聴き、いかなる本を讀んだかでさへもない。ソクラテスの弟子であつたといふことが、われらがかれについての主要興味ではない。ソクラテスの弟子といふだけの興味でなら、われらは、プレトーの他にも人を求めうる。またソクラテスを想ふ場合ならば、かれがいかなる弟子を生産したかといふことは、立派にわれらの關心事となる。

個人の集團形式の一である民族や、國民についても、上述の原則はあてはまる。世界が日本を見る目は、生産者としての日本を焦點に置くべきだ。日本が、支那や印度の文明をいかに消費したかは、大問題ではない。日本が西洋文明をいかに消費したか、また今後消費するだらうかも、決して大問題ではない。日本はいかなる文明を生産したか、世界人類にとつていかに有益なる文明を生産したか、これだけが、これこそが世界の日本觀の要點でなくてはならん。東西文明の消化とか、融合とかいふやうなことは、たとひそれがどんなに完全に出來ようとも、朝暾の前の殘雪よりもはかない。日本人自身が口にし、筆にすべきほどの重大事でもなければ、光榮事でもない。經濟生活に於いても、生産が最高位に立つべきだ。分配と消費は生産の寄食だ。修繁だ。延長だ。餘澤だ。日本の國策も、消費本位であつては無論ならんが、分配本位であつてもならん。貿易や商業は分配の一方法だ。

アジア大陸の沿岸分配や、アメリカの生産をヨーロッパへ分配することなどに得意をもよほすやうではなさけない。原料開發主義、加工主義が濟的日本の核心でなくてはいけない。地代、配當、利息で徒食する人と與と階級とは、單なる消費者だ。かれらの存在は、生産者の自覺の發達につれて非存在に移される必然性を確實帶合する。さうなることは、生産者自身の幸福であるばかりでなく、實はかれら自身の幸福でもあるのだ。社會の幸福だ。

一人の生産は、直接にその一人によつて消費される必要があるかといふに、決してさうではない。なぜかといふに、各人は自分が消費することを目的として生産する必要をば、心理的にも、經濟的にも、社會的にも、眞實正當には、また理想的には、決して存しない。各人の個性は、聰明なる分勞制のもとに於いてこそ、於いてのみ、自己實現を可能にされるのだ。一人が、もしも社會の人口のすべてであるなら、その一人のすべての生産は、その一人の消費を必要とするかも知れん。けれども、一人が社會の全人口である場合は、通例ない。かれは、すくなくとも正常の社會人ではない。十年孤棲のツァラトゥッスツ

うでさへも、記憶と希望に於いては社會人であつた。鷲と蛇と太陽でさへ、多少友人の意味を帶んでゐた。はなしを實際に近よせるならば、今日及び明日の人類の身の上としては、高度の社會人はかれらの必具の屬性でもあり、本質的一大要部でもある。社會の發達は、分勞を方法とする協力の發達であるべきだが、かくの如き社會の發達は、各人の個性の實現の機會の增進だ。その機會の完備だ。

人は生産人と消費人とを、一人としての自己内に共生させてをる。その二人者間には、主從關係があつて、生産人は主位に生き、消費人は從位に生きるのだが、その生産人は、十分に生産すれば本質的滿足がえられるのだ。その生産を消費する人がだれであるかは、どうでもいいやうな問題であるのだ。自分または他人のだれかが十分に消費してくれる見込みと確信とさへあれば、やすんじて熱心に生産することができる。創作者は、その作品を自分で見直したり、讀み直したりする心理的必要をば有しない。わたくし自身のささやかな經驗を例にとつても、わたくしは、書きつぱなしの論文を割り合ひに多數に持つてゐる。それが雜誌にのり、讀みたい人は讀みうるやうに機會が準備されることを見越してゐれば、わたくし自身がその原稿なり、刊行なりを讀む必要は、多くの場合には、ないやうだ。わたくしは、單なる生産者であつて滿足ができるのだ。消費者がどこかにあることを信じえれば安心して生産に從事しうるのだ。このわたくしの心理は、萬人に共通な、平凡な心理であるに相違ない。

各人は、自己が消費すべきものをのみ生産すべきだとしたら、實に窮屈な生活だらう。また各人は、自己が生産するものをば、自己が消費しなくてはいけないとあつたら、これもたへられない負擔だらう。生産と消費とは、實は、各人内に於いてすでに分勞の必要があるのだ。社會に於ける生産と消費の分勞は、その必要の發表にほかならない。勿論分勞といへば、生産にのみあてはまるべきだが、ここでは、消費にも適用されるほどの廣義に用語したのだ。

各人は、自己消費を條件として自己生産する必要なきが如くに、もしも各人が、自己の生産したものをのみ消費すべきだとしたら、これも生存否定の原則に屬する。消費人は、消費世界の秩序に從つて自由に消費し、生産人は、生産世界の法則に從つて自由に生産すべきだ。さうでなくては、あまりに小經濟に惰する。小經濟は小生活だ。小生活は個性の否定目的だ。小生活を超脱することが個性の目的だ。

耳鼻咽喉の醫者は、耳鼻咽喉の疾患の治療の生産者ではあるが、齒の痛みや、入れ齒の必要に際しては消費者だ。かれは近

眼鏡の必要者としては、眼科醫の處方箋の生産に依賴する消費者だ。眼科醫も、眼鏡の處方箋の生産者ではあるが、眼鏡の生産者ではない。眼鏡はツァイスその他の工場の生産だ。生産者としての一人は、消費者としてのかれに比して、間口は限りもなく狭い。發達した社會に於ける發達した一人でかれがあればあるほどます〳〵さうだ。間口は狭いが、生産者としての一人は、三角塔の尖頂だ。レンズの焦點だ。消費者としてのかれは、間口は廣いが、狭い尖頂と焦點を目的とする廣さだ。それ自身に目的を有する廣さではない。消費は量だ。生産は質だ。古今の文人も、多く讀んですくなく書いた。多作といはれるほどの人々でも、それ以上に多讀であつた。生産はつく港のやうだ。消費は航路のやうだ。大事の用を帶んで旅行する人にとつて、着港は、狭い瞬時であらうとも、廣い永時の航路の目的だ。完成だ。自己實現だ。且つ、生産の大と、消費の大との間には、必然的關係がある。大生産は、大消費を缺くべからざる手段とする。ゲーテは非凡の才であつたらう。けれども、かれがもしあれほど博大なる學問修養を積まなかつたら、かれは、かれがなしたほどの生産をばなしえなかつたらう。大生産は大消費のあとを追ふ。しかし、大消費は、大生産のあとを追ふといふ關係もある。大生産が供給されてこそ、大消費はできる。同じ文人でも、思想家でも、古今の大作に讀み浸る機會があるとないと、多いとすくないとによつて、かれの生産に大小の差が生ずる。ところが、生産も消費も、大であるためには、分勞を必要とする。一社會の各員が、内なる能力と、そとなる機會との特質を理解してその生産の種類を最も自己の本質と位置とに適當したものにすることが大生産に必要な方法だ。内外の本質的特異、すなはち本質的能力と必要とに立脚して各人の專門と職業は定めらるべきだ。各人は、社會が消費するすべての種類の價値の生産者たる義務を負ふべき理由はないのだが、これは、各人は自己が消費するすべての種類の價値の生産者たる義務を負ふべき理由がないことを同時に意味する。三萬人の人口の社會を假定するならば、三萬人の素人醫者を持つよりも、三人でもいいから、本職專門醫を持つ方が、三萬人のおの〳〵の幸福だ。その三人も、一人は内科、一人は外科、一人はまたそのほかの科の專門家であつてほしい。同じ内科も、呼吸器專門の人と、消化器專門の人とあつてほしい。專門家としての各人、職業家としての各人は、生産者としての各人だ。各人に於ける專門家以外の殘餘、職業家以外の殘餘は、要するに消費者としての各人だ。

人間が病氣や怪我の可能を有するかぎり、人間は治療の消費者だ。治療の生産者がなくてはこまる。生産者としての一内科

醫も、理學や、化學や、解剖學や、生理學や、植物學や、動物學や、組織學や、その他いろ〳〵の科學をある程度に消費する必要がある。かれがそれらの基礎科學、補助科學、關係科學を消費する程度は極めて高くはなからうが、それらの諸科學のおの〳〵の生産者にとつては、そのおの〳〵はかれのすべてを要求する。素人療治、素人建築、素人藝術が、人間が有しうるすべての療治、建築、藝術であるとしたら、人間の損失ではないか。文化の損失は、個性の損失の現象だ。實用も、裝飾も、文化内の一要素と、他要素だ。分勞制のもとに於いてでなければ、實用も、裝飾も、碌でもない程度の滿足をしか人間に與へない。

そも〳〵、分勞を否定するくらゐなら、個人が複數に存在する必要はない。なは山に柴刈れ、われは川に洗濯せんと手わけするところに、二人存在の意義もあるのだ。われもすこしは柴刈らふほどに、なもすこしは洗濯せよとて、お互に坂を昇降するならば、精力の浪費だ。兩人の損だ。筋勞は割りがわるい。讀書作文は割りがいいなどと考ふべき時代は、なが續きはしない筈だ。筋勞が人勞の一種であり、人勞は人のする生産の一種であることに人々の眼があいて來れば、筋勞は他からいやしまれる理由も、みづからいやしむ理由もなくなる。筋勞に最も適する人の數がどのくらゐであるかは、そのあかつきに分明する。

現代に於いては、筋勞の適者が腦勞に從事し、腦勞の適者が、幼にして筋勞に從事すべく限制される場合があまりに多い。生産者の解放は、この現制の整理を一先要事とする。

人の悅樂は、消費に於いてよりも生産に於いて深い。強い。大きい。一人が、もしもかれが生産すべきものを生産するならば、かれのいかなる悅びもこれに越す筈はない。一人が、最も多くかれ自身である悅びは、かれの發表にある。生産がかれの發表だ。春を機會として、梅櫻桃李 それぞれに自己を發表する。自己發表の悅びは 人のみの特權ではない。早く社會組織をして、及び社會道德をして、各人が、自己發表、自己實現の悅びを明確に目的として生活することを必要とし、可能にする性質のものに改まらしめよ。人が自己を知る唯一の機會も、自己を示す唯一の方法も、生産にあるとわかれば、衣食を目的として勞働する現狀をも、根本的に批評して、翻心に續く轉生に導かなくてはならん。

繰り返して唱へるが、生産は目的だ。消費は手段だ。生産が自己だ。消 は他人だ。人が最も多く自己であれば、かれは最も多く他人を益するのだ。社會奉仕も、人類愛も、生産者としての自己 集中するに限る。その自己は徹底的に一人の自己だから、適用的にいかなる團體の自己にてもありうる。

技術敎育の普及と技術博物館建設の急務

工學博士　佐藤功一

此水の濕度はどの位と問いた時に、言下に直ちに何度位と答へ得る青年が幾人あるであらうか。此の木の重さ何百匁あるかとたづねた時に其の大略の數なりと直ちに答へ得る者が何人あるだらうか。敎育ある若い家婦に、此のバケツに水が何升位入るかと尋ねて、その大體の量を言ひ當てる者が何人あるだらうか。今何時頃と問いて答へ得ぬ人はあるまい。併し此の家の前よりあの街の曲り角まで徒歩何時間の距離かと問ふて直ちに答へ得らるゝ者が何人ある。斯の如き事項は總て小學敎育を終つた者の常識でなければならない。然も今日中等敎育を受けつゝある者、或は之を終りたる者すらも、殆ど之等の常識を持つて居らぬのが現代日本の社會狀態である。

斯の如き有樣で國民敎育がよく徹底して居ると言へるだらうか。之等の不徹底は重に理科敎授の缺陷によるものである。而して兒童は斯の如く生活に最も必要にして然かも平凡なる智識の練磨を受くる事なくして比較的高級なる學問を注入せらるゝのである。しかも世人は之等の事項を殆ど當然の事として顧る者が尠い。斯の如くにして各小學校は之等根本を閑却したる方法によつてひたすらに高級の智識を有する卒業生を出す事に努めつゝあるのだ。之が主因は全く自校より中學校、高等女學校、實業學校等への入學者を多く出す事を誇らんが爲である。多くの小學校は今日、中學校其他への豫備校の如き物になつて居りはせぬか。尋常小學校の卒業生と中學其他上級學校への入學者との比は十一と一との割合になつて居る。（大正七年文部省摘要に據る）。然るに事實に於て、小學校の敎育が多くの場合中學其他に入學すると言ふ事を標準にして居るものとすれば、一人の爲に他の十人が犧牲に供せらるゝ譯で實に憂ふべき大問題と言はなければならない。

英吉利で道を問くと、國民の誰でもが之を右に曲つて二つ目を左へ何分間の距離だと言ふ事を直ちに答へる。日本人で斯う答へる者は殆どない。それは併し約何町と言ふ事は言ふ、此處

に兩國の國民教育の程度の差が見られるではないか。英吉利たとて時計の出來ない時代には約何ヤードと答へたに相異ない。之が時間を以て距離を示すやうになつたのは漸次に導かれた常識の向上である。日本に於ては斯の如く距離を時間で言ふ事はまだ一般常識になつて居ない。

今度は中學教育について考察して見やう。若し中學の卒業生に一馬力の仕事はと問はゞ、言下或は、一分間に三萬三千ポンドの重さある物を一呎の高さに扛ぐる仕事なりと答へるだらう。又一キロワツトの電力はと問はゞ、一ヴオルトの電壓にて一アムペアの電流が通ずる時の電力を一ワツトと言ひ、其の千倍を一キロワツトと言ふ、そして一キロワツトは一・三四馬力に相當すると或は答へるだらう。それは彼等の學んだ物理書に其の通 記載してあるから。このやうにたゞ抽象的な數字を以て之等の問に應ずる人はあるだらう、併し乍ら、本當に具體的にしつかりと之等を體得して居るものは極めて少ない事だらう。然も斯の如き事項は、今日の社會に於て、中學教育受了者にとつては殆ど常識でなければならぬものであつて、私が今特に此の二つの例を茲に擧げたのは、此の樣な問題が到底數へ切れぬ程あり過ぎて、何を擧げるかに却つて困つたからして、其のため比較的特別な問題に關ゆるものを持つて來たといふ結果になつたかも知れぬ。

小學校の理科教育の不徹底は既に述べた通りだが、中學校がまた此のやうな狀態である。

今日の中學教育が斯くの如く殆ど此の常識的に知らなければならないものを閑却して、高等學校及び專門學校の入學者を多く出す爲に、却て難かしいものを教ゆる傾きのある事は獨 理科教育ばかりではないだらうが、私は理科教育に於て其の甚しきを見るのである。圖畫の教育がまた其の通りである。近來は殊に圖畫が感情教育の問題としてのみ取扱はれ勝ちである。されば一般の中等教育を受けた者の圖に對する觀念は甚だ貧弱なものであつて、簡單な圖面すら了解出來ぬ人が多い。

地理學に屬する地形圖の解し難きもの中々多しと言ふ事は嘗て耳にした所であるが、今例を工學圖に取りて、各種の工學圖の中で建築圖は最も簡單なものであるが、其の建築圖すらで解の出來る人が甚だ稀である。聽く所に依れば 近頃臺灣總督府で司法官が土木局に依賴して、建築圖の講習を つて貰つた事があるさうだ。これは司法官が何か事件のあつた時に、家宅に臨檢して れを記錄にとめる事や、また家 に關する圖面を諒解する事に智識を持たぬために、此の缺陷を補はんために企てられた事なのである。高等教育を受けたる司法官に於てさうで

ある。況や一般中學卒業者の斯の如き智識の缺乏せる事は驚くべきものである。

元來圖畫の教育は文章の教育と殆ど同程度の必要さを持つものである。なぜと言ふに紙上に於て物を說明するには其の方法は文章と圖畫とだけであゝからだ。（數學や物理化學の公式の如きも一種の圖式記載法に過ぎない。）若し讀書作文に美文や詩の如きもの丈け課したならば、人は必ず以ての外と言ふだらう。然るに圖畫の方は、多くは感情教育のものとして取扱はれて居るのを、人はあまりに怪しまない。

私は先に理科教育だの圖畫教育だのと言ふ名の下に議論をして來た。之は一般に了解をよからしめんが爲である。實は之等の教育を引きくるめて、テクニカルの教育と言ふのが一番よいのだ。英語のテクニカルと言ふ字は譯して何と言ふてよいか、或は專門的のとか、藝術的のとか、技術的とか、工藝的とか、技藝的とかいはれて居るやうだが、何れも適當な譯字でないやうに思ふ。テクニカル・エヂケイションなる文字が工業教育とか、實業教育とかよばれて居るが、これも適確な譯語でないやうだ。私は便宜此のテクニカルの譯字に技術的といふ字を用ひやう。

極くつまらない話であるが、私が嘗て倫敦の或る中流以下の子弟を教育する小學校を參觀した事があつたが、此の小學校に於ては此のテクニカルの教育に非常に力を盡して居るのであつて、參觀した時丁度圖學の教育法を見たが物差を用ひて色々の圖を畫かして、數の加減乘除をするのまで此の尺度を用ゐさせた。私はこれを見て甚だよい教育法だと思つた。

斯う言ふ樣な教育の下に育てられた國民が、我々の國民がテクニカルの上の特別智識だとして居る事を普通の常識だとして居る事は當然の事である。そして其高められた常識から出發する理學とか工學とかいふやうなものが、結局我々のものゝ上にある事は無理のない事である。成程學校の學科課程とか教授の學力とかの問題に於ては或は大差ないかも知れぬ。併し一般國民の平均智識には非常な相違がある。從て卓越した科學界の達人の孕ゝ彼に多くして我に少き事も亦止むを得ぬ事である。

家庭教育は學校教育と相伴はねばならぬと等しく、學校教育はまた社會教育と伴はねばならぬ。私の今茲にいふ社會教育といふのは、流動の形式を有して居る刊行物と、固定の形式を有して居る圖書館、博物館などを意味するのである。見かたに依つては前者を能働的、後者を受働的の機關ともいい得るだらう。現時の日本に於て前者は其の質の問題に於てこそ議論の餘地はあれ、量に於ては漸次に增加しつゝあつて、或種の定期刊

行物の如きは、其種類甚だ多きに過ぐるの觀がある。

「然らば受働的の社會教育機關たる圖書館博物館の如きはどうであるか、今日我國に於ては圖書館建設は先づ一般に普及しそして漸次に進歩を見つゝあるやうである。併し博物館の建設に付てはまだ甚だ劣つて居るやうに思ふ。これも英吉利の各市街地に於て見る事だが、どんな小さい市街地に於ても、街の或中心に、恰度、圖書館と博物館との一緒になつたやうな建物があつて、其市の歷史的遺物とか地質を構成する岩石とか、其他の天產物とか云ふやうなものがよく整理されて陳列されて居て、誰れでもそこに行けば自然に此の市の總てが解かるやうになつて居る。これは其の博物館だけの話だが、今も述べたやうに一方が博物館、一方が圖書館になつて居るので、多くはこれと大講演場とが一緒になつて此の三者で一つの完全した組織をなして居る、で此の建物が人口三四萬以上の町には大低あつたやうに記憶する、實にうらやましく、こういふよい國に育つ兒童は幸福だと思つた事だつた。しかもそれはもう十數年の昔の事だから、今ではもつと完備したものになつて居るだらう。現在の日本の比較的大きい都市をこれにくらべて見たとて、斯ういふ點ではとても脚元へも寄付けるものではない。

「博物館――ミウゼウムを博物館としたのは最惡の譯字の標本らしいが――博物館の立派な者は歐米の大都市には殆ど其市の最大なる誇りとして建設せられてある。そしてこれには歷史博物館や、美術館や、自然科學の博物館などあるが、其中でテクニカルの問題に關する博物館で最も完備した者と見たのは、ベルリンの交通博物館と、ロンドンのサウスケンシントンの科學博物館(サイエンス・ミウゼウム)とであつた。ベルリンのは名こそ交通博物館だが殆んど總ての陳列が交通に關する工學上のものと云ふてよい、ロンドンのがまた名は科學博物館(サイエンス・ミウゼウム)でありながら、同くテクニカル博物館(ミューゼウム)である。ロンドンのサウスケンシントンに於て帝國學會(インペリアル・インスチュート)を中心として一つところにロンドン大學と、音樂學校と科學專門學校(カレツヂ・オブ・サイエンス)と、科學博物館(サイエンス・ミューゼウム)と、博物學博物館(ナチユラル・ヒストリー・ミウゼウム)と、美術工藝博物館とが並んで居て、それ〴〵良い組織を有つて居るのは實にうらやましい、先達も一寸讀賣新聞に其の事を書いたが、此科學博物館に行くと、いろ〳〵な蒸汽機關とか電動機とか、其の他の諸機械類及びその模型が立派な組織の下に陳列されて居て、誰れでもが其處に行つて實驗することが許されて居る。小學校の小供すら、其處に行つて之れらの機械模型を自由に運轉してその智識を得る事が出來る。斯う云ふやうな家に育つた國民が高い科學的の常識を有つて居るのは當然の事で、其の狀態から出發して國民が新らしい問題に觸れて、これを直ちに了解する事の出

來るのは之れまた當然の事で、飛行器の進歩が急速に行き、操縦者が少ない事や、一朝事ある際に素人が蒸汽機關を運轉すると云ふやうな事は不思議はないのである。廣い立場から見たならば、教育上は於てあゝもし度い、こうもしたいといふ事は多い事だらふが、今日我が國に於て適切に最も必要であつてしかも最もおくれて居るのが、テクニカルの常識である。これを高める事が今日の普通教育上の最大急務である。それには先に述べたやうに一面には學校教育を改善するし同時に一面にはこれと相伴つて社會教育を進めなければならぬ。此の社會教育のは一方各定期刊行物其他の出版物の内容の充實をはかると同時に一方にはどうしても技術博物館（テクニカル・ミウゼーム）の建設を必要とする。比較的に論ずる事はむづかしいが、今の日本にとつては美術館などよりは此の方の建設の方が寧ろ急務ではなからうか。それだのに識者のこれに注意するものがなぜ少ないのだらう。聞く所によると軍備制限で本年度丈けでも二億圓の剰餘が出來るといふではないか、こういふ金をこれに當てたらどうだらう。

豫算はどうにでも立つ、それは其の程度に依つて組織を定め得られるからである。不完全な大きなものを建てるなら、小さくとも完備したものを建てるがよい。

若し國家事業としてやるなら少くとも三千坪の大きさは欲しい。假に坪八百圓の建物として建築工費が二百四拾萬圓、陳列物の價格を建築費と同じと假定してこれが二百四拾萬圓、合計四百八拾萬圓を要する。敷地はどこか明いて居る官有地を使ふ事にするものとして茲には計上しない。年々の維持費は充分に見積らねばなるまい、なぜといふに年々新設備を加へて時代遅れになつたものと差換て行かねばならぬだらうから。結局年々の維持費は百萬圓はいるだらう。年五分の計算として元金二千萬圓は積み立てゝ置く必要があるだらう。

以上の議論はもつと研究を進めてから筆を執る積りであつたのが、都合に依つて早く發表せなければならなくなつた。そのために止を得ずほんの腹稿だけを書き付けたのだ。精しくは他日改めて稿を起さうと思ふ。

改造論の一原理としての無過失責任

——岡松博士の長逝を悼みつゝ——

法學博士　牧野英一

簡單に例を擧げて出發點としよう。茲に强い動力を用ゐて居る或工業會社がある。其の蒸氣機關なり、電氣の裝置なりが、破裂其の他の事故を生じて、若干の勞働者を死傷に陷らしめた。會社は、其の機關なり裝置なりを設定し、維持するに何等の不注意がなかつた。今日の科學の命ずる所に從つて遺漏がなかつた。しかし、兎に角、其の事故に依つて、其の勞働者は其の不幸を見るに至つたのである。其の不幸に關して會社は如何なる義務を負ふものであらうか。

又其の會社が化學工業か何かに關するもので、其の煙突から毒瓦斯を發散せしめた。其の瓦斯は、空氣中に何千分の一、何萬分の一しか含まれて居ないので、其の影響は、鳥渡見ただけでは人の注意に上らない。しかし、何時のまにか近隣の田畑は大きな損害を受けた。恢復すべからざる損害をさへ受けた。此の場合に於て、其の會社は其の農民に對して如何なる義務を負ふものであらうか。

第一の問題に付ては、工場法第十五條に或程度の規定がある。曰く『職工自己の重大なる過失に依らずして業務上負傷し、疾病に罹り又は死亡したるときは工業主は勅令の定むる所に依り本人又は其の遺族を扶助すべし』と。なほ鑛業法第八十條にもおなじやうな規定がある。されば、其の不幸な勞働者に對しては、少くとも『扶助』が或程度まで全うされるわけであるが、さて、斯やうな場合に於ける扶助は、果して『扶助』と稱して差支ないものであらうか。企業者は、其の事業の性質上、當然に、其の不幸、其の損害に對し、賠償の義務がある筈なのではあるまいか。私は、扶助といふ其の語が、甚しく所謂溫情的に響くのを不滿足におもふのである。之を扶助といふも、又賠償といふも、其の實質に於て差異なしと言はば言へ、其の作用を企業者の慈惠に依るものと解するのと、理論上當然の責任だと解す

るのとの間には、少くとも思想上大きな差異があるし、其の差異は、法規乃至制度の今後の發達に對し、大きな影響のあるものと考へられるのである。

第二の問題に付ては、曾て判例があつた。曰く『化學工業に從事する會社其の他の者が、其の目的たる事業に因りて生ずることあるべき損害を豫防するが爲め、右事業の性質に從ひ相當なる設備を施したる以上は、偶々他の人に損害を被らしめたるも、之を以て不法行爲者として其の損害賠償の責に任ぜしむることを得ざるものとし、何となれば、斯る場合に在りては、右工業に從事する者に民法第七〇九條に所謂故意又は過失ありと謂ふことを得ざればなり』と(大正五年十二月二十二日大審院判決)。換言すれば、大審院は、斯の如き場合に於ても過失なき所には損害賠償の責任が發生しないとしたのであつた。しかり、其の企業者には不注意の責むべきものはない。しかし、其の特に不注意の責むべきものなしとしても、斯の如き企業を營みつつ、其の四隣に迷惑をかけることがそれ自體に於て責むべきではなからうか。斯の如き場合に於ては、其の企業の性質が、當然に賠償の責任を豫定するものではあるまいか。

企業責任――企業が内部に於て其の勞働者に對する責任及び外部に於て第三者に對する責任――は資本主義的な社會が新たにもたらした社會問題である。さうして、社會問題を法律的に考へつつあるものに向つて、相當に困難な、しかし相當に興味ある命題を提出したものと見ることができる。工場法や鑛業法の右の規定を見ると それは一つの立法問題とも言へる。しかし、化學工業會社の右の實例を考へると、現行法の解釋論として、また重要な意味のあるものである。私は、技術的な細かい法律論を茲で試みようと言ふのではない。專門的な法律論の豫定要件として、一つの思想問題としての企業責任を說いて見ようと思ふのである。

□

此の問題は、立法的にも解釋的にも、歐米に於ては既に相當に研究されて居る所である。我邦に於ては、二十年來二三の學者の論議に上つた所ではあるが、不幸にしてまだ十分世の注意を引くに至らなかつた。しかし、其の間に於て、吾人は岡松博士の大著『無過失損害賠償責任論』(大正五年)を持つて居る。博士の該博たる、廣く學說と立法例とを網羅して、此の問題に關する資料を整頓するに、先づ遺憾がない。私は、我學界が近く此の巨星を失つたことに付て、痛恨の情に堪へない。茲に、企業責任に關する理論の推移を考ふるに方り、私は、我學界の

誇たる此の大著に負ふ所多きを明かにし、博士の英靈に對して特に徹慕の意を致したいと思ふ。

博士は、法律上の責任が必しも過失に因るに限らないことを論じ、吾人の日常生活に於て既に幾多の無過失責任の事例あることを擧げ、更に延いて、最近企業責任問題を論じて居られるのである。博士は飽くまでも法律家としての態度を以て始終され、論議は主として分析的である。私は、其の分析的なるものの間に綜合を試み、思想の進化をたづねて見たいと思ふのである。

□

抑も、責任は過失を豫定する。玆に過失と稱するは其の廣義に於てするもの、即ち、故意及び不注意の兩者を包含する。過失即ち道德的に其の本人を非難すべきものの存することが、其の本人に對し責任を論ずる基本的要件であることは、必しも法律に限つたことでない。之を傳來的思想とする。さうして、玆に、民事責任即ち、損害賠償の義務に付て之を考ふるに、過失を其の基本要件とすることは、ローマ法が其の進化の目標とした所である。各國の法制は、此の點に於てローマ法を繼受し、我民法第七〇九條も亦、過失が民事責任の根源たることを規定して居るのである。

ローマ法に於ける民事責任は、其の進化の初期に於ては、要するに、加害の事實に對する無意識的反動に過ぎなかつたのである。丁度、小供が石につまづいたとき、怒つて其の石をうつといふのとおなじ心持で、損害を與へた人に向つて責任を問ふので、言はばそれは反射運動と相距ることのないものであつた。それが年代を經、進化を重ねて、結局、其の加害が過失に因る場合に於て初めて賠償義務があるといふことになつた。そこで、イエーリングは、其の有名な語『損害が賠償義務を生ずるのでなくして、責任がそれを生ずるのである』を以て、ローマ法の頂點を說くことになつたのである。斯くして人類の本能的報復が道德的意識を重ねて、責任に合理的基礎が全うされるやうになつた。即ち、法律的責任は同時に正義だとせられることになつたのである。

しかし、其の原則を以てしてはどうしても說明できぬ事のあることが、十九世紀の後半に於て特に明かになつて來た。それは外でもない、企業責任である。企業の經營に因つて發生する損害的事實は、企業者の過失に基かない場合が多いのであるが、しかし、其の損害の賠償を企業者に命ずることは、公平上、當然のことである。其の責任は、從來の正義の原則から見れば、

理論上之を説くことが困難であるにしても、公平といふ新らしい立場からは、實際上どうしても之を認めねばならぬのである。

十九世紀の過程に於て編纂せられた各國の民法は、其の體裁上、少くとも過失主義を原則として居る。無過失責任の理論は、法典の上では意識されて居ない。しかし、實際の必要からして、漸次に新らしい思想が現はれることになつた。或は先づ特別法としてそれが現はれた。それは主としてドイツに於て見た事例である。或は又、判例としてそれが現れた。それは主としてフランスに於て見た事例である。無過失責任、即ち所謂結果責任の自覺は、社會の裡に徐々に擡頭して來たのである。

□

先づ、此の新主義を認めることになつたのは、鐵道に關する責任問題である。鐵道に由來する損害、殊に死傷の結果に付き、企業者の責任を單に從來の過失主義に止めないで、更に之を加重することにしたのは、一八三八年十一月三日のプロイセンの法律であつた。一八六九年に至つてオーストリヤが之に倣ひ、一八七一年には之に關するドイツ帝國の法律ができ、一八七五年にはスイスも亦其の例を追ふことになつた。其の後、此の制度は諸國の模する所となり、其の適用の範圍も亦廣められて、單に死傷の結果のみならず、又ひとり鐵道事故のみならず、更に鑛業に、汽船業に、電氣業に、其の他の企業に及ぶことになつた。そこで、學説としては、企業の大なるものには當然に結果責任を認めねばならぬといふ考を生ずることになり、ドイツ民法制定の當時には、草案に對する議會の委員會に於て、又スイス債務法の改正に關しては一九〇三年のスイス法曹會に於て、それが論議されたことであつた。ハンガリヤでは、民法の草案ができて、其の中に(第一四九〇條)結果責任に關する一般規定がある。フランスでは、今なほ特別法がないが、しかし、其の彈力性に富める判例に依つて、實際上、殆ど企業一般に付き結果責任を認めることになつて居る。イギリスでも或程度までは既に立法がある、鐵道事故に關しては既にそれが明かに認められて居る。アメリカに於ては、比較的古くから、其の趣旨の判例を維持して居る例があるとのことである。

私は、茲で、鐵道責任に關する我大審院の一判例を擧げて置きたい。事件は、鐵道の汽罐車の煤煙が、停車場に接近し、鐵道線路より僅かに一間未滿の地點に生立し、其の枝條は線路の方向に張り出たる松樹を枯死せしめたといふのであつたが、大審院は過失主義に基きつつ、しかも、鐵道院に損害賠償の義務

を認めたのであつた。判例は、鐵道が『石炭を燃焼するの必要上、煤煙を附近に飛散せしむるは已むを得ざる所』なれば、『沿道の住民は共同生活の必要上之を認容せざるべからず。……従て、汽車進行中附近の草木等に普通飛散すべき煤煙に因り害を被らしむるも、被害者は其の賠償を請求することを得ざるものとす。然れども』本件のやうに、線路に近く立つて居る松の樹の如きは、『鐵道沿線に散在する樹木よりも甚しく煤煙の害を被むるべき位置に在りて、且其の害を豫防すべき方法なきに非ざるものなれば、『其の結果は、社會観念上、一般に認容すべきものと認めらるる範圍を超越したるものと謂ふべく、權利行使に關する適當なる方法を行ひたるものに非ざるものと解するを相當とす』る。それで、それは『過失に因り之を爲したる』もので『不法行爲成立する』ことになるのだとしたのである(大正八年三月三日大審院判決)。此の判決は、専門的立場からして大に研究批判を受くべき點のあるものであるが、兎に角、我判例は其の程度のものである。鑛毒問題なども、當然茲で聯想される性質のものである。

□

右は、企業が其の外部、即ち一般の他人に對して損害を生じた場合に關するものであるが、企業が、其の内部に於て、其の勞働者に損害を生じた場合、即ち所謂勞働災厄に關しては、又別様な發達を見ることができる。ドイツに於ては一八七一年の法律に於て此の場合に關し、過失證明の責任を轉倒した。一般には、損害賠償の請求を爲す者から、相手方の過失を證明してかからねばならぬのであるが、其の法律は、被害者に其の擧證責任を免じ、企業者に無過失抗辯を認めることにしたのである。即ち、原則として、勞働者は、當然、賠償請求權を有するのであるが、企業者は、ただ、自己が過失なかりし旨を證明することに依り、其の責任を免るることを得るのである。しかし之では、勞働者を保護するに十分でないと言ふので、ドイツは、問題の解決を更に公法の領域に移し、勞働者保險の方法に依つて、其の目的を達せんとすることになつた。一八八四年の災害保險法に端緒を發し、當初は單に工業に限られたのを、更に他の企業に擴張して一九〇九年七月五日の營業災害保險法と成し、更に一九一一年七月十九日の帝國保險法を制定するに至つて、疾病、老衰、其の他の各種の公共保險法が統一されることになつたのである。

フランスには、勞働災厄の損害賠償に關して特別法を有する。一八九八年四月九日の法律である。此の法律は初め工業に限ら

れたのであつたが、一九〇五年七月十八日及び一九〇六年四月十二日の兩度に改正されて、商業的企業に擴張せられ、更に場合に依つては、農業的勞働者及び家内被用者にも適用されることになつた。斯うして、此の法律は實に、企業者に明文を以て結果責任を命じたものであるのである。

此の法律の制定以前に於ても、フランスでは、判例を以て勞働者を救濟するに努めたものである。初めは、所謂契約說又は擔保說と稱せられるものに依つた。企業者は勞働者を雇入れるに方つて、災厄に付ての賠償を擔保したものと見るのである。しかし、此の考では、其の說明が事實に遠ざかつて居るのみならず、場合に依り、企業者が、其の雇傭契約に於て其の擔保義務を除外して居るときには、救濟が完うされ得なくなる。それで、之を契約上のものと見ないで、不法行爲上の問題とすることになつた。卽ち、企業者は、過失に依つて勞働者に損害を與へたのだと考へて行くことにしたのである。初めは、企業者に過失あることを推定し、ただ、企業者側に過失なきことを證明して責任を免るることを許して居たが、更に進んでは、企業者に其の無過失の抗辯をも許さないことにした。さて、既に過失を推定し、之に對して無過失抗辯を許さないことにするに於ては、其の企業責任は最早過失主義に依つては說明のできないものである。そこで、其の責任は營業上の危險に基くものであるといふ新理論を生じ、之が漸次に判例に認められるやうになつた。此の判例が先驅となつて、右の一八九八年の法律が制定されることになり、又其の法律が基礎となつて、其の精神が擴張され、所謂危險附責任論、卽ち危險のある所には責任が伴ふといふ理論が廣く認められることになつたのである。

□

我工場法第一五條や、鑛業法第八〇條は、まさしく此の結果責任の原則を認めたものと言はねばならぬ。此の如く、明文を以て此の責任を明かにしたことは種々の點に於て其の當を得たるものと思はれる。第一に、結果責任といふことは、法律的意識としては我邦にまだ十分明かなことでない。加之、解釋として之を主張することは必しも容易でないことになつて居るので、從て、之を明文に載せて其の趣旨を明かにすることは、結構なことと言はねばならぬ。斯くして其の賠償責任が慥かめられることである。第二に、我工場法施行令は、工場法の適用を規定して、賠償すべき額を明かにして居る。例へば、施行令第八條に、職工死亡したるときは、工業主は遺族に賃金百七十日分以上の遺族扶助料を支給すべきものとして居る。さて、斯や

うに賠償額が法令上明かに定められるとなると、賠償者の支拂能力が擔保せられることになる。若し單純に結果責任を認めることになると、其の賠償義務が時には際限ないことになつて、企業そのものが却つて危險に陷ることがあり得るのである。故に、豫め之を一定したと言ふも亦一應當然のことである。第三に、斯やうに結果責任が明文上認められることになると、公平觀念に對する吾人の無意識な法律的感想が玆に意識的なものになり、此の意識的なるものが基礎となつて、更に其の原理が適當に擴張されることになる。初めの間は、之を以て特別な法律であり、例外的な規定であるとするに止まるであらう。しかし、此の規定の合理的基礎が理解せられることになると、此の基礎の上に類推作用が働いて來る。さうして、工場法や鑛業法に包含されない場合に付いても、合理的に同視せらるべき場合に關しては、其の精神が適用されることにならうと思ふ。工場法や鑛業法が此の賠償義務を扶助と稱して居るのは、之を以て特別な例外的なものと見た趣旨にちがひない。しかし、其の制度の合理的基礎を論じ、それが、一種の賠償責任であること、其過失に因る責任とおなじものだ、といふことになつて來れば、其の精神は、其の規定を超えて廣い適用を見るに至るにちがひない。玆に、結果責任論の社會的意義が存立するのである。

□

結果的責任といふことが特に吾々の注意を引くに至つたのは新らしいことである。しかし、ローマ法を初め、其の影響を受けた各國の民法に於ても、結果責任といふことが全く看過されて居たわけではない。例へば、我民法第七一七條第一項に曰く『土地の工作物の設置又は保存に瑕疵あるに因りて他人に損害を生じたるときは、其の工作物の占有者は被害者に對して損害賠償の責に任ず。但、占有者が損害の發生を防止するに必要なる注意を爲したるときは、其の損害は所有者之を賠償することを要す』と。さうして、更に其の第二項に於て、右の規定は『竹木の栽植又は支持に瑕疵ある場合に之を準用す』るものとすとして居る。之をフランス民法に就て見ると、自己の管理する生命なき動産より生じたる損害に付き(フランス民法第一三八四條第一項)、自己の管理する動物より生じたる損害に付き(同法第一三八五條)、事業の爲め任用せる被用者の行爲より生じたる損害に付き(同法第一三八四條)、いづれも結果責任を認めて居る。なほ、問題となるは精神病者や小兒の加害行爲に關する責任である。我民法は之に關して結果責任を認めて居ないが、外國の立法例に於ては漸次之を認める傾になつて居る(ドイツ民法第

八二九條、スイス債務法第五四條第一項など參照）。其の外、擧げ來れば、いろいろの場合がある。

ひとり不法行爲に關する場合のみならず、轉じて、債務關係に付て之を見ても、結果責任の場合は、必しも少なくない。其の一二を擧げて見よう。例へば、賣買に於ける瑕疵擔保がそれである（民法第五六一條乃至第五六七條、第五七〇條第五五九條）。即ち、一つの物品を特定して其の賣買をした場合に於て、其の品物に隱れた瑕疵があるときには、賣主に於て其の瑕疵に付き責任を負はねばならぬ、といふやうなことになつて居る。又委任關係に付ても、受任者が委任事務を處理する爲め自己に過失なくして損害を受けたときは、委任者に對して賠償を請求することができるとなつて居る。之も委任者の過失の有無を問はないのであるから、結果責任の一つの場合である。民法に於ける其の他のいろいろな例は之を略して、更に商法の範圍に就て之を見ると、次のやうな例を見ることができる。商法第三五四條に曰く『旅店、飲食店、浴場其の他客の來集を目的とする場屋の主人は、客より寄託を受けたる物品の滅失又は毀損に付き、其の不可抗力に因りたることを證明するに非されば、損害賠償の責任を免るることを得ず』と。之は、普通の事變に付ては、過失の有無を問はず主人に於て責任を負はねばならぬとしたものである。其の他、結果責任に準じて考ふべきに、他人の過失に因る賠償責任である。例へば、運送契約に付き（商法第三二二條、第三三七條、第三五〇條）、客の來集を目的とする場屋に客の携帶したる物品に付き（商法第三五四條第二項）、倉庫業に付き（商法第三七六條）、又船舶に依る運送に付き（商法第五九二條、第六三九條）、共に主人は使用人の過失に付き、自己の過失の有無に論なく賠償の義務を負ふべき旨が規定されて居る。

さうして見ると、企業責任としての無過失責任こそ新らしい問題であれ、過失主義の從來の法制の下に於ても、結果責任は相當に認められて居る所と言はねばならぬ。是等の場合に於ける制度の精神を考へ、更に之を企業責任に付て論ずることになると、無過失責任は必しも、今更、驚異の眼を見はらねばならぬほどのものではないから…。

〔　〕

結果責任として玆に特に論せねばならぬことは、適法な行爲から生ずる賠償責任である。從來の考では、適法な行爲に賠償義務の伴ふといふことは想像され得ない所であつたのである。しかし、先づ手短かな例から此の點を考へて見よう。

刑法第三七條は緊急避難を規定して居る。自己又は他人の生命、身體、自由若くは財産に對する現在の危難を避けるが爲めに已むを得ずして爲したる行爲は罪とならぬのである。尤、之には制限が付してあつて、其の行爲より生じたる害が避けんとしたる害の程度を越えざることを要することになつて居る。此の制限のことは之を論外に置く。さて、右の緊急避難行爲は刑法上無罪である。しかし、必しも、それからして、其の行爲が賠償責任を引起さぬといふことは言へない。民法第七二〇條第二項は規定して、物より生じたる急迫の危難に對し其の物を毀損したる場合に付てのみ、賠償の義務なきことを規定して居る。そこで學者に依つては、民法第七二〇條第二項の場合の外、刑法第三七條に規定せられる場合は、すべて賠償責任のないものとして居るが、判例はさうは許さない。刑法第三七條の行爲と雖も、民法第七二〇條第二項に屬しないものは、賠償責任を引起すのだとして居る（大正三年十月二日大審院判決）。即ち、公益上の關係からは緊急避難を許すのであるけれども、其の避難行爲に因つて損害を受けた人の立場を考へて見ると、其の損害に對しては賠償せねばならぬと言ふのである。之に關しては、ドイツ民法第九〇四條に面白い規定がある。同條に依ると、人は、緊急避難として他人の所有物を毀損することが許されるのである。それに對して、其の物の所有者は忍容の義務を負擔する。即ち其の物をその毀損せらるがままにして置かねばならぬ。しかし、其の損害に對し、其の避難者に向つて賠償を請求することができるのである。既に物に付き忍容の義務ある場合に於てもしかく避難者に賠償義務を生ずるのであるから、物以上の利益例へば生命身體を害した場合に賠償義務があるのは當然である。即ち、緊急避難行爲は、一方、法律上許された行爲でありながら、他方、賠償義務を發生せしめるのである。スイス債務法第五二條第二項も緊急避難者に賠償義務あることを規定して居る。

適法なる行爲から賠償責任の發生することは他にもいろいろ例のあることとである。隣地關係（民法第二〇九條第二項、第二一二條、第二三二條）や、轉貸（第二四八條）や、請負や委任や（第六四一條、第六五一條）、其の他相殺や（第五〇七條）に關し、それを見るのであるが、煩はしいから略することにする。

さて、右の見地からするならば、企業責任も亦その中に加へて考へることができるものであらう。企業は固より許された行爲である。適法な行爲である。しかし、其の適法性は、必しもそれから賠償責任の發生することを妨げ得るものではないのである。

□

上に舉げた大正五年十二月二十二日の判決、即ち化學工業會社の毒瓦斯に關する判決では、大審院は、其の會社が、公の秩序善良の風俗に反する仕事をするのでないことと、其の毒瓦斯から生ずる損害の豫防に對し、事業の性質に從ひ相當な設備を施したこととの理由に依つて、農民の賠償請求權を排斥して居るのだが、それは、現代の經濟生活に於て、過失が最早唯一の責任原因でないとの顯著なる事實を看過したものであると考へる。過失主義は、過失なき所には不當な損害の發生せざることを豫定することに依つてのみ合理的なのであるが、現代の企業生活では過失がなくとも不當な損害が發生するのである。化學工業會社に過失がなくとも、其の毒瓦斯から生ずる農民の損害は決して法律生活の當然視すべき所ではないと考へる。若し、現代の科學的技術が完全に毒瓦斯を除去し得るものならば、其の技術を完うした所には即ち過失なき所には、損害の發生がない筈である。その場合には過失主義で問題が完全に解決し得られる。しかし、現代の技術はそれほど完全でない。しかも其の工業は公益上經濟上之を許さねばならぬとすれば、其の科學的技術の已むを得ない缺點に因つて生ずる農民の損害は、工業そのものに附隨する缺點として工業そのものが負擔せねばならぬものではなからうか。即ち、ここで問題になる責任の基本は、決して過失の有無ではないのである。大審院は、民法第七〇九條の過失主義を知るに止まり、現代の經濟生活に於ける大きな變遷を知らなかつたのである。

□

抑も、過失責任が、從來特に確實な合理的基礎の上に立つものとせられるのは、それが吾人の道德意識に符合するものとせられたからである。しかし、過失責任の外に、更に結果責任を認めることが實際上必要だとするならば、其の特に結果責任を認めねばならぬといふ立場からして、過失責任の原則を批判するといふ必要があらう。

さて、過失に依る責任は、過失が道德的に非難せらるべきものだといふの理由に基くのである。之からして所謂歸責といふ觀念が構成された。過失に因る行爲は其の行爲と其の人格との間に特別な聯鎖を成立せしめる。法律上道德上は、其の行爲を以てのみ其の者の行爲と見ることができる。といふのが其の思想である。

惟ふに、故意に基く責任が、同時に道德的責任であることは

言ふまでもない。しかし、狹義の過失、即ち不注意に因る責任に付ては、多少考察を要するものがある。何となれば、不注意に因る責任は、原則として法律の所謂善良なる管理者の注意に依り決せられるのである。即ち、注意深き一般人の注意を標準とし、其の注意を缺く場合に過失が成立するのである。されば、其の本人の實際上の注意能力は之を顧てない。從て、其の本人としては注意の能力を缺き、其の主觀的立場に於ては、其の行爲を其の本人に歸責せしめ得ない場合に於ても、なほ其の責任を問ふことになる。蓋、吾人の共同生活に於ては、各自が一定の注意を守るのでなければ、其の秩序を保持し、進歩を期待することができない。單に各自が其の現實の能力を盡すといふだけでは足りるものでない。從て、又、損害が、其の標準的注意を缺くことから發生するに於ては、吾人は、其の者に對し、其の損害に對する責任を問ふことを以て公平だと考へねばならぬ。さうすると、不注意に因る責任の基本は、行爲が法律上道德上其の者に歸し得るといふやうな個人的理由に存立するものではなくして、共同生活の圓滿公平を期するの社會的理由から理解せらるべきものである。

否、ひとり不注意に因る責任が共同生活の利益から考へらるべきに止まるものではない。故意そのものも亦同一の見地から論ぜらるべきものである。即ち第一に、吾人の共同生活上一定の注意義務を要求することが正當である以上、更に強き理由を以て、故意的加害を爲さざることを要求することができるわけである。又、第二に、既に不注意に因る損害は其の過失者をして負擔せしめることが公平なりとせられる以上、更に強き理由を以て、故意的加害者に對し、其の損害を負擔せしめることが公平である筈である。さうして見ると、過失主義の責任論を說明するには、歸責といふやうな、言はば形而上的な特別な觀念を借り來る必要はないので、ただ、吾人の共同生活上の必要と公平とを以て之を理解することができ、又之を以て十分とし得るのである。

過失主義は、從來、責任の基本を正義の上に置いたものだとされたのであるが、既に過失主義の根據を說いて、右の如く從來の正義論から現代の公平論に移すときには、其の公平といふ見地からして、過失の場合以外に責任を生ずる場合なきかを考ることができよう。即ち、過失責任を其の主觀的立場に於て理解することを避けるの結果、廣く更に客觀的に責任の基礎を理解せんとすることが、公平の觀念の當然の論結であらう。

蓋、從來の吾人の共同生活に於ては、一定の注意を守ることが其の安寧秩序を維持するに十分であつたのである。從て過失が責任の基本だとされたことは當然のことである。しかし、そ

れでもなほ、いろいろの理由から結果責任の認められねばならなかつたことは、上に述べた通りである。さうして、今や、現代の經濟生活に於て、生活事情が大に變動を受け、新たな企業其の他の現象が湧出した所を見ると、舊時、例外的に結果責任を認めたやうな事情が、漸次に增加して來て、必しも例外的現象でなくなつたのである。さて、是等の新事情は、一方に於ては共同生活の幸福を增大するものであるから、之を尊重せねばならぬのは當然であるが、他方に於ては、特別な損害を引起すの虞あるものである。其の利益を完うし、しかも、其の損害に對して救濟を與へんとするには、玆に其の利益をして其の損害を負擔せしめることが最も公平ではあるまいか。斯の如くにして、從來の生活に於ては、過失に因る責任のみが公平な責任を生ぜしめる場合だと考へられたのであるが、今日に於ては、過失以外に公平觀念の適用を見るべき場合が少くないのである。故に、此の點から見ると、結果責任は過失責任の例外と見るべきものではなくして、實は過失責任の原理を醇化した結果だと言ひ得られることになるのである。

既に、結果責任を以て責任の例外でないとするならば、企業責任も亦、民法の例外を爲すものと考へてはならない。企業に因る損害は、過失に因る損害ではないけれども、それが爲に責任を生じないものとは言ふことができぬ。過失は責任を生ずるけれども、責任の唯一の基本でない以上、企業に付ては其の損害の本質に就てそれに對する責任の有無乃至範圍が論ぜられねばならない筈であるのである。

□

玆に於て、少しく違法主義と稱せられる學說のことを述べて置きたい。違法とは法律の欲せざる所といふの意味である。一派の學者は責任の基本を過失といふ主觀的なものに求めることを避けて、之を行爲の違法性といふ客觀的なものに求めんとして居るのである。

違法には行爲の違法と狀態の違法とを區別することができる。違法な狀態とは、一定の狀態が法律の欲せざる所のものなることを意味する。其の狀態が過失に出づると否とを論じない。其の狀態は、それ自身に於て一種の責任を生ずるもので、例へば、妨害排除請求權の場合の如きがそれである。卽ち、玆に隣家の樹木が偶然の事情の爲めに私の所有地内へ倒れ込んだとしよう。私は、私の所有權の效力として、隣人に向ひ、其の妨害を排除することを請求することができる。此の場合に於て其の隣人には過失がない。故に其の隣人は不法行爲に基く損害の

賠償を請求せられることはない。しかし、其の物が其の違法な狀態を發生せしめて居る以上、其の違法を排除することに付て一種の責任を負はねばならぬ。之は私の所有權が隣人に對して有する効力なのである。さて、旣に違法な狀態が此の如く一種の責任を發生するものとする以上、違法なる行爲が又其の違法なるの點に於て、過失なきもなほ責任を發生するのは當然であらう。斯くて、不法行爲に因るの責任は、行爲が違法であるとの點に其の基本を求むべしとの主張を生じたのである。現にフランスの判例は、其民法に於ける過失の語(第一三八二條)を違法の意味に解し、以て幾多の事案を救濟して居る。フランスがドイツの如き特別法を制定することなくして、しかも克く時勢の要求に應じたのは其の斯の如き解釋のお陰である。さうして、上に述べた、我大正八年三月三日の判例も亦、鐵道の松樹枯死に對する責任を論ずるに方り、大に此の違法主義の口吻を用ゐて居るのは、よほど面白い。其の判例に於ては、大審院は違法と過失とを混同して居るやうに見えるのである。其の判決に曰く『權利の行使と雖も法律に於て認められたる適當の範圍に於て之を爲すことを要するものなれば、權利を行使する場合に於て故意又は過失に因り其の適當なる範圍を超越し失當なる方法を行ひたるが爲め他人の權利を侵害したるときは、侵害の程度に於て不法行爲成立す』と。しかもなほ引續いて、曰く『然らば其の適當なる範圍とは如何。凡そ社會的共同生活を爲す者の間に於ては、一人の行爲が他人に不利益を及ぼすことあるは免るべからざる所にして、此の場合に於て常に權利の侵害あるものと爲すべからず。其の他人は共同生活の必要上之を認容せざるべからざるなり。然れども其の行爲が社會觀念上被害者に於て認容すべからざるものと一般に認めらるる程度を越えたるときは、權利行使の適當なる範圍に在るものと云ふことを得ざるを以て、不法行爲と爲るものを解すると相當とす』と。其の說明の後段は、違法主義を採つたものと私には解せられるのである。其の前段は、違法主義と過失主義とを結合したものである。さうして、最後には、停車場に接近し、且鐵道線路より僅かに一間未滿の地に生立する松樹に對して煤煙を防ぐべき設備をしなかつたのを、或は權利行使の適當なる範圍を超越したものとし、或は過失あるものとして、鐵道院に賠償の責任を認めたのである。されば、判決の說明には、專門の立場から見て研究批判すべき餘地があるにしても、其の違法主義を認むることの著しいものがあるのは、よほど面白いのである。□

違法主義は過失主義に一歩を進めたものである。私はそれを以て完全な學說とは考へないが、しかし、其の暗示する所のものは甚だ大きいと思ふ。惟ふに、從來の過失主義は債務者主義である。過失なき以上は債務者（債權關係に付て言へば債務者だが、不法行爲に付て見れば、債務者たるべき者）に何等の責任をも認むることなく、全損害を債權者、即ち實際に損害を受けた者に負擔せしめるのである。しかし、債務者の引起した狀態が其の過失に基くものでなくとも、それが法律上所謂違法のものたる場合に於ては、其の違法なる狀態に因る損害を、ひとり其の債權者に於て負擔せねばならぬといふ理はない。寧ろ、其の損害は債務者に於て引受くべきではあるまいか。さうして見ると、行爲に因りて引起された損害的事實が法律の許容する所なりや否やに依つて其の行爲が不法行爲なりや否やを論ぜんとすることは、まことに一理ある所で、私は、過失主義の債務者主義なるに對して之を債權者主義だと言ひたいと思ふ。從來の過失主義は、責任の道義的意義、即ち正義を標榜することに依つて、單に債務者を保護せんとしたのに對し、此の新たな違法主義は、行爲の客觀的意義、即ち行爲が法律の目的に適合するや否やを論じて債權者を保護せんとするのである。これが、此の主義の大に暗示に富む所である。

しかし、之を債務者の方面から論ずるときは、過失なき其の行爲は以て債務者を非難するの理由とするには足りない。故に結局は、其の無過失狀態に於ける損害を以て、當事者間に公平に分配すべしといふことになりはすまいか。違法狀態の場合に於ける妨害排除の訴權は、單に其の妨害の排除を請求し得るに止まつて、其の損害の賠償に及ぶことがない。之は其の請求が、所謂物的訴權で、單に自己の所有權を主張するに止まり、他人に不法行爲を責めるものでないから、固より當然のことではあるが、しかし、此の場合に、此の請求が物的訴權に止まるといふ所に、事態をして公平ならしめるものがあるのではなからうか。しからば、違法行爲の場合でも、之を過失に因る不法行爲と全然同視するといふのは妥當でないやうである。故に、違法主義には、說いて全きを得ないものがあるやうに思はれる。

なほ、違法主義の缺點と思はれる所は、適法な行爲から生ずる賠償責任を說明することの困難なことである。さうして、企業責任はまさしく之に屬するものである。それで、學者に依つては、此の種の賠償責任を以て所謂責任の觀念に入らざるものとし、之を一般の責任問題から區別せねばならぬとして居る。惟ふに、若し賠償責任を以て法規の違反に對する制裁だと見るに於ては、之に責任の範圍に屬するものではなからう。しかし、

損害の分配を公平ならしめねばならぬといふ立場から之を論ずるならば、此の種の賠償問題と一般の責任問題とを區別すべき理由はない。一體、從來の責任思想は個人主義的な思想に基くものである。單に行爲の個人的立場に就て、其の個人の行爲を法律的道德的に評價するに止まる。さうして、其の論結として過失主義が唱道されることになるのである。之に對し違法主義は、其の眼界を稍擴大し、行爲者自身の外に、更に被害者の地位を考へたものであるが、しかも、なほ、單に違法を云爲するに止まるのは、個人的責任觀の範圍を出でないものである。吾人は、一般に、社會的に、公平といふ高い見地からして責任論をせねばならぬ。其の場合に、其の所謂『責任』は、之を責任と呼稱すること、或は用語の妥當を缺くものがあるかも知れない。責任といふ語は、傳統的背景を脫して居ないものであるから、寧ろ之は避けた方がいいかも知れない。しかし、一先づ、其の用語の論は之を別にしよう。兎も角、從來の傳統的な思想から離れ、事實として發生した損害を、法律上何人に負擔せしめることが妥當であるかといふ點を考へるには、廣く、高く、社會的公平といふ見地から定めて行かねばならぬので、斯くして、吾人は、賠償問題を統一的に包括的に考へることができることになるのである。私は、賠償に責任たるそれと然らざるそれとの區別があるといふ見解には從ひ得ないのである。

□

賠償責任は、要するに、社會的公平といふ點から考へられねばならぬ。玆に於て、公平主義といふことが唱道されるのである。公平主義を別つて二つとする。其の一は公平原因主義で、其の二は公平分擔主義である。公平原因主義は、賠償責任の基本を公平に在りとするのである。過失責任と雖も、其の歸する所は公平責任に在るので、さうして、苟も公平觀念の要求する所たる以上は、過失以外にもなほ責任を認めねばならぬとするのである。之に對して公平分擔主義は、損害の負擔額を關係者間に公平に分配すべきものとし、殊に過失に因らない損害に付て主張せられる所である。此の兩說は相牽聯するもので、さうして、學者に依つては、此の區別を明白にしない者さへあるのである。

さて、此の學說は、解釋論としても、既に或程度まで認められて居る所である。何となれば、現行法上認めらるる結果責任の多くの場合は、過失主義の例外と考へられると同時に、その斯の如き例外が認められるのは、公平、正義、取引上の必要、公益などの理由に依るのだと說明されて居るからである。しかし、

斯やうな説明は、結果責任を以て責任の例外現象だとするものたるを出でないのであるが、學説としての公平主義は、過失責任と結果責任とを統一して理解せんとする所に其の新らしい特色があるのである。さうして、それは民事責任を以て、行爲者の『非難せらるべきこと』に其の基本を求めないで、別に、損害を社會的に公平に分擔せしめるの點に求むべしとする思想なのである。

抑も、從來の法律的觀念構成に於ては、すべてが論理的に明白であるといふことを要求して居る。此の思想と、過失主義が論理的であることと、裁判は法律を論理的に適用するのであるといふ三權分立の思想とが相結び付いて、過失主義の責任論が廣く法律上の公理とされ來つたのである。しかし、それが爲めに、法律論が極めて形式的なものとなり、同時に、吾人の道德的觀念及び常識と相背馳するものなることを免れないやうになつた。さあれ、法律の權威は規定の實質が吾人の道德的觀念及び常識と相合一する所に在るものと言はねばならぬ。さうして、從來の過失主義を以て個人主義的のものだとし、之を批判して更に新たに社會的立場に於て責任の根據を理解せんとすることになつて見ると、從來の論理主義はおのづから制限を受けねばならぬことにならう。斯くて、公の秩序善良の風俗とか、取引に於ける誠實などといふことが民法の基本的原則と理解されることになつた。さうして、其の一つの適用として公平主義といふことが主張されることになつて來たのである。是等の觀念は、其の論理的構成に於て甚だ明瞭を缺くものがあるのだが、それにも拘らず、今日では法律上の基本的原則とされることになつたのである。

論理主義から離れて、斯やうな一種の原則を採つて行くことは、二十世紀の法律論の特色である。しかし、少くとも之を責任論の公平主義に付て見ると、其の輪廓の甚だ明かならざるものあるを覺えざるを得ない。從て、それに基いて議論を法律的に構成することは、多くの場合に於て困難である。それで今日では、公平原因主義は、立法上暫く之を避け、單に公平分擔主義を採ることになつて居る。スイス民法は、結果責任を一つ一つ列擧して規定し、そのそれぞれに關し、其の損害の分擔即ち、賠償額の量定を、裁判官に於て公平の觀念に基き、妥當に定めることにして居る。我民法では過失相殺の規定があつて、損害の發生に付き賠償請求者にも過失があつたときは、賠償責任の有無及び賠償額の如何に付き、それを斟酌することになつて居るが、それは、公平主義の一つの適用を示したものである。

さて、立法上の原則としては、公平主義は完全なものと言はれぬにしても、思想上の原則としては、それはまことに妥當な原則である。さうして見ると、過失主義は最早責任論の原則でなくなり、又結果責任は責任の例外でないことになる。從來は民法第七〇九條の過失主義を原則とし、之に對して所謂反對論法を用ゐるのが法律家の常套手段であつた。即ち、過失なき損害事實に付ては、民法第七〇九條の反對解釋として責任なしと論斷することになつて居たのである。しかし、今日に於ては、それは反對論法の濫用である。過失なき損害事實に對しては、民法第七〇九條を離れ、別に、條理を案じて、責任の有無範圍を論ぜねばならなくなつたのである。さうして、民法第七一七條の工作物に關する結果責任などが、類推解釋に依つて擴大されねばならぬのである。殊に公平分擔主義は今後大に發展せしめられねばならぬ性質のものであると考へる。

□

玆で、私は、責任の原則として『富は債務を生ず』といふことを考へて置きたい。其の原則では、例へば、富者が群衆中貧者を銃殺したとしよう。其の場合に於て、其の富者に過失がなくとも、それに損害賠償の責任を認めるのが當然である、と言ふのである。又精神病者たる富者が貧者を殺傷したといふが如き場合に於ても亦おなじ、と言ふのである。其の論理的形式に於ては甚だ非合理的なもののやうであるが、しかし、其の實質に於ては甚だ常識的である。抑も、公平主義中、公平分擔主義では、關係者の財產狀態を大に斟酌せねばならぬことになるのであるが、それと同時に、貧者ならば責任の原因とならざる事實が富者ならば賠償義務を發生せしめるといふことも決して少くなからうと思ふ。從來の法律思想では、貧富の間の形式的平等が尊重されたけれども、最近の思想では、兩者の間に實質的公平を全うせんとするのである。其の公平觀念の適用として、富者に對しては其の富者なるの故を以て多くの義務を認めるといふことがあり得るのである。さうして、企業責任といふことも亦、企業の資本主義的結果を考慮することが、それを結果責任とする所以のものであると言はねばならぬ。されば、『富は債務を生ず』といふ語——之はブリユンチユリーの考へ出した語である——は、其の形式に於て甚だ妥當を缺くものがあつても、其の實質に於て大に暗示に富むものあることを認めねばならぬのである。

□

私は、企業責任に關する學說の變遷を說いて見よう。

第一に考へられたのは過失擬制主義である。之は、一定の企業を以て其の性質上當然に過失を伴ふものとするの主義である。此主義は或程度まで、ドイツ、フラスの判例に認められた所で、例へば、一八六一年四月十六日、ミュンヘンの控訴院は鐵道に關して『機關車を用ゆる鐵道の經營は、必然且常に過失的行動を伴ふものだ』としたのであつた。フランスに於ても、形式上は不法行爲に關する民法の規定を適用しながら、實際は過失推定の原則に依つて、事案に對し實際上公平な解決を與へた判例の多いことは顯著な事實である。しかし、理論としては、此の主義は不當である。先づ、抽象的に論じて企業が其の性質上過失を伴ふものとするのは不當である。若し、企業が其の性質上過失を伴ふものであるならば、其の企業が許されて居ることの理由を理解することはできないと考へる。それで、過失の有無は、具體的に各場合に付て論せねばならぬものである。次に、何故に過失を推定しながら、之に反證を許さないかと、いふ問題がある。過失を推定しながら之に反證を許さないといふのは、過失の名を借りて、實はそれを捨てたものである。卽ち、過失擬制主義は、傳統的思想の形式を維持しつゝ、新要求に無理に應化せんとしたものである。

第二に、右の說と相前後して擔保主義が考へられた。過失の有無に拘らず賠償の責に任ずるのは、默示の擔保契約があるとするのである。フランスに於ては、由來久しく、此の理論に依つて、企業災厄に關し勞働者を保護したことは、既に上に述べた。しかし、斯やうな理論は、單に、企業者と勞働者との間、卽ち、雇傭の關係ある間にのみ適用され得るに止まり、企業の外部に對する危險に付ては何等の効能のないものである。加之、企業者が、契約上、擔保義務を負はざる旨を明示した場合には其の適用がないことになる。之も旣に上に述べた。しかし、企業責任は、當事者の明示の反對意思などで左右せらるべき性質のものではない。其の責任は企業の本質に固く附着する公益的のものである。斯くして擔保主義も今は捨てられることになつた。

第三は、利益主義である。或學者は、『自己の利益は自己の危險なり』といふ原則を立てた（ウンガー）。之に同じて、他の學者は、『自己の利益の遂行の爲めにする活動が第三者の適法なる利益に對する危險を伴ふ場合に於ては、之に對して責任を負はねばならぬ』とした（メルケル）。要するに、一定の利益を目的として行動を爲す者は、其の行動より生じたる損害に對して責任を負はねばならぬ、と言ふのである。しかし、斯やうな說明

は極端である。何となれば、吾人は常に自身の利益を目的として行動するものであるから、若し、此の主義に從はんか、吾人は吾人の行動のすべてに付て責任を負はねばならぬことになるからである。それで、問題は、企業者の行動に對して被害者の利益の特に保護せらるべきことを、更に如何に適切に說くべきかに歸着した。

即ち、第四に、危險主義といふことが考へ出されたのである。蓋、近時の大企業はそれ自身に危險を包藏するものである。現代科學の命ずる最も周到なる注意を拂ふもなほ其の危險は之を免れ得ないのである。しかし、公益上、此の企業が許されねばならぬとするならば、此の企業は、其の固有な危險より生ずる損害を自ら負擔する條件の下に於てのみ、許されるとにならねばならぬ。若し、此の損害を度外視することが許されるとするならば、企業が公益上許されるといふ趣旨が沒却されることになると言はねばならぬ。畢竟、吾人の共同生活に於て、吾人の普通な行動と、普通でない（殊に强大な動力を用ゐる）行動とを區別し、此の普通でない行動に依つて利益を收める者は、同時に、其の行動に依つて他人に生ずべき損害を負擔せねばならぬといふことになるのである。

此の說は、一方に於て利益主義を醇化したものであると同時に、企業責任の範圍に於ける公平主義の適用を明かにしたものである。さうして、其の裡面には、「富は債務を生ず」といふ原則が著しく活躍して居るのである。――恐くは、此の學說も亦、研究を重ねれば缺點を露はすことになるであらう。しかし、さし當り、之が最も進步した思想であり、同時に、工場法や鑛業法の規定の基礎を說明しつゝ、豐富な擴大可能性を示して居る原理であるのである。

□

無過失責任にはいろいろた場合がある。さし當り、之を統一的に說明するには公平主義の外依るべきものが考へられぬ。しかし、公平主義は法律的原理として其の論理的構成が甚だ漠然だとするならば、結果責任は多元的に說明するの外はない。さうして企業責任に關する危險主義は、企業責任の結果責任たる所以を明かにするものとして、さし當り其の範圍に於て認められることにならう。

しかし、從來の過失主義に代つて公平主義を認めることは、そこに大きな思想の變遷がある。進化がある 私はそこに大きな文化的意味があることを考へねばならぬ。また、企業責任の危險主義は、單に企業責任の範圍に於てのみ主張されて居るも

のに過ぎないにしても、それは、結果責任といふことを特に當代の吾人に意識せしめた所以のものであるし、さうして、それが大きな社會的道德的意味を持つものであることも、恐くは又爭はれ得ない所であらう。

若し、玆に、私の信じて居る所を、忌憚なく述べることが許されるならば、私は、危險主義を以て、單に企業責任の根據を說明するに止まるべきものに非ずと考へる。しかし、それには、結果責任に關する種々の場合を列擧して論證せねばならぬ所に屬するから、玆では省かねばならぬ。又、私は、過失主義も、結局は危險主義の一つの適用に過ぎぬと考へる。故意又は不注意は、其結果たる損害に對して危險を創始するものであるので、從て其の責任は、其の創始した危險の本質に基くものだ、と考へるのである。之ヶ其の詳論は玆では避けよう。いづれにしても、危險主義は、今後の責任論に於て重要な地位を占むべき運命のものだ、と私は考へて居る。

さて、岡松博士は、其の大著の結論として次のやうに說いて居られる。博士は其の銳利な分析的な研究の結果として、責任の理論は統一することのできないものだとし、『果して總ての責任原因を網羅し得べき最高觀念を發見するを得ずとせば、先づ過失を以て一責任原因として之を認め少くとも半片の眞理として過失主義を維持せざるべからず』（第七二四頁）とし、次に結果責任に付ても『結果責任を認むべきや否やは種々なる事情に關聯し、從て成法上認められたる結果責任の根據も亦區々たり。之を或特定の理由の下に統括せんとするは不能』だとして居られるのである（第七二六頁）。之に對して、私は、法理研究會の席上、博士に向つて二つの質問を提出して見た。曰く、第一に責任乃至結果責任に關する多元的根據の間に一元的な或ものを認めんとするの努力は、責任乃至結果責任の本質上不能だと考へねばならぬものであらうか。第二に、其の多元的なものの間に基本的なものを抽出し、其の變遷と進化とを論じて見ることが果して意味なき仕事だらうかと。私は、岡松博士の大著に負ふことが大きい。しかし、右の二點に付ては、不幸にして博士と見解を異にせねばならなかつた。――しかし、斯の如き見解の差異は、固より、博士を悼むの心を、何等薄らがしめる所以のものではないのである。私は、又、玆に、博士の長逝に對し痛恨の意を繰返さねばならない。

□

臨時法制審議會は、今、我邦古來の淳風美俗に基いて民法の改正を爲さんとして居る。されば、道德と法律との其の連繫間

題に關して、此の無過失責任論は重要な社會的意味を持つものと言はねばならぬ。帝議會が、古來の淳風美俗を云爲して、専ら歴史的根據に立たんとするは甚だよし、新らしき無過失責任論が、どれほど我民族的精神に基礎を持つかは、此際特に研究されねばならぬ所に屬する。同時に、帝議會が當面の社會問題を考慮するに方つて、如何に無過失責任論を理解し、組織立て擴大して行かうとするかは、又深く注意すべき事項である。

遮莫、法律の技術的な問題は、之を法律家に委ねて置かう。結果責任に關する立法的技術は、其の專門家の仕事である。しかし、哲學としての無過失責任、思想としての結果責任は、先づ之を社會と共に考へねばならぬ。深く之を民衆と共に論定して置かねばならぬ。——（大正十一年一月二十日）

お斷り

前號に豫告せる**久米正雄氏**の**長編脚本**作者の都合により執筆中絶せる爲め本號に掲載する能はざりしは、深く讀者に謝する所也（編者しるす）

華府會議成績批判

國際無軍備と生產立國へ

杉森孝次郎

たに人も、華府會議に於ける日本の成績を立派だとは考へまい。ただ、同じくさう考へる人のなかにも、その結論に達する道路にはいろいろあらう。使節の任選がわるかつたと考へる人もあらう。わるい任選をした政府當局がわるかつたと考へる人もあらう。そんなわるい政府當局を當局にさせて置く國民がわるいのだと考へる人もあらう。あるひは、それほど他責的でなく、日本の現在の國力としては、日本の現在の國力を背景としては、使節も、首相その他の政府當局も、また現瞬時の國民だけについていふならば國民でさへもが、あれ以上に行ひかたもなかつたらうと考へる傾向の人もあらう。人々の智力と情性とによつて、同じ華府會議の成績に對する、ここでは狹く日本がわから見た成績だけについていうのだが、意見に多少の殊差は當然あらう。

しかし、およそ事物の判斷には、人々の主觀だけがはたらくわけでは勿論ない。眞理の客觀性がおの〳〵の判斷を判斷する。

使節のうちにも、比較的に有能者と、さうでなかつた人とあつたらう。大體に於いて、しかしながら、わたくしは、故原氏の外政能を高く評價しえない一人だ。かれの國際智能は、ほとんどないに等しかつたと、わたくしは多少久しい前から考へてゐる。オムスク政府を援助したときに、かれの外政無能は實に顯著に過ぎた。明白に退潮を進汐と見ちがへた形迹が隱せない。もしも、智識ではコルチヤツク絕望と知つてゐたが、周圍の事情が援助を餘儀なくしたのだと辯解する人があるならば、なぜ

故原氏はその際辭職しなかつたのかと問はざるをえない。西伯利出兵は、オムスク援助の別名だ。西伯利出兵の是非と成敗は、日本の首相たる人から見て、決して小さい問題ではない筈であつた。パリ會議への使節の任選にも、今度の華府への使節の任選にも、小なる日本の經略の雄が、いかに國際策にかけては晝間の梟のやうであつたかは、悲しくも痛酷に白狀された。

そもそも、國際公議に附すべき性質の軍備制限問題に、特に極東問題を釘づけにした米國の提請を、わが當局は、どれほど批判して見てから應諾したのであつたらう。日英同盟を廢川にして、米國入りの、恐らくは米國中心の新協約を作らうとするした心もあつての提請でもあつたらうから、そして日英同盟は極東に殊緣を持つてゐたから、かたがた極東問題を軍備制限問題と一束にしてあつかはうといふ便宜に想ひついたのかも知れんといふ解釋も立たぬではない。その他にも解釋の可能はいろいろにある。しかし、それならばそれで、公然、國際環視の正座に進みいでて、日本は、米國にむかつて、なぜ極東問題をこの際軍備制限問題と一束にしてあつかふのかと質問して見るがよかつたではないか。質問してえた答へが、腑に落ちなかつたら、理義を明らかに說いて國際理性にうつたへるがよかつたではないか。わたくしは、華府會議應諾の第一步に研究と批判の餘地をみとめる。

比率の六を七と爭つて見たのは、なんといつても、原案が先方の創始にかかつてゐたから、輕い爭ひであつた。淺い主張であつた。先方が六とでたから、七とせりあげて見たやうに想はれても赤くなつて辨解するほどの價値があるか、どうか。新聞紙の傳ふるところによれば、あだかも最後通牒的の帷幕で、六案を吞むか吞まぬかと、ふたつにひとつの返辭をせまられたといふが、この邊の消息は深く詮議すべきでないとして、大體の形勢が、ほぼそれに近い受け太刀ではなかつたかと想察される。

曾つてウイルソン氏は、具體案なしで國際聯盟創立會へ出席した。日本には、いかなる、またどれほどの具體案が、海軍協定に關してあつたのかは全く知らないが、とにかく、それを發表する機會はなかつたらしい。弱國の縮軍主張は、よほど誠實でないと却つて怪我になるに終はるから、突如として接請し、そして匆卒の間に應諾した日本としては、有効なるべき具體案の所持と、機會を作つての提唱とは、困難であつたとあきらめねばならんかも知れん。

日本は、國際軍備全廢の方途に努力をかさねるほかに、今度の海軍協定を誘因とし、結果として歡迎する可能を絕對的に有しない。十、十、六の協定は、十、十、七の協定に改まつたと

假定しても、それは國防の安全を意味しない。國防の安全は、零、零、零の協定を見るに及んで始めて全い。なぜかといふに十、十、六または十、十、七がそれぞれに代表する三國のうちの二國が合して殘りの一國に敵對する可能が絕無だとはなに人も斷言しえまい。日本が、久しく十、十、六の比率に信賴するやうな、薄弱な人道心をいだいてゐるならば、なさけない小國民だ。國際無軍備の精神狀態を創造する旅の一里塚とも、十、百、千里塚とも解釋することによつてのみ、日本は今度の比率に祝盃をあげべきだ。その國際無軍備の狀態は、早く造られるほど安全だ。一日のびれば、その間に魔がさす危險がある。

國民の成長力を保護する目的から考へても、十、十、それ以下といふやうな固定的比率をながく維持する方針は罪惡だ。十、十、十か、零、零、零かでなくてはいかんのだ。勿論、精確には零、零、零でなくてはいかんのだ。十、十、六の協定をば、日本人は、現實の日本の力の客觀的測度計として認識すべきだ。及び人類の文化力の現在の制限として認識すべきだ。超越すべき狀態として認識すべきだ。

四國協約は、從來の二國協約よりは、範圍が廣い點は進步だ。それから、物力的制裁をおもてに掲げない點も進步だ。殘る一要點は、四國協約自身のうちに眞の道義的自由互助の精神と實行を十分に創造し、保持して行く努力を忘れてはならんことだ。四國協約は、外間に對して私黨的であつてはならんと同時に、內輪に私黨的勢力を策成してもならん。

歷史的に考察すれば、華府會議は、國際聯盟の收獲だ。ウイルソン氏の失敗に鑑み、また氏の成功を追ひ越さんと欲した共和黨の衝動と覇圖は、さすがに現實黨の腕のすごさに隨はれた。一百一人の超議以來、常に光明面にむかつて絕對を欲し試みたる好漢ヤンキよ、いまはなんぢの日のでだ。人類は、理性であると同時に衝動であり、欲望であり、意思である一新例を、われらは華府會議の初・終に於いても見る。人類が衝動を失はぬだけは、事の多少の可否にかかはらずうれしい。衝動だにあらば、大衝動だに健在せば、形成は比較的に容易だ。地上一燃の平和災を、人類は近く經驗する必要がある。災とは、ここでは、平和をもたらすためにその賊を燒く火のたとへだ。

生產立國が、今後の日本の國策であるべきだ。國民は、一面に於いて經濟的生產に集中せよ。狹い國土のうちと、廣い國土のそととの兩區域に於いてだ。生產の良心と、聰明と、技術と、決意とを持つて所在に勞働せよ。到處に勤勉せよ。國民は、他面に於いて、すべての文化的生產に懸命の努力を捧げよ。人類文化を目的としてだ。鳥びとが、刀劍を鋤犁に鑄あらためて、

島のそとに奉公すべき時代が來た。日本人中の日本人であつた二宮金次郎は、隣家の鍬を借らうとしてこばまれ、隣家の畑を耕やさせて貰うてからそれを借りることに成功したといふやうな閲歴をかたつた。日本の方法はこれであるべきだ。日本は實に、持つべき鍬と、すくべき土を缺く。奉公の意思と能力が必要ではなからうか。

一、海軍協定は日本の意思であつたらう。一部の人々にとつては衝動ではなかつたかも知れんが、なほかつ意思とはなつた。十、十、六の比率は、算學上、二十對六の比率ともなりうる。善に勇む國民は、これを機會に、各國の攻擊力を等にし、自國の生產力を自國のすべてにする聖志に邁往する。自衛自途の原則は、この場合にも、利他奉公の一途に徹底するにある。

軍事上より見たる海軍協定

水野廣德

一　眞の平和は尚ほ遼遠

一時非常に順潮を以て進捗し昨年クリスマス迄には協定の成立を見るならんと報ぜられたる華府會議に於ける海軍制限協定も、其後各國政府に於て此の問題をば主として平和を目的とする政治的に折衝するの途に出でず、專ら戰爭を目的とする軍事的に解決せんと力めたるが爲め、中途に至り異論百出、紛議續發、純眞なるべき華府會議をして不純不淨化せしめたる憾がある。先づ最初日英米三國主力艦比率に對する日本の修正要求と、之に對する英米の抗拒とに依り、一抹の陰翳を軍縮案の上に投じ、遂に一旦決定したる根本精神を破却して、極めて不眞面目なる妥協的協定を成立せしめ、次に佛國の無思慮なる主力艦比率要求に依り、會議をして緣日的商賣化せしめ、最後に潜水艦問題に對する英佛の自說固執の爲め遂に行き詰まりとなり、補助艦問題は未解決の儘終了するに至つた。今日迄に於ける會議の道程を通觀するに、各國共に軍備制限に對する誠意の充實を缺けるの觀がある。一言にして之を評せば、英國の評論家ウエルズの言へる「自國に都合の好き如く他國の軍備を縮小せんと

す」る形跡が濃厚に現はれて居る。軍權と資本權とを背景とせる現代の各國政府なるものに對して、世界の平和、人類の幸福と云ふが如き高尙なる事業の完成を望むことが、或は根本的に誤つて居るのかも知れない。華盛頓會議の近況を見れば世界の眞の平和は尙ほ甚だ遼遠なるの感に堪へない。

二　兎も角も成功

軍備制限會議は政治的見地を主とし、軍事的見地を從とするにあらざれは、到底協定の成立を見ること困難なるは吾人當初よりの所見であつた。幸に主力軍艦に對しては各國共に略ぼ政治的見地に立ちたるが爲め、若干因循姑息の嫌はあるも、兎に角曲りなりに協定を成立せしむることが出來た。然るに補助艦艇問題に入るに及んで、各國共に軍事的見解を固執するに至りたるが爲め、遂に行き詰まりの立往生となり、最初脫兎の如くなりし軍縮會議の終をして處女の如くならしめんとして居る。素より之が原因は米國原案の不備不當に在るならんも、畫龍點睛を缺くの憾大なるものがある。併しながら補助艦問題不解決に終はるも、既に決定したる主力軍艦の協定をも破壞することはあるまい。若し然りとすれば軍事的には主として攻擊的性質を帶び、經濟的には最も多額の經費を要する主力軍艦の制限は一面に於ては戰爭の可能性を減少し、一面に於ては世界の經濟を善化することゝを得べく、殊に軍備制限の國際的協定は人類有史以來最初のレコードとして甚大の意義を有するものである。即ち過去幾世紀間軍備の競爭に依つて激成せられたる人間の好戰的敵愾心と武力的侵略慾とを消磨抑制する點に於て至大の精神的効果を有する。左れば華府會議は吾人の期待に副はざるもの多きも、其の功績と成果とは大なる賞讚に値するものがあると信ずる。

前述の如く軍備縮小制限會議は主として政治的見地に立つて協定することを必要とするとは云へ、苟くも軍備の存在を今日尙ほ必要と認むる以上、軍事的見解を全然無視する譯には行かない。米國提出のヒユーズ案と雖とも之が內容を仔細に研究すれば、軍事的見地に立脚せる點が尠なからず窺はれる。就中日本の七割修正案や、之に對する英米の聯合拒絕や、日本の陸奧復活に對する英米各二隻づゝの新艦建造の如きは、純然たる軍事的見解に基づけるものと言ふべきである。當初より政治的解決を希望したる吾人は、政府當局者と出先全權との裁量に信賴し成るべく專門的軍事上よりする具體的意見の發表を遠慮した。然るに今や主力軍艦の協定は既に確立し、補助艦艇は不解決に終りたるが爲め、最早や沈默を守るの必要時期を經過した。故

に此の立場に於て過去並に現在に於ける軍縮會議の徑路と成果とに就きて軍事上より見たる卑見を述べたいと思ふ。素より質施は難く批評は易い。吾人は獨り日本の全權のみならず、各國全權以下が自國と世界との間に立ちて協調を保たんが爲め努力したる苦心に對しては、深き同情と大なる敬意とを表するものである。敢て猥りに其の揚足を取り、死屍に鞭つて快とするものでもなければ、又徒に過去を穿つて死兒の齢を算ふる愚痴でもない。唯出來得る限り公平の地に立ちて評論を試みるに過ぎない。

三　日本としては利益

其の徑路に於て多少の不眞面目なる曲がり屈ねりありたりとは云へ、又其の結果に於て著しく不誠意なる姑息的彌縫策行はれたりとは云へ、日英米佛伊の五大國間に於ける主力軍艦制限協定の成立は、兎も角も華盛頓會議の産みたる一大成功物である。單に物質方面より見るも、今後十年間主力軍艦建造中止に依り、我が國は既定計畫の八八艦隊（長門陸奥を除き主力艦十四隻）の廢棄と補助艦不要との爲め、主力艦のみに於て約十五億圓の製艦費を輕減することを得べく、之に經常維持費を加ふれば二十億圓に達するであらう。製艦費の十五億圓のみにても現在に於ける我が國一個年の總歳出額にして、各種税金總額の二倍に相當して居る。故に此の經費全部を假りに減税に充當するとすれば、今後十年間各種税金の二割を減じ得べく、又之を敎育産業事業に轉用すれば、年額一億五千萬圓を支出することを得て、兒童の就學難も勞働者の失業問題も容易に解決緩和することが出來るであらう。而かも國防の點に於ては從來に比して特に著しき缺陷を生じたる譯でもない。海軍協定成立せざる場合に於て、米國海軍の三年計畫擴張の完成期たる大正十三年末に於ける日米海軍の比率は、米の十に對して我は六以下である。其の以後に於ても米國にして既に計畫中の第二次三年計畫を質施するに至れば、我は米の七割に達する爲めには八八艦隊を倘ほ一層擴張するの必要がある。是れ我が財力の堪へ得る處であらうか。加之海軍協定にして成立せざれば、米國は比律賓、グアムの防備擴張の自由を有するが故、之を難攻不落の堅砦と爲さば我が國防は著しく薄弱となるを免れない。此等の點より考ふれば主力艦の制限協定は、虚名に拘はれたる國家體面論は別とし、其の實質に於ては之を國家經濟の點より見るも、國防の點より見るも、我が國としては利する處頗る大なるのである。

四　薄弱なる七割案

如上の理由に依り、吾人は協定の成立其の事に對しては大に幸慶とする處であるが、成立に至る迄の會議の徑路と協定の內容に就きては甚だ遺憾とする點が多い。開會の當日米國全權ヒユーズ氏の提議したる海軍制限案なるものゝ綱領は

一、現在建造中のもの或は設計中の主力艦建造計畫は悉く之を廢棄すること、

二、更に老齡艦の廢艦處分を行つて一層の海軍縮小を行ふこと

三、主力艦の噸數を以て列國海軍力測定の基準とすること、

ヒユーズ氏は尙ほ之に附加するに日英米三國海軍の縮小制限に關する詳細なる具體案を發表し、三國主力艦の比率を英米各五、日本三と定め、且つ今後十年間主力艦の建造中止を提唱した。此の破天荒なる米國の提案は大體に於て世界的に歡迎せられ、越へて數日第二回會議に於て、英國全權バルフオーア氏は主力艦補充法並に補助艦艇に關する修正を留保し主力艦比率に贊成し、我が加藤全權は主力艦比率に關する修正を留保して米國案の趣旨に贊同の意を表したのである。世間或は米國案を以て豫め英米の妥協に依るものと說く人あるも、吾人は之を信ずべき證據も持たざれば、之を否定すべき材料も有しない、唯唯として之を聞き流すの外はない。

斯くて日本全權より提起せられたる修正案なるものが、國防の最小限度を標榜したる所謂七割案なるものである。抑も七割を以て國防の最少限度と爲す主張の根據が何れに在るやが、先づ議論の生ずる問題である。戰術上に於て七割を以て最少限度と爲すことは、畧ぼ我が海軍部內に於ける定說であるが、之とても唯單に經驗的研究に基礎せるもの、之を論理的に立證することは出來ないと思ふ。畢竟六割と云ひ、七割と云ひ、又八割と云ふも、人々の見解に屬する問題で、若し强ゐて主張すれば水掛論に終はらざるを得ない。加之太平洋上に在る米領諸島の防備問題は我が海軍力と密接の關係あるにも拘はらず、此の問題を度外視し單に海軍主力艦の比率のみを以て國防の最小限度と唱へたる點に於て他より疑はるゝ隙がある。果して國防の最小限度を盾にしたる七割案の主張を貫徹する能はず、太平洋の平和に大關係ある防備問題を根本的に解決するを得ず、得たる處のものは唯軍備制限に對する日本の誠意を外に疑はしめ、國防の安全を拋棄したりとの憂慮を國民に抱かしめたるのみである。是れ畢竟「減ずまい」主義に拘はれたる我が委員等が、周圍の事情と會議の空氣とを察せず、不撤底なる國防論を唯一の根據として盲目的に行キナリ七割案を提唱したたる失敗に因る

ものと云ふべく、之が爲め外に對しては日本の立場を不利ならしめ、内に對して海軍の立場を困難ならしむるに至つたのである。

假りに軍事専門家の意見を尊重し、七割を以て國防の最小限度と爲し之を主唱するにしても、軍備相對の原理に則り、我が力を増す代りに相手の力を減ずるの策を取らば、獨り我が意見を主張するに合理的なるのみならず、若し容れられずとするも軍備縮小に對する我が國の誠意を世界に表明することを得て、爾餘の問題に對する我が國の立場をして非常に有利ならしめたであらうと信ずる。軍事専門家が其の職に忠なるの餘り、又其の責任を感ずるの餘り、動もすれば軍事的見地に拘はれ、艦艇の減小を好まざるの傾向あるは諒とすべきも、多士濟々たる我が全權以下の政治家迄が、策此處に出でずして専門家の言に雷同したる觀あるは、我が國として返へす〳〵も遺憾の至りである。

五　不可解なる陸奥復活

七割案の容れられざるや、我が全權は更に戰艦陸奥の復活案を提起した。陸奥は米國に於ては之を未成艦と認め、戰艦比率の計算より除外したるものである。元來軍艦の既成未成の境協をば截然と決定するとは從來の制度に於ては甚だ不備である。從つて陸奥が既成艦であるか、將た未成艦であるかを法理的に説明することは不可能で、唯事實の上に於ける認定に過ぎない。大體に於て公試運轉が終れば既成艦と認むることが正當であらうと思ふ。故に若し我が國に於て陸奥を既成艦と主張するならば、此の點に對して關係諸國の承認を得ることが必要である。之を得る爲めには日本に在る各國代表者の判斷を求むるが如きも取るべき一の手段であつたであらう。既に陸奥が既成艦と認めらるれば我が國は正義を盾として堂々と之を主張し、米國の誤謬を正すことに於て何等躊躇する必要もなければ遠慮する必要も無い。之に反し若し陸奥が未成艦と斷定さるれば、既に一旦承認したる「建造中の主力軍艦は悉く之を廢棄す」と云ふ制限案の原則に照らし、涙を吞んで潔よく之を廢棄すべきである。國家の信用は陸奥の建造費七千萬圓とは代へられない。即ち陸奥の運命は既成艦として日本のみ之を單獨に活かすか、或は未成艦として日本に於て單獨に之を殺すか、二途其の一に出づる外は許されないのである。

然るに陸奥復活に關する協定の結果は如何？既成艦ともせず未成艦ともせず、之が解決を有耶無耶の間に葬り去り、更に新界定として、日本は陸奥を復活する代りに標準を廢棄し、米國

はデラウエヤ外一隻を廢棄する代りに目下建造中のワシントン及コロラドの完成を認め、英國はキングジョージ級四隻を廢棄して戰艦二隻の新造權を獲た。斯くて一旦確定した海軍制限原則の第一項は根本的に破壞せられ、眞摯誠實なるべき折角の協定を不淨化して仕舞つた。其の日本の頑眠に由るか、或は英米の横暴に由るかは知らねど、斯くの如きは誠意ある交議にあらずして小刀細工的妥合と云ふべく、神聖なる華府會議史上に一大汚點を印したるの謗を免れない。曲何れにあるかは別とし之が動因たりしものは陸奥である關係上、英米の新聞中には「日本の無理なる要求に依り多額の製艦費の負擔を據なくせらる」など、我が國に對する嫌や味を述べて居るものもある。

不眞面目にして不徹底なる苟合的妥協に依る陸奥の復活を以て　我が國民中には恰かも死兒の甦み返へりたるかの如く狂喜して居るものも尠くない樣である。陸奥の復活は我が國として果して夫程歡ぶべきことであるであらうか、或は國防上利する處があるであらうか、更に又日本に對して加へらるゝ外國の惡感を償ふに足るであらうか。國民の一人として軍事上より研究して見たいと思ふ。

六　陸奥案の軍事的研究

陸奥の復活に依つて我が國は戰艦攝津を廢棄した。即ち軍艦戰鬪力の最大要素たる大砲に於て攝津の十二吋砲十二門の代りに陸奥の十六吋砲八門を得、排水量に於て兩艦の差たる一萬三千噸を増した。之に對して米國は大砲に於て、十二吋砲二十門の代りに十六吋砲十六門を得、排水量に於て二萬五千噸を増加した。英國の新艦二隻は今後の設計に屬するもので其の要目全部尚ほ未詳である。故に新協定に依る日米兩國の勢力を比較すれば、排水量に於ては米國の一〇に對し日本の得たる所は五强にして、基本比率たる六割以下である。又砲力に於ては米國は十二吋砲二十門の代りに十六吋砲十六門を得たるに依り、我は攝津の十二吋砲十二門を失ひたる代りとして、十六吋砲九・六門を得るにあらざれば均衡が取れない勘定である。然るに日本の實際得たる處は陸奥の十六吋砲八門のみである。畢竟日本は陸奥復活の爲め、復活以前に比し米國海軍に對して十六吋砲一・六門丈劣勢となつた譯である。嚮には六割を以て國防上尚ほ不滿足なりとし、七割を要求したるものが、今や自ら求めて六割以下を以て滿足するに至りては、狙公の朝三暮四よりも尚ほ不可解なる心理である。西洋人が小供らしき日本人と笑ふも無理はない。

併しながら陸奥は速力に於て米の新艦よりも一節の優速を持

して居る。實際に於ては尙ほ以上との說もある。軍艦の速力も亦其の戰鬪力中の一大要素であるが、砲力との關係に於て如何なる比率を有するやは計算の標準がない。從ふて十六吋砲一・六門損失と、速力二節の利得とは、戰鬪力に於て何れが優れるやは斷定が出來ざるも、大體に於て損得互に相殺するものと見て大なる誤は無いであらうと思ふ。或は長門と對艦行動の利益を得たとの說があるか、知らぬが、新艦二隻を得たる米艦は、此の點に於ても、日本よりは大なる利益を得て居る。要するに陸奥の復活は軍事上より見れば何等の利益を有せぬものと信ずる。唯巨費を投じて折角建造したるものをば、使用せずして破壞することを惜しむと云ふ感情主義に過ぎない。

　更に之を國家經濟の點より考察するに、攝津と陸奥の交換に依り排水量に於て一萬三千噸を增加したる結果、乘員の給養と燃料其の他の消耗品に於て年額少くも五十萬圓の增加を來すであらう。此の金額は攝津の殘齡十一年間を通じ、國防上何等の利する處なくして每年不必要に支出せねばならぬ經費である。是れ陸奥と云ふ借金を背負つたが爲め、國民として當然支拂はねばならぬ利息金である。獨り我が國のみならず、英米國民に迄も新艦建造の爲め多額の經費を負擔せしめ、事情の眞相を知らぬ彼の國民をして誤解的に我が國を恨ましむるの結果を生じたのである。世に是程不自然なる不利益なる修正があるであらうか。而かも尙ほ滿悅歡喜せる國民を見るに至りては沙汰の限りである。

　華府會議に列席せる我が海軍々事委員は何れも部內に於ける錚々たる俊英揃で、吾人の平常畏敬信賴せる人々たるに拘はらず、斯くの如き不可解なる修正を敢てしたるは寧ろ怪訝に堪へぬ次第である。既成艦として陸奥の復活が、若し他國の無理壓迫に依り容れられずとせば、道理と正義の尊き犧牲として、我は陸奥を海低に沈むべきである。斯くてこそ公明正大なる日本の眞面目を世界に輝やかすことが出來たのである。然るに策此に出でず前記の如き損あつて得なき不徹底不可解なる協定に同意し、信を內外に失するに至りたるは、恐らく國內に於ける一部の感情論に誤まられたものであらうと思ふ。然りとすれば國民も亦其の責の一半を免れぬ處である。

七　不徹底なる防備問題

　太平洋に於ける防備の存廢は軍事上には海軍制限、政治上には太平洋平和と密接不可離の問題たるは、世間既に論議し盡されて居る。此等諸島の防備は之を政治的に見れば、日米兩國民の戰意を刺戟し、太平洋の平和を亂す有害物である。之を軍

事的に見れば日本の國防を不斷に脅かす危險物である。要するに太平洋に於ける日米間の、一大爭因たることは爭はれない。故に公平に評するも米國としては、海軍制限案と同時に此の問題に對する意思を表明すべきであつた。米國が此の擧に出でずして單に海軍制限案のみを提出したるは、米國の誠意の爲めに惜しむ處である。米國既に此の問題を提起せずとすれば、日本は海軍比率修正要求に先つて、或は遲くも之と同時に本問題の解決を講ずべきであつた。然るに日本も亦何故か此の問題に觸るゝことを避け、不徹底なる七割案の提出を急いだ此の間消息に關しては吾人何等の聞知する處がない、或は然るべき理由の存したのかも知らぬが、其の結果より見れば日本としては極めて愚計拙策と云ふべきである。初め七割案にして容れられず、次に陸奥の復活又困難なるとなるや、始めて防備問題を提出し、甚だ不感心なる陸奥修正案と交換的に左記協定を締約した。

日英米三國は各自主力艦の勢力比率として三、五、五を採用すると同時に、香港を加へたる太平洋方面に於ける要塞及海軍根據地に關し現狀維持を約定す。但し此の制限は布哇諸島、濠洲、新西蘭及日本本土を成す諸島並に米國、加奈太の沿岸に適用せらるゝことなく、此等に關しては當該各國に於て完全なる自由を保留す。

斯くの如く防備問題は「現狀維持」と云ふ極めて不徹底なる解決に終つた。是れ太平洋の平和を望む點より見るも、我が國防の安全を期する點より見るも、吾人の大に遺憾とする處である。我が國に極めて近き比律賓、グアムに於ける防備の現狀に關しては多く知る處なきも、是等の諸島にして多少なりと防備を有し戰時之を利用し得るとせば、我が國としては所謂臥榻の下に他人の鼾聲を聞くの感あるもので不斷の不安を免れない。而して是れ軍備擴張論者に對して絕好の口實を與ふるものである。

此の問題に對する吾人の希望は少くも比律賓、グアムに於ける完全なる撤廢と布哇に於ける現狀維持であつた。若し我が全權にして英米の聯合反對を冒して迄も、理想薄弱なる七割案を頑守せし勇氣を以て、最初より論理明確なる防備問題を提起せしならば、恐らく一層有利なる解決を見ることが出來たであらうと思ふ。若し米國にして應ぜざれば其の時初めて七割案を持ち出すも遲しとせず。八割說を持ち出すも無理とせず、縱令不幸にして全部破るとするも、現協定よりも不利に陷ゐることは斷じてあるまじく、而かも日本に對して注がれたる非難を米國の上に轉ぜしめ、我が國の立場をして有利ならしめたであらう。

八　現狀維持の解釋

太平洋諸島の防備撤廢は眞に我が國民一致の希望であつた。海軍移動兵力にして新協定の如く制限せられ、之に加ふるに此等諸島の防備にして撤廢せらるれば、日米戰爭の如きは兩國國民の念頭より全然消失するであらうと信ずる。日本海軍の移動兵力を自國の六割に制限したる以上、米國にして太平洋否な世界の平和に忠實ならば、此等諸島の防備を撤廢して誠意を我が國並に世界に表明すべきである。此の點に於て吾人は米國に對し甚だ慨然たるものがある。素より國防本位の軍事的見地より論ずれば布哇の防備撤廢は米國として大なる苦痛と危險たることを承認する。併し之とても平和を目的とする政治的方面より見れば、四國新協約の作動を利用せば武裝なくとも保護するの途は他にあると信ずる。斯の如き防備問題の不徹底解決は、其の因由或は米國の誠意乏しかりしに依るか、將た我が全權の努力足らざりしに依るか知らねど、新聞紙上に現はれたる處より推せば、日本全國民の要望せる此の問題に對する我が全權の態度は、七割案や陸奧案に對する固執力に比して遺憾ながら甚だ努力が足らざる樣である。見解の相違と云へば夫までゞあるが何となく不必要に勇にして必要に怯なりしの觀が無いでもない。

防備問題の細目に關しては今日尚未だ報道に接しない。抑も協約に言へる「現狀維持」とは單に陸上に於ける固定防禦のみを指するのであるか、或は海陸に於ける移動兵力をも含むのであるか、或は又船渠工場軍需品蓄積の如きも防備の中に屬するのであるか、之が解釋の如何に依つて協定の價値に大なる差異を生ずる。若し之を狹義に解釋して單に陸上に於ける砲臺要塞等の如き固定防禦にのみ限るとせば、「現狀維持」なる協定は大なる價値を有するものでない。現在施設に加ふるに優勢なる航空機、潜水艇、機械水雷等と、之を補修し養ずべき軍需品の蓄積あらば、相當有力たる海軍根據地として我を脅威することが出來る。之を以て吾人の望む防備撤廢とは戰時艦隊根據地として利用するに足るべき海陸一切の設備の撤廢を意味するものである。左れば「現狀維持」も亦此の意味に於ける現狀維持にして、唯單に陸上固定防禦のみでなく、海陸一切の軍事的施設を包含せんことを切望する。

防備問題を其の儘とし、最初英米海軍力に對し、七割を以て我が國防の最小限度と唱へたる軍事當局者は、今日に於ては比律賓、グアムの防備にして現狀維持に決する以上、六割にても可なりと說いて居る。此の點より推論すれば米國が太平洋諸島の防備を如何に嚴修するも、我は米の七割あれば足れりと云ふことになる。軍事上多少了解に苦しむ點あるも、此の問題に對

しては吾人は軍事當局者の言を信頼し、言議することを避けたいと思ふ。

九　不可解の補助艦問題

曲りなりにも進み來りし海軍制限會議も補助艦問題殊に潜水艦に對する英佛確執の爲め、遂に暗礁に乗り揚げて頓挫し、補助艦問題は不解決の儘にて、軍縮會議は將に終結せんとしつゝある。遺憾の至りと雖とも最初の出發點を誤りたるが爲め已むを得ざる次第である。

元來主力軍艦は大體の性質に於て攻撃的武力である。從つて戰爭の勃發を防ぐ爲めに此の種の軍艦に對して制限を加ふることは極めて有効なる手段である。而して其の制限を協定する爲めには國情國力に應じて適度の比率を定むることも亦手段として已むを得ざる處である。吾人は此の見地に於て主力艦比率主義を主張し且つ之を支持するものである。之に反し補助艦艇は大體の性質に於て防禦的武力である。防禦的武力は攻撃的武力の如く直に他國に對して挑戰を意味するものでない。併しながら縱令防禦的武力と雖ども之を無制限に放置する時は、自ら他國との武力競爭を惹起するの弊がある。武力競爭は戰爭の能否に拘はらず、互に敵愾心となり、反抗心となり、延ひて國際間の不和を招く虞がある。故に防禦的武力と雖ども或る程度の制限を加ふることは、單に世界平和の爲めのみならず、各國經濟の上に於ても大なる利害である。併しながら國家の防禦權は國の大小強弱に關せず絶對である。世界軍備の完全なる撤廢を見ざる限り、各國は厭や／＼ながらも軍備に依つて自國を防禦するの必要が存する。左れば軍備の競爭に依つて發生する危險なる戰爭を避けんが爲め、攻撃的武力を比率的に制限することは、便宜上已むを得ざる手段として承認するも、各國の防禦武力までも攻勢武力と同一比率を以て制限せんとするは策の正しきものでないと信ずる。殊に防禦武力は國情と地形とに從うて各國必要の物と度とを異にして居る。例へば國土防禦の爲め、多くの潜水艦を必要とする國もあれば、通商保護の爲め多くの巡洋艦を必要とする國もある、又之と反對の意味に於て潜水艦の廢止を望む國もあれば、航空母艦の廢止を利とする國もある。

之を以て米國提出の海軍制限案が、現在勢力を基礎として主力軍艦の比率を定めたるは、其の計算の方法に異論ありとするも、兎も角も比率算定の一方法として之を認むるの理由はある。併しながら補助艦艇迄も同一比率を適用せんと試みたるは聊か各國の國防を輕視したる嫌がある。是れ吾人が其の出發點を誤まれりといふ所以である。故に補助艦艇に對しては各國の國防

權を尊重し、各國の勢力噸數を均等に制限し、其の範圍內に於て各國の欲する艦種の建造を自由ならしむることが最も適當にして公平なる策である。而して之に加ふるに潜水艦、航空母艦の如き殘忍性を帶ぶる艦種に對しては、之を攻擊用に使用せざる如く其の建造要目並に使用方法等に適當なる制限を加ふれば更に一層妙である。佛國が主力軍艦に於て三十五萬噸の保有を提議したるは、余りに不眞面目、余りに非實際的にして誠意を缺きたる譏を免れざるも、補助艦艇に於て英國と同等の潜水艦保有を主張したるは軍事上より見て決して無理ではないと思ふ。之に反し英國が過去戰爭の苦き經驗に照らし、潜水艦の全廢を主張せる如きは、英國としては諒とすべき點あるも、聊か利己的に失する嫌がある。若し英國にして潜水艦を恐れ之が全廢を主張するならば、寧ろ海軍全廢を主張することが合理的である。殊に英國代表が潜水艦を以て攻擊的武器にして防禦的武器にあらずと論辯せる如きは、潜水艦存廢の是非は別論とするも、余りに目前の戰訓を無視したる言ではあるまいか。

　海外通商に依つて國民の衣食を支ふる英國が、商船の恐敵たる潜水艦を以て不利とすると等しく、都市建築の脆弱なる我が日本の最も不利とするものは航空母艦である。航空母艦は潜水艦よりも遙かに大なる攻擊的性質を帶ぶるものである。航空母艦に對して我が全權より如何なる交渉要求が爲されたかは明らかでない。然るに何時の間にか最初米國の提出したる原案よりも、何れも約七割を增して、英米は各十三萬五千噸、日本は八萬一千噸となり、軍備擴張が行はれて居る。國防の見地に於て此の種の軍艦こそ、自國の艦數の增すよりも、相手國の艦數の減することが利益なのである。何國の要求か知らねど日本としては有害なる修正である。

　之を要するに海軍制限協定は幾多の缺點と汚點とを存するも大體に於て、物質的にも、精神的にも、成功と稱するを得るであらう。吾人は事實を基礎として忌憚なき批評を爲したもの丶何人が局に當るも內は無理解なる國民の要求に制せられ、外は利己的なる外國の威力に壓せられ、日本としては或は是れ以上の成功を贏ち得ることは出來なかつたかも知れぬ。此の點に於て全權以下の努力を多とし且つ謝するに足ると思ふ。今後十年間に世界各國民殊に吾國民は偏狭なる國家我を棄てゝ國際協調の大精神を養ひ、造艦能力の衰退を憂ふる心を以て內外に於ける我が國の實情を考へ、以て次回會議に於ては尚ほ一層徹底的なる軍備の制限若くは撤廢に向つて進まんことを望むものである。（十一年一月十日）

宛として是れ被告の態度

文學博士　三宅雪嶺

華盛頓會議を形容して云へば、人間が神の眞似しようとし、眞似も思はしく行かず、形を成したか成さぬか位のものである。露國皇帝ニコラス二世が和蘭の海牙に催した平和會議は名ばかりで終り、世界戰役後交戰國が佛國ヴェルサイユで催した講和會議に附帶する國際聯盟は、幽かに實を示さうとし、尙ほ有名無實たるを免かれぬ。之に較べて華盛頓會議は何等か見るべき結果を齎したが、如何にも不出來であり、唯不出來ながら關係國に對して效力がある。初め發企者が理想を描いた頃、相應に立派であつたらうが、實現に取掛るに伴ひ、利害問題で摺つた揉んだの爭ひを起さずに居れなくなつた。理想から察する者は頻りに褒めようとし、實現した所のみを觀る者は、我利我利の鉢合せ、愛想が盡きると云ふを憚らぬ。何とかして永遠の平和を持ち來たさうとするのは、多少世界人類に眼を配る者の自づと考へ及ぶ所であるが、いよ〳〵着手する場合、自國の利益を標準にせずに居れなくなる。

米國が日英同盟を苦に病み、何とか之を撤廢しようとし、英國で米の感情を損ねるよりも日本に拵らへて貰はうとし、何か代りの協約を結ぶを欲し、四國協商となつたと云へば、米國の我、勝手に叶へるけれど、米自らは我儘勝手と思はず、日英同盟のやうなもので第三國を拘束するなど、世界の公道に照し不穩當と認めるであらう。それならば米國がそれ程世界公道に則つて居るかと云へば、さうでなく、他から觀れば隨分得手勝手の事をして居り、唯如何なるが世界の公道か、關係者に於いて解らぬのが少くない。日本の全權委員は何程まで世界の公道と云ふを考へたか。法廷に被告となつて出で、自身に最も有利な事を云はうとした位でないか。日本では日英同盟を以つて米國にも當りたく、さう行かぬので、甚だしく不利の地位に陷るまいと努めたと見える。初めから受身になり、如何に防禦すべきかと云ふが主になつて居り。それ丈には我が三名の委員が不適任と云へぬ。

然し米國でも他の關係國でも、世界の公道と云ふを疎かにせず、今一層深く考へて唱へるものあれば頭から之を拒絶し得べくもない。水掛け論になるかも知れぬが、さうばかりとも限らず、世界人類の幸福の爲めかく〳〵せねばならぬと筋道を立てゝ說き立てれば、反駁すべき道理を具へぬ限り、反省せねばならぬ。高い處から着眼するに於いて、我が委員は不得手であらう。斯かる事を考へた事なく、考へても力を留める氣にならず、向ふから持出して來る議論に對して、出來る丈け防禦しようとするのであつて、何程防禦し得たか、隨分巧く防禦したでないかと云ふ位に過ぎぬ。米が英と相談して掛かる所、高飛車にかゝつて頗る手剛く、それを何とか拔らつたと云へば、確かに御苦勞を謝せねばならぬ。

所で日本の立場は、受け答へるのみであるか、更に議論の根柢に立入り、全く立て直すの必要ないかと云ふに至り、望むべからざるを望むの始末となるであらうか。初めより受け身になる覺悟であつて、世界の公道と云ふが如きを、考へなんだ爲め、小商人の態度に出ようとする。斷じて枉げる事が出來ぬとの信念なく、之れ位負けても損になるまいと云ふやうな所で落付かうとする。海軍協定の如き、姑息不徹の方法であつて、小商人の懸合ひに似て居るが、日本で一つ踏切つて、更に大いに海軍を減ずる事を主張し得なかつたらうか。何の爲めの五五三か、陸奧一艘について米英が新に二艘を增さうなど、何より持出しの競爭か。競爭に躍氣になる所以の急所を抑へ、世界の公道に照し、斯かる事を爲し得るかと問ひ詰めることが出來ぬか。さういふ事をしては話が纏らず、日本一國か除け者になり、孤立に陷るの外無いと云ふのであらう。其故を以つて折合へる丈け折合つたのであらう。形の上で讓つても、實際に損失なければ其儘で濟むに如くはないとしたらう。小商人の商買で餘り損と云ふ程にならず、相手が相手であつて、之れ位で勘辨して貰はねばならぬと、聊か誇りに顏なつて歸らう。

倂し日本は必ず被告の位置に立たねばならぬか。何故に原告となり、世界の公道に照し、之に背くの行爲を責めることが出來ぬか。出來ぬのでなく、出來ぬと思ふのであり、寧ろ思はうともせず、其儘にして居るのでないか。米英佛とて、又其他とて、腹黑く底知らずに見えても、案外其程深くなく、當方より打つて出よう次第で、ガラリと向きが變つたりする。日清戰役後の露・獨・佛三國干涉の如き、日本で受身になり過ぎたのであつて、他にいくらも爲し樣があつたこと、後に知られた。米は他の四大國の富を倂せたのに優り、我儘勝手を働く樣でも、我儘勝手を意識せぬ所があり、之を意識させれば、させられぬと限らぬ。

他で機嫌を損ねまいとするので、我知らず勝手な事をするのでないか。

それにして海軍縮小、延いて陸軍縮小など、前に何處ででも敢てしなかつた所、今日曲りなりにも之を實行するやうになつたのは、アングロ・サクソン國の力と云へようか。競爭して軍備を擴張したのをば、互に協定して之を縮小するなど、永遠の平和に對し全く云ふの價値ないが、出來ぬこととなつて居つたことが、いくらか出來た丈け妙とせねばならぬ。一九二一年及び二年位に出來上る所、此の邊のものとせねばなるまい。人間の力が進むやうで、なか〳〵進まぬ。二十世紀の初め三國で五五三の協定をしたのはせい〴〵であつて、今世紀の終りまで更に何程か進むであらうか。千年二千年、飛んで行を度く思ふても、さうもならず、人間の不甲斐ないのを考へつゝ、之が人間と諦めねばならぬか。將來幾千年幾萬年、之を悉く現代に見ようとするのは、欲に過ぎるであらう。併しそれで全權委員が職務を果たし得たと安心するならば思ひ損ひである。

華府會議成績批判の標準

法學博士　吉野作造

○華府會議の成績に就いて成功、不成功の批評が新聞などにも論ぜられて居るが、今度の會議でも定めし矢釜敷い問題になる事であらう。併し成功、不成功と云ふも、何を標準として之れを論ずるのか此點が甚だ明瞭でない。

○或人は此前の巴里講和會議に比して今度は成功だと云ふ。各種の會議に於ける日本全權の手並は、此前の會議では頗る拙かつた。之れに比較すると今度の全權連中は先づ可成りよくやつたと云へる。無論十分滿足は出來ないが、併し今日の事情の下に於てあれ以上の人物を使臣として送ると云ふ事は一寸難かしい。此意味に於て今度の會議では、多少日本も面目を上げたこと云ひ得るかも知れない。が、併し之れ丈けで以て日本が賢明に今度の會議に成功したと云ふ事は出來ない。之れ多數の國民

が全權の人選に一部の滿足を表しつゝ、尙ほ全體の成績に就いては概して不成功を叫んで止まざる所以である。

○華府會議の不成功を說く者の中最も多く聞く說は、全權使臣が結局當初の主張を貫徹し得なかつたと云ふ事である。海軍協定の主力艦比率の問題にしても、四國協約の所謂、日本本土の解釋問題や、又防備制限區域問題にしても、讓步に讓步を重ね當初十を要求したものが結局せい〴〵七八を得るに止まつて居る。恁んな例は他の國にはない。日本獨り讓步せられたと云ふのが、丁度國民の眼には我々獨り損失を忍んだと云ふ風に見えるので、全權使臣の腑甲斐なきに憤慨すると云ふ譯なのである。之れも一應尤もではあるが、併し我々は全權の腰の弱いのを今更非難しても仕方がない、のみならず此問題は冷靜に考へて見ると、もう一段高い所から觀察して見る必要がなからうか。早い話が我々が友達と一緖に三越に買物に行つたとする、正札が附いて居るにも拘らず我輩獨り値切つて見たとする。負けて呉れる筈もないから、結局正札通りに買つて來た。此場合當初の主張を貫徹し得なかつたと云ふので、我輩獨り損をしたと云ふ譯には行くまい。尤も店に依つては正札なるもの丶怪しい場合もある。其時に値切らないのは無論損だ。であるから問題は第一にあの場合値切つて特別の要求を出したのが正しいかどうか、第二に値切るのが相當だとして其値切り方の程度が其當を得て居つたかどうか、第三に相當な値引をさせるために十分努力したかどうかと云ふ點に歸する。斯う問題を分けて冷靜に且つ愼重に本件のいきさつを見ると、我々は今度の會議に於て本來得べかりし物を特に失つたと見るべきかどうかの大體の見當は付くだらうと思ふ。

○當初の要求を貫かないのが惡いと云ふ說の中に、當方の要求の正否の議論を棚に上げて、只亞米利加の尻馬に乘つたのが癪に觸ると云ふ議論もある。此考への中には發議者たる亞米利加の提案其物が元來利己的なものだと見る考へもあるが、又之れ等、實質的內容までに入らずに、只譯もなく他國の提議に引き摺られて行くのが面白くないと云ふ立場もある。良い事でも、惡い事でも人のやつた事に附いて行くのが厭だと云ふやうな事は積極的に自家獨特の發案を出す丈けの獨立的見識を缺く者の稍々もすれば執る態度で、云はゞ痩せ犬の遠吠のやうなものである。亞米利加の發案だらうが、或は飛んでもない弱小國の發案だらうが、道理のある主張には悅んで從ふと云ふ雅量を我々は大國民の態度として持ちたいと思ふ。若し夫れ亞米利加の發案が實質的に彼れの利己的野心に出づるものであると云ふ說に至つては、公平に見て果して之れを適切に證明する事が出來る

かどうか。若し之れが立派に證明し得るものなら我々は他の參列諸國と共に忽ち之れを粉碎するに苦しまなかつた筈である。

○當初の主張を貫かないのが不可ないと云ふ主張の中で、所謂當初の主張其物に讓るべからざる價値があつたと見る考へは大に傾聽するの價値はある。之れを容易に讓るべからざるの根據と理由あつて、而も之れをオメ〳〵と讓つたと云ふなら之れは明白に失敗だ。只此際價値批判の標準を何處に置くかに就いては少しく眼界を廣くするの必要があると思ふ。そは此度の會合は世界の平和を一進すると云ふのが主たる目的である。之れが爲には一國のみの利益の多少犧牲に供せざるべからざるは止むを得ない。只今日の時勢に於ては犧牲の提供にも多少の制限なきを得ない。我々個人の生活に於ても公共事業に金を寄附するのを辭すべからざるが、併し社會が總ての人の生活を未だ確實に保障して居ない限り、總ての有てる物を投げ出すと云ふ譯には行かない。自家獨立の體面を維持する事と、世界全體の幸福の爲めに貢獻する所と、其間に適當な均衡を保つて行く處に政治家の手腕を恃むのである。斯う云ふ考へからすると我々の所謂當初の主張なるものは、日本と云ふ立場其物の利益の爲めであつた事は疑ひがないが、之れと同時に世界の平和の促進を妨げる底のものでなかつたかどうかを吟味しなければならない。假令日本其物の利益を若干犧牲に供しても、若し夫れが世界全體の平和と幸福とに頗る貢獻するものであつたなら、其犧牲を忍んだと云ふ事が即ち會議の目的から見て成功であつたと云はなければならない。何故なれば我々は多少の犧牲を忍ぶ　に依つて今度の會議に參加するに至つた高尚な目的の達成に大に貢獻する處あつたからである。而して斯くの如き犧牲を我日本獨り拂つたのでない事は云ふまでもない。予輩の此立場は今度の會議で日本の讓歩した者は皆正しいのだと具體的に主張するのではない。只抽象的に判斷の標準としては斯う云ふ立場も全然に置かなければならないと云ふ事を主張せんとするのである。

○ところが此立場に對して全然正反對の見地に立つ批判が可成り坊間に多いやうだ。兎に角日本の爲めに主張するのは少しでも餘計に主張すべきで、一點一劃の讓歩でも一切の讓歩は總て之れ失敗だと見るのである。之れに依つて他國がどう云ふ影響を受けやうが、又全體の空氣がどうならうが一向構はないと云ふのである。云はゞ國際的個人主義を極度に固執する態度だ。併し之れは今日の國際協働の精神と相容れないものである事は云ふを俟たない。國際會議など云ふものは表向き何と云つても皆慾と慾との競爭だと見るのが彼等の立場であるが、之れ等は丁度三越の正札だつて買ひやうに依つては負けない事もあるま

いとたかを括つて行く田舎者と同じ態度だ。斯う云ふ立場の甚だしき時代錯誤である事は屢々述べたから、今改めて論じない。つまり斯う云ふ考へで居る以上は到底我々は現時の國際關係に於て重要な積極的役目を働く事は出來ない。」

○我々は兎に角華府會議の招待に對して欣然快諾の意を表した。今更ら金持ちの寄附のやうにお付き合ひには出すが出來る丈け少く出さうと云ふやうなケチな態度は執り度くない。政府の考へはどうであつたか、又全權の手腕がどうであつたか、即ち此度の會議の成績に就き若し成功、不成功を論ぜんとならば、我々はどうしても次の標準を執る事を忘れてはならない。（一）會議の成績が果して世界平和の進歩に幾分でも貢獻したか。（二）之れに貢獻したとすれば斯くの如き結果の成立に就いて日本はどれ丈け積極的に貢獻したか。（三）此世界的目的と日本獨自の利害との調和は如何。全體の目的の爲めに餘りに獨自の利害を傷けるやうな事はなかつたか。又其反對に獨自の利益を過度に主張する事の結果今迄が進歩に悖るやうな事はなかつたか。獨り自ら悞らざりしのみならず、他國が同じやうな誤りを爲すものを十分に制したかどうか。而して之れ等の標準から考へて見ると此度の會議に於ける日本全權の活動は決して見事な成功と云ふやうな事は出來ない。が、只會議の成績其物に就いては大體に於て世界全體にも、又日本にも有利な効果を將來に持ち來すべきものだと信じて居る。



魔の様な力持つ
過酸化式の紅色化粧水

ゼピー罌粟の精

讀めたく！

『彼女の顔が近頃メッキリ色白く
綺麗になつたのは

罌粟は毒草であるが偉大な藥草である、『ゼピー罌粟の精』の此美しい紅した液はお手に入れるとスグ白く變つて透明に變化します。此不思議な白化は實に『精の魔力』とでも云ひましよう。此白化する瞬間に液が化學的變化を起して居るのですからお顔の表皮を白くしお白粉の乗りも保ちもよく殊に荒れ初める初秋から冬の化粧水とて評判の品です。近頃珍らしい發明として東京女子大學で指定を受けた化粧水です。

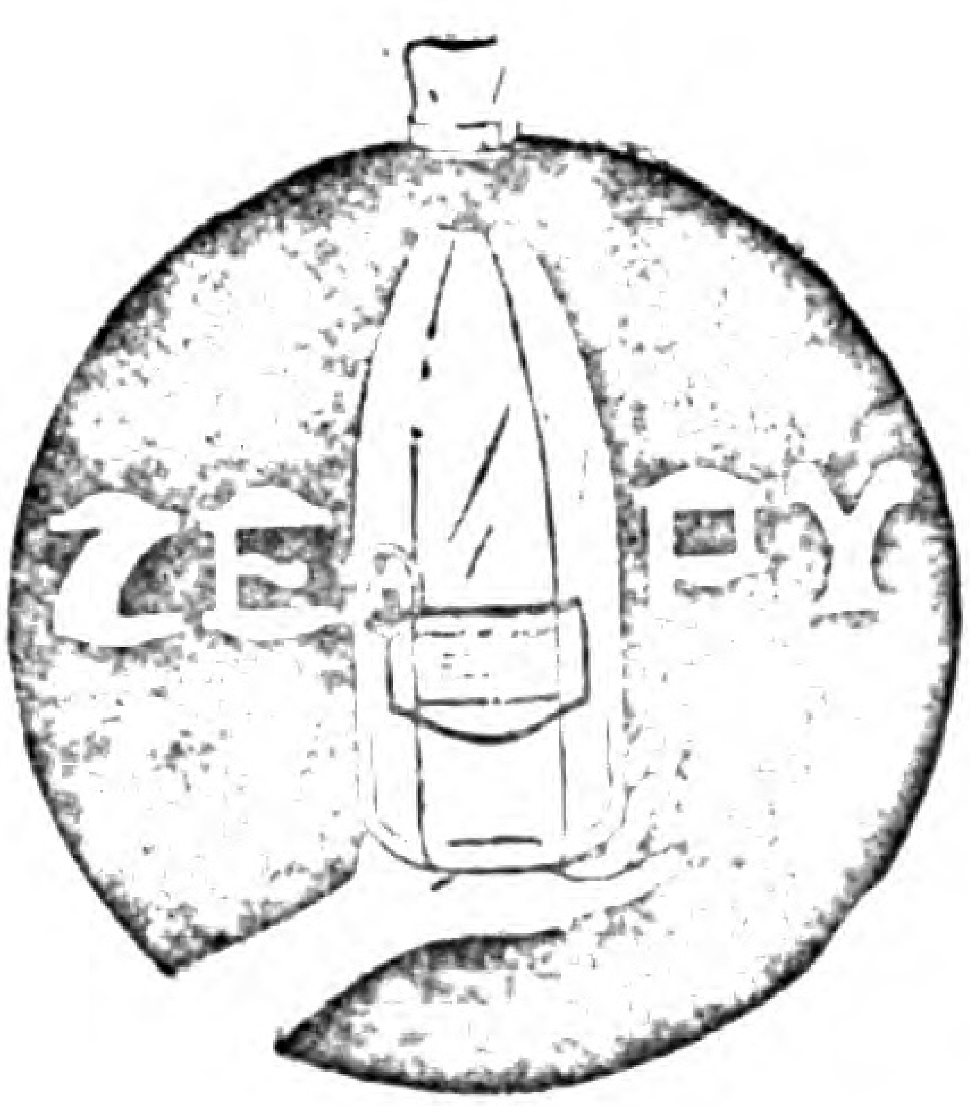


新美顏術 一冊
（七十頁の美本）
（二錢送れば呈上）

直 ゼピー一品五十錢
社 安いゼピーは不正品

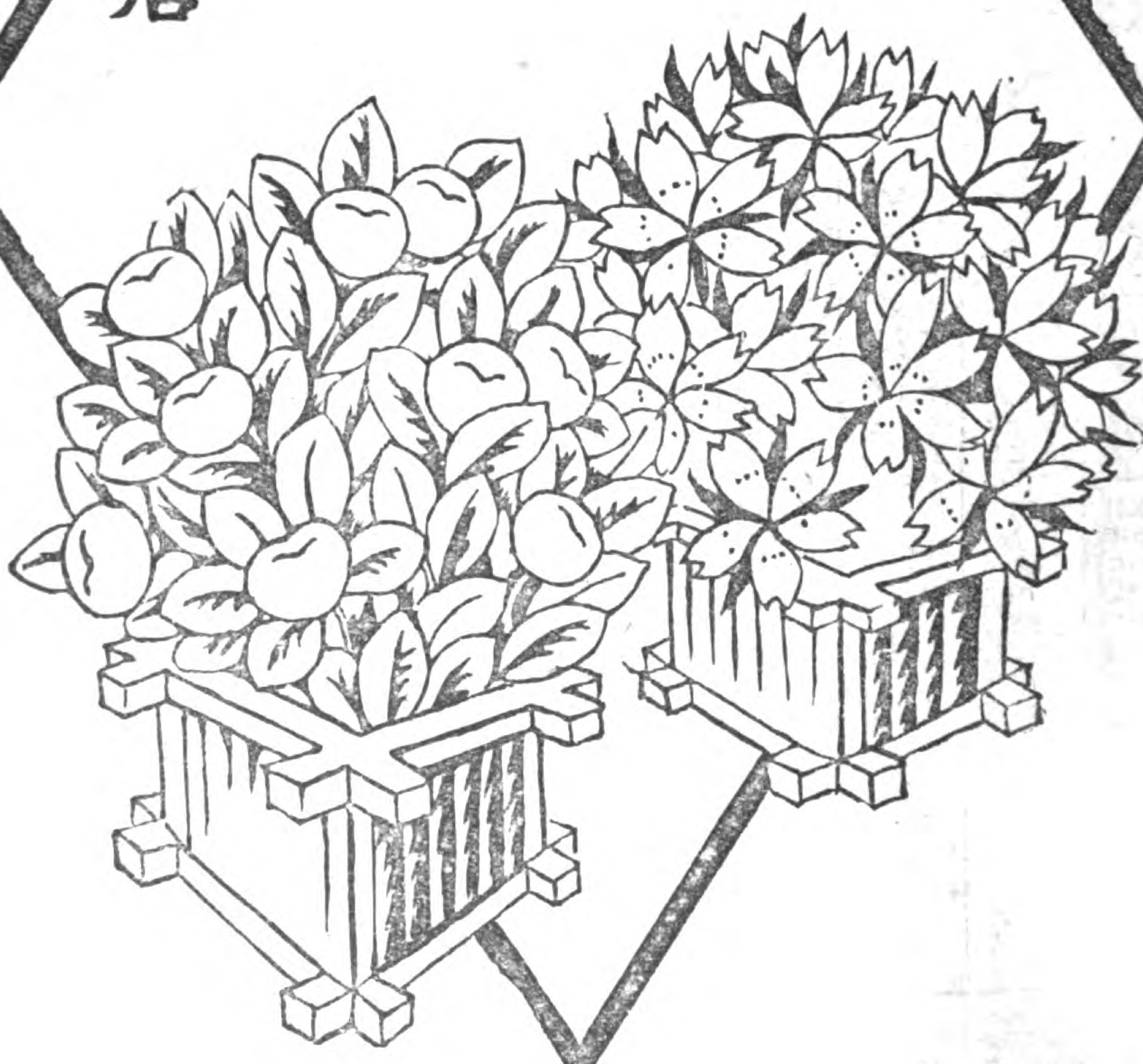
統一化粧料

ゼピー[illegible]洗粉
ゼピーシクレ
ゼピー化粧布
ゼピー液状白粉
ゼピー[illegible]色白粉
ゼピー緑色白粉
ゼピー純白白粉
ゼピー[illegible]白粉
ゼピー固形白粉
ゼピー十番香油
ピゼー紳士液



紐育ムアーヘッドジャデン社

大阪野村町
輸出入業 日光社



泰西名畫家傳叢書

毎編中判三百頁函入
代表作三十枚以上挿入

定價各冊金參圓
送料各拾貳錢

黒田重太郎著　(1) **ヴン・ゴォグ**
最も完備したるゴォグ傳。底本は當時の事情に精通せるチューレ氏のとゴォグの實妹クエスヌの回想記を參照せる苦心の大著也

佐久間政一著　(2) **セガンティニ**
世界無比の山岳畫家たる彼の生涯と藝術とを評述す。無限の哀詩を讀む如き其生活と藝術とは幽玄限りなき境に人を導く者あり。

岩崎貞澄譯　(3) **ティチアン**
百歳の長壽を享けて其晩年まで力作せる大畫人、ルネッサンス藝術の偉大なる作家、原本は獨逸クナックフスの世界的名著。

渡邊吉治著　(4) **ティントレット**
フロレンス派の莊嚴とヴエネス派の優麗とを綜合統一して其處に一新境地を展開したる此ノ畫家の面目と作品とを活寫せり。

田中喜作著　(5) **ルノアル**
セザンヌと共に現代世界の藝術を支配するものはル翁なり彼の不遇なる生立より世界の大作家として終るまでの生涯を評述せり。

相良徳三著　(6) **ラファエロ**
批評家ヴアサリは彼を評して「生きた神」と云つた、崇高、莊嚴、而して典雅、美しい天上的理想を生まれた作家の詩の如き生涯。

大隅爲三著　(7) **シャヴンヌ**
自然主義の盛時に現れて夫れに反抗し初期文藝復興期の精神の復活に力めた彼の詩的なる生涯を描く。壁畫の革命を成就したる藝術を見よ。

石川欽一郎著　(8) **コンスタブル**
彼の唱道したる寫生主義は印象派を生めり因襲と戰ひて新藝術の基礎を確立したる彼の一生は好個の立志談と云ふべきなり。

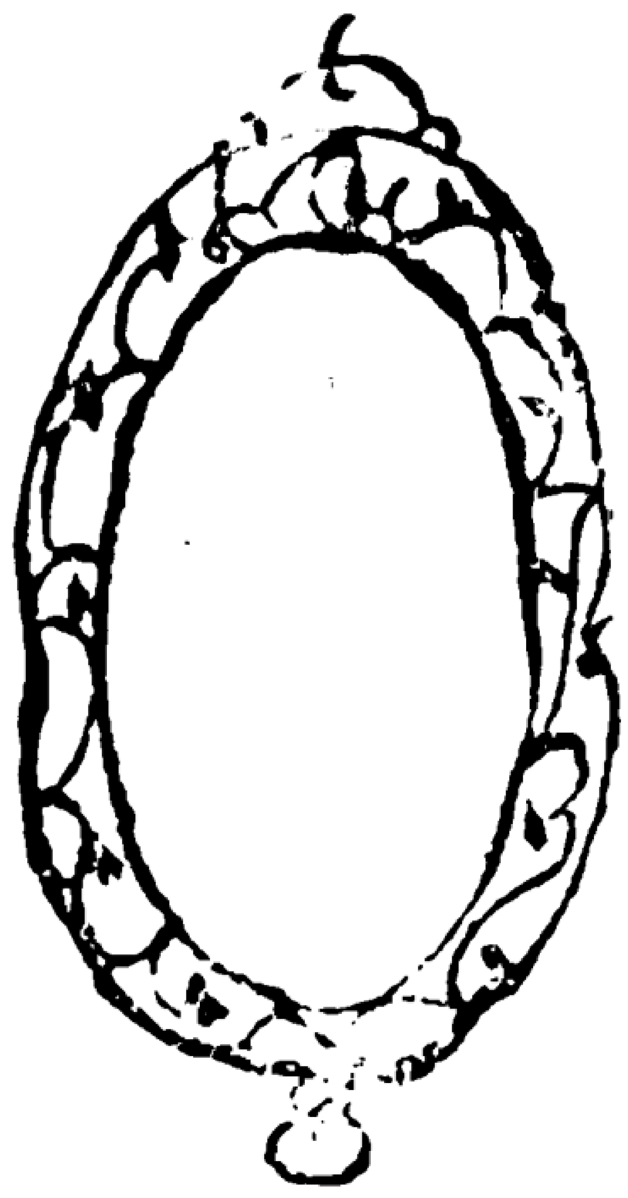
石井柏亭著　(9) **マネヱ**
彼の時からぬ生涯は守舊派と俗衆とに對する苦鬪なり彼はクールベエと共に腐汎なる寫化を近代の新調に飜へた世界の巨頭也。

足立源一郎著　(10) **ドオミヱ**
自然の生々しい本體へ復歸した畫家、鉛筆を以て人生を批評した大作家、彼の筆に成れるものは「人類動物の展觀である。

河野桐谷著　(11) **ジオット**
〔新刊〕
日本に於て幾多の渇仰者を有するジオットの代表的研究たる新著出づ近時美苑の傑作

東京本郷區湯島六丁目
日本美術學院
電話小石川三五一九
振替東京五八八六

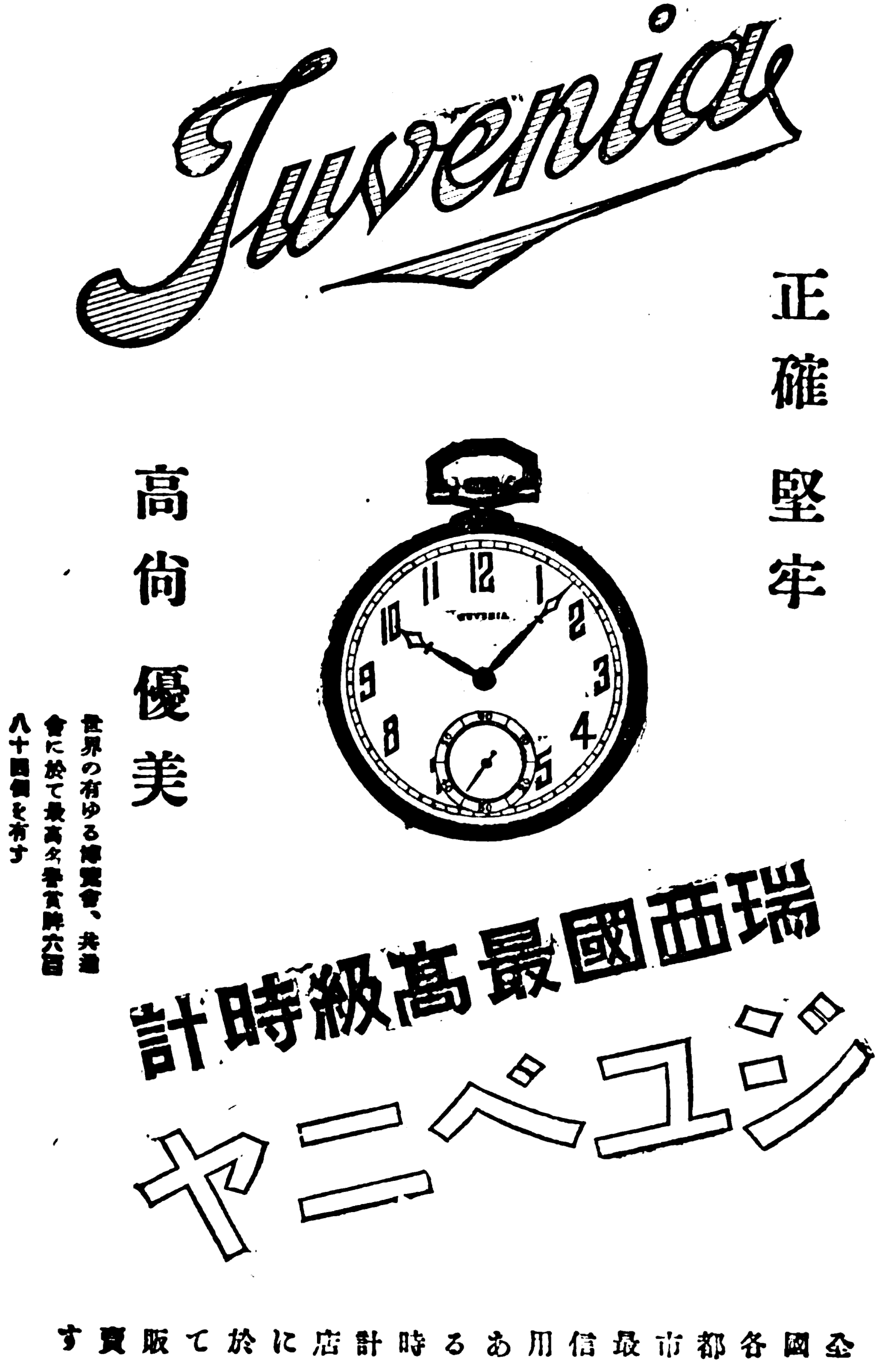
オイデルミン



オイデルミンはリスリン氣の化粧水で四時放すことの出來ぬ化粧水であります而しこれをつけたあと直ぐ濃い白粉をつけると多少崩れる恐がありますそれですから濃化粧の場合は**オイデルミン**をつけたあとを能く拭き更に**クリーム**を引いてから白粉をおつけにならなければなりませんこれと反對に薄化粧をなさる方は白粉をつけて後からこの**オイデルミン**で拭くと浮き出てゐる白粉がとれて丁度よい薄化粧が出來ます



銀座 資生堂化粧品部
大阪市東區南久寶寺町四丁目支店


Juvenia
正確堅牢
高尚優美
世界の有ゆる博覧會、共進會に於て最高名譽賞牌六百八十四個を有す
瑞西國最高級時計
ジユベニヤ
全國各都市最信用ある時計店に於て販賣す



ロシヤの過去と現在とは我々に何を教へるか？

小野俊一

『前車の覆轍を見て……云々』といふ諺もあるが、自分で親しくヤケドして見たあとでなければ、コドモには眞實に火の熱いことがわからない。――――『ロシヤの過去と現在とは、我々に何を教へるか？』まう一層言葉を砕いて云へば『過去及び現在を通じて、我々の隣人ロシヤが持つた經驗の中から、我々日本人は抑々何を學ぶ可きであるか？』といふ事に就いて筆者は、いま新たなる一ケ年を迎ふるに當つて、少しく讀者と一緒に玆で考へて見度いと思ふのであるが、其れは、或ひは、まるで益の無い企てゞあるのかも知れないのだ。

人には誰れにでも自惚れといふものがある。――「あやつ等は元來非常な大馬鹿だから、あゝ云ふ見つともない恥曝しをやりよつたのだけれども、此の俺達ならば、なあ――に……」と壯語して相變らず前途を極めて樂觀し、車の心棒を吟味するだけの勞をとることもなく、其のまゝ無責任に乘り進めて行かうとする連中もあれば、また他方には「あの人達でさへ首尾よく乘り越えて行つた道だもの、だうして此の己れ達にだつて越されぬ事があるものか……」と云つて、自分等の乘つてゐる車の構造、さては自分達自身の體質や力量などを少しも考慮に入るゝ事なく直ちに他の車の驥尾に附して、短距離ではあるかも知れぬが一旦乘り入れたが最後、容易に身動きもならぬ樣な沼地の道の方に車を向け樣とする人々もある。

いま現に車を馭しつゝある老いたる人々、或ひはまた彼れ等

に取つて代り、自ら馭者たらむと欲する若き人々、其れ等の人々の車を馭し進めむとする行動が、たとひ或る程度まで、上記の如き自惚れに起因するとしても、もし其れ以外に何等不純なる動機を含んでをらぬならば、さうして實際さう云ふ人々各自の胸の裡に理想の熱火が燃え、また、終ひに車を到達せしむ可き彼岸の目標がハツキリと刻み込まれてをるならば、事はまだ其れ程までに悲觀するには及ばないのだ――馭者の持つてゐた多少の自惚れの爲めに誤られて、たとひ車がぬかるみに落ち、一時動き得ぬ樣な羽目に陷つたとしても、或ひは更らに不幸にして、萬一車の心棒までをへシ折られる樣な場合に立ち到つたとしても、もし其の時の馭者が、理想あり誠意ある人間であることに就て、車に乘り合はせをる他の人々から何等の疑念をさしはさまれてさへ居らぬならば、人々は其の時も決して彼れの過失を咎め樣とはせず、必ずや一同力を協せて車を泥濘中より引き出し、再び其れを組み立て直ほして更らに終局の目的地に向ひ進み出す樣にと努力するであらうから。要するに何事よりも第一に必要とする所は、統御者に理想が有り誠意があると云ふことだ。統御者に理想と誠意とだけがありさへすれば、たとひ彼れが或る點に於て無智であり、彼れに自惚れがあり、過失があつて、其の結果、現實がまだ理想を距る事遠く如何程悲慘であつたとしても、事はまだ之れ程憂ふるに足りないのだ――同じ車に乘り合はせてゐる仲間の人々が、(少くも其の過半數が)、一致團結し、互ひに力を協せて、いつも事に當るであらうから。

然るに、もし之れに反し、統御者に理想と誠意との二つが缺けてゐたとするならば、たとひ彼れ自身が理智其のもの丶如く聰明であつたと假定しても、またたとひ彼れの統御によつて其の時の現實が如何に都合よきが如くに見ゆるとしても、彼れ等によつて導かるゝ車は、眞に禍なる哉と言はざるを得ない――もし一と度び事變が起つたとしたならば、人も車もみな諸共にたゞ壞滅に歸するより外に途がないであらう。何故なれば、無理想と不誠實とによつて率ゐらるゝ時、人々の間に反抗性を帶びざる眞の融和、結合、協働等を見ることは素より全然不可能であるのだが、不幸にして此の人間の世の中では、如何に一個人の卓越せる理智があり聰明があらうとも、もし二人以上のおひだに此れ等融和、結合、協働等の力を生じたる時でない限りは苟も『事』と稱し得可き『事』の何一つをも決して片附けて行き、成就して行くことが出來ぬのであるから。

其れ故に我等は、事理極めて當然なる絶對的條件として、我等の車を馭し行く可き人々は少くも我等が信頼し敬服し得る程

度までに理想を有し誠意を有する人である可きことを要求する。否、我々は最初から、理想もなくまた誠意もない様な人々の手に我々の車を馭して行く役を委託する程、左程に迂愚であり、無責任であつてはならない。

理想の彼岸に達するまでの我々の行程たるや、素より眞劍且つ神聖である可き筈のものだ。然るに其の指導役に當る可き者が其の役目の意義と其れに附隨せる重大なる責任を充分に自覺することなく、極めて瑣々たる「一身一家の光榮」とか、「己れの懐」の爲めとか、乃至は單なる「道樂心」……とかに動機を置いて、徒らに其の地位を固守せむとしたり、或ひは其の地位を獲得せむとしたりするのであつては、心から眞面目に道を進まむとしてをる他の人々こそまことに以て迷惑千萬の次第である。

『小醫は人を治し、大醫は國を治す』とか何とかといふ。其の類推が果して適當であるかどうかは論せず、我々は日常よく、世の所謂「醫者」なるものが、元來人の病を治療し其の健康を保持せしむる事を主たる目的とす可きにも闘らず、往々にして儲け本位となりまた自己の看板本位となつて、却つて人の病氣を増進せしめ或ひは其の生命をすら失はしむる場合のあることを知つてゐる。決して度びく起る例ではないだらうけれども日頃商賣敵である二人の醫者が落ち合つた場合などには、病人の苦痛や其の生死問題など云ふことは少しも考慮に入れず、只單に己れ等が私の感情と利害とに驅られて藥を盛り手術を行ふことさへもある。幸にして我々の周圍には、さう云ふひどい似而非醫者ばかりではなく、兎に角、親切に心配してくれる先生達もあるので、病氣次第では時に醫者に見てもらふ氣にもなる次第であるのだが、もし萬一かう云ふデモ醫者ばかりが世の中に揃つてゐたものとしたら、まことに悲む可き事ではあるが、恐らく、少しでも心ある人達は、誰ももう醫者などいふものを相手にしなくなることであらう。「國を治す」と云ふ『大醫』の方でもやはり理屈は同じことであらうと思ふ。『國を治す』といふ文句が甚だ漠然たるものであり、其の事柄自身が極めて複雑なることである以上、茲に所謂『大醫』なるものを我々が如何なる部類の人々と解す可きかは一つの問題であらうけれども其れはいま各自の任意的解釋に委ねるとして、例へば我々が有する彼の帝國議會の如き、成程、有難い立憲政治の表象でもありまた、實際其の中に我々が信頼し敬服するに足る可き『大醫』の幾人かを全く認め得ぬわけでもない様ではあるが、然し、もし其れが昨年度に於けるが如く、萬一今後も幾多の重大事をよそにして要するに只、下らざる水掛け論や、八百長演説や御土産演説や、さては醉どれの喧嘩の如き醜態までを繰り返して則

日の全てを送つて行くならば、其れは恰かも、棒へのみは如何に大きくとも、種々なる醜聞が立つてとても生命を托すに足りぬと世人から見限られた病院の如きもので、事實餘り遠からぬ中に、國民(少くも其の中の健全分子)からは全然愛憎をつかされ終はり、人々が議會を無視して各自に事を企圖する樣になりはせぬかと云ふことを虞れる。若しも何時かさういふ時が果して實際にやつて來たとしたならば、其れが我々の祖國に取つて如何に悲しむ可き不幸であるかと云ふことは、別に論ずるまでもなく明かなことであらう、だから筆者は其れが愚昧なる己れ一人の杞憂に過ぎぬことを衷心から深く希ふものであるのだが、然し我々がいま目前に見るところの事實は決して我々をして前途を樂觀することを得せしめぬ樣に思はれる。まだ政治的に殆ど何等の自覺をも持つて居らぬ所の大衆――其れは斷るまでもなく、決して有識階級に對するプロレタリアートと云ふ如き意味ではなく、特に我國などに於ては此の「無自覺」なる大衆の中に却つて多數の有產『有識』階級の人達が含まれてゐるわけなのであるが――さういふ「無自覺」の大衆は暫く之れを問題外とするも、如何になほ其れ以外に存在する僅少なる「有自覺」の人々の間に於てすら既に一般の『政治』なるものに對し、我國今日の所謂『議會政治』なるものに對して、著しき冷淡さが顯れて居ることか!!

成程、他の國々に於て長い歲月の間悲慘なる流血と幾多の犧牲とを拂つた後に漸くにして確定し樹立し得たる立憲制度の歷史沿革に比較するならば、我國に於ける今の此の制度の由來、併びに其れを採用するに到つた迄のいきさつ等といふものは寧ろ殆ど奇蹟的にまで無事平安、餘りに易々たるものであつたかも知れないが、然し我々が今、彼の西南戰爭前後から日清役の頃までに及ぶ我が國の政治史を繙くならば、其の相對的には極めて平安だつた『いきさつ』なるもの(即ち、憲法が制定され、發布され、終ひに議會の開設を見るに到つた由來、道程といふもの)は、其の實質に於て、決して今日我々が只漫然と考へて居る如く、然かく簡單、且つなまぬるきものではなかつたと云ふことを悟るであらう。西歐諸國に於て君主と人民との間の爭闘や幾多の流血的犧牲を繰り返へしたる後、はじめて生まれ出たる憲法がたゞ我が國のみに於ては極めて和氣藹々たる中に天皇から人民に下されたと云ふことは、素よりいつも只我々人民の事のみを大御心にかけさせられ、人民の幸福を增進し其の希望を出來得る限り滿足せしめてやり度いと日夜憂慮し給ふ慈父の如き聖天子の、眞の王道の上に立たせ給ふ御仁德の然らしめた所であることは勿論であつて、此の事は明治大帝の「つみ

あらばわれをつみせよあまつかみ、民はわかみのうみし子なれば」といふ御製の一首を拜誦しただけでも誰れ一人不審を抱く者はあるまいと思ふ。然し、兎にも角にも、遠く建國の昔から傳承されて來た獨裁君主制の國政に、始めて『庶民』をも參與せしめ樣といふ制度上の一大革新だつたのであるから、既に其れのみを以てするも、其の實現に幾多の困難を伴つたと云ふ事は實に理の當然なのである。況んや其の一方に於て、(如何に我が明治大帝のみが日月の如き御聖德を備へをられたにしても)其の君側に侍して國政に參與してをつた特權階級者の間には或ひは已れ等自身の頭腦の貧弱なる結果として、玆に云ふ『憲法』なるものも其の形式に於てこそ新たなるものなれ、其の精神に於ては我が國歷代の天皇が政治を行はるゝに當つて常に民意民福を重んぜられたる傳統的の御精神と全然相一致するものであり、其の御精神をば今や『憲法』として更らに實現し具體化することが、益々『君民一體』なる我が國體の精華を發揮し完成せしむる所以なることを理解し得ぬ樣な心理性の人間も多かつたし、或ひはまた其の位の道理はよくわかつても、維新の變革以來已れ等が折角獲得したるばかりである政治的特權を聊かなりとも他人から侵害されては一大事と考ふる如き腹黑き姦人共も(殊に其の頃は既に藩閥の勢力が根深く張つて來てゐた時なので)可成りに多くはいり込んでゐて、其れ等の人間達が一同心を合せ、あらゆる方策を講じて其の當時の所謂『自由・平等・民權』の思想併びに運動をば極力抑壓するに努めたのであつたから。筆者は勿論いま此の稿の中に於て、敢て其當時の特に詳しき政治・並びに社會的事情に立ち入つて論じ樣とする者ではないが、只此の機會に於て自分は、我々日本人が日本人の立場からして今現に自分等の目前に起りつゝある事柄及び今後將來に亘つて起る諸問題に就て出來るだけ忠實なる考察をし、出來るだけ誤りなき判斷を下さうとする爲めには、其の重要なる參考資料として、幕末から維新に至る間の歷史と同じく、否、其れよりも寧ろ大いに、明治初年から日清戰役前後に及ぶ間の社會及び政治の變革史をも、是非とも改めて通覽し熟考して見る必要がある樣に感ずる者であると云ふ事を記して讀者の御注意を促して置き度く思ふのだ。兎に角、我が國に於ても、其の程度に於てこそ異ひあれ、やはり憲政の實現の爲めには幾多の血や淚が流されたのである、――多くの人達が時の政府當局者によつて、或ひは追放せられ或ひは投獄せられ、或ひは刺客に襲はれて傷けられ、或ひはまた其の爲めに生命を絕たれたのだ。日本に於ける其の當時の事を讀んで、試みに之れを**ロシヤ**の近年に於ける『憲法』政治の由來及び沿革と比較し對照して見る

のに、我々は其の間に少くも一二の根本的差異を認め得るのであるが、然かもなほ其の他の點に於ては極めてよく類似せる所の意外に多き事に、寧ろ驚かざるを得ないのである。

今、其の事を少しく論ずるに先だつて、筆者は念の爲め、自分が茲に使用してをる『憲法』なる言葉は、『國民自身が（直接或ひは間接に）國政に參與する事を肯定し、規定してをる所の國家の根本法』であると解釋して使つてをるのだと云ふことを斷つて置く。斯くの如き定義に從つて考ふる時、先づ第一の根本的差異は我が國及び**ロシヤ**に於ける立憲思想の淵源のちがひである――ロシヤでは立憲思想は最初から民の心の中に發生し、自由民の中の誰でもが、各都市或ひは村落の一定の場所に懸けてある鐘を打鳴らしさへすれば、何時でも隨時に住民の會合を自ら召集し得る『ヴェッチェ』の制度として既に建國以前にも具體的制度を形成し、さうして其の制度は少くも十二世紀の初頭キエフ太公國の衰亡期までは殆ど完全に其の作用機能を持つてゐたことと本誌九月號の拙稿に述べた如くであつて、たとひ其の立憲思想の種子が、其の後戰國の世となり、繼いでモスクヴァ朝、ロマノフ朝となつて、一時健全に發芽し發育することを阻まれたとは云へ、其の種子はどこまでも人民の心から出て來たものであつた。然るにこれに反し我が日本に於ては、其の種子は先づ何よりも先きに統治者たる聖太子の御心の中に現はれ、さうして然る後ち天皇自らの御手によつて國民の心の中にも蒔かれたのである――實に我が國に於ては建國以來、歴代の天皇がみな政治を行はるゝに當つて、常に民意を重んじ、たゞ〳〵民の福祉のみを念とされたわけで、たとひ其の執政の御精神と、茲で云ふ『憲法思想』との間に嚴密に云ふならばまだ多少の距離があるとしても、根柢に於ては互ひに相通じ、相一致してをることと勿論であつて、實に此の皇室による一視同仁の御心こそ我が國に於ける立憲思想の淵源であり種子であるのだ。たとへ彼の聖德太子が遠く千三百餘年の昔に制定された十七條の『憲法』と云ふものゝ如きが、其の實は太子自身のフィロソフィーであり、推古帝の攝政として自ら萬機を總攬さるゝに際して自己の主義とし理想とせられたる所を箇條書きとして宣明し、役人や一般の人民に訓されたものと見るのが至當であつて、決して具體的の制度として何等直接に、我々が茲で云ふ『憲法』と關係があつたわけではないにしたところが、此處にも『君民一體』或ひは『慈悲、平和、融合』或ひは『衆議、協働』等の思想は實に遺憾なく到る處に言ひ表はされて居るのであつて、もし假りに聖德太子が今日世に在しましたとしたならば、必ずや徹底的なる立憲主義、萬民融和主義を實行されたで

あらうと云ふ事は極めて容易に推測し得らるゝのである。例へ
ば其の最初の三ヶ條には、先づ
『和を以て貴しとなし、忤ふことなきを宗とせよ、人みな黨
あり、また達者少し、是を以て、或ひは君父に順はず、乍ち
隣里に違ふ。然れども、上和し下睦みて、事を論ふに諧は
ゞ、則ち事理自ら通じ、何事か成らざらむ。』と言ひ、ま
た
『篤く三寶を敬まへ、三寶とは佛・法・僧なり。則ち四生の終
歸、萬國の極宗なり。何れの世、何なる人か、是の法を貴ぶ
に非ざる。人、尤惡鮮し、能く教ふれば、之に從ふ。其れ三
寶に歸せずむば、何を以て枉れるを直さむ。』
『詔を承けば必ず謹めよ。君は、則ち之を天とし、臣は、
則ち之を地とす、天覆ひ地載せ、四時順行して、萬氣通ずる
ことを得。地、天を覆はむと欲せば則ち壞を致さむのみ。是
を以て君言へば臣承け、上行へば下靡く。故に、詔を承けば
必ず愼め、謹まずむば自ら敗れむ。』
とあつて、之ならば恐らくトルストイなどでも全部を無條件に
肯定したことだらうと思ふ。また第九、第十條に
『信は是れ義の本なり、事ごとに信あれ。其れ善惡成敗は、
要するに信に在り。君臣、共に信あらば、何事か成らざらむ
君臣、信なくば萬事悉く敗れむ。』
『忿りを絶ち瞋りを棄てゝ、人の違へるを怒らざれ。人、み
な心あり、心、各々執あり。彼れ是なれば則ち我れ非なり、
我れ是なれば則ち彼れ非なり。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ
必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理、詎ぞ能く
定むべけむ。相共に賢愚なること環の端なきが如し。是を
以て、彼の人瞋ると雖ども、還つて我が失を恐れ、我れ獨
り得たりと雖ども、衆に從ひて同じく擧へ。』といひ、且つ最
後の第十七條に
『夫れ事は、獨り斷むべからず、必ず衆と論ぜよ。少事は是
れ輕し、必ずしも衆とすべからず。唯、大事を論ずるに逮び
ては、若し失あらむことを疑ふ。故に衆と相、辨ふるときは
辭則ち理を得む。』とあるのは、之れ明かに、或る意味に於
て、今日の憲法政治の提唱であると解してもよいであらう。更
らにまた、其れよりも以前の第十二條には
『國司・國造、百姓に斂ることを勿れ。國に二君あらず、民に兩
主なく、率土の兆民、王を以て主となし、任ぜらるゝ所の官
司は、皆是れ王臣なり。何ぞ敢て公と與に、百姓に賦斂せ
む。』と道破してあつて、之れは實に「皇室中心」、「君民一體」
なる我が立國の大義をば明かにし、直接に天皇に奉仕して國政

に參與する位にあるところの所謂『羣卿百寮』の者共も同じく人民の一部分であつて、只便宜上廟堂に於ける其の代表者とし選ばれて役に就いてをるまでのことで、決して何等特殊の權能ある特別階級ではないと云ふ事を示されたのである。一方に於て、此れ等の憲法十七條を書かれた前年に、太子は、冠位十二階を制定されたのであつたが、然し斯かる階級の制などは素より只、便宜上のものに過ぎなかつたのである。然し乍ら、太子が薨ぜられ、歲月が經ち、都が平安に遷され、藤原氏一門全盛の時となり……などしては、悲しい哉、太子が國政の理想とし、遺訓として茲に示された所などは、素より常に必ず行はれるとは限らなかつた。所謂憲法の第六條に太子は、

『惡を懲らし善を勸むるは、古の良典なり。是を以て、人の善を匿すことなく、惡を見ては必ず匡せ。其れ諂ひ詐るは、則ち國家を覆へすの利器たり、人民を絕つの鋒劍たり。亦、佞しく媚ぶるものは、上に對ひては則ち好みで下の過を說き下に逢ひては則ち上の失を誹謗す。其れ此くの如き人は、皆君に忠なく、民に仁なし。是れ大亂の本なり。』と述べて居られるが、藤原氏の如き一族一門が他の門族の上に榮え蔓らうとする爲めには、勢ひ、他人の善を見ても之れを匿し、己れ等仲間の惡を見ても之れを匡さぬ樣な場合も頗る多くなつて來て結局は幾度かの大亂の本をなしたわけである。和氣淸麻呂、其の姉法均尼、或ひは菅原道眞……等の如き眞の忠臣は、やゝともすれば流謫の悲境に陥れられ、ロマノフ朝の末期に現れたる怪僧ラスープチンも恐らく一籌を輸すかとまで思はるゝ弓削道鏡の如き者が『法王』の稱號を敢てしたかと思へば、政權所ど藤原氏一門の手に歸したる後には、終ひに一臣下たるに過ぎぬ道長をしては「此の世をば我が世とぞ思ふ望月の缺けたることもなしとおもへば」と大恐悅に入らしめたる一方に、まことに恐惶の極みとも、何とも申す可き言葉もなき次第乍ら、一天萬乘の君たる一條帝や三條帝をして『叢蘭茂らむと欲すれば秋風吹き破り、王事啓らむと欲すれば讒臣國を亂す』と歎ぜしめ、或ひはまた彼の名高き『心にもあらで憂き世にながらへば、こひしかるべき夜半の月哉』の御製を遺し、心ならずも位を退いてやがて御兩方共に三十二歲四十二歲の御壯年を以つて他界せらるゝを見た樣な有樣だつたのである。大日本史を繙いて一條天皇の部を見ると『帝、慈仁を心となし、常に民庶を憫む。寒夜背て御衣を脫す。上東門院、異みて之れを問ふ。帝曰く、方今天寒し、天下の窮民、其れ堪へさるものあらむ。朕、豈に獨り重襲するに忍びむやと。學を好み文を崇び、詞藻、人に過ぎ、象に絲竹に妙なり。藤原齊信、人に語りて曰く、我、皆て汲

引するところあり、將に私かに奏請せむとす。適々玉音を聞く、曰く、凡そ事須らく淳素に反るを要す可しと。我れ、内甚だ愧ぢ、終ひに請ふこと能はずして止みぬと。時に藤原道長、日に御膳を獻りしが、此のことを聞きてより、復た進御せず。帝臨御日久しく一時人才輩出せり。自ら謂ふ、朕が人を得たるは、延喜、天暦の世に勝れりと。然れども、道長が權を專らにするに遇ひ、政、已れに由らず、意に之れを惡むと雖ども、力、制すること能はざりき。』と記してある。

道長の事などは、實に往古に於ける官僚橫暴の一例たるに過ぎぬのであるが、其の頃の歴史を讀んで見ると、勿論多少の除外例は無いわけでないけれども、一般に彼の「雲上人」などゝ云はれたる人間の階級は、日月の如く公明正大なる我れ等が天皇の御稜威や御仁德を、不埒にも常におほひかくし奉らむとする叢雲に似たるが故に、其の名を得たのではないかとさへ、疑はるゝ位である。宜なる哉、たとひ醍醐、村上、一條等の名君續出して仁政を行はれ、世は延喜、天暦を稱へ奉りたるにも拘らず、皇威の振はざる事、日に日に甚だしくなりて、終に武家政治の勃興を喚起するに至りたる事や、いま筆者の傍らには十年前、若くして世を去つた自分の妹が道長時代の「雲上人」の子孫も少なからぬ學習院の中學一年にゐた頃、使はせられてゐた下村三四吉氏編女子國史教本といふ本がある。今はだうだか知らないが、其の頃の學習院女學部などでは、同じ級の中に德川家關係の子女が入つてゐるとかで、當り觸りがあると云ふので、幕府が倒されて王政復古になつた頃の歴史は教場で讀む事を遠慮したとかきいた位の程度であつたのだが、さういふ處で教科書に使はせてゐた本であれば、極めて穩當に事實其のまゝの事だけを書いてゐるに違ひないと思つて開いて見ると——

『延喜の治は名のみにして、裏面には衰亂のきざし既に見はれたり。蝦夷の亂平ぎてより凡そ百五十餘年の間、兵馬の騷ぎ殆ど絶えて、京都には奢侈の風益々長じ、官人は實務を顧みず、地方にては、朝廷の命令その力を失ひ、下民は衰弊して飢寒に苦しみ、盜賊は到る處に橫行し、口分田（クブンデン）の制もいつしか壞れて豪族等が土地を兼併すること次第に甚しくなりぬ。』口分田の制といふのは、百人一首にある御製によつても、また黑木御所の古實によつても如何に慈悲深き聖天子であつたかゞわかる天智天皇の御前身、時の皇太子たる中大兄皇子が藤原鎌足と共に成就された大化の改新に際して、雄々しくも斷行されたる、土地を國有とし、其れを農民の間になる可く不公平なき樣に分配し貸給す可く定められたる制度である事、何人もよく知る所である。頁を繰して念の爲めに其の部分の所を讀んで見ると、これ

までは、朝官も地方官も世襲のさまにて、また何れも土地、人民を私有しければ、年を經るまゝに、其の弊害多くなり行きぬ。よりて、中大兄皇子は鎌足と謀り、蘇我氏の滅亡を機とし、天皇（三十六代孝徳天皇）を輔けて改新の政を施したまへり。――大化二年（西暦六四六年）改新の大詔を發し給ふ。在來の臣・連・國造等が私有せる土地・人民を朝廷に收めて、公地公民とし、更に戸籍を造り、班田收授の法を立てゝ、人毎に口分田を給し、また租・庸・調といへる三種の税法を定め國・郡を區劃して、國司・郡司を置き、年限を定めて交代せしめき。つぎて中央政府の組織をも改革し、八省・百官を定めたまへり八省は諸般の政務を分掌し、百官各々其の材能に從ひて任用せられき……云々』。大日本史などによつて、此の孝徳天皇御代のことを、讀者と共にもう少し飛び讀みして見るならば、なほ一層、其の時の改新の事情がハツキリして興味も一層深いわけなのであるが、それは後段に讓り、茲では略して置く。革新の神髓とも云ふ可き諸點は、みな此の女學校一年生用の教科書の中にも遺憾なく述べ盡されてゐるわけであるのだから。まことに時人が後に追謚して『天智天皇』と申上た『天智』といふ言葉其のものゝ如く、時の皇太子たりし中大兄皇子の英明さたるや實に徹底的のものだつたのである、之ならば如何に極端なる西洋の社會主義だとて、其の實際に民利民福の爲めの理想を實現する手腕力量の點に於て、到底、天智天皇の御仁徳の力に比す可くもない。ボルシエヴイキの頭株たる彼のレーニンと稱する男だとても恐らく只の一言もなく天皇の前には頭を下げたであらう。見よ！　彼の行はむとしたる遠大なる社會政策も、一と度び土地問題に打ち當つては忽ちにして一大蹉跌を來たし、（國土の老大なることも一因なりとは云へ）終ひに今日に至るまでも其の國有を實現し得ずして効果なき煩悶苦鬪を續けてをるではないか。事の成ると成らざるとは理想を實現せむが爲めの實力と、其の努力の泉源たる眞心からの無我的愛の大小によることゝ筆者は信ずる者であるが、其の何れをも、天智天皇は完全に具備して居られたのに反し、ロシヤ今日の勞農政府などには、何處かに、まだ私利私慾を解脱し超越し切らぬ不純分子、不誠實なる要素が可成りにはいつてをり、其れが何よりも中々に業績の擧らぬ最も大なる原因であると推察せざるを得ない。それにしても、全生涯を通じて其の天智天皇の片腕ともなり、御相談役ともなつて、天皇が革新の大事業を完成せしめた鎌足が後には君明をおほひ奉つた叢雲族一門の初代となつたと云ふ事は、實に不完全なる人間の世の出來事としても、餘りにか歎はしきことゞもである。

再び、歴史の教科書に立ちかへると、其處では延喜の治政後のことを述べて『其の頃、源・平氏或ひは藤原氏などの京を去りて地方に赴ける人々多く、（不遇の位地にあつて心平かなる能はざりし人達だらう）各其の地に永住して、一族も廣がり、郎黨も增し、常に弓・馬を練習して、武人と稱したり。武人の亂は、始めて第六十一代朱雀天皇の御代に起りき。……』と云つて平將門、藤原純友による彼の天慶の亂の事を記してゐる。之れ實に武士が次第に頭を持ち上げて來たはじめである。『第六十二代村上天皇は、天慶大亂の後を承けて、力を政治に盡したまひ、天暦の治は延喜の治と並べ稱せらる。されど、其の實は皇威の振はざること、これより益々甚だしきに至れり。朱雀天皇の朝に藤原忠平が攝政に任ぜられしより、百三十餘年の間は藤原氏朝廷の要路を占め（但し人臣の身を以て攝政となつたのは九歳の清和天皇が立たれた時、其の外祖たる藤原良房の任ぜられたのを始めとし、また關白は宇多天皇の御即位に際し、同じく藤原基經のなつたのを以て最初とする）政權を握りしのみならず、后、妃は概ね其の家より出でゝ、世々皇室の外戚となり、また莊園と稱する私領地を多く占めて、尊貴と富榮とを一門に集めたりき。……、かゝる有樣なりしかば、一門の間にも次第に權勢の爭を生ずるに至り、第六十四代圓融天皇の時に及び、忠平の孫、兼通及び兼家の如きは權を爭ひ兄弟互ひに仇敵の思ひをなしき。次ぎの華山天皇に至りては、兼家、次子道兼をして天皇を誘ひて位を遜らせ奉り、己れの女の出なる一條天皇を立てゝ、攝政となり驕奢を極めたり。兼家後に、長子道隆關白に進み、其の女、定子一條天皇の中宮となりぬ。然るに、弟道長これに次ぎて政權を握るに及び、また其の長女彰子（後に剃髮して上東門院となられる）を入內せしめぬ。よりて、定子を皇后と改め稱へ、彰子を中宮といへり。皇后・中宮並び立つ事、こゝに始まれり。道長は一條天皇以來、三條天皇及び後一條天皇の御世にも仕へ、天下の大政を握ること三十有餘年、三帝の皇后は何れも其の所出にして、身は三帝の外祖となり、威權比ぶものなく、藤原氏の專横榮華、實にこゝに極まりぬ。……』と述べてある。

然し、藤原氏政權を專らにすること、二百有餘年にして七十一代後三條天皇の世に至り、終ひに再び天皇親政の復活を見ることが出來た。一時源平二氏の兩立を見たが、保元、平治の兩亂を經て、平氏の全盛界を現出し、それがまた源氏の爲めに亡ぼされて鎌倉幕府の創立となり續いで北條の世となり、其の後また北條氏も亡びて所謂建武の中興となり一時王政の復古を見たのだつたが、此の時もまた不幸にして君側に下らぬ人物が勢力を持つてゐたので、楠正成をはじめ多くの誠忠の士の苦心努

力も其の効なくして、足利尊氏方の勝利に歸し、南北朝の兩立となり室町幕府の世となつて終ひに戰國時代に及んだ。群雄四方に割據して、麻系の如く亂れたる國内が織田信長を經て豐臣秀吉に至り一と先づ安定に統一せられ、更らに徳川の手に移つて兎にも角にも其の後三百年間の安定を見たのであつたが、突如黒船の來航して開國を强要するや攘夷の論起り、また其れが導火線となつて、豫て其の時既に國内に蓄積せられゐたる尊王論の氣勢をも一時に奔騰せしめ、革命の大波が國全體を大きく一揺り揺り動かしたる後、幕府はもろくも轉覆して再び王政の復古を見るに至つたのであつた。

我が國に於ては神武天皇の御即位になつた時から第五十五代清和天皇の御即位に至る千五百餘年の間、大體に於て、いつも天皇親政であつた。然るに、既に上にも記するが如く、清和天皇の時、藤原良房、臣下たるの身を以てはじめて攝政の位に登つて以來、終ひに徳川幕府倒れて明治となるまでの約一千年間と云ふものは、たとひ時に一二代乃至數代の天皇によつて、暫く王政の復活された事があつたとは云へ、其の大半は實に（名目や形式は兎に角、事實の上に於ては）臣下中の少數特權者が他の多數の人民に對する威壓であり　統治であつたのである。恐れ多くも朝廷の權威は地に落ちて我が立國の基本たる『皇室中心』てふことも、また『君民一體』てふことも（たとひ處々に於て、其の痕跡は窺ひ得られたかも知れないが）全體としては極めて色彩の漠然たるものとなり、殊に戰國の世となつて群雄四方に割據するに至つた頃には『國家の主權』ともいふ可きものは益々散在性のものとなつて、『我が君』といひ、また『忠君』などゝ云つたとしても、人は屢々、其の對照の抑ゝ何人である可きかに惑はねばならぬ樣な狀態になつてゐた。眞に國民全體の宗親たる『皇室』の外に、『幕府』といふものが出來、其處には『將軍』なるものが控え、或ひはまた北條氏等の時代に於けるが如く、其の將軍といふものも名有つて實なき、單なる形式上の飾り者と化し終つて實際の權力は所謂『執權』の手などに移されてあつた。其の將軍や執權などに諾々乍ら服從し、或ひはまた喜んで隷屬した各地の群雄達も、已れ等が一族郎黨の『武士』に對し、また所領地の『農、工、商民階級』に對しては宛然一つの小なる帝王であつたのだ。斯かる事情は、國内に戰亂が治まつて、兎にも角にも一と先づ落ち付きを見せた徳川幕府統治下の封建時代に於ても少しも變ることなくして明治維新まで持續されて來たのであるが、其の當時の、君臣間に於ける三角關係、四角關係……を身自ら體驗された事のある人々は現に今もなほ可成りに生存してをられるのであるから、別に殊

更ら茲に論ずる必要もあるまい。

筆者は本誌の昨年九月號並びに十月號に載せた拙稿の中に於てロシヤ及び日本の戰國時代を比較して、聊か、亂世に於ける群雄の爭鬪的心理を考察し、また封建時代に於ける所謂『君侯』と『人民』更らに其兩者間の關係をも論じて、『人民による君侯の自然淘汰』と云ふ樣な事をも指摘して置いた。其の他、中古以後に於ける、我が大和民族の國外發展史、また德川幕府によつて二百五十年の長きに亘つて固執されたる鎖國制度が、如何に今日の我々の日常生活にまで、恰かも親から否應なく引き繼がされたる借金の遺産の如くに、大なる障害を遺し、壓迫を及ぼして居るか……といふ如き事情に就て、筆者が、めくら、蛇に怖ぢず」試みたる門外漢的考察はやはり其の二つの稿の中に述べて置いたから略す。之を要するに、明治維新に至る此の約一千年の間、我が立國の基本たる天皇のみを君として仰ぐ意味の『君民一體』、『皇室中心』といふことは攪亂されてゐたのであつて、言葉を換へていふならば、我々の『君民關係』我が『國體の精華』といふものは、一時、病的の狀態にあつたのである。然るに、東照大權現の神威赫々として、未だ德川幕府の全盛なる時に當り、諸國の諸大名が容儀を整へて參勤交代を繰り返せる時に當つて、早くも、覇道に基ける幕府政治の決して健全なる國政に非ざる所以を觀破し、廣く其の事を國內に傳へて、王道による古の政を復活せむとしたる大儒に、熊澤蕃山があり、或ひは山崎闇齊、水戶の義公、更らに後れては賴山陽等の如きがある。之れ等の人々の大部なる著書、殊に其の中でも名を歷史に假りて覇道武斷の政治を批判し罵倒したるもの丶如きは、實に當時に於ける我が國家組織病狀の診斷書であり且つ其の治療法の暗示であつたのである。彼れ等は其の病狀を明確に記述し、其の治療法を論ずることが出來なかつた、何故なれば、もしさうするならば直ちに彼等自身も其の時國家の病源體であつた寄生吸血蟲の者共から、已れ等が生存の爲めの脅威者として、取り殺さる可き惧れがあつたから、――現に此の四人の中一番目の熊澤蕃山などでも年六十九歲の時『危險思想』の所有者であるとして終身禁錮を命ぜられ、七十三歲で死んだのである。

然し乍ら、權勢の力は如何に力强きが如く見ゆるとしても、其の强さたるや只々一瞬時のものである。時のみが、凡ての事の最もよき審判者である。不合理にして不自然なる封建制度の弊は時の進むと共に增大し、今はもう數多の人々が其の實際に病的狀態なることを悟る樣になつて、自然其の治療法、手術法を論ずるの聲が次第に大きくなつた――尊王賤覇論、王政復古論等が即ち之れである。所謂『志士』といふ連中が現はれて來

て手術に從事する。一方ではまた安政の大獄など云ふ樣な事變も起きて多くの血を流した。然し要するに、或る分量の血が流れ、國全體が或る程度の苦しみを苦しんだ後 我れ等が祖國は封建病より快復して、未だ不充分乍らに再び往古に於けるが如く、『君民一體』、『皇室中心』の健康體となり、其れと同時に鎖國の墻壁を打ち破つて、新たに世界の大舞臺に踏み出したのである。

上述の如き事情であるから、勿論、戰國の世、封建の時代が續きたる限り、社會に『立憲思想』などゝ云ふものは發生す可くもなく、人は只、其の時代々々に豫め作られたる人工的階級制度の中にハメ込まれ、小さく狹められた限りある區劃内だけで生きることを許されて、生き且つ死んでゐたのであつた。然し乍ら、一度び王政の復古を見るに至つたと同時に、國政の精神の中にも、また直ちに『君民一體』の思想、さうして其れに必ず附隨してくる立憲的思想の復活をも見たといふことは、我が國の王道といふことの何であるかを知つてゐる人々に取つては決して少しの不思議もないことである。彼の『五條の御誓文』なるものは維新の革命がまだ終つたか終らぬかもわからぬ明治元年の三月に早くも明治天皇御自身によつて煥發されたものであるが、其の第一條に『廣く會議を興し萬機公論に決す可し』と宣はれたのは、其れより千二百餘年前に聖德太子が彼の「憲法」の最後に記された所の思想をば『廣く會議を興し……』と云つてまう一層具體的に述べられたものであり、(上段七百參照)また其の次ぎの三ケ條『上下心を一にし盛に經綸を行ふ可し』、『官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す』、『舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし』といはるゝもの、其の何れか、階級打破、四民平等、全國内一致協働の思想を高調せられたのでないものがあらうか!!! 我々がもし其の當時に於ける周圍の事情といふものを考慮に入るゝことなく、只辭義の示す所に從つて此の時、明治大帝の下されたる御誓文の御精神を解釋するならば『國會開設』の可不可などは殆ど最初から問題とするにも足らず、(もし筆者一人の獨斷であり感違ひであるとすれば、まことに畏多いことの極みであるけれども、だうも此の筆者などには)我々の皇室は、まだ人民自身の方に自覺がなく、進んで憲法制定の事を御願ひ申上ぬ以前から既に憲法政治の一日も早く我が國に實現し得られむ事を望んで其の時の來る事を待つて居られたのであり、さうして、其の立憲政治も、終局の理想とせらるゝ所は、徹底的なる一般普通選擧制によるものであることを御誓文の第二、第三、第四によつて了解し得らる樣に思はれる。問題とせられたのは、只、具體的の制度として、はじめて其れを實施す可き時期の點なので

あつて、明治八年に至りはじめて發布された國會開設に關する詔勅の中に『……漸次國家立憲ノ政體ヲ樹テ汝衆庶ト倶ニ其慶ヲ賴ラント欲ス、汝衆庶或ハ舊ニ泥ミ、故ニ慣ルヽコト莫ク又或ハ進ムニ輕ク爲スニ急ナルコトナク其レ能ク朕ガ旨ヲ體シテ翼贊スル所アレ』と仰せられてをるのを見ても、また、恐らく其の然ることを察し得るであらう。

然し乍ら、如何に上御一人のみが御仁德に富まれ、常に慈悲の御心を以て人民にとり最も幸福多き政治といふ事のみを考へて下さつたにしても、君側を圍つて廟堂に立つた人間達は決して、必ずしも誠心誠意の者ばかりではなかつた。成程、幕府によつて代表された封建的武斷政治』は倒れ壞れたけれども其の廢墟の上には、早くも『有司專制』の政治が築き上げられはじめた。大政は奉還されて再び上古に於けるが如く皇室に歸したのだけれども、其の周圍には自ら倒幕の殊勳者を以て任ずる薩・長等の藩閥的分子が集つて、早くも自分らの根を下し己れ等自身の特權に耽溺しつゝ、互ひに幹を張り、枝を延ばす事に努めて行つた。素性や生ひ立ちこそちがへ、そして一族一藩でなかつた爲め互ひに相牽制し合つて、幾分其の弊害を減少し得たとは云へ、彼れ等はやはり中古以後に於ける藤原氏其の他の官僚閥と同じく、元來一體であり、紙の表裏の如く或ひは球と其の中心との如き關係であるべき皇室と國民との間に介在して、餘り好ましくない溝渠を形づくるに至た。

筆者が曲りなりにも自分の本職としてをる生物學を、西洋では地質や鑛物學などゝひきくるめて、ナチュラル、ヒストリイ』といふ樣な呼び方をするが『人間の歷史(といつて、事實其れは人類の歷史中、極めて最近のせい〴〵五六千年の部分に過ぎないのであるが、其の所謂『歷史』の方で、筆者は勿論どこまでも一個の門外漢である。門外漢の議論であるから素より誤謬も多いことだらうと思ふのではあるが、然し其の門外漢が所謂『世界歷史』なるものを讀んで感ずる事は、唯一つ我が國に於ける一般の國民と皇室との間に數千年來、引き續き見られる、水と魚との如き特殊の相互關係だけを除外例とすれば、日本に起つた其の他の歷史上の事實は、殆ど其の全てが地球上のどこか他の部分で、他の民族の歷史の中にも極めて相類似したる形に於て見られると云ふ事だ。勿論種々なる役割りを演ずる人間がちがひ、使ふセリフの言葉がちがひ、其の舞臺がちがひ、デコレーションがちがつてゐたのであるから、外面に表はれる形式や、場面々々の順序などゝいふものに於て、さうしてまた、其れから觀る者の受ける感じに於ては、いろ〳〵の差異のあること、素より當然の事實であるけれども、其の筋書きの根柢に流

れてをる力や、其れ等の力が働く時の方則……など丶云ふものは、どこでも全く同じであり共通であることを認めぬわけに行かない。

例へば、『まだ心に自覺のない大衆が、偶然、或る刺戟の爲めに、無自覺のまゝ、立つて運動を起す時、其の結果は唯破壞であり凄慘そのものである』といふこと。シルラーは彼の名高い『鐘の歌』("Das Lied von der Glocke") と題する長詩の中に其のことをうたつて『獅子をば怒り立たすことは恐ろしく、また大虎の牙もおそろしい、けれども恐ろしきことの中にていともおそろしきは、實に、理智の判斷を失ふて狂亂する際の人間である』といふ意味を述べてゐるが、實に其の通りであると思ふ。もし誰か、今の世の所謂『爲政家』の中で未だに『民をして知らしむ可からず、倚らしむ可し』など丶云ふモツトーを固持してをる人があつたとするならば、其れは丁度獅子や虎の様な猛獸を階級制度といふハリコの檻の中に入れて大平樂をならべてゐる様なものである。

遠きローマ大帝國の昔より、世に奴隸の反亂ほどおそろしい事はなく、自覺なき大衆の盲動ほど不幸なことはない。元弘三年後醍醐天皇の側に加擔し奉り勅を奉じて北條高時の幕府に反抗し、終ひに北條氏を滅して建武中興を成就せしめたる諸國の軍勢の中、楠、新田、名和、北畠……等、從來から正味正銘の勤王の士であつた諸將に屬しゐたるものを除き其の他の多くの者は、王政は復古しても、直ちに彼れ等が夢みゐたる如き歡樂境の實現せざるを見るや、忽ちにして足利尊氏の叛逆に與みして後醍醐帝に鉾を向け、尊氏直義兄弟が一と度び敗戰して九州に走り、兵を聚つて再び東上したる時の如きは、水軍の舟師七千艘、直義の率ゐたる陸軍は總勢實に五十萬とさへ稱せられた様な次第であつて、誰も知る如く、湊川に正成の軍を破り、兵庫より義貞の兵を追擊し、京師に入つて長年其の他の諸將を戰死せしめた後、終ひに天皇をば吉野の山中に逐ひ奉つたのであるが、建武中興のはじめより此の時に至るまで、其の間僅かに只の三年である。眞に『忠君』といふ自覺を心に持つてゐなかつた多くの奴隸的武士共が國全體にザワついてゐた爲めなのである。かう云ふ様な例は外の國々の歷史にも限りなくある。また基督が驢馬に乘つてエルサレム都城にはいつて行つた時、群集は歡呼し熱狂して彼れを迎へた。『衆人(ひとびと)おほくは其の衣を途に布き、あるひは樹の枝を伐りて途に布きぬ、且つ前にゆき、後に從ふ人々呼びていひけるは、ダビデの裔(こ)ホザナよ、主の名に託(よ)りて來る者はさいはいなり、いと高き處にホザナよ……』(馬太傳二一章)蓋し、

彼れ等猶太人達は基督を以て彼等を當時の壓迫されたる奴隷的境涯から救ひ出しくるゝ世俗的英雄であると誤信したのであつた、然し其の期待の誤りだつたことを悟るや否や、（其の後未だ一週間ならざるに）彼れ等は既に、再び同じ様なる熱狂さを以て『彼れを十字架に釘つけよ』との喊聲を擧げ、さうして實際に彼れを十字架にかけてゐる。

我が國なると他の諸國なるとを問はず、全世界に共通なる人間社會の歴史が、第二に我々に教へてくれることは、『凡ての制度といふ制度は、其れが如何に一時は根強く、頑丈に見ゆるとしても、必ずや或る程度の彈性をもつて、時と共に其の實質が次第に變化して行くか、然らずむば、全然、跡痕もなく壞れて消滅し去るより外ない』と云ふことである、之れは人類の位置や狀態が一瞬も一ケ所に停滯することなく、進歩であるか退歩であるか、兎に角何處かに向け動いて行かねばならぬ以上、だうも致し方ない必然の運命であるのだ。また第三に『先覺者はいつも必ず、其の當時の社會から迫害され苦しめられる。さうして彼れの心眼の鋭さが強ければ強い程それだけ彼れの感ずる苦しみも益々多く、彼れ自身の有する實行力の大なれば大なるだけ、周圍の萬物から、さうして從來の慣性から、彼れの受ける反對もまた益々烈しい』といふことを我々は教へられる。

『先覺者』といふ言葉を使つたから、岐路ながらに少し茲に筆者の考へる其の言葉の意味を書いて置き度いと思ふ。筆者が單に自分の本職の方ばかりではなく其の他の多くのことに於ても日頃最も尊敬せる先輩の一人である丘淺次郎博士は曾て『所謂偉人』と題する一論文の中に於て（同氏著『進化と人生』追加の二）最初先づ「神田の大火」に議論を起して『今度の様な大火事を起した放火犯人は、ボヤだけより起し得なかつた放火犯人に比べて放火の能力が優つて居るか。例へば三千軒を燒き得た放火者は、一二軒より燒き得なかつた放火者とは全く段の違ふた傑物と見做して然る可きか？』と反問して、大火事を生じ得べき條件を吟味し、然る後、火を人間の思想や教義にくらべ、町の建築物の可燃性なるか不燃性なるかを、民衆の頭が愚昧であるか、或は理智に富んで判斷力を具へてをるかに比喩し、また風の有無を運不運に、（そして消火裝置の完備を恐らく教育の普及）にたとへなどして……いつもの如く、同氏に特有なる獨創的議論を進められ、結局『英雄豪傑なるものは畢竟人類の奴隸根性が造り上げた産物であつて、其の實質を調査したならば、恐らく普通の人間の平均に比して、少しく優つて居ると云ふ位の所ではなからうか？ 人間の身體の大きさは大概定まつたもので、大男と云ふても、小男と云ふても、平均の高

さから二割とは遠ざかつて居ぬ如くに、英雄豪傑でも、無名の泥棒でも人間の平均から、それほど甚だしくは離れて居らぬ樣に思はれる。若し火星から地球へ動物採集の探險隊が來たならば、ナポレオンでも豐臣秀吉でも雜兵と同樣に網で捕はれ同じ標本瓶に投げ入れられるであらう。下等動物から人間までに進化し來つた幾千萬年間の歷史を背景として眺めれば、普通の人間と、所謂偉人との間の差の如きは、實に僅少なものである。それを非常に大なる相違である如くに思ふて居たのは、奴隸根性を以て之に臨んだ故であつた。人間なるものは無論悉く平等ではない。生れながらの賢愚强弱の差別もあれば、生まれた後の境遇に基づく差別もある。今後とても、一人一人の資質に優劣のあるべきは云ふまでもないが、奴隸根性から解放せられた者から見れば、たゞ有りのまゝの優劣が知れるだけで、決して從來の如くに、平均より少しく優つた者、または平均より少しく幸運であつた者を、恰も普通人とは全く別の世界に屬する優秀人種として、其の足の下に平伏する如きことは無いであらう……』といふ樣に結論して居られる。筆者は元來、今この場で丘博士の御議論を敢て批判し度いなどゝは思はぬのであるが、世俗的な意味に於ける所謂偉人なるものを無視する點で決して丘先生に負けぬつもりの自分ではあるけれども、其の他の點に就て、少し之れでは納得出來ぬことがないでもない。便宜の爲めに、自分も丘先生と同じく先づ最初に、火事の燒け擴がり方と思想や宗教の傳播と云ふことを比較して論ずるとすれば、筆者の見るところでは、普通の火の燃え移り方と、思想の火の燃え移り方とは殆ど其の趣きが正反對であるかとさへ思はれるのだ。成程、普通の火であれば『木で造り紙を張つたマッチ箱の樣な可燃性の家』に直ちに燃え移つて、其れを燃え盡させてしまうことが出來る。さうして其の場合、火を放つた者が、放火專門の親方であらうと、新米の弟子であらうと、乃至は、マッチを玩具にして遊んでゐた嬰兒であらうと、其の火の燃え擴がり方に少しの相違もないわけだ。石造や煉瓦造りの樣な不燃性家屋の場合には火がつかない。然るに『思想の火』の方になると、まるで樣子が異ふのである。筆者は丘先生が果して如何なる人々を『マッチ箱の如き家』に喩ふ可き「愚昧者」であると考へられたのであるか知らぬけれども、要するに其れを廣き意味に於ける無智、無自覺なる人々であると解釋し得るとすれば、事實、斯くの如き人々は、如何なる思想の火によつても最も燃え上り難いのである。例へば今なほ常に、部落と部落との間の戰鬪のみを事とし、首狩り的の考へで頭を一杯にしてゐる蠻人の社會へはいり込んで行つて、たとひ國際聯盟だとか軍備

縮小などゝ云ふ思想を如何に眞面目に吹き入れ様としたところが、中々一朝一夕では、其の思想の火を燃え移さすことが出來ないであらうけれども、我が國などでは、兎にも角にも、衷心からの理想として其れに贊成して居る人々も隨分とある、然しさうかと云つて、此の場合、蠻人の心の方が煉瓦造りであつて、日本のかう云ふ人達の心がマッチ箱の如きであるとは云へないではないか。また例へば『禁酒』といふ思想がある、其の制度を、或ひは宗教上の觀念から、また或ひは醫學道德上の理由から、是非とも人類社會一般に普及し實施せねばならぬと確信して、道心堅固に一滴のアルコホール分をも自ら口にせぬ人の類も多いが、筆者の如きは、禁酒といふ事をばよしと贊成はして置き乍ら、未だ共鳴の程度が足らぬので、時には平氣で幾分禁を破ることもある、——『禁酒』といふ思想の火では石造、金屬建の家の方が盛んに燃え、之れに反し木造の家は燃難つてゐるといふわけなのである。

以上は只、一二の卑近なる例を取つたに過ぎないのであるけれども、要するに之だけでも、普通の火の燃え方と、思想の火の燃え方とが、可成りに樣子の異ふものであるといふ事は、大體認め得らるゝであらうと思ふ。筆者の見る所によれば、一つの思想の火が最も容易に燃え移つて行くと云ふ事の爲めには、其思想の異なるに從つて各々異なりたる條件がある。もし依然として玆で建物といふ例に拘泥して云ふならば、或る思想の火は蠻人の棲める掘立小屋に最も入り易く、他の思想の火は草葺きの百姓家に付き易く、また第三の火は煉瓦造りの都市の工場に燃え易く、或る思想の火は大なる邸宅の中に、また或る思想は軍隊に、大學に、修道院に、商館に……と云ふ樣な工合に、何れも、只單に其れ等の建物を形造つてゐる建築材料の可燃性とか不燃性とかばかりによつてゞはなく、其の建物の持つてをる意義や內容や性質に從つて、其れを燒くに最も力強き、そしてまた最も力弱き思想の火の種類が異ふのである。然し乍らもし上述の如く、假りに人間の頭の愚昧さと、心の無自覺さとの程度を、他處からの思想の火による家屋の燃燒性であると比喩して論ずるとするならば、我々は一般に、可燃性なるマッチ箱の如き家屋程燃えが惡しと云ふ極めて矛盾せる事實を認めなければならないのである。只、單に打ち眺めたる所では自覺なき大衆の群れは成程、盛んに燃え上つてゐる樣に見えるものであるが、然し、よく〳〵吟味して見るならば、人は、彼れ等が決して自分自ら燃えて居るのではなくて、たゞ、煙に卷かれてをるに過ぎぬと云ふ事を見出すであらう。鎌倉幕府を覆滅して建武中興を成就せしめた所謂勤王軍の大部が、僅か三年の後には早

くも叛逆を起して天皇を吉野に逐ひ奉つて如る。「いと高き處にホザナよ、主の名によりて來るものは崇め讃めらる!!!』と熱狂して基督を迎へたイエルサレムの民衆は數日の後、既に彼れ自身をば十字架に釘づけて居る。そしてまた最近我れ等の目の前でもロマノフ家のツアール皇帝をば事實、此の世に於ける生き神の如くに、信じて居つたロシヤの農民たちが終ひに叛亂を起してミス／＼無頼徒に、殆ど王族全部の殺害を許すに至つたではないか。丘氏は『今日最も信者の多い宗教と云へば、佛教、キリスト教、マホメツト教などで其の信者の數は孰れも何千萬か何億か有らう。然し、單に信者が多くあると云ふだけの理由で、其の宗派の開祖を空前絶後の大偉人であつたと斷定する論法には、我らは如何にしても點頭く事は出來ぬ、信者の多いと云ふ事は開祖の説く所を聞いて、徹頭徹尾感服してしまふ程度の腦髓の持主が多いと云ふ事實を示すだけで、恰も、燒けた家數の多いのは木造の家屋が多かつた爲であるのと何の疑りもない。若しも世間がヘツケルやハツクスレーの如き人間のみであつたならば、如何に熱心なカトリツクの宣教師が教を弘めやうと努めても、恰も石造や煉瓦造りの列んで居る町に火を放たうとするのと同樣で、全く無效に終るであらう。これに反して、天理教でも大本教でも、其れを聞いて直に引き込まれるやうな人間の多い世の中では、忽ち多數の信者が出來る。されば信者の多い宗教の開祖を唯それだけでも已に偉人であると考へるのが誤なるのみならず、愚昧な人間ばかりの世の中に多數の信者を有する樣な宗教ならば其の開祖もやはり愚昧者の一人であつたと見做すのが當然であらう。何故と云ふに、愚昧ならざる者の説く所は愚昧者に取つては全く猫に小判、馬に念佛で、到底耳に入らぬか、である。」と云はれて居るけれども、之れは只、單に煙に卷かれて居る多くの連中を、眞に火に燃えてゐるものと思ひ誤られての議論ではなからうか。何千萬か何億か、所謂信者の數はあるとしても、其の中で眞に、ヘツケルやハツクスレー等を進化論信者であると云ひ得ると全じ程度に、佛教信者であり、キリスト教信者であり、同教信者であると稱し得る人間の數は或ひは今日全世界に居る進化論信者の數よりも少ないかも知れない。さうして其れ等の人々は、何れも煙に卷れて燻つてをる木製家屋ではなくて、皆、燃え上つて居る石造鐵骨の家屋なのである。之れは丘氏が石造煉瓦造の家にたとへられたヘツケルやハツクスレーがダーヴイン・ウオーレスの思想の火によつて盛んに燃え上つたのと同じ事情であるのだ。思想の火によつては、石や鐵で造つた家が却つてよく燃え、マツチ箱の如き木造の家などは燻ぶるばかりで極めて燃えが悪い。だから彼れ等の間

には昨日キリスト教徒かと思へば今日は早や大本教徒であり、けふ佛教信者であるかと見れば、あすは天理教に歸依すると云ふ様な事も起り得るのである。

もし、丘先生の言はるゝ如く『下等動物から人間までに進化し來つた幾千萬年の歴史を背景として』眺むるならば、勿論、『普通の人間と、所謂偉人との差の如きは、實に僅少なものである』に相違ない、けれども其れは地球の直徑を單位として地表の凹凸を計つて、地球の表面には殆と何等の高低もない、と云ふのと同じ様な論法ではあるまいか。然し乍ら、素より斯う云ふことは見る人の立脚地の模様如何によつて異なるのが當然である。筆者の如く、今なほ低い原野の中を歩みつゝある者は、自分の眼の　にも、右手や左手にも、幾つかの山を認める事が出來、更らに後の方を振りかへつて見れば、實に雲を頂きたる連山高峰の遠くはてしもなく續いてゐるのを見る。さうして『高い山』だと云つて褒める言葉などを他の人々からきかなくとも、自分自身で『高い山』だと認めて其れ等の山々を仰ぎ見るのである。まう少し具體的な、眼の前のものに就て書く、今は曉の五時五分前だ。光をゼイタクに使ふ筆者は百燭の電燈をつけ（半ばそれによつて眠けを逐ひやり乍ら）ペンを走らせてゐるわけなのであるが、遠い〳〵太古の事などをわざわざ心に想ひ浮べて見るまでもなく、只、自分の小學校時代のまだ東京でさへ石油ランプで用を足してゐた頃のことを頭に考へたゞけでさへ、自分は自分等の爲めに此の有難い電燈といふものを發明してくれた偉大なる先祖に對して衷心からの感謝を禁ずる事が出來ないのである。自分に取つては電燈の發明者がエヂソンであらうが誰れであらうが、そんな名前などは問題でない、兎に角、其れを發明し改良して人類全體に獻げてくれた人々、及び電燈の發明改良を誘致するまでに、其の根柢となる原理の研究に從事した學者の全部に對して心からなる感謝を捧げるのである。仝じ意味を以て自分は、今、丁度五時を打つた柱時計を見上げても、やはり、人類の爲めに『時』といふ感念や智識を深く且つ精密にしてくれた多くの天文學者や數學者、さうしてまた斯う云ふ便利で、精巧な時計と云ふ様な機械を僅かばかりの金で我々が手に入れ得る様にしてくれた所の發明家などの恩を謝さないでは居られない。其の外自分の着てをる衣服を見ても、やはり紡績機を發見してくれた人達の功績を思ふし、また例へばいま字を書いてをる机の板の事を考へてさへ、我々は我々人類に初めて『鋸』や『鉋』といふものの使用を教へてくれた人達の恩を忘れることは出來ない。たとひ今日、一個の電球や、時計や、乃至は鋸や鉋等が如何に價の低廉にして

つまらぬものであるにせよ、自分は其の價が低ければ低い程、世の中の人から輕く見られてをればをる程、なほ更らに、其れの發明利用に貢獻のあつた人達の恩を心に深く感じて感謝の念に滿たされざるを得ない。自分はさういふ人達をみな『偉人』であつたと思ふ。さうして、たとひ、自分は、今の世の中に於て現に、其れらの電球や時計や鋸や鉋……等を製造し、供給して下さる、職工の人々や、工業家、乃至は或る意味に於ては商人等の恩をも感じないわけではないのであるが、然し、自分が其れらのものを人類の爲めに初めて發明し、使用を教へてくれた所の人達に對する尊敬や感謝の念は其れよりも更らに更らに遙かに大きなものだ。丘氏は同じ論文の中に於て「若しもニユートンが引力の理を發見しなかつたならば、今日まで、引力の理は誰に 發見せられず 終つたであらうか。若しもワットが蒸氣機關を發明しなかつたならば、今日まで誰も蒸氣機關を發明せずに濟んだであらうか。何億と數へる多數の人間の中には頭の相應によい者が何時の世にも幾千人か、幾萬人かは必ず居るであらうから、若しもヒンツが發見しなかつたならば、恐らくクンツが發見し、マイエルが發明しなければミユレルが發明して、時機が到着した以上は、誰かゞ發明せずには置かぬであらう。而も同一物の發見はたゞ一回に限られてある故、一人が發見してしまへば、殘りの者は發見者たるの機會を失ふこと、恰かもたゞ一本の當り籤を他人に取られたのと同じである。されば發明發見を爲し得た人と、爲し得なかつた人との差は、單に籤に當つた人と籤に外れた人との差に過ぎぬ如き場合も常に有ることゝ思はれる故、發明、發見を爲し得た人々だけを他の者より遠く離し、遙かに優れるものとして特別に尊敬することは少しく理窟に合はぬ樣である。』と指摘して居られ、筆者なども、人類の過去の間には、今日世の中で明かに名を知られて居る大發見者や、大發明家や、其の外、一般に、大學者、大思想家、詩聖、名僧、名君、……以外に、其れ等の人々と同等或ひは其れ以上の立派な人達が生存し、そして實際に偉大なる仕事を爲し遂げ乍ら不完全なる世の中に於ける何等かの事情によつて、人には名を知らるゝこともなく死んで行つて終つたといふことも、恐らく尠くはなかつたことゝ信じて居るので、實に丘氏の云はるゝ通りであると同感に堪へぬものではあるけれども、然し單に其の理由のみによつて、今日まで其の經歷や、實際に偉い仕事をして行つたことの明かに知られてゐる人達までを、より少く尊敬す可きであるとは思はない。ヒンツでもクンツでも、AでもBでも、名や人物の經歷がよく知れてゐやうが、或ひは何も傳はつてゐまいが、そんな事は我々の問題とす可き點ではないので

あつて、我々は只、有名なると無名なるとを問はず、ほんとうに我々人類の爲めに功績のあつた偉人を我々の先生とし恩人として敬へばよいのである。決して何から強ひられたり人の猿眞似をして敬ふのではなく、さう云ふ人々に對してはほんとうに自分の心の底から、尊敬の念がひとりでに湧き出して來るのである。その心持ちを『奴隷根性』であると呼ばれるならば、さう呼ばれても我々は滿足する。實際、自分等は、ほんとうの意味に於て偉い人の爲めには（それがたとひ人間としての多くの欠點を持つてゐる人であつたとしても）暴力によらず強制さるゝ事なく自ら進んで忠實なる奴僕となり度いとさへ希ふのであるから。

　我々は自分等人類の過去の長い歴史の間に、實際、さういふ偉人の數多くあつたと云ふ事を知つて居る。我々は今もなほ平原の上に立つて、其れ等の山々の頂きを仰ぎ望むのであるが、然し乍ら、我々が今立つてをる其の平原ですら、もし此れを我々が曾て原人の狀態にあつた頃立つてゐた所の、水平線の高さに比べるならば、其れは既にまう可成りの海拔に達した高原である。昔し〳〵我々の祖先が山であると思つて仰ぎ見たもので、今はまう此の平原よりも、遙かに下の方になつて將に忘れられ樣としてゐるものも多い。けれども曾て人々の立つて居る平原の上にさういふ山や峰があり、其れを人々が登り〳〵つて來たといふ事が、實に、今、我々をして、此の海拔の所にまで達し得せしめた原因なのである。水平線の下にある深海の深さや、また其の底から地球の中心にまで達する距離の如きは、我々が山の高さを考へる際に、まづ計算に入れなくともよいであらうと思ふ。

　筆者が『偉人』と云ひ、『先覺者』と考へるのは、思想の方面に於てゞもよく、或ひはまた物質の方面に於てゞもよいが、兎に角、我々人類の生活といふものを一寸でも五分でも、全體として上の方に引き上げてくれた人達である。あゝ若しさう云ふ人達が自分の周圍を顧慮することなく、自分一人で氣の向くまゝに、さうして、自分が天から與へられた異常なる向上力のあるにまかせて只獨りだけでテク〳〵と道を登つて行つたのであつたら如何に其れらの人々の生涯は平安なるものであつたであらう？　けれども、不幸にして、さう云ふ人々に限つて、周圍の同胞を遺して、自分だけが道を辿らうといふ氣分にはだうしてもなり得ない。彼れには、かう云ふ道を登つて行けば必ず斯く〳〵の幸福なる場所に達し得ると云ふ信念があり、自覺がある。彼れは其のことを自分の愛する同時代者にも説き知らせ度い、けれども其れは周圍にをる多くの同時代者に取つては、猫に小判、馬に念佛であつて『到底耳に入らぬのみか、却つていつも、必ず迷惑なことゝ感ぜられるのである。たしか佐々木信

網氏のうたに『盲ひたるひとのみ多きそがなかに、明ける一人ぞ淋しかりける』とか云ふのがあつたと覺えるが、何も歴史の中で先覺者と思はれ、偉人と思はるゝ樣な人々は必度みな、さう云つた樣な淋しみを胸に抱いて死んで行つた人であると思ふ。普通の火であれば木で造り紙で張つたマッチ箱の樣な家に最も容易く移し得るのであるが、思想の火の場合には却つて之れが反對であつて、勿論貧弱なる思想であるならば直ちにマッチ箱にも燃え移るのであるけれども、思想其のものにが堅實して根據あるものであればある程、もし其の思想の焔によつて盛に燃え上らしめむと欲するならば、先づ第一に貧弱なる木造紙製の家を少くも或る程度まで頑丈なる鐵骨石造のものに改築せしめ、然る後、其の内に火を入れ油を注ぐ必要があるのである。けれども斯くの如き家屋の建て直ほし、卽ち理智、自覺に乏しき一般大衆の心を必要なる程度まで組み立て直ほすと云ふことが餘りに難事であり、民衆に却つて多くの苦腦を與ふるものであると考へた時、先覺者の或る者は已れの親切心からして、巧みなる技術を用ゐ、火焰の方の性質を變へてゐる事もある、例へば佛教の中で小乘に屬する教への如きは、やはり其の樣な主旨のものかと考へられる。前述の如く丘氏は『愚昧な人間ばかりの世の中に多數の信者を有する樣な宗教(や思想)ならば、其の開祖もやはり愚昧者の一人であつたと見做すのが當然であらう』と云つて居られるけれども、何も、自分から先きに氣のついた者と一般の大衆とが、必ずしも對等で行かなければならぬものとは限るまい。なだめる事も、慰めることも、或ひは時には方便として、敢て大衆をだます事さへも、古代の聖賢の親切心はやつてをるのである。小乘の教だけであつたら、いかぬかも知れぬけれども『愚昧ならざる人々』の爲めには、とてもマッチ箱には移し得ざる樣な大乘の教火をも別に準備してをるのであるから決して差し支へないのではないかと思ふ。

然し乍ら、自ら進んで、自覺なき大衆に媚び、其の歡心を買はむと欲するが如き所謂『民衆政治屋（デマゴーグ）』的の思想であらざる限りは、さうしてまた直接、民衆の日常生活と直接に重大なる利害交渉を持たぬ如き高遠なる學理上の發見であらざる限りは。たとひ先覺者が自己の親切心よりして或る程度までの技術を用ゐたとしても、やはり一般の人々は其れを好まずして、彼れをば壓服し迫害したのが常である。或る者は殺され、或る者は投獄せられ、流謫せられ、或ひは然らずとも極めて少數の例外を除くならば、みな少くも其の前半世は悲慘なる境涯の中に歲月を重ねた人々である。さうして、さう云ふ人々か、自分等の同時代者から與へられた罵詈嘲笑、愚弄、侮蔑をば暗涙と共に押し

ぬぐひ、追放投獄等の幾多の迫害に堪へ忍び乍らも奮闘を續けたる應報として、或ひは更らに、彼れ等が宗教裁判所（インクイジション）の忌諱に觸れて生き乍らに焚き殺されたるいのちの代償として、實に我れ等人類は、はじめて己れの住める地球と、其れと太陰、太陽及び他の天體との關係をも知り、また人體内部の構造をも正しく知り得るに到つたのである、其の他、アメリカの發見も、種痘の原理の闡明も、……何れも同じ樣なる先覺者の苦惱血涙が生み出したる貢獻ならざるはない。

カーライルは彼の有名なる『英雄論』（"Heroes, Hero Worship and the Heroic in History"）のはじめに

"A large topic; indeed, an illimitable one; wide as Universal History itself. For, as I take it, Universal History, the history of what man has accomplished in this world, is at bottom the History of the Great Men who have worked here. They were the leaders of men, these great ones; the modellers, patterns, and in a wide sense creators, of whatsoever the general mass of men contrived to do or to attain; all things that we see standing accomplished in the world are properly the outer material result, the practical realisation and embodiment, of Thoughts that dwelt in the Great Men sent into the world: the soul of the whole world's history, it may justly be considered, were the history of these." と言つて、もしも丘氏の御議論に從ふ可きものであるならば、大いに『奴隷根性的』である所の欽仰の辭を『英雄』『偉人』に對して捧げてをるのであるが、今、筆者は此の言葉を讀むに當つて、其れを彼のニイチエが後に說きはじめた "Uebermenschen" の思想におもひ合はせ、且つまた、年代から云ふと丁度カーライルとニイチエとの間に來る所の、ドストイエヴスキイが『罪と罰』との中で小說の主人公である彼のラスコルニコフをして、實に恐ろしきまでに遺憾なく言ひ表はさしめて居る『超人』の考へに對照して、大なる興味を感ずるものである。同書の第四講『布教者としての英雄』と題してルーテルやノックス等を論じたる部分でカーライルはまた次ぎの樣なことを言つてをる

"The Priest a kind of Prophet; but more familiar, as the daily enlightener of daily life. A true Reformer he who appeals to Heaven's invisible justice against Earth's visible force; knows that it, the invisible, is strong and alone strong."

"Doubtless it were finer, could we go along always in

the way of *music*; be tamed and taught by our Poets, as the rude creature were by their Orpheus of old. Or failing this rhythmic *musical* way, how good were it could we get so much as into the *equable* way; I mean, if *peaceable* Priests, reforming from day to day, would always suffice us! But it is not so; even this latter has not yet been realised. Alas, the battling Reformer too is, from time to time, a needful and inevitable phenomenon. Obstructions are never wanting; the very things that were once indispensable furtherances become obstructions; and need to be shaken-off, and left behind us,—a business often of enormous difficulty.

"Forms of Belief, modes of life must perish; yet the Good of the Past survives, an everlasting possession for us all."

たとひ此の場所に於てカーライルは『爭鬪的改革者』なるものを僧侶や布教者のみに就て論じてをるのであるが、さういふ人々の存在した事、及び其の出現が"from time to time"に必要であるといふことは勿論何も此の方面だけに限つたわけではない。さうして『改革』といふことは、人生の何れの方面に於ても、たとひ其れが極めて些細なる問題に就てゞあつても、實に非常に難しいことなのである。デマゴーグ式の思想であり議論であれば或ひは一時、マッチ箱的に貧弱なる多數の頭腦の中に受け入れられて行くこともあらうけれども、其れが複雜なる根據のある思想であればある程、堅固なる基礎の上に立つた主義主張であればある程、新しいものは、周圍の全てのものから拒絶せられる。周圍の人々の間に反抗の力が起る、或ひは彼れ等が比較的に無關心であつて、ことさらに反抗せざる場合に於てすらも、其處には重々しき『慣性』と名付くるものが、(物質の慣性よりもなほ一層執着力强く)人々の精神の中に存在し作用する。だから迫害とか嘲弄侮蔑とかいふ事は殆ど全ての先覺者、先驅者が、與へらる可き所の運命なのであつて、如何なる人生の方面に於ても、此の事情には異いがないのである。例へば、人の心が親しく手で吟味しまた眼で見ることの出來る『事實』といふものに最も重きを置いて、舊來の制度や思想などに捕はれることが最も少なかる可き自然科學の方面に於てすら、新しきものに對し思想上の慣性や愛着心によつて與へられる壓迫と云ふものは大きい。一例を云ふならば生物の種の由來、竝びに其の進化に關する思想の方面に於て、たとひ今日の所謂『進化論』なるものを大成したる彼のダーウィン自身こそは、(研

究上の苦心や努力は勿論あつたに違ひないが）極めて圓滿なる貴族的生涯を平安の裡に送り得ることを得たれ、彼れに先立つこと五十年、丁度ダーヴインが呱々の聲を擧げたばかりの一八〇九年に早くも "Philosophie Zoologique" なる著書を刊行して、はじめて『進化論』の基礎を築きたるラマルク、或ひは其の同僚であり熱心なる賛成者であつたヂョッフロア・サンチイレール（Geoffroy Saint-Hilaire）の如き眞の先覺者達は、其の當時大ナポレオンの信頼を得て絶大なる權威を有しゐたるキューヴィエーのCataclysme說に對抗して如何に悲慘なる惡戰苦鬪を續けて、然かも何等の効果がなかつたか!!!

彼等が贏ち得たる所は只單に周圍からの冷笑と壓迫とのみであつたのだ。事情に多少のちがひこそあれ、今日殆 流行的の盛大を來たして居る遺傳學の方などに於ても、其の開祖たるメンデルの生涯は、彼れ自身此の世に生きてゐた間に於ては、聊かに報いられざる不遇のものであつた。實例はまことに、枚擧する暇もなき程に多い。まことにカーライルの言ふが如く我れ等の世界歷史なるものは、畢竟するに（或ひは少くも十中八九まで）『偉人』の歷史であるのかも知れないが、然し筆者の考ふる所によれば、此に言ふ『偉人』なるもの丶中には、大別して確かに二つの種類がある樣に見える。一つは、其の生れ出た時代の『流れ』と『勢ひ』とに身を乘せて己れの非凡なる力を用ゐた『偉人』達である。彼れ等は既に同時代者の間に於ても欽仰と驚異との的となる、さうして實際、彼れ等の爲し遂げたる仕事たるや、人々の眼の前にあつて、如何にもスバラシくあり、偉大であるのだ。けれども、其の偉大とスバラシさとは、素より彼れ等自身が生れ乍らにして具備してゐた非凡なる力其にもよるのではあるが、其れよりも更らに大なる要素となつてをるのは、其の時代の『流れ』であり『勢ひ』の力である。彼れ等は恰かも、潮の流れに乘じ順風に帆を擧げて疾走した大船の如きものであつたのだ、だから彼れ等自身の用ゐたる力が十であつた時にも、船は大衆の歡呼する裡に能く百だけの距離を走ることが出來たのである。然るに、第二の種類に屬する『偉人』達は、不幸にして生れ乍ら時代の流れに順行し、風の向きに從つて進むことを、だうしても爲し得ぬ樣に運命づけられてゐるのである。彼れ等はたとひ己れの眼の前に潮が奔流するのを眺めても、其れが自らの行く可き方向でないと考ふる以上は、どこまでも流れを横切り、怒濤を突き貫いて進んで行き、また、如何に強い風が吹き荒んでゐる樣とも、己れの行く可き方が、もし其の風上にありと信ずるならば、其の風に逆つても歩んで行く。誰やらの歌に『男子なり、かたしとてなど已むべきや、み

ちなくば道をつくりても行かむ』とかいふのがあつたが、彼れ等は何物をも恐るゝことなく野でも山でも、谷でも海でもを越えてどこまでも自分の到達せむとする所に達し様とするのである。然し乍ら、斯う云ふ様な彼れ等の踏んで行く道が、第一種の人々の執る道に比べて、遙かに困難の多いものであると云ふ事は言はずとも知れて居る。前の道を採れば、十の力を以て能く百里を疾走し得たものが、もし第二の道を選んだ場合には千、百の力量を使ひ盡して、なほ五里の近距離を辿ることすら出來ぬ様なことが多い。況んや其れ程の偉大なる力なき者に於ては、一進一退しつゝ極めて近距離の間を彷徨しつゝあるあひだに、終ひに力盡きて、其のまゝ悲慘なるのたれ死の運命に終るのが普通である。だから、第一の種類に屬する『偉人』達が、殆ど一つの例外もなく、青史の上に其の名を歴々と留めて居るに反し、第二の種類に屬する『偉人』達の中には極めて見榮えのせぬ生涯を終へて、世に其の名を知らるゝこともなく無緣塚の中に消えて行つてしまつた様な人々も甚だ多い。

筆者は今こゝに、此れ等二つの種類の『偉人』達の中で、何れの型(タイプ)に屬する方が、より偉大であるかなどゝ云ふことを論じ様とする者ではない。我れ等人類の文化を今日の程度まで引き上ぐることの爲めには、其の何れもが是非とも必要だつたのであり、何れの型(タイプ)に屬する『偉人』でもが、みな各々我々の爲めに有用なる貢獻をしてくれたのである。けれども、自分が只玆に特筆大書して置き度いと思ふ一つの事は、人類の過去の歴史が示す第四の事實として、『エネルギーの不滅則といふことは人間の精神の上にも確かに存在する』といふことである。もし十の力を以て、二十ケ年の間、時流に抗して不斷の努力を費した人があつたとしたら、たとひ其の人が、只數尺乃至數間の地歩を進み得たゞけに過ぎなかつたとしても、其の人の費したる精神的のエネルギーの効果と、いふものは何處までも不滅であつて、そして其れは、百の力量を所持し乍ら、時代の潮流に身を乘せ僅か一年にして千里の遠きに走したる『偉人』達の精神的エネルギーの效果よりも却つて遙かに大きく且つ強くある。

自分はいま玆に『エネルギーの不滅則』といつた。然し乍ら實を云へば、我々の精神上に於ける力の働き方、人の心と心との間の關係を説明せむが爲めには、單に『不滅』と云つただけではまだ餘りに不充分であり、不滿足であるのだ。其れは決して只單なる不滅といふことだけではない。其れは成長し、増殖する所の強き力である。其れは眼に見えざる焰であり、光明であり、人各々の心に入つて、其れに力を與へ得可き酵素(エンチーム)である。今日、支那に於ける新人の間に大なる勢力を有つて居る

胡適君の詩に『野に一本の柏の木が立つて其の枝を空の方に高く擴げてゐた。然るに一人の老爺が來て、何故か其處に其の木のあることをば都合惡しと思ひ、己れの爲めに好ましからぬと考へて、或る日斧を持つて來て、其れを根元から切り倒ほし、其の幹や枝を割り碎いて火にくべて燒いてしまつた。さうして其の幹や枝や全てのものが燒け盡されたのを見て、老人はまう滿足して云つた——あゝまう之れでよい。之れでまう何も心配することはないと。けれども秋が過ぎ、冬が終つて其の次ぎの春がやつて來た時、こちらの落ち葉の蔭、あちらの叢の中……と云ふ樣に、あちらにも、こちらでも、かくれてゐた種子が皆一齊に芽を出し根を下した、さうして、其れから幾多の歳月が經過した時、其の原の上にはまう立派な森が鬱葱と茂つてゐるのが見られたけれども、昔、其の親樹を伐つた老人の行衞に就ては、既に誰一人として知る人もなかつた。』と云ふ樣な意味を述べたいがあつたが、支那の現狀を考へさうしてまた、自分自身か親しく知る機會を有つた、北京大學教習としての胡適氏其の他の同志の奮鬪振りを思ひ浮べる時、筆者は此の比喩の中に、殊更らに深い興味を感ずるものである。まことに驚く可くも偉大なるは我れ等の祖先中の人々が我れ等に殘して行つた精神的種子の力である。親樹となつた其れ等の人々自身が、

如何なる程度まで幹を太くし、枝を張り得たかと云ふ事などは、此の場合殆ど問題とならない。我れ等は事實、現實として築かれ、今日までもまだ我れ等の眼前に殘されて居る彼のピラミツドの幾つかよりも、寧ろ一粒の精神的種子から遙かに大なる力を取り出し得るのである。ロングフエローは"What the heart of the young man said to the psalmist."と銘を打つた、さうして、彼れ自身で後に"I kept it some time in manuscript, unwilling to show it to any one, it being a voice from my inmost heart, at a time when I was rallying from depression."と追憶を述べてをる、あの名高い"A PSALM OF LIFE"と云ふ詩の中にうたつて

"Lives of great men all remind us
We can make our lives sublime,
And departing, lieve behind us
Footprints on the sands of time;
Footprints, that perhaps another,
Sailing o'er life's solemn main,
A forlorn and shipwrecked brother,

Seeing, shall take heart again."

と書いて居るが、例へば、早いはなし、玆に書きつけられたる此の八行の文字の中に、たとひ百隻の弩級戰艦をズラリと竝べて見せてもらつたとしても決して受けることの出來ぬ樣な根强い力を、直ちに感じ得る人は、此の筆者以外にも勿論數多くあることゝ信ずる。

まことに畏る可くも賴もしきは、人間が眞劍になりたる時、發現したゝ精神の力である。或る程度まで、此の力が、根氣よく、執念深く加へらるゝ時、烈風も其の向きを轉じ、潮の奔流も其の進路を更め、其の風と潮とは、未だ自覺なき大舟小舟の數を乘せて、新たなる彼岸に達せしめ樣とする。さうして斯かる時、人の精神力の働く法則たるや、決して我れ等の所謂、普通力學のそれと一致するものではないのだ。其處ではエネルギーが、只單に不滅に過ぎないのに反して此處ではエネルギーに成長があり、增殖があり、一プラス一で二となると云ふ數學以外に、此處では其れが三〇になり、五〇になり或ひは百にもなり得るといふ別の數學が考へられるので　るから。斯くして、筆者が云はむと欲したる、人類の歷史に現はれたる第四の原則は、たとひ其の舞臺の日本なると他國なるとを問はず、以上の如き意味に於て『精神上のエネルギーの不滅である』といふことである。

"I shot an arrow into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For so swiftly it flew, the sight
Could not follow it in its flight."

"I breathed a song into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For, who has sight so keen and strong,
That it can follow the flight of song?"

"Long, long afterward, in an oak
I found the arrow, still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend."

之れは同じくロングフエローが自分では何氣なく書きつけたのだと云つてゐる『矢と歌』と題した短詩であるが、實に極めて面白い比喩であると思ふ。岐路にはいつて、これだけのことを書き置いた上で、自分はいまからまたあらためて上段四乃至六頁

の條に立ち還り、我が國に於ける憲法發布、議會開設當時の事情と、近代のロシヤに於ける立憲政體の採用に到るまでの由來沿革をひき較べて出來るだけ公平に其の異同を考へて見度いと思ふ。

明治維新の革命によつて我が國にはまた再び、遠き古代に於けるが如き、天皇の御親政を見得可きことゝなつた。徳川幕府なるものは、兎に角、曲りなりにも、國內に三百年間の平和を確保して來た中央政府なのであるから、もとより幾多の功績をも有してゐたには違ひないのであるが、然し畢竟するに、其れは淸盛や賴朝の政府以來、北條、足利、織田、豐臣と續いた歷代の武人政府、乃至、更らに其れよりも以前に溯つて見られた藤原氏、蘇我氏の一門等による有司階級の專制政治などゝ同じく、我が國體に取つては病的なる制度であり現象であつたのである。日本は何處までも『君民一體』でなければならず、『皇室中心』でなければならない。天皇が萬機を總攬し給ふ時、君側にあつて輔弼の任に當る所謂『有司百官』なるものは何れも皆人民其のものゝ代表者であり各々其の職務の爲めに最もよき適任者であるとして人民の中から選び出されたものである可き筈なのであつて、決して『庶民』などゝ云ふものから、かけ離れたる『特殊、特權階級』など云ふ可き、意味のものである可き筈ではない。蘇我の入鹿は決して日本人民の代表者ではなかつた、藤原の道長も、平淸盛も源賴朝も、北條義時や高時も、みな人民から選び出されたものではなく禍なる特權階級の產物であつた。然るに一と度び首尾よく建武の中興となり、天皇の御親政が可能となつたにも拘らず、また再び其れが、『逆賊』とまで呼ばれた足利の天下に平氣で遷り變つて行つたと云ふものは所謂『勤王家』と銘を打たれた人間の間にも、また君側に侍して直接國政に參與した公卿達の間にも、極めて少數の例外を除けば、日本人民の代表者ならぬ點に於て、また其の胸や腹にあつた心根の價値に於て、尊氏、直義の輩と五十歩百步の連中が多かつた爲めである。『皇室中心』の主義、精神が國民全體の心の底に宿つてゐたと云ふことは、流石の尊氏等をして北朝擁立を餘儀なくせしめたことなどによつても、わかることであるが、然し、其の頃の歷史を讀み乍ら考へて見ると、當時、此の精神が、一般に云つて、可成りにまだ微弱なものとなつてゐたと云ふことを想像せざるを得ない。もしさうでないとしたら、どうして南朝が滅びて、足利の天下が十何代も續き得たであらうか？　事實、其の當時は『君民一體』とか『皇室中心』とか云ふ精神は鈍つてゐ、一般の國民は廟堂に立つて國政を司る人

々の素性に對して可成りに無關心であつのたである。權勢に阿諛し屈從するといふ國の病が、既に可成りの程度に迄で進んでゐたのである。群雄割據の戰國時代も、織田、豐臣の時代も、素より此の病氣の繼續と見なければならず、而して德川三百年の治世の如きは、實に其の病ひ、膏肓に入りたる時代だつたのである。

然し乍ら、健康を失ひたる生物の體が、いつも必ず、あらゆる方法を以て（意識なき中に於ても）元の健康狀態に復歸せむとして、不斷の努力を續くるが如く、此の日本といふ國の體の中にも、不自然にして不合理なる長年の病的狀態より癒えて、眞の健康狀態をば實現せむとする希望や努力は、人々が意識せざる間にも、また人々の眼に認められざる處にも、暗々裡の中に生れ且つ動いてゐたのである。其の力が或る度を越えて强くなり、聲となつて現れたのが、尊王賤覇論の先驅者であつた所の熊澤蕃山とか、水戶光圀とか、山崎闇齊……などの議論であり著書であつたと解してもよいであらう。彼れ等の發したる聲は、其の後、數十、百……年を距てゝ、次第に共鳴する心の數を增し、終ひに谷を吹く風の方向をも變へた。さうして彼れ等の發したる焰は其の後二百有餘年にして、終ひに日本全國に燃え及んだ維新革命の大火の火元となつた。けれども玆になほ、我れ等が問題として考ふ可きは、其の大火に際して全國に燃え上りたる無數の家の中でどれだけが石造であり、不燃性の建物であつたか？　即ち（一九頁の意味によつて）どれだけが、自覺を持ち自ら根柢を有する、燃え方をしたか？　さうして、またどれだけ多くのものが、木と紙とで貼つたマツチ箱の如く、附和雷動的の無自覺な燃え方をしたものであつたのか？　といふ事である。言葉を換へて、此の點をもつと具體的に云つて見れば、所謂『鎖港攘夷』の是非に關する自覺が果してどの位の程度のものであつたかは別問題としても、既に『尊王』といひ『倒幕』と宣言したる以上は、勿論『皇室中心』の思想に復歸し『日本』といふ國全體を一つのものと思ひなして、總ての進退、行動を決す可き道理であるのに、不幸にして史上の事實は、多くの場合、『尊王』も『倒幕』も要するに方便としての空念佛だつたに過ぎず、人々は（所謂『志士』といはれた連中も、また公卿達も）、口に『尊王』を唱へ、『倒幕』を叫び乍ら、各々、德川幕府の亞流たる某藩閥、某黨閥……の勢力を扶植する事に急にして、却つて聖明を蔽ひ奉ることすらをも顧慮しなかつたものゝ如くに思はれる。實例はまことに數ふるに暇もない。けれども其の中でも、彼の文久三年の所謂『八月十八日の政變』の如き、また其れに從つて起つた『七卿の都落ち』、『中川宮の

寃罪事件』長州人の京都逆襲による所謂『蛤御門の戰』……等の如きは何れも其の著しき事件である。

其の當時の歴史を讀んで見ると『王政の復古』といふことは決して明治天皇の御代に到つて、始めて成就されたのではなくして、既に孝明天皇の御治世中に、早くも實現されてゐたのであるといふことが解せられる。其の頃のことを讀んでみると、孝明天皇と申上た方は實に英明にして偉大なる君主に在はしました。然し乍ら天皇は極めて穩和なる考へを抱かれ、從つて幾分保守的の主義を持されたからして、御自身は決して『討幕』であるとか、所謂『御親征』であるとか云ふ様な過激なる方策に出ずるの念を持たれたのでなく、また『鎖港』といひ『攘夷』といふことに就ても、其の善惡、日本に取つての利害得失を愼重に御熟考中だつたのであつて、決して『開國』といふこと其れ自身に絶對的反對の叡旨ではなかつたのである。だから天皇は、過激なる言動を敢てする長州派の『勤王』家連や、其れ等と密接に結托しゐたる三條中納言（實美）鷹司關白（輔熙）等の一派を、日頃から決して快しとは思ひ給はずして、着實穩健なる考へを持ち、然かも當時、皇族中にて隨一の人物であつた青蓮院宮尊融法親王を還俗せしめ給ふて唯一の相談相手とされ、（中川宮、後ちに賀陽宮朝彦親王と申す）また却つて、德川譜代の親藩ではあつたけれども、やはり一代の傑物であつた會津肥後守容保（當時の京都守護職）をば厚く信頼して重用されたのであつた。『八月十八日の政變』といふのは長人及び激派の公卿達が、一日も早く己れ等の目的を遂せむが爲めに苦肉の策を講じ、文久三年の八月十三日、聖旨を矯め、叡慮を作つて『大和へ行幸、幕府御親征』の僞勅を發し事を擧げ様としたが、主上の御耳に達し終ひに鈹蛇の結果に終つたのであつて、故吉田東伍博士は此の時の事情を其の著『維新史八講』の中に簡單に次ぎの如く述べて居られる。

『……。八月十五日の晩、中川宮が夜陰午前二時頃、宮中へ御參内あらせられて陛下に段々申上げた所が、陛下には「朕固より大和へ行かうといふ念はない、のみならず全體、攘夷鎖港といふ事が分らぬのに、三條其他の者が近來強勢に騷ぎ出して甚だ穩かならぬ、朕も思ひ煩ひ甚だ困つて居る」といふことを仰せ出された、中川宮は然らば是は止めなければならぬ「止める事が出來るか、」それは出來ます、會津、薩摩に仰付られますれば暴擧も止まります「止まるなら止めろ」との仰せで、中川宮が指揮して薩摩と會津の力を以て激徒を制せよといふ事になつた、十八日の朝に、大和行幸は斷然お止めになる、それと同時に、是より以前に於いて、聖天子のお言葉だ、御綸旨だと云ふ

て出たものには、中間の人の取計で遺亂が多いから、今十八日以後の仰せ出されが眞の詔勅である、即ち大和行幸といふ如きは決して天皇の御叡慮でないと御發表になつた。そこで反對側であつた三條以下の人々が京都を脱して逃げる、七卿都落といふ事になつた、是が文久三年八月の形勢であります』（一四〇―一四一頁）

此に於て、今迄で宮門の守衛に任ぜられてゐた長州藩は直ちに其の役を免ぜられて薩州藩が之れに代り、また、公卿、堂上で僞勅事件に關係したる人々は、都を落ちたる七人以外のものも、各々、免官、參朝停止、閉門等の處分に遇つた。當時三條實美其の他所謂「激派」の公卿達が、專橫にして、少しも叡慮を奉ぜざりしことは、孝明帝の最も逆鱗しをられた所であつて、八月十八日の政變あつて以後、中川宮及び二條右大臣齊敬、近衞前關白忠熙の三人に對して下されたる宸翰の中に、

『元來、攘夷は皇國の一大重事、何とも苦心堪へがたく候。去りながら三條はじめ暴烈の所置、深く、痛心の次第。聊か朕の了簡採用せず、其の上言上もなく浪士輩と申合せ、勝手次第の所置多端、表には朝威を相立て候などゝ申候へども、眞實朕の趣意相立てず、誠に我儘、下より出する叡慮のみ、聊か朕の存意貫徹せず、實に取退け度き段　兼々、各々へ申聞け居り候所、去る十八日に至り、望み通りに忌むべき輩取退け、深く〳〵悅び入り候事に候。解官位の事、急速取計ひ候樣、過日より度々申聞け候所、漸く承知致し具れ、喜悅の事に候。重々不埒、國賊の三條初め取退け、實に國家の爲め幸福、此の上は朕の趣意相立ち候事と　深く悅入候事。和州浮浪の一件（天誅組の亂のことなり）も、容易ならさる事、右はどこ迄も追討申付け候、速かに下知之あり候樣、浮浪も眞實の朕の意を相立候など、依賴にも存じ候へども、三條初め暴烈に隨從、實に同ずべきものに候。早々追討のやう分けて存じ候、長州父子は温和の人ながら、藩士暴烈夥敷く、右は嚴重に罰し度き事に候。各々精勤賴み入り候。是迄度々、暴烈取退け度き段、各々へ申聞け候へども、一向應ぜず、深く朕の身に迫り難儀の所、今日の次に相成り、安心の事に候。今度召し候諸藩上京の上は、朕の趣意貫徹所入る。兎角末の見留なく、暴烈にては後患之れあるべく、深く〳〵心配の事に候也。』とあるのを見ても、また他の處にて

『實美は事を奏する每に、過激に朕に迫りて止まず、甚だしきは巳の刻（午前十時）より寅の刻（翌朝四時）に至りしことありて、兎角に朕の意に滿たさること多し。和宮の事を論じては、關東に於ては既に攘夷の勅諚に背き奉る、是れ違勅の臣なり、違勅の臣には皇妹を配し奉るべきには候はず、宜しく速かに御召還

させ給ふべし、去りながら既に人臣に降り給ひし上は、二たび宮中に御復し申すべきにあらず、宜しく御自害を勸め參らすべしと放言するに至る、此の如きは決して人臣の口にすべきことにあらず　最と惡むべし』云々と宣ふて居らるゝを見ても、三條實美一派や、また其の後盾となつて居つた長州の志士達が、德川幕府を倒さむが爲めに如何程まで手段方法の如何を問はず熱狂して居つたかといふことがわかる。

然し乍ら、不幸にして已れ等の志成らず、仇敵と思ふ會津容保に對する主上の御信任は益々厚く、中川宮もまた政變後十日にして二品親王に叙せられ彈正尹に任ぜられ、隨身兵仗牛車を允され給ふたことなどを見ては在京の所謂『志士』達はゐても立つても居たまらず彼れ等の慣用手段たる流言蜚語を放つて宮及び容保を排し去らうと試みてゐる。中川宮は既にそれよりも以前に還俗せよとの勅命を受けてをられたのではあつたが、御髮の長ずるまで、一時はなほ、法體を改め給はず　丁度此の頃に至つて、はじめて元服し給ふて、御衣冠に改められたのであつたが、反對黨の人間共は之れを好機として『中川宮は帝位に紛らはしき金冠を御烏帽子師杉本美作介に御註文あらせ給へり、美作介其の職にあらざるを以て、再三辭し奉りたりと雖ども、宮聞召されず、美作介恐懼の餘り、終ひに三條殿の許に脫走せり、宮は關東の後援に依りて、帝位を簒奪せんとの陰謀を懷き給へり』など、さも眞しやかに云ひふらし、熊田葦城氏著『幕府瓦解史』によれば、下篇二六四頁 我々が、小供の時代（明治三十年以後）までも、まだ世間でよくうたふのをきいた『坊主頭に金柑（金冠）乘せて、乘るか乘らぬか乘せて見しよ』といふあの俗謡は、其の時、京都にあつた浪士達が中川宮を嘲笑さす可く世の中に流布させたものであるとの事だ。彼れ等の惡辣さはまだ共れのみには過ぎず、斯くする間にまた『中川宮は其の隨身中村源吾なるものを、石淸水八幡宮に遣はして、社務職なる双樹院如實に託し、雉子の牲を供へて、秘密の修法を行はしめ給ふ、右は主上を咒咀し奉るの密計に相違なし。』と云ふ貼り紙をし、流言を放ち、さうして、土州の浪士北添佶摩、能勢達太郎、因州の浪士勝部靜男といふ三人のものが、男山に行き此の如雲といふ者を殺害して、中川宮の陰謀は實際、此の坊主の自白によつて明かであつたと云ひ觸らし、且つ已れ等が一味なる議奏、正親町大納言實德を通じて密かに此のことを叡聞にも達し奉つたのであつた　、幸にして、彼れ等の陰謀も、主上の御聰明を欺き奉るとは出來なかつたのである。其の頃島津久光に賜はつた御宸翰の中に『正親町少將（大納言實德の嗣子公董のこと）は脫走せず候へ共、何分中山家の胤　どうも人質宜しからず候、當時差控

へ申付け置き候へ共、毛利の秀才（サルサブ　いん名）の如く、何等の儀、何時仕出すも測り難く候　右は深き朕の存慮之あり候間　正親町より辭表、辭官位、除席に相成候樣、右の次第に相成候上は又何等の事仕出すや計りがたく候間、質々中山家にて堅く籠居然るべく存候、……』『尹宮（彈正尹中川宮のこと）は從來股肱の連枝、内密申談、會藩を賴み、既に八月十八日の一件に相成、深く喜悦の事に候、……』『三條實美以下七人、暴激私情のみの人體、從來苦心に候所、既に脱走後も種々奸策を廻し、實以て大膽の輩故、嚴重になくては如何と深く存候』云々とあつて少しも讒言には耳を傾け給はず、また中川宮が此れ等の流言の爲めに恐懼し給ふて、言ふ可きことをも言はず、進む可き議をも進められざる事を御憂慮あらせ給ひ　其の年の十二月三日特に宮に宛てられたる御製諭の宸翰には、『長州に附屬の輩、種々申觸らし人氣を惑し、終に余の腹をくつがへす手段と存候』『長州附屬の輩、手廻し足廻し候策略に、尹宮、肥後守、石淸水に於て俯を詐らひ呪咀、尹宮朕が位を可奪候由、例の風說張紙、朕共にたづむ樣なる譯之なく……尹宮に於ても余の腹は十分御見ぬき、余に於ても、尹宮の心底は見ぬき候つもり、一實の連枝と存候に、右樣の姦策が間に合ひ候ては、實に大難故、決して〳〵疑心之なく、相變らず附合ひ之あり度候事』とまで宣はせ給ふて居る、然るにさういふ御宸翰のあつた翌日の四日には早くも又中川宮の御邸の壁に『尹宮、松平肥後守と兄弟の契を結び、鷹司關白の正議を退け、近衞父子、二條右大臣德大寺内大臣の姦惡を擧用候に付、依て天誅を行ふ可き者也』といふ張紙をして宮を脅迫し奉つたものがあつた。とても尋常の手段では宮や會津容保などゝ競爭出來ぬと思つた連中のやつた仕業である。さうして、其の、正々堂々の態度ではない、無理、非常なる方法に出で、暴力に訴へて否でも應でも宮闕を乘つ取り、主上を强要して討幕を遂行せしめ奉らうと企てられたのが其の翌年の元治元年に起つた蛤御門の變で、これは長人が大擧して遠征の軍を起し京都を襲ふて來たのであつたが、然し之れもまた長州方の慘敗に終り、さうして却つて逆に長州征伐の勅令が下るといふことになつたのである。

筆者は素より此の場に於て、我が明治維新の歷史を吟味し樣などゝするものではない、然し自分がだうしても玆に見逃すことの出來ぬ事實である樣に感ずることは既に上に述べた所だけでも幾分かわかる樣に、明治になつてから維新の元勳であるとして拔群の權威を得た人々の重要な部分（即ち公卿の中に於ける三條實美の一派、竝びに多くの毛利藩の人々）は孝明天皇の御在世中は天皇御自身で『實に國賊であり、忌む可き輩であ

る、實に罰す可き者共であると』御最後の時まで宣はれてゐた程の朝敵だつたのであつたのだが、其れが、一朝、孝明帝從然の崩御といふことになると、恰も掌を飜した如くに、忽ち正反對の狀況となつて來てゐることだ。元治元年七月、彼の蛤御門の變のあつた時には、たとひ各藩の中に、多少の中立的態度を持して勝負を傍觀したものがあつたとは云へ、薩藩の如きはまだ依然として命津、桑名、一橋……等の軍勢に與みし、宮闕を防禦して長州兵に當つたのであつたが、其の年の中秋から翌慶應元年にかけて、愈々長州征伐の行はるゝ頃となつては、早くも薩摩は公武一和の方針を見限り、態度を一變して長州に與みし共れと共に鎖港攘夷黨の急先鋒として幕府、並びに公武一和を理想とせられてゐた孝明帝の宮廷を、事實に於て敵とするに到つてをるのである。此の薩摩の態度の豹變は、西鄕や大久保の樣な人々が政治的中心人物として次第に大なる勢力を占める樣になつて來た爲めでもあつたらうが、然し一方では確かに長州征伐其のものによつて、德川幕府の既に無力なることが現實に曝露された所の結果である。薩長の人間達は、之ならばもし己れ達さへ手を握つてやつて行くならば必ず德川を倒し得ると信ずるに至つた、さうして鎖港攘夷の說は、此の時に至つては既に全く『尊王倒幕』といふことに變つてゐたのである。けれども、

其の頃の歷史を讀んで見ると、不幸にして此の筆者などには、彼れ等が（少くも其の中の多數のものが）心底からの鎖國攘夷論者であり、尊王倒幕論者であつたといふことを信ずることが出來ない。成る程、彼れ等が倒幕を目的としてゐたことは事實である。けれども、其の『倒幕』とは、只單に德川幕府を倒すといふ意味なのであつて、彼れ等は（少くも彼れ等中の大多數のものは）もし出來得るならば、其れを倒して後ちに毛利幕府を建設し、或ひは島津幕府を樹立することに恐らく何等の異存を持たなかつたであらうと思はれるのだ。少くも其れ等の多數者に取つては『鎖港攘夷』といふこともまた『尊王』といふことも、畢竟するに己れ等が德川と喧嘩せむが爲めに必要なる名目であり、御念佛だつたのである。其の證據には『鎖港攘夷』をば唯一の大義名分として幕府の非を鳴らし其れに敵對せる最中に於て、彼れ等自らは早くも（薩州では文久三年の英艦砲擊事件、長州では元治元年の英、佛、米、蘭、四國艦隊の來襲を最後として）各々異國との和を講じ交易を開いて武器彈藥等の供給を受け、殊に薩長二藩は英國と特殊の親善關係を結んで、陰に陽に、甘んじて其の助力を仰いでゐたのである。表面上は亡命と稱してのことであるが、彼の伊藤俊輔、井上聞多、井上勝、山尾庸三等が藩の內命によつて英艦に依賴し、英國に留學

の途に登つたのはまだ文久三年のことであつた、さうして其れから二三年の後には攘夷の張本たる長州藩自身に於て、英國艦隊を招き、毛利大膳父子が親しく『醜夷』の接待に當つて共に酒を飲み歡を交へ、更らに親善の證據として其の仇敵の大將たる可き甲必丹(キャピテン)キングなるものを眞中にして寫眞まで撮して居る程の狀態だつたのである。然し其れでもなほ、京都に對し幕府に對しては絕對的なる攘夷論を主張してゐたのだ。封建、戰國の世にあつては、兎もすれば、國家全體の事を考へずして、已れ等が一藩一領のことのみ考へ、まかりまちがへば、外國の力を借りて來て國內の對敵を屈伏し樣と云ふことさへもやり兼ねないものであるのだが、其の事情は不幸にして維新の當時にも同じだつたのであつて、一方に於て、幕府の方にも、竹本淡路守といふ如き外國奉行が出て、三百萬弗の軍資金を賂り、英佛、米、蘭四國の艦隊にすゝめて長州征伐をやらせたかと思へば、また逆に薩長の方の『開港攘夷』家達が幕府に其の仇を報ゆ可く、英國公使パークスに密書を送り、兵庫の開港を幕府に強要し見よ、と意地をつけて終ひに幕末最大の事件たる『兵庫開港問題』を故さらに誘起させて居る。さうして徳川を倒すと云ふ彼れ等の目的の爲めには、此のパークス煽動の策略は確かに絕大なる成功であつたにちがひないのであるが、然し其の爲めに如何程まで主上の宸襟を惱し奉つたか、決して言葉や筆に述ぶることは出來ない。彼れ等の『尊王』といふことも、其の正味を煎じつめたる所は恐らくこんな程度のものだつたのではあるまいかと疑ふ。長人が三條實美に對して有してゐた樣な關係を薩摩の志士は岩倉入道具視に對して持つた。大久保市藏とか西鄕吉之助とか小松帶刀とか……云ふ樣な連中が切りに彼れの許に出入し、終ひに十四代將軍の薨去の頃から、隙に乘じて兎も角も彼れを宮中の大舞臺に立たせる事に成功した。さうして彼れを頭梁に擔ぎ上げたる薩長側の倒幕派が、其の暗中飛躍によつて第一に惹き起したる騷動は、彼の所謂『二十二卿彈劾事件』たるものであつて、之れは將軍家茂薨じて然かも宗家を繼ぎたる一橋慶喜未だ將軍職に就かざるに乘じ、軍政の權を徳川の手より奪つて長州派の宮家を將軍職に薦め、また中川宮を斥け、二條關白を彈劾して、薩州の通家たる近衞前關白忠熙を其の後任に推し以て日本の國政を薩長二藩の手に收め樣とした陰謀なのであつた。慶應二年の八月最終の日に、中御門左大辨經之、大原前左衞門督重德、正親町三條大納言實愛、以下二十二名の堂上達は早朝から打ち揃つて參內し、其の中には、中川宮と刺違へむなどゝ揚言して襦衣を着けてゐるものなどもあり、非常に物々しき有樣だつたのである。二條關白を通じて主

上に謁見を請ひ奉つたので主上は便殿に出御あらせられて一同の意見を徴せられたのであつたが、彼れ等二十二人の堂上が其の時大原左衛門督重徳を代表として奏上したることは

第一、諸侯御召の儀、今に遷延せらるゝは意外なり。早々御決定あるべき事。

第二、天下多事、人材入用の時、戌年（文久三年、八月十八日政変）以来幽閉の面々御赦免の事。

第三、長防解兵の事は朝命を以て断然御沙汰相成るべき事。以上今日中御評議あらせられ御首尾相伺ひ退朝仕る可き決心の事。

第四、朝廷の御失體少からざるは、幕府より左右するに出る、長防處分の如き、朝廷寛大の御思召の處、幕府の言上によつて變化せらる、綸言汗の如し、朝廷の朝廷たる御體裁を立てさせられたき事。

此の儀は急速には出來申すまじく、能く御評議あるべき事。

といふ四ケ條で、理屈をつければ勿論如何樣にも理屈がつくわけではあるが、要するに薩長派の公卿達を復活させ、長州征伐を中止させ、而して徳川幕府及び、公武一體主義の人々を一擧にして葬らしめ樣と主上に對し強要し奉つたのであつて、重徳等はまた、其の場に於て中川宮をも明らさまに彈劾して居る。

謁見が午前八時から翌曉の午前二時まで十八時間續いたことを見ても、大略、彼れ等が此の時の態度の強硬さを察することが出來ると思ふ。

いま筆者は、此の時、薩長派の人々が採られた方法や態度の是非を論じ樣などゝする者ではない。晩かれ早かれ日本の國體にとつて不自然である幕府政治なるものは、たとひ幕府側に如何なる名政治家が出やうとも、また主上の幕府に對する御思召が如何に厚くあらうとも、結局何等かの形式で倒されねばならず、また實際に倒るべき運命のものでもあつたのだが、然し兎に角、其の當時、一天萬乘の君たる孝明天皇の叡慮は、（決して何も徳川側からの壓迫などゝ云ふことによるのではなく、天皇御自身の理想として）特に衰亡に瀕して來た徳川幕府といふものをも決して全然殺してしまうことなく、やはり其れをば何かの方法に活用して行き、さうして事實上に於ては天皇親政の大義を完全に確立し度いといふことであつた樣に拜せられ、三條岩倉等を擁いで倒幕を絶叫してゐた薩長の運動に對しては天皇は最初から最後までだうしてもよい感じを持たれることが出來なかつたのである。御宸翰の中に三條以下の七卿を稱して（下段二六頁參照）「暴激私情のみの人體云々」と宣はれて居るのを見ると、彼れ等の誠意其のものを疑はしく思ひ、彼々等の唱へた

る『尊王』といふことをも眉唾ものと感じてをられたのであつたかも知れず、或ひはまた、彼れ等の誠意や眞剣さは認められ乍らも、其の主張する倒幕や革命といふことが、たとひ首尾よく成就したとして、なほ畢竟するところ單に徳川幕府を倒して、薩長閥を建てる結果となるに過ぎぬといふことを豫め洞察して居られたのであるかも知れない。實際徳川幕府なるものは文久の頃には、も早や既に亡びかゝつてをつた、只、孝明帝の厚き思召しによつて、其れが幾分、餘命を延してゐたに過ぎない。帝の聖明を以てして、其の無力なる（然し利用し得可き制度や設備は兎にも角にも相當に大きい）徳川幕府を御自分の意志のまゝに改造を加へ、まだ運轉せしめ給ふて天皇御親政の實を擧げらるゝ方が、其れ等の制度をば強いて革命倒幕の砲火によつて焼きつくし、其のあとへ（是れまでとても深く朕の身に迫り難誰……』されたとまで御告白になつてをる、長州一派の『暴烈』なる『勤王』家達（上段三四頁の御宸翰参照）の政府などを新たに樹立し、或る意味に於て更らに第二の幕府を出現せしむるよりも、遙かに王政復古の捷徑であるといふことが、おわかりにならなかつた筈がないと思ふ。天皇の御治蹟を讀んで見ると、我々は只々、其の御偉大だつたことに驚嘆する外ないのである。外の時代ならば、いさ知らず、此の孝明帝の時に於てのみは、たとひ幕府（殊にあの様に衰亡に瀕してゐた幕府）が如何に聖旨を左右し様と努めた所が決して其の爲めに叡慮が變る様なことは、有り得べき道理がないので、上記二十二卿上奏文の第四の如きは、實に天皇の御聖徳を侮辱し奉るにも程があると言ふ可きであるのだ。此の場合に當つても、天皇の御聰明さは、審さに十八時間に亘る激派よりの上奏をきこし召されたる後の御裁決によつて窺ふことが出來る。熊田葦城氏の幕府史には其の時の有様が次ぎの様に述べられてゐる（下巻七二五―七二六頁）

……重徳（大原前左衛門督）卿を勵まして「然らば第一、第二の御即決を仰ぎ奉る」と迫る、主上早くも其の心事を看破して、痛く逆鱗あらせ給ひ、屹と重徳等に向はせ給ひて「唯今、汝等の奏するところは、皆瑣事のみ、國家の大事にはあらず、昨冬の兵庫開港の如き事こそ、眞の國家の安危に關する重事なれ、汝等若し眞に憂國の念慮あらば、何ぞ此時を以て忠言を奏せざるや、然るに當時は一言の可否をも言はず、今俄かに黨を結び、衆を擁して來り迫る、是れ何たる不敬ぞや、疾く〱此議を斥く可し。」と叱し給へば、重徳等止むを得ずして退く、此の日の議論辰の刻より丑の刻に至るまで總て九時。

要するに此の時の陰謀もまた全然失敗に終り、堂上や薩長の所謂『勤王の志士』達は、如何に自分等が切齒扼腕し、また三條の橋畔や其の外都の辻々に苦心の張り紙を貼り歩きなどしても、結局、孝明天皇の御目の黒き間は到底己れ等の希望は成就

される見込がないと云ふことを覺悟して、其の後暫くの間は表面上何等の畫策をも企てなかつたものゝ如くに歴史を讀んでも解せられる樣である。然るに如何なる天意であり御運命であつたのか、其の後僅かに三ケ月ばかりにして、あれ程の御元氣だつた主上が、三十六歳の御壯年の身を以て、俄かに崩御となり、さうして、其れを機として、國内の總ての事情が、急轉直下に一變してしまつてゐるのである。昨日まで主上の厚き御信任を受けて國政に與つて居つた中川宮、三條關白、乃至會津容保、德川慶喜……の如き人々は全然局外に退けられ或ひは却つて奸賊と稱せられ凶敵と呼ばれ、之れに反し、昨日まで主上御自身より朝敵なりと宣せられゐたる人々、今日は御齡僅かに十六なる幼帝を擁して朝廷無比の『忠臣』、國家の『柱石』といふことになりすまして所謂『朝敵』征伐を行つてをるわけなのであるが、單に之れだけの事實を見たゞけでも、維新、明治の歴史を通じて、普通世間にいひなされて居る官賊忠奸の判定順逆の區別などゝ云ふものは決して實際の當てに出來るものでないと云ふことがわかるであらう。

誠に々々、孝明天皇の時ならぬ御登遐といふことは、其の後今日に至るまで五十五年間の我が國の歴史に、如何ばかり莫大なる影響を及ぼしてゐる事か、とても〳〵測り知ることも出來ないのである。さうして其の時、天皇の崩御を轉回機として政界に起つた變化の餘りにも急速にして顯著なることは、此の筆者の如きものをしては、天皇崩御の事情の決して尋常一樣のことではなかつたといふことを直覺的に想はしめずしては置かぬのである。一つの本を見ると

『慶應二年十二月十六日、主上遽かに御病あり、御容體甚だ輕からず、二條關白以下諸公卿皆參内し、將軍慶喜及び容保、定敬もまた參内して天機を伺ひ奉る。

既にして主上の御病症は御痘瘡と決し、七社七寺に命じて御平癒を祈る、當時民間には痘瘡の流行を聞かざるに早くも九重の御奥に侵入せることこそ恐懼の至りなりけれ。……御惱苦十日、終に二十五日を以て、登遐あらせ給ふ』

と記してあり、また吉川博士の著には

『……、中山家の日記を見ますと、陛下の御不豫になつたのは十二月の十五日からであつて、御典醫が痘瘡に經驗が無い、何か町醫で痘瘡の醫者はないかと搜す騷ぎ、十日餘の御惱みで、終に天然痘の爲めに御倒れになつた、此傳染の路は、御公家さんの子息の痘瘡が濟んで日も經ずに御所へ出仕して、御傍を勤めた者から傳染なされたので、天然痘の豫防が屆かなかつたゆえに突然と御崩御になりました。』

と云ふ樣に書いてある。人のいのちの事は、結局天の定むる所であるとして、諦めるより外に途がないわけではあるけれども、當時宮廷には、邦國の大體を忘れ、私關を事として薩長に與し

てをつた堂上も多かつたので、自然、斯かる『不注意』も起つたのではあるまいかと思ふ。彼れ等の辛辣さは後に、あらぬ理由を捏造して、已れ等が目上の輝たる中川宮をば流罪に處し奉つた時のやり方を見てもわかるのであつて、之れ等の點は今後、新に日本の歴史を專攻せらるゝ方々にはよく／＼吟味し直して頂かねばならぬ點であらうと思ふ。

幸か不幸か、斯く申す筆者のからだの中には、遠く戰國の世からの武人の血のみが流れてゐる。最近の數世代のみを考へるならば、薩摩と、筑後の立花藩と、備前の池田藩と、それから北の會津藩との血だ。然し本人自身は、少しも其れ等の出生地や、また其れ等の土地から生れた人物などに特別の興味や執着を持つことなく、維新の時の人物としては、越前の橋本景岳とそれから長州の吉田松陰とを好み、分けても吉田松陰の方は、或る年代の間、殆ど彼れを神格化する迄、崇拜してゐたし、また今でもなほ偉い人であつたとは思つてゐる。高等學校の時代筆者はよく、學校をエスしては終日、世田ケ谷の松陰の墓場に行つて勝手な本を讀んでゐたものであつた。實際其の頃の自分は日本に生れた人間の中で此の吉田松陰といふ人物以上に偉い人物は、まだ一人もなかつたと信じてゐたのであつたが、然し其れにも拘らず、彼の松下村塾で其の松陰先生から親しく教へを受けた連中、後に至つて、あの質素で何とも云へない感じのする松陰神社の社頭に、麗々しくも無趣味なミカゲの大燈籠を並らべ立て、然かも其れに自分らの官級や爵位なごまでを彫りつけさせてゐる御仲間には遺憾乍ら一人として感心出來る人のないことを悲んでゐたのである。もしも、あゝ云ふ弟子達が、死んでからあとで松陰先生の前に行くことがあつたとしたら、必ず、頭からヒドイ目に叱り飛ばされた筈である』と其の時も信じ、また今でもなほ信じてゐる『あゝ云ふ不肖なる門人共や僞王攘夷家達に比べるならば寧ろ却つて、松陰や景岳等を斬に處し、そして自分も終ひに櫻田門で殺された、此の井伊大老の方がほんとうの意味に於ける尊王家により近かつたかも知れず、また恐らく松陰や景岳と、より多く談しがわかつたであらう』などゝ、松陰神社の裏をぬけて、畠の中を數丁行くとある所の、あの豪徳寺といふ寺の墓地に、井伊大老の墓を訪ねた時などにはよく考へもした。

筆々は我が國に於ける維新の革命なるものを約千年の間『武家政治』と稱する病氣に罹りたる日本の國體が、再び健康狀態に歸へり、復さむとしたる大自然力の發動であると考へる。其れは、たとひ外觀上に於ては幾多の差異があつたとしても、其の原因に於て、また其の性質に於て、ロマノフ家の沒落を來した

今次の**ロシヤ**革命と大體に於て類似の現象だつたのである。さうして其の根底に流れてゐた原動力は何であるかと云へば、日本に於ても、ロシヤに於けると同じく『階級打破』『自由平等』の思想であり、勢ひであつたのだ。ロシヤでは帝政が倒れて共和制となつた……其の由來、沿革、乃至、現狀に達するまでのいきさつといふものは筆者が下段に於て論じ樣とする問題なのであるが、兎に角、階級制度が崩れて、今日の樣な狀態にまで發展し終へたのであつた。帝室とは云ふもの丶彼の國にあつたロマノフ朝なるものは、眞の『王者』にあらずして『覇者』であり、丁度我が國の北條、足利、乃至、徳川等の幕府にも比す可きものに過ぎなかつたのに、其れ以外に別に人民の『王』として仰ぐ可きものも不幸にしてまう存在しなかつたので、其のロマノフ朝の消滅したる後は、否應なしに、帝王無き共和制を採用せぬわけに行かなくなつたのである。(『レーニンといふ帝王を頂いてをるではないか』と云はれる讀者があるかも知れないが、其の問題に就ては後段でまたゆつくりとお互ひに考へて見やう)然るに之れに反し我が日本の方では『階級打破』『自由平等』の理想の極致が『君民一體』『天皇中心』といふことに一致するのであつて、從つて、明治維新の革命が假りに最後まで徹底的に遂行されたとしても、其の結果は決して、我れ等が日本に於て有する如き由緒ある皇室といふものを(以前は兎に角)其の後はまう持つて居らなかつたロマノフ朝時代のロシヤ乃至其の他の國々に於て、展開さる可き革命の結果とは當然趣きを異にす可き道理なのであつたのだ。凡て事物は環の如く、極端と極端とはいつも互ひに一致するといふのが理屈である。自分は我が國に於ける此の意味での王政復古運動の先覺者として、熊澤蕃山、山崎闇齋、西山公光圀……等を數へたが、後に至つて既に實際運動に携はり革命の火を點じたものとしては、確かに前記の吉田松陰、橋本左内……等を擧げることが出來るであらう、只、所謂『勤王の志士』と稱された維新の『人物』中の多くのものを、自分は、自覺的燃え方をした人間であつたとはだうも考へ難く感ずるものであるのだ。嘉永六年の米艦の來航から明治の初年に至る約十五ケ年の間に於て、日本歴史の舞臺は其れから其れへと實に急激なる展開を示して行つた、さうして、其の舞臺の上に於て、『攘夷派』の浪士達や『勤王』の志士達の總數が、各々、何か彼にか、或る種の役割を演じてゐたといふことは事實であるけれども、然し幕府が亡びて王政が復古するといふ大體の筋書きは、恰かも、冬が過ぎて春が來るといふ天界の現象の如く、彼れ等多數者の言動とは殆ど何等の交渉なしに、元來自ら展開し行く可き勢だつたのである。もし彼れ

等『勤王の志士』なるものが『叢を結び、衆を嘯し』て過激なる手段に出ずることなく、其の芝居の立役者であられた孝明天皇に、もう少し從順なる態度をとり、大綱を御委せして置いたならば、恐らく王政復古の大業は、完全には非ずともするも、少くもまう少し理想に近く、實現されたわけであつたのであらうが『船人多くして船山に登る』との諺の如く、餘りに「烈烈」なる下廻りの役者多くして、遂ひに徳川幕府は倒し乍らも、船を藩閥政治の山に乘せ上げてしまつたのである。芝居の筋書きから云へば確かに之れは番狂はせである、冬が過ぎて春となる可きところを、却つて春と夏を飛び越えて、再び秋に戻つたと云ふ形なのであるから。(然し、其の番狂はせをも包含したる全てを、人生の大芝居であると見るならば、また勿論其れでも差し支へないわけである。)

之れを要するに、武家政治の代表者とし、殘存者としての徳川幕府を倒して、國體を王政の古に復さしめ樣とした『階級打破』『自由平等』的氣運や原動力といふものは、決して、明治初年の所謂『王政復古』によつて滿足し、停止す可くもなかつたのである。幕府の專制政治は倒れたが、然し、其の廢墟の上には、司專制の政治が樹立せられ、明治四年の廢藩　縣によつて中央集權が實現せられたけれども、其の國政に直接參與し得るものは、結局倒幕の『殊勲者』を以て自ら任じゐたる薩長の人間を主とし、其れに土、肥……等の少數者が加はつた藩閥的分子のみに過ぎなかつたのであるから。

但し此れ等の四藩の中では、はじめから土佐の人間が最もよく『王政復古』本來の意義を理解してゐたものゝ樣に思はれる。慶應三年、未だ徳川慶喜の大政を奉還せざるに先立ち土佐の山内容堂から將軍に奉つた建白書を見ると、實に熱誠が字句の間にあらはれ、そして能く、簡にして革新運動の歸着すべき所をつくしてをる。

『誠恐々々、謹で建言仕候。天下憂　の士、口を噤じて言はざるに至り候は、誠に懼る可きの時に候。朝廷、幕府、公卿、諸侯、旨趣相違ふの狀あるに似たり、誠に懼る可きの至に候。此の二懼は、我の大患にして、彼の策成矣と謂つ可く候。此の如き事態に陷り候は、其責果して誰に歸る可きや、併し既往の是非曲直を喋々辯論するも、何の益かあらん。唯願くは、大活眼、大英斷を以て、天下萬民と共に同心協力、公明正大の道理に歸し、萬世に亘て愧ぢず、萬國に臨んで恥ぢざるの大根柢を建てざる可らず。……』

と其の冒頭に喝破し、さうして國制の改革案としては、別に四藩士の名を以て八ケ條の建議をなさしめて居る、其の中の最初

の四ヶ條に

一、天下の大政を議定する權は、朝廷に在り、乃ち我皇國の制度法則一切萬機必ず京師の議政府より出すべし（皇室中心主義）

一、議政所上下を分ち、議事官は上公卿より、下陪臣庶民に至る迄、正明純良の士を選擧すべし（憲法の制定議會の開設）

一、庠序學校を都會の地に設け、長幼の序を分ち、學術技藝を導かざる可らず（國民教育制度の擴張普及）

一、一切外藩の規則は、兵庫港に於て、新に朝廷の大臣と諸侯と相議し、道理明確の新條約を結び、誠實に商法を行ひ信義を外藩に失せざるを以て主要とすべし（開國進取の抱負彼我共存の主義）

と列記してゐるのを見ても、我々は如何に之れ等土佐藩の人々が既に五十五年前の其の當時、今日我々がきかされてさへも、可成りに耳痛く感ずるまでの達見を有して居つたか、彼の薩長の志士等が、徒らに『尊王攘夷』の御題目を叫んで、倒幕に熱狂してゐたとは異ひ、如何に其の國家觀念が深く徹底したものであり、穩健であつたかと云ふ事に、一驚を喫しなければならないわけである。さうして此の建白書の主旨に心から共鳴して、彼の徳川慶喜による大政の奉還といふことも實行されたのであつた。もしほんたうのことを云ふならば、公平に判斷したるところ、諸侯の中で此の土佐の容堂程、維新の大業に與つて勳功のあつた者はない筈なのであつて、其の偉かつたことゝ、實際に有益なる働きがあつた點に於て、毛利父子や島津久光などは到底だうもまだ同日にはかたり得ぬ樣に感ぜられる。然し、表面、人の目先きにあらはれたところによつて判ずれば、いはゞ投藥其の他の内科的療法によつて平安のうちに國の病患を癒さうと志した容堂の一派などよりも、どこまでも元氣にまかせて、外科的荒療治でやつつけ樣とした、薩長の連中の方が恰かも實際に働きがあつた者かの如くに思はれるのだ。

此の事情は、既に明治の世となつてから以後も同じであつて容堂一派が主として文化的制度の建設に努力せるに反し、薩長の連中は、主として其れが逆轉に骨折つて居る。維新後直ちに發布せられた彼の『五條の御誓文』（上段四頁參照）は實に我か國に於ける憲法制定の最初の前觸れとして見る可きものたるのみならず、また實に我が日本の國是、大和民族の抱負といふものを最も少數の文字によつて能く闡明し盡して居る萬代不易の文章なのであるが、其の精神は、素より明治天皇の叡意其のものであつたこと勿論として、文の執筆者は、傳ふる所によれば、前に大政奉還の建白書にも名を列して居る土佐の福岡藤次（後の孝悌子）であつたとのことである。『萬機公論に決す可し』といふ其の精神に基き、既に明治の初年に、早くも全國の各藩から

『徴士』及び『貢士』として人才を朝廷に召出され、また其の外に『公所』なるものを設けられた。『徴士』といふのは朝廷から召された人間で直ちに官員であり、また『貢士』といふのは自分の藩での人才であるとして各藩から朝廷に貢いだといふ意である、之れ等を上下の両局に置いた。また『公用人』は各藩を代表して朝廷の御用を承り、『公議人』は『公議所』に於て國政に關する討議をしたのである。此の『公議所』は後ちに名稱を改めて『集議院』といひ、たとひ其の議員は各藩或ひは各府縣知事が其の下官中より選任した者で、藩、又は府縣を代表し、決して國民其れ自身の代表者ではなかつたけれども、然し兎も角も、我か國初期の代議機關として認め得るものであつたのだ。此の精神の展開は單に之れのみに止らず、遂ひには行政部にも公選論が起り、太政官其の他各高等官の役割りも投票にて定めよと云ふことになり、明治二年の五月には、總ての行政官三等以上のものが、天皇の御前で互選投票を行ひ、また上局即ち貴族院が開かれて之れには六等以上の官吏が皆議員となつたのである。然し、幸か不幸か、此の、主として土州藩士の盡力によつた萬機公論の理想主義は(實際に不便な點もあつて)薩長一派の人々などには喜ばれず、(此の官吏公選といふことには何故か立憲政治の先覺者だつた山内容堂も大村益次郎と共に大反對を唱へた)二年七月其れに對す反動的改革を加へられ、終ひに制度としては其のまゝでへシ折られ集議院は國民の手前を飾る可く、單に空名のみに過ぎず、實際の仕事をさせられなかつたこと、恰かもロシヤに於ける初期の國會 Dumaの如き様子であつたらしい。斯くして薩長の理想としてたる有司の專制政治は明治二十二三年に至るまでの間、事實の上では殆ど何等の讓歩をも肯せずして繼續されて行つたのである。

民選による議會開設を要求する運動の我か國に起つたのは、明治七年一月、板垣退助、副島種臣、後藤象次郎、江藤新平等が民選議院設立の建白書を政府に向つて提出したのに初まつて居る。德川の長き壓制政府を倒したる明治政府が早くも再び有司專制に傾きつゝあるの時代錯誤を痛切に攻撃し、帝室中心、自由民權の大義を高調せる其の時の建白書は、大正も既に十年となりたる今日未だに普通選擧の可否などを問題とせる人に、今一度讀ませて其の責任ある答辯を促す必要が確かにあると考へられる程のものであるが、時の政府は其の鋭鋒を避けて表面上之れに反對することなく、加藤弘之、森有禮、西周等の一派の者の尚早論を以て之れに應酬せしめたのであつた。然し、如何に政府の有司達が人工的の緩和、鎮壓手段を講じて見

たところが、板垣……諸氏の建白を導火線として發したる自由民權の思想の火は、一時炎々とし國内に燃え擴がつて終ひに二十三年の議會開設を實現せしむるに至り、其れと同時に（外に多くの事情や原因があつての事ではあるが――下段一〇〇頁參照）今度は議會の出來たといふ其の事自身が一種の安全瓣の如き關係となつて、却つて著しく自由、民權、立憲の思想を衰微、鎭靜に導いたのである。我が國の憲政史を論ずるに當り、我々は如何にしても此の板垣といふ人の功蹟を忘れるわけには行かない、實に彼れは、我が憲政の先覺者であり恩人である。明治四年廢藩置縣の斷行された際、彼れは木戸孝允に向つて「廢藩の議は不可ではないが事の順序として、各藩の代表者の會議たる集議院の議決を經べきものであつた。然るに、今之を行はずして、五六の者が之を斷行したのは、恐らく專制の風の起る本であらう。今は既に藩を廢し、從つて集議院はないのであるから已むを得ぬとして、將來の爲めに、之に代るの民選議院を立つるが良い」と云つたといふことであるが單に其れだけを見ても、如何に彼れの立憲思想が根柢の深いものであつたかと云ふことがわかる。然し此の立憲思想、自由平等の考へと云ふものは、決して只一個の板垣の胸に燃えてゐたのではなくて、實に自覺せると自覺せざるとに論なく、萬民全ての希望であり、理想なのである。後ちに板垣氏が岐阜に於て刺客から刺された時『板垣死すとも自由は死せず』と叫んだあの言葉は眞に萬代不易の哲理なのであつて、たとひ如何なる人が如何たる烈しき方法を講じて、幾多の人々を殺し、幾多の人々を投獄し、幾多の人々を放逐し、また幾多の人々の口に法令の猿轡を嵌めて見たところが、決して此の『自由』といふものを殺すことは出來ない。其れは野蠻人の域を脫したる人類の當然取り行く可き方向であり道である。其れは單に死なゝいばかりではなく時と共に成長する。だからもし、だうしても『自由』といふことを好ましくないと思ふ人々は、不十分乍らも持つてゐる己れ等の腦味噌を絞り何等かの方法を講じて、人類を出來るだけ野蠻時代に引き戻す樣に努力して見るより外に仕方がないのだ。さうしたら或ひは一時『自由』を眠らせ、其の成長を遲緩せしむることが出來るかも（?）知れないが、たとひ、それが出來たとしても、要するに、己れ等が墓に入るまでの、或ひは其れよりももつと短時日の間の、空頼みであり、無駄安心を持ち得るだけに過ぎないのだ。

既に上段にも述べたるが如く、筆者は維新の革命を以て、我が國に於ける『階級打破』『自由平等』の思想其れは我が日本に於ては『帝室中心』『君民一體』といふことゝ全然相一致する

所の思想である）の發現であり、當然の傾趨であると考へる者ないであるが、其の氣勢の發動は決して所謂『明治維新大業の成功』といふことによつて停止したのではなく、實を云へば大正の今日までもたゞ連綿として續きつゝあるのである。實に此の意味に於ける『王政確立』の大業は、たとひ徳川幕府は倒れたりと雖ども、其れに代る藩閥政府出現の爲めに、未だ完成の域を去る甚だ遠きものがあつたので、明治七年以後の自由民權運動の如きも只單に維新革命の延續其のものに外ならないのだ。時恰かも一八七〇年代であつてフランスに於けるナポレオン三世の第二帝制も瓦解して再び共和制となり、全歐州を通じて自由、平等、民權の思想が漲りわたつてゐた時であつたから其の影響を受けて日本に於ける其の運動も一層氣勢を高めたことは事實であるけれども、其れは只單に二次的の原因なのであつて、ルソー等の自由思想に共鳴す可き下地は王政維新を起さしむるに至つた日本在來の氣運其のものであつたのだ。此の氣運に抗し、此の人類文化の必然性に逆らつて、私心に執着せる藩閥政府が如何にあらゆる武斷、高壓的手段を講じて自由主義者、民權論者の掃蕩、撲滅に努めたか、然し其れにも拘らず、其の當時の立憲主義者が、如何に熱烈にして眞劍なる態度を持つて其の苦鬪を續け、不撓不屈、終ひに議會開設といふことにまで漕ぎつけたか、さうして既に議會の開かれたる後に於ても如何に彼れ等が官僚、軍閥の政府を打破せむとして勇敢に戰ひ而して議會が如何に頻々として解散せられたか!! 明治史にあらはれたる此れ等の事情を讀む時、さうして自分等の住む今の日本の周圍を眺める時、我々は、實際に此の同じ日本の土地で曾ては其れ程までに熱烈な政治運動が起つたのであるといふことを、寧ろ心に訝しく思ふ。我々は明治の初年から日清戰役に至る間の此れ等の事情を讀んで行く時、其處に展開されて來る事變の何れもを、今日の此の日本の過去に起つた事實であるとして認めるよりも、寧ろロシヤの歴史にでもあつたことゝ考へる方が實際ふさはしい様にさへ感ぜられる。議會の開設に先立つこと約十年、明治十三、四年に板垣退助、河野廣中、松田正久等によつてはじめて其の創立を見たる彼の『自由黨』の如き、其の黨員の性質より云ふも、また其の創立に際して宣言した三ケ條の盟約より論ずるも、只一つ皇室に對する態度のみを論外とすれば確かにロシヤに於ける『エス・エル』黨に匹敵す可きものであり、之れにはまた中島信行を總理とする大坂立憲黨、頭山滿等の組織したる九州改進黨などが同じく馳せ加はつて、最も激烈なる自由運動を起したのであつた。之れに反し、大隈重信を首領とし、犬養毅、尾崎行雄、前島密、矢野文雄、小野梓

沼間守一等によつて組織されたる『立憲改進黨』の方は同じく民黨ではあるけれども、前者に比すれば、其の性格もまた黨の方針も遙かに穩健であつたことと丁度、ロシヤに於ける『カー・デー』黨に當つたものと、考へてよいと思ふ。さうして此れ等民間の二大政黨に對抗せしむ可く、時の政府が己が腹心の者共をして組織せしめた『立憲帝政黨』なるものは、國民の手前致し方なく『立憲』と看板だけには書いたものゝ、實を云へば内心、憲法などは有らずもがなと考へてゐた樣な連中の集りだつたので、之れはまづ極右黨たる舊時の『ロシヤ國民同盟』後に改めて『神聖ロシヤ』黨といつたのに比す可きものであつたとでも云はうか。斯くして在野の兩黨が『主權在民・國約憲法説』を稱へて議會の權限を絶大ならしめむとするに對して、政府黨は『君主々權・欽定憲法説』竝びに『制限選擧説』を主張してたとひ議會が開設さるゝこととなつても其の權能を出來るだけ微弱たらしめむ事に努め、互ひに激烈なる論戰を續けたのであつたが一時は民論の勢ひ極めて强くして尋常の手段を以てしては到底其れに抗す可くもなかつた。

斯くの如き場合に、日本の官僚政府が如何なる手段を以て民黨と戰つたかと思ひ、興味を以て歴史を讀んで見ると、所は變り國は異なつても、實に不思議な位までにロシヤなどに於ける事情とよく似てをるのである。第一は、あらゆる奸策をめぐらして、理想主義者の間に内訌を起さしむることである。さうして此の方法によつて、大抵の場合、保守主義者は敵側に根本的大打撃を與ふる事に成功してをる。——もし之れを戰爭に喩ふるならば、舊制度を其のまゝ繼續して行かうとする保守派の人々は、たとひ如何に彼れ等自身が世の中からの信賴を失つて『四面楚歌』と云ふ樣な狀態に立ち至つた場合に於てすら、なほ未だ『習慣』と稱し『惰性』と稱する有力なる要塞により充分に保護され防禦されて居るのに反して、其の舊制度を破壞し其處に新しきものを建設して行かうとする理想主義、進步主義の人々は殆ど赤手空拳を以て之れと戰はなければならぬのであるから、もし總ての味方のものゝ間に協力團結の實あるに非ざれば決して容易に對抗し得可きものではないのである。德川幕府といふ武家政治の舊制度は事實上、既に文久年間に亡びてゐた樣なものであり、さうしてまた此の場合に於ては、國民の生活や思想の上に力を有して居る『惰性・習慣』の要塞も相當に長き變移衰亡の時期を經過したあとだつたのでも早や可成りに崩壞して薄弱なるものとなつてゐたのであつたが、然し其れにしてもなほ、もし薩長といふ樣な二藩が一致協力して對抗せず、個々別々にあれと戰つたものとしたら、或ひは最後まで敗戰の憂き

目を見せられたかも知れない。實に『舊制度』といふものが一般に人間の生活及び思想の上に有して居る『惰性・習慣』の威力といふものは、我々が想像もつかぬ程に絶大なるものである。此れ即ち『維新』の革變によつて徳川幕府といふ一つの形式こそは倒されたれ、封建制度打破の總勘定といふものは、所謂『士百姓兵』の爲めに薩摩選り抜きの士族兵が散々に慘敗せしめられたる十年戰爭後にも未だに濟ます、却つて明治十七年に至つては新たに華族令の發布によつて再び逆に四民不平等なりし昔の階級制度を復活し强固にするの現象さへを起した所以なのである。『舊制度』なるものゝ要害の堅きこと實に斯くの如きである以上、苟も其れを攻め破つて其處に據りたる者共を沒落せしめ、終ひに(例へば憲法政治といふ如き)新しき理想的制度を確立せむが爲めには、攻勢に立ちをる人々は只々己れ等全てに共通なる終局の目的のみを頭におき、お互ひの讓歩や妥協によつていつも團結して事に當る可きであるのに、不幸にして事實は大抵、其れと反對の結果に終つてをるのである。彼れ等は稍もすれば最も主要なる根本問題の解決を忘れて、眼前にちらつく枝葉問題に心を惱まし、極めて些細なる不一致點を一大事の如く見て兄弟相鬩ぎ遂に敵の爲めに乘ぜらるゝのを常とする。試みに一つの例をロシヤの方から引いて見るならば、日露戰爭の不始末の爲めに官僚軍閥の勢ひが衰へたるに乘じて起された彼の一九〇五年の革命によつて、國民が兎も角も終ひにロマノフ王朝專制政治の一角を崩して、立憲政治の制度を贏ち得たる時(一九〇六・明治三十九年四月)彼れ等民主々義者の何事よりも先きに爲す可きことは、各黨派の步調を一つにし、今漸くにして贏ち得たる其の立憲政治の制度其のものを確立し完成する事に全力を集中するにあつたのである。枝葉に亘り、細目にわたる問題は、まづ土臺と骨組みとが間違ひなく出來上つてから後のはなしである。然るに彼れ等は形ばかりの憲法の發布を見るや、(選擧に大部分棄權したる社會黨の人間は論外として)歡びの爲めに上氣して正しき判斷力を失つたのであるか、恰かも既に彼れ等が夢みてゐた理想の世界が現出したかの如き氣持ちとなつて、其の憲法發布なることが、實は民衆運動の鋒先きを鈍らす爲めにツアール一派の採用したる一時的手段であることにも心付かず、今、現に自分等の占め得たるDuma(國會)の實力と權限とをもしも充分に確實なものとなし得たならば一も二もなく其の後に自ら斷行し得る樣なる幾多の二次的問題までをも一時にズラリと羅列して『是等のものは何れも皆緊急なる問題なり』と云ひ、政府に對して其の要求の容れられむ事を迫つたわけであつた。枝葉に亘つた問題の數が多くなればな

る程、味方の歩調に不一致を來たし、團結力の弱くなるとは一般的定則である。況んや、此の第一議會に際しては、『國會』なるものゝ功果を全然見くびつてゐた社會黨の連中がはじめから選擧に無關心であつた爲め、民衆全體としての一致團結には既に重大なる根本的缺陷があつたに於てをやである。斯くて徒らに空論に時を送つた第一のDumaは、たとひ繰りかへし會議を開いて『國民の要求』を申告し、『政府の失態』を指摘するに努めて見たのではあつたが、實際の力なき悲しさには、官僚政府をして嘘一つをもさすことが出來ず、終ひに開會後僅かに七十二日にして、同じ年の七月八日に軍隊包圍の下に解散せしめられ、次いで翌年二月に彼れ等は氣勢を新たにし、また社會黨との提携をも遂げて第二のDumaに臨んだのであつたが、要するにまた其の時はまう『あとの祭り』で後に暗殺せられたる其の時の首相ストルイピンの高壓手段により三ケ月餘りにして『詐服』的に再び解散を命ぜられ、其の後、間もなく政府によつて斷行せられたる選擧法の改正は實に遺憾なく『國會』並びに『憲法』なるものを骨抜きのものとして、斯くて形式に於ては今度の革命に至るまで存在したあの有名無實なる立憲制度を現出し、本質に於ては其の『立憲制』其のものを或る程度までの安全裝置として却つて官僚獨裁政治の基礎を固むるの結果を生じたのであつた。如何なる理由によるのであるかは今別に論せず。ロシヤ人といふ民族は、可成りに各自の個性が強く、各々、自己の感じ且つ信ずる所を主張して中々に他との妥協に甘んぜざる國民であるが、さういふ根本的の原因等もあつて、ロシヤに於ける政黨の數といふものは從來極めて多かつたのである。今度の大革命が起り、然かも未だボルシエヴイキの天下とはならず、憲法會議の開催がロシヤ國民全體から期待されてゐた時、其の憲法會議に代表者を選出するに際しての一般の人々への參考として編まれた比較對照表によると、其の當時(即ち一九一七年十月)ロシヤに現存してゐた政黨の數は大別したところでも實に十七の多きに達してゐ、さうして其の中の或るものはまた更らに幾つかの支派に分れてゐるといふ有樣なのである。例へば其の十七中の一つたるに過ぎぬ通常『エス・エル黨』と呼ばれて居る『社會革命黨』(“Partiya Sozialistov-Revoluzionjerov”)の如きも實際は『防衛黨』(“Oboronzyi”)。『防衛國際黨』(“Oboronzyi Internazionalistyi”)及び『左翼黨』(“Ljevoje Kryilo”)の三派に分れてゐるのであるし、また今日のボルシエヴイキなるものが屬して居つた、所謂『エス・デイ黨』即ち『ロシヤ社會民主勞働黨』(„Rossiiskaya Sozial-Demokraticheskaya Rabochaya Partiya”)の如きも五つの黨派

に分れ、第一はプレハーノフ。デェイチ等の導ゆる所謂『一致』(エジンストヴォ)の集團(“Yedinstvo”)第二はメンシェヴィキ・アバロンツイの黨派で其れがまた分れて二つとなりパトリョーソフ。マースロフ等の導いた『純正防衛黨』とダン。バグダーノフ。チェイゼ。ツェレテルリ等の屬した『革命・防衛黨』といふのに分れてゐ、第三はマルトフ。アクセルロード。マルトイノフ等の導ゆるメンシェヴィキ・インテルナツィオナリストイの黨派、其れからまた第四は『統一社會民主國際黨』(オブエヂニョンヌエ、エス・デイインテルナツイオナリストイ)であつて之れに元來トロツキイ、ルナチャルスヰイ、等は加盟してゐたのであり、さうして最後の五番目に來る最初から共產的色彩を帶びてゐた『ボルシェヴィキ・レーニンツイ』なる一黨派が、レーニンを頭目に戴き、ジィノヴィエフ。カーメネフ。コロンタイ等の鬪將によつて支へられてゐたものだつたのである。以上に記した『エス・エル』及び『エス・デイ』なる兩黨派は何れも大なる政黨であつたから、自然、其の枝分れの數も多いわけであるのだが、兎に角、これが二つ乍ら十七大區分の一つたるに過ぎない一政黨である事を見ても、同じく政黨であると稱し、憲法の制定をはじめ其の他の諸改革を計畫した人々の間にも其れ等の計畫を遂行する主義手段の點に於て、また必要と感ずる改革條項の種類性質の點に於て、實に種々雜多の差別があつたといふことを想像し得るであらう。我々が今日、日本に於て眺め得る所謂『政黨』なるものは、其れが衆議院のものであると、また貴族院に籍をおくものであるとに論なく其の發表するところの宣言書や、また實際に遂行してくれる計畫などによつて比較すれば何れも一向に差別のない樣なものであつて然かも其れ等が互ひに何處まで分立して犬と猿の如く斷えずいがみ合つて居ると云ふ現象は實に我々の解釋に苦しむところなのであるが、之れに反してロシヤの諸政黨の方はまた餘りに細目にまで亙つて其の區分が顯著であり過ぎる樣にさへ思はれるのだ。例へば上に述べた一九一七年當時の分類表には十七の政黨(乃至は更らに其の枝分れである黨派)の採つて行かむとするタクチカの相違をはじめ各種の重要問題、例へば國體及び地方(殊に以前ロシヤの爲めに併呑されたる地方)の自治制の問題、『國民』といふことに對する根本的の考へ方(即ちロシヤといふ國はロシヤ人のみに屬する土地として考ふ可きや否や？　自國民と他國民との區別の問題)。土地と農民との關係。工業勞働に關する諸問題。國の財政及び經濟的基礎を如何にすべきか？(租稅の種類及び率)教育及び宗教、軍備、軍隊の問題。司法、裁判に關する諸制度。戰爭特に當時敵として戰つてをつた獨墺……諸國に對する態度。……等に亙つて各政黨の保持して居るプログラムマを

一つ々々對照して示してをるのであるが、少くとも斯う云ふ樣な諸問題に對しては何れの政黨もが、各々自分等自身の考へや主張を持つてをるのであつて もし此の表を通覽したる後、自ら考へ合はせて見るならば、大抵誰れでも、自分が果してどの黨派に屬す可きものであるか、乃至は少くも、どの黨派の主張に最も多く共鳴出來るか）といふことを決めることが出來るのだ。どちらがよいか、惡いかと云ふ問題はしばらく別として此の點に於て、ロシヤの政黨は、何れもみた其の旗色の鮮明なること到底我が國に於ける『白紙主義』『お天氣主義』『臨機應變主義』『曖昧主義』の政黨と同日のはなしではないのである。けれども、兎に角、多數の黨派がかう云ふ樣に各々自分等の主張を立てゝ他のものとの妥協を肯ぜぬといふことになれば、勿論お互ひの間に步調の一致を缺くといふことは實に已むを得ぬ次第であつて、終ひに其れが爲め全てのものに共通なる最終目的の到達といふ事までが障害を受ける樣な結果にも陷るのである。現にロシヤに於ける議會政治の失敗は即ち其の實例の一つであつた。さうして、此の見地から判斷して見る時、採用した手段其のものは實に怪しからぬことの極みではあるけれども、彼のレーニン一派が、自分等の屬する『エス・デイ』黨內で他の分と或る程度までの合同團結を遂げたる後ち、一氣呵成に武斷的方法を用ゐ、他の政黨は其の同じく社會民主勞働黨たると（プレハーノフの率ゆる『エヂンストヴォ』の一團）（不一致點は戰爭を即時に中止するかせぬかの一點）或ひは已れ等よりも更らに左に偏する無政府主義者たると（クロポトキン一派の如き主なる原因同上）論なく悉く之れを無視し、國民全部の非常なる希望であつた『憲法議會』に對してすらも、其の開會の初日にクーデタアを行つて、全政權を已れ等一派のみの手に收めたといふことは、是非とも即時に戰爭を終熄せしめ樣などゝ云ふ大英斷をやる爲めには、だうしても必要な手段であつたかも知れない。『萬機公論に決する』といふ主義は素より非常によい理想であるけれども、だうしても讓り合ふ事など肯んぜざる連中が寄り集まつてゐる時さうして、其れが實に一刻を爭ふ危急存亡の時期である場合、或ひは非常なる處置に出るといふことも幾分寬恕し得可き行ひであるのかも知れないのである。要は、表面にあらはれた形式の如何にあるのではなくて、其の行動を敢てするに至つた動機と目的との如何、（果して誠心誠意からやつた行ひであつたかだうか？ といふこと）にあるのである。

さて翻つて、我が日本に於て、憲法が制定され、はじめて議會が開かれた時代に、民黨の步調は能く揃つてをつたかと云ふに、其の主義、盟約等を見ると別に大したる根本的の差異がないにも拘らず、互ひに相反眼して、官僚政府の爲めに乘ぜらる

ゝ多くの隙を作つてゐたものゝ様に思はれるのである。實に此の内輪割れといふ禍因の大いさに比べるならば、官僚によつて（國と處と時代の新舊とを論ぜず）いつも必ず採用せらるゝ第二第三以下の方法の如きは其れ程憂ふるに足らぬのである、何となれば、其れ等の事柄は勿論、改革者自身に取つて困難を加へるわけではあるけれども、或る點では益々彼れ等の志を强固にし、其の精神を鍛へする機縁ともなるものであるに反し、第一の内輪割れによつて、彼れ等は只、其の心情を腐らかすより外に何も得る所がないのであるから。

然らば官僚政府の採る第二の常用手段とは何であるかと云へば、其れは唯單に、中央にをる已れ等の權限を擴張して絶大なるものとならしむるのみならず、各地方に在る政府の代表者、即ち各地方長官なるものにも絶對的なる權能を附與して、以て自由主義者、人民黨の人間達を頭から壓伏せしめんとする方法である、ロシヤでは各縣に置いた縣知事（グーヴェルナートル）といふものに（併呑した占領地のことはしばらく論外として措いて）いつでも最も官僚的色彩の强い連中のみを任命し、之れ等を一種の小君主として各地方到る處に專制政治を行はしめたのであつたし、（本誌昨年夏の増大號に載せた拙稿「ロシヤの都市とロシヤの田園」一一七頁以下參照）、日本に於ける明治の前期にはやはり同じ樣なる人物を選んで『縣令』といふもに任命し、各自に其の辣腕を振はしめたのであつた。既に政府の主意が斯くの如きものである以上、後ちに中央の舞臺に舞ひ戻つて、華々しい位置にあり付かふと思ふならば、地方の小王國に居つた間に出來るだけ辛辣振りを發揮して置かなければならぬことと勿論であるから、其の結果は國内一般に一種の『暴君競爭』とでも云ふ可き現象を惹起し、實に壯觀を極めることゝなる。第三以下の方法といふのは、其れが中央政府によつて行はるゝと、乃至地方の官憲によつて個々に行はるゝとの別なく、何れも其れ等壓伏の爲めの手段方策なのであつて、これまたいつでも決まり切つた樣に、『集會及び結社の嚴禁』であり『言論及び出版の自由の剝奪』であり、また所謂危險分子の『追放』であり、『投獄』であり、乃至は公然と法律により或ひは陰謀によつて行ふ『殺害』である。

ロシヤの方でロマノフ朝の時代に行はれたる其れ等のことに關する史實は、國が國であつたゞけにまことに豐富なものであり實例など素より枚擧に暇もないわけであるが、其れ等の事情の一斑は時があたつら後段で述べることゝし、さて我々の祖國たる日本の方ではだうだつたかと顧みて見るのに、事情は此處でも案外可成りにひどかつたのである。明治十五年から十八年頃に至る短時日の間に於て『福島事件』であるとか、『高田の獄』であるとか、さては群馬、加波山、秩父、飯田の各地に於ける

暴動であるとか、名古屋及び静岡の疑獄であるとか……何れも官僚政府の高壓的手段に激昂して堪忍袋の緒を引き切らした民衆の叛亂が此の日本の土地でも續々として起つて居る。然し乍ら、實のことを云へば、から云ふ小叛亂がお互ひの間に充分な連絡をも保たず、單獨的に地方々々に蜂起するといふことは實に官僚的政府に取つては願つてもなき僥倖なのであつて、毛利元就の弓の矢の喩への如く、彼れ等は其の事によつて容易に、日頃から目の上の瘤と考へてゐる樣な人物を片つ端から一つ一つ片付けてしまうことが出來るのである（現にロシヤなどでは却つて、政府の方から叛亂暴動の火を放つて故意にさういふ事件を誘起せしめたと云ふ例なども少くない）。以上の諸事件に關與した人物の中で其當時に於ける官僚の代表的典型として、だうしても見逃すとの出來ぬ中心人物は維新の頃には薩摩の志士であり、また其の頃は丁度福島縣令であつた三島通庸といふ人物である。彼れは其れ以前から酒田及び山形の縣令に歴任して、到る處に辣腕を振つたのであつたが、其のやり方たるや實にロマノフ時代のロシヤ式其のまゝであつて、我々は其の頃のことを讀む時其れが此の日本で起つた事實であるとは信ずることが出來ず、だうしてもシベリヤあたりで起つたはなしであるかの樣に心に感ぜざるを得ないのである。今筆者の手許に、自分の弟の誰れかゞ讀んだ『學生』といふ古雑誌が半ば彼れに殘つてゐて、其の中に、偶然、其の福島事件に坐して投獄せられた『賊徒の頭目』河野廣中氏が、其の後農商務大臣となつて居られた時（大正四年大隈内閣の時？）自ら記された當時の追懐談が載せられてをるので、我が國に於ける立憲史の一エピソードとし、また日本に於ける『シベリヤの牢獄記』として、次ぎに其の大要を抜き書きして置き度く思ふ。

『想ひ起すだに憤激の血が滿身にほてる心地がする　時は忘れもしない明治十五年の秋月、骨さへ凍る一日の夜の事である。思ひもよらぬ暴虐無慘の民は、正義と正道とを標榜せる我々一派の撲滅を期す可く、兇徒嘯集といふあられもない罪に陥られて、鐵窓寒き若松の獄舍に憤慨の血を沸かせ、無念の拳を固めては、更に激しく暴政を呪ひつゝ、まゝならぬ身を三晩すべく餘儀なき運命に在るゝに至つたのである。事の起りはいはでも政爭の餘波である。場所は奥州の福島――我黨が自由黨の一員として、乏しきを福島縣議長にうけ、暴政家の親玉たる縣令三島通庸を相手に、正義を楯にとつて戰つたのが終に身に累ひするに至つたのである。敢て死屍に鞭つことを潔しとするわけではないが、言ふ丈け云はねば、事の眞相が明かでないから有りの儘を語るのであるが、實に三島といふ人は、亂暴なる政治家であつた。彼の政治的見地は唯だ自我あるのみで、人民あるを知らないのである。然かも其の自我を極端に發揮するに努めたのだから遣り切れない。彼が縣令として縣下に臨んだ其の方針といふのは、唯だ〳〵自我の發揮

であつた。噫!! 何たる奸佞な縣令であつたか。今日憲政の進歩せる世に於ては、一日、一刻たりとも縣令の椅子に在る事は出來なかつたらうが、悲い哉、明治十五年時代には、彼が如きサーベル主義の專制的政治家が、頗る厚う用ゐられたのであつた。

當時三島縣令は。

(1)自由黨を撲滅すべき事。

(2)苛税を課して道路の改築を則する事。

(3)福島縣下に帝政黨を起す事。

此の三ヶ條の政見を提げて、有ゆる壓迫手段を講じ、忌々しい手段の數々を盡して、我が自由黨に戰を挑んだのであつた。戰を挑まれぬまでも縣下幾十萬の無辜の民に代つて天人共に許さゞるかゝる惡政の撲滅に盡すのは、政治家の本分である、で我輩はこの本分を守る可く我身を忘れて奮闘した。附ては彼等一派の憎惡の矢は、我輩等六尺の同志の身邊に蝟集して、その危險なる事恰も死地に馳驅すると同樣で一刻一分たりとも、心を許しては居れないのであつた。

彼等は議論に於て、到底我輩を屈す事が出來ぬと思つたにつけ、終に我輩を毒殺せうとした、處が天は正義を助くるとかやで、此陰謀の計も外へ洩れて、我輩は硬骨な出入商人の口から教へられ、幸に無事なるを得たが、併し用心だけは大にした、即ち縣會に於ける議政の壇上に立つて、滔々彼等が施政の根本を擊破する際にも、堅く身を戒めて一滴の水、一椀の茶すら呑まなかつた。餘りに用心が細心に過ぎたと嗤ふ勿れ 彼等の計策たるや頗る陰密を極め、此水、此茶の中に激烈な猛毒を投じて、我等の毒殺を圖つたのであつた。現に三島縣令の命旨を容れて我等が命の綱を斷つ可く毒を盛つた醫師某は、目下東京へ來て某保險會社の嘱託醫を勤めて居るさうだから、我輩少閑を得ば一夕を欣らして舊事を談じやらうと思つて居る。

威壓に伴ふ黃白は、惡政家の本義である。惡辣極まる三島縣令は、一方官威を笠に着て、威壓を加へると同時に、莫大な黃白を散じ、舊會津若松の藩士を自黨に引入れて了つた。三島の惡辣手段はさて措いて、惡鬼羅刹の如き惡縣令の麾下に列し、恬然その爪牙となり縣民の血を吸つて恥ぢない舊藩士の腑甲斐なさよ!! これ國を賣り民を排するもの、眞に憎んで餘りある行爲である。我輩は舊若松藩士の腐れ果てた性根に呆れ返ると同時に、餘りといへば餘りな武士道の墮頽に太く憤慨して、士道を完うするが爲め、力の及ぶ限り彼等を呪いて、飜然正義に味方せしめんとて、行李匆々會津へ飛込まうとすると、これぞ飛んで火に入る夏の蟲同樣だと、板垣伯が强つて諫止されるし、加之伯の洋行問題が持上つて、少許手を引け無つたので、不本意乍らも、代理として友人の田母野秀顯君を急行せしめた。田母野君は正義の念に厚き同志の一人、是非我輩に代つて行きたいとの頼みであつたので、願意の叶うた嬉しさに、彼は躍然として雪深き故山に希望ある旅立をしたのであつた。

處で會津の者等は、正理純直なる田母野君の說に贊しようとしないのみか、一夜闇に乘じて部下の壯士二十餘名を率ゐ、田母野君の旅舍を襲擊し、寄つて集つて亂打した上に、何たる暴狀ぞ、氏の睾丸に强烈な毒劑を塗抹し、勝鬨擧げて引揚げた。

此報を耳にした我輩は、實に翅なきを怨むの心狀、直ぐに結束して會津に行かうとしたが、逸る心を押鎭めるやうに、又も懇々輕擧を戒められたのは首領の板垣伯、君が今會津へ行くと、敵の釣出しの術策に陷れられたも同然ぢや。マア忍耐して形勢を見て居れ。此際斷じて輕擧妄動を許さない。』伯の言語に理屈があるので、我輩無念乍らも默

を抵つて別人をやつたが、やはり何の效果もなかつた。

かくすること三四度、黄白に眩惑し、權威に屈服せる會津の者共は正義の叫喚を馬耳東風と聞流して、如何に熱誠こめて諫めても、醜陋極まる迷夢より醒めようとしない。一方、自由黨と帝政黨との爭鬪は日々に熱度を高める。三島縣令は羅王の暴力を逞うし、滅多矢鱈に苛税を課する。而も峻辣なるその誅求！　民力に餘裕のないについて、池も苛税を納付し切れないのを、鬼の如き縣吏等は、ドシ／＼公賣處分をやつて取立てる。爲めに民心の離散するはいはでもの事、遂に蓆旗竹槍の一揆が起り衙れまじき形勢となり、其處此處に起る怨言の裏には、胸を刺すべき殺氣が含まれて居た。

果然無辜の民は窮して亂した。彼等は憤激の餘り會津喜多方の警察署を襲擊した。――とは知らぬ我輩は、餘りの暴狀にこらへ切れなくなつて福島に歸つたのを、待ち構へて居たといはぬ計り、三島一派の者共は、この暴動を口實にして、我輩を拘禁したのであつた。

忘れんと欲するも、忘るゝ能はざるは、明治十五年十二月一日の夜の思出である。警察襲擊の騷ぎがあつたとは知らう筈なき我輩は、怎うにかして若松の者共を眞人間にしてやりたいと、福島へ歸つて、無名館の奥座敷、その八疊の室に火桶を擁しつゝ、同志の面々と其後の經過を話して居た。時刻はかれこれ十二時過ぎであつたらう、颼と町吹く木枯の、梢を掠めて軒に訪ふ外に、一響をも聞かぬ靜寂さは、宛ら死屍の如く思はしめた。折柄この閑寂を破つて、ドン／＼ドン！！破れよと計り表の戸を亂打するものがあるので、

『此夜陰に何者ぢや？』

聊か怪しいとは思つたが、叩く者をその儘にはして置けぬ。小使に命じて開門させると、潮の如く亂入する一隊の者共、吃驚仰天する小使を蹴飛ばして、庭傳ひに座敷の戸外へ廻り、

『河野！　河野！！　河野は居るか。』

『オイ河野！　河野はどうした。』

聲を揃へて呼び立てる。

さてこそ怪しの者よと、我輩身に寸分の空隙を見せず、聲のする方へ進んで行くと、這はしたり、雨戸を突刺す尖たる刀尖は暗に閃乎と皮膚を拔いたので、思はず不意に驚き一歩退つて身構しつゝ熟視すると、グサリ、パサリと後より／＼數本の白刃を突刺した。

何たる狼藉ぞ、と我輩大に癪に觸つたが、無意味の抵抗は武士の恥辱である。それに又此儘雨戸を閉めて置くと、半は恐怖に襲はるゝ彼等とて、這麼亂暴を惹起すやも知れんと思つたので、

『誰だッ、靜にしろ。今戸を開けてやるから靜にして待つて居れッ。』

我輩は大喝して、雨戸一枚繰り開くと、何の事だ、庭には警部巡査の一隊、凡そ五六十名の者共が、手ン手に拔刀を提げ、素破といへば斬つて懸らん身構へで目は等しく、我輩に注がれて居るではないか。僅た一人の我輩、而も寸鐵だも帶びて居ない我輩に向ふべく、かゝる大袈裟な沙汰は、實以て笑止千萬の至りである。

『誰だッ。貴樣等は何用あつて來たか。』

と我輩は再び誰何した。

『河野は居るかッ。』

『河野は我輩だ。この夜更けに何の用か。』

些の臆するところなく、吃と叫ぶと二三の幹部は互に顏を見合はせて多時は答へようとしない。で我輩は、

『兎に角奥に上るが可からう。』

と彼等を八畳の室に連れて行き、

「何の用か。」と重ねて問ふと、彼等はブル〳〵顫へ戦き、歯の根もガチ〳〵と合はぬ程であつたが、漸て取出したのは一葉の令状、それを示して顫へ聲で同行を求めるのであつた。

何様更夜の事とて、我猴には峻拒する權利はあるが、抜刀で乗込んで來た位だから、何を言つても無駄だらうと、從容として福島警察署に同行すると、詰合せたる幹部は件の令状取上げ、福島を若松と書き改め、即刻若松へ護送すると言つた。

其は拘置我猴は東京から着いた許りとて、袷の重着をして居るのみなので、綿入の差入を願つたが、許しては呉れぬ。デハ毛布といつても許さぬ。玆に於て我猴は決心した。

若松への夜行は唯事ではない。此度途中で謀し合はせて、政敵たる帝政黨の壯士共に殺させるのだらうと思つた。恁う思ふと無念の血は燃えに燃える。だがその後から、牢乎たる決死の心が堅くなる。で成るやうに成るが可いと、儘ならぬ身を馬背にゆられ乍ら闇濃かな縣道を若松さして出發した。

處が途中何の變事も無かつた。併し寒夜の深更を、縛られながら馬に揺られて行く身の寒さ、森々たる寒威は骨に砭するかと許り、寧そ一思ひに殺されたがましだと思つた位だ。

當時の警察や監獄は、唯だ〳〵壓制が能で、美はしい人の情等は見たくも無かつた。それのみか紙の差入さへ許して呉れぬので、此寒天の夜行に腹を痛めた我猴は、已むなく帶を切つて用を辨じて居た。而もその帶たるや堅い〳〵博多の角帶であつたので、歯で喰ひ切つて使つて居た時の心細さ。若し現時の症狀が二日も續かうものなら、帶も無くなつて了ふから、それからは怺へせうかと座ふ心を痛めた。

監獄には助考場といふものがあつて、犯した罪を問考させ何が何さず自狀させるやうにしてあつたが、さて其助考場といふのは、白晒々たる壁の眞只中に、方一尺内外の板が布いてあるのみ。其板へ罪人を座らせて、

「助考が付いたか。どうだッ。」

と頭から氷のやうな水をかけるやら、蹴るやら、毆つやら、取扱は頗る慘酷を極めた。それが爲め我猴の知つて居る内、而も僅か一週間内に凍死者が一人、毆たれて死だのが一人、咯血して死んだのが一人、都合四人の死者を出した。如何に取扱の慘酷を極めたかは、此一事で依事を推測することが出來るであらう、從つて三度の食事の如きは碌な物を與れないのみか、その分量の如き、眞の言譯のみであつたから、如何に我慢の強い我猴も、これには流石に閉口し、時折廁へ行くと、又肉が下るのかと思つた位であつた。

間もなく東京へ護送されたが、途中の取扱は犬猫よりも劣つて居た。打つ蹴るは別に怪しむに足らぬ有様の事で、腕が折れ、肉が裂けん許り強い亂暴な繩の掛け方をされた。殊に困つたのは途中の大雪に逢つた時であつた。着衣といへば袷が二枚、元より雨具もない上に、兩手を後で縛られて、馬にゆられて居るのだから、これぞ眞に寒慄し、風の吹き放題雪の積り放題であつた。

忘れもしない その時の雪は、大片の牡丹雪で、見る〳〵兩の膝に一尺も積つて、衣服は宛ら白銀の如く凍つき、動く度に錚々たる音を發し、寒威は洌々と骨の髓迄滲み透つた。

噫、生きながらの地獄道、日程苦しい旅路を重ねて、漸く東京へ着いたが、流石帝都の下だけあつて幾何か取扱は善くなつたが、頓て二月餘の跡が腐爛し、一方ならず苦んだ揚句、兩脚の爪は悉く剝離して了

つた。

獄中に於ける苦みは食物の不足を第一とする。處で東京の獄中では警戒が比較的緩慢であつたのにつけ込んで、食物を盗んで來ては皆に喰はせて、喜んで居た囚人があり、誰も彼も地獄で佛の思ひをして、恰も餓鬼の食を爭ふ如く此盗んで來た食物を賞味したが、獨り我輩のみは、渇しても盗泉の水を呑まずと、我慢に我慢をして喰はなかつた。されば此の首を刎ねらるゝよりも苦しかつた忍耐の一事のみは、丈夫の本分として人に誇るに足りると思ふ。』

無實なる罪の爲めに斯くの如き非常なる辛苦を嘗めさせられたる河野氏自身の懷想談であるから、或ひは知らず知らざる間に、文章が多少誇張されてをる様な傾きがないと云はれぬかも知れないが、然し、兎に角これを讀んだゞけでも今から僅か四十年の昔、明治も既に十五年であると云ふ時に、まだ我が國に於ても如何に多くの非道なることが行はれてゐたかと云ふことがわかる。勿論、新しい道路を開鑿するといふことも必要だつたことには違ひない、然し乍ら、嫌がる農民を强制的に驅り出して、無理に服役させるといふことになればそれは卽ち農民を以て一種の奴隷なりと考へてのはなしである。去年の秋に出た佐野學氏の著書『露西亞經濟史研究』の口繪に『農奴の賦役』といふ圖が揭げてあるが、恐らくあゝ云ふ場面は、何もわざく一八六一年以前のロシヤから引き出して來なくても、其れより二十年ばかり後になつた明治の十四五年頃（一八八一—二年）容易に我々のこの足許で見ることが出來たのではあるまいか。

其れは兎も角もとし、此の明治十五六年頃の有様を其れより殆ど千二百年の昔、彼の大化の改新時代に當つて、天皇の御聖德があまねく國內に行き亘つてゐた時の事に比べるならば、同じく『天皇御親政』の聖代に於てすらも、下に仕へてをる役人達（殊に輦轂の下を離れて地方に派遣されて居る所の役人達）が、もし其のたぐひなき御仁德をば充分に理解し能はざる様な人間であつた場合には、其れが我が國の如き眞に美しき君民關係を持つ國に取つて如何ばかり大なる不幸であり禍であるかと云ふことがわかるであらう。もし『帝政黨』といひ『國粹黨』と呼ぶ可き黨派があるとするならば、其の眞の黨員は我が日本國民の殆ど全部である可き筈であつて、我々は實に、殊更らに少數の人間が集まつて己れ等自身のみを『帝政黨』であり『國粹黨』であるなどゝ稱へることを多少僭越の沙汰であるとさへ考ふる次第であるが、もし萬一、『天皇の御親政』といふこと、及び『君民一體。帝室中心』といふ我が國體の精華に特別に强い渇仰の念を持つてゐる人達が集つて、敢てさういふ名稱の黨派を組織し度いといふのならば、苟も其の黨派に關係ある人間である限り、たとひ『壯士』であらうが誰れであらうが決して『暗に

乘じて他の政黨員の旅舍を襲撃し、寄つて集つて其反對黨員を亂打たしたる上、彈丸に毒を塗抹して去る』といふ如き狂態は如何に考へたとて出來るはづがないのである。苟も「帝政』といひ『國粹』といふ時、我々の心はどこまでも嚴肅なものでなければならぬ、さうして、次ぎに自分が大日本史の中から書きぬく大化改新當時の天皇御親政の御精神が（其れが歷代の天皇の政治の御精神であるに外ならないのであるが）如何なるものであつたかと云ふことぐらゐは少くも、明確に理解して居る人々でなければ『帝政』の『帝』の字も口にすべき資格なく、また陛下の役人などゝなつて、御用を勤めるの資格もない。大日本史孝德天皇の條を見ると、

『……前略……

六月十九日乙卯、天皇、皇太子（中大兄皇子）と皇祖母尊（皇極女帝）を奉じて、群臣に大槻樹の下に盟ひ、天神地祇に告げて曰く、天覆ひ地載せ、帝道は唯一なれども、末代澆薄にして、君臣、序を失へり。皇天、手を我に假りて暴逆を誅殄し、今共に心血を瀝ぐ。今より以後、君に二政なく臣に貳心なからん。若し此の盟ひに貳かば、天災地妖、鬼誅人伐、皎として日月の如けんと。乃ち其の誓を紀して大化元年となす。年號、始て此に起る。』

『……中略……

……秋七月十二日戊寅、左右大臣に詔して曰く、當に上古聖王の跡に遵ひて、以て天下を治むべし。又宜しく天下に信あるべしと。十三日己卯、又詔して、大夫及び百伴造を歷問するに、悅を以て民を使ふの道を以てす。…………八月五日庚子、東國の國司を拜す。仍て詔して曰く、朕、將に天神の託する所に遵ひて、以て萬國を修治せんとす。凡そ國家の所有る公民と、大小の所領れる人衆とは、皆戸籍を作り田畝を校し、其の園池水陸の利は、百姓と之を共にせん。國司、國に在りては、專に罪を判き、及び賄を受けて以て民の貧苦を致すことを得ざれ。其の京師に朝するときは、多く民を發して以て自ら隨ふることを得ず、唯、國造郡領を從ふることを得せしむ。…………云々。

是の日、鍾匱を朝に設く。詔して曰く、凡そ憂訴の人は、伴造あらば、則ち伴造先づ議して後ち奏し、尊長あらば、則ち尊長先づ議して後ち奏せよ。如し伴造・尊長、達せざるときは、牒を匱に納めしめ、昧爽、有司、執りて之を上れ、朕、親ら年月を記し、群卿と共に議して、其の伴造・尊長を罪せん。官司、或は阿黨稽留して、剖正直からずば、當に鍾を撞くべし。其れ天下の民をして、咸く朕が意を知らしめよと。

……十九日甲申、使を諸國に遣はして、民數を錄せしむ。詔

して曰く、古より以降、歴世の天皇、必ず代を標はすに民を置きて、名を後に垂れたり。故に、臣・連・作造・國造等も、亦各私民を置きて、情の恣に驅使し、且つ國縣・山海・林野・池田を割きて、以て私財となし、爭征已むことなく、或ひは數萬頃の田を兼并し、或は立錐の地なく、調賦を進いるに及び、亦先づ自ら收斂して、然る後ち分進し、宮殿を修治し、園陵を造營するにも、亦各私民を率ゐて事に從ふ。易に曰く、上を損し下を益し、節するに制度を以てするときは、財を傷らず、民を害はずと。方今、百姓、猶乏し。而るに、勢あるもの、水陸を分割して、以て私地となし、百姓に賣與して、年ごとに其の價を索む。今より以後は、宜しく私に地を賣ることを禁じて、以て兼并の路を杜ぐべしと。是に於て、百姓、大いに悅ぶ。冬十二月九日癸卯、都を難波の長柄の豐碕に遷す。是の歲、春より夏に至るまで、大倭の鼠、難波に徙れり」

「二年丙午、春正月甲子の朔、正を賀す。禮畢りて、詔を宣べて、新令を下す。其の一、前代置く所の子代の民、處々の屯倉及び臣・連・作造・國造・村首の有する所の部曲・田莊を罷めて、大夫以上に食封を賜ひ、官人・百姓は布帛を賜ふこと、各々差あり。其の二、新に幾內の國界を定め、京師を修め、國司・郡司を置き、郡は大中小に分ちて、大領、小領、主政、主張を置く。其の三、戶籍を造り、班田收授の法を制して、田畝を定む。其の四、舊賦役を罷めて、租庸調の法を行ふ。是の月子代の離宮に行幸し、使を郡國に遣して、兵庫を修めしむ。蝦夷親附す。二月十五日戊申、天皇、宮の東門に御し、右大臣石川麻呂をして、詔を宣べしめて曰く、朕聞く。明哲の、民を馭するや、鍾を闕に懸けて、百姓の憂を觀・屋を衢に作りて、行路の謗を聽き、芻蕘の言と雖ども、親しく問ひて師となせりと、是に由り、朕、前に詔を下して曰く。古の、天下を治むるや、朝に進善の旌、誹謗の木あり、以て治道を通じて、諫者を來せるは、皆廣く下に詢ふ所以なりと。管子曰く、黃帝、明堂の議を立てしは、上、賢に觀んとしてなり。堯、衢室の問ありしは下、民に聽かんとしてなり。舜は、告善の旌ありて、主蔽はれず、禹は、建鼓を朝に立てゝ、訊望に備へ、湯は、總術の延あつて、以て民の誹を觀んとし、武王は靈臺の囿ありて、賢者進めり。此れ古の聖帝明王の、有ちて失ふことなく、得て亡ふことなき所以なりと。是の故に、朕、曩日、鍾を懸け、匱を設けて、收表の官を置き、毎日、執りて之を省、冤滯なからんことを庶ふ。近日、匱に投ずる者あり、言ふ、百姓の、事ありて京師に至る者は、官司、輒ち留めて之を役すと。朕、亦始め之を思はざりしに非ず。然れども、遷都日淺くして、作役未だ畢ら

ず、故に已むことを得ずして之を役せり。朕、近く此の表を得て、嘉歎して已まず。其れ處々の雜役を罷めよと。……中略……後略……』

我が國於ける『帝王道』の實際に如何なるものであつたかを示さむが爲めに、今、玆に書き拔き度いと思ふとは、只、僅かに此の孝德天皇の御一代に起つたことの中からだけでも、まだ〳〵いくらあるかわからないのである。けれども元來、主としてロシヤといふものに就て筆を執り、其の『ロシヤ』と稱する『前車』の覆轍の跡を詳細に吟味し考察することによつて我れ等自身の『日本』と稱する貴重なる車の前途に、幾分にても安全と、幸福との度をより多く加へ度いと云ふのが、筆者の本願である以上、たとひ、其れが爲めには是非とも『日本』と稱する車の組織、構造、性質……といふ樣なことをも詳かに研究して知つて置き、また其れと、『ロシヤ』車の特質との異同をもよく豫め頭に入れ置かねばならぬ必要があること勿論であるとは云へ、まう、そろ〳〵日本側の吟味を切り上げ、ロシヤ『覆轍』の方にかゝらねばなるまいと考へて、なる可く簡略に說き進む。

既に上段に於ても幾度びか記したるが如く、(上段七頁以下數頁參照)たとひ蘇我氏、藤原氏等の一門による有司の專制政治や、また鎌倉以來の武家獨裁政治によつて、其の精華を發揮し得るの機會をば著しく減ぜられたとは云へ、古來、我が國に於ける皇室と人民との間のほんとうの關係といふものは、實に我等の驚異に價す可き事實なのである。斯く申す筆者自身は、先づ比較的に物事を自由に思索する人間であつて、たとひ口には語らずまた文字には記さずとも、自分一人の心の中では、可成りに廣き範圍に亘つて思想の曠野を馳けめぐつてをる者であるから、之れは決して、『右』の方から切りに薦められる封建的臭味を帶びた『所謂忠君愛國』の古饅頭を、鵜呑みにして、發する所の言葉ではない。筆者は何事に關らず『食はず嫌ひ』といふ主義を排し度く思ふ男である。だから封建的『愛國饅頭』も相當に澤山食つて見て、其の味に一種棄て難いところのあることを知つてもゐるが、また他方では、其れとは反對に『左』の方から出されるバクーニン。クロポトキン。トルストイ。……などゝ云ふ歐洲料理をも食つて見て、多少は其の味をも心得て居る。さうして自分は決して、國産の饅頭だから特にうまい、外國の料理だから味惡いなどゝは少しも思はない。自分は其れ等他國の革命家の思想をも大いに面白い思想であると思ひ、あの國土、あの時代からは當然生れ來可き筈の思想であると思ふ。さうしてまた其れ等の人々が各々自分達の主義の爲めに投げ出したるいのちに對し、已が誠心の底から全人類に捧げた熱愛の情に對して

は衷心からの尊敬を惜しまない者であるのだが、只然し、其れ等の人々が説いた手段、方法といふものが、一般に人間の社會を幸福に導く唯一の道であらうとは、决して少しも考へないのである。恐らくは、同じヨーロッパに存在する國々の間に於てすらも、ロシヤにはロシヤ、ドイツにはドイツ、フランスにはフランス、イギリスにはイギリス…………と云ふ様に、各自の執つて行く可き道は（たとひ多くの共通なる部分を有するにしても）別々にあるのではなからうかと思ふ。松・杉・梅・柳・櫻……といふ様に木の種類性質が變つてくれば、其の各々をして最も完全なる發育を遂げしむる爲めに必要な條件といふものも全々同じであり得可き道理がないではないか。『最大多數の最大幸福』といふ事が、一つ一つの國々に於て、また世界全體に於て、社會の制度を如何に改造したならば果して達し得らるゝのであるか？　また『恒久の平和』といふことが如何にしたならば此の地上に實現し得らるゝのであるか？……と云ふ様な問題を、筆者は今更ら改めて此の場に論じ樣とする者ではない。只自分が茲に特筆大書して置き度いと思ふ事は、

たとひ其の爲めに如何なる名案があるにしても少くも此の日本の國内においては、其の『名案』によるよりも何よりも、國體を断えず『君民一體、天皇中心』の健康状態に保ち、眞の『王道』を立てるといふことが一番の捷徑であり。確實なる方法であるといふことだ。

實に筆者は此れが、我が日本のとる可き唯一の道であることを信ずる者である。けれども上に掲げたる大化改新當時の詔勅の中にも『朕聞く、明哲の民を馭するや、鐘を闕に懸けて、百姓の憂を觀　屋を衢に作りて、行路の謗を聽き、芻蕘の言と雖ども、親しく問ひて師となせり。云々』と仰せられてをる如く、『上古聖王の跡に遵つて』立て行はる可き我が帝道はどこまでも一筋に貫徹するとして、我々はなほ他の國々に於ける革命的思想家の言葉をも虚心坦懐の態度を以て、充分によく聽きとらねばならぬ。今はまう舞臺が世界的になつてゐる。だから日本は日本ながら、出來るだけ多く世界的なる『芻蕘の言』を問はねばならぬわけである。

ミハイル、バクーニンといふのは、今度の世界大戰から丁度まる一世紀前の一八一四年に、ロシヤ、トヴェリ縣の一貴族の長男として生れた男である。貴族の子息として踏む、最も普通な途をふんで、最初は陸軍士官になつたのであつたが（クロポトキン。トルストイ等もやはり同じだ）一八三〇年のポーランドの叛亂と共に引き續いて行はれた自國政府による慘虐を親しく目撃して以來、心から深く官僚、軍閥の專制政治を憎む様

になつて、遂ひに殘酷なる裁判を受けたる後、軍籍を去り、志を轉じてモスクヴァにて哲學の勉强に沒頭し、六年後更らに同じ目的を以てドイツに出掛けたのである。然し、幾多の偶然(?)なる機緣と、彼れ自身の感傷的性格とは終ひに彼れをして一學究たらしめず、革命の闘士とならしめたのである、彼れの六十二年の生涯といふものは、其の初めの三十年を除けば殆ど亡命、追放、叛亂及び投獄のみの連續であつた。彼れは實にロシヤ、オーストリヤ及びプロシヤの三專制王國を覆滅せむと企圖したのであつた。だから單に自分の國ばかりではなく、獨逸でも、墺多利でも、牢に入れられたり、死刑の宣告を受けたりしてゐる、フランスの政府からさへロシヤ政府の手が廻つて追放の命を受けてゐる。墺太利の牢では手枷、また足枷、首枷まではめられて苦しみ、また本國に送り返されて、シリュッセルブルグ(ニィエヴァ河の上流)の獄中にあつた時には壞血病に罹つて全歯は剝脫し、消化機能は殆んど其の働きを止めた有様であつたが、然かも、彼れはなほ、それでも、肉身の死ぬ事などは一向に怖れずして只、病の爲めに氣力の消耗し、肉體と共に精神も衰へて、或ひは萬一自分の主義も不鮮明になりはせぬかといふ事のみを恐れた。彼れも實にロシヤ式に徹底せる男の一人であつたのだ。曾つて中野正剛氏はバクーニンを論じて、正に無政府主義の文天祥であると云ひ、彼れが在獄中の心境をば、正氣の歌の文句『此氣所磅礴。凜烈萬古存。當其貫日月。生死何足論』を引いて表はされたが、實際此の二人の志士は、たとひ其の主張したる主義の上に殆ど正反對とも見ゆる形式上の差異があつたとは云へ、もと之れ、同じ精神を抱いて生きてゐた人間だつたのである。叛亂・亡命・投獄……と實に一刻も心を落ち付け得る暇なき様な苦酸の生活の間にあつて、バクーニンはなほ幾多の無政府主義的經典を産み出し、また綿密なる調査の上に立脚し、農業をも産業の中に加へて、徹底的なる産業論をも試みて居る。彼れが衷心から望んだところ、さうして其の事の實現の爲めには、一時如何ほど過激なる直接行動に出やうとも實に致し方ないのであると思ひ込んで、いのちのあらむ限り不斷の血戰を露、獨、墺三ケ國の官僚政府に對して續けたる其の『事』といふのは、要するに少數の閥族階級の專横、不當なる權力の搾取によつて、塗炭の苦に置かれつゝあつた所謂『百姓』の階級を、其の奴隷的境涯より解放し、其の地位を向上せしめ各人をして其の天賦の才を出來得るだけ自由に展ばし得る様な社會状態にし様と試みたのであつて、不幸にしてまだ其の頃のヨーロッパには、我々が日本に於て持つて居る様な『君民一體』であり、いつも『一視同仁』を心とせられる眞の『王者』を

期待し得ることが夢にも出來なかつた現狀だつたので、たま〳〵『無政府主義』といふ形式を取つたのであるに過ぎないのだ。

之れは何も、只、バクーニン一人のみには限らず、クロポトキンだとても、トルストイだとても、やつぱり同じことである。あゝ云ふ時に、あのロシヤといふ國に生れたればこそ、徹頭徹尾、爲政者に反抗して『危險』人物の頭目となり、或ひはまた怒れる虎の如くに暴れまわつたのであれ、若し彼れ等が、我が日本に於て、例へば仁德天皇或ひは天智天皇……などの御世に生れてゐたとしたら、必ずや比ふるものもない、誠忠無二の臣として平和なる一生を送つたにちがひないのだ。大化の改新頃にバクーニンがゐたら、或ひは藤原鎌足よりももつと御役に立つたかも知れない。また仁德帝が朽ち壞れた宮室の臺に登つて民家の屋根から烟氣の多く立ち早るのを見られ、ほんとうに心から嬉しさうな顏をされて『朕、既に富めり。復何をか憂へん』と曰はれ。皇后の問ひに答へて『天の君を立つるはもと百姓の爲なり。故に君は百姓を以て本となす。古昔の聖王は、一人饑寒するも、之を顧みて身を責めたり、百姓の貧しきは則ち朕の貧しきなり。百姓の富めるは則ち朕の富めるなり。未だ百姓富みて君貧しきものはあらざるなり。』などゝ仰せられるのをきいたとしたら、必度あの大きなヒゲ面を涙で一杯にして、聲を立て、泣き倒れたにちがひない。

寫眞をみても直ぐわかる樣に、バクーニンでも、クロポトキンでも、またトルストイでも、皆何れも純粹なる大ロシヤ人である。筆者は親しく、あゝ云ふ型の人達をも幾人か自分の友人の中に持つてゐたけれども、たとひ其れ等の人々が、ロシヤに於ては、聞くも怖ろしき極端なるアナルヒストであり、レヴオリユツイオニユールであつたことゝ假定しても、其れは決して〳〵、彼れ等が數學的に無味乾燥な『平等』『平均』主義者であつたのだといふことにはならないのである。さういふ人達に限つて極めて融通が利き、はなしがわかる。血もあり、淚もあり、……要するに人間味が濃厚なのだ。だから、さういふ點から考へて見てもあのバクーニンとかクロポトキンとか云ふ樣な連中が手荒な手段方法の方に赴いたといふことだけでも、如何に其の頃のロシヤなどの政府が暗愚であり、腐敗し切つてゐて、到底濟度し難いものであつたかと云ふ事を充分に想像せしむるに足りるのである。さうして、一度び義憤して起つたが最後、彼れ等の戰鬪振りの猛烈さと其の執念深く、根氣强いことゝは、實にたゞ〳〵驚歎すべきものであつて、この點から云ふならば、其の後今日に至るまで何れの國にも、單に「バクー

ニン』といひ『クロポトキン』と其の名をいつただけで、直ちに非常なる危險なはなしの樣に思ひ、驚怖し戰慄する人間の數が相當にあるといふことも、まるで理由のないわけではない。實に前者の如きは『我れは我がペン先を以て能くロシヤ、ドイツ、オーストリヤの三大帝國を崩壞せしむ可し』とさへ豪言して、一生其の活動を續けてゐたのであつたが、彼れ死してより未だ五十年ならざるに我々は早くも其の三大帝國が既に一つ殘らず根こそぎに覆滅されてをるのを見る樣な次第なのである。

此れだけを見ると、誠にバクーニンなどゝ云ふ人間は、やはり其の名を聞くだに、危險極りなきものゝ樣にも感ぜられるが然し、よく／＼考へて見ると、決してさうではないのである。ロシヤやドイツやオーストリヤの帝國が亡びたのは決してバクーニンやクロポトキンのペン先の力によつてゞはなく、實に已れ等自身の持つてゐた病ひの進んだ爲なのである。此れ等の人々は、外の連中がまだ其れ程に氣のつかない時に、早くも國に由々しき病根の取りついてゐる事を感知して、其の決して捨て置かれない一大事であることを絕叫し、また其の治療法をも提案した醫者の如きものであつたのだけれども、國家は（そしてまた其の國體內に深く巢食ふて居つた病源、寄生蟲等自身は）其れ等の忠告に耳を傾けずして却つて其の名醫達を放逐し之れを殺さむとさへ企てたのであつた。もしも普通の醫者であつたら、患者がそんな忘恩的態度に出た場合、たとひ自働車を以て迎ひに來たつて、まう二度とかゝはり合ふ氣にはならないのであらうけれども、之れ等の御醫者は、死罪を以て國から理不盡に遂ひ拂はれた後でも、まだ日夜其の病氣の事ばかりが心配でたまらず、非常なる危險を犯し乍ら、手をかへ品をかへ、其の平癒の爲めに已れ等の全力を盡したのであつた。彼れ等は其れ程、自分等の祖國を愛してゐたのだ（同時に祖國以外の國の事をも心配してはゐたが。）只、ロシヤだけに就て云つて見ても、もしもロマノフ朝の政治が、今から十六年前、あの日露戰爭後の革命のあとで、已が國體の罹病せることを悟り、さうして其れを治療し樣とする誠意を小指のさき程でも持つて、第一第二の國會を解散などすることなく（上段五一頁參照）憲法政治の確立に努めたとしたならば、（たとひロマノフ朝なるものはロシヤの人民に取つて決して『王者』ではなくして單なる『覇者』たるに過ぎなかつたとは云へ、其れでもなほ）あの帝國はまだ決して倒れてはゐなかつたであらう。けれども不幸にして、腹の中にをる寄生蟲自身の蠕動の功の方が大きく、良醫の進言は終ひに最後まで採用せられず、病ひは時と共に膏肓に入つて結

局肉體を斃したのである。だからロシヤ、ドイツ、及びオーストリヤの三大帝國を斃したものは、決して バクーニンの大飛躍したる爲めでもなければ、クロポトキンの思想でもなく、實に此れ等三大帝國に根深く巣を食つてゐた『專制』といひ『軍閥』と名付くる寄生蟲の爲めであつたので、筆者などに云はせれば、もしもバクーニン、クロポトキン、乃至トルストイの様な人間の勢力がもつと／＼強大であつたものとしたら、ロシヤ帝國といふものは却つて安全だつたのであらうに、とさへ思はれるのだ。

　だから此れ等の人々の主意だとか思想だとかいふものはもしも其れを有りのまゝに正しく理解するならば決して危險なもいでも何でもない。もし其れを指して『危險』であるといふ人があるならば其れは畏多くも仁德天皇や天智天皇……等の御事蹟によつて代表されて居る所の我が國の『王道』といふものをも同じく危險であると考へる樣な頭の持ち主である。何故なれば『民本主義』『階級打破』『自由平等』といふ立場から云へば、日本の『王道』の方が根底も深く、また一段と先きへ進んだものでもあるのだから。

　曾て『民本主義と國體』と題する一文の中に於て（三年四月、雜誌『新時代』誌上）和辻哲郎氏は大體次ぎの樣に自己の意見を述べられてゐたが、筆者は其れに全然同意同感を表はすものである。

『民本主義は如何なる點から見ても危險ではない。危險なのは無理解と無節制とである。露國を混亂に至らしめたのは民本主義ではなくて專制政治家の無理解と民衆の無節制とであつた。もし我國に、露國の如き無秩序の起ることを憂ふるならば、爲政者は現在の如き言論の抑壓を撤回して、民意を理解することにつとめ また民衆の公共生活に對する覺悟を喚起すべきである。民本主義を防壓する爲めに、國民道德や國體を說くのは、皇室をば旗印として民衆に戰を宣することである卽ち危險ならざる思想を防壓するために、危險なる無理解の旗印として皇室を利用し、漸次民衆の反感を挑發して遂ひに民衆を露國に於ける如き無節制に押しつめて行かうとするのである。我國民は現在に於ては、すべて皇室尊崇の本能を持つてゐる。もし我皇室が右の如き危險なる無理解の旗印とせられる如き不當なる取扱ひを免れたならば、其れは永遠に安固であつて、如何なる思想の襲撃にも煩はされまい。しかし、固陋な官僚や軍人や學者が、自家の無理解の旗印として皇室を私し、其の旗印によつて民衆の自由と進歩とを障げやうとするならば、結果は或は皇室に累を及ぼすことになるかも知れない。何人も知つてをる如く、ロマノフ家の帝位そのものは露國にとつての害惡ではなかつた。しかし、此の帝室を私して、擅に人民を抑壓し、自己の權勢と榮華とのみに執着してゐた官僚や俗吏が、其の無理解なる放縱の故に、遂にロマノフ家の帝位をあの樣な羽目に陷れてまつたのである無智な少數者が、帝室を私することの危險は、此の例證によつて何人にも氣附かれてゐる筈である。しかも少數の官僚や宮內省の俗吏が皇室をわがもの丶如く振舞ひ 民衆の意志の蹂躙を天皇の名に於て行つてゐるのは何故であるか 其れは彼等の固陋な頭が自己の所爲の危險

なる所以を全然理解し得ないからである。民衆の上に蓋して置きさへすれば、沸騰してゐる民衆がいつまでも爆發しないですむ樣に考へてゐるからである。彼れ等が氣附く時には、もう爆發はふせげない。畢竟彼等は、皇室を擁護すると稱し乍ら、其の實は己れ等自身の手によつて、皇室を危險に導いてゆくのである。皇室の安全の爲めにも、皇室は決して彼等の旗印とされてはならない。我國體と民本主義との間には本來何の爭ふべきことも橫はつてゐない。民本主義はむしろ皇位永續の保證である。……』

民衆の不節制を誘起せしめると云ふ意味に於て、バクーニン、クロポトキン、トルストイ、乃至は今現に世にあつて、多少上記の人々と色彩を異にせるレーニン、ラッセル……等の思想を危險視するといふのであれば、まだ幾分かわけもわかる。此の二三年以來、國内に、如何にせば之れ等の『惡』思想に人心が少しも感染せずに濟むだらうかと云ふことに就ての議論が喧しかつた時、可成り多くの識者の云ふ所は「丁度身體が極めて强壯健全であるならば、たとひ多少の病菌が體内に入り込んで來ても少しも病氣に罹らなくて濟む樣に、之れは只、我が國民自身の思想を日頃出來るだけ健實に鍊磨して外來の惡思想に對する抵抗力を增して置くより外に途はない』といふ樣な意味であつた樣に覺える。筆者は此れ等の人々が言はれて居る『我が國民自身の思想の健康狀態』なるものが、果して如何なる思想の狀態を意味するのであるかを知らないし、また國民と外來の『惡思想』なるものとの關係を人のからだと病源體との關係に譬へて論ずることが、果して適當であるかだうかと云ふとも知らない。けれども偶然だか何だかさういふ譬を取つた人々が相當に多かつたので、自分もまた同じ喩へを以て玆に論ずるならば、第一、同じく病源體とは呼ばれ乍らも、何も總ての傳染病の病源體が、結核菌やコレラ菌などの如く、からだが弱い人間ならば侵入して直ちに盛んに增殖し、それに反してもし强壯な人間ならばたとひ侵入しても、白血球といふ、からだを守る兵隊の樣な細胞から喰はれてしまふ、といふ樣なわけではない。現にからだの强健な人ほど罹り易いチブスなどの樣な病氣もあれば、また體の强弱に拘らず、(遺傳によろ場合を除いて)接觸さへしなければうつることはないが、接觸すれば忽ち誰れにでも感染する、例へば花柳病の如き病氣もあり、更らにまたマラリアの如く特殊の蚊によつてのみ媒介せられ、たとひ病毒は瀰漫してすぐ足許にあつたとしても、もし其の蚊さへ居らぬならば全く安心して居られるといふ樣な病氣もある。さうして彼れ等傳染病の種類の異なるに從つて、其の豫防法もまた其の治療法もいろ〳〵の種類に分れてをるといふ事は我々のよく知つて居ることである。もしも例へば今日西歐諸國に蔓延して居る「社

會主義』や『共産主義』の思想を非常に怖る可き病毒であるとし、そして我が國體を人間の身體の如く考へて類推を試み様とするならば、我々は其の類推をまう少し徹底的に行はなければならぬのであつて『病毒』及び其れによつて惹き起さるゝ所の病氣の症狀を詳かにせずして只漫然と、身體さへ强くしてゐれば決して』心配ないなどゝ云つても、決して安心出來るわけのものではない。コレラや赤痢やチブスならば、先づ生水やなまの物を食はぬ樣にしなければならないが、其のなま水やなまの物が果して社會主義的の書籍であり共産主義的の宣傳文であるかだうか？　からだが强ければ結核菌が侵入して來ても直ちに白血球から喰はれてしまうが、其の『危險思想』を日ら喰つてしまうといふ非常に賴もしい能力を持つてゐるものは果して警視廳や憲兵隊の人達であるかだうか？　内務省の保安課とかまた警察署とか云ふものが人體に於ける淋巴腺の如きものに當るのであるかだうか？　或ひはマラリアの病毒を媒介するアノフエーレス蚊、ペストを媒介するケオピス蚤……等に當るものが果して智識階級中の自由思想を有する分子であるかだうか？　事實今日まで續いてをるボルシエヴイキ露國に對する聯合國側のボイコツトが、病毒發生地に對する交通遮斷の如き意味合ひのものであるかだうか？　また新聞などでの噂によれば、東京や横濱あたりにも密かに入り込んでゐるとかいふボルシエヴイキの『宣傳者』なるものが、果して危險なる帶菌者なのであるかだうか？　さうして　に、身體の如何なる部分に當るのかは知らないが、一般に當局者から決定的に睨まれてゐる〇民會とか□文社とか或ひはまた××××總同盟とか……云ふ樣な連中が、實際に、多少なりとも『忌む可き』病毒に感染したものであると假定した時、其の療法は一體何であるべきか？　高壓して萎縮せしむ可きであるか？　メスを振つて切り取る可きであるか？　轉地療養せしむ可きであるか？　營養をよくし、藥餌を與ふ可きであるか？　或ひはまた注射を行ふ可きであるか？　而して能く其の營養物となり、食藥となり、注射劑となりまた醫者となり療養所となり病院となり得るものは果して何ものであるか？　……といふ樣な多くの問題を同じく類推によつてそれ〳〵愼重に考へて見る事が是非とも必要であらうと思ふ。

　もし、斯う云ふ樣に身體と病毒との譬喩類推をば何處までも保持して行き度いとならば其の言ひ表はし方を採用するとして筆者自身の考ふる所によれば、此の『惡』思想なるものの感染も（他の多くの善思想感染の場合と同じく）極めて屢々、空氣傳染による樣である。だから如何に多くの兵隊などを出して西北の方に寨や板塀を立てめぐらし交通を遮斷したつもりでをつ

たとても決して安心してノンキに櫻など見てゐることが出來るものではないのだ。どんな小さな隙からでも、容易に空氣は通つて來る、もし其れをさへも危險であるといふので國全體を少しの洩れもない樣な硝子瓶か、ブリキ函かの中に入れて置いたとしたら、成る程、安全には違ひなからうが、然し久しからずして、國民全體窒息して死んでしまう外ないであらうから病氣どころの問題ではない。勿論被感染者が豫め感染に適する樣な體の素質を有するといふことが必要條件ではあらうけれども空氣を傳はり、風に乘し、或ひは大海を潮と共に漂ひ、立ち登つては雲となり、降つては雨や霰となり、地下をも潜ぐり、金石をも滲み透してやつて來る所の微塵の如き思想の種子や菌に對しては、結局頼りに出來る樣な遮斷法といふものはないのである、上段三十頁に掲げたあのロングフエローの詩に

"I breathed a song into the air,
　It fell to earth, I knew not where;
　For who has sight so keen and strong,
　That it can follow the flight of song?"

云々、と歌つてゐるのは卽ち人間の思想の感染する一場面を表はしたのであつて、一七五七年から一七六二年頃までの間に、ルソーが大空に向つて歌ひつゞけた歌と云ふものは、只單に其の生國たるフランスに響き亘つて其處にあの大變動を惹き起したばかりではなく、ロシヤに入つては一八二五年の所謂『十二月黨』の叛亂となつて反響し、また我が日本などに於ても、明治七年（一八七四年）以來の民權運動に其の共鳴を起してをるのである。但し之れは既に其の部分に於ても云ひ置きたる如く（上段四八頁）我が國民權運動の二次的要素となつたのみであつて、決して其れが主なる原運動力であつたわけではない。主なる原動力は、上古聖王の德政を慕ひ奉り、再び眞の『帝王道』を復歸せしめむと希つた日本國民全體の誠心の動きであつたのだ。

　もし思想の『惡』化といふことをあくまでも傳染病にたとへるならば其れは多くの傳染病の中で一番疱瘡の樣なものに似てゐると思ふ。其れは地球の兩極に近き氷原の上から遠く赤道直下の島々にまで擴つて居る全人類に共通なる病氣なのであつて、地方によつて多少の差異こそあれ人は其のからだの强壯なると虛弱なるとに論なく、誰れでも一度は其れに襲はれ得可き可能性を持つてゐるのである。種痘といふ豫防法を十分滿足に行ひ得る今の世にあつて、我々は稍ともすれば其の痾疥なる疫病の慘害が如何に猛烈なものであるかを忘れ、また種痘法發見の大偉動者たる彼れエドワード、チエンナーの恩をも忘れ勝ちであ

るけれども、もしも我々が、十九世紀初頭以前の疱瘡流行史を繙くならば、我々は恐らく人類の歷史あつて以來、此の病ひの慘害程に、絕大なる慘害といふものは、未だ曾て如何なる暴君によつても、また戰爭によつても、飢饉によつても、決して起されたことがないであらうと云ふ事を大體、推察することが出來る。ヨーロッパに於ける古い時代の流行に就てはいま別に何も云はない。アメリカには、其の發見後十五年目にはじめて輸入されたのであつたが、更らに其れより十年目なる一五一七年には其の流行の爲めにサント、ドミンゴの住民の如きは殆ど全滅に歸し、其れより三年後の一七二〇年には、メキシコに流行して只一ヶ年の間に三百五十萬の死亡者を出して居る印度に於ても一七七〇年の流行時には一ヶ年に三百萬の人が死んでゐるし、我等が問題とす可きロシヤ本土では十八世紀の初頭から一七七一年頃までに少くも千〇五十萬位の住民が斃されてゐ、また十九世紀に入つてからも、地方の田園に於ける文化の程度低く、種痘の法なども中々に普及せられなかつたので、一八五六年の流行に際しては、場處によつて住民、の八割以上が斃され、多くの地方に於て、少兒の殆ど全部を失ふといふ樣な慘狀であつたのである。然るに一八七四年ドイツに於てはじめて、法律を以て强制種痘の制を定めたのを魁として、他の文明諸國でもまた同じく其の例に倣ひ、既に今日に於ては、我が國などでも餘りに日常の茶飯事になり過ぎたといふ感じさへする『種痘』の制度によつて、容易に其の大慘害から免るゝことを得て居るのである。

まことに疱瘡なる疫病は人類に取つて一つの大なる禍である然し乍ら如何に其れを禍であると云つて憂ひ悲しんでみたところが、其れが殆ど人類の持つて生れた一つの必然性である以上は、何とも致し方ない次第であつて、我々は只、如何にせば其の災害を最も小さきものになし得べきかといふ事に於て工夫を凝らすより外に道なく、さうして今では幸にして既に『種痘』と稱する、簡便にして然かも有効なる豫防法を所有して居るわけなのである。今では誰れでもが、其種痘の効果を知つて、極めて少數の頑迷なる人々を除けば、あれが牛からの膿を自分のからだに付けるのであるといふ理由によつて、其れを忌避する樣な偏見に持つてゐない。もしも十九世紀の歷史を詳しく通覽して見たならば、其の偏見を一年でも早く捨て得た國民はそれだけ多くの利益を受けてをり此のセンチメンタリズムを一日早く脫却したる家族はそれだけ多くのいのちを延ばし得て居るといふことを必ず悟り得るであらう。現に我々、日本國民の如きは、不幸にして其のセンチメンタリズムを棄つる事の少しく晩

かつたが爲めに、英明たとふるにものなき孝明天皇をば、あの國家の重大時機に當つて、此の疱瘡の爲めに失ひ奉つたのであつた。（上段四一頁參照）

もしも『自由平等』の思想が、一般民衆が其れを理解し誤りたる場合（さうして少數の特權階級のものが同時に無理解なる態度を固持した場合）社會に無秩序と混亂とを誘引すると云ふ理由に基いて、人類社會に對する病毒であると考へらるゝならば、其の病毒たるや、實に上記の疱瘡の如く、人類其のものに屬する必然性とも云ふ可き病毒なのである。其れは或ひは大なる禍であるかも知れない、然し此處でもまた我々は、如何に其れを禍ひであると憂ひ悲しんで見たところが何の益にもならぬのであつて、其れよりも寧ろ我々は、如何にせば、其の『自由思想』が生み出す可き害毒の力を最小程度まで減じ得るか？といふことを思ひ、其の所謂『病毒』なるものが疫病の形をとつて世を騷すことがない樣に、何か『種痘』に相當する樣な適切なる豫防法はなきものであらうか？　と工夫を凝らすより外に賢い道はないのである。

然らば果して、其れに對する確實な豫防法があるか！　といふに、其れにはまだ充分完成したものとは云へないけれども、兎に角、既にあることはある。其れは丁度、痘苗を植えて天然痘を豫防するが如く、もし強ひて『毒』といふ字を用ゆるならば、所謂『毒を以て毒を制する』の主意に基いたのであつて、過激に流れぬ範圍内に於て、然かもなほ必要にして充分なるだけの速かさを以て、國家の制度を次第に社會化して行くといふ方法なのである。今日のところ、帝王國としては、イギリスあたりが一寸率先して既に實行して居る方法である。則ち、一般の民衆よりも自覺心が進み、また理解にも富む所の有識階級が（さうして、羨しきことにあの國では、爲政者の過半數も、また、其の理解ある人々の中に屬してゐる）自ら衆に先んじて、國家の制度をば、愼重に、然し勇敢に、どし／＼と社會的に改造して、出來るだけ國民全體の福祉を進め、物質並びに精神的の向上を計る樣に努めてゐるのである。然し、何分にも對照物が國家といふ大きなものであるから、其の種痘の方法もまた幾分は複雜なることを免れず、既に其の主意だけは確定してをるものの、其の具體的なる細目に至つてはまだ將來の工夫を待たねばならぬ所も極めて多い。先づ第一に必要なることは、爲政者並びに一般の有[illegible]階級が『民をして知らしむ可からず。よらしむ可し』といふ征服者的主義方針を絶對に捨てることである。其れによつてはじめて言論の自由といふことも實際に確保され、明かに民意のある所を知ることも出來れば、また眞の[illegible]

育』を根本的に普及させて民衆の心を次第に向上させて行くことも出來るのである。第二は、立憲政治の確立と其の完成である。さうして、時期の問題は別とするも、其れは結局、普通選擧制であり、男女同權である可き筈である。また一院制度と二院制度（或ひは三院制度）と、何れが最も賢明なる制度であるかといふ利害得失の問題は愼重に考慮して定むるとしても、其の議員なるものは、何れも皆、國民全體の代表者として公平に選出されたものでなければならず、或る階級は二十人から一人の代表者を出すに反し他の或る階級は十萬人の中から一人の代表者を送るといふ如き不合理なる差別があつてはならぬ。もしも『貴族』とか『華族』とかいふ自畫自讃的空名に執着して此の平等制の大義を忌避する者があるならば、其れは丁度、牛の膿汁を用ゆるといふ理由に氣を腐らせて自分一人が種痘することを背んぜざるのみではなく國家全體にも其のことを禁止させ樣と望むワカラズやの樣なものである。自分一人だけ種痘するよりも天然痘に罹る方が寧ろ本望であるといふならば其れは其の人自身の自由であらうけれども、もし其のセンチメンタリズムを國家全體に强要し樣とするならば、其れは明かに非常なる罪惡である。何故ならば禍因は到る處に潜伏して居て一度び國家が『種痘』なる制度の實行を廢する時、人はたとへ他の方法によつて如何に「其の身體を鍛錬し强壯にして」見たところが、恰も十八世紀以前に於ける疱瘡の大流行の如く、いつ如何なる大々的慘害が國の全土を襲ふて來ることか、少しも安心してをるわけに行かぬのであるから。其の最もよき實例は、我々がここに論じ樣とするお隣りのロシヤである。

既に今迄に述べたる所によつてもわかるであらう如く、ロシヤに於ても、斯くの如き意味による『國家的種痘制度』の必要を極力唱道し、實に其の制度の實施のみが國家安泰の唯一策たることを切言したる人々は、貴族階級其れ自身の中にも決して少くなかつたのであつて、其れ等貴族中の覺醒したる分子、より敏感なる良心を持つてをつた分子が、事實、ロシヤに於ける所謂『インテリゲンツイア』なるものの主要分をなしてゐたのであつたが、悲しい哉主權者たりしロマノフ王朝をはじめ、其れを圍繞してをつた特權階級の大部分は、目前の私利私慾と、傳統的の偏見とを固持して極力之れに反對し、高壓武斷的の手段を以て之れに應じたので、終ひに一度び此の制度實現の曙光を見せたる第一、第二の國會（"Duma"）をも解散して、國民を絕望せしめ（上段五一頁參照）其の絕望自棄の闇の中より、今、我等が眼の前に見る如き悲慘事を誘起せしむるに到つたのである。

まことに、今日、ボルシェヴイキの統治の下にあるロシヤ

は、悲惨其のものゝ別名である。けれども筆者の考ふる所によれば、此の現時の悲惨事は一九〇七年六月三日、第二の國會に高壓的解散を命じ、また同時に一と度び發布聲明したる憲法をも骨抜きとしたるロマノフ朝專制統治下のロシヤが當時生み出す可き結果だつたのであつて、言葉を換へて云ふならば、其れは、無理解・無自覺にして、種痘することを峻拒したる人間が終ひに十年の後ちに、烈しき天然痘に侵されたといふ樣な理屈なのである。筆者を以て云はしむるれば、彼のボルシエヴイキなるもの其れ自身も、また武斷官僚的前ロシヤ帝國の生んだ必然的産物たるに過ぎず、さうして、今日彼の國に瀰漫して居る所の無秩序と無智と混亂……とに對して、現時の『勞農政府』なるものや、また其の前任者であつたケーレンスイキの一派などにも勿論、莫大なる責任があるとは云へ、其れに對しての最も大なる責任を負ふ可きものはやはりニコライ二世を傀儡として廟堂に立ち、國民の福祉、教養といふ事を他所事として、日夜不義の悦樂に耽つて居た所の特權階級であり、更らにまた根本的に論ずるならば、十五世紀の中葉、彼の蒙古人による二百五十年間の虐政を毀滅し、然かも其の蒙古一流なる專制と壓伏との惡習のみは依然として之れを繼承したるモスクヴア朝や、其の後繼者として、益々暴虐の制度を發達せしめ行きたる全ロマノフ朝三百余年の政治其のものに其の責任を歸せしめなければならないのである。

若しも、自分等一個人としての利害關係から論ずるならば、また我等が私としての感情を本として議するならば、筆者や、筆者の妻や其の近親者達は、何れも皆、今日のボルシエヴイキを目して已れ等が不倶戴天の敵であると考へ、『飽くまで彼れ等を殲滅して其の肉を啖はむ』などゝ云ふ態度にまで出たとしてさへ、當然其れを諒とさる可きだけの理由を持つて居る者なのであるが、個人の問題は、どこまでも個人の問題であつて、其れをば、全國家、社會全部の問題と混同することは決して許されない。國家的大變動に伴ふ慘害が大きければ大きい程、(而して、其の慘害の一部として、自分等自身が、自ら親しく其の苦惱を體驗すればする程)、我々は其の『大變動』なるものゝ由て來る所以を、益々愼重に考へ、其の事情の全てを冷靜に批判する樣に餘儀なくされるのだ。斯くして筆者等は思ふ、今日の所謂ボルシエヴイキなるものゝ暴烈憎く可く、ロシヤ現時の混亂、まことに憂ひ悲しむ可きであるが、然し、責任はあくまでも連帶であつて我々は徒らに目前の破綻の大なるに驚いて、事の眞相を取り違へてはならない。たとへて見るならば今日のロシヤは、少くも五百年の長きに亘つて、代々、懶惰放蕩なる主人

のみを持つてゐた舊家の、最後にたう〳〵行き詰つて、根柢から破產してしまつた樣なもので、何分五百年間の借金と因果とが一時に報いられて來たわけなのであるから、たとひ如何なる傑物が出て其の跡仕末をつけ樣としたところが、普通の場合に於てすら決して五年や六年でうまく、行く可き筈のものではないのだ。況んや、なさけなくも、國家的私利私慾の心からだうしても超越することが出來ず、大丈夫たるに恥かしからぬ義俠の念などは爪の垢ほども持たぬ樣な多くの『列强』なるものが少しも誠意ある助力などはしてやらず、却つて橫槍を入れて、事局を益々紛糾せしめつゝあるに於てをやである。此の意味に於て論ずるならば、或ひはポーランド、或ひはデニーキン、ユーデイニッチ。乃至コルチヤック。セメヨーノフ……等の手合ひを、“Cat's Paw”として、結局、三文の得にもならなかつたあれらの不徹底なる武力干涉を敢てしたる國々は、何れもみな、ロシヤ現時の混亂に對して、やはり幾分の連帶責任を有す可きものであるし、また元來、徹底的なる平和主義無抵抗主義者たりし以前のボルシエヴイキをして、終ひに其の主義を放棄して赤衞軍なるものを編制せしめ、肉彈的突擊を以て、タンクを奪取すといふ如き旺盛なる戰鬪心をすら發揮せしむるに至つた功は確かに、單獨講和後ウクライナに侵入したるドイツの軍閥と、上記幾多の反革命軍を煽動し援助したる聯合諸國の爲政者とに歸せしめねばならぬ。まことにボルシエヴイキの暴烈は憎む可く、惡む可きものであるに違ひない。然し、それにしてもあれだけ大きな、國民的借財の遺產を背負ひ、因果の總額を引き請けて、然かも四面みな楚歌の聲する裡を、兎に角、今日まで獨立の生存を續けて來てをるといふ元氣の點だけは實に驚く可きものであると思ふ。實にロシヤはいま、國全體、民族全體として、再生の苦惱を體驗しつゝあるのである。曾て、暗愚なる爲政者が『種痘』を背んぜざりし罪として、今、『痘瘡』の大患に罹りつゝあるのである。けれども思ふに、あの偉大なる體力と隱忍力とを以てすれば、恐らく此の重き病患にも打ち勝つて、終ひに幾年かの後には、强き免疫性を得、自己の體質を一新しほんとうの意味に於て健全なる大ロシヤとなつて再び起き出ずるのを見ることであらう。

トルギイエーネフは彼の名高き五十の『散文詩』の最後をば『ロシヤの言葉』と題する一篇で結んで、

『祖國の運命に對しおれが疑惑に惱む時、祖國の行末に關しておれが重くるしき物思ひに沈む時、――ほんとに唯だ、おお前ひとりが、おれの支へであり賴りであるぞ、おゝ汝、偉大な、そして權能ある、眞實にしてまた自由なるロシヤの言

葉よ!!——もしもお前がゐなかつたならば——いま此のおれ達の邦家の中で、日夜爲され且つ行はれつゝある全てのものを見る時、だうしておれ達は絶望の淵に陷らぬことが出來やう?——あゝ、けれどもだうしても信じられない、かういふお前の様な言葉が、偉大なる國民に與へられたものでないといふ事は!!』と書きつけてをるが、いま其の言葉を讀み、またそれをば、不自由にして權能なき我が國の鵺式現代語に譯さうなどと骨折つたりするにつけても筆者は自分の心の裡に、たとひ目下の狀態は如何ともあれ、あのロシヤといふ國の將來の恐らく、非常に偉大なるものであり、光明に輝く可きものではなからうかといふ感じを強く直感する者である。トルギイエーネフが『散文詩』を書き終へたのは一八八二年の七月で、丁度其の前年の三月一日にはアレクサンドル二世の暗殺あり、國内一般に自由思想が惡化して、テロリストの活躍が次第に著しくなりつゝある時であつたのだ。

比較的近い時代に帝位にあつたツアールが實際に果して如何なる人物であつたかと云ふことは、中々容易には知り難い。ロマノフ朝廷の意嚮によつて書かれたる歴史(?)のみに從へば、勿論、どれも是れも英帝であり、明君であつたことになつてしまうが、また其れとは反對に、自ら亡命したり、或ひは追放されたりして外國に出た樣な人々の書いたものに從ふならば、何れも可なりの暴君であり愚帝であつたことゝなる。だから、時代が立つ間に、段々と批判が正鵠を得て來るには違ひないのであるが、當分の間は、一般に行はるゝ評價も當てにすることが出來ぬ。例へば現に廢帝となられて、悲慘なる最後を遂げられた彼のニコライ二世の如き、其の統治下の露都に筆者が親しく住んでゐて、いろ/\の人からきかされる批評が實に黑白まち/\であつた。度び/\、拜謁の機を有する高官中の或る人達は、『決して/\左(ヒダリ)の連中の書き立て、言ひふらしてをる樣なお方ではない。實に穩かな、そして御聰明な立派な君主(ゴスダリ)である……』といふ樣に傳へるし、さうかと思つて、また一部の大學生などの云ふ事をきけば『實にのんだくれの、まり仕樣のないわからずやなんだよ』とまるで頭からけなし付けてしまう。

日本では小學校や中學の歴史の教科書を見ても日露戰爭のことなどは云ふまでもなく、既に此の間の日獨戰爭のことまでがちやんと書いてあるのに反し、ロシヤでは、如何なる理由によるのであるかは知らず、現に統治中であるツアールの代になつて起つたことは何一つとして歴史の本には記されてゐない。だから、ニコライ二世の統治下に於ては、たとひ世界戰爭も既に半ば過ぎたる一九一六年の末に出たロシヤ歴史の教科書などで

も、やはり一八九四年に於ける其の卽位のことを以て筆を擱き『絶倫なる御精力と强壯なる御健康を所持せられたるにも拘らず皇帝アレクサンドル三世陛下は御齡五十歳にして、一八九四年十月二十日、クリムなるヤルタ市の片ほとり、リヴアヂイヤに於て、腎臓の御疾患の爲め、突然崩御あらせられたり。而して先帝の御崩御ありたる後、ロシヤ皇帝の御位には先帝の御長子なる今の主上、皇帝ニコライ二世、アレクサンドロヴイッチ陛下御卽位遊ばされたるなりき。』といふ樣なところで打切りとしてをるのであつて、然かも、荀も其のニコライ二世に關係する事柄と來たら、たとひ卽位以前まだ皇太子であらせられた時のことなどにしても只の一言半句も記されてはゐないのだ。有つたまゝの事を書いては勿論工合が惡いし、さりとて、世人がまだよく記憶してをる樣な近年のことを、白々しく黑を白と書くわけにも行かぬといふ理由で全てを差し控へさせた官僚的政策なのであるか、それともまた、たとひ一天萬乘のツアールにしたところが人の一生の事蹟の眞相といふものは棺の蓋を覆ふて、然る後ち更らに或る歳月が經つた、あとでなければ、決してわかるものではないから……と極めて理想に徹底した爲めであるかは知らず、兎に角、時のツアールのことに關して、曲りなりにも、一般國民に標準的智識を與へ得る樣な何等の書物もなかつたといふことは種々雜多なる流言蜚語を横行せしめ、多くの好ましからざる誤解を一般國民の腦裏に生ぜしむるに與つて力あつたことの樣に思ふ。何故なれば、既に一八七九年頃より、『暴を以て暴に報ゆる』といふ方針を決定的に採用しはじめてゐた樣な左黨の連中は、只單に、『隙さへあらばボンブを……』などと思つてゐたばかりでなく、また精神的のボンブにも比す可き功果のある貶謗の言をば、たえずツアールの身に對して放たむことにも熱心であつたわけであるから。

『民をして知らしむ可らず、……』の方針が行はれつゝある時民の心はいつもくら闇である、だから一犬虚に吠ゆれば、萬犬實を傳へてつひには、實にとんでもなき樣なはなしまでが、恰かも事實であるかの如くに信ぜらるゝに至る。一つの小さな例を擧げて見るならば、彼のニコライ二世が未だ皇太子であられた時、世界巡遊の旅に上られて、我が日本をも明治二十四年に御訪問になり、さうして、其の時、我々の同胞の中から厄介なる『國粹』主義者的の氣狂ひが然かも警護の巡査の中から飛び出して來て、所謂大津事件なるものを惹き起したことは誰れもがよく知つてをる事實であらう。其の『勤王的一愛國者』ありしばかりに其の當時、畏れ多くも我が明治大帝が、國を代表して、厚く罪を謝せられねばならぬ樣なことにもなり、また其の後三

十年近く經つてゐた、筆者の露國滯在中などにもロシヤの人々の談話中に話題が一度びあの事件のことになると、（日露戰爭の時のことをはなす場合などとはちがつて、）筆者自身は大いに肩身が狹く感ぜざるを得なかつた樣な次第なのであつた、あの時の下手人自身は『尊王攘夷』といふことで大いに忠義を勤めたつもりだつたのかも知れないが、何といつても文明國としては極めて無茶なはなしだつたのであるから。然るにこちらが、多少心の中で恐縮し乍ら、ロシヤ人側のいふことをきくと、まことに談しがトンチンカンなのである。或る人間は『あの時、お前の國の方で、頭を一つやられて來たものだから、おれの方のニコラーシヤもたう〳〵あんな馬鹿になつてしまつたのだ』など〻笑談半分にはなしをする（ニコラーシヤといふのはニコライの呼び名の一つで例へばニコちやんとでも云ふ樣なものだ。別に輕蔑の意味でゝなく、元來ならば親しみを表してゐるのであるが、然し兎に角相手が皇帝なのであるから、まるで尊敬の念を持たぬ連中の常用語で、イギリス人が今の王樣をヂョージと呼び捨てにする場合とも少しわけがちがふかと思ふ。尊敬を持つてゐた人達はゴスダーリといふ言葉で皇帝即ちツアールの事を指したので、之れは日本語の主上或ひは君主といふ字にでも當るだらうか）また、さうかと思へば、他の人々は、『ほんとにい〻お灸をすゑてくれた、奴さん、どこへ行つても、やつぱり自分の國と同じ樣に無理非道なことが通るものと考へてゐたにちがいないのだから……』など〻云ふ樣なことを云ふ。實に變だと思つて、それからよく〳〵聞き質して見ると、實に驚いたことには、いつ、誰れが、さういふ揑造說を一般に言ひ廣めてしまつたものか知らないが、兎に角、其の頃（即ち今度の戰爭當時）多くの人々の信じてゐた大津事件の眞相なるものは、つまり、皇太子だつたニコライ二世が日本に來た時、或る日本の女に無理難題をいひかけ非道を行はむとしたので、其のサムラヒの娘か何かから斬られたのであるといふのである。後年になつて、ニコライ二世には、（やはり之れも根も葉もない事實なのかも知れないが）皇后がラスプーチン其の他と醜名を流したと同時に、やはり同じ樣な非難が世間に傳へられてゐ、恐らくそれだから其の頃になつて揑造された此の大津事件の『眞相』などもやはり其のま〻無條件に世人に信じられてしまつたのであらうかとも考へられるが、最近に自分が此の稿に筆を執り乍ら、ふと思ひついて、家にやつて來るロシヤの人々に、面白半分き〻質して見ると、驚く可し、未だに上記の『僞說』其のま〻だと考へてゐる人間が、然かも今日、極端な反ボルシェヴイストとして、君主制の復活をさへ主張してゐる樣な連中のなかにも多いのである。

我々が今茲で話題として居る所のニコライ二世は、其の後、終ひにあの様な痛ましい最後を遂げられて、まう此の世にはをられない。けれども其の『崩御』のまだ起らなかつた以前に、世は既にボルシエヴイキの天下となつたわけであつたから、他のロマノフ朝のツアールに就て我々が持つ如き、官僚的筆致を以て書かれたる此の廢帝の歴史といふものは、或ひは一度も記されることなくして終るのかも知れない。實に今日の勞農政府は既に各大學の法科なる學科を撤廢し、また從來の所謂『歴史』なるものを造り改めて、階級鬪爭史を編まむとして居ると云ふ様な有様であるのだから。(此點に就て、一月七日の朝日に掲げられた三浦周行博士の『文化の下剋上——歴史の新しい見方』と題する一論文から自分はいろ／＼と教へられる所が多かつたから、玆に附記して、有志の御一讀をお薦めして置く)。もしもボルシエヴイキ流の議論に從ふならば、筆者が玆に、ニコライ二世なる名を持ち出して、其の人の一生のことを兎や角と述べるなどは、時代錯誤もまた甚だしいのであらうけれども、然し、其れにも拘らず、自分は是非とも、讀者と共に、其の廢帝の生涯の事を少しく玆に顧みて見ねばならぬ様に感ずるのである。

曾て、ロシヤにゐた時種々なる方面の、種々なる位置や傾向の人達から親しくきいた事などを綜合して、いま筆者自身が、只淡然と心に判斷し想像することを云ふならば、恐らくニコライ二世と呼ばれたるあの廢帝は次きの様な人であつたのだらうと思ふ。先づ生れつきは父親のアレクサンドル三世などゝは、容貌を見たゞけでもまるで似てゐない、極めて柔しい、内氣な人であつたらしい。(父親だつた、ア、三世の方は極めて豪放な、其の代りには一見直ちに暴君氣分の感ぜられた様な人物で、ロシヤで多くの人々から『彼れは只、王冠をいたゞいた下郎(ムヂーク)であつたに過ぎない』と評されてゐ、其の性格の一斑は彼れの私生兒であつたといふ噂さのある、さうして後に宮中に大勢力を振ひ、終ひに極東太守となつて日露戰爭にも大關係を持つたあのアレクシイエーフといふ人間が充分に傳へてゐた様に見える)。

廢帝は一八六八年卽ち明治元年の生れである。まだ若かつた頃から歴史には特別に深い興味を持つて熱心に勉强されたらしく、さうして其の結果、帝位に卽くといふことを、眞面目に考へれば實に非常に重大なることであつてとても自分などでは力が足らず、また、されぱと云つて、いゝ加減に、行きあたりばつたりに、(今迄通りの帝王式タクチックを使つて)やつて行かうとするのは餘りに怖ろしいことである……とでも考へられたのであらうか、或ひはまた、虫が知らせたとでも云ふのであらうか、丁度世界漫遊の途に上られて日本にも來られた二十五歳

頃の時分には（一八九二年）極めて强固に皇太子の位置を去り度いといふ希望を持つて居られたのであつた。更らに傳ふる所によれば、廢帝は、まう人生の華といはれる靑春時代に達し、宮殿生活をしてをられ乍らも、餘りさういふ方の生活は好み給はず、且つまた妙に女嫌ひであつたので、アレクサンドル三世やまた母、皇后のマリヤ・フエオドロヴナ、其の他のものが心配して、だうもあゝ云ふ變人では困る、少しは人間らしい俗氣も持つてゐてもらはなくては、といふので、丁度其の頃、彼のアンナ、パヴロヴアと共に、ロシヤバレツト界の明星と歌はれ、女神と稱へられてゐたクセシンスカヤといふ舞妓を連れて來て、何でも或る日の如きは殆ど彼の女を素裸にして、皇太子の居間に逐ひ入れたとまで云ふのである。然るに其の藥りが少々利きすぎて、皇太子がクセシンスカヤを熱愛される樣になつたのを見るや、皇帝や皇后等は、之れは飛んでもないことになつたとばかり、今度は其の仲を引き裂かうとして、種々なる策略を用ひたのであつて、日本に來られた、あの時の世界巡遊の御旅行の如きも實は其の目的の爲めに計畫された第一策だつたのであるといふ事だ。其の時、廢帝は、極力自分の皇太子たる位置を弟に讓つて、自分はクセシンスカヤと共に、何處かに小さな家庭を作つて、平安な生涯を送り度いと主張し、嘆願されたのであつたが、其の希望は無慈悲にも、たう〳〵きゝ入れられずして、クセシンスカヤは暴力を以て遠ざけられ、皇太子は、『旅行でもして、いろ〳〵珍らしい處を見たら、なあに直ぐに忘れてしまうさ……』といふ樣な周圍の常識論に送り出されて波路遥かに極東觀光の旅に上られたのであつた。

　だからもし、此の時、皇太子がはじめて、酒を飲む惡癖を得られたと假定しても、恐らく誰も、其れを不思議であるとも、また惡いことであるとも言ふ人はあるまい。さういふ樣な內情があり、さうして、誰でもが推察出來るさういふ樣な心持ちでをられた時に、大津ではまたあんな一幕を見せたのであるから、實際に御氣の毒だつたと思ふのである。けれども、兎に角、幸ひ怪我も大したことなくて、歸路につかれ、途中、浦鹽に於て烏蘇里鐵道起工の第一の基礎石を自ら置かれたのが、實にシベリヤ鐵道のはじめとなつたわけなのである。歸都に歸られたけれども、其の時、クセシンスカヤはまう都に住む事を禁じられて其處にはゐなかつた。次いで間もなく一八九四年の十月二十日に、當時南方を旅行中だつたアレクサンドル三世突然の崩御といふ事になつて否應なしに其の十一月一日にツアールの位を繼がるゝ事となり、また、同じく、已むを得ぬ事情に餘儀なくされたのであらう、獨逸ヘッセン王國の王女だつた（後の皇

后）アレクサンドラ・フェオドロヴナと結婚されたのであつた。

ロマノフ朝歴代のツアールの中で、初代のミハイル、フェオドロヴイツチ太公位を除くならば、其の殘りは殆ど一人として自然のまゝ死を遂げた皇帝はなかつたのであると一般に信じられて居る。何れの世に於ても、宮中といふ處にはいつでもツアールといふものを自分等の旗印として、已れ等の權勢を末ながく保持し様とする黨派があると同時に、また其れをぶち倒して、已れが取つて代らうといふ反對黨が出て來て、其れ等貴族階級内の陰謀、暗鬪といふものは、其の劇しき點に於て、また其の辛辣なる點に於て、民黨の最極端なるテロリストの群れに比べたとて決して勝るとも劣りはしない。考へて見ればロシヤの様な『民衆の氣風最も險惡なり』とされてをつた國に於てすらも、國民のうちのテロリスチツクなるエレメントの手によつて不幸、暗殺の難に遭はれたロマノフ朝の皇帝といふものは只彼のアレクサンドル二世と、それから此の廢帝ニコライ二世との二人があつたばかりであるに反して、殘りの十五人近き歴代のツアールといふものは、みな悉く、宮廷内に於ける黨派鬪爭の犧牲として貴族や、近衛の軍人などによつて或ひは密かに毒を盛られ、或ひは刺されたのであるといふのである。ニコライ二世の父たるアレクサンドル三世の死もまた、ロシアでは一般に病氣ではないと信ぜられてゐ、甚だしきに至つては、其の下手人は當時の皇后マリヤ、フエオドロヴナを中心とする黨派であつたなどといふ事まで云ふ。さうして實際、ニコライ二世が立たれた後ちも、其の皇太后の黨派は宮廷内に、また從つて政府内に、久しく絶大なる權力を持して、ツアール自身の意を蔑にしたるのみならず、後ちに次第に勢を増して來た、あの皇后アレクサンドラ・フオエドロヴナを中心とした親獨派の勢ひをも、頭から壓伏し得てゐたのであつた。

本來から云ふならば、ロシヤに於けるロマノフ家なるものには既に久しき以前からロシヤの血といふものは殆ど流れてゐなかつたのであつて、ピヨトル一世が、ロシヤ貴族の出なる皇后エヴドクシヤを斥けて、極めて素性のわからぬ、百姓娘のエカテリーナを（一七〇一年ロシヤ軍がリヴオニヤに侵入し、マリエンブルグを圍んだ時、陣中で士官の慰みものになつてゐた土地の女である。）戰線からの御土産としてつれ歸つて、終ひに皇后と樹立するに至つて以來、さうして自ら手を下してエヴドクシヤの生みたる皇太子アレクセイをペトロ・パヴロヴスキイ要塞に幽閉して終ひに其の生命を斷ちながら、未だ後繼者を立てざる内に自分自らも世を去つて、其の沒後、メンシコフ。トルストイ其の他の宮人の一派の推薦と近衛兵の武斷的示威運動によつて、上記のエカテリーナ自身がはじめて女帝として全國に君

臨したる以來、(即ちエカテリーナ一世)更らに其れより三十七年の後ち、獨逸ホルスタイン、ゴツトルプ公チヤールス、フレデリツクスの子なるピヨトル(ピヨトル三世)が、エカテリーナの次女の子なる故を以て迎へらるゝに及び(此の僅か三十七年の間に極めて下らぬツアールの相續いで帝位に上りたること七代なり)而して彼れが其の皇后として同じく獨逸より迎へられたるエカテリーナ(後ちにエカテリーナ二世となる)との間にパーヴエル一世を儲けたる後、妻なりエカテリーナによつて暗殺せられてより以來、…………皇室には、單に彼のリユーリツクの正系たる可き血が途絕えてゐたといふばかりではなく、實にロマノフ朝の開祖たるミハイル、ロマーノフの血さへ既に殆ど其の痕跡すらも疑はるゝまでに減小して、獨逸其の他の異邦人の血のみが主として流れてゐたわけであつたのだ。

筆者は本稿の姉妹篇とも云ふ可き『ロシヤ全土をばボルシエヴイキの天下たらしめた諸原因の歷史的考察』と題する拙稿の上篇(本誌昨年九月號)に於て、第九世紀の中葉、彼のリユーリツク以下のヴアリヤーギの入國に端を發するロシヤ建國時代の事情を述べ(三〇―四四頁參照)また、其の後十一世紀の中葉にまで及ぶキエフ太公國の全盛時代を說いて、其の文化をば我が奈良朝時代の文化に比し、ヤロスラヴ賢帝を我が聖德太子に較べ、『ヴエツチエ』("Vetche")と呼ばれたる民選議會の制度と、また帝位王位の繼承に關する所謂『年長順』("Starshinstvo")の掟とを說き(四四―五八頁參照)更らにヤロスラヴの死後終にの蒙古軍によるロシヤ征服を見るまで(十三世紀の前半)續いた封建戰國時代の事情を述ぶるに當つて(五八―七一頁參照)次ぎの樣な言葉を書きつけて置いた。(五九頁)

自分はいま茲に、其の當時の混亂せるロシヤの史實を一々記述するの煩はしさは避けるが、ヤロスラヴの死後約二百年間に內亂と名付け得可き內亂の勃發する事、大小八十三回、異種族よりの來襲を受けたる事四十六回、國外に討伐軍を送りたること前記ポーロフツイに對してのみにても實に十八回、而してキエフ太公國併びに他の公國の君位繼承戰に參與したる諸公の數が前後合はせて二百九十三人に上るといつたゞけで大體其の一斑を知り得るであらう。たとひ其の間にロシヤの仁德帝とも稱す可き一代の明君ヴラヂーミル・モノマツハがキエフ太公の位に即いて、全國土を統一し、外には遠く外敵を征して大いに國威を發揚し、內には仁政を敷いて全國民憧憬の的となつたとは云へ、其は只僅かなる一時に過ぎず(在位一一一三―一一二五年)不幸にして彼れの一とたび歿するや世は再び刈菰と亂れて殆ど之れを收拾す可き方法もなかつた。後段に到つて判明するが如く、我々が此の日本に於て建國以來一貫して戴いてをる樣な光輝ある皇室(即ち國民全ての宗親であり、さうして歷代國民に仁政のみを垂れ給ふ……申し分のない皇室)に、多少ながらも比較することが出來やうかと思はれる樣な皇室は、ロシヤに於ては此の時限り其の跡を斷つた。眞に『王道』とも

稱す可きものは、ロシヤにあつては此の十二世紀前葉に於けるヴラヂーミル・モノマッハを最後の王として全然其の影を沒し、其の後起つて君公の位に即いたものは、或ひは其れがたとひ相當に、立派なる君主であつた場合にしても、單に一地方的の主權者だつたに過ぎず（例へば北方スズダル地方に君臨したる聖アレクサンドル・ニイエヴスキイ公、南ロシヤに於けるダニエル・ガリッキイ公の如き）、またたとひ全國を統一し、外敵を破り、國の面目を新たにした君主であつた場合（例へばイヨアン三世の如き、また所謂ピヨトル「大帝」の如き）にしても、對國民的の立場から見れば既に其れ等はみな「王者」と稱するよりも、寧ろ「霸者」と稱す可き本質のものであつて、云はゞロシヤに於ける北條氏、足利氏である。さうして其れ等歴代の主權者の間には「兎に角、國に對して勲功の方が多かつた」と考へられる北條泰時、時賴、時宗に比す可き少數の「明君」を除いて、我等は其處に餘りに多く北條高時。或ひは足利義滿、義政……等の如き執政者の續出したることを憾まねばならぬ次第であるのだ。」

筆者はまた同じ稿の下篇（本誌昨年十月號）に於て、國家及び國體なるものを家に譬へ、ロマノフ朝なる『皇室』と純ロシヤ民族並びに其れが爲めに併合せられたる他民族との關係を論じて、

『華麗善美を盡した宏大なる宮殿と、其れを取り圍む、恰かも豚小屋の如くむさぐろしき百姓家から成り立つて居つた以前の所謂「ロシヤ大帝國」は、戰爭と革命との猛火に一たまりもなく燒け落ちてしまつて、今や其處には其の代りとして、「ポ式」と稱する極めて無細工ではあるが、然し全部鐵筋コンクリートとも云ふ可き耐火性の家屋が建ちかゝつてをるのを見る。さて然らば其の家の中に住む家族の組織には、此の間に如何なる變化が起きたかと見ると、其の大火事や改造の騷ぎに際し、狼く別れ、子供等の中の或る者によつて、兩親が二人乍ら殺されてゐ、また多くの兄弟の間にも或ひは殺されたものがあり、或ひは自ら他に去つたもの、逃去つたもの……等が出てゐる。實に恐ろしくもまた悲慘な事だと思つて、抑々如何なる理由によつて其の樣な慘劇が行はれたのであるかと、よく〳〵事情を調査して見ると、先づ第一に、其の兩親だと稱してゐた人間が、決して誰れの生みの親でもなかつたといふ事がわかつた。澤山居つた子供の中の百分中六十五ばかりが、純ロシヤ民族、家附きの人間であつて、殘りの三十五に當る人間はみんな後に他所から連れて來られた養子や養女であり、さうして兩親と稱してゐたのは、まるでまう血も續いてゐない樣な遠縁の親戚のもので、其れがいつの間にか、ロシヤといふ家の主人であり兩親であるとスマシ込んで、養子や養女をはじめ、家附きの子供までを思ふ存分に自分等の食物にしてゐたわけなのであつて、長い年月の間、其の虐待に堪へ兼ねてゐた其の子供達が、今度の大火事に際して、其の贋せ親を放逐し、はじめは決して殺す意志などはなかつたのであつたが、遂ひ或る事變の勃發した爲めに（シベリヤに於けるチェホ、スロヴアック兵の奮起）偶然其のいのちをも縮めるといふ結果になり、また、從來、其の贋せ親に阿諛し、若しくは其れを煽てゝ利用し乍ら

他の殘りの兄弟達をいぢめて、私慾を滿してゐた少數の兄弟（即ち官僚及び軍閥階級）をも同時に葬つてしまつたといふ次第なのであつた。兄弟の中でも、「エストニヤ」だとか「リヴオニヤ」だとか、乃至は「ポーランド」「フインランド」……と云ふ樣な、元來よそから無理に連れて來られた養子や養女達は、此の際ロシヤ家から離れて各々別に分家を立てることになつたが、あとにまだ殘つた澤山の兄弟達の間にも、何分生れの異ふいろ〳〵の分子が混つてをるので兎もすれば一致の行動を取り、協力を續けて行くことが難しくなる。「親殺しの大罪を犯しよつた實に怪しからぬ奴等である。とてもあんな奴等と人間並みの交際をして行くわけにはゆかぬわい」と云つて、周圍にある外の家々では、未だにボイコットを續けてゐるのであるが、然しよく事情をきいて見ると、ロシヤ家にあゝ云ふ騷動が起つたといふことは決して無理もない談しである樣にも思はれ、「何とも已むを得なかつたのであらう」と考へてやる事も決して出來ないわけではない。否、自分等自ら實に立派なる兩親を持つてをる我々日本といふ家の子供等に取つては、不幸にして生みの親の愛を感ずる間もなく、冷酷なる繼せ親の手に引きとられて、いつも生活の絕ゆる暇もない樣な苦しい境遇の下に育つて來た、ロシヤといふ隣家の子供達ことを、實に可哀想であると同情をこそすれ、決して其れを咎めるなどゝ云ふ樣な氣には、なり得可き道理がないのである。ロシヤ家の子供達に取つても、昔は我々の兩親にも較べられる樣な彼等自身の生みの親があつたのだが、其の「王者」とも稱す可き生みの親は、不幸にして十二世紀の前葉に早くも死絕えてしまつたのである（上段參照）。實に「樹、靜まらむと欲すれども風やまず、子、仕へむと欲すれども親すでにゐまさず」といふわけなのであつて、悲しい哉、今日のロシヤの子供等に取つては、仕へて孝養を盡さむにも、まう仕ふ可き彼れ等の生みの親は、既に何處にも存在してゐないのである。たとひ一見今日の彼れ等が親不孝者の樣に見えるとしても、其れは決して、實際彼れ等にはじめから親を思ふ子の心が缺けてゐる爲めではないのだ。見よ、彼れ等の多數は、如何に彼の繼せ親にすらも、長の年月、模範的なる孝養を盡して、なほ其の足らざる事のみを慊れてゐたか!!!」

と云つた。さうして此の意味に於て云ふならば、我々が論じつゝあつた彼のニコライ二世なる人もまた、決してほんとうのロシヤ　であり、ロシヤの王たるに足る可き資格ある人ではなかつたわけなのであるが、然し、其れにも拘らず、彼れにはなほ、ロシヤの『王』たるにふさはしき多少の性質がなかつたわけでもないのである。只、何よりも大なる不幸であつた事は、彼れが薄志弱行の人間だつたと云ふことである。生來、心根は極めて柔しい人であり、現に帝位に即くことをすら自らは嫌がられた樣な性質の人だつたのであるから、一旦ツァアールとして立たれた後でも、もしも周圍からの強大なる障害がなく自分で思ふ通りの事を其のまゝ容易に實行し得られたのであつたら、必ず多少乍らも民の福祉を計られたに違ひないと思ふのである

が、其れにしては余りに宮中の奥深く、既に官僚や軍閥の勢力が侵入し過ぎてゐた。彼れ等は或ひは皇太后に取り入り、或ひはまた皇后を自家薬籠中のものとなして、各々私利私欲を営まむとしてゐたのであるが名前ばかりはロシヤ人となられても元來外國の皇室の人間であつた所の皇太后や皇后は容易く其れ等の人間から擔がれたのであつた。而して其れ等の全ての勢力をみな悉く、打ちくだいて 自己の主義抱負を實現し樣と云ふまでには、悲しい哉、とてもあのニコライ二世には智慮や斷行力が足りなかつたのだ。そこで勢ひ、皇帝ははじめから最後まで、常に一種の飾り物たるに過ぎないことゝなつたのだ。筆者は昨年十月の本誌に掲げた拙稿の中に、露獨兩民族の歴史的交渉を記し、ドイツ人のロシヤ國內移住に大別して二つの異なつたる期間があつた事を論じ、一八六二年以後に於ける其の悪辣なる侵略的手段に就て語り、また今次の世界大戰前及び大戰當時に於けるロシヤ國民の對獨的反感が如何に强烈なる程度のものであつたか、而して、其れにも拘らず、親獨的なる官僚の一派が如何にあらゆる方法を盡して暗中飛躍を行つたか、さうつて其れが如何にして革命勃發ロマノフ家沒落の最大原因となしたか……と云ふ樣な事情に就て書いた(三二——四九頁參照)此の場合に於ても、禍因の多くは、獨逸系の皇后を中心とし、たる官僚によつて蒔かれたのであつて、ニコライ二世の罪は問はる可き罪といへば、只、身親しく皇帝の高位に坐し、大權を有し乍ら、其れ等の有害なる諸運動に對し自ら積極的態度に出て之れを阻止する事が出來なかつたといふ無能力の一點であり、歸する處は彼れが『何故に、ツァールであり乍らも、そんなに薄志弱行であり、內氣であつたか?』といふ非難となるのである。けれども筆者は借問する、人は彼れが只偶然ツァールの長子と生れたと云ふ理由のみによつて、彼れが內氣であつて活動的でなく、お人よしであつて所謂『選手』でなく、凡人であつて非常なる英傑でなかつたと云ふ事に對し果して其の罪を問はれねばならぬ者であらうかだらうか?と。もし彼れをして彼れ自身が曾て青年時代に切望し嘆願したるが如く、皇太子たるの地位より去つて愛人クセシンスヤとどこかに小さな家庭を作ることが出來た者と假定したらたとひ彼れの一生は平凡な者であつたかも知れず、また世の中に目に見える何等の貢献をもなし得なかつたかも知れないが、然し其の代りには決して國民の大敵であると呼ばれ、終ひにあの樣な痛ましい最後を遂げる樣なことがなかつたばかりでなく、其の青年時代以後四十年間の日常生活といふものも確かにより平安にして、より幸福なるものであり得たに違ひないと筆者は堅く信ずる者である。人間の幸福なるものゝ要

素として、名譽であるとか或ひは衣食住の安樂さであるとか……云ふ樣なものは何れも只單に相對的なるものに過ぎずして決して絶對的のものではない。人生幸福の絶對的要素は各人が其の持つて生れたる天分の異なるに從ひ、其の天性を出來るだけ發揮し得る樣な各自の地位を得、境遇に生くる事である。鳥の幸福は青々とした森の中に棲んで大空を自由に飛び翔ることであり、魚の幸福は河や海にあつて、水の中を自由に泳ぎまわることである。さうして其の魚の中にもまた、或ひは荒海を好むもの、靜かなる入江を好むもの、大きな河を快しとするもの淺き沼池や田圃の傍らの小川などを樂しとするもの……など、魚によつて各自が最幸福とする境遇にも實に千差萬別がある。如何に鼈甲や金銀細工の籠に入れられたとしても、鳥はほんとうの幸福を感ずることは出來ず、如何に高價なる水晶の鉢に入れられたとしても、魚は心からの樂しさを味ふことは出來ない。さうして筆者は思ふ、數百年來の罪業と情實とが滿ち〳〵てゐたロマノフ家の宮廷など丶云ふものは、實に何人に取つても、鳥に對する金銀の籠、魚に對する水晶の鉢の樣なものではなかつたであらうかと。不自然があり無理がある處、そこに必ず罪惡の生ずることは恰かも濕地にカビの生ずるが如きものである。筆者は既に、親獨的なる官僚の一派が皇后アレクサンドラ・フエオドロヴナを擁して、惡辣なる手段の限りを盡し、さうして其の間にまた彼のラスプーチンと云ふ如き怪物がつけ入つて如何に跳梁跋扈を逞しうしたかと云ふ事を說いた（上段及び十月號掲稿三三頁以降參照）其れはまことに汚れたる宮廷史の一頁であつたにちがひない。然し乍ら、もしも我々が最も冷靜なる客觀的見地に立つて考へるならば、ロマノフ家末路の總ての禍の根源であつた如く一般世人から考へられて居る所の皇后にも、また宮中の一大魔物であつたとして、ユスーポフ公によつて殺されたラスプーチンにも、根本的には別に何等の罪もあつたのではなくて、凡ての禍の發生地であり、湧き出す泉であつたのは宮廷と稱する組織其のものであつたのだといふ事を悟る事が出來るだらう。皇后とし、一國の母として、ロシヤの宮廷に嫁に來られたもの丶、來て見れば其處には、まういろ〳〵の情實があり、黨派があつて大小の波瀾が渦卷いてゐた。さうして不幸にして彼の女は皇太后たるマリヤの氣に入らなかつた爲め、事毎に當時、宮廷内に大勢力を持つてゐた其の黨派の爲めに壓伏せられ嘲弄せられた。生まれる子供も、生れる子供も、いつでも女ばかりであつた後、最後にはじめて男の子が生れて、やうやく、皇太子が出來たと喜んで安心　れば、周圍には早くも其の唯一の後繼者のいのちをすら奪はむとする陰謀の危險さへ、いつも絶

えず感ぜられたのである。加ふるに彼の皇太子がまた、生來頗る病弱であつた。さう云つた樣な位置境遇にあつた時、兎に角一個の女性たるに過ぎぬ彼の女が宮廷内に於ける自己及び皇太子の身の安全といふことを先づ第一に頭に置いて、國全體の民利民福といふことにまでは心がまわり兼ねたといつて、(皇后としては勿論大なる罪惡であるに違ひないが、只一ケの人間とし女性として)果して非常に惡まねばならぬ罪惡であつたらうか?自分の家が獨逸ヘッセンの王室であるといふので、ともすれば自分を頭に戴かうとしてやつて來る親獨的官僚の一味を引き連れて他の反對黨に對抗し宮廷内に於ける自分の地位を安固にし、引いては皇太子の身の安全をも計らうとしたといつて、果して少しも同情出來ぬ行ひであらうか?皇太子の健康が益々思はしくなかつた時、『溺るゝもの藁をも摑む』の理によつて祈禱によるのか、催眠術によるのかは知らず兎も角も、皇太子の病氣を段々によくし、終ひに其れを健康體に復させてくれたラスプーチンなるものを重用し、無學ながらも兎に角彼れは事實一個の傑物だつたので、萬事に其れを相談相手とし股肱と賴んで、終ひに彼れの立てたる親獨的方針の遂行に力を盡されたといつて、(成程ロシヤ國民に對しては實に不忠實なる行動であつたに違ひないが、やはり一個の人間とし、女性とし、母親として)果して地獄に落つ可き行ひであつたらうか?筆者は思ふ、全て之れ等の『唾棄す可き醜狀』『恕す可らざる罪惡』なるものはもし根本まで溯つて論ずるならば、決して人の罪には非ずして、畢竟するに制度の罪である。其れは鳥を鳥籠に入れ、魚を鉢に入るゝよりも更らに大なる不自然不合理の存在したるが爲めに、恰かも濕地に菌が生え、カビが生ずるが如く、必然として起り來つた事實であつたに過ぎないと。

まことに斯くの如き不自然、不合理なる制度を改む可く、籠の鳥を放つて森に歸らせ、鉢の魚を放つて淵に還らす可き革命の運動は、中產、或ひは無產なる有識階級の中から、晚かれ早かれ(たとひ世界戰爭などはなかつたとしても)起さる可き行程であり、人類社會の進化が辿る可きプログラムの一筋なのであつた。さうして、放たる可きものは、決して、普通に人々が稱するが如く、單に物質的窮乏の足枷に繋がれて苦しんで居る所謂『プロレタリアート』階級のものばかりではなくて、實にまた(同じ程度の緊急さと必要さとを以て)日夜、眞珠の首枷の爲めに將に縊死せむとしつゝある『アリストクラシア』のものでもあるのだ。人間の最も大なる不幸といふものが決して決して衣食住の缺乏にあるのではないと云ふことなどは、今更らこんな所で云はずとても、わかり切つたる事であらうと思ふの

であるが、然し其れにも拘らず今日世に叫ばれてゐる、自由、解放改造の聲の裡には、たゞ唯物的音響のみ強くして其の本來の意味がだうもはつきりとき〻取れぬ樣に感らぜれる。

凡てが制度の罪である。其の制度あるが爲めに、人は今なほあらゆる獸性と其の蠻人性とを保存され且つ培れてゐる。此のあひだまでロシヤの宮廷に行はれてゐたいろ／＼のこと、ドイツの軍閥的爲政者が『ウラルまでをドイツに』といふ『雄々しき』夢想に從つて、大戰に先立つ五十余年の間、斷えず起して居つた幾多の侵略計畫、……さういふものと、南洋で今なほ首狩りに夢中になつてをる蠻人の部落に見られることゝ、根本に於て果してどれだけの區別があつたか？　さうして其れ等の間に余り區別もなかつたといふ理由は、社會の制度が（如何に外見上異なつてをる樣に見えても）結局、また五十歩百歩であつたからである。然し氣運は既に熟してゐた、刺々しき栗の毬は割れて果實は既に芽生えす可く地の上に落された、ロシヤに於ても、またドイツに於ても。

暴虐なる地主の亂行の爲めに、鞭で擲かれて殺された農奴など少しも異はぬ意味に於て、筆者は彼のニコライ二世といふ人などをも、人類がまだ蠻人として生活してゐた時の社會組織の遺物である所の其の不合理にして不自然なる社會制度の犧牲となつた最も不幸なる人の一人であると考へてゐる。ロシヤの國民に取つて、彼れが有名無實なる皇帝であつたと同じ樣に、彼れ自身に取つてもまた、皇帝といふ位に坐らせられたことは無意味であり、有難迷惑であり、不幸であり禍ひであつたのだ、彼れは酒に醉ふ事によつて拂はなければ心から拂ひ除けられぬ樣な不愉快な思ひに日夜惱まされ乍ら、四十年近くも只單なる飾り物としての役目を果さなければならなかつた。恐らく彼れが人間としてせめてもの樂しみとしたのは、帝位に登つた後青年時代からの愛人クセシンスカヤの爲めに邸宅を一軒建てゝやつて、其處で（何時頃までかは知らぬが）宮廷とは別の家庭生活を味つたことであり、また後に至つて、皇后との間に多くの子女を儲けて以來は、其れ等の子供に分けても特に末つ子の皇太子に對して、熱烈な愛を注いだことと位のものだらう。今度の革命が勃發して、レーニンが露都に歸つて來た時、ボルシェヴイキの連中が、自分等の本部として一番先きに占領したのはトロイツキイの廣場に面して立つてゐた此のクセシンスカヤの邸宅だつたのであつて、其の本部を中心として、まだ政權に有りつかなかつた、一九一七年春から夏にかけてのボルシェヴィキの宣傳振りが如何なる樣子であつたとか、其れに對する一般世人の態度はだうであつたかと云ふ樣なことに就ては十月號の拙稿

に幾分記して置いたわけであるが、既に其の當時から、以前皇帝の寵妓の爲めに特に建てられた家が、今はボルシェヴィキの本部に使はれてゐるといふ事實其れ自身をば一種の運命のアイロニイであると多くの人々が考へたり、言ひ合つたりしてゐたに拘らず、筆者自身は、だうしても、其れをば單なる運命のアイロニイと考へることが出來ずして、此の事實もやはり『ボルシェヴィキ』なるもの其れ自身と同じく不合理なる社會制度の生んだ一つの必然的トラゲデイであると深く心に感ぜざるを得なつた。

廢帝ニコライ二世が其の家族及び從者等と共に、一九一八年露曆七月の十六日深夜エカテリンブルグの配所に於て、弑逆せられた時の悲慘なる事情は未だにほんとには何もわかつてゐない。弑害した直接の原因は、當時シベリヤにチエホ・スロヴアツクの兵が反ボルシエヴイキの軍を起し、勢ひ頗る猛烈にエカテリンブルグまで迫つて來たので萬一廢帝が其の手に落ちロシヤに再び帝制の敷かれむ事を惧れたのである。弑逆後丁度一週間目に市街は早くも陷落した。三年前避難先きのギリシヤから、當時シベリヤでコルチヤツク政府の文部次官をしてゐた夫のパルチエツク氏に會ふ爲めに日本を經てシベリヤに歸つて行つたロシヤ一流のオペラの歌ひ手、チヨルカスカヤ公爵夫人（パルチエツク夫人であるのだが、ロシヤでは貴族の娘はよく自分の生家の稱號を保有しているいた）が眞面目に我々に向つて親しく確言した所に從へば、あの時シベリヤで殺されたのは決してニコライ皇帝自身ではなく、彼れは今でも現に或る安全なる場所にかくれてゐるので、自分は確かに其の事を知つてゐると云ふことであつたが、もし、萬一其れが、いまなほ過去の執着から離れ得ぬ貴族婦人の頭から生れた妄想に非ずして、實際なる事實であつたとしても、今日、ボルシエヴイキの專制政治に對する反動として著しく其の數を増して來た、ロシヤ人中のモナルヒスト達は、決して其のニコライ二世を再び帝位に擁ぎ上げて昔の樣なロシヤ帝國を復興せしむるといふ希望は實現することが出來まい。何故なれば、たとひ、今其の廢帝のかくれて居らるゝ場所が如何に貧弱なる農民の陋屋であらうとも既に三年近く過されたる今日となつては必ずや其處に於ける生活の裡に廢帝及び其の一家は苦しい中にも彼のツアルスコエの宮殿などに於て決して經驗されたことのない樣な新しい喜びと幸福とを見出されることが出來、今更ら如何に懇願して見たところが再びもとの樣なツアールといふ位には即く事を決して肯んぜられまいから。

川柳子は『世の中は三日見ぬ間の櫻哉』といふ。今度のロシヤに於ける帝制の轉覆と革命の成就とが全くのところ其れであつた。時と場合とに從つて、冬の寒い天氣がなか〳〵長く續くこともあるだらう。さうして櫻の蕾は堅く閉して、何處を眺めても、まだ春が間もなく來ると云ふ樣な樣子は見えず萬目蕭然

して多枯れの寥しさが久しく人の心をめいらせるかも知れない。然し乍ら冬が去つて春が來るといふことは實に天地の必然性なのであつて、たとひ誰れが千萬の兵隊と大砲とを以て嚇して見たところが、其の大勢を如何ともする事は出來ず、晩かれ早かれ來る可き春は來る可きであつたのだ。然し乍ら頭が偏見に滿ち〳〵、心眼昧くして一寸先きの事も察し得なかつた様なロシヤの官僚や軍閥の輩には、一般の空氣の工合や、まだ開かぬ蕾の様子によつて百花爛熳たる春の近いといふ事を知ることなどは決して出來る筈がなく、況んや、あらゆる複雑なるカラクリによつて、まわりに居つた多くの悪人共から馬鹿になる様に〳〵と断えず『忠勤』を抜でられ（革命後になつてわかつた事であるが、毎日都下で出されてゐる新聞などでさへ、上等なる紙に刷り直して差し上げるのだといふ口實の下に、特別に宮中にあつた印刷所で、官僚共が自分等の都合よき様に造りかへたものを御覽に入れてゐた様なわけで、一般に彼れ等の皇帝を騙し奉る制度方法は實に到れり盡せりであつたのだ）て居られたツアールなどには、まるで夢にも想像のつく筈がなかつたのである。さう云ふ様な事情は革命の直後、皇帝の退位が將に行はれむとした時、幸ひ其の場に居合せることの出來たモスクヴアの一新聞ロシヤ朝報（ウトヘルレイ）の一記者によつて實に眼に見るが如く活き〳〵と報道された一文があるのであつて、其の當時、革命ロシヤの人々の心に多大の感じを與へたわけであつたが、今其の原文は手許に持つてゐないけれども、幸ひにして、黒田乙吉氏が其の著『悩める露西亞』の中に其の全譯を掲げて居られるので、はじめて其の報導が書かれた頃の革命ロシヤの空氣を頭の中に呼びもどし乍ら、今其の單にロシヤ一國のみに對してゞはなく、實に全人類に對して重大なる意義を持つた歴史的記録を抄録して、筆者のニコライ二世論を終ることゝする。

『三月十五日（露暦三月二日）深夜ウイーシエラ驛發の當番機關車第六百四十二に搭乘し、翌十六日未明レッサ驛に到着し得た自分（ロシヤ朝報記者）は此處で皇帝列車に出會つた、そしてニコラス二世が將に退位せんとする時に行はれた事件の證人となることが出來た。

皇帝列車は二つであつた。前のは侍従の乘れるB列車で、鐵道聯隊長ツアーベリ少將が指揮してゐる其汽車には半聯隊の鐵道兵と外の兵種二十名を乘組ましてあつた。ニコライ二世は後のA列車の方に乘つておいでになつたのであるが、記者は皇帝を取巻く周圍の人々の話を綜合して次の事實を確かめた、

則ち、皇帝は今皇后の招電によつて、ツアルスコエ・シエロに急行さるゝ所である事。皇帝には、アレキセエーフ大將の發した最初の電報を御覽に入れたゞけで下院議長ロヂヤンコの電報も、各軍總司令官の電報もまだ差上けてなかつた事。

皇帝の周圍には老い耄れたフレデリック伯と、前海軍近衛司令官ニ

ロフ海軍大將、宮番從侍將官、皇帝列車司令官、皇宮司令官ヴオイエイコフの面々がお供を承つてゐたが、其等のお供は皆澤山聞し召してゐた。ヴオイエイコフとニロフとは現下の事件の眞相を皇帝が知らるゝのを懼れ、ニロフ大將の如きは盛んに皇帝に盃を强てゐた。皇帝は何も知られなかつた。

午前一時ごろ其れを氣に病んでゐるツアーベリ少將は「これはあくまで隱蔽すべきことでない。若し諸君がこれから直ちに皇帝へ事實の詳細を上奏しないなら、自分が行つて何もかも申上げて說こう」と切り出したところ、ヴオイエイコフは、それでは自分が申上げるから任せてくれと云つて制止した 其時皇帝は眠りに落ちてゐた、實際陛下は非常に疲れてゐられたのである。

それまでにお供の連中から時局について皇帝に上奏しゐてたのは斯うであつた。

「ペトログラードで革命黨員、學生、浮浪人共が年若い兵隊を教唆し教唆された年若な兵隊は下院に押し掛けて代議士を恐迫した。ロヂヤンコはチエイーゼ、ケレンスキー等に餘儀なくされて或種の讓步をした、今其軍隊が市內を騷がして居る。併し精兵が四中隊もあつたら彼等を追ひ散らすに譯はない」

汽車は午前二時ウイシエラー驛に停まつて汽關車に水を汲み込んだ、其の時皇帝は眠を醒まして食堂車に入りニロフを呼んで時局の事を尋ねられた。

「ペトログラードは一體どうなつたんだね？」

ニロフは「非常に混雜であります。けれども一兩日中に鎭まらないやうなそんな騷動ではありません」と答へて居ると、そこへヴオイエイコフが入つて來て皇帝に申告する

「只今ウイーシエラ驛で受取つた電報に依りますとマギリヨフからドノ驛に向つて帶勳兵千七人を乘せた汽車が急行してをります。彼等は陛下に拜謁のためにツアルスコエ・シエロに行くのださうであります。噂によりますれば彼等は陛下にゲオルギー三等勳章を捧呈する任務を帶びて居るのださうであります。又帶勳と一緒にイワノフ大將がツアルスコエ・セロに行つてゐることも報告してあります陛下！ これだけの勇士があれば澤山であります」

ヴオイエイコフは語を繼いで、

「彼等を護衞として御來ゐになれば申分はありません、ツアルスコエ・セロの兵營に此陛下の御信任厚き軍隊をお殘しになつて、主體はそれからペトログラードにお運びになり、議會に臨御なされましたならば暴動中とやらの軍隊は、陛下への宣誓を回想するでありませうし、革命黨のと若年の兵士とを引分くることもさして困難のことゝは思はれません」

ツアーベリ少將が此時食堂に這入つて來た

「陛下、それは皆虛構であります、一同は陛下を瞞着申上げて居るのであります、それ、御覽に供します、故に電報が御座います」

電報の發信人はペトログラード・ニコラエフスキー停車場司令官グレコフ中尉とあつてその電文に曰く

御召列車A號はウイーシエラ驛よりペトログラードに向はしめよ、ツアルスコエ・セロ行は中止せらるべし

皇帝は飛び上つて驚かれた。

「何だと？ 暴動？ グレコフ中尉がペトログラードの司令に任じてゐるか、これは？」

ツアーベリ少將は說明した。

「陛下！　ペトログラード六萬の軍隊は將校諸共臨時政府に味方して仕舞つたのであります露都は沒落しました。ロヂヤンコは全露國に向つて新しい制度を布くことを公表しました。最早前途は出來ません凡ゆる鐵道は彼等一味の支配する所であります」

驚愕と落膽と忿怒とに昂奮した皇帝は

「何故、朕に何事も云はなかつたか！　ナゼ萬事休した後になつて報同するのか？」と怒鳴られた。けれども皇帝は數分間も經たぬ間に平靜に復され失望喪心の態で

「まあ、リヴァーヂヤに行けて結構といふものだ、國民が要求するならば朕は退位をする、そしてリヴアーヂヤの庭に行く迄の事さ　朕は非常に花が好きなんだ」(リヴアーヂヤとはクリムにある離宮のこと)

ツアーペリは皇帝の車室を出た、ヴオイエイコフは皇帝をニロフに賴んで置いて發車の準備を命ずべく是亦車を出た。御召列車Aの機關車に故障が出來たので、侍從車の機關車と取換へたがそれがために半時間ほどかゝつた。陛下と一緒に乘つてゐた十六名の警護の面々は、列車の重量を輕くするために下車した。

斯くて三月十五日の未明に御召列車Aはボロゴエ驛に着いた。全速力を以てツアルスコエ・シエロに馳府すべく途中で鐵道に故障の起つた時の用意に少許りのレール其他の鐵道材料を積み、鐵道兵の若干を乘せた汽車がウインダヴ鐵道に移つてドノ驛に程遠からぬ所まで來ると警報が屆いた、それによるとツアルスコエ・シエロの兵營も國民の味方についたので、皇后はツアルスコエ・シエロ宮殿司令官を經てロヂヤンコ及び下院に皇族の保護を依賴されたと報じて來た、それにはまたペトログラードの兵營が國民議會の支配下にあり、今や議會には全國から軍隊、委員、實兵、警官等が馳せ參じ、露西亞全國が新政府を承認してゐることも記されてあつた。

皇帝は一寸考へて

「莫斯科に行かうかしら？　ムロゾフスキー(莫斯科軍管區司令官)は莫斯科が朕に對して冷淡であると常々申してゐたけれども」

と申された、けれどもドノ驛まで來ると新しい報告が屆いてゐる。それには莫斯科の軍隊が全然新政府の味方となつたこと並に官憲全部の逮捕されたこと等が報じられてゐる。

皇帝列車は一たびドノからボロゴエに引返して再びドノに走り、何處かへ駈拔けようとあせつたのであつた。

ドノ驛でイワノフ大將の列車と落合つた、イワノフ大將は露都の事件を逐一奏上し且附言した。

「革命黨は政府を乘取りました、陛下の遁れ給ふ途は唯一つ殘るのみであります　戰線に行幸さるゝこと、それだけ」

侍從の人がそれに贊成した、するとヴオイエイコフは血迷つて叫び出した。

「目下たゞ一の方法がある、ミンスクの戰線を獨逸に開放し獨軍を露國深く侵入させて、惡黨を鎭定させるといふ策だ」然しニロフ大將はヴオイエイコフほど泥醉してゐなかつたと見えて、心配さうに之を反駁した。

「亂暴にも程がある。そんなことをしたら獨逸人は露西亞を取つて仕舞ふではないか誰がそれを後になつて返すものか」

ヴオイエイコフ、はワリシチコーワヤの言を引用し

「カイゼルは陛下と戰つて居るのではない現に反帝政運動を敢てしてゐる露西亞の國民と戰つてゐるのだ」

と又もや迷論を繰返したが、皇帝は之に答へて

「左様、其事は一度ならずグリゴリー、エムウイッチ（怪僧ラスプーチンの事）が言つて居たけれども朕は聴き容なかつた、そんなとは獨逸がまだワルレヤヴァ郊外にゐた時分なら或は出來たかも知れん、否々朕は露國民を裏切らすることは出來ない」

と遂に泣き出された。

それから暫時沈默の後

「若しも朕の妻子が百姓共の手から解放せられたら、朕はリヴアーヂヤに行きそこで平和な餘生を送らう國民の愛してゐるミハイル（皇弟）が帝位に踐んで思つた通りの政治をやればいゝではないか」

皇帝は最後に左右を顧みて、

一朕は退位の詔勅に署名し。一度戰地へ行きて軍隊に決別しよう、其後は皆んなが爲たいことをすればよい、朕は決して邪魔はせぬ」

著者はルッサの驛前から二十歩の所でプラットフォームに出られた皇帝を見た、皇帝は大佐の肩章を着けた灰色の兵卒式の外套を着て幾度か額に手を加へつゝ喪心した樣に驛の建物を見廻してゐられた。皇帝と並んで醉つたニロフ大將が、ヨタ〳〵して居た、暫時の後彼等の影が汽車中に隱るゝと汽車は動き出した。』

筆者は此の記錄を讀まれたる讀者が、既に只これだけでも、ロシヤ全土をしてボルシエヴイキの天下たらしめたる禍因の果して如何なる點に潜んでをつたのであるかと云ふ事を大體察し得られたことであらうと思ふ。ニコライ二世と同じく不幸にして人民の手によつて非命の最後を遂げられた今一人の君主たるアレクサンドル二世などにしても（ニコライ二世の祖父）たとひ『左』の方の連中は兎や角と、難癖をつけたがるとは云へ、皇帝自身としては、其の父のニコライ一世などゝはちがつて、相當にわけのわかつた人であつたらしい。恐らく人民の福祉といふ樣なことをも、斷えず可成りに考へてゐたので、一八六一年彼れの發布した農奴解放令か實際に於て有名無實で、あつたことや、また彼れの晩年に於て行はれた民論の壓迫の甚だしかつた事なども、……思ふに、周圍からの魔力の强大であつた爲めであつたのではなからうか。彼れが當時の官僚中にて自由主義者の第一人者であつたロリス・メリコフを執政官に任命して、彼れと共に憲法政治の可否を議したるが如き、必ずしも一八八〇年二月、極左黨による冬宮爆發の企てが未前にあらはれたのに怖れをなした爲めばかりでもない樣である。然らば何故筆者にそんな感じが起るのかと云ふと、其れは彼れが暗殺せられた時の態度や擧動などにもよるのだ。例へば今アメリカに居るロシヤ革命史通の隨一、"A. J. Sack の"The Birth of the Russian Democracy"について、其の時の事を讀んで見ると、（五六乃至五八頁）其處には次ぎの樣に書いてある。

『冬宮に於ける計畫が齟齬してから一年と少し經つた後、革命主義者は終ひにアレクサンドル二世の暗殺に成功した。一八八

一年の三月一日、日曜日の朝、皇帝が軍隊を檢閲し樣として特將に出掛けてゐた時に、メリコフは、其の日彼れの生命に對してだうも危害を加へる企てがあるらしいと云ふことを注意した。けれども皇帝はそれでも平氣で出て行つた。さうして冬宮にかへる道すがら彼れは殺されたのである。ソフィヤ・ペロヴスカヤの與へた合圖と共にリサコフが皇帝の馬車の下にボンブを投げ込んだ。けれども車の底の方が少し破壞され、親衛のカザック數名が傷を負ふただけで、ツァーは全く無事であつた。馭者が直ちに冬宮に向つて馬車を走らせ樣とした所が、アレクサンドルは馬車からおりると云つて聞かない。負傷したカザックに何か言葉をかけてやらねばならぬと云ふ氣がしたのである。彼れはまたリサコフの方にも近寄つて行つて、彼れに何か言つた。護衛兵中の或る者の問ひに答へて、彼が『仕合せにも無事であつた』("Thank God, I am untouched")と云はふとした時、まう一人のテロリストたるグリネヴィツスキイが『まだ神樣に御禮言ふには早すぎるわい』と叫び乍ら、アレクサンドルと自分との丁度眞中へボンブを投げた。それから數時間ならずして、二人とも死んでしまつたのである。云々』

極めて簡短な記述ではあるが、自分はアレクサンドルが此の二つのボンブを投げられる間の數分間に示した行動のなかに、彼れのほんとうの心根が表はされてゐる樣に感ずるのである。然し筆者の感じが正しいかだうか、は素より、讀者の判斷にお委せする。

之れを要するに、ロシヤに於けるロマノフ家の如き極めて香しからぬ素性の皇室なる場合に於てすら『帝制』の災禍を生ぜしめ、從つて其れが壞滅の主因をなしたるものは、實に、帝制其のものに非ずして、只皇室といふものを旗印とし官僚軍閥の徒によつて行はるゝ所の專横政治たつたのである。而して『帝王政治』なるもの〻安定は、人民の間に政治上の特權階級を置くことなく人民をして、直接國政に參與せしめ、以て『君民一體』『皇室中心』の實を舉ぐ可きことにあるのである。此の國家の根底、即ち立憲の大義が、形式の上に於ても、また人々の心の中に於ても、眞に確立さるゝことによつてのみ、國家もまた人類も、差別を重んじての平等、差別を重んじての一致協働といふことを實現し、あらゆる方面に其の最大能率を發揮することを得て、安全に而して現實的に進化向上の途を辿り得るのである。然るに既に前にも述べたる如く(上段七三頁)ロシヤは此の意味に於ける『種痘』とも云ふ可き手段方法を輕蔑し、等閑に附したが爲め、今や不幸にして天然痘の災厄を體驗しつゝあるのだ。

さて、然らば翻つて、我等が祖國なる日本の方は如何である

か？と省るに、いま更らにまたあらためて繰り返へすまでもなく、我が國其の精華たる『皇室中心』『君民一體』の根本義たるや、實に自由平等、階級打破、の精神の極致なのであつて、我々は今日レーニン一派のものがロシヤに於て實現せむとして失敗し、またラツセルの輩が今後の理想として只單に口に稱へつゝある所のものを既に我等の上古の聖帝達は事實の上に實現し給ふた事を明かなる歴史的事實として知つてをるのである例へば上段に記したる仁德天皇、或ひは孝德天皇（中大兄皇子攝政の御代に於ける）國内の有樣の如き、西歐の如何なる革新主義者と雖ども未だ曾て實現し得たる事なき程度に徹底せるものであつた。凡て事物は環の如くにして其の兩極端は相一致するものであるのだが、我等は我が日本の立國の根本義の中に極端なる尊王主義と極端なる民本主義とが實に整然として何等の矛盾もなく美しき調和と交響とを現はして居るのを見る。（例へば六〇頁以下參照）中古以來、有司及び武家の專制現はれて約一千年の間此の國體の精華に衰亡の曇りがかゝつたのであつたが（上段八頁參照）國體をして光輝ある常態に復さしめむとする國民全ての氣勢は到底永久に其れを看過す可くもなく、終ひに德川幕府は倒れて王政維新となつたのであつた。只、然し、茲に其の『王政を復古せしむる』といふ手段方法に就て、國内に二つの異つた意見主張が行はれたので、則ち一つは、成る可く暴力的破壊手段をば避け、德川幕府といふ如き舊來の制度をも、使へるだけの部分は其のまゝ保存して王政を行ふ上に利用し樣と云ふ所謂漸進派であり。內科的療法論者であつて、孝明天皇を筆頭として土佐、會津等の諸藩、及び既に大政奉還の決意をなしたる德川慶喜側の諸士が之れに屬したのであつたが、他の方は、之れに反し、是非・も、武力に訴へて德川なるものを根底からたゝき潰してしまへといふ所謂急進派であり外科的手術論者であつて、主として薩長二洲の人間と、其れと密接なる關係を持つてゐた三條。岩倉等の堂上が之れに屬した。

前者の方は一見其の思想が幾分姑息因循であつたかも知れないが、其の態度は飽くまでも冷靜であり愼重であつて、之は丁度今次のロシヤ革命に際し『カーデイ』の連中や『十月黨（オクトブリスト）』の連中がとつた態度であり、之れに反し後者の方は其の意氣に潑溂たる所が多かつたかも知れないが、其の態度は飽くまでも感情的であり突猪的であつてロシヤ革命に於ける『エス・エル』乃至はボルシユヴイキ等の屬した『エス・デイ』黨に相當したーレメントであつたのだ。『復王復古』の革命とロマノフ朝覆滅の變革とを一緒にして論ずるなどゝは甚だ無茶であると云はれる人があるかも知れないが、筆者を以てすれば此の二つの革命たる

や實に其の本質に於て全く同一のものであつて、ロシヤに於けるロマノフ朝なるものは決して『王道』に基きたる（我國に於ける）『皇室』といふ様なものではなく、モスクヴア朝壞滅の後ちに起りたる彼の所謂『泥亂時代（スムトノエウレーミヤ）』の後ちを承けて一六一三年（我が慶長十八年即ち大坂冬の陣の起つた前年に）一封侯たるに過ぎなかつたロマノフ家の開祖ミハイル、フエオドロヴイツチがツアールとして擁立された時の事情などによつて考へても（ロシヤに非常に重大な意味を持つ其の頃の歴史を、筆者は未だに論じ殘してゐるが、時間がないので今もまた略して述べない）また其れが三世紀に亙つて封建的階級制度の表象とし、武斷的獨裁政治の張本人として國内に君臨してゐた點などから論じても、當然德川幕府とホモロガイズさる可きものなのである。日本に於ては、階級打破　自由平等の思想の發揚は、先づ德川幕府竝びに其れによつて代表せられつゝあつた封建的階級制度の全てを消滅せしめ、武斷的獨裁制に止めを刺して國體を君民一體の王政に復することであつた。然るにロシヤに於ては我が德川に代つて仆さる可き性質のロマノフ家なるものはあつたのであるが、既に其れが轉覆せられ終つた後ち、不幸にして自由平等階級打破の思想と兩立し得る様な『王者』を持たなかつたので國體は民主共和制といふことになつたのだ。而して其の革新を企つるに當つてロシヤでもケーレンスキー、レーニン等の徒はみな何れも、先づロマノフ朝的色彩を帶びたるあらゆる舊制度を出來るだけ破壞することを主張し實行したわけであつたが、其れは丁度、我が薩長の連中が、何でも彼でも討幕の兵を出さねばならぬと主張して、終ひに（將軍自らが既に大政を返上し奉つたにも拘らず）故さらに東征の軍を起し戊辰の血腥き一幕を演じて纔かに氣を落ち付け得た事情などゝ同じ事である。もしもあの時勝安房とか、山岡鐵舟とか云ふ様な人がゐなかつたとしたら、西郷の率ゐてゐた薩摩の兵隊や浮浪人達は恐らく江戸の城や、市街をも『惡い德川の住んでゐた所だ』といふ理由のみで、勿論掠奪もやつたであらうし、また惜し氣もなく燒き拂つて快哉を叫んだではなからうかと察せられるが、ロシヤでも革命軍の兵隊や勞働者や、ゴロツキやは、舊いレヂームに属した人間の宮殿や邸宅などゝ云へば、まう思ふ存分に掠奪し破壞して、もしも、マキシム・ゴルキーのレンニンに對するプロテストと藝術品國立監理所設置の提案とがなかつたとしたら如何に貴重な美術品とか、古文書とか云ふ様なものでも、其れが單に舊制度に關係あつたといふ理由のみによつて、皆悉く散逸或は壞滅に歸せられてしまつてゐたことだらう。

同じく革命黨であつても、ロヂヤンコとか、ルヴオフ、グチコフ、乃至ミリユーコフといふ様な穩健派は、破壞といふ事に

はじめから全然反對だつた『殊に今は外敵に對して戰爭中でもあるし、餘り急激な變化に好ましくない』と考へてゐた、『國民議會に絕對的の權能さへ保つて置くならば、皇弟ミハイル太公を立てゝイギリス流の立憲君主制にするなども惡くない』などとも思つてゐた『餘りに革命的氣分を發展させるとボルシエヴイキなどが頭をもたげて來て、骨拔きにしたロマノフ家の帝制よりも却つて遙かに惡い賤民專制の狀態となるから』などゝも恐れてゐた。之れは丁度、維新革命の時に當つて、孝明天皇中川宮等を戴いてゐた穩健派の人達が、破壞主義には絕對に反對して、『殊に今は、外夷に對する鎖港か開港かの重大問題もあり、餘りに急激なる變化は好ましくない』と考へたり『朝廷に事實上、大政が復歸するならば、將軍慶喜はあのまゝ內大臣位にして公武合體といふことにするも惡くない』などと思つたり、或ひはまた『餘りに革命氣分を盛んにして討幕などを決行すると、只さへ暴烈な薩長の者共が頭をもたげて來て、既に無力となる德川幕府などよりも、却つて遙かに惡い、藩閥專制の狀態となるから』などゝ私かに怖れられてゐたのに符合する。

筆者は今ロシヤの場合に於ても、また日本の場合に於ても、此れ等急進、漸進兩派の何れの主義主張が　あの時　機宜に適したものであつたかは論じないが、兎に角、ロシヤに於てはボルシエヴイキの叛亂と、其の憲法議會に對するクーデターとによつて其の後今日に到るまでも急進派の天下となり、日本に於ては、孝明天皇不時の御崩御を一大轉機とし、其の後急進派が採りたる幾多の武斷的方法によつて、やはり漸進派の全敗に歸したのであつた。最初『即時戰鬪中止』を絕叫して反對黨を罵倒したるボルシエヴイキは、一時の方便なのではあらうが、兎に角、ロマーノフ帝制時代に勝る寡頭專制政治を立て、また到る處に軍國主義を發揮してゐるが、日本の方でも、最初『鎖港攘夷』を稱へて大いに幕府を攻擊したる薩長は、一度び政權を握るや否や、自らは第二の幕府とも云ふ可き藩閥政府を組織し、さうして盛んに海外發展主義を鼓吹した。どれがよいとか惡いとかいふのでは勿論ないのであるが、只、革命など云ふ時に起る世界共通的の現象として、一寸述べて置くばかりなのだ。『倒幕』といふ運動に際しては最も急進、過激な行動を敢てした薩長の連中などが、一とたび己れ等が廟堂に立つに至るや、最も注意深き漸進論者と早變りし、維新當時、漸進派穩健派だつた土佐の連中などが明治七年後に『自由民權運動』の急先鋒となつたことなども維新史を正しく解せむが爲めには確かに意味のある現象だと思ふ。

既に上段四八頁以下にも論じたる如く、明治七年以後の自由

民權運動なるものは、藩閥出現の爲め不幸にして一時蹉跌を來したる維新革命の續きであり『自由平等、階級打破』的意味に於ての我が王政復古熱の再發であつたのであるけれども藩閥政府の政略なか／＼に老猾にして、明治十七年には新たに華族令の發布を見るなど〻云ふ樣に、時運は却つて逆轉したるかの觀をさへ呈したのであつた。其れより、官僚政府の高壓的態度に憤激して、福島事件其の他多數の暴動一揆が[illegible]内に起つたといふことまでは書いた（上段五四頁參照）此の邊の事情になるとたとひ如何に贔負目に解釋したところが、ロシヤの官僚政府のやり方と五十步百步だつたと見るの外はなく、『王政の復古』といふことも、其れを我が國體の根本義に溯つて論ずるならは、此の明治十五六年頃には殆ど有名無實に近きものであつたと斷ぜざるを得ない。然るに時の政府はなほ未だ其の非を悟らず、まるでロシヤ其のまゝの談しなのであるが、徹底的に自由主義者を撲滅し樣といふので、彼の福島事件で名をなした三島通庸を拔擢して警視總監に任命し、更らに明治二十年十二月二十六日には最後の手段として、時の内務大臣山縣有朋は彼れに有名なる『保安條令』なるものを發布せしめ、其の勵行を命じたのである。今其の細目などは別に掲げないけれども、あのロマノフ朝の治下にあつたロシヤといふ國などとはちがつて、特別に氣持ちのよい國だとばかり思つてゐた祖國、我々が衷心から熱愛する此の日本の國の歷史にも、こんな壓制的法令の發布されたことがあつたのだと知ることは、實に筆者の意外とし、また遺憾とする所であつた。要するに、其れは廣き意味に於ける言論、集會、出版及び思索の自由を徹底的に抑壓せむとして採用された所の法令だつたのであつて、例へば其の第四條には『皇居又ハ行在所ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居又ハ寄宿スル者ニシテ内亂ヲ陰謀シ、又ハ治安ヲ妨害スルノ虞アリト認ムルトキハ警視總監又ハ地方長官ハ内務大臣ノ認可ヲ經、期日又ハ時間ヲ限リ退去ヲ命ジ、三年以下同一ノ距離内ニ出入寄宿又ハ住居ヲ禁ズルコトヲ得。退去ノ命ヲ受ケテ期日又ハ時間ニ退去セザル者、又ハ退去シタルノ後、更ニ禁ヲ犯ス者ハ一年以下ノ輕禁錮ニ處シ、仍五年以下ノ監視ニ附ス。監視ハ本籍ノ地ニ於テ之ヲ執行ス』といふ樣なまるでロシヤ式のことが書いてあるのであるが、此の定むる所に觸れて帝都を放逐された者が、星亨、岡崎邦輔、尾崎行雄、片岡健吉、林有造、中島信行、中江兆民等を筆頭として五百七十餘名にも上つたときいては、其の時の政府の辛酷さ加減が大抵どんなものであつたか、（また其れにも拘らず自由主義者の態度も如何に强硬なものであつたか）と云ふことを想像することが出來る。殊に甚だしいと思ふのに、法令の出たのが

十二月二十六日であるのに十二月二十七日午後二時といふ様な退去時間を附して嚴命し、例へば片岡といふ人の如き、まだよく法令の内容も知らなかつたので直ちに警官の命を背んじなかつた所、忽ち二年半の輕禁錮、二年の監視といふ宣告を受けて投獄せられ、二十二年憲法發布に際してようやく大赦の恩命に浴して免されのであつた。一方に實に言語道斷な斯う云ふ亂暴なことが行はれてゐるかと思ふと、他方では此の保安條令を滿足に執行した功によるのであるか、或ひは縣令や土木局長として農民を驅り出し道路を作らせた功によるのであるか知らないが、三島といふ人が此の年に子爵を授けられてゐる。勿論、傑物であつたことには違ひないとして、だうも自分などにはわけの分らぬはなしである。然しさういふ人の僅か二代目の後繼者に、まだ一度の面識もなく、また餘り作物を讀んだこともないが、多分自分などゝもお互ひに談しのわかる人であらうと想つてゐる。あの三島章道氏の様な自由主義者が出て來て、『厄介な肩書き』などと云ふ嘆聲を洩されるのをきくことは『未來は我等がもの也』といふ様な信念を益々裏書きしてくれる一事實として、非常に愉快に思はれる次第である。

ロシヤの歴史を見てもやはり同じであるが、官僚が此の保安條令的の方法を以て、自由思想を壓伏しと様努めれば努める程自由思想は益々猛烈に民衆の心の中に燃え上つて來、選擧干渉などをやればやる程、結局野黨の隆盛を來たするとなるのだ。例へばロシヤでは一九〇六及び七年の第一及び第二選擧の結果などが其の著しい實證であるが（上段五〇頁參照）我が國に於てもやはり明治二十三年の第一回選擧や二十五年の第二回選擧の結果が全く其れと同じ様な反政府的色彩をあらはしてゐた。『保安條令』などと云ふもの實施が決して保安といふ主意に添ふものではなくて、却つて保難に陷る可き必然性を有するといふことは、之れまたロシヤの歴史が明かに示してゐる。アレクサンドル二世の政府が自由思想及び自由主義者撲滅の爲めに、各々官僚的色彩の最も强烈なるシユヴアロフ將軍を警視總監に、トレーポフ將軍をペテルブルグ警察長官に、フオン・パーレンを司法大臣に而してドミトリイ、トルストイ伯を文部大臣に任命して思想、言論、及び行動の自由を取締らうとしたこと其れ自身が、自由主義者の傾向を忽ちにして惡化せしめた最大原因であり、終ひに其後久しからずして、トレーポフ將軍をも、またアレクサンドル二世をすらも彼れ等の毒手に仆さしめた所以なのである。我が國でも此の保安の精神が保難の方に變つてゐる實證は既に二十五年の第二回總選擧の時に早くもあらはれてゐる。其の時政府は單に警官ばかりではなく、憲兵や軍隊までを動か

して保安にも任じまた選擧干渉をもやつたのであるが、此の時の選擧の爲めには死者二十五名と負傷者が三百八十八名とが出來、そして其れにも拘らず其の結果は野黨が依然として絶對多數を占めたのだ。

筆者に云はせるならば、此の當時の野黨、民黨なるものは、たとひ其れに參加してゐた個々の人々の動機目的は何であつたとしても、之れ即ち王政復古黨の意味を持つてゐたものであり、政府や官僚といふのは德川幕府に代つて現はれた藩長幕府の別名であり、さうして猛烈なる此れ等の選擧戰や、議場に於ける論爭は即ち維新革命戰の續きだつたのである。（上段四八頁參照）然らば其の革命戰の結果は如何に片付いたかといへば、其れは筆者のの見る所に從へば、大體、日清戰役の開始に際して開かれた、第六の議會以來、休戰期に入つて、さうして、約三十年後の大正十一年の今日にまで到つてをるのである。民黨が鉾を收めて休戰したる原因の一部は、戰士の內に直接、政府の懷柔策に動がされて變節したもの〻出たことにもよるだらうけれども、然し其の最も大なる原因は、實に國家に對して國外から斷えざる武力的脅威があつた事と、國內に工業が勃興して來るに從つて漸次に資本主義の盛んになつて來たこと〻の爲であつた。實際今日になつてこそ、國際間の關係にも、正義であるとか人道であるとか云ふ言葉をきく樣なもの〻、我が國が支那と戰つた其の明治二十七八年頃の世界といふものは實に弱肉强食の活舞臺だつたのであり、然かも一方に於て我々の同胞達はまだ『鎭遠定遠』といふ名稱すらも、ほんとに『對抗し得る』といふ心强さを以てはきゝ得なかつた程の貧弱なる文明國、非工業國に住んでゐたわけであつたから、たとへ自由平等といふ事は忘れなかつたまでも、やはり富國强兵といふ感じはだうしても强くならさるを得なかつた。幸にして戰爭には勝ち支那の屬國ではないと云ふ事をハッキリ世界に示し得はしたものゝ、今度は直ちに例の三國干渉が來て全國民の敵愾心を極端にまで强めたわけであつたから、其れから後の所謂『臥薪嘗膽』の十年間には、（たとひ其の間に一時、大隈、板垣の提携によつて我が國最初の政黨內閣の出現を見たりと云へ、其れが黨員の私利私慾的獵官運動や、或ひは民黨各分派間の軋轢不一致等の爲めて非常なる醜態を暴露して、忽、脆くも瓦解し終へたる後に於ては）まう世間は自由民權どころの騷ぎではなく、實に、國民の大部分を擧げて、『官僚樣』『武閥樣樣』とも云ひ度き樣な氣持となつて生きてゐたのであつた。自分乍ら意外と思はる〻までの大勝利を得、一躍して、一等國の班に入つたとか云ふこと〻なつては一方ではロシヤの復讐戰など〻云ふ虞れもあり、また他方では

國民自身の帝國主義的野心も強まり、自然、民黨と、官僚、藩閥政府との妥協が何等怪しまるゝ事もなく國民から默過される様な事情になつて來たのであつたが其れと同時に、國内に於ける工業の發達や、一般に商業の隆盛になつた事などによつて次第に確立された資本主義は、まう其の頃に至つては政黨なるものゝ本質をも全く變化せしむるに至り、たとひ名のみは民黨であつたにしたところが、それは只單に反政府黨なる意味をあらはすに過ぎず、議員なるものは自ら資本家であるか、乃至は資本家の代辯人であるといふことになり終つて、彼れ等が一般國民の代表者として、明治二十五六年までに於けるが如く、(たとひ其の本心は何であつたにもせよ、兎も角も、曲りなりにも)自由民權といふことを絶叫して、官僚藩閥の徒に肉迫するといふ如き期待は、全然まう持つ事が出來なくなつたのである。之れは彼のドイツが一八六〇年代などには國を擧げて自由、平和の思想に共鳴して居り乍ら、やはり地球上に存在した民族不平等の事實と周圍の國々の軍國主義とに影響されずに居ることは出來ず、一とたびビスマルクが現れて所謂『鐵と血と』の國是方針を高唱し、内には高壓專制的手段を講じ、外には軍閥的侵略主義を發揮して戰捷の榮冠をもたらすや、忽ち國を擧げて一つの武斷的侵略國と化し終はり"Deutschland über Alles"を絶叫して、世界征服を夢みるに至つた事情などゝも似てをるし(十月號拙稿四一乃至四八頁參照)、或ひはまた最近ロシヤのボルシェヴィキ達がはじめは極端なる平和主義を主張し、戰鬪即時中止といふことで、故らに無抵抗退却までを敢てし乍ら、一とたび、平和的手段は只單に周圍の侵略國をして益々其の野望を逞しうせしむるのみなるを悟るや、決然として起ち、一氣呵成に厖大なる赤軍を編制し、到る處に軍國主義を發揮するに至つた事情などゝも似てをると云へば似てゐる所がある。

斯くの如くにして、たとひ我々は現に名に於ては政黨内閣なるものを有しつゝあるのではあるが、此の政黨政治なるものは、要するに官僚、藩閥の徒と國民中の資本家階級との行つてをる一種の妥協政治たるに過ぎずして、決して國の全人民といふものを代表し、『君民一體』の根本義を實現す可く行はれて居る所の政治ではない。たとひ今日の所謂『立憲政友會』なるものが往年の『自由黨』の後身であらうとなからうと、其れは、他の殘りの黨派の全てと同じく(無所屬其の他、個々の議員の中には勿論少數の除外例がある事であるが)決して日本國民の代表的機關ではない。

日露戰爭の勝利(其れは立憲國が專制國に對して有つた勝利であり、其れは弱者が、侵略專制的強者に對して持つた勝利で

あり、而して有色人種を白色人種の奴隷的境涯より解放する運動の最初の希望の萠してあつた（更らに今次の世界大戦に加擔しての成功といふものが、一方に於ては却つて我が國に於ける官僚、軍閥、及び資本家の勢力を一層強めたる時、他方に於ては、我が國體の精華たる『君民一體』の大義と一致する所の『自由平等』『階級打破』の思想は、駸々として人の心に喰ひ入りつゝある。往年幾多の血と涙との犠牲によつて贏ち得たる議會なるものは不幸にして今、只、單なる飾り物と化し終はつて、其れは覺醒しつゝある國民の心に對し、（現狀のまゝを以てしては）既に殆ど何等の興味をも、權威をも有してをらない。日比谷原頭の論戰場は、年中行事の一つとして、また帝都の名物の一つとして、人の頭にあることはあるが、然し國民の希望と信頼とは、不幸にして、次第に其れより遠離りつゝある樣に思はれ政。る治といへば、人は直ちに選擧運動を想ひ、運動員を想ひ、議員と議會との醜態を思ふて、直覺的に『下卑たる趣味』『下品なる道樂』といふ感を抱く。最高學府にある所の學生も、また致職員も、少數の人々を除けば、議員及び日比谷議場の醜態によつて感じを損はれて、全て一般の政治なるものに對しても、風馬牛である。（之れは或ひは國民自身の政治といふ事を嫌惡する政府當局者の却つて希望し、到達せむと努めて居る所なのかも知れないが）。當然、自ら携はらぬまでもが、一國の政治といふことに注意を拂ひ、また興味をも感じなければならぬ人達までが、正月となつても日比谷には少しも引かれずして、國技館の相撲の方に引かれる。さう云へば我が國憲政運動の第一人者だつた故板垣退助氏なども、晩年に於ては日比谷よりも兩國の方に肩を入れられて居つた樣だ。其處には兎も角も、力と力、實力と實力との爭ひがあり、（相撲道も昔に比べては衰へたりといへ）階級とか情實とか云ふことを（殆ど全部）拔きにして渾身の力を振ふ眞劍の勝負が見られるのに　日比谷では只單に、情實、黨略のキタナキ渦卷が雜然として盲動するのを見、或ひは醉漢の痴態を眺め得るに過ぎないのであるから。

我々は、此の今や覺醒せむとしつゝある民衆の心が、今後議會改造の方向を辿るであらうか、或ひは、また、現に一部の人々が信じつゝある如く『國民の政治的自覺』といふことが、必ずしも『議會政治肯定』といふ事を意味するのではなくして、何か外の形式を採るに至るであらうか、まだハツキリと認知することは出來ない。然し乍ら、筆者が只、一重に、希望する所は（形式の如何などは結局だうでもよいのであるが）何等かの形式に於て維新の際にし殘されてをる王政復古の大業を完成し我が國體の精華である所の『皇室中心』『君民一體』といふ大義

を眞に發揮し實現させ度いといふ事である。さうして其の目的の貫徹の爲めには、鋲者が上段七三頁以下に述べたる意味に於て一般普通選擧制の一日も早き實施に向つて努力することなども確かに有効なる方法の一つであるだらう。今日の我が國の狀態を以てしては、實際我が國は國家的種痘を完全に行つてをるとは云へぬ樣に思はれる、天然痘に罹り得可き虞れは確かに殘されてゐ、從つて元來ならば少しも恐れる心配などはなく、寧ろこちらで彼れ等を多少教育し直してやる位のつもりでをられる筈である所のバクーニンやレーニンやクロポトキンや、トルストイや、ラッセル等の思想の民間に傳へられむ事を當局者の戰々兢々として恐れるといふことにも幾分理由がある樣に思はれるのである。

兎に角、我々は日本に於ける全てのものを、上、天皇陛下御一人と、國民全體のものと爲せば、たゞ其れだけでよいのである。之れを要するに『君民一體』『天皇中心』の大義を徹底させられればよいのであつて、政治の方ならば議會と云ふものをいつまでも今日に於けるが如き人民中の特殊階級の人間達の議會として置かずして之れを一般國民全體の議會とし、其れを基礎としての政黨内閣を立てゝ、以て天皇の御親政を輔佐し奉ればよいのであり、また軍隊の如きも、同じく之れをば實に情弊多くして、軍隊其のものゝ内部にも暗に不平不滿の呟聲をきく樣な長閥藩閥などの軍隊とはして置かずして、之れを名實共に上御一人と下全國民との軍隊とすればよいのである。司法警察の方面にしても、外交の方の問題にしても、或ひはまた、國民の精神的營養問題たる教育のことにしても、若し國民自身の選出したる代表者が、直接に聖天子の御仁政を輔佐するといふことになりさへすれば、全て悉く圓滿に運ばれて行く筈なのである。

『全人民からの代表者としても隨分下らない、デマゴーグ型の喰はせ者が選ばれて來るにちがいない』、と心配する人があるであらう。成程　最初の中は、さふいふ連中も必ず出て來るであらうと期待出來ないことはないが、然らば今の議會の連中にはさういふ香しからぬエレメントはゐないか？　と反問すれば我々は其の餘りに多き事を憾まねばならぬ次第であるのだ。兎に角　今よりも惡くなるなどゝ云ふことはある可き筈がないから、少しも餘計な心配は要らないのである。單に士農工商の階級的區別が撤廢されたゞけでも、日本にどれだけ人材の量が殖えたか？　維新の元勳など云ふ連中でも、また、今日普通選擧に反對を唱へて居る大官などにしても、其の大部分のものは浪人とか、足輕とか、百姓とか貧乏公卿とか、要するに彼れ等自身何れも下賤から身を起した人間ではなかつたか？　より大い

なる畠からはより大なるものが生れ、多数國民の監視のもとにはより大なる責任觀を持つた爲政者の出るといふ事は、賢者を待たずして明かなる道理である。

官僚と軍閥者流とを馭者として進んだロシヤ大帝國といふ車は轉覆した。過去の歴史の示す、人類社會の方則は大體に於て共通のものである以上(上段十六頁以下參照)或ひは我々の車もまた、全然轉覆の虞れなしとせぬ。我々は、其れが今は現に官僚中の人間であらうと、或ひは武人であらうと、思想家であらうと、誰れであらうと、決して其の人達が占むる今日の地位や階級によつて好きこのみや、毛嫌ひをするものではなく、只、我々の此の大切なる車の御者として誠意なき人を排して、大誠意、大熱情ある人を求むるのみである。我々は決して今日の所謂「自由主義者」「改造論者」に必ずしも全然贊成する者ではないのであるが、然しさういふ樣な馭者としての一番の適任者は、人民の間に於ける全ての階級を打破し、眞に君民一體なる我が國體の常態を復歸せしめたる後でなければ容易に得る事が出來ないといふ事を信ずる者である。皇室を中心とし、上に一人の聖天子を崇戴して、差別を重んじての平等主義を確立すること、只之れのみが我々日本人の進化發展を期し得可き唯一の道であり、而して其の實現に向つて一日一刻も早く全國の若き青年等が率先して運動を起す事の目下の急務であるといふ事を、ロシヤの過去及び現在は我々に教へてゐるのであると信ずる。其の理想が實現されたる曉に於てこそ、我々ははじめて物質的にもまた精神的にも、我等の日本をして其の發揮し得可き全能率を發揮せしむることを得、其の全力を提げて、我等が天職たる有色民族(世界最大の被征服階級、奴隷階級)の解放の爲めに、即ち地球の全表面の全人類の爲めに開放されて其れが正當なる勤勞努力による所の自由競爭の舞臺となり、對等なる人間の資格を以て互ひに相倚り相助けて働き得る仕事場とならむが爲めに、自由平等の大義を徹底的に獅子吼することも出來るのである。我々若き日本人の最大なる理想は此の高遠なる天職の遂行といふことでなければならぬ。さうして、其の理想遂行の希望と熱情に燃えてこそ、我々の祖國を益々大きく育て上げ、其れをして益々光輝ある國家たらしめ得る次第なのである。もし、萬一我々日本國民が此の理想と、國家としての天職の自覺とを失つたものとすれば、其の時限り、我々の祖國は衰亡に赴くより外なく、また、日本は其の時限り國として地上に存在するの意義を失ふ可き筈である。(終)

遊ぶ會

木村荘八

一、はじめ

或る冬の温和な日曜のことでした。主人Aの家に「例の」會合があつて、午後二時頃のこと、畫家Bと主人が話してゐます。――まだ早いので、他の仲間はやつて來ません。客間の八疊のつきあたりに二人向き合つて座つて、間に丸火鉢をはさみ、明るい障子を横にしてゐるのでこつちから見ると、何か影法師の様です。

障子の外には椽一杯に、日がさしてゐます。猫がそこに三匹互ひに重なつて、ねてゐる。

A「……その君の買つたと云ふ芥子園畫傳は何だ、初版かね？」

B「まあ初版だ、と云ふんだが、それは如何だかわからない。然し何しろいゝ版だ。」

A「そりやいゝね。競賣に持つて來ればよかつたに。」

B「なあに、俺が入札するよ。」

A「……兎に角、傳統がしつかりして深いだけに、あゝなると型もいゝね。」

B「いゝ。――もう一つ茜聰山水と云ふのがあるんだが、それは安版だ。然しどうして！」

A「知つてゐるよ。之れだらう。(と出す)」

B「さうだ。(或る風景をあけて)、この綺麗さなどは、さすが支那だな。之れ位ひ點を微妙に生かしたやり方は、類がないね。」

A「芥子園畫傳でも眞先きにあの樹の葉のつけ方に感心したよ。介字點とか菊花點、大混點、鼠足點……などいろ〳〵あるが、實にうまい表現だな。繪の中の樹の葉、つまりあの象徴でいきなり「美」にして了ふ直接なやり方だ。感心する。」

B「君は手習ひしたかい？」

A「イヤ――駄目だ。少しやつて見たがね、あの垂藤點なんて

奴のコツは、何所にあるんだかね。(間)、その山水畫帖の方で見るとイヤに自然にうまくはいつてゐるが、それを見て描いてもとても駄目だ、生きない。……つまりそれを發見した人の高さが何所となく素描に泌みてゐるんだね。」

B「型だけでもかなり年期か要るだらう。」

A「まあこつちは參考にするのだから――」

B「見ればいゝさ。(間)、見るだけでもう何かしらん掴めるから。(A、うなづく)習字でもさうだ想だ。或る人から聞いたが、草紙に習ふより手本を見て心書き(しんがき)と云ふのをやるんだ想だ。一字々々みつしりね。その方がぐんと手が上ると云ふ……」

A「だが君それは、こつちが少しは相當に出來てからだね。(間)、僕等が芥子園畫傳を見てやるやり方がつまり心書きだからな。描いても描かなくつても。」

B「……それから誰だつけか、朝起きると毎日空(そら)へ大きく千字文をかうして(指さす)習つた想だ。」

A「感じがあるね。(空想する)、それはたしかに爲めになる。」――然しもう誰か來さうなもの、と心付きました。

B「おそいねえ。」

A「うん。だがもう間もなく來るだらう。來出すと一時に來るんだが、――然しどうせみんな集まるのは日がくれてからだ。」

Bは、俺も少し早いなとは家を出る時思つたのだ、と云ひました。

A「まあ、ゆつくり話せていゝ。(間)、君はその、芥子園畫傳を讀んだのかい?」

B「イヤ、讀まない」

A「中々面白いが、(譯本を出す)之れだ。」

(B、開けて見る。A、のぞき込む)

B「(讀む)鹿柴氏曰く、畫を論ずる、或ひは繁を尚び、或ひは簡を尚べども、繁も非なり、簡も非なり……か。」

A「法が無いのもいけないが有り過ぎるのは猶いけない――と云ふのがあるだらう。」

B「サロンとアンデパンダンだね。何時でもある……」

A「僕は此の頃寧ろ法の有る方が無いよりいゝよ。どうせ有無以上に出つこない仕事は。――出鱈目より型の方がいゝ。」

B「實際、近頃の日本畫はひどいね。」

A「ひどい。勿體ない氣がするよ、全く。」

B「この六法、六要、六長、なんか、さすが昔からの大道で面白いね。」

A「三病と云ふのがあるだらう。一に曰く板(ばん)、二に曰く刻(こく)、三に曰く結(けつ)――つて言ふのが。」

B「ある」

A「板はつまり自然派、説明描寫だね。刻は形似とか象徴とか、手段味に拘んだ仕事のことだらう。――結は材料負けだ。(間)、まあその他いろ〳〵と解釋出來るが、僕は板はやらないが、刻、結、は時々いけないと思ふよ」

B「意識があるからねえ。エロッキオだつけか、幾何學はあらゆる知識の母で同時に繪畫にも亦母だと言つてゐたと思ふが、或る數理は、繪に本當だな」

此の時玄關に書家Cの聲がして、彼は某君と一所に來ました。

C「やあ、おくれたかね。オヤ、まだらしいな――」

彼は大きな貝を手に持つて、二人の前におきました。「何だか知つてゐるか？」

A「蛤だらう」

B「それは決まつてゐるぢやないか。――あれだ。アメ細工のはいつた奴だらう」

C「さうだ」

B「僕も來がけにそこで見た」

C「――すると君はつい少し前に來たのか」

B「さあ、彼之れ一時間になるかな」

C「あゝ云ふ商人は一つ所に長くゐるのかね」

A「屋臺を持つてゐるアメ屋か。此の、(貝を指して)猫や桃太郎、棒にさしたひよつとこなどをこしらへてゐる、あれだらう？」

C「さうだ。一つ所にゐるんだと賣れないから歩くだらうな」

A「歩くだらう」

C「大變だな。それはさうと、(貝を開ける)之れさ、(犬が鞠に戯れてゐるアメ細工)、實にうまいぢやないか！(A、B、同意する)こしらへるのを一寸見てゐたのだが、つくづく感心した。」

B「いくらとるの？」

C「それが實に安くて氣の毒な位ひだよ。――五錢。(間)之れが若しアメでなく、後に殘るものだつたら、之れでが分大したもんだぜ」

その犬は略がきの素描の感のある小さな「彫刻」で、藍と紅とが鞠や首環に單彩してある。――その色も利いて、美術味が分です。

A「あれだね。」

(えん側に吊るしたツケギ細工の屋根舟、燈籠など指す)

B「さうだ。中々いゝ味のものが普通にあるね。」

C「段々こんなものは無くなるだらうが、殘念なことだ。」

A「――僕は此の間或る木彫師に逢つたが、佛像を澤山持つて

ゐるK氏の家でだ。その木彫師はT齋と云ふんだがね、八十とかで、フエノロサや何かと方々歩いたこともあるらしい。――はたち位ひの頃には之れで中々天狗だつたが、今では……何とか、感じのある言葉で云つてゐたよ。(間)K氏が、さう〳〵あなたのものを手に入れたと云つて、T齋の三十代に作つた筆筒を奥から出して來て見せたが、竹筒に毛彫りで支那によくある文房具やゝ籠を彫りつけたものだ」

C「作はどう？」

A「中々いゝ。第一イヤ味がなく、丁寧で、所謂粉本味ではあるが、好意の持てるものだ。(間)T齋がそれを見て、眼鏡をかけてね、反つて筆筒をかう手に持ちながらしきりに左見右見、よろしいなア、よろしいなア、と、云つてゐるのさ。之れを作つた頃には丹念にコツコツ仕事する時分で、今はかう綿密に行かない。之れまでいゝ光澤になるものか……など、變に愛情があつたよ。(間)いくらで買つた、とT齋がK氏に聞くと、何でも道具屋が持つて來て、五十圓で買つたと云つた。安いなアとT齋がすぐ云つた。然し又すぐ、然しさう賣れてゐてまああありがたい。それからちよつと僕の顏も見てね、わしが手放したのは二圓か三圓――その位ひのものだ、と云つた……」

話は木版のこと、と柔のことなどに移りました。そして結局、木版彫りの老齢の人とか、珍らしいあり得る刷師、殊に文樂の人形師などは、例へば時々音樂學校で―中節や說教節のその道の人が呼ばれる樣に、もつと呼ばれるか、又は學士會院あたりで保護するとか、そんな風にするのがいゝ、と話した。

C「今はあゝ云ふ才藝で食ふ時代ではないのだから、無理だ」

A「もう今からでは既でにさう云ふ一藝の人は、探しても殆んど少ないかもしれないね。」

明治時代の混亂があつたからこそ、今も、亦之れからもあるのだが、――それは喜ぶ可き意味で、である――然し犧牲も非常に多い、と話す。

自然、それからは明治時代の文化のことに及んで、Aが此の頃買入れた泥繪を見せ「そつくりアンリ・ルーソーだな！」とB、C共膝を進めて、感心しました。――この話の頃からAの兄甲次、乙造。甲次は妹文子と、乙造は妻君と、追々に集まつて來て、にぎやかになりました。室は温かく、煙くなる。女連は茶の間にかたまつてゐます。

Bが東京の建築のことから、近頃ニコライを見た話をしました。

B「……あの鐘樓には鐘が七つ(？)だつけかあるが、眞中に大きなのがあつて、まはりに小さいのが順に吊つてある。ド、

レ、ミ、ファ……の音になつてゐるのだ想だ。で、振子から振子へそれぞれ綱が引いてあつて、その元を引くと例の、ガンランボン……が初まる仕掛けだ」

あれは特に　ろく\式や何かにつれて鳴らし方があるのかね、と誰か聞きました。「ナニ、出鱈目でいつも綱さへ引けばあゝなるのだ想だ。」あの音色にしか鳴らないのだ、とBが笑つて

「ところがその綱へ時々鳩が止まつて、騒ぐことがある。それで時ならぬ時、鐘樓でベルの鳴る怪異があるとさ。(間)、あのそばに昔からの信者が住んでゐる想だがね、或る時其君の御産で心配してゐると、眞夜中に子供が生れた、その時不思議や(皆笑ふ)鐘が鳴つたんだ、ありがたがつた想だ!」

甲次「それはありがたかつたらう。」

B「イヤ、假令鳩と知つても、どうも俺でもそれは喜ぶだらうな」

文エ林、元中學教師深田等が來ました。

B「あの建物もいゝし、調度もニコライの好みで日本人が作つた想だが、中々いゝよ、殊に――あれは舶來かな――說教壇や、そこのコマよせみたいなもの、戸の木彫裝飾など、中々いゝ」

C「虎の門味だらう?」

B「さうだ。何所か間の拔けた、美のはにかんだ初心な、可憐な、いゝ味だ。博物館の本館の戸の閉まつた正面味――あの菊形の池もいゝね」

A「風情があるよ。(間)あの味がよく善意で嚙みしめられる時代なら、美は正道のわけだ。」

C「つまり中世式の古風なヨーロッパ型が、いきなり右から左りへ來たんだね。それを美へ嚙み分けるよりも、――さう云ふ時期もあれで一寸あつたが、――差し當り忙しい文化では、――全く明治の或る感じは百科辭書だからな。――一足飛びに、淺い、上つ皮の、只當座役に立つ、簡單なモダーニズムへ導かれた形ちだ。――又無理もない。」

甲次「何しろ板垣死すとも自由は死せず、だからねえ。つい此の間が。」

乙造「過渡の代表的過渡だらう。(間)、だがよく過ぎて來た。」

(A、この間に小林清親や井上安次の東京名所版畫を持ち出す。偶々その中に、Aが北京で寫生したしん粉細工の人形の繪が出て來る。)

A「……見給へ。支那の丁度之れだ。(Cのアメ細工を手に取る)このしん粉細工が。(寫生を指して)。――當り前のことだが思へば不思議だね。之れは徹頭徹尾乾隆味と云ふか、何しろ清朝味

だが、こつち（アメ細工）は又殘らず德川期味だ。」

B「年代に藝術があるともう、服裝も持物、日用品、凡て貫くね。面白い。」

A「今の歐羅巴もさうだらう。殊に支那の女の服裝、米國は問題外だが、日本の或る味も、一眼で無藝術、無美。すさまじい樣だ。」

C「まあ見ろ。今にC式服裝を起すから、（笑ふ）」

B「細君が仕立てゝね。」

A「皆で合名會社を起すかな。」

「ハハハハハ」

隣室から、

Cの妻「何を笑つてゐらつしやるの？」

A「Cが洋服屋になると云ふから。」

B「洋服ではない、和服だ。」

C（口をとがらせ）「國服創作協會だ。」――ハハハハハ

女連は然し「又初まつた」位ひ、より合はずに、しきりに熱心に話しのつゞきへ返るらしい……

Cの妻「それから如何して？」

乙造の妻「それからね、場面が變つて十位ひのダニエルがピアノのある室でピアノにもたれて寂し想にしてゐるの。先の夫の子よ。すると隣りの室ではグレゴールが立つて、ルースが腰かけてね、拙い辯士で駄目なのよ。――何しろ、あのダニエルがそんなに可愛いゝのかと云ふ樣なことをルースに云ふの」

C「皮肉？」

乙「まあさうでせう。しかし皮肉ばかりではないでせう。ルースは本當にダニエルが可愛いゝのだからグレゴールは皮肉ではないわ。ルースがそれに寂しい面白くない樣な顏をしてゐる。グレゴールは安つぽい樣な、意地わるの顏をして、ゐるけれど、意地わるばかりではなく意地をよくしたつて、時々面白くないのだと思ふ。ルースを接吻するのよ。どうかして愛情をちやんとしたいと思ふらしいのね。然し、お前の時は右の樣だつてルースに云ふの」

C「まあ」

乙「ルースはイヤな顏をして、然し全く右の樣かも知れないわ、默つてツンと立つてゐる。グレゴールはムシヤクシヤして不愉快でイライラしてたまらないと見えるのね。一言二言云つて、然し矢庭にルースの頰を平手で一つぶつの。」

C「ルースはどうして？」

乙「ルースは烈しくよけてそれからそばにあつた花瓶をいきなり手に持つてふり上げる」

文子「え？ぶつんでせう」

乙「そこへエステルがはいつて來るのでその場はくぢける」

文子が、

「エステルつて何でしたつけ？」

乙「ルースの妹よ。……」

「おい！何の話だ。」

と乙造が茶の間へ聲をかけました。」

乙造の妻「クロイツェル・ソナタよ」

C「活動だらう？」

乙造「どうせ、活動だ」

妻「まあ」

男連「ハハハハハハ」

二、中ごろ

「こんちは」と云つて金サンが來ました。Aの叔父で、本所小梅に上り屋をしてゐる。

「大分おにぎやかですな」

Aの妻「えゝ、よくいらつしやいました」

金サンは苦勞人で、ちよくで、何んでも樂ごとは玄人なので、この會にはゐないと寂しいのです、

殆んどつゞいて從弟の大學生渡邊が來ました。友達を一人連れて來ましたが有名なダイギングの選手と云ふので、變に感嘆が起る。間もなく、Aの妻君の友達が二人來る。美術社展覽會の事務員大塚クンが來る。おくれて若い畫かき、Dが來る。最後に――夕方になつて、Aの母が來ました。姉のところから子供が兄弟二人武雄、二郎だけ來た……

會場は茶の間の六疊と、客間の八疊二室で、もうわいわいとしてゐる。菓子があつて茶があつてふとんは足りるだけ、大ていチャムピオン達がしつかと敷いてゐる。猫がまご〱してうろついてゐます。

「此の黑猫をどけてくれ、氣味がわるい」

「あたしが抱きませう。まあ、眞黑だ」と女連に歡迎されてゐます。

エロキューションの得意な「通」の深田がかうなると、座談の花形です。

「……此の間×燕を聞いたが、まくらでかう云つたよ。何でも（身ぶりで）私は話すのに客席の一人を目さすのです。あとは

まあつてもないと思ふことにしてゐる。で、その一人を泣かす。又は笑はす。それが思ふツボに行けば從つて客はみんな、泣きも笑ひも思ふまゝになる……」

若い畫家D「講談は面白いねえ」

深田「面白い。殊に情がね。あの悪黨が送りになる時に（身ぶりで）へえ、あつしや長年きはどく三度もかくれて食つて來ましたが、一度、天下晴れて、あれえ所を燒いて、一杯のみてえと思つてゐやす。……で、旦那方の御慈悲で一杯やるところなどは、又別だ」

D「あれえ所つて何だい？」

B「なげえわらじ、みたいなもんだよ」

D「變なもんだな。何だい？」

深田「おいD君、此の土地に松杉を植へる、つて何だか知つてるか」

D「その位ひわかるさ。木だよ。」

深田「それはお目出度いね」

D「正月だらう」

Dは、ブランダルヂヤンとヂヤンヴルヂヤンがわからず、ルネツサンスが聲をかくと思つてゐる。蓄音器のレコードを手に持つて早くまはして、揚子を溝に當てたら簡單にうまく鳴る工夫はないか、――など「此の頃はよく描けないので平行してゐる」とハガキをよこしたことがあります。「描」に「閉口」……

D「笑ふなよ。――講談は面白いよ、實際。此の間新聞で讀んだが或る劍術使ひが武者修行と試合ふところがあつた。試合に來た奴も中々うまいのだが劍術使ひのおぢいさんの方がずつと上なんだ。それで、武者修行のかまへを見て、ウム、君は中々出來るが、只くせがある。自己流でやつたのだらう。そのくせがとれると今よりずつと上手になる、――と云ふところがあつた……」

C「畫でもさうだな。」

D「（急いて）さうだ、さうだ。本當にさうだと思つたよ」

話が娯樂に移つて來ました。

甲次「人情話と云ふものはいゝもんだね。ムの子別れを聞いたが、しまひに元のかみさんに子にひかされて逢ふところはよかつた。うなぎ屋の二階で逢ふのだが、亭主がもじもじしてしきりに煙管に煙草をつめては吸はずにはたき、つめてはたきして、時々、おしきなさい、と元のかみさんに座ぶとんをすゝめるんだ。かみさんと視線がぶつかつてあはてゝニッと笑つて、ポンポン煙管をはたく。又、おしきなさい、と云つては笑つて目をそらす。――そこのところが眞情だ」

乙造「甲兄さんはあゝ云ふものを聞いて、泣くかね」
甲次「つい泣くね。先にはきまりが惡くて、それに聞きすぎて批評心などあつたし、泣かなかつたものだが、近頃はたまにきくせひか、うまくやられると涙ぐむ」
乙造「僕も前の日曜に家中で淺草へ行つたんだがね。或る活動で、もう一歩で男にだまされかけた或る妻君がすんでのところで、非をさとるのがあつた。その妻君の親父がさう云ふ過ちがあつて子と夫を捨てた女の話しをしてきかせ、その女は慈善病院でとう／＼悔いて死んだ。子を殘された夫は長年、苦勞して、娘を育てたが、——その娘が誰あらうお前だ、と初めて秘密を打ち明けるのだ。娘、つまり或る妻君はすつかりそれで夢がさめる。（間）とそこへ會社から夫が歸つて來る。その夫が、又まぢめな男で、コツコツ毎日化學研究に沒頭してゐるのだがネ、時には夫の會社の窓下へ子供と乳母だけ迎へに行つて、妻君は家でよくない考へにふけるところなどある。氣の毒だよ。それが今日は、夫が歸つて來るともう、妻君は矢庭にかけて迎へて、無くなしたものが見付かつた樣な、まあ、役者もうまいのだらうが、右から、左から、手をとつたり、肩をさすつたり、狂喜の樣に喜び、つゞけ樣に接吻する。夫はあきれてボー然として了ふんだが、僕は涙が出た。——いきなりうれしかつたんだな、つまり。」
深田「泣けるのは又いゝものだよ。或る寄席で御詠歌の出た時に、四十位ひの女の人がそつと袖口で涙をふいてゐたつけ。俺もそれでつい泣かされた。」
「あゝ／＼」と友達の大學生と向ふで話してゐた渡邊がその時一寸ふり向き、アザ笑つて「イヤだね、通人は！」吐く眞似をして見せました。——然し直ぐ又背を向けて、話し繼ぎの友人へ、
「で、手はどうするんだつて、之れから……」
（左手をつき出し、右を引き、首をかゞめる。——變な形ち）
深田がそれを見て「何だい、そのかつかうは？ハハア、泳ぎだな、相變らず」
渡邊「さうさ。クロールのターニングの研究中だ。」
深田「この寒いのに」
渡邊「湯だよ。（間）その、左りを向ふへつける、すぐからわきの下へ（顏をかくして）もぐり、右でぐんとかいて、（女を見上げ）このかく手と同時にうしろへ板を蹴るのか」（足を出し、殆んどまはる）
友人「その逆の方が出いゝかも知れぬ。かう……（形ちを初める）」

深田「巣鴨だね、之れは」

一方では金サンが支那料理の話をしてゐます。室の一隅の床柱によつかゝり、林や大塚クン相手に……「無残なことをしますよ。鯉を一晩醬油の中に泳がせてね、さんざのむでせう、生(いき)身に味をつけるわけでさあ。そいつをあくる日丸揚げにして食ふ。生きた奴をボン〳〵油で揚げるなど、まだいゝ方です。(間)、猿の脳味噌を食ふと云ひますがね。何でも臺を作つて上に板を當て、板に小さく丸穴があけてある。そこへ下から猿の脳天だけ當てがふ樣に縛り付けるのだ想だ。で、食ふ奴がさじを持つてまはりに集まつて、一人が剃刀で猿の頭の毛を剃る。穴から出たところをでせうな。それから刄ものを脳天へ突込んで、キリキリと丸く穴をあける。猿が泣く想ですよ。その脳天の穴へさじを入れて、脳味噌の湯氣の出る奴を、すくつて食ふと云ふのだが、……」

大塚「(澁面して)本當ですか」

金「さあ、そこのところはまあ私も見たことはないのですがね。不老長壽の藥りと云ひますから、やりかねないね。」

林「……支那料理と云へば、僕はこの間弱つたことがある。或る家へはいつて――名をまるで知らないんだがね、――鰻のを何でもくれと云つたんだ。すると間もなく深い丼のが來た。早いナと思つて兎に角それを食つてゐると、――さあ、それが蟹だつたか何だか……何しろ又、スグあとを女中が持つて來て、オヤ、之れはすみませんでした、お隣りのと違ひました、と云ふんだ、(間)、成程隣りに客が二人ゐてポカンとしてゐる。閉口したよ。」

甲文「(笑)さう云ふのが川鰐日に猿の脳味噌でも何でも食ふんだ。」

林「イヤ、その脳味噌だけはもうよしてくれ(顔をしかめる)」

A、B、C、等は、その反對一隅にかたまつて大きな英書をあげながら、Aがその本へかゞみ込んでしきりに何か話してゐます。

A「……その何時(いつ)全體フローレンスを出かけて、いつミランへ現はれたのか、更にそれがわからないんだな。(本を見て)ヴザリは一四九三年と云ひ、モレリとリヒテルは一四八五年と云ふ、近頃の研究家間では一般に一四八三年と云ふことになつてゐるが、ミュルレル・ワルドの如きは一四八一年の終りか、又は八二年の初めと云ふ……」

B「全體その頃幾つなんだ、レオナルドは。」

A「三十一だよ。一四八三年として。(間)、この、近頃の研究家間では一體此の年にレオナルドがミランへ行つたことに決ま

つたと云ふ、その參詣のよりどころが又、中々面白いんだ。ちよつとしたことだがね、實に平凡で、それだけに根がある。――えゝと、(間)、十六世紀にレオナルドのことをかいたアノニモが、レオナルドはフローレンスからミランへ行つたと、その時「三十であつた」と書いたのが一つだ。」

B「一四八二年だね」

A「さうだ。それから、サバ・ダ・カスティグリョーネと云ふのが又その頃にゐたんだが、それが、レオナルドは十六年間、ロドヰコ・イル・モロー、つまりミランの大公の騎馬像製作にかゝつてゐたと書いたのだ。」

C「十六年かゝつたのか！」

A「いやそれはよくわからないんだが、兎に角ミランにゐた間始終、宿題ではあつた。つまり、殆んどそれを作りに初めは行つた樣なわけだつたんだからね。此の十六年が、レオナルドのミランにゐた間の年限と云ふ事になる。」

B「フム」

A「で、レオナルドがミランを去つたのが、之れは確かに分つて、一四九九年だ。ね、1499−16＝1483。それで、その年にはレオナルドは三十一のわけで、アノニモの「三十」と云ふ漠として、然し本當らしい記錄によく合ふ、と。」

C「成程、算術だね」(笑)

A「ところがリヒテルと云ふ博士が、何しろ三十前後二年か三年、レオナルドがどうしてゐたかは、確かには誰にもわからない。――そのわからない期間を考證して、彼はその間に東方旅行をした。アルメニヤにゐたし、シリアを通つてカイロのサルタンに機械技師となつたらう。猶、自ら進んで、回教思想をも奉じた、と書いた……」

B「何からそんな説を立てられたのだ？」

A「それが大變なんだ。レオナルド自身の、Codex Atlanticusに書いてあるのだ。(譯を讀む)――シリアのディオダリスよ。余は今アルメニアにゐる。貴君がのぞむところの仕事を果しに、此所にゐるのである。余の目論見に最もよく適ふ一地方に於て仕事を初める爲め、シヤレンデウラの町へ來て見た。此所は故國との境に接して、海岸にある。タウラス山のふもとである、云々――まだいくつもかう云ふ手記があるんだが、猶アルメニア地方一帶の地圖がかいてあるし、一四八三年に起つたアレッポの地震のことが記錄してある。」

C「さうかねえ。そんなに方々歩いたのかねえ。」

A「ところが又變なんだよ。――何でもその頃、一體文士の間に、屢々普通のことをアレゴリーで書いて本にする慾みがあつ

たんだな。よくあるルネッサン式風流だ。で、大てい手紙體でかいたものらしい。それと、ギルベルト・ゴヂと云ふおよそレオナルドの書きのこしたものになら何にでも通じてゐると云ふ大變な研究家が、リヒテルの一方にあつてね。リヒテルがレオナルド東方旅行説を云ひ立てると、もう泣かんばかりに、反對したと云ふのだ。のみならず、忽ちリヒテル式の他のいろ〳〵の材料を、レオナルドの遺文から之れも同性質のものだ、之れも同じだと指摘して、うんと擧げた想だ。」

B「さうかねえ。さすが本場の研究家だね」

A「つまりリヒテルの材料でレオナルドが東方旅行をし、且回教信徒にもなつたと假りにして見ると、その他レオナルドは——まあ同じ當時だらうが、何所を歩き、何所迄出かけたか、餘程變なものになる。(間)、ゴヂはそれで多分之れは、一體レオナルドは地理學や風土記類、旅行案內、地圖等が非常に好きである、偶々その頃又フローレンスやミランの人で、エヂプトやコンスタンティノープルあたり、或る者はアジア迄も、行つて歸つて來た者がある。それ等に聞いて、そこへレオナルド自身の想像を交へ、地圖もかくし、旅信も綴つたらう。「この巧みなる文章家が、それ故手紙體で小アジア地方の景致だとか同時代の書物によく出る地方のいろ〳〵のことを書いたからと云つて、少しも怪しむには當らないのである。」多分一冊その本をかゝうと思つて、然し中途でやめたらうと思はれる、と書いてゐる。」

B「變だねえ、——忘想だね、殆んど。」

A「その地圖や旅行記が又精確な、すばらしい、どうしても行つたとしか思へない位ひのものらしいんだ。」

C「實にレオナルドだ!」

A「その他何だかいろんなことがあるよ……」

いつか林や甲次、乙造、深田、……等もそこへ來て、聞いてゐる。

女連は長火鉢を中心に茶の間に丸くなつて、その眞中に姉の子を入れ、順ぐりにつゞいて話をこしらへる遊びをしてゐる。

Cの妻「……するとその狐が實はその國の王様の化けたのでね」

武雄「王様に化けるのでせう」

C「さうさう、王様に化けてね。——それから!」

Aの妻「私?簡單ね。で、その化けた王様の御殿に王子が產まれました。ところがその王子が强い王子でね。此の國には昔から惡い狐がゐると云ふから、それを退治に行かう、と、王様にお願ひするの」

二郎「あゝ、僕その話知つてらあ」
Aの妻の友「(微笑)それからどうするの?」
二郎「退治るんだよ」
武雄「だつて狐は王樣に化けてるんだから、王樣はお父樣だらう、退治られないぢやないの」
Aの妻「そこをどうかして退治る樣に之れからするの。次!」

電氣がパツとつきました。

Aの妻「オヤ、そろ／＼からうしてもゐられない。みんなすいけて下さいね、(笑)。御飯にしませう」
で、茶の間にゐた男連はとなりへ引き上げ 女連はいろ／＼支度にかゝる樣子です。ガタゴトしはじめる。

A「おい、此の間に競賣を初めていゝかね」
Aの妻(臺所で)「こつちへきこへる樣にして下されば。」
A「よし。――競賣を初めやう、競賣を。」
みんなお互ひに、ゴソゴソ、持ち寄つた品物を用意する。
B「君は何だ?」
C「このアメ細工を出さう」

深田「そいつは僕がほしいな。大好きだ」
C「食ふなら賣らない」
Aが「僕がつけやう。」と云ひました。「誰か札元にならないかな」
林「よし、僕がならう」
A「イヤ、僕はつけてゐられなかつた。之れから品物をまとめる役だ。大塚君、本職で一つ帖つけをたのみたい」
林「それから讀み役が要るだらう」
渡邊「僕がならう」
で、机を持ち出して室の一端に据へ、その奧に林が座つてみんなは室の手前に陣どる。禿の大塚クンが半紙に筆で、帖つけをするのです。――その支度の間にAがみんなの持ちよつた品物を運んで、林の前後左右におき、机にきれをかけて、「客」から見えなくする。
札元「品物は殘らずこゝにある。いゝかね。規則は、いくらでも最高價格に落札すること。本當に現金の と。自分の出品には札を入れない。妥協あり、と。(机の下に手を入れてさぐつて)、初めるよ、先づ之れからだ。(山鳥の羽が一つ出る)いくら?」
(みんな思ひ／＼に紙片に値を書いて、讀み役に渡す。札元も讀み役もつけ役も入れる。)

札元「すんだかね。」

讀役「すんだ。讀むよ。」

札元「まあ待つて。此の山鳥の羽はA夫人出品。」

Aの弟「昨日食べたのこりだ」ヽ

D「うまかつたかい」叱！叱！

讀役「……いゝかね、五厘、D。五厘、林。五厘、深田。五厘、B……」

B「五厘ばかりだな」

讀役「いゝや、まだあるよ、ホラ、二錢、甲次。（喝采起る）。五厘。乙造。買へず、と云ふのがある、Cだ。それから、一錢、A。三錢、渡邊、（〃喝采）、五錢、大塚！」（どよめく）

札元（机を叩いて）「書記役！。」（喝采）

書記役「イヤ、僕は初めて入れたので勝手がわからないのだよ。困るよ。そんなもの。高いよ。」

A「本氣だな？」（大ひに笑ふ）

札元「此度はこの靴！渡邊君出品。」

深田「はけるかい？」

讀役「まあ裏を直せばはけるだらうが、直すのにどの位ひかゝるかな」

B「ヘンに本氣だな。買つてはく氣か」

深田「なあに。少くも靴だからさ」

D「一寸見せてくれ。俺は五錢位ひなら買ふぞ。（そつとぶるさげて見る）駄目だ、小さい。」

讀役「九文だよ」

深田「それは誰にも駄目だらう！棄權、棄權」

札元は誰にはけるかさがしたところが、甲次にやつと、Aの姉の子二人にはダブダブにはけます。

札元「ではその三人で入札すること」

結局それは、甲次が姉の子に妥協して一錢で武雄におちました。（武雄はこ をAの家へ忘れて行き、あとで册屋が二十錢に買つた。Aが「俺はそれから武雄と二郎に代りに本を送つてやつた。結局あの靴は、段ちがひで僕におちた形ちだ。」）——段々女連も仲間にはいつて來て、最後にまとめて讀み上げた書記役のツケによると——

出品者	品物	價格	落札主	事故
Aの妻ノ	山鳥の羽ガ	五錢デ	大塚	（後出品取消）
渡邊ノ	靴ガ	一錢デ	武雄	（妥協）
文子ノ	懷中鏡ガ	七十錢デ	金さん	
Aノ	ゴオホ自畫像寫眞ガ	三十錢デ	渡邊	
甲次ノ	テーヌの English Literature ガ	五十錢デ	A	

B ノ 圖書館回數券入ガマロ ガ 二十錢 デ 乙造
乙造ノ 紺サージ、チョッキ ガ 三十錢 デ 甲次
大塚ノ 西洋剃刀 ガ 十五錢 デ 渡邊
Cの妻ノ 青九谷湯呑 ガ 三圓一錢 デ B（之れはAの入札三圓を見て、Bがやつたと云ふので物言ひ起る）
C ノ アメ細工 ガ 二十錢 デ 深田（食よないと云ふ條件付）
渡邊の友ノ 萬年筆 ガ 一圓 デ 金さん
深田ノ 講談雜誌五冊 ガ 五十錢 デ A
Aの弟ノ コムパス、鳥くゝり口 ガ 三十錢 デ C
甲次の妻ノ 猿五つ ガ 五十錢 デ 文子

金サンは品物を忘れて來たので「イヤ然し私はあの帽子をかけやう」とかぶつて來た帽子を出しましたが、それはみんな驚いて、中止になりました。

「さあ竹さん、こつちで御飯にしませう」

三　おはり

食後は、——誰云ふとなく、B夫人問題がいつか話題に上りました。深田が云つた。

「僕に第一氣に入らないのは何故夫人がD氏にちやんと底を割つて話をしなかつたか、間違つてゐると思ふよ……」

「それが夫婦ぢやないかいな」、とそこで金サンが云つたので出鱈目になりかけましたが

「全くそれが夫婦だよ」——と深田がイヤに念を入れて眞顔に云つたので、一種奇妙な空氣が起りました。

話はそれから段々につゞいて、結局、あ　は事件の性質がよし止みがたい一つの勢ひで、或る必然でもあるにせよ、何しろ人生には日影のことで、秘さる可きもの、字義的に内部に語る可きことである。それが露骨にあらはにわき起つた形ちは、さう云ふ時勢がフッと影に見えて、イヤな感じがする。あゝ新聞の騷ぎも不見識だが「新聞」はまあそれが商賣だから——それよりも第一、あの事件それ自身、辛い——同情す可き——恥や止むを得ぬ暗さの中でしめやかに——まぢめに——話される性質よりも、その性質は殆んど不問に通り越して、寧ろ、いつそ初めから卑賤に新聞段ヌキか何かでわいわいはやされるに、さう云ひ切つては又氣の毒だが然し適當に、つまり「結末」が餘り粗製に先きへ出來てゐる。

事件の土臺がわるく、經過がいゝかげんで、自然終末がうはずつた淺はかな一空想に出來上つた。それが「出來上」れる程

ひくい生活の空氣の中で。――まぢめに扱へる立場が少ない。

Ｄ氏やＹ氏、Ｔ氏等が平凡だけに何だか却つて氣の毒に思はれる。尤も、事實そこ（男側）には私行やいきさつその他にカナリよくない、感もちならぬことはそれはあるだらう。夫人は何と云つても女だから一番氣の毒には違ひないが、その「氣の毒さ」（女）の實感があれではまるで下積みになつて、その上に浮いた無に劣る意識や思想ばかりはびこり、それは無雜作に（人ならある）恥や苦勞を曖昧にぼかす役に立つ。その上で、猶變た風に凝つたゞけ、結局、相手の愚と殆んど色代りだけの相對にはつた樣では、仕方ないし淺ましい。行爲の對象とも動機ともなるものが餘りにさらにある仕樣のない材料（實生活）だけのこと、――あゝでは、世の中に持ち出すも何にもなく、所詮段どりの狂つたよくある一家騷動で「仕樣がない」以上にはどうも問題にならない。（さう云ふ生活は困つたものだが全く、困つたものだ。）偶々そこにあの紆縁状の樣な、氣の毒だが實際「特種」があるのは……

甲次「僕は女は文學などには全く餘り立ちいらないのが、どうもいゝと思ふよ」

乙造「――だが然しあの立場の女の人や男は、世間に多いよ。いろ／＼刺戟を與へたらう。僕は不快な感じかした。」

Ｃが「一體不快のほか與へない事件だよ。どうも明らかに道ならぬことがかなり平氣に、如何して肯定的に餘りに大きな聲でしやべられる感じは、何しろたまらないからな」

まあたゞそれだけだ、どつちみち問題外――となりました。

それから次分のつゞきで何となくワシントン會議に話が及びましたが、

Ａ「何だかどうでもいゝ感じじやないか。戰爭はなくならないだらう。美は有るだらう、だ。まあ、世の中もそれ自身次第に進むことはそれはたしかだと思ふが」

このぶつきら棒な發言が頭から出て、討議も考へもたじろいだ形ちです。林が

「怖い感じがする」それは世の何が代表で麗々とあぶないことを相談してゐるのか、屢々腑におちないからだ、と云ひました。

乙造「あゝして軍艦だとか、要塞、砲臺……などのことを露骨に勘定する立場に當つたら、全く心からそれこそ非戰論者にならずにはゐられまい。――が、どう！たらいゝものか。（間）、まあ、僕は少くも、コツコツ歴史を調べたり、史實を考へたり、この自分の仕事で時も生活も充たすほかないだけだ……」

＊　＊　＊　＊

「よさうや！マヂメな話は。こんなことはいつでも出來る。」

(間)、十三云ふのをやらう、十三云ふのを」――と誰かゞあさぎ幕を切り落しました。何れもしらふで。

「よし」

「三度目から云ふんだよ。(指で數へる用意をする)いゝか、――文豪――世界の文豪――世界の文豪！」

「ゲーテ」『文豪？』『シルレル』『文豪？』『ベートフェン」

「駄目だ！」

「此度は俺だ。いゝか――(考へて)、東京の橋。橋の名だよ。――橋の名、此度から！橋の名」

「マ待つてくれ」

「橋の名、――橋の名」

「新橋」「橋の名」「京橋」「橋の名」「日本橋」「橋の名」「ホラ何とか云つた三越のそばの小さた……今川橋』『變だな！まあ橋の名」「辨慶橋」「橋の名」『四の橋』『橋の名』「三の橋』『橋の名」「二の橋』『橋の名』『一の橋』『橋の名！」『……あゝ、いけねえ。」

「うまいところへ考へついて、やられたかと思つた。もう一度！――大臣、いゝか、大臣――大臣――」

「…………」

「どうしたんだ？」

「更に駄目だ」

「誰か俺に東洋史の年代を開け、東洋史の年代を！」

「よし、東洋史の年代、――年代――」

「先づ秦」「年代」「漢」「年代」「三國時代」「年代」「晉」「年代」「五胡十六國」「年代」「南北朝」「年代」「隋」「年代」「唐」「年代」「宋」「年代」「元！その他と、如何だ」

「變な奴だな」

「シカサシゴナズトつてんだ！」

「キロキロとヘクト出かけたメートルがデシに見られてセンチ、ミリ〳〵つてのを知つてるか」

「己出です已に半ば巳は身の終りまで、に似たりだ」

「驚くな！(唱ひ出す)四道將軍五七三――天皇みづから熊襲を撃つは、七四二たけるの東征は、七五七西征七七〇、トコトツトト……。ここで多分東征と西征と反對か何かなんだが忘れた。まだあるぞ！(唱ふ)たける死んだは七七三、國縣分つが七九五、神后征韓八六〇、らつ子自殺が九七二、トコトツト……」

(一同あきれる)

「中學で試驗勉強に作つたそのまゝだ、死ぬまで忘れ想もな

い……」

で、そろ〳〵此の會の大切狂言が初まるのです

「魚、鳥、木、申すゾ。エ、おい！汝、魚鳥木を申すか？」

「申す」

「――魚！」

「タイ」

「うまい、うまい。此度は俺が云ふ」

「ツム……魚鳥木を申すか」

「――申す」

「鳥！」

「トリ」

「飜譯だな、ハハ」

「おい、汝魚鳥木獸を申すか」

「獸がはいるのか？」

「はいる。はいる。魚鳥木獸を申すか」

「申す」

「木！」

「トラ！」

「なあんだ！」

こつちでは――

「さあ、考へたぞ！」

（問は八方より次第に起る）

「人か」「否」「抽象か」「否」「食へますか」「まあ、食へません、食へば食へるがね、（笑）」「固體か」「……の様だ」「流動體か」「の様でもある。――大體固體だが固體ばかりではないな」「此の室にあるか」「あるよ」「君は持つてゐるか」「持つてゐるだらう」「君ばか持つて居るのか」「いや、君もみんな持つてゐるな」「見えるか」「まあ見えないな」「いつでも見えないのか、そんなことはないね」「そのもの丶性質は――植物質かね」「さあ何だかな、（笑）動物質だらうと思ふ」「みんな持つてゐると云ふなら……形ちはふところへはいる程度ですか」「さうだよ」「入れられるかね」「入れゝばはいります」「で、流動體ですか？」「大てい少し流動體――だな」

「それがふところへはいつて外から形ちがわかるかね」「わからないな」「フム――非常に小さいものか」「非常に小さいと云へる」「醫學に關係のあるものだらう！」「ないと答へるほかないね」「では、病氣には？」「大ひに關係ある場合がある」「駿河臺にその有名な病院があるだらう。……イヤ、違ふかな」「違

ふ。眼なら見えるよ」「成程、殆んど絶對に見えないかい？」「君上を向いて御らん。かすかに見えるかも知れないな」「上を向くと見えるのか」（みんな思ひ〳〵に上を向く）「バカな奴、ハハハ……（大ひに笑ふ）」

「何だ？！」「降參かね」（見まはす）「イヤ待て。――上を向くと、つまり君に見えるのか」「さうだ、さうだ」「上を向いてくれ」「それは質問外だがまあ……」（上を向く）「ハハア、それは人體に附隨したもので、血がかたまつてフタになつた小さなものだな」「のどのニキビか？姑息なことを！もつと一般のもので、とり外し自由のものだ。」「とり外し自由？」「うむ自由だ。君などは……（云ひかけてやめる。笑ふ）」

「兎に角人體に附隨したものだね」「さうです」「人體の一部だね」「否」「何だ！不要なものか」「まあさうだ」「（はやつて）腹の中にあるか」「（哄笑）そんなものが上を向いて見えるか！」

「ふところへはいると云ふんだから逆ふよ！」

「マア待て、近づいた、近づいた。ねえ、おい、近づいたらう」「餘り近くもないが……」「（決然として）それは排泄物だね」「（がつかりする）さうだ」「鼻の中にあるね」「さうだ」「丸まるね」

「參つた〳〵」

（上を向いた男）「バカな！」鼻をかむ）

「君此度は鬼になれ、鬼に。かなり困らせたからな。困らせてやらう」

「よし」

（と、彼は室外へ出て行く。あとの一同、彼に或る商賣をふり當て、決まつたので呼び入れる）

「おいおい、もういゝ。――云ふぜ」

（で、彼に一人々々はじからヒントを與へ初める）

「君の商賣は東京に一軒しかないよ」

「變なものを考へたね、次ぎは？」

「その商賣をやつてゐると、ひと事ながら胸のすく場合もあり、亦氣の毒なこともある。いろ〳〵だ。世の中はかうしたものかと思ふね」

「本當？フム。次ぎは」

「改良半紙を澤山使つてよ」

「半紙を？――わからないな。それから」

「君の商賣はまあ今の世になければならない、中々必要なものだが、殆んど人は知らないし、存在を認めもしない位ひだ。所謂、椽の下の力持ちだな」

「で、俺は知つてゐるかね」

「知つてゐる。イヤ恐らく近頃になつて、おそらく日本中の人は一人のこらず――と云つていゝな、君の商品を、間接ながら飽きる位ひ見たな」

「フム」

「毎日見た」「――印刷屋の如しだ。(笑)」「又文士の如く、殊にドラマティストだな(笑)」「製本屋でもあるだらう(笑)」「鉛筆の化けた様なものを使つてよ(笑)」「その東京に一軒しかない君の名はアサヒナと云ふのだ……

(全くわからず、鬼は默してゐる)

「――裁判所の豫審調書を謄寫する商賣だよ！」

鬼「あゝ！　全くわからなかつた、参つた」

(鬱をさせられ想になる。と、戸外に半鐘がきこへる。三つ番。)

「火事だな？」

「近いらしいぞ」――「何所だらう」

(鬼。急いで二階へ見に行く)

「オイ、あいつうまく逃げるつもりだよ」

「ハヽヽ、――だがこんな寒い晩、燒け出されてはかなはないね。マ、こつちは大丈夫だらう」

「何かやらうぢゃないか」

「何かやらう……」

それでも三四人、つづいて二階へ見に行きましたが、火事位いではこの騒ぎはしばらく止み想にも思はれません……

蛇足――會の由來、など

私達の間にはこんな會があるのです。他愛ないものですが、無邪氣で面白い。私はその事を思ふと好意を感じる。時にはもういゝかげん會がないかな、と思ひます。たしかクロポトキンの本に、何所か高原か何かで鳥が澤山勢揃ひをして、羽ばたきをし合ひ、互ひに啼き立てゝ「遊ぶ」事がある。と云ふのを讀んだ事があります。我々の會も一の集まる意味では同じ事で、こゝに「同じ事で」と云へるのがまあ、――鳥より屢々アクの強いのが缺點で――會の奇麗な値うちでせう。それ故時には「必要」にもなる。

何をしやうと云ふのでもなく、「爲め」には何にもならないでせう。只、人と集まつて話したり遊んだりしたい、と思ふ、それは互ひに思ふ――そこに緣が起り、いつも續く集になる。仲間が寄り合つて遊ぶ。誰れ彼なく遊ぶ。雜談會とも云ふし茶話會ともいふ。「例の……」と云ふと「やらうかね」と云ふ事になつて、お互ひに一つのたのしみとなつてゐます。

想りはもう古いことです。

——私には一體きようだいが澤山あるのです。尤も腹ちがひが多いのですが、この十年ばかり、それが互ひに散つてバラ〳〵になつてゐました。本店がつぶれたので、澤山あつた支店もつぶれて、みんな四散しました。

偶々その集まつた互ひに或る者は十年目、五年目、少なくも三年目、二年目……の或る時の感じは、一種特別で、姉の前に弟は忽ち元の赤ん坊になり、又は二十歳でも十位ひの氣になる。弟の前に兄は又假令少しの違ひでも、その「違ひ」が然し弟は昔のチビのまゝ、自分だけいきなり現在まで年をとつた樣な、變な氣がする。相手は知らぬうち立派な男になり、又は妻になり、——どうもお互ひに勝手がちがつて、餘程妙な工合でした。

「……こいつがあの三田の××かな? 本鄕の△△かな? 廣小路の○○かな?」怪しげな感じもした事があります。

上を見ると「兄」も「姉」も何と不思議のない、親める、もう怒られるも段ちがひもない兄と姉だらう、懷しく感じる。と同時に下を見ると逆に壓迫を感じる。——まるで芝の家で泳げなかつた奴や、問題にしなかつた奴、あの這つてゐた赤子が、如何して堂々として今は洋服など着てゐる。世帯のはなしをしたり、中には全く顏さへ知らなかつた當時生れたての×町のお×さんが、高島田で現はれて來る、おかしいとも怪しいとも、その不思議な感じは異樣で只例外なく、第一感が終る——すぐに、彼に對して何とも言へぬ、愛情を感じた。

年よつた母側のある人などは、一人々々見る度びに淚を流す程でした。

「この寄り合ひはせめて年一度位ひ、イヤ月一度位ひなければいけない。互ひにこんなにりつぱになつてゐるのに行き交はないのはつまらない」——會を作らう、と云ふことにしました。で、出來たのが「××會」と云ふのです。××はある弟の名をとりました。それはその××がロンドンへ行くのではからず送別に何年ぶりかにみんな逢つたのが會の動機だからですが、當の××が我々の中では、家の盛んな頃——その頃は各支店から我々みんなよく行き來した——一番赤坊ともつかず、子供ともつかぬ妙な年頃で、私などは母に「××さんにかまつても頭にさはつたり倒したりしてはいけないよ。そんな事をするとあの子は腦病持だから目をまはす」と注意された。ヘンな奴だと思つて子供心に用心しながらからかつた——さう云ふコドモです。それが家がなくなつてからみんなちりぢりになつた、

この十數年の間に、何所かで成人してこれから何しろ外國へ行かうと云ふ！我々の間には一種センセーションが起つたわけです。で、さう云ふ機會がなければ、もつと逢はずにちりぢりだつたかも知れません……

身うちの集まるのが本來は主意でした。ところが身うちは不思議で、十年散つてゐても、一日集まると融けて了ふ。××會の目的は、××會の「在る」ことで既でに、遂げられました。

會は滯りなく進行しました。今の××は成程十年前の××ではなく、互ひに現在同志ぴつたりして來る。すると何もさうさうみうちの逢ふ必要は互ひになくなる。然し同時に、その時には既でに一團の人間が集まつて話し合ひ、遊び合ふ面白さ、必然さ、――「××會」より只「會」の必要が、いつとなく互ひに入用になつてゐた。殊に「我々」のうち或る者は、××會がなくともどうせ××會で友交も卍に共近してゐる。

「君、かう云ふ會が僕の家にあるのだがやつて來ないか」、ナニ、あれやあれが主だ、と氣樂に友達を誘ふことが出來ます。目的は一夕わりに少くない人間が集まつて、しやべればいゝし騷げばいゝ、「遊」べばいゝ。私は殊に好きだ。遊ぶのは面白い。いろ／＼特色のある人がゐて一團になつて遊ぶ。一度遊ぶと、或る人の姉も叔母も從兄弟も、その人の家へ出入りした大工も、隣りの人も、突然飛び入りの畫かきも、二度目には不思議でなくなる。それには只機會さへあればいゝ。遊ぶ才能や慾はみんな持ち合はす

で、彼之れ今までに十度び近くあつたでせう。その中には、會のやり方が何となく決まり、特色や面白さは素直になる。人はだん／＼に範圍が擴まる。と同時に又時によつてつぼまる。――つぼまる時にはつぼまり方の感じが變る。で、何しろいつでも十人位ひ「人」が集まる。妹の家で同胞ばかり集まることがある。（すると字義的に我々には内輪の××會で懐かしく、わるくない。）かと思ふと又は僕などの家で、畫をかく友達の寄り合へ「畫かき」の存在も何も知らない「親類」が飛び込む。（然し前からの出合ひで人同志よく知つてゐる。）どうかすると遠くの友達の家へ、「ドヤドヤ」「××會」のおしかけることがある。

自由な、何しろさう云ふ「會」のあることが、我々の間――身うちの間、友達の間――に不思議でない、且「面白い」消へない事實になりました。一××會からクラブ的一種のものになつた。

「クラブ」と云ふのは、寄り合ひを何所かしら誰かの家で、い

い様な順番にやる點です。移動クラブです。で、決めも約束も目的も名稱もかゝりも何にもない。漠としたところが、又何よりの長所だ。

いつ何所であるのかわからない。只、いつかしら何所かにある。世にもいゝかげんの工合に然しあるとなるとバタバタと成立する。成立するグループの間に用意はいつでも出來てゐる。で、二月に一度位ひ。――

「例の會を來る第×日曜に私の所でしたいと思ふが、午後×時位ひからにして。」――

夕飯を食ふから會費をいくら持つて來いとか、それだけ菓子を買つて來い、何か福引を持つて來い、競賞品を持つて來い、……など、主催者の勝手なことをかく。假裝をしたことも芝居をしたこともある。ミゼラブルの市街戰を夜中にやつてから紙を二枚、ぶちぬいたことがあります。――何しろさう云ふハガキが前觸れで、みんな仕事があるから日曜祭日にすることゝ、十日か半月前に知らすこと、そのハガキへは受取つた人は參不參と出かける自分系の人數を知らすことだけ、何となく定めになつてゐます。

――で、その寄り合ふ様を字にかくと計らず本文のやうに

露りましたが、之れを時間（事實）で云ふと（一）のはじめがA時間として、（二）の中ごろが同じ位ひ、と云ふより、人さへ揃へば、忽ちくだけていつでも（三）になるのです。その大切狂言の仕度が出來てゐる。來る、直く。誰にも。でこの（三）のおはりになつてから實は會は之れからが愈々盛んで、その盛んさは、變化極まりなく「書く」などとても！まあ大變なのです。不言實行……

ナニ、一口に云へば實は之れが恐らく會の主眼で、少くも大特色、多分正體は之れ一つで持つ會だ――だからたのしみで實に「遊ぶ會」、時々あるといゝなと思ひます。本文のうちマチメな所は半分おまけで、之れでとう／＼タネ明しまでして了ひました。呵々

鶴の國

（山口縣熊毛郡八代村、鶴の里。内務省指定、天然記念物）

黒頭巾

其一

●春には須らく鶴を語るべし。鶴に駕し、洞簫を吹いて、白日、登天するは、人間の夢想境にあらずや。

●吾輩、鶴の國を觀て、海峽の旅館に歸り、浴室に、三助と、せなかを流させつつ、鶴を語る。三助いはく、僕、本來、北九州に生る。少年時、屢、白鶴の高飛して過ぐるを望みしことあり。白、一點、碧空に映じて、梅花一片、飛んで天に上るが如くなりし。

●鶴は高飛すること千尺、白日に舞ひ上りて、恰も晴天に星を散ずるがごとし。春は、霞を超え、雲に入りて見えず。秋宵の飛鶴は、遠くより望むべし。鶴に非れば、かくの如く、高飛するを得るものなし。

●五十年前には、鶴の國、到るところに在り、梅花開くところの村、鶴來らざるはなかりし。今、鶴の國、殊に小さし。薩南の出水と、周防の八代村とに、僅に、王國を存するのみ。然れども、むかしの鶴の國は、鶴、群を爲すに至らず。今の鶴の國は、群鶴、百二三十羽に至る。恐らくは、日本人、開闢以來、未だ書中の外には、かくの如き、自然の大鶴群を見ず。

●支那にも、朝鮮にも、現在に於ては、稀に、孤鶴の飛ぶを見る。かくの如き大集群の鶴の舞ふを見ることを得ず。鶴の王國は、今や、唯だ日本に存すといふべし。

●王國の最小にして、興味の尤も多きもの、世界に三あり。羅馬法王の國、モナコの王國、及び、鶴の王國なり。

●羅馬法王の全盛時の威儀を以てすといへども、鶴の姿の、崇高、端麗なるに及ばず。モナコ王國の趣味を以てすといへども、群鶴に對して、恍惚として、忽ち羽化登仙の思をなさしむるに比す可らず。

◉仙鶴、飛び且つ鳴く。鶴の國は、無數の青山、夢の如し。鶴の國は、今世の仙境たらずんばあらざるなり。

其二

◉「鶴の巣籠」といふことは、畫家の夢想にして、事實にはあらず。但馬の國に、その事ありと傳うれども、それは鵠鳥にして鶴にはあらず。

◉鶴は高身にして、長脚、とても喬松の梢に棲むを得べきにあらず。鶴は、必らず禿山、若くは水田に棲むをつねとす。若し木梢に巣籠すれば、それは鶴にあらず。

◉天、將に曉ならんとす。旭光、漸く空を染むるとき、鶴、青山を離れて、飛んで天に上るとき、古來の畫人、未だ、その眞景を寫實せし者なし。

◉群鶴、青山より舞ひ上るとき、旭光を帶びて、影大空にひろがる。紺青の山、その舞影を逐ふて動くかと想はる。舞ひ〳〵て散ずるとき、その放線、極めて大なる輪廓を描く。

◉日本人が、尤も目馴れたる畫題は、富士山と鶴との二つにして、また此の二つほど、寫實をはなれて空想的なるものはなし。

◉畫けるとほりの鶴は、實際に、鶴の王國には發見すべからず。あれは唯だ紙の上の鶴なり。生ける鶴は、畫けるよりも、崇高にして端麗なり。一世の美人といへども、概ね畫けるが、生きたるよりも美くし。鶴ばかりは、畫くといへども、生きたるに及ばず。

◉動物園の飼鶴は、姿態ありて、意氣乏し。鶴の淸高無比なるは、その冲天の意氣ならずんばあらず。故に、鶴は、野鶴を第一とす。仙鶴といふは、野鶴のことなり。

◉今の物動園を十倍して、千羽の鶴を飼ふとも、それは鶴の王國にはあらず。鶴には官僚なし。野鶴、即ち鶴の王國を組織す、これを以て、鶴の王國は、自由の雰圍氣の中にあり。人間、五千年の文明史には、未だ鶴の王國に比すべきほどの自由國なかりし。

其三

◉鶴の國は、行き難からず。山陽線の鐵路と相去る僅に四里ばかり、俗境より、仙境に到るに、唯だ自働車の一時間に過ぎず。

◉甲斐に都留郡あり、秦の徐福の故事を傳へ、その時、此に白鶴を放ち、千年を經て、なほ存せしといへり。然れども鶴去つて、また返らず。空しく都留郡の名を留む。

◉豐後に都留氏多し。鶴に因緣あるらしく思はる。馬琴は鶴を好み、その小說に、屢々鶴を脚色す。九州の鶴といふは、鎭西

八郎の故事に附會するやも知れず。

◉馬琴の小説の中に、八幡太郎義家が、鶴の脚に、金の短冊を結びつけて放ちし白鶴、數百年を經て、發見せられしことを記せり。その鶴、未だ千年を經ざれども、所在を逸す。

◉鶴は、年々、アラスカ地方より、遠く、萬里の天を高飛して日本に來る。脚下には茫々たる大海横たはる。その翼を休ましむべき所なし。いかに健翼といふといへども、その勞、想ふべし。鶴の脚に、短冊を結びつくるは、鶴を愛する所以にあらず。

◉鶴は、その雛を携へて、萬里の飛翔をなす。雛鶴の翼、疲るるとき、母鶴は、まさに、その翼に抱きて飛ぶならん。母鶴も亦た勞するかな。その哀々の情、眞に、想像するに餘あり。

◉燒野の雉子、夜の鶴の諺あり。夜鶴の研究は、鶴の國にても未だ分明ならず。夜鶴よりも、雛を携へて、アラスカより渡來するとき、翼の力よりも愛の力なり。

◉太平記の東下り、琵琶湖畔の條に、「子を思ふかと憐れなり」の一句あり。鶴を詠ずるなり。琵琶湖畔に鶴の國なし。夜鶴の情、唯俊基朝臣の胸の中にあり。

◉文學の上には、古來、鶴の國少からず。現世の「鶴の國」は今に至つて、始めて出現す。一茶の句に、「此のような末世を櫻だらけかな」。濫りに、今を末世なりといふこと勿れ。爛熳たるは櫻ばかりにあらず。「鶴の王國」あり。「鶴の王國」は、お釋迦さまといへども、御存じなかりしところなり。

其四

◉鶴の王國は、周防、熊毛郡八代村なり。東京より特急車にて行けば、山陽線の柳井津にて下車し、普通車に乘換へ、田布施、岩田の二小驛を過ぎて、艶々しき名の島田驛に下車するを順路とす。

◉八代村は、島田驛より、自動車、僅かに一時間にして、登るを得べし。驛に沿ひて島田川あり、驛前には、東北に一帶の青山、天を劃りて、恰も南畫の一大屛風を列ねたらんが如し。自働車は、川を溯ぼり、青山を穿ち、千山萬壑を攀ぢて登る。

◉鶴の王國に登るは巴蜀の棧道を登るが如し。自働車、萬仭の斷崖を攀り登るとき、口に絶景を叫ぶ者といへども、心には戰々兢々として、顏色を失はざるはなし。

◉支那の列仙傳に鐵車仙人あり。鐵車の音、雲中に聞ゆといふ。鶴の國に登るは、鐵車仙人よりも痛快なり。滿山の紅葉、自働車に映じ、遠近の公孫樹の金葉、また人衣を染む。鐵車仙人には、此の風流なかりし。

●白露下りて鶴は來り、梅花開き盡くして鶴は歸る。殘霜、ま

だ隕ちずして、田に落穂あり、田螺、或は鰌など、水田に餌の乏しからざるとき、鶴は群居す。天、雪を飛はす頃、鶴は、散居して、また集團を作らず。故に、鶴を見るは、紅葉の頃を、最も佳しとす。

◉若し、鶴の王國より、若々しき鶴、島田驛に飛來して、仙客を乘せ、雲に翔して、その王國に運び去らば、一擧手、一投足の勞ならん。鶴を見れば、飛行機を想ふ。鶴は、飛行機として天成の藝術品ならずんばあらざるなり。

其五

◉鶴は年々、八代村に來ること、契約あるが如し。その初、二三羽の哨鶴來り、それより續いて、大集團來る。哨鶴の來るは近年、十月廿四日、その時日を違へさるを見れば、鶴の行程に規律あるを想像するに足る

◉何故に、鶴は、此村を卜して來るや。五十年前、仙鶴、遍ねく大八洲に來りしを、禁獵の令、解けてより、到る處の獵銃、悉く鶴を狙ひしを以て、鶴の來るべき地無し。唯だ此の村の人鶴を愛すること、古なほ今の如し。銃獵者の來るを見れば、或は鍬を揮つて村外に驅逐す。かくの如くにして、鶴、千年來、續いて此に集まり、漸次、その數を增し、今に至つて「萬世一系の鶴王國」を大成するに至る。

◉八代村の鶴見公園に鶴の墓あり。墓表に、鶴を畫き、その下に鶴の墓と題す。むかし村の人、溪谷に於て、傷ける鶴を發見し、伴ひ歸りて、懇ろに飼養すること五十有餘日、加療、功なく、その靈、天に歸るといふ。

◉村には、古來、未だ病鶴を見るものなし。隨つて鶴の壽を測定したるもの無し。村に鶴博士あり、無名の農夫なり、能く鶴の生活を研究すれども、未だ鶴の壽と、雌雄とを分ち易からずといふ。

◉鶴の雛は、容易に辨ずべし。その雌雄を知るは、鳥の雌雄を知るよりも難し。あらゆる鶴、悉く美なり。孔雀にも、鴛鴦にも、餘りに雌雄の別、明らかなるを以て、群鶴の壯觀に比す可らず。

◉鶴の王國には、百二三十羽の鶴あり。然れども、古來、未だ全王國の大動員令の下されたるを見ず。群鶴といへども、大數六十羽に過ぎざるべし。

◉鶴の一伍は、概ね三羽なるらし。その大數が水田に散布するとき、一伍ごとに隨意の行動をなすを認む。一伍は則ち、一家庭なるべし。鶴の一家庭は、愛の結晶にして、その大集團は則ち自治的精神の表現なり。

其六

●八代村は、鶴の王國たるのみにあらず、千禽、悉く、此に集まり、天下の禽園を成す。禽園の盟主は則ち鶴なり。此の如き廣大なる「鳥の王國」は現世に、恐らくは、唯一無二なるべし。

●動物園の中に、金網(カナアミ)を天井に張つたる大なる禽園あり、その中に鶴も、鷺も、鴛鴦も、もろ〳〵の小禽の美くしきもの雜居して、偕鳴す。百禽の羽毛の色彩が、その鳴音とともに、互に映發し、錯綜し、混揉しつつ、雜然として、聲と音樂とが、活ける藝術網を織り成すかと思ふ。八代村の印象も亦た全く此の如し。

●八代村は、動物園と異なるは、唯だ金網を張ると張らさるとにあり。無數の青山、村をめぐつて、出沒せる峯巒の形成する輪廓の線、海に於ける海岸線の、それの如く、空を劃れる山岳線の美くしさ、その美しき山岳線と、澄み切つた清淨なる雰圍氣の青天とが、此の自然の大禽園の爲に、境界を爲せり。

●但し、此の自然の境界といふは、青山は、横さまに、俗界を隔つれども、青天は、縱に、仙界を隔てず、鶴の、自由に飛び、聲、九天の上に聞ゆるを妨げず。

●鶴の王國は、那邊に於て、人生の樂園たらずんばあらず、花卉珍草、茂生して、麗禽飛びめぐる。天地、偏へに愛らしきものに充たされて、毒蛇居らず。鶴、未だ能く人家に馴るるに至らずといへども、必らずしも人を恐れず。

●アダム、イヴの樂園には、誘惑あり。八代村の樂園には、誘惑の恐るべきものあることなし。古より、山中、暦日無しといふ。此の山中に暦日なきにはあらず、花の色、鳥の音、人を醉はしめて、日月の移るを知らざらしむ。唯だ鶴の去來に、春秋を覺ゆるのみ。

●四周の山に沿ひて、雜然斜めに、邱陵、出沒し、層々たる水田、その間に展列すること、古羅馬の大劇場に於ける、雛壇の如く、[illegible]、或は柿、どんぐりなどの、眞紅の紅葉、田の畔に燃えつつあり。霜夜、明月來るとき、必ずしも姨捨山のみにあらず、田毎の月は、此の樂園にも見らるべし。秋の日の、水田は、紅葉に鶴、夜は則ち田毎の月なるぞ。

●林深にも、邱陵にも、田畝にも、村の到る處、百禽、悠々として自得す。此頃、百舌鳥の多きは言ふに及ばず。杜鵑も亦た幽谷には、翠を爲すといふ。

其七

●鶴の王國は、海拔二千尺ばかり、青山高下して、四周し、自

から天半に、別乾坤を爲す。その地の高寒なるを以て石楠木多し。鶴、歸り去るの後、春晩より石楠花、順次に咲き誇り、千渓の杜鵑、爭ひ鳴く。春より秋初に至るまで、山鶯、亂れ啼く。

◉鶴の國は、鶴居らずといへども、寂寞たらず。霜の頃、鶴の一聲に、千禽、鳴をしづむといへども、鶴居らさるときは、夏の禽鳥、悉く、得意顏して鳴く。

◉鶴の國には、儼たる憲法あり、憲法の威權、烈日の如し。例へば、異樣の音響、すべて鶴を驚かすべきものは、愼んで發せしめず。渾べて、一發の銃聲だも、此國には聞かれず。空砲銃すらもなし。花火も曾てなし。小學生徒の唱歌には、鶴、すでに馴れて驚かず。されば、此の村に、羣衆が大聲を發するは唯だ、天皇陛下の萬歲を三唱するときのみなるべし。

◉此の王國に、一たび入り來れる禽鳥は、一切、保護され、一切解放さる。鶴の餘澤なり。故に、千禽、皆、鶴を尊んで王とせさるを得ず。

◉鶴を王とし、その羽かげに、千禽、自得して、その色と音とを競ひつつあるは、譬へば、大木の蔭の花草の吹き誇るが如くなるべし。

◉近年、鶴羣の數、年々に增加するは事實なり。村に、鶴の保護會あり。餌の養殖を計るなど、鶴の食料問題を解決するに力めつつあり。その計劃、實現するの曉、鶴の王國は、いよ〱繁榮すべく、二百羽、三百羽の大羣、天空を掩ふて舞ふを見るを得るも、遠きにあらさるべし。

◉鶴の繁榮の下に、千禽、皆、繁榮す。村の太陽寺は、鶴の一名所なり。寺僧の語るところを聞けば、雉子の二三羽が、寺の庭に遊ぶを見るは珍らしからず。去年、十三羽の山鳥、寺の玄關に羣來せしことありといふ。

◉此の村に於ては、禽鳥にあらずして、官祿を食むものは、鶏あるのみなり。その他は、悉く浪人なり。されば、鶴の王國に於ては、鶏に權威なし。鶴鳴の前に、鶏を說くものあらず。

◉吾輩、水田に羣鶴の展開せるを佇望せしとき、偶、村家の雄鶏、その雌鶏を伴ひ、丹頂の髮を揮つて出で來る。遠く、羣鶴に對映して、忽ち、雄鷄の影、薄し。

◉此の自然の大禽園に、麗禽の自得しつつあるは、實に、お伽噺その儘の事實なり。鶴の國にては、涅槃會に描かれたるように、佛の前に、あらゆる禽鳥、おめず、臆せず、自由に來る。

其八

◉自働車を驅つて、山を登ること、三十分ばかりにして、斷崖盡き、兩峯、左右より迫つて、自然に關門を爲す。峠の絕頂な

り。これを佛坂といふ。これより始めて鶴の國に入る。高野山ならば女人堂を建つべきところなり。但し佛坂の名は、めでたからず、宜しく改めて。仙人坂となすべし。

◉仙人坂を過ぐれば、風物、頓に、のどかにして、雰圍氣の一變するを覺ゆ。ここより鶴の飛翔するを望むことありといふ。偶、二鳥、高く翔けるあり。鶴かと疑ひ、諦視すれば鴉なり。鶴に、あこがれて、鶴の國に來れば、飛鳥、皆、鶴と見ゆ。

◉鶴は、洋服を嫌ひ、和服を好むらしと聞く、鶴が必ずしも洋服を知らざるにはあらず。銃獵者が悉く洋裝なればなるべし。此日、吾輩、羽織、袴に、懷手して、ステツキをも携へず。

◉仙人阪を過ぐるの後、吾輩、葉卷をケースに納め、鐵車の音を緩め、徐行して下る。烟草の火は、鶴をして、火繩を聯想せしめんことを恐るるなり。吾が一行、すべて鞭聲肅々として河を渡るの慨を以て、鶴の所在を偵察す。

◉鶴は、煙草の火をも嫌ふと聞く。此の村に、禁烟を勵行せしめんは、さまで難事にあらず。徐行、五六町にして、路傍に、道普請の農夫の一群、立てり。その中に、鶴博士あり。吾輩、識らずして過ぐ。譬へば桓溫が王猛を失するが如し。面前に英雄ありて知らざるなり。

◉吾輩、竊かに發見の光榮者たらんことを冀ふ。恐らくは、一行悉く、同じ心なりしならん。さすがに嚮導なり。一洞居士、第一聲を放つ。かしこに三羽ありといふ、熟視すれども分らず。車奔り、邱回ぐつて、千歳屋の前に至る。忽ち前面に、大集團の群鶴、畫けるように出現す。先きの三羽は、その右方の水田に立てり。

其九

◉偶、橋本關雪の畫譜を閲するに、老松の絶頂に巣へる鶴は暫らく措いて言はず。平地に踏張つて、立てる鶴の姿勢、その足元、殊に不自然にして、恰も力士の力足のように見ゆ。鶴の立てるは、かくの如く窮屈ならず。

◉舊套を墨守したる狩野派の鶴は、それまでのものとするの外なし。鶴の國に來て、鶴を見れば、唯だ狩野芳崖の鶴ばかりは自然の野鶴なることを、切に思ふ。芳崖の畫きし鶴を、鶴ならずとして、依頼者が受取らざりしといふ奇談は、却つて、彼の寫實を證明すべきものなるべし。

◉芳崖の壯年時、未だ鶴の圖なし。芳崖は、その郷里の郊外に來る野鶴を寫生せんが爲に、辨當を携へ、農家の屋上などに登り、時を惜まず、熱心に、觀察したりといふ。

◉芳崖が、野鶴を觀察したるに遠距離よりしたることは明らか

なり。今の鶴の國にては、鶴、甚だしく人を恐れざるが故に、畫家は、十分に、鶴を寫生することを得べし。若し鶴の國の保護會の計畫が進展したらんには、十年ならずして、鶴、人に馴れること、春日野の鹿ぐらゐにはなるべし。されば、仙人、鶴を伴ふの圖も、必ずしも空想たらざるに至らん。

◉白雲紅樹の青山を背景として、斜に、段落をなせる水田の中に、五六十羽の鶴の群が展開せるを、正面、わづかに一町ばかりの距離より、見上げるときの、雄々しく、端麗、崇厳なる光景は、吾輩をして、暫らく我を忘れて見入らしめたり。

◉吾輩は、同行の一天九地翁に導かれ、田間の小畦を、靜かに辿りて鶴に近づく。翁は、丈高く、洋服を著くるを以て、小心翼々として行く。溪畔の紅葉樹下に到り、横さまに群鶴を見る。近き三羽の小群は、意に介せざるものの如く、餌を漁さりつつあり、遠き大群は、稍、その容を改む。二三羽、低く鳴いて、群中、それに應じて鳴く。群の半ばは、從容として元の如く餌を求め、半ばは首を擧げ吾等を諦視す。

◉鶴群には、必らず導者あり、全群、皆、餌を求むるときも、一羽は、四方を觀望し、時々、澄みて低き聲を發す。聲、急なれば全羣、皆、姿を整ふといふ。吾輩、鶴群の意、改まるを見て、踵を回らして歸り去る。村長、助役、急ぎ來り、更に吾輩を勸めて、鶴に回り近かしむ。

◉吾輩、鶴群の飛び去らんことを恐る、助役行いはく、仙鶴一去、間もなく、復た歸來すべしと。吾輩、乃ち意を強うして、鶴群に近づく、三十歩のうちに迫る。

其十

◉村をめぐつて皆、青山なり。此日、秋天、晴れて暖かなれども、村をめぐつて白雲あり。白雲は、山の後より盛り上がつて嶺上、更に遠く奇峰を重ぬること、信州より千山を超えて、アルプスを望むが如し。時に、二三羽の飛鶴あり、聲、雲に映じて、瀏喨として聞ゆれども、姿は青山に染まりて見えず。

◉群鶴、未だ起たず、意、先づ改まる。鳴聲、恰も鐵騎の突出するが如く、一鶴より響き、聲々、急に、鶴、鶴に響き、極めて急なる交響樂の一刹那を演出す。一音、一音に應じて、鶴、鳴き且つ、首を擧ぐ、大舞臺のイルミネーションの華燈、一列に〱順次、畳み掛けて點光し畢つて、大天井の下、悉く光輝なるの氣分あり。五六十羽の野鶴、悉く首を擧げ、姿勢を正して昂然として動かず。

◉白雲を天幕とし、紅葉青山を舞臺として、天界の雄士、五六十羽。その仙衣を整へ、胸を張り、威儀を正して、一齊に、正

面に注目したる光景は、如何に、荘嚴を極めたる大觀兵式の威儀も厭倒さるべく見ゆ。

◉此の時、神秘の交響樂、すでに終はるや、終はらざるや、餘韻、雲に殘りて、鶴、皆、鳴かず。限り無き森嚴と、緊張の絕頂とに達したる一瞬間、「沈默の夢の森」忽然として揚がる。精練されたる兵士の一隊が、行進を始めんとして、上半身を前に乘り出す一刹那の如く、無聲の號令の下に、群鶴、一樣に、胸を出し、翼を張ると見ゆるや、憂然として長鳴し、百二三十の雄々しき翼の、羽ばたきの、入り亂れたる音に、戞々たる急鳴を交へて、思ひ掛なき交響樂を奏しつつ、大空に向つて舞ひ上る。かくの如き交響樂、人間、未だ夢想せず。

◉無數の月卿、雲客、その羽衣を飜へし、天成の長き肉笛より迸る聲樂の、美しき急調子につれて、算を亂して、大空に舞ひ舞ふてひろがる。天に諧けるような舞踏の群は、ひろがりたる儘に散らず、入り亂れつつ、水平的に、群れて行き、舞ひ上り舞ひ下り、或は沈んで低く村落の森を過り、或は高く登りて白雲を超えて、青天に浮び出づ。

◉天界の秋興、酣なる ん、大輪廓を描いて、大空を舞ひあるきたる群鶴は、興盡くるところを知らざるべし、森を超え、邱を超え、鳴聲を地上に送りつつ、その舞ふて行きしところに見ず。吾輩は、天上の舞踏を見たり、此の時、夢にはあらず。

其十一

◉吾輩の一行は、澗道を攀ぢて、太陽寺に至る。老僧、爲めに鶴の國の春秋を語る。盃を擧げて、今日の歡會を祝ふ。後庭に、巖間、小泉湧いて古池に注ぐ、雷水といふ、五百年來、未だ、その旱するを見ず。酒と鶴と、人をして陶々然たらしめ、千年の壽符、恍として掌中に在るを覺ゆ。

◉老僧は大轉と名つく、その名、奇にして、人も亦た奇なり、酒前、巧みに歌舞す、本堂に到れば、十數枚の戒名を貼出す。その第一に、温良院鶴仙妙艶大姉と書す。鶴の國に生れし鶴のような美女なりしならん。

◉寺は、日色、青苔に冷やかなり。妍雅なる一室あり。以て、想を練るべく、以て毫を揮ふべし。老僧、頻りに吾輩を勸め、一宿して旭陽の鶴を見よといふ。日つ寺の故事を說く。

◉五百年前、雷、此の寺に落つ。化して男となりて、和尚の前に跪づく、薪水の勞を執ること七年有半にして、静かに天に歸る、青天に霹靂聞ゆ。雷水は雷公の穿つところなり。吾輩、乃ち老僧の爲に、馴雷の二大字を題して去る。鶴の國のお伽噺には雷鳴を聽かず。

●吾輩、夕陽に、畫中の寺を下る。林間を出るとき、天空に鶴鳴を聞く。三羽の仙客、鳴いて飛過し、吾が行を送るに似たり。先きに見たる『天上の大舞踏』も忽ち夢のように眼中に浮ぶ。

八代村の鶴は鍋鶴なり、長頸、白くして、羽翼は灰黒なり、日本の鶴の國には丹頂なし。

大正十年十二月十三日黒頭巾再記

新井白石とヨワン・シローテ

法學博士　吉野作造

(一)

九州の南端大隅國馭謨郡の海上に屋久島といふがある。種子島のそのまた西南にあたる小さな離れ島だ。此處に阿波の國から年々漁夫が出稼に來る。併し之は今の話ではない。約二百年も前の昔の事を云はうとしてゐるのである。

時は寶永五年(西暦一七〇八年)八月二十八日、屋久島の西南岸の栗生村に屯せる阿波國久保浦の漁夫七人小舟をうかべて同き島の湯泊といふ村の沖に出たが、陸より三里許り隔てたらんと思はるゝ海上に突如目なれぬ一隻の大きなる船を見つけた。薄氣味わるく思ひつゝ急ぎ栗生村をさして歸るに、彼の大きな船よりもまた小艇を下して此方の舟を追うて來る。此方が急げば彼方もいそぎ、やがて双方の距離十間ばかりとなつた。能く見ると、彼の舟には異樣の者十人斗り乘て居る。其中の一人頻りに水を乞ふ樣をするので、此方では手を振つて應ぜられぬ旨の樣子をすると、彼の舟はおとなしく其儘親船の方へ歸つて往つた。此の同じ日の夕、同島の東南にあたる尾野間といふ村でもはるかの沖合を『帆の數多き船の小舟を引きたるが一隻東をさして走る』(白石著西洋紀聞より取る、以下皆同じ、此書のことは後に説く)のを見たといふ。其翌二十九日の朝にも湯泊村の沖合にきのふ見たやうな大きな船を見たけれども、北風强く船足早くして晝頃に至つては全く帆影も見へなくなつたといふことである。

さて此の二十九日の朝のことだ。戀泊村の百姓藤兵衛といふ

男、炭焼かんとて松下(マツシタ)といふ處に木を伐りに行くと、後の方に不圖人の聲するを耳にした。見ると『刀帯たるもの丶手して招ぐ一人あり。』何やら物言ふが薩張り分らない。水が欲しいと云ふ様だから兎に角器に水汲んでさし置くと、近いて呑み、復手招をしたが、刀を帯びてゐるから近づかぬ。彼も之に氣がついたと見へてやがて刀を鞘ごと脱いて差し出したから安心して近寄つて見る。黄金を一つ呉れたが、能く考へて観ると、昨日見た船から上つた異國の人らしく思はれたので、後日の掛り合を恐れて金も刀も打つ放つて磯の方に逃げて來た。不思議なるは船も見へねば外に人の居る様子もない事だ。怪みつ丶村に歸つて人々に此事を告げ知らしたのであつた。

丁度そこへ平田(ヒラタ)村の五次右衛門と喜兵衛といふ二人が通り掛つた。之を誘つてまた松下へ往つて見ると、異形の男はまだ居る。纎油の方を指して其處へ往きたいと云ふ様子をするから、二三人で彼を勞はりつ丶藤兵衛の家に入る。食べ物をもやつた。又金を呉れたが藤兵衛は取らなかつた。『その物いひ聞きわきまふべからざれども、其形は我國の人也「日本人らしくさかやきあり、且身には木綿の淺黄色なるを碁盤のすじの如くに染なしたるに、四目結の紋あるに茶色いうらつけたるを着て「二尺四寸餘の一刀を腰にたばさんで居る。此事やがて近村の大評判になつた。

「島を守れるもの」の指圖で北岸に當る宮之浦(ミヤノウラ)といふ町に拘禁所が作られた。暫く彼をこ丶に留めて薩摩侯の指揮を待つて居る。薩州の家人等は亦連署して九月十三日其事を長崎の奉行所に告げた。長崎からはいそぎ當方に送り越せと云つてやつたので、『かくて冬も末に至りぬれば、北風吹つゞき海の上波あらければ、彼ものを送致す船二度まで風に吹もどされぬ。之を迎うる薩州のものつとめて風波を押し凌ぎ、辛うじて大隅の國に至り、夫より又長崎に送り致す』ことになつた。彼は頻りに直に江戸に赴かんことを乞ひ、長崎は其の甚だ厭ふ所らしかつたけれども、其望に任すべきに非ず、兎に角長崎に迎へ入れて獄舎に繋いだのである。

之より先き宮之浦に留め置く間薩州の役人も一ト通り此者を調べて見た。言葉が通じないので一向要領を得ぬ。夫れでも時々日本、江戸、長崎などの語を發する。紙をのべて所々に圖(まる)を書き、ロウマ、ナンバン、ロクソンなどと指稱し、特にロウマといひし時には其身を指さしたと云ふ。之等の事ども先づ以て薩州から長崎に報告して來た。之で雜馬の人間だといふ像想は始めからついたらしい。

さて長崎では早速阿蘭陀の通事(即ち通譯)ともに命じて彼の

來山を調べしめたが、地名などは聞き及んで居るが其餘の事は皆目分らぬと云ふ。兎に角阿蘭陀人によりて調べて貰ふの外は無いのだが、彼の男は何でも蘭人を深く憎んでゐるらしい(是れ宗敎上の爭の爲めである。)『其人して問はんことも然るべからず』とて、障子を隔てゝ聞かしむる　結局分らないと云ふ。まして半ば日本語も混つてゐるので猶ほ聞き分けにくいと云ふ譯だ。幸にして彼男何とかして自分の意思を傳へんものと焦つてゐる樣子なので、阿蘭陀人に通譯を賴まうかと云へば夫れ宜からんと早速贊成したので、和蘭の甲必丹(カピタン)(卽ち貿易事務官)に賴み、羅馬地方のことば學習ひし某といふを召して通譯させることになる。某は昔拉丁語を六年ばがりも習つたので之にて意思を通じ合はうといふのである。併し其後中絶してゐたので大方忘れたが、分らぬは色々に敎へて貰ひ、隨分骨折つてやつと事を解したと云ふ事だ。斯くして漸く彼の何者たりや、又何の爲に日本に來りしやのあらましが分り、之がやがてまた奉行から江戸表へ注進されたのである。

そこでまづ此の異國人の素姓を一ト通り述べて置く。彼はヨワン・シローテと云ひ、羅馬パライルモの人、法王の命を奉じはる／＼布敎の爲に來た宣敎師である。命を受けてから日本の風俗や日本の言葉を學び、千辛萬苦を經て呂宋に渡り、玆處にて更に日本語を學び日本の衣物や刀を買ひ整ひ、佛國の商船に便乘して屋久島に上げて貰つたのである。直に江戸に赴かんと乞うたのは、手つ取り早く中央政府にゆき、多年の誤解を釋明して布敎傳道の許可を得んと欲したからである。

ヨワン・シローテは長崎の獄舍にあること約一年、寶永六年晩秋江戸に召され、例規によつて小石川切支丹屋敷に幽せられた。こゝで彼は新井白石の訊問を受くることゝなるのである。

先是寶永五年の十二月六日、新井白石は西丸に伺候して此話を聞いた。西丸は云ふまでもなく將軍家の世嗣の館である。永く不遇であつた白石は師木下順菴の推擧に依つて甲府侯綱豐の侍講となつたが開運の始まり、やがて綱豐が將軍家の世繼と定つたので彼もまた次代將軍の先生となりすました。十二月六日西邸に伺候して此話を承り、其時いろ／＼意見を申上げたのが緣となつて、翌年冬遂に彼と此異國人との問答となるのである。而して白石の書き遺した采覽異言と西洋紀聞とは實に此對話から生れたもので、私の此一篇は實は西洋紀聞を讀んで感じた所を後日のために書きとゞめたものに過ぎぬ。

(二)

新井白石が德川時代に於て最も早く洋外の事情を硏究紹介し

た一人であるとは人の知る所である。西洋事物の攻究は八代將軍吉宗から段々盛になる。彼が青木昆陽等に蘭學の學習を命じたのが西洋文化の我國に導き入れられた始りだとは普通に解されて居る所だ。吉宗以前は鎖國排外の空氣が濃厚で中々洋學の喰ひ込むべき隙は無かつたのである。而して斯の時代に於て若し西洋の風に邦人が少しでも觸れ得る處ありとせば、其は唯二つあるのであつた。一つは長崎の出島で、も一つは江戸小石川の切支丹屋敷である。出島は卽ち和蘭屋敷で玆處に出入する者の自ら西洋の珍談異聞に耳目を肥した事は言ふまでもない。若し夫れ江戸の切支丹屋敷に至ては、時々拘禁さるゝ異人に由て亦役人が西洋の事物を聞いたのである。役人が――否幕府が――如何に之等の人々を通して西洋の事情を知らんとするに熱心であつたかは、異人の邪教を棄てたと稱する者に姓を賜ひ妻を配し扶持を與へて此屋敷内に餘生を送らしめたことに依ても分る。而して白石の西洋に關する二三の著述は實にこの切支丹屋敷より生れた傑作の一つで、此點に於て長崎の西川如見の述作に對比すべきものである。白石は實に前段に掲げた異人を切支丹屋敷に訊問して夫の采覽異言や西洋紀聞やを作つたのである。

西川如見の西洋に關する著作には增補華夷通商考五卷がある。其外長崎夜話草とか其他の隨筆類にもちよい／＼見聞が書きとめられてあるが、併し彼の主たる貢献は天文曆象の方面に在るので、地理風俗の方は左程優れては居ない樣だ。此點に於ては白石の方が遙に彼を凌いで居る。正德三年（西曆一七一三年）三月將軍に上つた采覽異言は、あの當時の地理書としては先づ申分なきものと謂つてもよからう。併し私は別の意味に於て采覽異言よりも西洋紀聞の方に寧ろ多大の興味を感ずるものである。何となれば此本の中に實に白石の偉人が最も鮮かに現されて居るからである。

白石は將軍の命により切支丹屋敷に異人を訊ね、其聽き得たる所を錄して采覽異言五卷を作つたのだが、其外尚ほ他日の備忘として其訊問の顚末を事細かに認めて置いた。之が卽ち西洋紀聞である。奧書に正德五年二月の日附があるから、采覽異言よりも二年遅れてゐる譯だが、併し孰れを早く書いたのかよくは分らない。只西洋紀聞の方は久しく秘本として世間に知られなかつた。其中に天主教の事を詳細に述べてあるといふが深世の耳目から嚴に秘められてあつた重大原因であらう。幕府時代には、讃めたのにしろ毀つたのにしろ、耶蘇教の事を書くのはすべて八釜しい國禁であつたのである。之を大槻文彦先生が發見して、白石自筆の一本により箕作秋坪先生と共校で上木したのが明治十五年である。卽ち著作後百六十餘年にして始めて世

の中に出た譯である。

白石自筆の原本は上中下の三巻より成つて居る。大槻先生の緒言を其まゝ引用するに、上巻は『奉行所にて羅馬人召對訊問の事を記す。その記事の簡明晰詳悉にして曲寫自なる筆鋒在はその場のありさまを今眼のあたりに見するが如し。誠に和文叙事體の絶妙なるもの』である。中巻は『羅馬人の言ひし海外諸國の地理歴史などを記せるものにして多く采覽異言等の原稿なり。』下巻は『羅馬人と問答せる雜話をしるし、末にその述べし天主教の大意をあげ、之につきて逐次に其妄を辨駁す。』而して其間に對手の羅馬人の異常の明哲なりしことや、流石白石だけに相當に之を認め、時に又大に其意氣德行に感激せし有様やなどが見へて、我々に限りなき興味と教訓とを與ふるものがある。かくして私はこの一部の西洋紀聞を以て德川時代に於ける西洋關係の文獻中最も卓越せるものと斷定するに躊躇しないものである。

猶大槻先生の校訂出版に係る西洋紀聞は二冊となつて居り、第一冊は原書の上中二巻を收め、第二冊には下巻に續いて、附錄として別に白石の上れる羅馬人處置獻議と天主教大意との二編の外、長崎奉行より江戸に注進せる羅馬人欵狀、異國人致所持候大袋之內諸色之覺、其他掛り合諸人取調報告書等を添へて居る。皆西洋紀聞を理解する上に非常に助けとなる珍資料である。

(三)

『かくて彼人は法にまかせて刑せらるべしなど聞えしほどに其年も暮て、』明くれば六年、一月には將軍綱吉薨去の事あり、四月家宣に將軍宣下の沙汰ありて異國人の噂はしばらく打絶へて居たのに、十一月の初に至て彼人『近き程にこゝに來るべし。其事の由を尋問ふべきもの也と仰下さる。長崎奉行所注進の狀の寫も賜つた。長崎では能く判らなかつたからお前一つ調べて見よといふ譯たのである。

一體白石の特に命を受くるに至つたのは、去年十二月西邸何候の際いろ〳〵長崎に於ける調査の模樣を聞き、能く判らぬとは心得ぬと評したことに因むのである。白石の考では(一)西洋の人は元來よく萬國の言葉に通じ、昔南蠻人の我國に來るや數日にして我が國語を解し　といふ話も聞く、(二)加之、法禁以來邦人の信徒にして難を西洋に避けし者も不尠而して(三)我國に求むる所ありて非常の難儀を事ともせずわざ〳〵渡來する程のものいかでか我が言葉に通じ居らぬ道理あるべき、(四)但し日本語と云つても地方の訛りもあれば又昔と今と云ひ方の違ひ

と云ふこともある、彼人の習ひしは如何なる日本語なりや、之等の事を明にせる者を以て應對せしめなば、いかむぞ其事のわきまへぬ事あらんと云ふのである。斯んな事を申し上げたのが緣となつてさてこそ彼が今度あらためて調査の大命を蒙つたのである。

召命を受けて異人の長崎を發足したのは寶永六年の九月二十五日である。彼の言葉に慣れた通事三人（内一名大通事、二名は稽古通事）が奉行の命によつて隨行した。途中乘物の外を見ることの出來ぬ樣警護の嚴しかつたことは勿論である。而して十一月の中ば漸く江戶に着き、直に切支丹屋敷に入つたのである。

切支丹屋敷正式に云へば切支丹御用屋敷俗に山屋敷といつたなど云ふ事は先刻御承知の事であらう。宗門奉行を兼ねた井上筑後守政重の下屋敷であつたのを其儘宗門特別の獄舍としたのが正保三年（一六四六年）である。主として外國宣敎師の禁を犯して來る者や、邦人にして信仰の疑ある者を拘禁する所なのだ。信者ときまれば殺して仕舞ふ。外國人と雖も所刑するに遠慮はせぬが、中には心を改め宗門を棄てたといふ者がある。そんなのは殺すも不憫だといふので此屋敷内に幽閉して置くのである。此種の異人は、信心の疑ある邦人と共に、萬一を恐れてみた外部とは絕對に交涉させぬ。丸で傳染病のバチルスの樣な取扱を受けて居つた。

猶之もくど／＼しく云ふの必要もない事だが、島原の戰後も外國宣敎師の渡來は久しく絕へなかつた。當時の西洋の宗敎界の事を少しでも知つて居る者に取つては、禁ずれば禁ずる程傳道の熱を昂めたことは容易に肯れる事だ。而して幕府では、法禁を犯して潜つて來る者中々熄まぬのに益々業を煮やし、取締の手段は愈々辛辣を極める。白石自身の記す所に據れば、外國の敎師にして布敎の素志を棄てざる者『凡そ百餘人まで誅せられたり。彼國の師たすけおかれしもの某が聞及し所わづかに五人歟』とある。而して今問題となつて居るヨワン・シローテは此種の冒險的宣敎師の最後の渡來者である。

記錄によると、外國の敎師に對しても隨分殘酷な方法で一旦は改宗を迫つたと云ふ。神の名のために窘めらるゝは福なりと云つた風に、殉敎的精神に富んで居た此の時代のことゝて、多くは甘じて此迫害に堪へた。此點は邦人信徒も同樣であつた。この命をも惜まぬといふところに政府は非常な駭きと疑とを深めたことも序ながら記しておく。併し偶には苦痛に堪へずして我を折つた者もある。之れが所謂正ニ歸シテ宗門ヲ棄テたといふ者であるが、之がマカオやルスン邊に聞へると彼地の信徒敎

師間に又非常な憤激を喚起したのである。爲にまた事情探檢の目的で一隊の人數を派遣するといふ様なことも屢々あつた。而して此種の正歸の人として永く切支丹屋敷内に存へた者の中有名なのは岡本三右エ門黒川壽庵の兩名である。前者はヨセフ・キアラ、後者はフランシスコ・ジユアンといふ、共に伊太利の人、寛永の末年漂流し江戸に幽せられたが、所謂正に歸し邦俗に改めて姓名を賜れるのみならず、若干の俸給をさへ貰つて宗門に關する幕府の顧問となつたのである。殊に前者は耶蘇宗門の内情を詳細に白狀せしとて大に感賞に與つたといふ。妻も與へられて八十四歳まで存らへた。即ち四十餘年間切支丹屋敷に閉ぢこもつて居たのである。

白石の往つた頃には此種の外人はもう外には居なかつたが、邦人で斯ういふのが居た。曾て宗徒として罪せらた者の子、白らは信徒でないが幼時より教法に接して居たからといふので獄門の外へ出されず、丁度また同じ様な境遇の女も居つたので、年頃になり之を夫婦となし雜役に使つて居た老年の夫婦者長助おはるといふが居たといふ。親が信者であつたといふので終生世の中へ出されぬとは随分迷惑の話だが、亦以て幕府時代の對耶蘇教政策の一斑が想像されよう。

ヨワン・シローテは即ち十一月の中ばからこの切支丹屋敷の獄舍の主人公となつたのである。

因に云ふ切支丹屋敷は其後宗徒跡を絶ち入獄する者なしといふので、寛政四年(一七五一年)九月十七日を以て廢された。

(四)

之より白石の訊問の模樣を見やう。主として西洋紀聞の上卷の記事による。白石は奉行所から教法に關する参考書三部を借りて先づ準備的研究を遂げた。どんな本か名を書いて居ぬが、岡本黒川等の手引で奉行所の作つた契利斯督記や本妖餘錄の類であつたらう。かくて愈々初度の對面をしたのは十一月の二十二日である。

彼は前日奉行の人々と打合を遂げ、二十二日朝十時頃山屋敷へ出向いたのである。先づ第一着に攜帶品を點檢した。中に我國新鑄の錢貨や我が南部織出の朱印ある白布を以て作れる法衣が特に目についた。夫から通事を呼んで申渡すやう。法禁年久しい事だから教師の言葉に通ぜぬは尤もながら、阿蘭陀羅馬『同じく歐羅巴の地にありて相さる事の近きは長崎陸奥相さるの遠きがごとくにはあらず』さら、蘭語を以て推測して其七八は通ずるだらう、但し普通に公けの事は、確と分らぬことを推測して述ぶるは宜しからざるの例なれど、今日の事は予一個の用と

心得て、能く分らぬ所ありとも十分推測してかうもあらんかと思ふ所を腹藏なく申せ、自分も其積りで聞くから、通譯に誤ありたりとて咎むる事はないと、懇ろに告げた。斯くて正午過ぎにいよ〳〵彼の異國人を呼び出すことになつた。

時に白石は五十を過ぐる三歳年に申分はない。シローテは四十一歳と云ふから丁度いゝ取組みだ。シローテは今まで隨分苛い生活を忍んで來たと見へて疲勞甚しく步行に堪へず、二人の步卒の助をかりて漸く庭上に至りしつらえた椅子につく。人々に向つて一々拜禮するので、其行儀のいゝのが先づ白石の注目をひいたらしい。奉行先づ通事をして、寒さうだから衣をやらうと申したのに取らぬ。一つには異教の人より濫に施を受く可らずとの教戒にもよるが、食べ物まで頂いて國恩を荷ふこと既に重いのに此上衣服の物まで頂戴しては冥加に盡くるといふたのである。夫から白石自身訊問することゝなるが、彼は萬國地圖を携へ行き、之に依つて西洋の事情を尋ねたのである。案外に意思が通じたが、只彼の發する日本語の聽け分けにくきは勿論、彼の土言の發音はまた通事にもよく解し兼ねたこともありて、相應に骨が折れたといふて居る。而して白石携帶の地圖は日本製にて甚だ不完全だといふので、奉行所に別に古き地圖ありときゝ、其圖を出す樣頼みおき、他日を期して一應引き取ることにした。夫れでも彼れ是れ二時間ばかり問答したのである。

此時彼の異人通事を通して一つの御願があると申し出した。曰く『某こゝに來りし事は、我教を傳へまいらせていかにも此土の人をも利し世をも濟はむといふにあり。それに某が來りしより、人々をはじめて多くの人をわづらはし候事誠に本意にあらず。こゝに來りしのち、年すでに暮むとし天また寒く雪もほとなく來らむとす。これにありあふ御侍を初て、人々日夜のさかひもなく某を守り居給ふを見るに忍びず。かく守り居給ふは某もしやにげさる事もありなむがためにぞ候らむ。萬里の風波を凌ぎ來りしもいかにもして此土に參りて國命を達せむがために候に、ねがひのまゝに此所には來りぬ。此所を去りて又いづれのかたにかのがれ候べき。たとひ又某こゝをにげさるとも、此國の人にも似ざらむものゝいづれのかたに身を一日もよせ候事のかなひ候べき。されど仰によりて守らせ給はむ上は其守怠り給ふべき事然るべからず。實はいかにも候へかし。夜る〳〵は手かし足かしをも入られて獄中につなぎ置れ、人々をば夜を心やすくゐねられ候やうに、よきに申して給ふべし』と。赤誠表に現れたものと見へて奉行の人々も感激したとある。此教僧の凡庸の人に非るは推しはからるゝが、之に對する白石の處置が

また面白い。彼はいきなり『此ものはおもふにも似ぬいつはりものかな』と云ひ放つた。すると教僧眞に殘念なといふ面持ちして、『すべて人のまことなきほどの恥辱は候はず。まして妄語の事に至ては我法の大戒に候ものを。某、事の情をわきまへしより此かた、つゐに一言のいつはり申したる事は候はず。殿にはいかにかゝる事をば仰候ぞや』と逆襲して來た。そこで白石は、此の寒空に其方を守り居るが見るに堪へずとての申條が眞ならば、公けの仰を受けて其方を守る奉行の方々が其方に事なかれかしと思やり給うて衣給らんと宣ふを有り難く御うけせざるは何故ぞ。奉行の心を安んぜんとせぬ程の者に、何條警護の侍を思ひやる誠があらうぞといふ。すると彼大に恥ぢ入つた氣色にて恐入りました、いかにも衣給りて御心に添うべしとて、さて又續いて『同じき御恩に候へども、ねがはくは給らむもの絹紬の類は某が心なほやすかるべからず、たゞ木綿の類を以て製し給り候やうにたのみまいらすゝ樣』と、云ひ足したとある。白石が大官としての封建的權威を何處までも立てゝ小恩を施すところ聊氣障な氣もするが、兩雄の魂の期せずして早くすでに融會するものありし樣、讀んで行くと中々云ひ難い味ひがある。

白石が彼と應對したのは、その時を初回として前後四度ある。二十三日は夜通事を私邸に召して種々の疑問を話し合ひ、一日隔てゝ二十五日に二度目の訪問を試みた。今度は奉行所の地圖によつて朝の十時過から午後の二時過まで四時間あまり熱心に訊問した。丁度此圖は七十餘年前西洋で出來た今は彼國でも得易からぬものだと云ふので彼も喜んで親切に問に答へた。『事明らかにして異聞ども多かりき』とある。訊問後白石は案內されて獄中の有樣を見物する。此時に先きに述べた長助夫婦を見たのである。シローテの獄中生活を書いた白石の筆がまた面白い。『大きなる獄を厚板にて隔てゝ三つとなし、その西の一間に置く也。赤き紙を剪て十字を作りて西の壁にをしてその下にて法師の誦經するやうにその教の經文を暗誦して居けり。』今地を換へて彼の身になつて見るに、萬里の波濤を超へて見も知らぬ異境に渡り、幾人も幾人も先輩の刑殺されたを萬々承知の上で、自分も獄に繫れて明日をも知らぬ身の上ながら、人を怨まず天を呪はず、泰然として神に事へて居る樣、想ひやるだに悲壯の極みである。彼は決して尋常一樣の宣教師でなかつたに相違ない。

因に云ふ。シローテは斯くて獄に繫がるゝこと六年、正德五年(一七一五年)十月二十一日の夜半、病むこと僅か數日にして死んだ。年四十七歲といふ。而して其間に於ける彼の獄中生活の有樣は、『奉行の人々のいひしは、彼人日々に食ふ所の物、定れる限等あり。初め長崎に至りし日よりこゝに來るに及びてすこ

じも相變せず』とか、『またこゝに來りしより、つねに浴せし事もあらず。されど垢つきけがれし事もあらず』とかの白石の筆に依つても略々想像されるが、應對の時其行儀の正しきには流石の白石も大に感服せしと見へ、『其人庭上の榻につくに、先づ手を拱して一拜して榻につき、右の大指を以て額にあたりて畫する事ありてのちに目を瞑して座す。座する事久しけれども、たゞ泥塑の像のごくにして動く事なく、奉行の人々また某の座をたつ事あれば必ず起ちて拜して座す。還り來りて座につくを見ても必ず起ちて拜して座す。此儀日々にかはらず』と賞めて居る。斯の如きは決して文明人を以て野蠻人に臨むなど思ひあがれるなどの態度ではない。ある時奉行のくさめせしを見、通事をして『天寒し衣をかさねらるべき歟』と注意せしめ、『通事等ラテンの語を通じて訛れるをば、打返し／＼をしへいひて、習得れば大に贊美す』るなど、天命に安じて居る人でなくては出來ない事だ。斯んな風であつたから、自然周圍の人にも感化が及ばずして已まなかつたと見へ、夫の長助夫婦は遂に彼の許に洗禮を受くるに至つた。白石の記す所に依れば、正德四年の冬に至て彼等夫婦の者突如自首して出たといふ。昔私共の事へし主人も密かに私共に教法を授けしも、國の大禁なれば之に從はなかつた。今度來た異人の『我法のために身をかへり見ず、萬里にしてこゝに來り、』とらはれ居候を見て』始めて大に感激する所あり遂に『彼人に受戒して其徒と罷成り候ひぬ。』而かも之をかくすは國恩に背くに似たれば、こゝにいさぎよく白狀申す。法に從つて如何樣にも御處分あらんことを乞ふといふのである。其態度の雄々しさ、まことに懦夫をして倘起たしむるものがあるではないか。之に依て觀てもシローテの人物の程が想ひやらるゝであらう。翌年三月和蘭人の朝貢を待ち、其通事をして、約に違ひて密々夫婦の者に戒を授けし罪を詰らしむるに及び『其貢情敗れ露はれて大音をあげてのゝしりよばゝり、彼夫婦のものゝ名をよびて、其信を固くして死に至て志を變ずまじき由をすゝむる事日夜に絕えず』とあるが、之だけは白石の觀方に多少の誤りがあるやうだ。今日我々の頭で觀れば、寧しろ之は彼の最後まで教法に忠實であつたことを明かにするものである。要するに、教法のことは後にも述ぶるが如く白石には十分に理解が出來なかつた。けれども人物鑑識の一事に至ては、何等の偏見に迷はさるゝことなく、有りの儘に之を觀て彼の心中私に畏敬の念を抱いたやうである。こゝに我々は亦白石の見識に服すべき所以を認むるのである。

　さて三度目に往つたのは三十日である。此時は奉行は立合はなかつた。此日は專ら前回に尋ね問ひし事の猶ほ疑しきを繹

り返しゝに過ぎぬ。相手はしきりに『こゝに來れる由』又『其教の旨』を事にふれていひ出でんとする風であつたが、白石は之には故らに耳傾けなかつたといふ。

以上三回の會見で、凡そ白石の聽かんと欲せる程の事は大抵聞き辨へ得た。此上は來由乃至教旨を訊ぬべきであるが、教法の事を談ずるは事態容易ならざるものありと見て、彼は十二月一日 くに將軍に謁を乞ひ、其の趣を言上し、又別に奉行の立合を特に命ぜられんことをも願ひ出た。斯くして十二月四日の最後の會見に於て、始めて『こゝに來れる事の由をも問ひ、又いかなる法を我國にはひろめむとはおもひて來れるにやとたづねとふた。』於是『かれ悅びに堪ずして、某、六年がさきにこゝに使たるべき事を承りて、萬里の風浪をしのぎ來りてつゐに國都に至れり。しかるにけふしも本國にありては新年の初の日として人皆相賀する事に候に、初て我法の事をも聞召れん事を承り候は其幸これに過ず候』とて、教法の事ども具さに說いたとある。其事は別に下の卷に詳しく出てゐる。

（五）

以上說く所に由て、白石の主として聽きたゞした事が萬國の地理や世界の形勢であつたことは明だ。而して其のあらましは西洋紀聞の中卷に纏められて居る。采覽異言は之を主幹とし更に支那から渡つた幾多の地理書をも涉獵して作つたものであるから、一層詳しく書かれて居るが、此方のことは他日また稿を改めて說くことにしよう。玆には話題を專ら西洋紀聞に限つておく。

本書中の卷を假りに分類して見ると七章になると見ていゝ。第一章には五大洲の簡單なる說明がある。第二章は『エウロパ諸國』と題し、今日の伊太利、西班牙、葡萄牙、佛蘭西、獨逸、波蘭、露西亞、瑞典、和蘭、英吉利、其他の小邦約十八ヶ國の事が書いてある。御話にならぬ程簡單なもので あることはいふまでもない。其の中でも和蘭と英吉利の事がやゝ詳しい。尤も國名の唱ひ方などは大半今日とは違ふ。此章の終りに各國事情概說ともいふべきもの一節を添へてあるが、之れは頗る簡にして要を得たものだ。通譯を通して始めて外國の事をきゝあれ丈に理解した頭は流石は白石だと感服せざるを得ぬ。大槪先生は『現時より見れば事は陳腐に屬しつれども、今はたゞ始めて海外の事を談話の間に聞き得てかくまでに書き取りたる識見の跡を稱して觀るべし』といはれてるが、全體の評として當つて居ると思ふ。庶莫、本節には先づ國體の事を說いて居る。曰く『大凡エウロパ地方の諸國、其君を立るに其嗣たるべきものすでに定

れるは論ずるに及ばず。もし嗣いまだ定まらざるは、臣民各其嗣とすべきものゝ名をしるして出す。其しるせし所の數多きものを以て其君とす。君其臣に官を命ずるも亦これに同じ。臣民惡むるもの多き人を擧用ふ。君敢てみづから一官を命ずる事もあたはず』と。又『此方諸國君長の位號數等あり』とて、法王(ホンテヘキス・マキスイムス)、皇帝(インペラドール)、王(レキス)、公(フレンズ)、侯(ポルスト)、伯(ドウクス)の目を擧ぐるのも大體に於て誤りがない。敎法については、『此方相尙ぶ所の敎は皆これエイズスの法也。たゞヲヽランド人のみルテイルスの徒也』といふて居り、言語については、希伯利(ヘイベレイウス)、拉丁(ラテン)、希獵(キリイキス)の三をあげ、其中ラテンを以て諸國の人皆之を學ぶ、通せざる所なしといふてをる。『諸國用ふる所の字體』にも、東洋の所謂眞、草の樣な二體あるを說き、之にラテンの字及びイタリヤの字といふ名稱を附して居る。而して『其字母僅に二十餘字、一切の音を貫けり。文省き義廣くして其妙天下に遺音なし』と讃し、之を習ぶの學にガラアマテイカとレトーリカの二ありといふなど、皆甚だ要領を得て居るではないか。

第三章の『アフリカ諸國』は甚だ簡界で、上耳古と希望峰とマタカスカル島の事を述べて居るに過ぎぬ。第四章の『アジア諸國』は稍詳しいが、之は洋人にきくまでもなく大略日本にも知られて居つた所だから不思議はない。只其中に注意に値するものは二つある。一つは印度の部に、世界の宗敎にキリステヤン、マアゴメタン及びヘイデンの三種ありと說けることで、又一つは章末に、和蘭地方より東洋に來るに、地圖に依て見ると『北に去りて東に轉じ、北海を經過て東し、南に轉じて來れば行程僅に三四千里なるに、『アフリカの西を經てカアプ地方に至て東に折れ、アジアの南海を過てジヤガタラに至り、こゝよりまた北して』東北の方我國に來ると、行程凡そ一萬二千九百里に及ぶといふが、何を苦んで近きを顧みず遠きを取るやと和蘭人に問ふたといふことである。今から見れば愚問に相違ないが當時として中々鋭い質問といはねばならぬ。

第四章『ノヲルト・アメリカ諸國』と第五章『ソイデアメリカ諸國』とは殆んど何も書いてないと云つてもいゝ位だ。北米の方では新西班牙と新佛蘭西に關する簡略な說明あり、南米の方では伯剌爾と巴太温の事があるきりだ。伯剌爾の說明の中に『按ずるに秘府にエウロパのクラントあり。ヲヽランド人此國人と戰ひ勝ちし事をしるせし見ゆ』とあつて、其註に『クラントはエウロパの俗に凡そ事ある時は其事を圖註し鋟板して世に行ふもの也』とあるのが一寸面白い。是れ言ふまでもなく新聞

のことを指すのであらう。巴太溫の記事に付ては、白石の研究態度の甚だ冷靜にして科學的なる、敬服すべき一事がある。巴太溫は南米の南端今日のパタゴニアの地にして土人の身丈長大なるを以て知られて居る。而して昔は之が誇長されて長人國と呼ばれ、エスキモーの小人國と併べて面白をかしく說かるゝを常とした。殊に我國では、白石の頃は勿論、明治の初年までも西洋の事としいへば珍談異聞に富むものと豫定して居つたから長人國小人國はさて於き、手長國足長國などをも眞面目に信ずるものがあつたのである。少くとも巴太溫については、白石の采覽異言を增訂したことを以て有名な山村昌永ですら、身の丈一丈二尺など〻書いたこともある。白石はこゝに疑をおきしものと見へ、曾て之を蘭人に問ふた。其答に『むかし本國の人此方の南海を過ぎしに、そのパタゴヲラスの地に至て人をして小舟に艤し水口より泝りて其地を見せしむ。久しくして歸らず。海岸にのぼりてはるかに望むに、荒潤にして見る所なく、たゞ沙頭に大きなる屋の內に火を燒きし跡ありて、其邊に人の足跡あるがよのつねの人の足二つを合せしほどにて、兩足相去れる間もこれにかなへり。此故に此地の人長大なる事をば推し知れり。始つかはせし人もつゐに歸る事を得ず。又此地の人を見しにもあらずといふ』とあるを擧げて餘事をいはぬ。學者としては之れ以上の推測を逞うすることは許されぬのであるが、こゝにも彼の非凡の見識が閃めいて居ると思ふ。

最後の第六章ともいふべき所に歐洲當今の形勢が手短に述べてある。當時の歐洲 所謂西班牙王位繼承戰爭で紛亂を極めて居る最中であつた。西班牙の王チャーレス二世嗣なし。親族の關係で嗣位をねらうものに佛王ルイ十四世の孫アンジュウ侯フィリプと獨帝レオポルト一世の孫バヴァリア王ジョセフ・フェルチナンドとがある。是ぞやがて獨佛の勢力爭ひの基となるのである。西國の王は始めて後者を相續人に指定したのだが、早く死んだので、後改めて前者に其全領を與ふるに決心した。其中チャールスが死んだのでフイリプすなはち王位に卽いたが、獨逸側太だ之を喜ばず、乃ち和、普、葡を誘うて佛西連合軍と戰端を交うるに至つたのである。之等の事ども聞いたまゝを書いたのだらうが、人名も年號も誤らず、相當に要領を得て居るのに驚くのである。又波蘭の紛亂のことや瑞典と露西亞との確執の事なども書いてあるが皆頗る肯綮に當つて居る。

(六)

白石が第四回目の會見に於て聽き得た事どもは詳に下の卷に誌されて居る。之によつて先づこの異人の素姓經歷を調べて見

やう。

彼は名をヨソン・バッテイスタ・シローテと云ひ、伊太利はシヽリー島のパレルモ市の人である。今日西洋の本で調べて見ると、ジ・ヴァンニ・バッテイスタ・シドーチ（Giovanni Battista Sidoti）と云ふべきだが、能く聴き取れなかつたものらしい。白石自身も、『すべて其語を聞くに聲音うつし得べからず。其名を稱するごときも、ヨソンといひ、ヲアンといひ、ギョアンといふが如し。其近く似たるをしるす也』と云つて居る。兄弟四人あつたが、長姉と末弟とは夭死し、父も今はあの世の人、老母と長兄とを故國に殘して、三年前に東洋傳道の途に上つたのである。『幼よりして天主の法をうけ、學に從ふこと廿二年。』六年前にメツシヨナ、リツスとなつたといふ。白石メツシヨナ、リウスを註して『彼方弘法の事のために使たるもの』と釋いて居る。夫からすぐ日本傳道の命を受けたものらしいが、之に付てはいろ／＼評議があつた樣だ。昔、教法の日本に傳りてより普ねく各地に弘まること七十餘年、秀吉の時黜け逐はれてから師徒誅殺を免るゝものなく、遂に歐洲諸國の人此國に通ずるを得ざるに至つた。先の法王インノセント十一世深く之を遺憾とせられしが、現法王クレメント十二世に至り、其志を繼いで東洋傳道の事を衆議に諮る。カルデナアル衆命を受け相議して曰く『昔

チイナ（支那）におゐても我法を禁じしかども今は其禁開けしのみにあらず、其天子の使こゝに來る。またスイヤム（暹羅）のごとき、我法を禁ずといへども、これまた其禁を除けり。今に至てはチイナ、スイヤムすでにかくのごとし。ヤアパンニヤにもまづメツシヨナ、リウスを奉りて告訴ふる所ありて、次ぐにカルデナアルをヌンシウス（公使）として其好を修めて我法をふたたび東土に行はるべきもの歟』と。衆議一決して彼れ一同の門弟に與りて東征の命を受けたのだ。而して彼れ自ら此際受命の決心を語りて曰ふ。『初此命をうけし日より我志を決せし所三つ。其一つは、本國望請ふ所を聽されて我法ふたたび此土に行はれんには、何の幸かこれにすぐべき。其二つには、此土の法例によられていかなる極刑に處せられんにも、もとより法のため師のため身をかへり見る所なし。さりながら人の國をうかゞふ間諜のごとく御沙汰あらむには遺恨なきにあらず。それも本師の命ぜしに、國に入ては國にしたがふべし。いかにも其法に遵ふ所あるべからずと候ひしかば、骨肉形骸のごときは、とにもかくにも、國法にまかせむ事いふにおよばず。其三つには、すみやかに本國に押還されん事、師命をも達し得ず我志をもなし得ず、萬里の行をむなしくして一世の譏を貽さむ事、何の恥辱かこれにすぐべき。されど我法いまだ東漸すべからざる時の不幸

にあひし事、これ又誰をか咎むべき」と。其志奪うべからずして其情また憐むべきでないか。

斯くて彼は準備として三年間日本の風俗と言葉とを學んだ。白石の問ふがまゝに手引にした二小冊子を懐より取り出せるを見るに一はヒイタサントールムとて日本の事を記せるもの、他はデキショナアリヨムといふ卽ち字引である。其に長さ五寸幅四寸厚一寸ばかりのもの。前者の中にはタイカフサメ(太閤様)といふテイランの時敎法を禁じたと云ふ記事や、豐後の大名の子の羅馬にいたりて法を受くるの圖などがあつたといふ。白石テイランを釋して『多く人を殺せる暴惡の人』といへるも面白い。之等の本は今でも何處かに有らうと思ふが探して見たいものだ。斯くすること三年。丁度同じく師命を受けて北京に赴くものと一所に故國を出發した 其間にジブラルタル海峽を出て英和連合艦隊に捉つたとか、其他いろ〳〵の難儀に遭つたが、遂に呂宋に到着し、玆處でまたくさ〴〵の準備を整へた。日本の錢貨を仕入れ日本の衣物を作る。日本刀もこゝで求めたものであらう。月代(さかやき)は呂宋よりの船の中で剃つたと書いてある。呂宋で最も骨折つたのは云ふまでもなく日本語の練習である。當時日本人の此地に流留するもの頗る多かりしことは、中の卷にヤサブバンジスの子孫此國にあるものすでに三千餘人、集り居て聚落をなす。其人本國の俗を變ぜず。士人は双刀を腰にし、出る時は槍を執らしむ、其餘も皆一刀を帶ざるはなし』と書けるにても分る。併し彼は三年前漂流したといふ十四人の者について特に多く日本の事を聞いたといふて居る。

連れの敎友はトーマス・テトルノンといふ。之は呂宋から支那に直行した。支那は此時すでに法禁を解いてより八十年にもなるので、南京、廣東にも宣敎師が往つて居る。暹羅にも東京にも交趾支那にも各數名の敎師が駐まつて居るといふ樣な事を述べて居る。而して彼は單身佛國船に便乘を求めて日本に向つたが『海上忽に風逆し、浪あらく船覆らむとせし事三たびに及びしのち、はじめて此土に至る事を得た』といふことである。但し彼が屋久島に流れ着いたのは、特に豫め此邊を選定したものらしい。そは『凡我方の人長崎に來れる、或は殺され或は押還され、いまだ一人の國命を達せしものあらず。これ我孤身にして西部の地に至りとゞまれる所也』といへるにてもはかる。

之等の事ども明となりて、白石はいよ〳〵來由の訊問に入る。『我國東に僻りて最小しき也。また我に大禁ある事をば凡そエウロパ地方の人にありてこと〴〵くしれる所也。今はた何のもとめありて此所には來りぬらむ。心得られず』と問ふに、彼は得たり賢しと先づ一凡其國を論ぜむに其地の大小其方の近遠を以

にする事あるべからず』とて、尊ぶべきは天地萬物の道に存する旨を喝破し、次いで云ふやう『今代に至て我法を禁ぜられしは、初ヲヽランド人我教を以て世を亂り國を奪ふの事也と告申せしによれる也。此事某深く辯ずるにもおよぶべからず。我ローマンの國ひらけしより凡一千三百八十餘年、寸土尺地といふとも人の國侵し奪ひし事あるや否は、ヲヽランド人に尋問れんには其事必らず明らかに候はん歟。彼ヲヽランドのルテイルスの如きは、地を侵し國を奪ひし事世々に絶ずして、今その併せ得る所は前に申せし事のごとし。さらば人の國を誤るもの、其教にはよるべからず。たゞその人によれる也……我今こゝに來れるは、此冤を雪がれて國禁を開かれん事、チイナ、スイヤムのごとくならん事を望請ひ申さむがため也』とて、自分の使命は只『恩裁の御事』を承らんとするにあり、御許しあらば重ねて正式の信使が渡來するだらうといふ旨を事詳かに述べた。其說く所の中に聊か事をまげて他を誣うるの言葉もあれど、當時の天主教徒としては已むを得まい。之と同時に彼はまた西班牙、佛蘭西等の海外發展の形勢を論じ、そは皆原始的未開人の地に『衣食の業ををしへ、資財の用を通して、みちびくにデウスの教を以てす』る結果、土民の悅服を得『海外の人をしていきてその生を安くし死して其苦をまぬがれしめん』爲め、其請にまかせて内屬を許したので、決して『其國を侵し奪ひむなどいふ事にはあらず』と辯護して居る。又日本については『もし此國のごとくならむには、其民なにを苦しみてか其君を萬里の外にはもとむべき』というて、頻りに政治的異圖なき旨を明にするに努めた。

此外白石は、始めて日本に來りし教徒のこと、支那傳道の嚆矢として知られたる利瑪竇のこと、支那のこと、幷に西洋兵事のことなどを質してゐるが、之等のことは大して肝要でもないから略しておく。

最後に我々のどうしても見遁すことの出來ないのは、彼が聽きしが儘を書き綴つて作れる天主教の大意である。岡本三右衛門等の力によりて成れる書物を讀んで豫備智識を有つて居た爲とはいへ、誠に要領を得たものである。卽ち天地創造の事からアダム、エヴのこと、三魂の說（天地間には三種の魂あり。植物の如きは生魂を有するのみ。動物は覺魂をも有すれど、靈魂を有するは獨り人間のみ。而して靈魂は永しへに滅びずとの說）、ノアの洪水、モゼスの十誡に及び、耶蘇の降誕、其受難幷に昇天のこと、使徒就中ペテロ、ポーロのこと、羅馬のことに亘り、更に教會制度のことにまで說き進めて居る。くど／＼しいから細に紹介することは略するが、普通の問答書などにある

程のことは誤りなく書き誌されてある。斯の如きは餘程聰明の人ならでは能くし得ぬ所だ。只この教に對して白石は如何いふ風に考へたかと云ふに、一言にして云へば、『荒誕淺陋辨ずるにもたらず』と斷じ、『薾語こと〴〵くに通曉すべからずといへども、大約その教の由來る所西天浮圖の說に出づ……其淺陋の甚しきに至りては同日の論とはなすべからず』と論じて居る。『今エイズスが法をきくに、造像あり、受戒あり、灌頂あり、誦經あり、念珠あり、天堂地獄輪廻報應の說ある事、佛氏の言に相似ずといふ事なく』とまではいゝが、萬國地圖に依て見るに、猶太の地西印度と相去る遠からねば、彼れ恐らく佛氏の說を竊んだものであらうといふのは、當時は勿論後世に至るまで久しく人の信ずる所であつたとはいへ、流石の白石にも宗教の本當の意味は能く分らなかつたことを語るものである。

併し白石が天主の法說を以て淺薄見るに堪へずと認めしについては、教法自身にも其責なしと云ふことは出ない。何となれば其說く所甚た幼稚にして、特に儒教に養はれた頭には馬鹿氣切つた事ばかりであつたからである。教法は頻りに天地の創造者としての方面から神を說くが、彼は本來天地は自らにして成るもの、之を造れる者ありといふが如きは無稽の妄說だと多年教へ込まれて居たものでもあらうか『天地萬物自ら成る事なし、必ずこれを造れるものありといふ說のごとき、もし其說のごとくならむには、デウスまた何ものの造るによつて天地いまだあらざる時には生れぬらむ デウスもしよく自ら生れたらむには、などか天地もまた自ら成らざらむ』と理窟を捏ねて居る。其他贖罪論や奇蹟論に付ても冷酷な批評を試みて居るが、皆宛かも今日淺薄なる科學者の口から神學教說の批評をきくやうな感がする。併し吳々もいふが是れ白石の責ではなくして、當時の神學の幼稚なるの結果に外ならない。當時の天主教會が神の道を傳へんとの熱心に動いて、かくまでの危險を冒して東洋傳道に力めたのは敬服に堪へないが、東洋には既に如何なる哲學があり如何なる宇宙觀があるかを先づ究めなかつたのは、惜に教法弘通に失敗した一つの原因だと思ふ。さうでなければ、あれ程の偉大なる人格を縷々送り乍ら、如何に國禁が嚴しかつたとはいへ全然識者階級の間に些の痕跡を殘さずして消へる筈はないと思ふからである。

孰れにしても白石は相手の人格にだけは大に敬服した。教說の愚陋なるに依て己れの感情を僞ることはしなかつた。こゝに私はまた白石の爲人を床しく思ふものである。白石は彼を評して『其教法を說くに至ては一言の道にちかき所もあらず。智愚たちまちに地を易へて二人の言を聞くに似たり』といふて居

るが、又『凡そ其人博聞強記にして彼方多學の人と聞えて天文地理の事に至ては企及ぶべしとも覺えず。また謹愨にしてよく小善にも服する所ありき』と讃歎するを憚らない。只最後に『こゝに知りぬ、彼方の學のごときは、たゞ其形と器とに精しき事を。所謂形而下なるものゝみを知りて形而上なるものはいまだあづかり聞かず』と斷じ去るのは、未だ井底の蛙たるを免れないと思ふ。

(七)

白石が學者としての立場から天主教をどう觀たかは前段に説いた。次に政治家としてどう觀たかを述べやう。

彼は教法の傳道が國を奪ふの謀略に出づるとの俗説には斷乎として反對した。此點は別に短編として將軍に上つたらしい『此度渡り來候ロウマン人幷御役所書物等の説にて承知候大略條々』(西洋紀聞第二冊に附録として採録せらる)の中に最もよく明にされて居る。曰く『彼國の人我國に來り法ひろめ候事は我國をうばひとり候謀の由相聞え候事は、阿蘭人幷に……の申し出したる事に御座候歟。其教の本意幷其地勢等をかんがへ候に謀略の一事はゆめ〳〵あるまじき事と存ぜられ候事』と。之につけ加へて彼は岡本三右衞門の作れる書にも返逆の謀に非る趣一々辨明してあるを見たがいかにも其道理分明だと云うて居る。併し此點を餘りに力說し過ぐると、從來の政府の政策を非とし祖宗の遺法に悖く形になる。白石の地位としては多少は遠慮せなければならぬ。それかあらぬか、彼は羅馬人の處分に對する獻議(之も西洋紀聞第二冊に附錄となつてある)に於ては、『其法もと正しからずといへども、我國を謀るといふは實なるべからず。しかれ共島原の變出來たれば申ひらく事難かるべし』とも書いて居る。孰れにしても、彼は冷靜に教法の說明を聽き教師の人物にも接して、可なり適確な判斷をしたものといはなければならぬ。斯んな事は何でもない樣だが、能く考へて見ると、普通凡庸の人間の出來ることではない。大正の昭代に於てすらフリー・メーソンは世界を顚覆せんとする猶太人の秘密結社だなどと信じ込んで動かない者がある。(去年六月號本誌所載拙論文參照)。況んや白石の頃は、少しでも切支丹に同情ある樣な言葉を出せば忽ち首が飛び、只譯もなく罵倒さへして居れば無難だといふ時代だ。先入の偏見から脫するといふは容易な事ではないのである。されば當時切支丹の伴天連(バテレン)・入滿(イルマン)を調べた役人の調書などを見ると、皆彼等は結局侵略の陰謀を自狀したといふ風に書いてある。今日から考へて到底そんな事をいふ筈はないと思はるゝ樣の事も時々眼に觸るゝ所を見ると、以て如何に當時

の宗門關係の役人が一種の僻見から脱し得ざりしかが分る。こんな事を思ひ廻して觀ると、將軍の殊寵を集めて居つた人とはいへ、能くも大膽にあゝまで言ひ切つたものだと敬服の外はない。外國の事物は正に此の調子で觀るべきだ。殊に內面的事物に於て然りとする。此意味に於て白石の遺書は今日の吾人に取りて確に一の貴い修養書と謂つてもいゝ。

國を奪ふと云ふ目的もないものなら、何で遠い我國へ無類の難儀を事ともせず來るのであるか。此點がどうしても幕府の役人には呑み込めなかつた。同じ樣な疑を今日でも懷いて居るものが尠く無いのだから、昔の人の怪み思ふたのも無理はない。シローテに付ても時の政府ではいろ／＼問題となつたらしい。遂に正德五年來朝した阿蘭陀人にも如何思ふか聽いて見た。之に對して此事自分達にも得心が行かぬが、或は重き罪を犯して死に當るもの『其罪贖ふべき事をおもひはかりて此國に來らむ事を望みし』には非るべきかといふのが答であつた。併し之は蘭人の出鱈目たると勿論である。天主敎會の傳道の精神は蘭人に於て知らぬ筈はない。只敎法のヿに就て幕府の氣に逆ふときは忽ち貿易上の特權を奪はるゝヿあるべきを恐れて居たから、少しでも辯護がましい說明は避けやうとの窮餘の遁辭と見るべきである。流石に白石はこの說明には滿足しなかつた。前掲の短編『此度渡り來候ロウマン人並御役所書物等の說にて承知候大略條々』に依て見ると、彼は朧氣ながら傳道の動機に付ては會得する所あつたらしい。彼曰ふ『彼法の師諸國に渡り候而其法をひろめ候事、これ耶蘇の敎と相聞え候。其故は、天主は天地萬物の父母にて、一世界の人皆これ兄弟にて候。父母の子を見候時は男女少長をゑらばす。皆々同じ心にて父母の心を以て其子の心とする時は、兄弟の間は相したしみ相愛すべき事に而候。又子をやしなひ子をしゆるは父母の心にて候。其父母の心を其子の心とする時は、兄弟の間は相やしなひ相をしゆべき事、すなはち天主の心天主の法にて候との義と相聞え候』と。而して國禁の嚴しきにも拘らず特に此際を選んでシローテの渡來せしに付ては、彼が日本の錢貨を數多く携へ來れるより推して『國財以の外に窮したり、國民さだめてくるしみたむ。民くるしむ時は命の行はれざる所あり。たとひ其禁を行はるとも、金銀をもてみちびきなば其禁開く事ありぬとおもひ謀りし』ならんと斷じてあるが、之れだけは少しく穿ち過ぎた判斷だと思ふ。

白石は前述の通り敎法弘通の陰に潜む政治的野心は信じなかつた。然らば天主敎の宣傳を公に許すべきやといふに、さうではない。彼は『其法盛になり候へば、おのづから其國に反逆の

臣子出來候事はまた必然之理勢にて候歟』といひ、大明三百餘年の天下の亡びたる三大原因の一は此法の行れしに在りとの說を引き、我國が卒先して嚴禁の制を立て通したのは「御名譽の御事と乍恐奉存候事」とほめて居る。之は彼の本心から出た言葉かどうか分らない。天主教の所說を以て荒誕淺陋と斷じ去つた彼が、少くとも之を無用の長物と視たことは疑ないが、更に進んで國家の安寧と相容れないと信じたかどうかはよく分らない。あれ程の理屈屋でありながら、白石は『反逆の臣子出來候事』を『必然之理勢』と獨斷したのみで　間何等の說明を與へて居ないからである。察する所、白石の天主教に對するは、丁度今日の我々の大本教に對する位の所ではなかつたらうか。荒誕無稽ではあるが、何も大騷ぎをして迫害をする程のものではあるまい、といふ位の考であつたらうと想はるゝ。今日は平氣で之を放言して憚らないが、白石の時代に在ては、白石以上に筆端を走らすことは出來なかつたのである。

併し白石の議論の中にも、今日の頭から觀て變なのが一つ二つある。例へば天地の創造者たる神を父とし事ふべしといふに反對せるが如き是である。白石曰く、『禮に天子は上帝に事ふるの禮ありて、諸侯より以下敢て天を祀る事あらず。これ尊卑の分位みだるべからざる所あるが故也』と。即ち天に事ふるは天子の特權で、臣は君を以て天とし事ふべく、子は父に妻は夫に事ふるの外、他に事ふべきものありと考ふるのは僭越の沙汰だといふ。『もし我君の外につかふべき所の大君あり、我父の外につかふべきの大父ありて、其尊きこと我君父のおよぶところにあらずとせば、家におゐての二尊國におゐての二君ありといふのみにはあらず、君をなみし父をなみす、これより大きなるものなかるべし。』たとひ直接に君父を無みせよと敎ふるに非ずとするも、『其流弊の甚しき、必らず其君を弑し其父を弑するに至るとも、相かへり見る所あるべからず』と極論して居る。も一つ一夫一婦論に對する批駁も其例に洩れない。一夫一婦の敎說を直接に難じてゐるのではない。古より以來、彼方諸國戰亂の事をきくに、皆これ其嗣絕ふるが故によれりといふ。其流弊のこゝに至れるもまたあはれむべし』と側面から攻擊してゐるのが面白い。而して之等は實は何も白石獨特の意見ではない。封建時代共通の思想だ。吾々は之に依て偶々舊時の道德思想の大に今日に異れる趣を思ひ起させられるのである。

（八）

天主教及びシローテに對する白石の態度は、更によく其處分案に現れて居る。羅馬人の處分に就ての獻議が西洋紀聞の附錄

に出て居ることは前にも述べた。今更渡來の異國人の處分に付ては、彼と共に支那にも往つたといふ事であるから、支那の裁斷と比較されても遜色なき樣愼重に考ふるの必要があるとて、上中下の三策を獻じて居る。從來の取扱によると、改宗するは助け、然らざるは悉く誅するの例であるが、『かれ蕃夷の俗に生れそだつ。其習其性となり、其法の邪なるをしらずして　其國の主と其法の師との命をうけて、身をすて、いのちをかへりみず、六十餘歳の老母並年老たる兄にいきながらわかれて、萬里の外に使として六年がうち險阻艱難をへてこゝに來れる事、其志のごときは尤あはれむべし。臣又仰を蒙りかれと覿面する事已に二度。其人蕃夷にして其〇〇〇（欠字）蕃夷なれば道徳のごときは論ずるに及ばず。されど其志の堅きありさまをみるに、かれがために心を動かさゞる事あたはず。しかるを我國法を守りてこれを誅せられ　事は、其罪に非ざるに似て、古先聖王の道に遠かるべし』とて、之を殺すのは一番の下策だと痛論して居る。封建時代に在り乍ら、道に據つて時に法を枉ぐべしとする見識は、流石に見上げたものだ。此種の罪は、日本でこそ大罪たれ、彼方の立場からいへば丸で正反對になる。詐欺や泥棒のやうに誰が見ても曲事とするものとは事が違ふ。道の白石の見識の如きは、是非とも今時の朝鮮の役人などにも持たせたいものだと思ふ。

然らば彼を殺さずして永く切支丹屋敷に幽置すべきか。之を彼は中策と稱して居る。併し志を改めてこそ助け置くべけれ。然らざるを助けるのは、自ら祖法を弄ぶものに外ならない。而かも彼の爲人をみるに、『首をはねらるゝとも其志の變ずべきものとも見えず。』『改めざるを助けて法に違ひ、且徒らに彼に永き獄中の苦みを與へ、又與力同志にも日夜の心勞をかくるのは、何の得る所もなからうとて、是も採るべき策ではないと斷じて居る。さうすると殘る所は彼によく我が祖宗の法を說き聞かせ今度だけは命助けて還し遣す程に、國に歸りてよく其主に布教の許さるまじきを傳へしむるといふの外に途はないことになる。之が卽ち上策だ。文にしるし書契に述べて事理を喩し、『長崎に來る廣東の船又は流球より唐へゆく船にのせて只宋へ歸』さば『彼國をして我祖宗の法は天地と改るべからずして、當代仁恩の廣く聖度の大きなる事をしらしむ』ることも出來やうといふのである。之等の點は以て如何に彼がシローテの上に陰ながら多大の同情を寄せたかを語るものと思ふ。

併し幕府の執つた實際上の處置は所謂中策であつた。單純な敎師なら直に誅殺すべきだが、一面に於て彼は敎法の爲に其窺を訴へんとの使臣だともいふ。國信を帶有せぬ所から觀て聊疑

なきを得ぬけれども、兎に角使臣と稱する以上は誅に處する譯に行かぬ。されぱとて放ち去ることも出來ねば、暫く幽置し後來其言の徴あらむを待ちて宜く處決すべきもの也」といふことになつた。是れ彼が其後數年間切支丹屋敷の人となつて居つた所以である。

猶彼が法王の使者だといつた事については、茲に一言附け加へて置くことがある。幕府の方では、使臣なら相當の禮を以て待つ、教師なら法に遵つて殺すの外はないと、身分を別つて取扱はうとしたのだが、シローテ自身に取つては、甲に非んば乙といふ風に區別して考ふることが出來なかつたらしい。少くとも斯んな形式上の區別はどうでもよい、否、彼は實質上二つの資格を兼ね有つて居つたのである。併し日本の國法の上からは、何方かに極めてかゝることが必要であつた。少くとも白石は彼に同情するの餘り、時としては使臣だといふ事に強て了解せんとした樣でもある。即ちシローテの言葉として、自分の使命は教法に對する誤解を釋くに在る。『國禁を除かるべき事を乞請ふ使』たる以上、何ぞ其國に入りて自ら禁を犯さむやといはしめて居る。かくて即ち彼は傳道はしないと云ふ約束であつたのだから、後日長助夫婦に洗禮を授けたことが露見した時、政府では違約の責を彼に請つたのであつた。併しまた白石は飽くまでも彼を國使としてのみ觀て居つたかといへば決してさうではない。處分案の如きは全然彼を教師と前提して居るものである。シローテも亦使臣だからといふて全く傳道を差控へて居つた譯でもない。彼は事實上使臣にして教師を兼ねたものである。否教師たることの方が寧ろ主たる使命なのである。だから屋久島に上陸した時から早く已に教門の事を說いて見たといふではないか。さすれば畢竟彼は宗門布教の師に外ならないのだ。之を強て使臣としたのは、之を殺すに忍びなかつた幕府の涙ある取扱である。而して此の幕府の涙ある處置の原はといへば、どうしても白石に出て居ると見なければならぬと思ふのである。

幕府時代に於て西洋の事を書いたものは頗る多い。ことに吉宗以後に於ては非常に盛になつた。けれども其論究する所、天文、暦象、博物、本草乃至醫術の自然科學的方面に限り、西洋文化の內面に至るものに至ては極めて寥々たるものがある。而して西洋文化の一面の內面的研究をば、最も早く西洋を紹介せる、而かも西洋の學は形而下に限り形而上の事は取るに足らずと放言せる新井白石より聞くいは、聊意外とせねばならぬ所である。白石の研究態度に就ては尙言ふべき多くの事が殘つて居るのであるが、今はたゞ西洋紀聞三卷の內容を紹介するに滿足し、他にまた別の機會に讓る事にしよう。

大隈侯の人及び事業

大隈侯十六面觀

——國民的指導者としての大隈侯——

内ケ崎作三郎

一　大自然の弔禮と國民の哀慕

一月九日薄暮、微雪あり。珍しく東京は銀世界にならんとしたる時、雨と變じた。數日以前から危篤を傳へられた大隈侯の夜は殊に警戒を要すといふ、今になれば最後の容態書が午後八時に發表された。邸内は何時かはと之を豫期して居たものゝ、今更のごとく深き憂愁に鎖された。最後の大隈内閣は老侯の健康に非常なる影響を與へた。時候の變り目などに脚部の疼痛が屢々あつたやうである。數年前膀石病をわづらはれたが、幸にして本復された。昨秋の危險狀態を切り拔けられた。先づ老侯は病氣は寧ろ幸運者であつた。しかし病膿となつては詮術もない。昨年末以來緊張した老侯の周圍はこの夜は特に緊張した。私は夕方早稻田邸を見舞つて、この最後の宣告を聞いて、雨の中をマントーと悲しみとに包みて歸宅した。雪俄かに雨となる。天もまた老侯の最後を哭するごとく思はれた。

十日午前四時三十八分、老偉人は最後の呼吸をして、その不思議なる靈魂は天外に去つた。

朝日は季節には珍しく麗しく輝いた。夜來の雨は霽れて跡もない。樹々の枝の露は悉く氷結した。何たる美觀ぞ。櫻、楓などの枝は水晶の珠を貫く。其無風流の電燈線や電話線まで千珠

萬珠を貫き止めてゐる。松や柏や檜や槇の如き常磐木は水晶の房を垂れてゐる。宛然これ大自然の白玉樓でないか。昨夜泣いた自然はこの朝美装し、禮装して、偉人の心靈を迎ふごとく思はれた。

老侯遺愛の早稻田邸の庭園の美觀は想像するに餘りがある。この水晶と白銀との光彩のうちに、老偉人の遺骸は靜かにその病室に横はる。多事多難の永き活舞臺の最後の幕は下りて、この天成の名優に對して、自然はこの水晶の大花環を捧げ、國民と世界は愛と悲とを捧ぐるは怪しむを須ゐない。

＊　＊　＊　＊　＊

私は明治三十五年の三月半ばから、其當時早稻田大學と改稱せざりし東京專門學校の頃から早稻田の講師の一人となつた。無論最初の數年は侯爵の演説は度々聞き、或は園遊會などには他の多くの人々の驥尾に附して出て居つたけれども、親炙して御話をする機會はなかつた。併し明治四十四年歐洲留學より歸つてからは、度々御目に懸つて御話を伺ふ機會が少くはなかつた。殊に外國の客が見えた時には、通譯の任に當つたのは主として早稻田大學學長鹽澤昌貞博士であるが、同君に差支のあつた時には折々私が其代理をしたことがある。或は安部磯雄君、高杉瀧藏君、五來欣造君なども折々依賴を受けられた。更に角玆十年ばかりの間に通譯の任に當つた機會も少くない。其他學校の問題や、或は政治上、社會上の大變動があるやうな場合に侯爵の御意見を承つたことも少くはない。併し私は侯爵家の奥の方の事は何も知らない。唯だ自分が二十年の間侯爵の周圍に在つた一人としての感想を取纏めて見たい。

二　「葉隱」の權化としての大隈侯

大隈侯に對する批評は隨分多い。又毀譽褒貶も中々少くはない。孰れにしても大隈侯は近代我日本が産出せる最も偉大なる人物の隨一者であることに就いては、敵も味方も異論がない。如何にしてあのやうな偉人が現れたかといふことは非常なる興味ある問題である。私一個としては大隈侯は武士道、殊に鍋島武士道と儒教の大精神が結付いて産み出したるものであると思ふ。それに洋學の知識、實際上の經驗觀察が積つて、此の如き偉大なる器に成られたと考へる。私のやうな東北の田舍の平民の家庭に人と成つた者から見れば、大隈侯の少年時代、青年時代は非常に違つたものであつた。第一、人も知る如く佐賀は佐賀獨特の士風があつた。無論九州武士には九州武士の精神があつて、中國武士とも違ひ、近畿附近の武士とも違ひ、或は東海道筋、北陸筋、東北筋などの武士的精神とも違つた、一種大膽不

敵にして勇敢進取の氣風が九州に存在して居つた。是は人口の稠密なること、生存競爭が比較的激しくあつたこと、又古くから亞細亞大陸の影響を受け、又近代に於ては、葡萄牙、西班牙、和蘭等の海外貿易の影響を直接間接に蒙つてゐる爲めである。のみならず、恰かも今日の歐羅巴が少數の列强と分れて互に競爭して、今日の文化を釀成した如く、九州といふ比較的面積の狹い、人口の稠密なる所に於て、幾多の雄藩が境を接して對立したるが故に、各藩に競爭的精神あり、各々種々の特色ある武士道の發揮を試みた。殊に鍋島藩には今より二百七八十年前頃に石田一鼎といふ一風も二風も變つた學者が居つて、一種獨特の精神を鼓吹した。其高弟に山本常朝といふ學者がゐて、是が其師に讓らざる見識を抱いて、石田一鼎の教訓を蒐集めて、それを葉隱といふ寫本にして後世に傳へた。此葉隱の教訓を信仰し實行するものを葉隱武士と稱したが、次第に此經典が勢力を得て、鍋島藩の武士道の根本精神を形造るに至つた。

先年佐賀から長崎に遊んだ時に、偶然其寫本の活版本を求めて今自分の書齋に備へてある。大隈侯を理解するには葉隱を通して、鍋島武士道の理想を理解することが必要である。此事については嘗て論じた人も見えたが、玆には私の立場から同じ問題を取り扱つて見たい。葉隱武士には四誓願なるものがあつた。

第一、主君の御用に立つべきこと、
第二、親に孝行を致すべきこと、
第三、大慈悲心を起し人の爲になるべきこと、
第四、武士道に於て後れ取り申すまじきこと、

一體、大隈侯は佐賀の藩學弘道館に於て教育を受けた。藩學の中心思想は朱子學であつて、長上に對して絕對服從を敎へる道德である。年少氣銳の大隈侯はこの藩學には滿足せずして、ストライキを起して、其煽動者と認められて放校されたさうである。其後藩の命に依つて長崎に留學して、和蘭屋敷に通うて和蘭語を稽古し、又侯爵の父君が長崎の砲臺司令官たりし關係で、（無論父上は侯爵幼少の時に病死せられて居つた）矢張父業を繼ぐためと、當時は國防論旺盛の時代であつたから、砲術、築城學などをも學ばれたらしい。仍て大隈侯が少年時代、青年時代に於て「葉隱」をどれだけ愛讀されたかといふことは斷定を下すことは出來ない。併ながら「葉隱」の精神は鍋島藩に彷彿として存在してゐたのであるから、苟も鍋島藩の武士たる者は、縱しや「葉隱」を愛讀せずとも、其大精神の感化を受けて居つたものと見なければならぬ。

今葉隱の四誓願を標準として大隈侯の人物を批評すれば、餘

程參考になる。第一大隈侯は親孝行の人であつた、幼少より母君に育てられたる特別なる關係もあるから、殊に孝行を盡されたのであらうが、傲慢不遜のやうに思はれて居る侯爵は、非常なる母思ひの方であつたといふことは誰しも知つてゐることである。尤も母堂三井子は非常な賢夫人で、信仰心も極くあつた。またその家庭を開放し　少年八太郎をして友輩の牛耳を執る機會を與へたとのことである。侯爵は並の親思ひでなかつたことはそれでも明かである。又「主君の御用に立つべきこと」の誓願をも終始一貫して實現されてあつた。即ち最初は鍋島藩に仕へて忠勤を抽じて、明治新政府が成立する迄は、肥前の少壯進歩黨の頭目として、薩長士の新人物の間に重きを成したのであつて、鍋島家との間には常に親密なる關係を持續された。又明治天皇より今上陛下及攝政宮殿下に對し奉つても、非常に忠誠を盡されて元老に迄立身せられたことは、此誓願を實現されたことであると思ふ。

青年時代に於ては鍋島藩の御用に立つて、明治大正の御代に至つては皇室の御用を務め、又國民に奉仕したことは、葉隱武士の精神を承繼いだる大隈侯爵の光榮とした點であると考へる。又「武士道に於て後れ取り申すまじきこと」といふ誓願があるが、是は大隈侯の一生を支配したる大精神であると思ふ。葉隱の中に「凡そ武士は勇み進みて物に勝ち浮ぶ心を肝要とす。しをれたる氣風にては用に立たざるなり」とあり又「武勇といふことは、我は日本一と大高慢にてなければならず。」とある。「大難大變に遭遇しても少しも動ぜぬといふのはまだしきことなり。大變大難に遭つては周章狼狽せざるは勿論、却て欣喜雀躍して進むが武士なり。是れ難關を越えたる所なり。諺に水増さば船高しといふことであれば、決して失望落膽し周章狼狽などすべからず」ともある。又「名人上手のことを聞きて己は及ばざることと斷念するは腑甲斐なきことなり。名人上手も人なり。吾も人なり。いかでか劣るべき。一度打向へば最早其道に入りたるなり」ともある。又「人は萬事に心を付けて少しにても後れになることは嫌ふべきものなり」ともある。又「武士たる者は武勇に大高慢をなし、死狂ひの覺悟が肝要なり、平素の心立て、物言ひ、身の取り廻し、萬事麗に心掛くべし」ともある。又「柳生家の極意に『大剛に兵法なし』と、武士は命を擲つに極まりたり。平素心に掛け、得心し、今に死ぬことを觀念し置くべし。是れ兵法の極意なり」と、又「人は立ち上がる所なければ物にならず。人より頭を踏まれグヅ／＼として一生を果すは口惜しきことなり。まことに束の間なる世なれば、ハツキリとして死にたきことぞかし、此點に隈の深く入りたり。

世に時めく飛ぶ鳥落す勢ある人とて、天魔鬼神にてはあるまじく、彼も人なり吾も人なり、されば少しも劣り申すべきか、若し誰々に乘り越さずんば、腹掻切つて死ぬべしとつゝ立ち上がれば、即座に上手なるものなり。功を積みてよりなどとはまだるし。一念發起すれば即ち立上がることなり」云々。

是等の教訓は葉隱武士道の精神である。大隈侯は多くの場合に於て此精神を體現せられた。大隈侯は負けじ魂の人である。瘠我慢の人である。强がりの人である。決して弱音を吐いたことのない人である。是は祖先傳來の葉隱武士の精神が知らず識らずに現れて來たのではあるまいか。大隈侯が長崎に於て天下の秀才と相會して勉强された時も、或は長崎奉行に立退きを喰して、一時書生假政府を形造つた時も、又は九州總督の副參謀として大得意であつた時も、風采堂々として己は大名になるぞと大言を放たれたさうであるが、確に葉隱の負けじ魂が其當時既に光と閃きとを放つて居つた。

三　逆境を利用し活用した元氣者

大隈侯の官海及政界に於ける閲歷は頗る波瀾に富んだものである。明治元年九州鎭撫總督澤宣嘉卿が長崎に到着したる時に初めて總督府副參謀として召出されたのであるが、丁度浦上に於て切支丹宗門の迫害問題が起つて、それが爲に歐米外交團と日本新政府との談判となつて、明治新政府が大隈侯に其衝に當るべきことを任命した。即ち參與に任ぜられて京都に行つた。後東京に移つて明治二年七月大藏省設置と共に同省大輔に任ぜられて、大藏卿伊達宗城を助けた。其當時は有名なる築地の梁山泊に會して、伊藤公や井上侯などと盛に放談快論を恣にして、折々夜を徹したこともあつた。明治三年九月參議に任ぜられて三條右大臣、岩倉、德大寺、鍋島、仲御門の四大納言、副島、大久保、廣澤、佐々木、木戶等の諸參議と共に廟堂に列した。其得意知るべきである。明治四年六月改革の議が廟堂に起つた爲に、大隈侯は參議を罷めて又大藏大輔となつたが、七月更に參議に任ぜられて、明治六年五月井上侯の後を襲ふて大藏卿となつて、初めて會計豫算表を發表した。明治七年四月臺灣征伐の時に蕃地事務長官を命ぜられて長崎に出張して居た。明治十年西南の役に際して、國費多端にして國家が動ともすれば窮乏を告げたので、大隈侯は非常なる才覺をして、財源を借入金と紙幣增發とに求めて、一時の窮を凌いだのであつて、其功績著しくして勳一等に敍せられて旭日大授章を賜つた。明治十一年四月には明治天皇が飯田町の侯府邸に臨まれて家人に拜謁を賜つた程であるから、其當時の得意は飛ぶ鳥も落ちるやうな勢で

あつたらうと想像される。明治十三年二月に大藏卿兼任を罷め參議に任ぜられ、明治十四年十月依願免官となつたのであるが、是が得意の絶頂より奈落のドン底に落されたやうなものであつた。

私は大隈侯の浪人時代の後半二十年を幾分か直接間接に知つて居るだけであるが、大隈侯の全盛時代の威勢は非常なものであつたといふことだ。其當時重要なる廟堂の會議などに臨まれて居る大隈侯の容貌は、威風堂々たるもので、顏面の筋肉が緊張して一見人を慴伏せしむるやうな氣力を示して居つたさうである。そこで今日日本の政界の中心人物と目せられてゐる人々は、當時何れも皆青年時代であつて、大隈侯の前に現はれた時には、何れも座敷一間位を離れて挨拶をした位に、大隈侯には皆な呑まれて居つたといふことだ。それで是等の諸先輩は今でも其當時の記憶が存在して居るから、侯爵の前に於ては戰々兢々たる觀を呈して居たらしい。斯かることは大隈侯の天性かも知れぬけれども、尚ほ一面に於ては葉隱武士道の教訓の化身となつて活動された結果とも思はれる。

四 「葉隱」武士より外交官へ

大隈侯が立身出世の始まりは外交問題である。最初に人も知るが如く、長崎假政府の成立と共に、自面の青年連中が關稅徵發のことを各國領事に通知して、佛國領事がそれに反抗して、若し其乞が容れられないならばナポレオン三世に請求して軍艦を向けると迄脅し付けたけれども、少壯外交家である大隈侯は一向それにへこたれなかつたといふので、人皆な其大膽不敵に驚いたさうである。大隈侯は自ら洋行されなかつたことは非常に殘念なことだと思はれたに違ひない。明治の初年に佐賀藩から三名の留學生が米國に送られた時に、自ら其選に洩れたことを非常に口惜しがられたといふ話もある。併しそこは負けじ魂の人であるから、洋行は出來ないが、內國に在つて洋行した者以上の見識を蓄へやうといふ大發心をされたに違ひない。米國の事情の如きも米國歸りの人々より傳聞せられ、又攜へ歸つた書物なども讀まれたに違ひない。又以前から長崎に居た米國宣教師フルベツキヤ、ウイリアムスに就て英語や數學を學ばれたといふのであるから、基督教の事も幾分か研究され、基督教の歷史も多少心得てゐたに違ひない。仍て九州總督の參謀である井上侯、即ち井上聞多、少々腕を振ひ過ごして浦上の切支丹門徒を迫害して、之を牢獄に投じたる爲に、佛蘭西の領事が主唱者となつて異議を申立てた。明治新政府は切支丹伴天連は未だに禁止してあつた。随て基督教の歷史や制度に通曉してゐるも

のは一人もないから、已むなく長崎くんだりから外交を以て實用したる所の當時の大隈八太郎といふ田舍武士を京都に召して參與の職を與へて外交の衝に當てたのだ。一方歐米外交團は英國公使のパークスをして其代表者とした。パークスは中々な人物で、明治政府に取つては氣六ケ敷いお舅さんのやうに嫌はれた人であつたさうだが、日本の事には隨分心配して、盛立てゝ呉れたのである。現に明治新政府が上野公園の樹木を切拂つて、畑にするとか、不忍池を埋立てゝ桑畑にするとかいふ計畫を立てた時に、パークスは之を聞いて政府に怒鳴込んで、涙を流して其無謀の擧を中止させたといふ話もある。パークスは單に日本を虐めやうとしたのではなく、日本を引立てゝやろうといふ誠意のあつたことは認めざるを得ない。何れにしてもパークスは傑物、其傑物が歐米外交團の代表者となつた。さうして白面の書生上りの俄か仕立の外交官大隈八太郎が之に當つたのだから、京都の新政府も冷汗を掻いて其初舞臺の後援をして居つたが、パークスの言ふ所にも一理があるけれども、大隈參與の言ふことにも中々道理がある。日本で切支丹バテレンを迫害したことは事實である、併ながら歐米に於てもさう云ふ先例のないことはない、宗教革命以後羅馬教會が新教徒に對して與へたる迫害の歷史を述べ、西班牙に於ける宗教裁判の例などを引いて逆襲したるが故に、パークスも時々論鋒が亂れた。而して結局妥協が成立したのであつて、爾來此明治政府に大隈といふ新進氣鋭の外交官ありと、歐米外交團の認むる所となつた。是が大隈侯出世の緒である。「葉隱」に、兵法の要は唯だ身を捨てゝ敵を討つべし。對手も身を捨てゝ討つ時、其時たゞ初めて對(五角)になるなり。其時、勝つは、信心運命にあるなり。「又曰く「兵法などは習はずとも唯だ敵前にては、目を塞ぎ、身は一足なりとも踏込みて敵を討たねば、役に立たざるものと心得べし」とある。大隈侯の外交も此コツを應用されたのではあるまいか。「葉隱」の根本精神を經として新智識を緯としたのが大隈侯一代の外交のあやを織りなしたのではあるまいか。其當時の外交の六韜三略は漢譯國際法の一卷であつて、材料は頗る貧弱であつたに違ひないが、外交の方法や形式などは習得せずとも、兎に角目を　いで一足なりとも踏込んで談判すれば勝たないことはないといふ決心をして、切支丹門徒迫害問題の時に兎に角明治新政府の體面を維持されたものであると想像せらるる。

五　下手な字は書かぬ負けじ魂

最近の新聞に佐賀の大隈侯の親戚の回想談の中に、大隈侯府に三不思議がある。第一は親孝行のこと、第二は字を書かぬこ

と、第三は腹を立てぬこと、大隈侯が字を書かぬことも有名な話である。或雑誌記者が大隈侯に字を書かせやうと思つて、大隈侯の談話を筆記しながら、態と嘘字を書いた。すると大隈侯はそれを見て居つて、其字は嘘だと言はれたから、よし來りと思つて鉛筆とノートを出してどうか一つ教へて頂きたいと申上げた所が侯爵容易に其手に乘らずして、指を以て空中に字を書いたので、流石の記者先生も呆氣に取られたといふ逸話があるが、是は性來字が下手で、人に負けるのが厭であるから、それで字は書かないことに決めたのであらうと思ふ。「葉隱」に書き物は残るものなれば、手紙一通も向ふ樣にては掛物になると思ふて、嗜みて書くべきなり。然らざれば耻を書き置くばかりなりとあるは大隈侯のための好箇の辯護者といふべきである。親孝行は前にも述べてあるから繰返す必要はないが、大隈侯が腹を立てたことを見た人は餘りない。殊に浪人時代になられてから、社交術が非常に圓滿に發達されて、子供が來れば子供を旨くあしらひ、女が來れば女を旨くあしらひ、年寄は年寄のやうにあしらふといふやうに、非常に愛嬌好く待遇されたので、誰しも大隈侯は好々爺であると思つたのは無理でない。殊に私の如きは大隈侯が七十歳以後に親炙して居るから、自分の沒くなつた祖父に對するやうな、非常に打解けた態度を以て御話を承つて居つたのである。然るに葉隱には斯かる教訓がある。「短氣にては宜しからざることあり。氣長くすれば、時に或は上達の出來することあるなり。然れば先づ堪忍が第一なり」とある。されば葉隱にも腹を立つことは嚴禁して、萬事堪忍せよといふことを教へて居るのであつて、大隈侯は又其教訓を體現されて居つたのである。大隈侯に親炙したる者の最も愉快なことは、侯が愚痴を言はぬことである。何時も樂天で、いつも光明の方面を認められてゐたといふことである。是は無論葉隱の精神が現れて居るばかりではない。大隈侯八十五年といふ長い過去の體驗の結果であるが、その血液の中には樂天的な進取的な積極的な武士道の精神が溢れて居つたかと思はれる。

六　理財の天才としての大隈侯

大隈侯は外交に依つて天下に名を知られ、又財政通なるを以て能く政治家として成功することが出來た。大隈侯が青年時代東海道を上つて江戸に上らるゝ時に、途中で各地の米の相場を調査されて來たといふことである。如何に其當時より財政上の見識があつたかが分る。是は大隈侯の天性の素質であつて、葉隱の教訓にはないことである。

一體西南地方の武士は理財に長けて居る。是は生存競爭が激

しい爲めであつたかと思はれるが、長州へに理財に長けて居る者が多い。特に薩州人に理財に長けて居る者が多い。さて長崎は佐賀より二十九里しか離れて居らぬ。而も其當時日本に於ける唯一の開港場であつて、長崎に居れば學を成すと共に、富を蓄積することが出來るから、天下の勢を見るに機敏なる大隈侯は經濟的眼かを長崎に於て養成したことであらふ。大隈侯を助けて絶えず長崎假政府の對支外交を助けた谷口藍田の如きは炭山を經營し九州總督府の參謀井上侯は將來日本の財界の大立物となつた。又長崎假政府の創立者の一人であつた岩崎彌太郎は天下の富豪となつた。大隈侯が財政通になられたことは、長崎の背景を除いては理解することは出來ない。併ながら其當時武士の商賣と云へば失敗するに極つて居つたにも拘らず、大隈侯が能く日本の危い財政を整理せられて、今日の國家の基礎を安全ならしめたる功績は維新元勳と其功績を比して恥づる筈はない。大隈侯は晩年に至る迄此經濟的關係の事柄に興味を有たれたことは不思議ではない。

七　百二十五歳說と靈魂不滅觀

大隈侯が霞ケ關に於て明治二十二年十月來島恒喜の爆彈を受けて遭難せられた時に、それを實見されたといふ人の談話が新聞にも散見してゐるが、念の爲にそれも茲に附加へて考へて見る。馬車が走つて行つた時に横の方から洋服姿の男が白いハンケチに物を包んで驅けて來て、馬車を目がけてそれを投げた所が、それが馬車の一隅に當つて爆發して、侯爵は隻脚を切斷せらるゝやうな結果となつたのであるが、其實見者の言ふ所に依れば其爆烈彈が爆發した時に、覆を取つてある馬車であるから大隈侯の肩から上は無論能く見えて居つたさうだが、其時に山高帽子が少しも動かなかつたといふことは、如何に泰然自若たるものであつたかが理解される。是だけは長崎仕込の洋學などで出來ることでない、矢張先祖傳來の物に動ぜぬ、死を恐れない、否生死を餘所にして君國に奉仕するの大精神があつた爲に、斯かる立派なる態度が示されたのであつたらうと想像される。是も確に鍋島武士の精神の一の現れであると見て差支はあるまい。

大隈侯は度々重患に罹られて回復されたのであるが、是も一は元氣の賜である。其遭難當時に於ても此元氣があつたればこそ佐藤進博士の迅速にして靈妙なる醫術が成功したので、氣の弱い人であつたならば、或は其時に於て一命を失はれかも知れない「葉隱」に曰く「人は氣持が大切なり、重病にて相果て候

時も、今日死んではならぬことある間二三日は生きて居る可しと思ひなば、その爲めに氣を引き上げ、二三月命に確に生く延ぶべし。まことに元氣をたしかにせば、體は自然と元氣に伴ふものなり」と。此精神を現代の科學と結付けて大隈侯は百二十五年説を唱へたものであると思ふ。百二十五歳説を唱へたる大隈侯が、終に八十三年十一ヶ月にして永逝されたは遺憾の極みであるが、是亦人力の如何ともすることの出來ない所である。巴里のパステール研究所の所長で、世界的醫學者であつたメチニコーフ博士は百四十歳可能説を唱へたけれども、自分は、數年前、七十一歳にして病死した。侯爵が百二十五歳説を唱へて、之を實現するに困難を感ぜられたは殘念な事であるが、併し此理想は侯爵自らに取つて非常なる慰籍であつたばかりでない。天下の老人に對する大なる福音であつた。又侯爵は非常な負けぬ氣な人であるから百二十五歳を以てまだ滿足しない、死後は靈魂の不滅を固く信じて居られたのである。

大正元年の秋、侯爵が松島見物に赴かれたことがある。其時に私も御供をした一人である。歸京の折仙臺を夜行で十時頃立つたから、宮城野信夫の仇討で名高い白石驛に着いたのはもう十一時頃であつたが、白石中學の五年級の學生が校長伊藤尤美君に率ゐられてプラツトフオームに整列して侯爵を迎へた。其時は丁度秋の月が冴えて居つてプラツトフオームは晝の如くに明るかつた。大隈侯は深夜に學生の挨拶に來たのを見て非常に喜ばれて、直に立上がられて其禿頭を窓の外に出されて、學生に訓示演説を試みられた。私も秋の月の光の下で老侯の禿頭に映る月の光を眺めながら、月に反射する學生の顔とを見較べ其演説を傍聽した、すると侯爵は自分の頭を撫で、人間は肉體は死んでも魂は殘るものである。吾輩も百二十五歳説を唱へて居るが、百二十五歳の後にも靈魂は不滅であるといふことを三四分間ばかり演説された。私は實に元氣の盛なものであると感服した。多分侯爵は明皓々たる月の光の靈感に打たれたのであつたらう。

其後二三年經つてから早稻田大學の雄辯會と共に山陰道を遊説したことがある。其時出雲大社に參詣をした。それから歸つて山陰道の物語を侯爵に申上げ、出雲大社の御話をした。すると侯爵はあの雄大なる出雲大社及周圍の景色は、唯だ日本民族の御先祖の魂の働きである。魂が物質的形式的に現れてあの雄大なる規模となつたのであると言はれて、次に靈魂不滅論を試みられた。併し大隈侯の百二十五歳説は世間に傳つて居るが、靈魂不滅論は割合に傳つて居らぬことは甚だ遺憾であるが、侯爵が泰然として生死の間に往來されて居つたことは、靈魂不滅

に對する信念が牢乎として拔くべからざるものがあることを知らなければならぬ。尤も大隈侯の靈魂不滅論は宗教的哲學的の根柢がなかつたのでもあるまいが、侯特有の負けじ魂の發露とも考ふる餘地がある。

嘗てアンドルー・ラングは英國人を批評して、英人は利己的民族であるから政治と宗教が發達した。自己の財産を保護するために政治を改善し進歩せしめ、又死後自己の魂を永續せしめたいために宗教が發達したと述べたが、一寸面白い觀察である。而してラング自らが英人である所が興味のある點である。要するに大隈侯は英人と共通の點を持たれた。兎に角大隈侯の靈魂不滅説を理解するには、ラングの暗示が役に立つであらう。

八　應接間の主人役としての大隈侯

早稻田邸が私設外務省の評判をとつたことは久しいものだ。世界の名士が我が國に來て、見なければならぬものは富士山、日光、京都、奈良、瀨戸内海等の自然とか名所舊跡であるが、其他に數へたものは大隈侯爵であつた。侯は青年時代より長崎に居つて、外國人に接して居るから、洋行したことはないけれども、外國人をあしらふことは頗る熟練されたものである。元々自分は蘭學者であり、英學者であつたから、英語などは相當に理解されて居る。殊に英語の發音の良いことは吾々英語の先生が感服して居た。併し通譯は用ゐられた。私が通譯した場合に、可なりに面白い印象があつたが、大部分は忘れて居るので、今記憶して居る二三の例を申すと、英國リバプールの富豪で、自由黨の前代議士であつたホルト若夫婦が娘さんを連れて、一昨々年の夏の初め東京に見えた。私が紹介してホルト君は大隈侯に面會した。其時東京は非常に雨の長く降續いた時節であつた。一應の挨拶が濟むと、侯はニコリと微笑せられて、貴國に於ては霧、日本では雨が名物であると言はれた。其一語でホルト若夫婦が非常に侯爵に親しみを覺えられて、直に面白い話を交換さるゝやうになつた。斯かることは小さい事ではあるが、外國人を非常に親しみを覺えさせる所の一の挨拶であると思ふ。又何時か上海租界の英人の警部長が訪問したことがある。其時侯爵は上海の歴史を述べ、上海居留地に於ける英國人の貢獻を述べて非常に賞められた。さうして上海居留地の特色などを列擧されて、英國の施設が宜しいことを大に賞められた。全く長崎と上海は二百二十浬位しか離れて居らぬ。長崎の人は上海を東京よりも近く思ふて居る。現に昨年の春上海で聞

いた話であるが、長崎縣上海といふ舊昔の上海に屆くことがある。故に長崎で人と成つた侯爵が上海の事に興味を覺えられて居ることは無理もない。兎に角當意卽妙に上海の警部長に對して上海の物語をされたことは非常に好感を與へられたやうである。又愛蘭問題の話のあつた時に、侯爵は日本も朝鮮問題があるので同病相憐れむといふやうな挨拶をされて、其警部長は非常に喜んで歸つた。かゝる例を擧げれば果てしのないことであるが兎に角足一歩も海外に出たことのない侯が世界の學者や宗教家富豪、有ゆる階級の人々を相手に談話を交換されて、何れも好い印象を與へられたことは、大隈侯一個人としての名譽に止まらずして、新日本を世界に紹介するに於て大なる力があつたことはいふ丈野暮である。

大隈侯は其庭園を公開されて色々な慈善團體に園遊會を開かしめたことは、數限りないことである。又各地の靑年團、觀光團の如きものが旗などを押立てゝ、大隈侯に面會を求めて、短い演說を聞いて感謝して引下がつたことは無數である。殊に布哇、カリフオルニヤ、或は加奈陀邊に居る日本人が、母國觀光團を組織して東京へ來る時、必ず一度は大隈邸に來ることがプログラムの重要なる一項目となつて居た。かゝる場合に於ては是等の人々に茶菓を饗せられ、子供達には玩具を與へ、女達には花を與へたりして、隨分心を配られたやうである。外國人などの場合も同樣であつて、外國人が子供などを連れて來る場合には矢張玩具を用意されて與へられたり、婦人方には必ず温室から美事なる花を取つて、小さい花把を造つて贈られたものだ。かゝる微細なる點に迄心を配ばられたことは、餘程社交の妙に通ぜられたものであると感服しなければならない。「葉隱」に曰く、「人に出會ひしときは、其人のかた氣を早く呑み込み、夫々に應じて、會釋あるべきことなり。……是は誠の働き、詞の働きなり」と。私は「葉隱」の著者の尋常一樣の學者でなかつたことを驚嘆せざるをえない。

九　雄辯家としての大隈侯

大隈侯の雄辯は名高いものである。侯は雄辯家の素質を十分に備へて居る。第一、非常に丈の高い人である。そして容貌魁偉の人で、顏面の筋肉が緊張して表情に富まれた、頗る智的な容貌をされて居つた方である。面長で、額が廣く、鼻が高くて長く、口元は誰しも言ふ如くへの字に結ばれて居つて、容貌風采は雄辯家としての資格を殆ど備へられて居る。侯は子供の時から自宅に友人を集めて盛に討論されたといふのであるから、

座談に於ては餘程優れた方である。然るに演説をやられたことは比較的新らしいことである。廟堂時代にあつては殆ど演説されたことはなかつたさうである。又必要もなかつたに違ひない。然るに明治十四年廟堂を去つて、翌十五年に改進黨を結黨された。其結黨式に新政黨總理として已むを得ず演説なるものを初めて試みられたさうである。然るに其演説は非常な出來榮えで、黨員が狂喜して拍手喝采したといふことだ。大隈侯も非常なる自信力を得られて、それから演説を盛にやらるゝやうになつた。殊に最近三十年位は雄辯家として世間に知られた程演説をなされた。侯は天分優れて記憶力好く、材料豐富で而も孜々汲々として勉强を怠らざる人で、常に時勢に一歩先きんずることに努められた進歩思想家なるが故に雄辯家としての名聲を今日迄持續されて來たのである。侯は好んで長い演説をされる。現に昨年の夏の初め對米問題で一ツ橋の商科大學大講堂で演説された時も二時間もやられた。それで世間の人は侯が演説をするのは何等の苦心をしないのであらう、お茶のこさい／＼朝飯前の事だらうと思はるゝけれども、大隈家の斐沼執事の話を聞けば、演説から歸邸せられたる時は汗ビツシヨリになつて居るさうである。是は老體を以て長時間の努力に堪へらるゝから汗をかゝれたかも知れない。殊に大隈侯は演壇に上ればステツキは大抵テーブルの上に横へらるゝか、或は常に傍らに侍して居る久松家令などに渡されて居るので、氣が付くと侯が義足を付けて居る隻脚を以て演壇に立つて、良い方の足を折々後の方へちよい／＼動かさるゝことを見る位であるから、非常な努力を要して居られたに違ひない。然るに其事を知らずに、聽衆は侯が道樂に演説されて居るやうに思ふた者があるかも知れないが、是は間違ひである。世間はもう容易に此偉人の大雄辯に接することは出來ないと思ふから、今より過去の侯の演説を追懷して、感謝の念を新たにすることが必要である。

侯の演説は私は隨分多く聞いた一人である。其演説の長所は聲に威嚴があつて、而もそれに抑揚頓挫が著しくあることである。一種の音樂的階調を爲してゐるから割合に聲を枯らされなかつたのである。例へば侯は能く「吾輩は」といふ言葉を言はれたが、普通の人ならば「吾輩」はとスラリと行く。然るに大隈侯が吾輩といふ時は、「吾が」といふ所に力を入れて、「輩」で幾らか下げて來て、「は」で又一寸上げる。それから今度に上げて行くといふ風で、丁度大隈侯の聲は波形に行つた。それでも案外聲が疲れないで、聞く者に快感を與へた。そしてユツクリ話して居らるゝかと思ふと、時に非常にピツチを早めて吶喊するやうな口調になる。丁度蝮か蛇が餌物を狙つて居つて、初め

は默つて睨んで居つて、さうして愈々機が熟した時に赤い舌を出してパツと飛びかゝるやうな感を與へる。是はどうも他の演説家に一寸比類がない。他の演説家には大抵型があつて、ユツクリ行く人はユツクリ行く、早く行く人は早く行くと極つて居るが、大隅侯の演説は千變萬化されて行くから、そこは演説法から見れば甚だ興味がある。

もう一の長所は譬喩が旨い。是は確に演説の最も大切なる要素であるが、是も能く社會の事物を観察して居る人でないと旨い譬喩が出て來ない。書物だけ讀んだ知識では巧みな譬喩は出て來ない。今私の手廻りに大隅侯の演説集が無いから、其譬喩の標本を示すことは困難である、又私の記憶の中にもさう云ふ譬喩が今ないから茲に書くことは出來ないが、大隅侯の演説を聞いた人は誰でも思出すことだと思ふ。後藤男爵も中々譬喩が旨いが、後藤男の譬喩は少々下品な所がある。併ながら譬喩の旨い人の一人として後藤男爵の名も擧げなければならない。大隈侯の譬喩は中々上品で、そして要領を得て居る。是は演説に志す者が學ばなければならぬことである。又侯の演説の特徴はゼスチユアの多うかつたことである。一體日本の老政治家や元老などは演説する人が他に無いから、比較することは出來ないが、日本の今日の第一流の政治家でも此ゼスチユアは甚だ少い。

島田沼南先生の如き大雄辯家でも此のゼスチユアは殆ど無い。ゼスチユア無くして銀鈴の如き聲で整然たる論理を以て聽衆を魅するのは島田先生の大雄辯である。併ながらゼスチユアは無い、曾て今は故人となつた仙臺在住の宣教師デフオーレスト博士が島田先生の演説を批評して、島田先生の演説を聞いたが、二時間ばかりの大演説であつたが、其間羽織袴で端然として身動もなさらなかつたが二時間ばかりの中に右足を二遍ばかり一寸後方へ曲げられたことを記憶すると言つたことがある。然るに大隈侯は盛にゼスチユアを使ふ。殊に兩手を以て聽衆にオツ被せるやうな所がある。それから右の手をパツと電光石火の如く突出されて來る。

一體ゼスチユアはむづかしい事である。思想を纏めて、それを發表する方に精神が向いて居るから、手を動かすことは少し餘分の働きで、一寸出來ないことである。尤も中には悪い癖の人があつて、初めから矢鱈に演壇の上で踊をするやうに手を振つたり、或は米搗バツタのやうにペコ〳〵と身體の上半を動揺させる人などもあるが、さう云ふゼスチユアはなくもがなである。然るに大隈侯の態度は實に堂々たるもので、表面を見つめ、或は時に周圍の人を振向いて愛嬌を振撒かれて、必ず演説會の主なる人の名を引用したりし一演説の中に小さい變化と小

波を惹起さるゝのである。其ゼスチュアといふものは大隈侯の如き高爵の演說家としては、日本人として比類ない程であつた。

大隈侯が兩手を廣げて諸君！と聽衆を覆ふやうな態度を私は度々見馴れたから、時に私もそれを思はず知らずやつたことがあるらしい。之に就て面白い話がある。先年ハーヴアート大學の名譽教授ピーボーデー博士が東京に來られた時に私が博士の通譯をした。歸一協會が上野精養軒で例會を開いて同博士の歡迎をした。其時老博士が一場の演說をして、私が通譯した後で、私に言つた。貴君のゼスチュアを見て居ると兩手を以て聽衆の上にオツ被せるやうな癖がある。亞米利加ではあれと反對で、手を返して上の方に向ける。諸君よ！といふやうな時には、オツ被せるやうにしない。此方に引込むやうな態度を執る。先達大隈侯爵の演說を聞いたが、大隈侯も矢張君と同じやうに聽衆にオツ被せるやうにされたが、大隈侯は年をとられて居るし有名な方であるからあれでも宜いが、君のやうな若い人はあれを眞似ない方が宜いぢやないかと云つて笑はれたことがある。兎に角ゼスチュアの少い日本の演說家の先驅の中に、ゼスチュアの多い大隈侯のあることは、演說學から見て私共非常に意を强くして居つた所である。

又侯の演說家としての長所は其內容が豐富であつたことである。侯と雖も時として內容の豐にない演說をされたこともある。それは來客が多くて演說會場に來る瞬間迄話をして居る。其時は如何なる雄辯家と雖も十分に思想を統一することが出來ないから、時にはシドロモドロのことも稀にはあつた。併し多くの場合內容頗る豐富であつた。それは非常な勉强家であつたからである。侯は確に一面には耳學問の方面もあつたに違ひない。人の說を聞いて能く之を消化して自己のものとされた。其は大演說家には誰しも共通の點である。佛蘭西のミラボーが人の話を聞いて、それを演說する時には、聞かせた人よりも十層倍も旨く自分のものとして聞かせたから、最初聞かせた者は地團太踏ん悔しがつたといふ話である。雄辯家としての大隈侯には無論此方面があつたに違ひない。併しながら其演說の內容が耳學問から許り出たものと思ふのは大なる誤解である。侯は午前より午後に亘つて來客に應接せられて、客が散ずれば書齋に歸へる。歸へれば必ず書物を讀まれる。夜は午後九時には床に這入られたさうであるが、書見は非常に多くされて居るといふことである。文明協會の飜譯書の如き新刊は片端から讀まれ、又一種の讀書法を有つて居られた。先づ序文を見、次に目次を見、重要なる點を見てそれを理解されたから、書物を讀むことは非常に早かつた。そして書物の大切な點だけを記憶せられた

のである。

一昨々年かの議會で普選問題で大騷ぎをやつた時、憲政會の一代議士が大隈侯の應接間に來て居られた。私も用事があつて其所に行つて居つた。すると侯が言ふのに、現政府を攻撃するのに、攻撃の方法が駄目だ、あのやうに何もかも持つて行つて攻撃しては、集中力がなくなるから、要點を擧げて其大所局所に向つて攻撃力を向けなければいけない、時に君はルボンの群衆心理を讀んだかと質問をせられて、其少壯代議士はまだ讀みませぬと答へた。それなら文明協會のルボンの群衆心理の譯書があるから讀め、それを讀めば其コツが分ると言はれた。

又侯はエドワード・カーペンターの戀愛論の如きも大觀の論文などに引用されて居るから、新刊物の目ぼしいやうな物は手當り次第讀破されて居る。又地方旅行の時に入れ替り立替り地方の有志が停車場に挨拶に來て、二つも三つも停車場を過ぎる迄お伴をする者がある。其時は大隈侯は少しも憶劫がられずして、何人相手が代つて話をされて、話相手が絶えると必ず新聞雜誌なり書物を讀んで居られた。此の如くにして大隈侯は多忙な時間を利用して、絶えず勉強されたるが故に、材料豐富な演説が出來たので、此點は演説に志す者が大に學ばなければならぬ。能く侯の演説を法螺七分に實三分と大まかな批評をする人があるが、是は半面を知つて他の大切なる半面を閑却したものと言はざるを得ない。

何と言つても侯の雄辯家としての資格は精神氣魄である。聽衆を呑んでかゝることで、子供の如く扱つて、教へるが如く悟すが如くひやかすが如き態度を執らるゝから、さも自由自在に聽衆を動かしたやうであるが、兎に角充實したる精神氣魄は一大靈感を與へた。侯の畢生の事業は自分の一代の中に日本民族の文化を歐米の同列に迄高めてやるといふ大なる功名心が燃えてゐたのである。それで瘦我慢を通して來たのである。それで外交の局にも當つた、それで學校も創立した、それで著述もした、それで雜誌も發刊した、講義錄も出した、演説もやつたのである。自分の目の玉の黒い中に日本の文化を西洋の文化の水準に迄持つて行つて見せるといふ大なる希望があるが故に、如何なる演説に臨んでも講演に臨んでも、其焰々として燃える胸中の火があるから、其演説講演には一種の生命が　れて居つたのである。今や此文化の指導者が易簀して再びその温容に接するの機會を得ることが絶無となつた今日に於て少壯文化運動者の使命は甚だ大なるものがある。

十　敎育家としての大隈侯

横山健堂君が「伯大隈」に於て次のやうなことを言つて居る。若し大隈侯が死んでから地下に於て西郷に會ふた時に威張れるものは早稻田大學總長であるといふ一事であると。確に早稻田大學總長としての大隈は、鹿兒島の士學校の校長としての西郷よりも偉大なるものを成就したものである。是は面白い觀察である。元々大隈侯は青年時代から教育に興味を有つて居つたらしい。第一長崎に於て致遠館といふ私立學校を創立して、英語や數學や其他日進の學問を教へて、嘗て自分の先生であつたフルベツキをも講師の一人とし迎へたさうである。致遠館を開く前に英語禁止の時代があつた。然るに蘭學は駄目だと見込を付けた侯は英語を學んで、今度は自分が英語の先生になつて教へた時代がある。

此事に就て面白い逸話がある。數年前夏休の間であつたが、或日の午後、突然一人の老人が來て、何か書物を賣付けに來た。玄關に出て見て面白さうな老人であると思つたので、夏休で暇なものであるから、退屈凌ぎに其老人を應接間に招じて色々話を聞いた。其老人は薩州出身の人で甚だ失意の境に在つた人であるが、青年時代は西郷南洲の左右に侍つて、西南戰爭にも從事したといふた。其老人の追懷談に長崎遊學談があつた。其老人の言ふには、自分が長崎へ蘭學の稽古に行つた所が、蘭學が不景氣になつて英學でなければ駄目だと悟つたが、併、英學を表向き教へる人が無い。コツソリ夜學をして居る先生がある。それは佐賀藩の大隈八太郎といふ若い先生である。それから其先生に私かに弟子入をして折々其宿所へ行つて教はりました。其八太郎先生は髪は大名髷に結つて立派な服裝で、端然として室の正面に座つて、弟子達數名を集めて英語を教へてゐたが、教科書は一冊しかなくて、先生が一冊持つて居るだけで、弟子は教科書が無い。それで私達は矢立を出して筆を以て手帳に先生の發音を聞いて假名で寫取つた。其教科書は何でもウイルソンのスペルリング・ブック第一卷と記憶して居る。其最初の句は今も覺えてゐる。それはかういふのです。What is the world? It is a planet on which we live.「世界とは何ぞや、吾々が棲息する所の一遊星なり。」其最初の句は今尙ほ覺えて居ると其の老人は誇顔に言つて居つた。その發音も可なりなもので、八太郎先生の教授法の確かなものであつたらしい。其英語の先生こそ誰あらう、將來の大隈侯爵であつた。

大隈侯に對する英語の影響と云ふとは非常なものと考へる。第一スペルリング・ブックの開卷第一の世界とは何ぞや、吾々の棲息する一遊星なりといふ、其雄大なる思想は若き大隈の精神をどれだけ刺激したか分らない。其當時の一般日本識者の世界

觀は、甚だ小さいものであつた。自分の生れ故郷を以て世界の中心と考へて居つた者が多かつた時に、世界は一の遊星であるといふやうな思想を吹込んだものはウイルソンのスペルリング・ブックである。而して後來大隈侯の雄大なる精神を形造つたものは、支那の古典と英學の力であるに違ひない。

早稲田といふ土地は教育と餘程密接な關係のある所である。今の大隈邸は先に讃州高松の松平家の別莊であつたのを三井家が買受けたものらしい。然るに戊辰の際に御用商人があつて、それが官軍と朝敵の兩方に軍需品を賣付けて、大儲けをしたことがある。今其名を記憶しないが、戰爭が濟んでか　其御用商人が奇特にも菩提心を起して、何か罪亡しに善い事をしたいと言出した。それで或人が薦めて學校を開けと言つたので、三井家から今の早稲田邸を買つて、其所に別莊があつたから、それを直して北門商會明治新塾といふ學校を建てた。それで山東直砥と云ふ人が學監であつた。

之れに就て一つの挿話がある。それは宮城縣の前代議士首藤陸三翁より私が直接聞いた話である。首藤翁が明治の初年日本橋か京橋かの醫者に藥局生をして居つた時に、江戸遷都のとがあつて、明治天皇が千代田城に御移りになつた。藥局生たる首藤君が必死になつて、どうか天子樣の行列を拜ませて戴きたいと言つた所が、其醫者は非常な不機嫌で、此の忙しいのにお前などは行く必要がない。殊にお前は仙臺藩出身であるから朝敵ではないか、朝敵の身分を以て天子樣を拜みたいなんといふことは言語道斷だとやり付けられたので、首藤君大に憤慨し、それならお暇を戴きますと言つて、其醫者の家を飛出して、今の丸の內邊へ來て行列を拜んだ。拜んだ迄はよかつたがさてこれからの行く所がない。ウロ〳〵して居る中に貼紙が目に止つた。其廣告を見ると、牛込の奥の早稲田に明治新塾といふ學校があつて、力役生を募集してゐる。力役生とは苦學生のことである。他に行く所がないから、神樂坂の方へ歩いて、早稲田は何所だと聞いた。まだ〳〵といふので辿り辿つて行つた所が、田圃と茗荷畑の中に明治新塾といふ看板が掲つて居つた。其所へ行つて力役生を申込むと、直に採用された。力役生の仕事は毎朝廣い廊下を拭くことで、それが濟むと英語や何かを教へる。其當時仲間には尺振八、福島安正などといふ人が居た。で英語を幾らか教はつたが、先生の方に教へる物がなくなつたらしい。そこで早速首藤さんが助手に拜命された、所が何れも苦學生の寄集りで、冬綿入を持つて居る者が無くて、單物ばかりで、寒中寒くて眠れない。そこで晝間日のある時に庭に出て日向ボツコをして寝る。單物か袷を着て居るから夜は

寢ないで勉强した。それから夏になると蚊帳を持つて居る者が無い。喜久井町の今の早稻田中學の前邊りに紙蚊帳を賣つて居つた。それは大福帳などの古い帳面で蚊帳を造つて、それに澁を塗つた物で、其紙蚊帳を買つて來て其中に寢たが、紙蚊帳であるから風が通らないので、暑いこと夥しい。幸ひ首藤さんの敎へ子の中に相當な家の者が居つて、蚊帳を持つて居るので、其蚊帳の中へ這入つて寢たが、紙蚊帳の中に這入つて居る者は眠れないから、夜中に起きて、紙蚊帳の裾を上げて扇で風を入れる。此の如きことをして居る内に明治義塾を卒業して、新潟の英語學校か　校長に任命されることになつた。旅費を貰つたが仲間と一緒に飲んでしまつて、殘る所は甚だ少くなつた。それで手廻りの荷物を二包に入れて、油紙で包み、兩掛と云つて頸の前後に掛けて、信濃路を通つて新潟に這入つた。そして何とか云ふ大きな宿屋へ草鞋を脫いだ。所が變な書生が來たといふので行燈部屋のやうな所に入れられた。それから縣廳へ到着しましたと報告した。すると新潟縣令から返事が來て、明日縣廳に出頭すべし、烏帽子、直垂着用のこと、但麻裃代用苦しからずといふ返事が來た。首藤さんビツクリして宿屋の主人を呼んで、縣廳の小役人になるのだが烏帽子直垂着用の上出頭せよとあるが、どうしたものかと相談した。すると主人の言ふには新潟は御承知の通り商人の町で、玄關のある家はまだ一軒しかない位で、烏帽子直垂なんかを持つて居るものはございませぬ。それなら麻裃は無いかと言つた所が、主人は頸打傾けてこれなら幸に持合がありますと云つて貸して呉れたから、翌日勇みに勇んで麻裃を着て縣廳に出頭した。さうして辭令を戴いた。所が縣令始め臨席の人々がクス／＼と皆な笑つてゐる。何の爲に笑つたかと云へば後で分つたことであるが、其麻裃は女義太夫の着る物であつた。それから宿へ歸つて主人を呼んで、主人今縣廳から歸つたが、斯う云ふ辭令を貰つて來たよと見せた。所が主人は其辭令を見て顏色を變へてしまつて、今迄縁の上に居たのをスル／＼と滑出て、椽側に低頭平身して、實に貴方には御無禮致しました、月給八十圓といへば縣令樣より五番目の御方だ、どうも今迄は粗末のことを致しましたと言つて、直に手を叩いて女中を呼び、此お客樣は大したお客樣だから二階の松の間に御案内するやうにといひつけた。

其當時は英語の讀本の三四冊も讀めば英語學校長に成れる時代であつた。是は一の插話であるが、兎に角早稻田は明治の初めより多少敎育に關係のある所であつた。

で大隈侯が廟堂を去つたのは明治十四年、十五年に東京專門學校を早稻田の森の中に創立した。是は世間が普ねく知つて

居る。大隈侯の參謀長格であつた小野梓氏を中心として高田早苗、天野爲之、山田一郎等の當時の秀才が集つて創設したのである。大隈侯が東京專門學校を創立したのは學問の獨立といふことが目的である。此學問の獨立には二樣の意味があつたのである。明治三十六年に早稻田大學が開校式を開いた時に大隈侯は演說をされた。其一節に曰く、

『此學校も殆ど二十年といふ歷史を持つて居るのである、此二十年前に於ける敎育の有樣は、今日と比べて見れば甚だ幼稚なものであつた。併ながら既に二十年前に吾々は一の考を持つて居つたのである。只今も高田君が演說された通り、學問の獨立と云ふことである。是は二十年前に突然考へたといふ次第ではない。從來吾輩は一の議論を持つて居つたのである。即ち國民の意志が常に政府の意見と同一になるといふことはないのである。或場合に於ては政府の意見と國民の意志と背馳することもある。若し此敎育といふものが一の勢力の下に支配されて居れば、或は國家の目的を誤つことがありはしないか、是は一の杞憂である。併ながら有ゆる勢力から離れて學問が獨立するといふことは、或は國家に貢獻する上に於て大なる利益ではあるまいか、殊に此の如き學校が盛になれば、自ら官立公立の學校にも多少切磋琢磨の利益を與へはしないかと考へたのである。又二十年前には高田博士の御話の通り、高尚なる學問は外國語に據らなければ決して出來ないといふ時であつて、一の學校の下に一の學理を敎授するにも、或敎場に於ては獨逸語で敎授し、或敎場に於ては英語で敎授し、更に轉じて他の敎場に於ては佛語で敎授すると云ふ風で、學生の間にも佛蘭西學派、英學派、獨逸學派といふ如き學派が起つて來たのであるから、殆ど國民的精神を失つて、佛蘭西に依り、獨逸に依り、將た英國に依り、始めて自分の考を形造るといふ弊が起りはしまいかといふ憂慮があつたのであります、只その一國の獨立に最も必要なるものは國語である。文字である。之に續いて即ち學問である。日本の言葉文字が高尚なる學問を言ひ現はすに不十分なれば已む、苟くも然らずして三千年の歷史を持つて居る吾々の言語、文章といふものは、如何なる學理も十分に解釋し說明することが出來るのみならず、外部の文明に結付いて何所までも進步することが出來るとする以上は、どうしても此學問の獨立、即ち日本の言葉を以て有ゆる學術を修めさせたい、斯う云ふ考であつたのであります。此考に就ては其當時小野梓君と議論したこともある。是が東京專門學校創立の動機となつたのである』。

最初東京專門學校は現在の早稻田大學の敷地內に在る正門を這入つて直に右手に在る所の粗末なるペンキ塗の文學部の敎室が一棟あつただけで、其傍らに寄宿舍があつた。それで開校當時の學生は八十名位で、次第に學生は殖えたさうであるが、最初の三年間位は每年大隈家より二千圓位の補助があつたといふことである。高田博士、天野博士の如きは專任講師として一週間三十時間、而も數科目を擔當して月給三十圓であつたさうである。各講師の中には代言人をやつて居つた者もあるさうだが、各講師、敎師は十五圓位であつたさうで、如何に財政が困難で

あつたかが分る。又其當時高田博士、天野博士の諸君が政府が手を廻して、役人に採用するといふ誘惑を退けて、獻身的に盡いて、今日の早稻田大學の基礎を造られたといふ功績は永遠に忘れることが出來ない。所が學生の方は、大隈伯が校主であるといふの　授業料を納めない者が三分の二位あつた。それで三年過ぎてから大英斷をやつて、授業料一圓であつたのを一圓八十錢に引上げて、授業料滯納者は停學に處するといふ大決心をして色々なる困難があつたけれども、其後東京專門學校の財政は獨立して今日に至つた。今の講堂の在る煉瓦建の洋館は、大隈侯が有名なる高利貸某より金を借りて建てたものださうである。其高利貸先生は毎月定つた日に小さい鞄を下げて月賦の掛金を取りに來るので弱つたといふことである。

或時どうしても大隈家の財政が旨く行かないので、月賦を拂ふことが出來ないことがあつた。そこで大隈侯は、今日はあの男にウンと御馳走をしてやれ、さうしたらまさか催促はしないだらうといふので、非常に御馳走した。すると御馳走をペロリと平らげて、時に月掛は頂戴出來ませぬかと催促されので、今日だけはまあ我慢して呉れないかと、流石の大隈さんも弱音を吐かれた。所が其高利貸先生の言ふのに、金が私の生命でありますから、どうしても御容赦は致しませぬと頑張られたといふことである、是は私が親しく大隈侯より直接聞いた逸話である。

又學校創立後には精神的の困難も少くなかつたのである。侯の懷舊談の中に次のやうな話がある。

「扨東京專門學校を起して見ると、中々困難である。就中世間一般から彼の學校は大隈の野心から起つたもので、何か政黨の方へでも利用するものゝやうに疑はれた爲に一層困難を感じた　此の疑は實に無理からぬ話で、自分は當時政治上に於て政府の反對側に立ち、且政黨にも關係して居る、それで學校の爲に働く者はどうかといふと、皆な自分の知友で、政治上にも同じ主義を持つた連中であるから、眞相を知らぬ者が疑ふも無理はない。併し此の疑は隨分烈しいもので、殊に當時の政府からは非常に嫌はれた。それが爲め學者も成べく避けて學校へ出ることを好まぬ。随て教員は不足する。已に教員となつて居る者の中でも、政府に妨げられた爲め、據ろなく手を引く者も少くない。殆ど一時は教員が半數程に減つてしまつた。それが爲に内部にも學校を移轉することに就て議論が二派に岐れる。内憂外患一時に至るといふ有樣　自分も短氣を起して最早斷然學校を止めてしまはふかなどと思つたことも屢々あるが、遂に困難を凌いで今迄も維持して行くことになつた。其後自分は再び政治に關係して足を切られる、世間からは攻撃せらるゝ、是が亦學校に迄及んで色々な嫌疑を受けたが、幸ひ關係者の熱心勉強に依つて、廢校の悲運を見るやうなこともなかつたが、此の世間からの疑は中々解れない。漸く昨今に至つて全く去つたやうな次第で、尙ほ一部には多少誤解を抱いて居る者もあるが、一般からは稍々眞相を認めらるゝやうになつた。併し學校でも人間でも同じこと

何の困難も無く、呑氣に成長した者は、一寸した風雨に逢ふても直樣壞れるが、辛酸を經て來た者は基礎が固いから結局は勝を占めることが出來る、學校の從來有ゆる困難を嘗めて來たのも、或は却て幸ひであるかも知れぬ。將來もまだ〳〵種々の困難に遭遇する、惟ふに從來にも增した困難があるであらうが、此の心を以て處すれば困難も却て愉快であらうと思ふ。東京專門學校も漸く大學となつて益々隆盛に向ふが、決して之に安んずべきでない。究竟は帝國大學と同樣の地位に迄進めたいといふのが自分の希望である。斯くして官立大學と併び立つて互に切磋すれば結局我が學問界の進步を助くることになる。玆に至つて始めて當初の理想を達することが出來ると思ふ。』

東京專門學校が二十年前に早稻田大學と改稱した。同時に大隈侯を總長と戴いたのである。其後大隈侯と早稻田大學との關係は甚だ親密になつて、大隈侯は益々早稻田大學の爲に努力せらるゝやうになつた。又早稻田大學改稱後、今日迄の發展は主に高田博士、天野博士、坪内博士の三頭政治、而も主として高田博士が經營の任に當られた結果であるが、高田博士も基金募集のことには隨分難儀苦勞をされたのである。此事に就て大隈侯の懷舊談の中に次のやうなことがある。

『東京專門學校が世間から寄附金を募るといふことは、今度が初めてで前に言つたやうに一般から妙な嫌疑を受けて居た位だから、是迄は世間からは三文でも金を募集するなどと云ふことは出來ない。寄附どころか、一時は此の早稻田の近邊を通ると、あの人は東京專門學校に關係があるとか、大隈の所へ行くのだとか言はるゝので、それを怖く思はれた爲め、早稻田近傍の人通りも少くなつた位である。云々』

斯かる次第であるから其困難も察すべきであつたが、大學の經營者其の人を得、又大隈總長の聲望が之を助け、世間の同情が次第に加つて、早田大學の今日の盛大を成すことが出來たのである。

早稻田大學が大を成すに至つたことの一原因は抱擁主義である。早稻田大學創立の際に世間の祝詞が大分あつたが、國民新聞の門外漢が次のことを述べて居る。即ち門外漢は早稻田大學の發達は經營者其人を得たのであると解釋して曰く、

『其人とは第一大隈伯自身なる可く候。第二には小野梓氏の如き適當なる人あり。其紹介に依りて高田、坪内、天野諸氏の如き適材を得て之をして其力を竭さしめたるにあり。而して第三には廣く門戸を開いて良材を納れたるにあり、例せば記者の知る所を以てするも 故大西祝氏の如き、若くは浮田和民氏の如きあり。而して早稻田の學校が、外來の講師に負ふ所の少小ならざるは、恐らくは大隈伯の率先して認識する所なる可く候。

人事實に偶然に似て偶然ならざるものあり。故大西氏の如き、若くは浮田氏の如き品質の上に於て早稻田の重きを來したる有力なる要素の一が期せずして同志社より來りたるも不思議に候。所謂楚材晉用とは此事歟。乃ち單に其の成行より見れば同志社の水脈は端なく早稻田に注ひで其の流勢を膨脹せしめつゝありと謂ふも不可なきに似た。是

れ一例に過ぎざれども、早稻田の大を爲したる所以を知る可し」

今日は早稻田大學も其卒業生の中より初めて學長鹽澤博士を選び得るに至つた程で、一萬五六千人の校友を有するが故に、教師、講師中にも、卒業生中にも秀才學者少なからざるは意を強ふする所であるが、尙ほ將來の發展を期するが爲には、早稻田大學創業の精神に伴ふてある抱擁力を忘れないやうにしなければなるまい。早稻田大學開校式に於て公爵伊藤博文氏が祝詞演說を述べたことは甚だ興味あることであつたが、其一節に次のことを述べて居る。

「次に一言すべきは此東京專門學校を以て政黨擴張の具となさんとするものの如く誤り見たるものが多いといふ事であります。是は大隈伯爵の識見を誤認したものと認める大隈伯爵は政治教育共に熱心であるが、固より政治と教育の別を知つて居られる、學校教育の事業は之を政治の外に置き、教育機關を濫用して黨勢擴張の具とするの策は斷じて取られなかつたことは明に認める。是は世の中の具眼の人は分つて居るか知らぬが、多くは之を誤解して居つた。私は局外者である。局外者の意見は却つて公平を失はないかも知れぬに依つて世上に向つて一言之を言明せざるを得ぬのである。」

一面から見れば是は伊藤公の機智談であつたかも知れない。序でに私一個人として玆に述べたいとがある。世間では早稻田大學を以て大隈黨の養成所の如く心得て居るが、早稻田大學は教授や學生の政治上の立場には毫も干涉は試みない。早稻田大學の出身者の代議士の中にに憲政會に屬して居る者も多い。國民黨にもある、無所屬にもある。政友會に屬して居る者も多い。國民黨にもある、無所屬にもあるといふやうな譯で、早稻田は世間が思ふやうに憲政會に偏して居るのではない。其點に於ては早稻田大學は依然として獨立不羈である。現に教授中の一人副島義一博士の如きは寧ろ非大隈黨を以て佐賀市より選出せられて居る。併ながら早稻田大學教授としての位置には何等の變動は無い。大學に於ては何等の干涉も壓迫も加へて居らないやうに見聞して居る。是は確に早稻田學園の誇であつて、大隈侯自身の大風呂敷主義、並に高田博士の包容主義が、今日迄此學風を造り來つたものである。是は政治上の意見許りではない。思想上に於てもさうである。一方には安部磯雄氏の如き淸敎徒主義の人があるかと思へば、島村抱月氏の如き自然主義の驍將もあつた。併ながら何等感情の衝突なくして、有ゆる思想の人々が此學府に共に存在することの出來るのは、又此學園の光榮であらねばならぬ。

宗教にしてもさうである。佛教家もあれば、儒教家もあれば、基督教家もあれば、哲學宗の人もある。有ゆる人を抱擁して其間何等宗教上の衝突なきことも亦、此學園の誇でなければならない。

早稻田大學も新大學令發布と共に初めて官立大學と同一の位

置に立つた。是は獨り早稲田大學のみならず、總ての私立大學關係者の滿足する所であるが、殊に大隈侯は非常なる滿足をせられたに違ひない。

早稲田大學の重要なる儀式に際して大隈侯が、燃えるが如き眞紅の絹のガウンを着て、式壇に立たるゝのは、傍から見れば稍々滑稽に思つた人があつたかも知れぬが、大隈總長は披もそれを光榮とせられて居つたので大學總長のガウンを着て早稲田大學に臨むことは非常なる滿足と喜びであつて、是は他人の想像以上に喜ばれて居つた。數年前蒙古のラマ僧が早稲田邸を訪づれた時に、侯は吾輩も法衣を有つて居るから、御目に懸けると云つて大學總長のガウンを見せたので、ラマ僧は非常に喜んで日本の貴族は矢張法衣を有つて居るのだなと思つたといふ話がある。

大隈侯は皇室の厚遇に對して絶えず感激されて居つたことは言ふまでもない。又早稲田一萬餘の學生の爲に敬愛さるゝことは此の上もない滿足である。病中度々もう一度丈夫になつて一萬の學生の顏を見たいと、見せたいと繰返されたといふことである。昨年十月中旬重患の時に學生有志が僅許りの金を醵金して大きな植木鉢を御見舞に上げた所が、病室の隣の室に暫くの間それを飾られて、喜んで始終ほゝえみながら眺めて居られたといふことだ。早稲田大學が大隈總長に負ふ所は少くないと同じく、一萬の青年學徒が大隈侯に常に新生命を注入して居つたことも併せて考へなければならぬ。早稲田學園は從來大隈侯の背景を以て存在して來たのであるが、悲しいかな總長再びそのガウン姿を早稲田の學園に示すことは、出來なくなつた。愈々獨立獨行の精神を發揮しなければならぬ。此點に於て早稲田大學は侯の長所を學んで元氣を盛にして、絶えず奮闘し、絶えず勉强して新生命を發揮して、常に社會の風潮に先んじて先覺者、開拓者の任務を盡さなければならない。今や正に早稲田大學の幹部は申すまでもなく、吾々教授の末席にある者　亦校友學生が等しく心を潜めて考へなければならぬ秋である。

大隈侯が早稲田大學で遺憾に思はれて居ることは幾つもあるが、其一は大學が大講堂を持つて居らないことである、侯爵が創立せられた所の煉瓦の講堂があるけれども、數百名の學生を容れるに過ぎないので、少くとも三四千の人を容れる講堂が必要である。事は絶えず大隈侯が言はれて居る。寺には本堂が必要である。大學には大講堂が必要である。是は口癖のやうに繰返されて居つたが、侯の御健康の中に其理想とする大講堂の實現せなかつたことは甚だ遺憾とするが、遠からざる將來に於て侯が日本の文化に貢獻したる所の大なる勳功を紀念する意味

に於て、早稻田大學の理想の大講堂が建設されなければならぬ即ち大隈講堂が早稻田の森の中に聳え立たねばならぬ。此場合に於て社會の同情が此意義ある所の事業に向つて注がれんことを希望する。來る十七日日比谷の國民葬に會する幾萬の人士は今より之を念頭に置いて貰ひたい。

東京專門學校は最初、今は故人となられた大隈家の嗣子英麿氏が米國に於て理學を研究され、歸朝して理學の學校を建てる計畫であつたのを、政治、經濟を加へて東京專門學校を創立されたのであるから、早稻田大學の理工學部の加つたことは、謂はゞ其當時の精神が復活したやうなものである。併し早稻田の理工學部は帝大の工學部に匹敵するもので、理學部に屬するものは未だない。是も侯は將來早稻田大學の中に加へたいと希望されて居つたに違ひない。

大隈侯が早稻田大學を愛せられて居たことは、自分の生命の如く考へられて居つたことは、此前の騷動で分る。此前の騷動は學校としては大事件であつたが、當時病中に呻吟せられて居つた老侯は非常に心痛された。流石の樂天的の大隈侯も其時は自分も病氣であるし、學校も病氣であるといふので、二重の苦勞をされて、遂に侯の懇望默し難くして、澁澤子爵、故森村男爵、豐川良平氏、中野武營氏の如き財界の大立物が集つて、一時早稻田大學の維持員として其難局に處せらるゝに至つたのである。世間が考へて居るよりも大隈侯自身は早稻田大學を愛せられたことの深いものがある。是は早稻田大學の卒業生、在學生及一般同情者が深く記憶すべきことである。

私學が存在して居るのは單に國民教育の缺陷を補ふに止まずして、官立教育の缺陷を補ふ大なる使命がある。此使命を果さなければ私學存在の意義が消滅するのであるから、私學にはいつも清新の氣風と、溢るゝ元氣と生命が存在しなければならぬ。今日迄は大隈侯が其鼓吹者であつた、少くとも鼓吹者として大部分の原動力であられたが、今後に容易に此恩惠を私することが出來ないとするならば、現在の早稻田大學關係者は、自ら振ひ立つて、自己の中に新たなる生命と元氣とを溢れ出でしむる他はないと思ふ。

十一　學者及び記者としての大隈侯

侯は實に多種多樣の趣味を有して居る方であつた。外交家であり、財政家であり、教育家であると共に學者であり、文明批評家であり、又偉大なる新聞記者であつたのである。侯が學に志されたことは浪人になつてからであるが、東京專門學校十五周年祝典の際に、大隈侯の演說の中に次の一節がある。

「私が學校を立てた理由は初めは今御話した學問の獨立であるが、次は何であるかといふと、私の成立ちは、丁度ペルリの來た時は私は十五才であつた、それから御維新が丁度三十歳、丁度此間十五年、最も大切なる學問の時期を今日で云はば先づ壯士的運動の爲に、少しばかり本は讀んだけれども學問の必要な時期を種々の出來事の爲に全く無用でもなかつたか知らぬが、今日の學問から云はば此必要な時期を無用に費したと言はなければならぬ。凡そ人といふものは總て不足はある、物といふものはどうしても空所を滿たすもので、今此コツプの水を飲む、水が無くなつた、併し無くなつたと思ふは大間違ひ、其後に空氣が入り代つて居るやうなもので、自分が學問をしないといふ不足を人に學問さして、それで補はふといふ考であつた。」

兎に角學問好きの侯が、國事多端の際で學問する機會が無くて、實際の政治運動に携はり、國家の樞務に參與したから、其學問慾を滿たすことが出來なかつた。明治十四年以來民間の大浪人となられて、兎に角暇があるから、其間に學問をされた。前にも述べた如く侯は日本文明を歐米文明の同列に引上げる迄は滿足しないといふ大なる功名心があつたので、絶えず自分も奮發された。夫には雜誌「新日本」を經營され、今又「大觀」を主宰されて居ることは之を證明して餘りある。

侯の雜誌の論文は單に政治經濟外交の問題に止まらず、文化問題に觸れて居る所が甚だ多いので、そこに大隈侯が學者としての一面がある。侯は學問の中で最も歷史に興味を有して居た。そして歷史は一切學術の根柢であると確信してゐた。勿論國史に餘程精通されて居たが、支那の歷史にも精通されて居た。又歐米の歷史について、大體の歷史のみでなく、各國個々の歷史を知つて居らるゝ。是は驚くべきものである。例へば英吉利なら英吉利の歷史、西班牙なら西班牙の歷史とちやんと記憶せられて、嚢中物を探るが如く、其驚くべき記憶力の中より歷史的事實を捉へ來るのである。又支那の古典にも非常なる興味を有せられて、演説の際にも度々之を引用される。四書五經の有名な句の如きは常に暗記せられて、直に談話の際にも、演說の際にも、或は論文にも引用されて居ることは、人の普ねく知つて居ることである。

いつか女子教育問題に就て談話をされて居る時に、世間には頑固な者共が多いから、男女同等に就てバイブルの句などを引くと、頑固連中は氣に入らないから、日本の古典を引用すれば宜い。即ち日本の古典では伊弉諾命伊弉冊命といつて、男も女も尊であるから、男女同等だといへば頑固連中も反對はあるまい。又中庸には「君子の道は端を夫婦に造す、其至れるに及びては天地に察なり」といふやうな句を引けば漢學者連中も新男女道德論に反對はしないのだといはれたことを記憶し居る。

能く大隈侯には智恵袋が付いて居つて材料を供給すると考へ

る人もあるけれども、大部分に於てそれは間違ひである。一體大隈侯は人の言ふことなんか中々肯入れるやうな人でない。皆自分で研究されたのである。現に侯の老友の一人久米邦武博士も非常な話好きで、人に話させない。そこで兩人相會すればお互ひの話を聞かないで、自分の話ばかりして居るので、間に在つて聞く者が話が混雜して聞き惡かつたといふ位である。是は侯と對談したる經驗ある人は記憶するであらう。故に何か自分の意見を述べんと欲すれば、侯の話の終るのを待つて居つたら時機がない、ドン／＼續いてまるで立板に水を注ぐ如く話頭を進められるから、多少自分の意見を述べたければ、侯の語り終らない中に吶喊して行つて、無理に話を奪はなければ、自分の意見を述ぶる機會はなかつた程である。無論重要なる問題に就ては別であつたらう。されば中々人の意見などで動く方でない、自分で書物を讀んで、其讀書力を以て自ら判斷を下されたのである。若し侯が政治家でなかつたならば大なる歴史家となられたと思ふ。「開國五十年史」や「開國大勢史」の如き編纂事業を完成せられたことも其歴史癖があるからである。又最近「東西文明の調和」といふ問題に興味を覺えられて、古代支那の文化と古代希臘文化の比較研究をされて居た。それで金子馬治氏は希臘の事を研究してそれを報告し牧野謙次郎氏は古代支那の事を研究して報告されて居た。侯は一週間に一度づゝ兩學者の意見を聞かれて、それを自己で批評され採用すべきは採用されて居つたので、餘程研究を積んで居る。而も此研究は大隈内閣當時から始つて居る。詰り總理大臣としての激務を控えて居る時から、此研究を始められたるを見ても、如何に學問に興味があり、殊に文明史の研究に非常なる興味を覺えられたかが分る、而して侯は病褥に居られながら東西文明の調和の研究を常に完成したいと繰返されて居ることは、吾々も侯の心中に同情を表せざるを得ない。幸にして「東西文明の調和」は大抵脱稿してあるそうであるから遠からず侯の遺著として發表せらるゝであらう。

侯は又新聞記者である。嘗て十數年前徳富蘇峰氏が早稻田新聞研究會で演說して、新聞記者は手で書く内はまだ下手なものである。上手な者は足で書くといつたことを記憶するが、大隈侯は手も用ゐぬ、足も用ゐぬが、心身全體が新聞記者的才能を豐かに有つて居られた方で、始終新聞の中心人物となり、世界の大新聞が常に侯の意見を求め、居ながらにして世界の新聞雜誌に意見を公表されたことは、全く新聞雜誌記者の素質極めて豐富であつたと思はれる。

兎に角「新日本」「大觀」の主筆をして今日に至られて居ることは、而も元老の一人がジアナリズムに關係して居られること

は、日本のジアナリズムの位置を高めて來たものである。又多年「報知新聞」に密接なる關係を有たれて、此新聞を發達させて來られたことは、日本のジアナリズムの歷史に於て忘れることは出來ない。恰も福澤翁が時事新聞を起したと同樣に、侯と報知新聞との關係は、日本の新聞の歷史に於て忘れることは出來まい。

十二　不思議なる人格の要素

人格なるものは天下一品である。誰の人格も一種特色を有して居るものであるが、大隈侯のやうな偉人になると、人格は一層天下一品と稱せざるを得ない。是迄は項目を分けて大隈侯に關する私の意見を述べたのであるが、之を綜合して考へて見ると結局侯の不思議なる人格といふことに歸せざるを得ない。侯の父君は侯爵六歲の時に沒くなられたのであるが、母君の三井子刀自は九十歲に近くして沒くなられ、姉君も矢張九十歲近く迄長生された。して見ると母系には餘程健康の遺傳があると見ねばならぬ。此强健なる體格が侯の人格を造つた基礎であるから、之を閑却してはならぬ。又侯は明治二十二年遭難後は一層此の養生に意を用ゐられ、每朝降つても照つても庭園内の散步を缺かされず、一種の大隈流氣合術のやうなものを試みられて、健康の持續を計られたさうである。又夜深しはされなかつたらしいので午後の九時には就眠せられ、午前の六時には必ず起床せられたさうである。それで侯は如何に長く面談をしても如何に多くの人と談話をしても、あくびをされたことを見たことはない。是は周圍の人は誰もさう言ふ。これは侯の絕倫の元氣がある許りでなく、一種の養生法と十分睡眠をとるので、倦怠の情を起さない工夫を施されて居つたと思はれる。兎に角如何なる場合に於ても、あくびを人の前に見せなかつたといふことは、餘程元氣の旺盛な人であつたと思ふ。人の言ふ所に依れば原敬氏も人前に欠伸を見せたことがないさうである。此人も餘程精力の充實して居つた人と思はれる。侯爵も若い時は隨分無理なことをされたらしい。いつか早稻田の學生數名と共に侯爵とユル／＼話をしたことがある。其時侯は私も若い時には有ゆることをやつたものだ、やらないことは二つあると吐息をされながら、人殺と賭博はやらなかつたと言はれ、それから二三分經つてから、何を思はれたか、まあやらなかつたのは賭博位だと言はれた。して見ると若い時には隨分亂暴な事もやられたのではあるまいか。それにも拘らず人格が之に耐えたといふことは、如何に此遺傳の恩惠が豐かであつたかが分る。これは山縣公にしても、松方侯にしても、若い時には隨分無理なことをし

たから知れぬが、先祖傳來の貴重なる遺傳がある爲に、其亂暴に勝つて餘りあつたのである。若し遺傳の豐かならざる者が英雄豪傑の短所のみを學んで、若い時には何をしても構はぬと思つたならば取返しのつかぬことになるかも知れない。

築地の梁山泊時代に於て其當時の豪傑連中が豪遊を試みたさうであるが、大隈侯だけは宴會に行つても餘り酒も飲まないで、總花を振撒いて、ヤンヤと騷いで、他人の醉つぶれて居る時に、自分一人自宅に歸つて讀書をされて居つたといふ事もある。表向きは遊ぶが如く見せかけて實は餘り遊ばないで勉强された方であるかも知れぬ。

侯が大を成したのは無論維新の風雲に際會したのであるが、其風雲に際會して能く機會を捉へるの力量があつたからである。是は確に大隈侯の立身出世の秘訣であつたと思ふ。此前大隈侯が内閣を組織した時に、早稻田大學の校友會が園遊會を開いてお祝をした時に、私も侯爵邸へ行つて祝詞を述べた所が、「進んで取らなければならぬ」と言はれた。進んで取るといふことは大隈侯一代のモットーであつたに違ひない。常に進んで取るの氣概を失はない。是が小さい事にも現はれて居る。

日本に於て最初に自動車を買つて乘つたのは大隈侯である。外國人からイカサマ古物を賣付けられたものであるが、それに乘廻した。是等は世間の風潮より一歩先んずることに常に志を向けられた證據である。

それでいつも人を率ゐて行く。者共ついて來いといふ大將の精神であつた。併し明治の政治家として所謂親分肌を發揮しない者は伊藤公と大隈侯である。山縣公や原敬氏は餘程親分肌があつて、始終人を世話し、面倒を見て、親分乾分の關係を付けて置いたさうだ。併し大隈侯は餘り乾分を養成しない。併し大隈侯に隨いて來た人が多かつたといふのは、隨いて居らなければ自分の志を成すことが出來ないので隨いて來たので、親分子分の關係よりも、改進黨の名士と侯の關係は、大名と家來の關係のやうなものではあるまいかと想像する。併し是は私一個の想像であるから誤つて居れば訂正する。侯が親分肌でないことは、改進黨が自由黨やがて政友會の如き盛大を爲すことが出來なかつた一の原因ではないか。同時に侯が親分肌でなかつたから、社會の指導者、日本國民の鞭撻者となり得て、國民的英雄として尊敬せられるやうになつたのも、そこにありはしないか。原氏の如きは國民的英雄には成り兼ねたけれども、政友會の英雄にはなりえたのである。大隈侯は改進黨の英雄には成り兼ねたけれども、國民的英雄になられたのである。

記してここまで來ると、日本女子大學校校長麻生正藏氏の講

話を思ひ出さずに居られない。女子大學の卒業式に大隈侯が臨まれ、自動車が講堂の玄關について、侯がゆる〳〵階段を踏んでゆかるゝと、大勢の人がドツトと迎へに出る。かゝることは他の如何なる高位高官の人にも見られぬ。これは不斷大隈侯があらゆる人々の計劃や事業に贊成して直接間接に援助されたから、感謝の意味でかく人が澤山に侯の身邊に群がるのであらうといふのである。尤な觀察である。

侯は人に利用せらるゝことは何とも苦にされなかつた人である。擠ぐなら擠げといつたやうに、己々利用して儲けたい者があるなら儲けろといつたやうな、頗る寛大なる態度で、お御輿になることを苦にされなかつたと思ふ。故に侯を利用して儲けた者、出世した人も少くない。

十三　一生一代の偉勳

要するに大隈侯は獨學自成の人である。その努力奮鬪は誰しも學ばなければならぬ點である。又侯の生涯の事業としては、明治新政府の外交、財政に貢獻された以外、早稻田大學の創立社會教育家としてゝ大なる天分を盡されたことであるが、歐米を恐れずして常に對抗的態度を執られたことは、日本の元老として珍しい。明治の元老は歐米を恐れて居つた。それは薩摩の元老は鹿兒島灣の砲聲を知つてゐる。長州の元老も馬關の砲聲を記憶して居るから、皆な西洋人を恐れた。獨り大隈侯は幸にして外國人より虐められた經驗がないから、餘り恐れない、否殆ど恐れなかつた。一には斗の如き膽略のためでもある。是が大隈侯の外交の成功である。併し條約改正の時は多少の頓挫があつたとしても、侯が外交家としての一生一代の事業は日獨戰爭であつたと思ふ。日獨戰爭も非常に進步的の、精神的の人道主義より見るならば、批評する餘地はある。併し世界大戰以前の國際的關係、殊に日英同盟の關係よりすれば、日獨戰爭を斷行されたことは、是は日本を救ふた天才的政治家の閃が現れて居ると思ふ。若しあの時假に寺内伯や原敬氏を以て其局に當らしめたならば疑慮に堪へずといふやうなことを言つて、日獨戰爭を開き切れなかつたと思ふ。日獨戰爭を開かなかつたならば、どうなつたかと云ば、結局日本は獨逸に同情せねばならぬやうになつて、實際中立の地位を守ることは困難になつたに違ひない。さうすると日獨戰爭尚早論者は日本が獨逸を助けたならば、或は主客顛倒して聯合國が敗北者の位地に陷つたかも知れないと言ふが、是は餘程誤つた鄙案と思ふ。若し日本が假に獨逸に秋波を送つたとしたならば、亞米利加は憤然として聯合軍側に着いて、大平洋の眞中に於て日米戰爭が開始されたかも知

れない。さうすると此戰爭の成行は頗る怪しいもので、日本が假に獨逸を助けて見た所が、結局獨逸側は敗北の位地に陷つたに違ひない。して見ると日本の立つ瀨が無くなつて、ヴエルサイユ會議、五大國會議は申す迄もなく、華盛頓會議にも日本は列席することが出來なくなつて、獨逸、墺太利、勃牙利、土耳古と共運命を同じうせねばならなかつた。日本をして此亡國的地位より脫却せしめたものは、大隈侯の此の强硬なる外交手段であると思。ふ憾に是は大隈侯爵一生一代の大勳功であると斷ぜざるを得ない。但二十一箇條問題は公平に論ずれば幾らかの失敗と言はざるを得まい。併ながら日獨戰爭は大隈侯に非ずして斷行する能はざるものであつて、其意味に於ては日本は最も大切なる場合に於て、最も適當なる內閣總理大臣を有したることを欣ばざるを得ない。

十四　伸縮自在なる智囊袋

尚ほ餘談として言ふべきは、侯が明治十四年前の全盛時代は威風邊り拂つて容易に近付き得なかつたが、民間浪人生活をやられてから、次第に社交に圓熟せられ、常に口邊微笑を湛へて、如何なる人にも喜びを與へ、又如何なる事業にも同情を寄せられ、或は軍人後援會の會長となり、或は平和協會の會長となり、或は南極探檢隊の後援會長に戴かれた。併しこれは餘り無責任ではないかといふ批評もある。或は神職に擔がれて見たり、救世軍に贊成して見たり、佛教に贊成したり、基督教に贊成したりして、どうも大隈侯は主義主張の無い人であるとの批評もある。併し一體政治家なるものは、或點迄は已むを得ないことではないか、殊に日本の如き過渡時代に於て、東西古今の新舊思想の渦を卷いて居る時、此複雜なる社會、此複雜なる思想、此複雜なる民衆を指導するには、大隈侯の如き灰色の態度を執るのも亦已むを得ない事ではないか。

今玆に例としてコンスタン大帝のことを引いて見ると、基督教の歷史に於てはコンスタンタン大帝が夜雲の中に十字架を見て、信仰を生じて基督教の保護者となつたと傳へられて居るが、實際はコンスタンタン大帝は死ぬ間際まで洗禮を受けなかつた。何故ならば當時羅馬に二つの勢力があつた。一は希臘思想即ちペーガニズムの勢力、一は基督教の勢力であつた。ペーガニズムは上流階級及富豪階級に勢力があり、基督教は中流以下に勢力があつた。然るにコンスタンタン大帝は軍人であるから、兵隊を率ゐて見ると希臘思想を信ずる兵隊は意志が薄弱で、道樂ばかりして一向役に立たずして弱い。所が基督教の方の兵士は品行方正にして、身命を捨てゝ戰ふが故に、天下を取るには基督教に

依らなければならぬので、基督教を國教として保護した。併ながらそこは政治家であるから、何時基督教が衰へて再び希臘思想が全盛とならないとも限らぬから、もう大丈夫といふ臨終の際迄洗禮を受けないで居つたらしい。それは又政治家として已むを得ない許さなければならぬ點であるかも知れぬ。勿論宗教家としてはひどいが、政治家としては已むを得まい。大隈侯は宗教家に非ずして政治家である。態度が曖昧であつたと責めるのは慘酷であつて、誰が日本の政治家になつても、今日の如き場合に於て實際政治家として斯かる態度を執る他はあるまい。而も大隈侯は單に有ゆる宗教に妥協したのではなく、實は一種の自己流の理想的宗教觀念を有つて居つて、それを以て他の既成宗教を刺戟し、鞭撻しやうといふ功名心を有つて居られたから、表には有ゆる宗教と妥協して居つたけれども、自分には兎に角自分自身の信念を有つて居られたので、そこは俗流の政治家と其趣を異にする所以である。

十五　民衆渇仰の中心人物

大隈侯は晩年社交に間歇せられて、民衆を相手にすることを喜ばれたことに就て、色々な逸話がある。山陰道の何所かを巡回して演說をされ、演壇のコップの茶を飮んで（侯は水の代りに茶を飮まれた）其茶を半分殘して演壇を降りられた。すると演壇の下に居たお婆さんがヒラリと身を交して演壇に上つて、其飮殘りのお茶を飮んだ。そこで人々が怪んで問いて見た所が、大隈さんの飮まれたお茶を飮んで、自分も百二十五歲迄生きたいと言つた。

又先年高野山に登られた時に、高野詣の者は何々講の旗を立てゝ行く、そこで侯はお伴の人を顧みられて、己の方には旗は無いのかといつたので、誰かゞ其邊のを一本貰つて來ませうといつて、米屋の講中の中から旗を一本取つて立てたので、其講中から談判されたといふ話もある。それから高野山の奥の院に行つて、高野山の主なる僧侶達と寫眞を撮ることになつた。するとそこへ行者達の團體が旗を立てゝ澤山來て、寫眞を撮るのを物珍しさうに見て居るので、侯はお前達も來て這入れといつて、其周圍に來て居る講中の者や、行者共と一緒に旗を立てさせて寫眞を撮つた。

それから鍋島家に關係のあるお寺に泊られた。所が次の朝寺の入口でやかましく議論して居る者がある。そこでお付の者が行つて見ると、頑丈な商人風の男が巡査と議論して居る。其巡査に謂はれを聞いて見ると、此お寺に大隈侯が泊つて御出でになる、是非拜ませて呉れと言ふ、巡査は相成らぬといひ、今分

つて居るといふので、其お伴の者が大隈侯に其事を言つた。それなら會つてやらうと、態々玄関迄侯爵夫人と共に出て來られて、其男（大阪の商人）と握手をした。すると其商人風の男が非常に喜んで向ふに居た女房に早く來い、早く來い、侯爵様と握手して戴けといつて非常に喜んで、自分の右の手をハンケチで包んで、此儘大阪迄歸つて、自分の子供と握手して侯爵の名聲を分つといつて、別れを告げて行つた。これは當時御供をした櫻井鴎村氏の談話である。さういふ逸事は非常に多いので、斯かる圓滿なる、平民的、開放的の態度は自然に圓熟されたことである。

吾々は晩年の大隈侯を知つて居るので平民的、開放的の方面を知つて居るから非常に遠慮なくお話をする。一昨年の夏私が第二回の歐米外遊を試みる前にお別れに行つた所が、大隈侯は左の腕を捲り、どうだ己も此の通り肥つてゐるよ、觸つて見ろと言つて私に觸らせて、君の體格も良いが、もう二三寸高くすると何處へ行つてもヒケを取らないのだがナと言はれた。斯かる平民的の態度は改進黨の先輩諸君などの殆ど經驗しないことだと思ふ。所が私などよりも若い早稻田の卒業生になると、更に又平民的になつて、何等遠慮なく自由に議論する者もある位である。それを改進黨の先輩諸君が見たら驚くだらうと思ふ。兎に角大隈侯の前に行つて對等の態度で立つて居る人はない。

十六　大隈侯沒後の日本國民の覺悟

要するに侯一生は間斷なき進歩の生涯である。間斷なき努力の生涯である。若し今度の重患に耐へてかりに健康を囘復せらるゝことがあつたとすれば、更に又努力向上の生活に入られたことゝ思ふ。で今日の日本は益々此精神が必要である。海軍の休日十年の協定が出來たとしても、文化の競爭、經濟の競爭は依然として猛烈であるから、此場合に日本は民族として大猛心を振起して立たなければならぬ。其大猛心の原動力と爲らるゝべき偉人再び起たざるは日本國民に取つて大なる打撃である。併しながら侯は既に八十五歳殆ど九十年の間日本民族の先覺者として奮闘されて來たのであるから、今後は少壯者が振立つて侯の遺志を繼いで、成さんとして成し得ざりし所迄完成するやうに努力せねばならぬ。

大隈侯の如き大偉人が日本の武士道、日本の舊道徳より出られたことを考へて、日本民族、日本古代の文化の中に流れて居つた生命を吾々は認めねばならぬ。此生命を認識し、自覺すると共に、新たなる生命を取入れることに依つて、日本民族の文化生活をもう一層向上しなければならぬ。殊に其指導者を以て

認すべき所の個人と團體の責任は甚だ大なるものがある。侯の薨去については我等は一面心痛に堪へないのであるが、吾々が天より與へられたる使命を果す爲に、此場合大に覺悟しなければばならぬ秋ではあるまいか。大隈侯は隨分大業を成就されたされども未完の事業は更にない。大隈侯が死に至る迄に瞬間も忘るゝ能はざりし憲政は十分に確立して居ない。民本主義の内容は充實味に乏しい。普選の實行は何時からであるか。女子教育もこれからである。女子參政權もある。朝鮮問題もある。植民地問題もある。そこに歐米對支の大問題がある。對露問題も之に讓らざる重要問題である。之を完成するは誰の責任であるか。就中華盛頓會議後の軍縮問題の解決は容易ならざる問題である。これ現代新人の責任である。大隈侯は明治初期の新人であつた。恐らくは今日の若い新人の誰れにもゆずらぬ新味の所有者であつたらう。吾人は徒らに愁傷してはいかぬ。寧ろ大隈侯以上の貢獻を國民文化及び世界人類のために爲さんと大猛心を奮興することが緊要である。大隈侯自身も自分一人をのみやんやとはやし立てた國民を心私かに意氣地がないと憤慨されてゐたかも知れぬ。「葉隱」武士の大隈侯があれ丈の偉業を爲したのである。東西古今の學問を修むる機會、世界旅行の安易共に與へられてある。吾人は大に發奮するにあらざれば大隈侯より腑甲斐なき者共と叱咤されるであらう。

偉人は永しへに逝いた。願くは偉人の靈をして吾等の心中に永しへに活かさしめよ。

現代文化史上に於ける大隈侯の地位

高須梅溪

□十年前始めて隈侯に逢つた時の第一印象

最近、何人にもいろいろな意味から至大な哀惜の感情を起させたのは、巨人大隈侯の死だ。私は早稻田學園に於て、四年間の學生々活を送り また侯の生前に二三度親しく其の壯快な談論や、風貌に接したことがあるから、今これ等のなつかしい印象を胸

に浮べると、國家の元勳とか、世界的巨人とか云ふ以外に、偉大な師父を失つたと云ふやうな感じがしてならない。

私が始めて、早稻田の大隈邸に於て、侯に謁したのは、今から十年前のことだ。それは向島や、上野の櫻花が淡紅の幕をのべて晴れた青空と共に幸福な春を象徵して居る時分であつた。當時私はある雜誌を主宰して居て、現代名著展覽會を開く爲め、侯を其の會長に推戴したい希望を持つたところから、侯の快諾を得る考へで、訪問することになつた。

それ迄、私は知名の政治家に逢つたことが一度もなかつた。政治について、いくらかの興味を持つて居ても、政界の事情に暗かつた上に、神經質で、矜持の念のみ高かつた爲めに、自分から進んで、思想的に一致し得ない政治家に接觸しようとは思はなかつた。けれども隈侯に對しては、偉大な師父と云ふ感じを抱いて、始終暖かい敬意の念を捧げて居たので、どうしても一度だけでも、謁したいと切望して居たのである。其の望みが達せられる日が、眼の前に來た時、何となく、愉快に思はれた。

其の日、私は午前九時半頃に侯を訪問した。客間へ通される前に先づ私の頭腦に印象されたのは、玄關前にある一丈二尺余の古雅な仁王像であつた。名工の鑿の冴えによつて現はされた其の嚴かな姿態は、男性的な權威を象徵して、壯快な侯の趣味の一面を茲に暗示するやうに思はれた。そして清楚を極めた客間へ入ると、卓上に蘭の鉢が置かれて黎元洪氏か誰れかの大きい書幅が壁間に飾られてあつたが、其の支那的な男性味がまた侯の心持を純一に反映して居た。

客間には、既に二人の客が待つて居た。侯が靜かに久松安命の肩によりかゝつて出て來られると、私等は丁寧に挨拶した。二人の客は、簡單に用事を濟まして歸つた後で、私は名著展覽會の話をして、侯に會長となつて戴く快諾を得た。

私は、最初、侯に對した時、明治十四年の政變と共に、改進黨を組織して、官僚や、藩閥と烈しく戰つた侯の威風を思ひ、また明治二十二年に條約改正問題について、其の所信を斷行して、隻脚を失ふとも屈撓しなかつた英姿を偲んで居たので、侯の威容に壓せられて、何も云ふことが出來ないであらうと思つた。ところが、侯は打解けた平民的態度で莞爾として、絶えず、柔かい微笑を含んで、東洋文化のことから說き始め、西歐文化との比較に論及して、豪快な調子で、座上に風雲が捲くやうな感じを與へた。私は、次第に親みを感じて來た。

私は、其の談話の終るのを待つて、侯の青年時代の愛讀書を尋ねると、今迄、莞爾として居た侯は、急に口を八の字に開く

縮んで「吾輩は、過古を語ることを好まないんである。いつも現在と未來とに生きて居るんである。」と儼然と威容を正された時は、何となく、老雄の鋭い意氣が、鮮明に閃いて私を懾した。私は再び愛讀書のことを問くことが出來ないで沈默した。

だが、私は官僚政治家に見ることが出來ない極めて明るい愉快な印象を得て、厚く侯に謝して辭去した。其の後、新聞記者時代に早稻田邸へ招かれた時、及び一昨年の文士招待會の末席に列した時、溫室の花卉に親み、侯の元氣の宜い風采を仰望することが出來た。招待會當時の侯は尙ほ健康で、談話の調子は私が最初に聞いた十年前の時と餘り變らないやうに思はれた。そして一段の愛嬌と和平の氣が加味されて誰れにも親みを抱かせるやうに見えた。嗚呼其の時今日の侯の不幸を悼惜しようとは恐らく何人も思はなかつたにちがいない。私等の偉大な師父は、もう此の世に居ないのだ。

□政治家としての隈侯に對する毀譽

侯については、既に各方面に於ける名士の所見や、追憶や、感想などが新聞に出た。私は、偉大で、多角的であつた侯の面目を鮮かに描き出すなどの円[illegible]を第一に感ずる。だが、左樣したことは、後に出るべき侯の傳記に一切讓つて、茲には主として、現代文化史上に於ける侯の地位について、稍纏つた感想を披瀝したい。

私の文化史專攻の上から、侯の生涯を考察すると、侯は勿論、卓越せる文明批評家であると同時に啓蒙運動の先驅者である。勿論、侯自身は、何處までも、政治家として終始し、早稻田大學の創設も、主眼とするところは、最初、政治敎育の普及といふことにあつたらうと思はれるが、其の廣い趣味と强い知識欲と多角的な性質とは、單なる政治家の區域に侯を局限させて置かなかつた。侯が特に伊藤博文公や其の他の政治家とちがつて、いつも別樣の異彩を放つて居るのは、それがためだ。

蓋し政治家としての隈侯は、內政に外交に財政に行くところとして可ならざるはないと云ふ有樣だつたが、毀譽相半して居た。侯を善意に解するものは、其の優れた包容の量と大きい度膽とを賞讃してやまないけれども、いくらか惡意的に侯を解するものは、其の締めくゝりが付かなくて、萬事放漫に流れ易く、ともすると政治上の大事さへも一氣呵成に敢行しようとする傾向があつたことを非難する。殊に成敗の跡から、侯を論評するものは、明治十四年以後に於ける侯の政治的生涯には、見るべき功業が殆どないと斷言して居るやうだ。

私は侯の政治的生涯が、すべて勝利と成功の歴史に滿ちて居

るとは決して思はないけれども、當面の失敗や、成功のあとを唯一の標準として、侯を失敗の政治家とのみ斷定するのは、全く誤つて居ると考へる。若し長閥の勢力を背景とした伊藤博文公のやうに、度々内閣を組織して、内部の結束に成功すると共に、其の抱負、經綸を實行すべき地位と機會とを比較的に誰れよりも多く有したのを以て、成功した政治家とするならば、隈侯は疑ひもなく、失敗の政治家であるかも知れない。明治三四年頃から十四年頃までの侯は始終、廟堂に居て其の經綸を行ふ上に於て成功に近い傾向を示したが、それ以後、黑田内閣、松方内閣、憲政黨内閣に於ては、いつも、失敗の歴史を繰返した形があつた。殊に憲政黨内閣の時代には、板垣一派との權力爭ひから、僅かに五ケ月ばかりで、内閣を投げ出したと云ふやうな、大きい失敗を示した。此の點から云へば、明治十四年以後の侯は確かに政界の失敗者だ。

けれども左様した單純な解釋を下すものは、未だ侯の立場や、本質や、環境を知らないのだと云はねばならぬ。蓋し侯は、最初から、民本主義的傾向を多量に有して居て、一歩時代に先んじて居た爲めに、廟堂に居る政治家としてよりも、寧ろ在野の政治家として終始するやうに早くから運命付けられて居たのだ。大久保利通公の在世時代には、能く隈侯を重用して、其の力量を存分に發揮させたけれども、大久保歿後に於ける侯は、薩長政治家の間に孤立して、ともすると、邪魔物扱ひされるやうになつた。それは、侯自らも民本的政治の開展に熱中して、いくらか其の手腕、氣膽を自信して、縱横に活躍しやうとした勢を露骨に示した爲めにもよるけれども、閥係中に侯才識力量を嫉妬し、畏憚するものや、思想上に於て、侯の進歩的態度に一致し得ない極めて保守的なものがあつて、侯を排斥しようとした爲めでもある。

明治十四年の頃に於て、熱烈な民本主義的傾向を有したものは、薩長政治家の眼に大きい異端者か、反逆者のやうに見えたのだ。當時、隈侯は、明治十五年に民選議員を選擧し、十六年に國會を召集すべき必要を急進的に力説した。此の説を主張することは、確かに薩長政治家の反抗を招くべき恐れがあつたけれども、侯は大膽に所信を曲げなかつたのである。勿論一面に於て、少壯の鋭氣に任せて、功を一氣に收めようとした衝動作用に基づいたところもあつたらうが、大體、其の内部精神に民本的な色合が濃厚に附着して、それが自ら外部に發露しようとしたにもよるのである。

斯うした政界に於ける先驅者としての言動は、薩長政治家の多數に取つて、大きい異端であり、反逆であると解釋された

それで概して保守的な貴族主義者であるところの彼等は、一致して、大隈排斥運動を起した。侯は、これが爲めに忽ち廟堂から失脚して、爾後、其の抱負、經綸を實行すべき地位と機會とから、遠ざかつた。

けれども民本主義の鼓吹者として、政黨内閣の唱主として、政界に新しい局面を開展すべき舞台は、自然、侯の前に開かれた。侯は明治十五年三月改進黨を組織して、薩長政府に挑戰した。それに對して、政府は手強い迫害や、抑壓を加へたけれども、侯は、少しも屈撓しなかつた。政黨首領としての侯は立憲政治の思想を普及する上に於て、相當の成功を得た。そして侯が政府の政策を批評して、いつも民衆の味方として、嚴正な判定を加へた言論は、能く當局の急所を穿つて、豪快な意氣を表示した。

斯うした點から見ると、侯は、必ずしも、失敗の政治家ではない。また一概に其の失脚のあとを探し出して、侯の政治的功過を判斷することも出來ない。それに其の形式や、規模の壯大さに於て、何人も侯に追隨するものがないことを思ひ、更らに其の開放的な明るい態度や、民衆的な心持を侯がひとり有して居たことを思ふと、侯は、政治家としての政權獲得上の成敗は、必ずしも、云ふに足りないことを思はせる。畢竟、政治的思想の上に於て、時代に先行して、民本主義の傾向を高調した侯は、久しい間、時代の多數者殊に官僚閥族の徒に理解されなかつたことが、其の政治行路の上に大きい障害を投げかけられたのだと云つても宜い。侯の民衆的政治家としての特色が、はつきり一般に知られるやうになつたのは、大正三年、大隈内閣を組織した前後からだと云つて差支えないであらう。

□文明批評家としての特質

私は、思はず、政治家としての隈侯をいくらか辯護したが、一面に於て、其の缺點を認めて居ないわけではない。侯が一部の政客から、放談家、空論家、無責任の政治家と云はれる理由は、故鳥谷部春汀氏が云つたやうに政治上に於ける物理學的重力法を無視した爲めでなかつたかと思はれる。春汀氏は、それについて「侯は單純な放言壯語家ではなく、又實に謹愼自重の德がある。而も侯は屢々此の兩極の平衡を保つ用意を缺くことがあるから、或社會の人は侯を無責任な政治家として冷嘲した。侯は必らずしも剛情我慢、他を壓倒して、自ら誇ぶ人ぢやない。又た善く交讓し、善く調和し得るの雅量がある。而も侯が屢々此の雅量と剛情との水平を保つのを忘れることがあるため、共同者の憤懣を買ふことがあつた。侯は[illegible]

やうに、常に便宜に從つて意見を製造する臨機主義者でなくて、又一家の信條と一貫の理想とを有する政治家だ。而も侯が屢々臨機主義者だと誤解さるゝ傾向があるのは何故か。是れ重力法の原則に頓着しない爲めだ。」と云ふ意味のことを述べて居るのは、婉曲な見解である。

所詮、侯は政治家として、ともすると、非難され易いいくらかの弱點を有して居た。それは、ひとり、侯のみではない。故伊藤公にも、矢張、一二の缺點があつた。けれども侯の開放的な言論は、ともすると、實行を伴はないことが、往々あつた爲めに、一層、政敵に乘ぜられ易い弱味があつたのだ。

ところが、廣義に於ける文明批評家としての侯は、正に獨歩の地位を有して居た。此の境地は、政界の成功者だとされて居る伊藤、山縣の二公も亦全然、闖與し得ない世界だ。そして侯の政敵さへも、賞讃してやまない美點だ。侯は、自分で文明批評家としての本質を有して居ることを自覺しなかつたかも知れない。けれども其の廣博な趣味識と綜合的な見方と穩健な判斷とは、自然、侯を文明批評家たらしめた。殊に其の民衆的なところ、開放的なところが、其の批評の有力な背景となつて、一般國民に共鳴され易い傾向のあることを明示した。

故伊藤公は、其の趣味の廣博な點に於て、隈侯に讓らなかつたけれども、何となく、學者的氣臭と高踏的態度とがあつて、國民の前に其の批評的能力を充分に公示しようとしなかつた。それに文人趣味詩人氣質の弊がいつも公に附き纏つて居た爲めに、漫に美しい詞句のうちに隱れると云つたやうな風さへもあつた。畢竟公には、民衆的な親み易い背景が乏しかつた。

隈侯の廣博な趣味識は、伊公のやうに讀書から得たのではなくて、概ね經驗から得たものだ。主として、耳學問から得たものだ。耳學問と云ふと、安易に何等の努力もなしに得られるやうだが　內部に燃ゆるやうな知識慾が強く動いて居ないと、耳を透ほしての知識獲得に成功し得ない。侯は新知識の吸收については、極めて熱心であつた。毎日それを求めてやまなかつた點は、食道樂者が、始終美食に憧憬れて居るのと同樣だ。時としては、自分で、新刊書を繙讀する時には、周圍のものにそれを讀ましめる。また侯の許へ集る名士の所說を胸中に收めて、悉くそれを消化して了ふ。斯うして侯の廣博な趣味識が形作られ、そして年々進化してやまなかつた程だ。

勿論、廣博を特色とする以上は其處に深奧を求めることが出來ないのは、止むを得ないことだ。伊公が憲法學者として、深い造詣を有して居たやうな點は、素より隈侯に求められなかつた。ある一つの小さい知識の井戸のみを深く掘り穿つて、其の

どん底に達すると云ふやうなことは侯の得意とするところではなかつた。けれども廣い知識の湖水をぐるりと一周して、全般の景色を大觀して略ぼ捕捉すると云ふやうなことは、侯の長所とした點であつた。

侯は、經濟にも、政治にも、教育にも、工業にも、地理や、歴史にも、通じて居た。文學、美術、演劇などは、流石にわからなかつたが、それでも、演劇談、音樂談などをしたり文藝協會の會長となつたり、文士招待會を催ほしたりしたところを見ると、全くわからないのではなくて、理解の度合が極めて淺いと云ふに留つて居た。そして侯の晩年は漸く文學にも、注意し始めた傾向が明かに見えて居た。文士招待の際に、文學者の政治觀乃至藝術觀を徴したことなども、それを證據立てゝ居たやうに思はれた。

侯は、斯うした廣博の趣味識を持つて、文化現象を綜合的に見ることに力めた。政治を批判する場合にも、政治圏内のみに立脚して専門的に囚はれたやうな評論を下さうとはしない、必ず文化現象としての政治、社會と民衆とを背景とした政治と云ふ風に綜合的な見方をする。或は支那哲學の上から、或は東西の歴史の上から、政治を見るやうな場合もあつた。

更らに侯が外交上のことを觀察するにしても、單なる外交史的知識や、政治家的な見解にのみ依らないで、廣くアジア文化、西歐文化との對照をも考へて、共處に綜合的な見方をするのである。畢竟文化的に外交を見て、いろいろの點から考察を加へた上、始めて公平な判斷を下すと云つたやうなところが明かに見えて居た。經濟現象を觀察する場合にも、矢張同樣の色合が出て居た。

政治家が政治に囚はれ、學者が專攻の學藝に囚はれ、經濟家が經濟に囚はれ、工業家が工業に囚はれ、外交家が外交に囚はれ、軍人が軍國主義にのみ、沒頭すると云ふ風にすべてのものが極端に其の専門に偏して、個々に見解が分裂しつゝある今日、綜合的に物を見ようとする傾向が益々少くなつてゆく時に 隈侯のやうに、博大な趣味識に立脚して、物を個々に見ないで、一つに纏めて、大觀しようとしたことは、確かに廣義に於ける文明批評家になくてならぬ素質であつたのだ。

勿論、左樣した綜合的な見方をするものは、ともすると其の云ふところが低調に墮し、平凡に流れるものだが、侯は、必ずしも低調ではなかつた。また平凡にのみ囚はれて居なかつた。時には稍高いところから、物象をずつと見下すやうな風を見せた。また侯の内部に潜在した非凡な靈性的の閃きや鋭い直覺と豐富な經驗から來た歸納の優秀な力をも見せた。左樣した特殊

の色彩が、侯の文明批評のうちに、不図見出されることがあつた。

□侯の思想的色彩と背景

隈侯の文明批評家としての基調を爲したものは、世界平和の理想と民本主義的な政治の具體化とにあつたやうに見える。人類の不合理な争闘を避けて、アジアと西歐とが暖かい平和の握手をすると云ふことが、常に侯の切望するところであつた。人類平等の眞理の上に起つて、アジア人と歐米人とを見ると、其の皮膚、毛髪の色合は變つて居ても、文化的に、思想的に一致し、共鳴し、融合し得るのが當然だ。其處に久遠の平和が生れる、人類の最大不幸であるところの戰争を廢止すべき希望が實現される。ところが、アジア人と歐米人との間に思想的、感情的の不一致と隔離とを生じたのは、東西の人類は、全く異つた地盤、本質の上に起つと云ふ謬想が、無意義に容認されて居るがために、本來の一致を破つて、互ゐに分離の傾向を强めたのだ。だがそれは正當な行徑ではない。一種の過程に於ける邪路だ。早晩、アジアと西歐とは、正しい諒解の下に一致して、新しい一大文化を創造すると同時に、平和の光りの下に長く握手すべき時機が來らねばならぬと云ふのが、隈侯の平和觀の一部で、それは『歐米人の日本觀』第一冊のうちに於ける總論に出て居るのである。『大隈伯百話』中にも反覆して熱心に説かれて居る。

政治上の民本主義的思想については、既に侯の改進黨組織以來の言動が、それを示して居るから、茲に説明を要しない。畢竟、侯の平民的精神は、早く茲に新代の必然的趨勢と民衆の政治的覺醒の促進を必要とすることを痛感したのである。

隈侯の思想を形造つて居たのは、主として儒教とイギリス文化とであつたやうに思はれる。侯が儒教に於ける造詣は、どの程度まで達して居たかわからないけれども、其の議論のうちに度々孟子の言などを引用して居たところを見ると、孔孟思想に相當の理解と親みとを持つて居たのである。孔子が主張した智仁勇のことや、孟子の格言などは、侯が好んで、其の講演中に説いた。大體、侯は、歐米思想よりも、より多く儒教思想に深い親みを有して居た。それは侯の頭腦のうちに浸潤して、事に觸れ物に對する毎に、自ら流れ出た。

殊に言論を以て其の長所の一とした侯は、孔子よりも、一層孟子に共鳴したやうだ。孟子は、支那に於ける第一流の政論家だ。彼れの政治説は、民本主義的思想を以て、其の中核とした。彼れは、民を第一に置き、次ぎに社稷を置いた。民衆のた

めの政治、民衆のための國家、孟子は、それを力説し、強調した。勿論、孟子は、時として、左樣した思想を極端まで押つめていつたやうな傾向を示したが、隈侯は、寧ろ其の穩健な方面を攝取したのだ。

孟子が養氣を説いたことも亦隈侯が深く共鳴したところであつた。孟子は、其の溢るゝやうな旺んな意氣を以て、相手を壓するやうな點があつた。養氣と云ふことは、浩然の氣を養ふことで「其の氣は至大至剛以て直、養ふて害ふことがなければ、天地の間に塞る。其の氣には義と道とを配する。是れがなければ、浩然の氣が餒ゆるのだ。」と孟子は云つた。隈侯が氣慨を喜び、正大を主張し、奮闘を愛し、至剛た勇氣を高調したのは、矢張、孟子に胚胎するところが少くないやうだ。

斯うして、儒教思想は、侯の精神的血肉となつたが、侯はそれにのみ固着しなかつた。道教や、禪の思想にも親んだ。そして一面に於て、西歐の文化思想を採取した。殊にイギリス文化に共鳴した。侯の常識的なところ、穩健なところは、どうしても、イギリス風だ。西園寺公のフランス文化讃美、伊藤公のドイツ文化心醉とは、自然趣を異にした點がある。

侯は、トルストイや、ニイチエの説などにも論及したが、トルストイの博愛主義、ニイチエの自我主義を其の儘に受け入れないで、此の兩極の一致し得ないことを説いて、何れにも與みすることが出來ぬとした。極端は、侯の採らないところで、何處までも、中庸的で、穩健な諧和を求めようとした。それ等もイギリス風だ。

それで平和の理想に憧憬れるにしても、侯は、迷妄的な姑息の平和を斥けた。「平和主義は、愛を以て中核とするけれども、それが盲目的に極端に走ると、大害を醸す。」と云つた。斯うして何事についても、穩健を主とした。だから思想的に侯は、東西の長所を採り入れて、常識の大成を得たが、創造的なところは見られなかつた。奇拔、卓越、超絶と云つた趣は、少しも現はれなかつた。思想の間口は廣かつたが、奥行かなかつた。時に佛教などにも言及したけれども、其の精髓に觸れた趣は見られなかつた。要するに思想的には平凡であつた。けれども其の綜合的な作用で、それを活かして用ひたと云ふところに侯の長所があつた。侯處から、東西思想乃至文化の調和、融合を目ざすところの考へが湧いて出た。

若し更らに侯の思想を統合するところの哲學があつたら、侯の思想は、深刻と精緻とを加へて、文明批評家としての内部生命を卓拔なものとしたらうが、左樣した哲學を缺いた爲めに粗雜に流れ、平俗に失して、時には、散漫な集中力のないものと

なつたことさへもあつた。侯に獨自の創造的哲學がなかつたことは、惜むべき缺點だつた。けれども廣義に於ける文明批評家たることに於ては、毫も差支えがなかつた。

□啓蒙家としての文化運動と事業

侯が啓蒙運動の先驅者として、文化開拓に努力したことは、其の文明批評と共に、獨自の世界を作つた。見やうによつては、侯が文明批評家たる本質を發揮したことそれ自らが、既に啓蒙運動の先驅だとも云へる。西歐文化に對する理解と目ざめとに於て、逸早く得るところがあつたと云ふことが、やがて侯を自然に文明批評家たらしめ、啓蒙家たらしめたと見られる。それは、どう解釋しても宜い。

侯の啓蒙運動の具體化は、其の文明批評のほかに早稻田大學の設立や、文明協會に於ける出版事業、各種の自著、講義錄の早稻田校外生指導などの上に明かに反映された。早稻田大學は、今日非常な隆運にあるが、今から三十餘年前は、極めて微々たる學校であつた。當時の政治家は、概して教育の民衆化や政治教育の普及や、學藝の獨立と自由と云ふことなどについて、極めて冷淡であつた。侯が夙に此の點に着眼して、慶應義塾に匹敵すべき私學の創設に思ひ至つたことは卓見だつた。

勿論、それは、政治教育が主眼であつたらうけれども、別に文學科をも加へて、坪内博士の指導の下に、文化開展の新時代を創造してゆかうとしたのは、流石に侯が廣博な趣味識を有して、綜合的な文化生活の概念を有して居た爲めだと思はれる。侯は、政治上に於ても、時代に先行したが、教育上に於ても、矢張、當面の現象に支配されないで、寧ろ來るべき次代を豫想して、早稻田大學の前身であるところの東京專門學校を作つたのだ。

當時、政府は侯の學校を危險思想の養成所のやうに考へて、直接間接にいろいろの迫害を加へた。けれども侯は、左樣した抑壓を耐忍して、今日の早稻田大學を實現すべき基礎を固めた。それは、誰れも既知のことであるから、これ以上說明を要しないが、次代の教育を豫察し、透見したと云ふ點に於て、侯の啓蒙家としての眼が、非凡だつたことを示して居た。

文明協會の出版事業については、既に市島謙吉氏が「讀賣」に於て『故隈侯の文化事業』として說かれたが、それは、侯の深い知識愛に根ざすものと云つて宜い。絕え間なく、流轉し、變移してゆくところの時代の傾向につれて生ずる新らしい知識の吸收と獲得、侯に、自身にそれを痛感すると同時に、一般國民の知識生活の上にも、始終、生々の氣を以て流動するところ

の新生命を附與しようと考へたのだ。言ひ換へると、侯は知識の停滯、固定、頽廢を防いで、其の活動、普及、鮮新を促がす爲めに、文明協會の出版事業に力を盡したのだ。それは、文化生活の向上と進展と云ふことに歸着されるわけだ。

侯が『開國五十年史』や『開國大勢史』や『國民讀本』などを編纂したことは、侯の啓蒙運動に於ける熱意の象徴と見ることが出來る。然し侯は、歴史に對して特殊の趣味と興感とを以て居て、曾て修史の希望について語り、文明史から得る教訓について述べたことがあつた。勿論、侯は在來の歴史や、傳記について、甚しく失望して居たところから、もつと自由な、新しい方式と内容とを有するところの近世史を作りたいと考へた。其の結果が『開國五十年史』『開國大勢史』などを生む一動力となつたのではなからうかと思はれる。

『開國五十年史』は、専門家が、近世日本の文化發達史を分擔、執筆したものであつて、文化史の概念を與へるに適當して居るが、一般に記述が、簡略に流れて、眞相を捕捉し難い缺點があつた。けれども『開國大勢史』は近世日本に於ける海外文化の消長を精査して今日の科學思想が、どう云ふ刺戟の下にどう云ふ努力を經て進んだかと云ふことが、割合によくわかる。

侯の『國民讀本』は日本國民が市民として、公民として、國際間に於ける世界人類の一員として、知らねばならぬ德義と知識とを教へたもので、文化的に何人をも、世界の大勢に順應せしめようとしたのである。侯の長所は、斯うした方面に結晶されたと云つて宜い。

筆の方面に現はれた侯の啓蒙運動は、概して以上に盡きて居るが、舌の方面に於ては縱横に活躍して、女子大學に於ては、女子の本分を説く、文藝協會に於ては『社會の變遷と文藝』について、一家の見地を述べる。鐵道青年會に於ては、鐵道創設の由來を語る、新聞研究會では、新聞記者について所感を述べると云ふ風で、隨所に其の廣長舌を揮つて時と人と場所とによつて、全く異つた題目について、相應の知見を披瀝するところに、侯獨自の啓蒙的作用を示した。

勿論、それは整然と纏つて、系統的、組織的になつて居たわけではなくて、寧ろ斷片的、座談的で、時には、散漫に失するところがあるけれども、其のうちには、いくらか新知識の閃きや、力強い暗示が含まれてある。これが侯の雄辯によつて、莊重な重味のある聲で傳へられると、何となく、一種の感激を人々に與へて、内部生活に一點生命の火が點ぜられるやうな氣がしない迄も、鮮新な、爽快な感じと目ざめとを與へられるのだ。

□侯の日常生活に於ける二大特徴

侯の生活は、ある意味に於て、舌の生活であつた。公會の席上へ出て、其の廣長舌を動かして、文化生活の促進を計つたばかりではなかつた。早稻田の自邸に居てまた、絶え間なく、多くの來客に向つて、得意の舌を動かした。侯は其の日常生活について説明した時、廣長舌の上に及んで「談話は固より好きだ。客があれば相手を選ばず話をする。是れは先づ我輩が一日の仕事の重なるものだ。」と云つた。そして其の訪客中には「百姓も來れば、商人も來る、貴族も來れば、平民も來る、學者も來れば、宗教家も來る。文士も來れば、畫工も來る、政治家も來れは、軍人も來る、教育家も來れは、慈善家も來る、新聞記者も來れば、雜誌記者も來る、辯護士も來れば、神主も來る、支那人も來れば、朝鮮人も來る、印度人も來れば、西洋人も來る、男も來れば、女も來る、爺さん、婆さんも來れば、若いものも來る。」と云つておの〳〵其人々に對して、平等無差別に話をすると其處に無限の趣味がある。朝から晩まで話して居つても、左程に勞れもしない。是れも、我輩が一種の道樂である。」と告白して居る。

舌の生活は、侯の長所である、そしてそれは侯の道樂となるほど、舌を動かす趣味の三昧に入つて、侯の心と舌とがぴたりと一致する境地に逹したのだ。斯うしたところから、侯の奇句、警句、壯快な言語が飛び出して、あらゆる訪客を明るい、愉快な世界へ導くと共に、啓蒙的な教訓が、彼等を動かしたのだ。

勿論、此の廣長舌のために、侯が政治家としての生活に累を及ぼしたことも、少くなかつたであらうけれども、寧ろ有利な方面により多く侯の舌が用ゐられて、啻に内に向つて啓蒙的作用を示したのみならず、海外諸邦の人々に向つて、平和の福音を宣傳する上に誰れもが企及し得ない、大きい力を現はした。舌の生活も、此處まで來ると、私人的にも、公人的にも、文化的にも有意義の度が深く、强められる。一生を通して、二萬回以上の講演をしたほかに無限に喋つた力は偉大だ。

侯の生活の全體が、極めて樂天的であつたことは、始終、精神的、思想的に苦悶し、懊惱しつゝある近代人とは、餘程異つたところがある。百二十五歳説の如きも、侯の健康な爲めに唱へ出されたのにちがひはないが、主として、其の樂天的な心の所産だ。侯ほど、深く生の樂みを享け入れ得た人は少ない。

それは、侯が死の觀念から超越することに力めて、過古に生きるよりも、より多く現在に生き、現在に生きるよりも、より

多く未來に生きようとした生々的な思想に胚胎して居るやうだ。過去の生活に於ける惱みを回顧したり、徒らに悔みたりすることをやめて、現在に善事をしよう、未來に一層、優れた仕事をしよう、愉快に今日に働き、明日に働かうと云ふ新しい望みが、いつも、侯の胸に湧いて居たのだ。侯の樂天的な生活や生の樂みを心ゆく迄に味識し、享受し得た明るい精神は、左樣したところから出たのだ。

それに侯が老境に入つてからの生活は、禪や、老莊哲學の一端に觸れ得た人のやうに、大體、物慾、物情の中和を得て、極めて淡泊に見ゆる一面があつた。園藝、讀書、圍碁、座談、散步などが、侯の樂みとなつて、力めて、健康に適した自由な、行雲流水のやうに、物や規則に拘泥しない生活を續けた、斯うして、侯は、悠々として自適して「一日々々、斯うして暮らして行く。顧みると、浮世は夢の如し。茫として何時の間にか消えて行く。併し前途を眺むると、其處に光明がある。」と云ふやうな樂天的な光りのうちに呼吸したのだ。

だが、余りに樂天的であつた爲め、內部生活を回顧し、凝視して、自己の深い縱的生命を追求すると云ふやうなところは、殆ど見られなかつた。死と云ふことについても、力めて考へることを避ける風があつた。死後に於ける生活と云つたやうな問題にも、觸れようとしなかつた。唯無造作に「我輩は死なぬゾー、と云ふ自信自覺を持つて、始終死と云ふものを睨みつけて居る。」と云ふ位のもので、死について思考するものを寧ろ喜ばないと云つたやうな風があつた。此の點は、餘りに現實的であつた。

それで、侯は百二十五歲までは、死に征服されずに、寧ろ自分が死を征服すると云つたやうな意氣を以て「八十歲、九十歲百歲等、百二十五歲未滿で死去したものは、是れ短命で、百二十五歲を越えて生存した者でなければ、決して長命と云ふことは出來ぬ。」と云つたが、侯は自ら云ふところの「短命者」として、其の最後の幕を閉ぢた。今私は其の矛盾を考へるよりも、斯うした壯語が、空しく、侯を想ひ出すべき過去の記念となつたことを深く悲むのである。そして曾て侯が唱へた『百二十五歲定命說』から、侯を訪問した岡村鶴君のやうに「百十三歲までも、侯が生きてくれたらば。」と私は思ふのである。だが最早、侯は永久に此の世へ歸つて來ないのだ。樂天生活、光明生活に徹底した東洋趣味的な巨人の俤は、もう見ることが出來ないのだ。

□現代文化史に於ける獨自の異彩

隈侯の事業の總計算をすることは、容易でないが、大體以上に於ける侯の文明批評家としての特質及び啓蒙運動の先驅者としての一貫した功績、努力などを概觀すると、侯が現代文化史上に於て、當然、占むべき地位を略ぼ知ることが出來よう。それは、福澤諭吉翁を除いては、何人も追隨し得ない獨自の地位だ。

單に政治の一面に限つて云へば、伊藤、山縣、西園寺、ちの諸公が、隈侯と匹敵し、若くは、稍侯に優つた地位を政治史上に占め得るであらう。けれども文化史上に於ける地位に至つては、どうしても、隈侯に及び得ないところがある。教育、學藝産業、交通及び平和事業等の各方面に於ける侯の功勳は、僅かに伊藤公が、いくらか、侯に似て居ると云ふに留まる。

隈侯のやうに、平民的態度で、何人にも接し、何人とも語り、其の知見を隨所に公開して、文化生活の進歩に資すると云ふことは、伊藤、山縣、西園寺諸公の能くせざるところだ。殊に積極的に時代の大勢と新傾向とに注意して、大局の上から其の向ふところを指示して、海の内外に光明を與へると云つたやうな趣は、ひとり、侯の有する特點だ。歐米の名士が、日本へ來て、先づ隈侯を訪問して、平和的な快い印象を受けると云ふやうなことは、元老諸公其の他の政治家の誰れの上にも見得られない美點だ。アジアと西歐との平和と融合とを計るべき任務と力とは、すべて侯の一身にかゝつて居た。

今や侯は、其の遺土産として『東西文明調和論』を殘して、靜かに落日が、崇嚴 光榮のうちに西の空のはてに殘紅を留めて沈んでゆくやうに、世を去つた。現代文化史上の巨人は、もう永久の沈默に入つて、再び平和思想の實現について說かうとしない。けれども侯が生前に高調した平和は、現下世界の仰望するところとなつて、すべての生活と人とは、平和の中樞に向つて、集らうとしつゝある。斯うした點から云へは、侯の素志は、見事に酬はれたわけだ。

其の他、侯が手を着けて置いた仕事は、次第に四方に根を張り、葉を生じ、枝を伸べて、繁らうとしつゝある。侯の夙唱にへて實現に力めた政黨内閣も、今日は破綻なしに、將に順調に進もうとしつゝある。侯の努力は、すべてに亘つて、大體宜い功果を示した。恐らく、侯は滿足のうちに何等の思ひ殘すこともなく、平和の輝きに包まれて世と別れたであらう。其處に一種の崇嚴な氣分が動いて居るではないか。

錢勘定と交際術に秀でた大隈侯

文學博士　三宅雪嶺

人生五十年と云ふに、五十年間絶えず活動し、國內注意の的となり、世界の注意をも惹いたこと、意義の如何を問はず、特別に取扱ふを要し、歿するに臨んで淋しく感ぜずに居れぬ。大隈侯は單獨に力を伸ばし得るにしても、多少舊藩で便宜を得て居り、藩主鍋島閑叟の聰明に負ふ所少くない。閑叟が現に生存せば百九歲、その親しく交つた島津齊彬は、百十四歲、奈破翁一世がエルバ島に流された年に生れて居る。毛利敬親百四歲、山内容堂九十六と云ふ割であつて、其下から薩長土肥の人物が輩出した。肥前から種々の人物が出た內、秀でたのが四人、現に生存せば副島九十五、大木九十一、江藤八十八、而して大隈八十五、大隈侯が比較的最も若く、それで最も永續きし來つた。侯は藩主に認められ、力を伸すの便宜を得たれど、藩閥の力を藉ること無く、後に肥前で一時四名も參閣に列りながら、藩閥を造らず、箇々別々に行動して居る。大隈は早く藩主に才能を知られ、藩中の働き手となり、それで新政府に知られたが、如何なる才能かと云へば、會計と交際とに獨特の能を具へ、それが生涯の經歷を造つて居る。錢勘定が早解りすると、人と話合ひするの巧みなのとが結びつき、錢が豐かに見えて人と交際し易く、人と交際するので財源を見出し、何處でも大手を振つて通る事が出來た。錢勘定が早解りするとて自分で大分儲けするの意なく、誰とでも交際し得るとて之を利用しようとせず、必要に臨んで處置する所が、自然に之で便利を得、餘り苦しまずに何處にでも頭を出すを得た。

維新前に尊王攘夷の働き無く、それで京都に出づると共に第一流の人材を以つて目せられた。容貌及び態度からして如何にも自信があり、何でも切つて廻しさうに見え、それと云ふのも何等窮迫の樣子なく、難局に當つて綽々餘裕あると思はれる。負け嫌ひで弱つた所を見せるを欲せず、それ位の事この八太郎が受け合ふと云ふ調子で、先づ假りに任かして見ようと云ふやうになる、當時新政府に寄合ふ連中で、勤王を唱へても錢勘定

の解るのが少く、攘夷を口にしても外國人と懸け合ふに躊躇するのが多い。肥前は長崎から新知識を入れるの便利があり、早く漢譯萬國公法等を讀んだ。副島が外務卿になつたのもそれからであり、實に外交の心掛けあると知られた。大木も矢張いくらか外交に關係したが、大隈は其心掛けあるが上、辯に任せて之を說き立てるので、外國公使が薩長人を相手にすると同樣に行かず、少し手答へあると感じた。漢譯萬國公法を詳しく讀むこと、大隈は副島程に行かぬけれど、諒解が好いのみならず、外國人と話合ふに長じ、通譯を入れても、相手の納得するやうにし、愉快に歸らすの手並がある。副島では金錢上のことが難しく、一了簡で話し憎いが、大隈はかなり深く切込んで話し、公使の分かる位に說き立てる。

外國人の談判は兎角金錢に關係あり勝ちになる。大隈は會計と交際との才能を兼ねたる所、持つて來いの狀態であつて、國家の財政及外交に缺くべからざる人物と見られるに至つた。佛國に横須賀造船所を抵當に押へられる所をば、佐賀藩の金を融通し、更に英國公使に話しをつけ、差押へを免かれたのが、先づ手並を認められた所であり、引續いて種々の談判に關り、遂に外債を起し、京濱間に鐵道を敷設するに及んだ。財政と外交と結びつき、能く之を處置するのは、大隈程手早いのが無い。

長州の伊藤井上も之と同經過を辿り、財政と外交とに當つたが、大隈の手際に及ばず、其下手に付くを餘儀なくされた。大隈が大輔、伊藤が少輔と云ふ形である。井上は負けて居る方でなく、大藏大輔となつた頃、各官省の經費を切盛し、關係者も其專横に苦んだ程であるが、短氣か面當てか、澁澤少輔と共に財政を投出し辭職した。財政が持切れぬとは頗る大事、歐米でも日本の財政について議論が出たが、大隈が其後を引受け豫算表を作り、財政に餘裕あり、何の憂ふべきなきを發表した。足るとも足らぬとも計算の仕樣次第であるが、斷然餘りあると計算した所、持前の腕を示したものであつて、井上は其處で大隈に叶はぬと云ふことが明かになつた。

大久保が自ら國家の重きを以つて任じ、征韓論で殊に其礎を定めて以來、事實上の首相であり、三條岩倉よりも勢を振つた。三條岩倉が出席しても、閣僚がざわついて居り、一度び大久保が現はれるや、俄かに緊張し、眞面目に評議し合ふが、其大久保が大隈及び伊藤を賴みにし、此二人が大久保に亞いでの人物と見られる。廟議で大久保の次きが大隈であり、大久保の歿後大隈が事實上の首相となるべきであり、自ら其位置に居るを辭しさうもない。他の閣僚は種々の事情で大久保にこそ特別の敬意を拂ひたれ、肥前から紛ぎれ込んだ男に頭を下げるに及

ばぬとて、薩は薩で相談し、長は長で相談し、或は薩長相談し、大隈に相談しようとせぬ。有繋に前の關係で伊藤井上が大隈と共にし、政治の改革を計つたが、それさへ大隈と離れる。離れねば何事か起るか知ぬ有様である。袖にされた大隈は自ら屈するを欲せず、有栖川宮左大臣により、國會開設を奏上し、直ちに改革を實行しようと企てた。御巡行の途中の事であり、薩長の密偵は櫛の歯の如く報道する。待ち構へた薩長連は、御還幸と共に御前會議を開き、大隈出し抜けの行動を詰り、其一味を放逐することになつた。放逐された連中は、相應の數に上るものゝ、薩長を相手にする程の力無く、謂はば痩せ腕揃ひである。併し大隈は負けて居れず、板垣の自由黨よりも立派な政黨を造らうとし、改進黨を組織し、福澤の慶應義塾より立派な學校を造らうとし、東京專門學校を設立した。共に思つたほど旨く捗ばず、政府でも百方之を抑へ、頓挫するのを見て、それ見たかといふ顏付きであるが、それにしても大隈が弱つた顏を見せず、明かに政府の一敵國たるを失はぬのは、會計と交際とを兼ねるの才を具へるに由る。

大隈は財政の衝に當り、私を疑はれたが、何の點に私したかの證據なく、島津久光の如き、之を彈劾して痛く手を焼いた。大隈は公言して曰ふ、苟くも私した跡あるならば屑く罪に伏しよう、若しそれが寃罪ならば誣告を捨てゝ置く事が出來ぬと。久光も辟易し、有邪無邪に終つた。それならば大隈は官職に居る間、專ら官職の爲めにし、何等私利を營まなかつたか。政黨を組織し、學校を設立し、それで在朝者に劣るとも劣らぬ生活振りをして居るのは、何を以てして居るのか。自ら鍋島家の授助とも稱する。閑叟公の遺言で、大隈を見捨てるなと云ふ事からして居るとする。いくらかさう云ふことがあつても、鍋島家でそれ程までに援助するか。政府でも世間でも岩崎との關係を怪しんだが、之も手懸りを得るに苦しむ。かゝることに手懸りを得ようとする方が難しくなるが、何にせよ大隈家の會計が屢問題に上つた。自ら何處に何れ程と云ふ纏つた株も無く、それで派手に生活して居るのは、何う云ふ事か。其分らぬ所が、本來會計に長じて居るを示す。大成金にならうとするやうな蓄財の欲なく、それで大成金の暮し向きと見えるのは、一通りの遣り繰り上手でない。時として僅かの金で困るやうで、忽ち大きな園遊會を開き、賑はしくする。それ位の金は左程大きなものでないと云ふが、其眞似し得る者が少いのは何故か。金がある か無いか、何れにしても金を活かして使ふに妙を得てゐる。

それと云ふのも、交際に長ずるに基く。人を集めて駄法螺を吹き、肝腎の用事を問はぬと云はれるが、其法螺を吹くのみで

人を集め得るか何うか。駄法螺で集め得るならば、其駄法螺は普通の駄法螺でない。本來人と交際するの趣味もあり、才能もあり、誰を捉へても、何とか話しすることが出來る。時に頓珍漢のことあるとも、他人よりも頓珍漢が少く、他人で其眞似すれば、人の顔と名とを忘れ、何れ程滑稽を演ずるかも知れぬ。大隈は生來人を記憶し、之と談話するの能を具へて居り、外交の要職に當つたのもそれからであつて、其外交は小村とか珍田とか云ふのと違ひ、知識及び經驗よりも交際術を以てして居る。何人とでも話し合ひ、話をつけることが出來る。初め或る範圍を限つて話し合つたが、漸く範圍を廣くし、政府を去り、更に入り、出たり入つたりする內、範圍を無限に擴張した形がある。貴賤富貧、老若男女、相手代つて主變らず、話しすること其事が何よりと云ふことになり、早稻田が訪問の名所となるに到つた。貧乏しては出來ることでなく、それと云つて、金があれば必ず出來ると限らぬ。一層金があれば更に大袈裟になし得ようが、それ程の事は人力で難かしからう。大隈侯位の所が日本に生れてせい〴〵の所であらうか。

會計と交際との能を以つて生れ、之を自由に振舞し、横行濶步したが、唯金を才覺し、誰とでも話し合つた許りでなく、其能力を具へつゝ世界の進運に伴ひ、自ら向上するを憚らなんだ。進步發達と云ふことは、曾つて眼の前から消えたことがない。世界は進化するとしたか、漠然進步するとしたか、兎も角も現狀に囚はるべきでなく、何とか改まらねばならぬとし、自ら改めようとした。それ程効果あつたかは疑問とし、普通に見ることの出來ぬ現象がある。舊同僚の後の狀態と較べ、明かに差異を認める事が出來る。若し割合に進まぬならば、世界が割合に進まぬが爲めとも云へよう。官に在つては首相となり、野に在つては誰とでも交り、貴族的生活を送りつゝ、廣く平民に接し、天人の羽衣縫目ないと見える狀態に近付かうとした。

彼は晩年古代の聖賢に倚り、自ら然るを得るを考へたらしい。從來の經歷を以つて康んぜす、永遠に人を教へようと思ひ付いた跡がある。併し形に於いて似ながら、實に於いて不足を感ずるのは、彼の如き大いなる才能を以つて生れ、而して才能の及ばぬ所に出づることが出來なんだ。何でも才能を以つて量り、才能以外のことを輕んじた。何でも能く理解するやうで、老西鄉の生涯の如き、頗る理解するに苦む。後にこそ西鄉にも、いくらか同情したれ、前には可なりに扱き下したりした。貧乏して仕方なしにあゝ云ふことになつたと云ふやうに說いた。總じて計算に合はぬやうなことを爲すを愚とし、之を卑しめ、延いて、成功者に耳を藉すに比し、失敗者を捨てゝしまふ。無情と

云ふ程でなく、失敗者を門前拂ひしたりせぬが、失敗者は智慧の足らぬ爲めであつて、褒めた人物でないとする。七轉び八起きすれば大いに感心し、世話するが、八起きて九轉びしては氣の毒とする位である。併し西郷が月照と海に飛び込むやうなことをしては、半世紀間、幾千幾萬の人を相手にし、友人を世界に作るに至るまい。人が城山で西郷の遺蹟を弔ふと、早稻田に大隈侯の訪問客を相手にした所を偲ぶと、一種の好對照を覺えしめる。それでも初め現はるれば、旣に第一位に居り、第一位で通し、それで多數に怨まれぬ所、他に類が無い。山縣公は同年齡で、相對峙し來つたが、初めそれ程に思はれず、先輩凋落と共に進むだのである。大隈侯はグラッドストンに比し、聊か公生涯の短いけれど、優に東西に相對峙するに足る。



時論

愛蘭問題解決の側面觀

法學博士　吉野作造

愛蘭問題がシン・フエン黨の英愛條約の承認に依つて目出度く解決を告げた事は、最近の電報に依つて讀者諸君の既に知らるゝ所であらう。此問題が獨り英國にとつて重大な問題たるのみならず、又世界的に非常に重要な意味を有つて居るものである事は、去年十月號の本誌にも之れを論じた事がある。他の問題に隱れて此問題の比較的我々の耳目から遠ざかつて居るのは予輩の甚だ遺憾とする所である。併し茲に重ねて此方面の事は説かない。茲には又他の方面から此問題の我々に與ふる重大な教訓を考へて見ようと思ふ。

去年の暮までの模樣に依ると、愛蘭問題は容易に解決しさうに見えなかつた。前記十月號の本誌にも説いた如く、ロイド・ジョージの聲明せる極度の讓歩は實質的には愛蘭民族の容認し得る所であつたけれども、彼等の闘將として戴くデ・ヴァレラは形式問題に拘泥して最後まで英本國と妥協せんとしなかつた。即ち彼の立場からすれば、問題は何れ丈けの讓歩を英本國から得るかでなくして、愛蘭は本來獨立の民族であり、英本國の之れ迄愛蘭を統治して居たのが間違ひであつたと云ふ、名義を正したいと云ふのである。云はゞお前の金を十圓貰ふと云ふのでなくして、其十圓は本々俺の物だと云ふ事にしたいと云ふのである。甲から乙に十圓の金を移すと云ふ實質の問題には文句はない。只名義を何うすると云ふのである。ロイド・ジョージは飽く迄愛蘭民族を英國王の忠誠なる臣民として之れに廣汎なる自治を認めやうとするのであるから、此形式問題にこだはつて居る以上は到底解決を見るべくもない。であるから愛蘭問題は或意味に於ては殆ど解決し、又或る意味に於ては殆ど解決の緒にも着いて居ないと云ふ有樣である。

所が最近愛蘭では、多數はデ・ヴァレラの頑强なる態度に反對

し、實質的に得たるものを以て滿足し、之れで解決を告げやうとする事になつた。其の結果デ・ヴァレラは大統領の職を退き愛蘭議會に於ては少數黨の地位に立つ事になつた。多數黨が先議英愛條約の批准を議決した事は既に讀者の知らるゝ處であらう。

さて斯くの如き現象は一見するとデ・ヴァレラに對するロイド・ジョージの勝利であり、又或意味に於ては愛蘭に對する英國の勝利であるやうに見える。が、併し之れを勝つた負けたの見地から批評するのは大に誤りであると思ふ。そは日本の勞働爭議などに於て常に見るが如く、一方が刀折れ、矢盡きて如何とも爲し難く、遂に兜を脫いだと云ふのとはまるで趣きを異にするやうである。愛蘭民族は決して進退谷つたのではない。ロイド・ジョージの提案を以て適當と見做し、デ・ヴァレラの立場を固執するの必要なしとして條約の承認と云ふ事になつたのである。即ち餘儀なくして敵の軍門に降つたのではなく、自ら問題となつて居る解決を相當と認めて折合つたのである。玆に本當の意味の妥協がある。窮して折れたのではない。

そこで問題となるのは初めデ・ヴァレラを戴いてあれ程頑強に英本國に反噬した愛蘭民族が、どうして斯くも易々と妥協的態度を執るに至つたか。一見すれば餘りに腑甲斐ないやうであるが、其處に予輩は一つの大なる教訓を見出すのである。此點を明かにする爲めに例を日本の勞働爭議に取らう。資本家乃至官僚は餘りに爭議の長引くのを恐れて一種の妥協案を出す。勞働者も餘りに長引くの苦痛に堪へかねて此位の案なら容れても好いと云ふ考へになつたとする。が、併し彼等は資本家乃至官僚の誠意を信ずる事が出來ない。窮餘斯くの如き提案で一時の綳りは着けるが、軈て勞働者の擧措狀態から收るに及んで、更にどんどん喰ひ込んで來る。約束も何もあつたものではない。して見るとうつかり甘言に乘る譯には行かないと云ふ事になる。案其物は好いとしても、之れを容れると云ふ事は其先き又どんな苛酷な案で苦しまなければならぬか分らないと云ふ事になる。併し同じやうな考へは資本家の方にもある。勞働者の要求はそれ丈けの問題としては之れを認むるに苦痛はない。が、今日一歩を讓れば他日二歩、三歩と飽くなき慾望を逞しうして來るに相違ないと見る。斯くて彼等はお互に相手方の主張を其儘に見ず、更に飽くなき要求の第一步と見て居る。一言にして云へば彼等は互に相手方の誠意を信じないのである。公平誠實に問題の紛糾を收め、出來る丈け平和の狀態を長く續けやうとする考へはないと見える。斯う云ふ風に相手方の誠意を疑つて居

れば、一旦云ひ出した事は無理にも押し通さずには居れない。即ち總ゆる手段を以て完全な勝利を博する事の外に自ら生くる途がないと云ふ事になる。斯くして爭ひの極度に紛糾するのは多くの場合に於て當事者間に誠意の流れて居ない事を證明するものなのである。

其半面に於て紛糾せる問題が結局に於て圓滿なる妥協を見るのは、時としては物事を徹底的に持つて行かないと云ふ精神的弱點の發露である事もあるが、多くの場合に於ては當事者の誠意を相互に信頼すると云ふ事實を語るものである。愛蘭問題の如きもロイド・ジョージの提案は一時の胡麻化しでない筈だと愛蘭民族は見た。ロイド・ジョージも亦愛蘭民族は一旦獨立を得たら何をするか分らないと云ふ風に疑つても居ない。玆に誠意の信頼があるから實質的に滿足な解決があれば形式的の點に深く拘泥せずして解決すると云ふ事にもなるのである。玆に我々は大に學ぶべき何物かゞ存する事を思ふ。

我々はレーニンが英國政治家の如く妥協的彈力性を有たぬ事を怪まない。露西亞のやうな極度の壓制の行　れた國に於て誠意の信認が政界に流れて居る筈がない。妥協は露西亞に於て無論一物であらう。レーニンの露國に於て偉いのは一には其の非妥協的態度にある。けれども單に非妥協的だと云ふ點丈けで、同じくデ・ヴァレラを彼と均しく並に讃める譯には行かない。デ・ヴァレラを惜し氣なく棄てた愛蘭民族に又一種の面白味があると思ふ。昨今日本の一部の人の間にはレーニンなどに同情して、非妥協的態度が最も男らしい立派な行動だと云ふ風に見る者があるけれども、同じ筆法で英國や愛蘭の妥協性を罵　する者があるなら大なる誤りである。我々は寧ろ朝鮮問題などに於ては勿論の事、内政問題などに就いても容易に妥協的態度に出で難い程度に在る事を甚だ遺憾とする者である。

履き違ひの普選論

普通選擧は今度の議會でも問題になりさうだ。否憲政會が獨立の生計と云ふ愚にも付かぬ條件を除つたので、普選論者の大同團結が出來るだらうとも豫想されて居る。斯くして普選論は昨今再び政界の中心問題たらんとして居るが、併し靜かに世上を見渡すと、其間には隨分履き違ひの議論もないではない。眼に觸れた一つ二つを玆に擧げて見やう。

政友會では若し普選案が上程されたなら次のやうな理由で否決を主張しようと云ふ事である。曰く、物には順序がある。普選を實行するにも準備として先づ之れを市町村會議員選擧に試みて見る必要がある。我黨は既に公民權の擴張に依つて自治體に一種の普選を實行した。斯くして訓練を經、又實際の經驗をも調べた上で、所謂普選を實行するも遲くない。一足飛びに國會議員の選擧に普選を行ふのは順序を誤るものであると。此說は一見甚だ尤もらしく聞ゆるが、實際の所之れ程間違つた考へはない。

一體地方自治體の選擧が國會議員の選擧の豫備的訓練になると考へて居るのが間違ひだ。獨逸のやうに自治體の早くから發達して居た處は、段々積み上げて國會議員の選擧に訓練して行くのが當然の順序だけれども、英吉利のやうに地方自治と國會と別々に發達した處もある。否國會議員の選擧の方が寧ろ地方自治體の選擧に對する訓練になつたと云ふ處もある。日本などは今日地方の問題に就いては、殘念な事だけれども多數の市民は餘り多くの興味を有たない。比較して見ると國家的問題の方に寧ろより多くの理解と興味とを有つて居る。故に實際問題として我國に於ては國會議員の選擧に對する興味の訓練に依つて自治行政の効果を擧げしむるのが自然の順序だ。日本では自治制樹立の當初から地方自治體を以て立憲政治の根底たらしむると云ふプロシア流の考へを元として居る者が多いから今日尚ほ此謬見を金科玉條として居る者があるけれども、我國憲政の實際の發達は此考を裏書きして居ない。國會議員の選擧に普通選擧を實行すべきや否やは暫く別問題とするも、地方自治體に於ける經驗を前提とする議論は全然空論である事を知らねばならない。

一月廿日の國民黨の大會で常議員選定の選衡委員を普通選擧でやれと云ふ意見に同意者が頗る多かつたと云ふ事である。何も彼も普通選擧流行の時代だから、そこに顏を並べて居る者に誰れ彼れの區別なく無制限に權利をやると云ふのが所謂普選の現代的意義だと云ふ考へらしいが、果して然らばそは飛んでもない間違だ。

普通選擧は只形式上誰れ彼れの隔てなく權利を與へよと云ふのではない。單にそれ丈けのものなら普通選擧の實行は國家社會の文化開發の上に何等の道德的意義を存し得ないものだ。普通選擧が現代に重きをなす一つの重要なる精神的意義は、そが總ての人に國事を議するの機會を提供すると云ふ事である。國事を議するの機會の提供と云ふ言葉の中に、此機會を利用して

國者を愼重に研究すると云ふ責任をも包含するが、只今日の普通選擧制度は斯くの如き責任を形式的には要求しない。有權者が與へられたる機會を利用したるべき豫想を以て滿足する。蓋し今日の政治組織の下に於て三年四年毎に行はるゝ總選擧は期せずして國民に對する一つの大きな教育の機會である。殊に選擧が最も理想的に行はれたる場合に於て然りとする。そは各候補者は厭でも應でも多くの人に自分の意見を繰り返しく聞いて貰はんとし、選擧權者の多數も又進んで汎く多くの候補者の政見を聞かうとするからである。斯くして選擧權者は知らず、知らずの間に深い、且つ廣い政治教育を受くる。少くとも投票の瞬間に於ては可なり準備された頭を以て之れに臨むものと見なければならない。今日の政治組織が斯くの如き狀況の下に運用さるゝと云ふ處に普通選擧主張の最も肝要な根據がある。只頭數さへ多くすれば好いと云ふのでない事は、各種の無能力者を除外する事に依つても明かであらう。さう云ふ譯であるから今日の普選論が從來見るが如き差別的選擧資格を云々すべからずと云ふのは、つまり其裏面に從來の選擧法で除外された人の中にも能力のある人が澤山あると云ふ事を豫想して居るからである。只譯もなく區別を撤廢せよと云ふのでないから若し總ての人に能力が疑はれ、研究の準備も疑はれる場合には、普通選擧は實行すべきではない。此意味に於て國民黨大會に於て唱へられたる所謂普選論は、大會の出席者に無制限に權利を與へやうと云ふので、例へば何々神社の管理に關する重大問題を偶然集つた參詣人の投票に依つて決すると云ふやうなもので、之れ程不合理な事はない。尤も國民黨の實際の問題として之れをどう決定すべきであるかは、茲に予輩の斷定し得ざる所であるが只世間には普通選擧の流行に眩惑して只目茶苦茶に多數々々と騷ぐ者が多いから、爲めに普選論の陰に潜む肝要な道德的意義を閑却されん事を恐れて茲に敢て一言する次第である。

小題小言四則

◉所謂黨議束縛の解放

國民黨では一月廿日に議員總會を開き黨議束縛の解放を滿場一致で議決したさうだ。黨議束縛と云ふ事は政黨結束の基であるが、之れが又餘りに各議員の良心の自由を蹂躙すると云ふ弊害もあつた。國民黨が率先して此點に改革を加へたのは、恐らく他の黨にも多大の影響を與ふるだらうと云ふので餘程重要視されて居るが、併し新政治論として之れに多大の意味を附するものがあるならそは大なる

誤りである。成る程黨議束縛には從來弊害があつた事は疑がない。黨員の自由意志に任しても好い問題に就いても一度さう云ふ鞍をつけては岡に乘つて何をするか分らない。即ち牛馬を訓練すると同じやうな意味で、兎々角善かれ悪しかれ黨議には絶對に從ふべきものと云ふ事になつて居つた。それが餘りに人間を奴隷扱ひにした沙汰だと云ふ處に一つの非難があつた。そして強ひて結束を強制するためには、時に腐敗手段が用ひられ、甚だしきは脅迫すら行はれたと聞く。さう云ふ從來の弊害に對する痛烈な警戒として黨議束縛解放の聲は一つの意味をなすが、併し之れを政黨政治に於ける表向きの一原則として立つるに至つては予輩は其の無謀なるに驚かざるを得ない。何故なれば黨議の束縛を絶對に解放するのは之れ政黨其物の根本的破壞であるからである。人固より意見を同じくしない。同一の問題に就き各種の異論あるは免れ難き數である。只十分意見を鬪はした後自ら多數の歸着する所あらば暫く之れに從ふと云ふのは政黨政治家の德義である。固より問題に依つては何うしても盲從する事の出來ないと云ふものもあるから、さう云ふ問題に就いては時としては自由票決の問題とし、又は多數の贊同を得て除外例の承認を求むべきである。即ち我が國の政界に於ける從來の弊害を除かんとならば、もつと多く自由票決の範圍を廣くし、又除外例の機會を多くすべきであつて、其以外に於ては寧ろ黨議の束縛をもつと嚴密にすべき筈である。黨議の束縛其物を腐敗的手段に依つて行はるゝ事を嚴に防ぐべきである。殊に一點が止まない以上は腐敗手段で一人の意志を左右する同じ賄手が極度の異論を固執して容易に纏るべき相談をも纏らさらしむる事も出來る。日本のやうな官僚軍閥の暗中に飛躍する處では政權の結束を蹂躙するに之れより好い方法はない。國民黨は最近切りに思ひ切つた改革の斷行に依つて政界の局面を新にせんと努めて居るやうだが、黨議束縛解放の一事に至つては若し新聞傳ふる所の如くんば、角を矯めて牛を殺すの過ちに陷るものと云はなければならない。

對外問題に昂奮し易き者の民

茲に甚だ贅澤に暮して來た一家族があるとする。段々家道の傾いたのに氣がついて大い儉約をする方針に改めたとする。夫は妻を諭し、妻は子を戒めて漸々改革の實が擧つて居る所へ、突然近所の者が此家を莫迦にケチになつたと罵り、商賣人は俄かに暮し向きが下つたと陰口云ふ。之れを聞いて家族の者が忽ち昂奮して夫れ見ろと又湯水の如く金を使つたとすれば、人誰れか其の愚を憐み嗤はざる者があらう。國内の問題に就いて漸々平和的改善の實を擧げんとして居る我々が、稍もすると帝國議會に於て米國

が我々を壓迫したの、支那問題に就いて英國が日本に同情がないのと云つたやうな流說に迷ふのは我々の甚だ遺憾とする處である。海外問題を種とする一種の宣傳に迷ふて百年の大計の爲めにする庶政改善の好機を逸せさらん事を希望する。

●ロイド・ジョーヂとレーニン　先頃開いた國際經濟會議が三月上旬を期し、ゼノアに召集せらるべき最高會議に獨墺を初め米國、露西亞も招待せらるべしと云ふカンヌ電報は或意味に於て強く我々の興味を唆つた。そは露西亞からはレーニンが出席すべく豫期されたからである。其後佛國の政變が一時此計畫を頓挫せしむるやうに見えたが、ポアンカレーの新内閣も亦前のブリアンと略同一の方針に出づるらしくも見ゆるから多分豫定の通り實現するのかも知れない。若しさうだとすれば我々は茲にロイド・ジョーヂとレーニンとの二大巨頭の取組を見る事が出來る。現代世界に於ける總ゆる問題を段々煎じ詰めて見れば、根本的に違ふ二つの大きな立場の相違に還元する事が出來る。而て或る意味に於て此二つの立場を代表する最も大きな政治家はロイド・ジョーヂとレーニンだと云ふ事が出來る。而て今や近く此兩巨頭は所謂鎬々相摩して雌雄を決せんとして居る。同じやうな意味に於て予輩は先にロイド・ジョーヂとデ・ヴァレラの取組を一代の壯觀だと云つたが、彼とレーニンとの折衝は之れにも優る大きな見物である。佛蘭西などが根本的立場の相違を理由として、初めから露西亞を仲間に入れる事に反對して居るのに、英國が常に一番難かしい相手を選んで打つ突かつて行く態度は仲々見上げたものだ。日本の政治家なども難かしさうな人間を毛嫌ひせず、一番矢釜敷い奴に打つ突かつて行く丈けの勇氣があつたら朝鮮問題や勞働問題なども、もつと早く解決の曙光が着いたかも知れない。

●新刊書の紹介二つ三つ　去年から本年にかけて机上にひろげられた數々の書物の中、僕の今一番調法に利用して居るのは、京都大學の本庄教授の著「日本經濟史原論」である。原論と銘打つてゐるだけ理論的說述も勿論あるが、夫は格別の特色もない樣にも思ふが、僕の現に非常に有益に思つてゐるのは其參考書の說明の部分である。日本經濟史の研究に必要なる否關係なる殆んど有ゆる書物を擧げて之を系統的に分類し、又一應の解說をも附してある。全體の五百頁あまりの中大部分が思ひ切つて之に費されてゐるので、如何に此點に骨折つて居るかゞ分るだらう。僕は現に日本の政治史の研究を此頃始めて居るので、どんな本があるかといふ場合、又此本はどんな本かを知らうと云ふ場合、本書に相談して益を得たこと尠くない。獨り經濟史と云はず、法律政治其他一般に日本の歴史を研究する者

に取つて不可缺のものであることを斷言して憚らない。尚此書と共に同じ著者の「經濟史考」も書肆から發賣を受けたが、著者の學問上の蘊蓄はまた此書に依て窺ふことが出來る。

僕が昨今日本の昔の事を研究して居ると云ふ立場から非常に有益に讀んだ本に川島元次郎氏の「朱印船貿易史」といふがある。之はもと大坂朝日新聞社の懸賞募集に應じ當時の審査員を驚歎せしめたものとやら。夫をいま更に大に訂正増補して出されたものであるから、其學術的價値の大なる推して知るべきである。鎖國以前に於ける本邦人の海外發展の跡を教ふる點に於て、興味多く又教訓に富むのみならず、廣く外國の圖書をも渉獵して隱れたるを明にせる苦心に於て我に大に啓發せらるゝ所がある。多くの讀書子を代表して僕は茲に著者に深厚なる謝意を表したいと思ふ。

以上の外、社會問題經濟問題、ことに昨今流行の社會改造問題の考察に對し、我々に間違ひない正しい理想的背景を指示して呉れた意味に於て、僕は土田杏村氏の「文化主義原論」と「マルクス思想と現代文化」及び野村兼太郎氏の「經濟的文化と哲學」と「社會生活と理想哲學」とに大に感謝の意を表せざるを得ない。社會改造の論議に關し、所謂思想界の混亂の訴へらる今日、右二氏の述作の如きは、誠に暗夜を照らす一道の炬火たるべきものであると思ふ。

まだ友人の先輩の苦心に成るもの机上に多いが、丸で讀まずに紹介するも如何だから、段々次號以下に之を述ぶることゝしやう。



整腸消化劑

ビオフェルミン

—粉末及錠劑あり—

腸疾患の治療と豫防とに

而して特に澱粉を攝取すること多き本邦人の保健の爲にビオフエルミンの服用を推奨す

腸內腐敗制止作用を有する乳酸菌、並に腸內澱粉消化作用を有する糖化菌を共存するビオフエルミンの果効は全醫界に承認せらるゝに至る。腸加答兒、小兒消化不良病、綠便、常習便秘、糖尿病、腎臟炎等に對し効果甚だ卓越す。

(說明書郵呈)

製造元　神戶市二番町　株式會社神戶衛生實驗所

發賣元　大阪市東區道修町　武田長兵衛商店

大正十一年版發行

日本の「時事年鑑」

兼百科全書

菊判千餘頁、製本堅牢、用紙精良、印刷鮮明

定價三圓九十錢、布裝本四圓五十錢
（送料市内十二錢地方二十七錢朝鮮五十五錢）

太平洋圖、勘察加圖（以上四六四倍、着彩版）平和博覽會敷地圖、支那現勢圖挿入

現代人の新聞紙を徹底的に解讀するに於いて、一日も座右を放つべからざる書冊にして、政治、經濟の大より遊技、娛樂の末に至るまで、現代人の苟も知らんと欲する所は、一として本書中に其解釋の與へられざるものなし。

類書中獨王の名を以つて夙に滿天下の信望を得、發賣高追年倍増し、其勢價隆々として旭日の昇天に比すべし。徒に拙速を冀はず、最新の事實に至るまで採錄し、十一年中の用として些も遺憾なからしむ。

發行所

東京市京橋區南鍋町二ノ一一

時事新報社

振替貯金口座東京四三九九番

近代科學の生める偉大なる治療法を
詳述せる書籍を何人にも進呈す



人類の歴史あつて以來疾病の治療と云へば、毒を以て毒を制する藥物療法に依る外なしとし、一にも藥、二にも藥と、無暗に有毒物質を體中に注入する事が行はれて來た、然し醫學の進歩と共にそれの甚だ危險なる事が判明して今後の治療學上に一大改造の時代が現出した、卽ち人は天の與へた自然の發育機能を充分に發達せしむれば疾病は忽然として去り、無病長壽の本全を保つ事が出來る。茲に於て物理療法の隆盛を來たした本書は近代科學の生める最高の理學療法中の寵兒たる。電波光線、電氣に依る理想的の保健手段に就て詳述せるものなれば何人も必ず一讀すべきものである。

希望者は卽時ハガキにて『治療法』送れと申込まれたし無代進呈す

東京市本郷一丁目　**ラヂオレーヤー商會**　（電話小石川六二四　振替東京五二四七）

岡村彦藏著

暗示宗要略

全壹卷

賣價金壹圓卅錢
送料金八錢

本書は著者多年修養に從事し。恰も宗教の化身の如く。一切の行動悉く神の示す所に從ひ。初て了得する事實を錄し。茲に一宗の建設を完ふせる最初の著書なり。其所說全く推測の外にして現下世界に存する一切の著書と撰を異にし。人間の智力を以て窺ふ可からざる一大秘密を明にし。所謂宗教の本體人間の目的及び國家の運命を審にし。一讀人をして信仰の必要を悟らしむ。一宗の所目釋十宗禪宗並に眞言宗々を一にして一旦本書を繙けば何人も必ず宗教の茲に一變する理由を悟る可し。而かも特殊の一大著書にして漢蘇の文因明の論ず些の不明なし。上根者の閲讀に資する唯一の宗教書なり。

岡村彦藏著

宗教了得境地論

全壹卷

賣價金壹圓卅錢
送料金八錢

本書は著者の一宗を建設する理由を明にし。人間一變の刹那に於ける世界の革變を揭げたる者。一讀人をして恰も別域に在るの想を爲さしむ。其所說悉く神の示す所にして些の推測なし。書中國家の運命世界の前途を知らしめ。人間の必ず一變して往古に復するを切論す。暗示宗要略の補遺にして亦た上根者の一讀に資す。

岡村彦藏著

宗教革命論

全壹卷

賣價金六十五錢
送料金五錢

暗示宗の世に出でゝ人間を一變する理由を明にし。宗教の運命全く人間の運命と一なるを知らしむ。全く宗教の變革する原理を明にする唯一の著書にして。信仰の道に志す者の必ず一讀す可き寶典なり。書中日本及び支那の未來を揭げ一大革變を示す可きを豫言す。悉く神の聲を錄する者にして一讀人をして特殊の感想を懷かしむ。亦た上根者の一讀に資す。

發行所 東京麻布區飯倉五丁目 森江本店 電話番號芝一二七四番 振替口座東京三七二番

吉田絃二郎 ●タゴールの哲學と文藝 貳圓五拾錢 送料十八錢

野村隈畔著 ●ベルクソンと現代思潮 貳圓五拾錢 送料十二錢

市川一郎譯 ●最新認識論講義 壹圓五拾錢 送料六錢

小林一郎著 ●芭蕉翁の一生 貳圓八拾錢 送料十二錢

小林榮子案 ●趣味教育 俳句いろはかるた 壹圓八拾錢 送料十八錢

上田恭輔著 ●生殖器崇拜教の話 金六拾錢 送料四錢

一條忠衛著 ●男女の性より觀たる社會問題 壹圓八拾錢 送料十二錢

白石實三著 増訂 武藏野巡禮 三版

●四六判上製 五百餘頁 金貳圓五拾錢 送料金十八錢

萩薄蟲聲曠野月光花雪新緑四季を通して武藏野は繪の如く詩の如し武藏野を知り武藏野を愛し武藏野を慾しむに於て著者は現代の第一人者である。巡禮探勝實に七個年委さに武藏野の自然を觀人を觀、併て其處に生起する土地河川都市田園等の各社會問題を考察せる熱烈可憐なる研究書也。今や地圖風景寫眞十數個を添へ何人にも趣味を以て翫賞し得る樣改訂新装す、新藝術愛好者は古來有名なる武藏野を想ひ此の新抒情詩を繙せよ。

新刊 社會勞働問題と産兒制限論

（瀧本二一郎著）

（好評激甚）

新マルサス主義は創唱せられたれども未だ完全に批判せる書は出ず本書は著者が專攻の社會勞働問題のこれが根本的解決は産兒制限による外なしとの見地より歐米に留學して勞働組合の發達せる英國・社會政策事業の發達せる米國・民族發展に急なりし獨逸國民の現狀●社會主義革命思想の生命に生きて居る佛蘭西・或は露西亞の勞働階級を精査してその所信の正否を檢討研究せる結晶なり、熱血なる著者の筆は自覺ある青年者有識者に必ず何等かの暗示と啓發とを與ふるであらう。

四六判最上製美本 全壹册三百五拾頁

正價金壹圓八拾錢 送料十一錢

小林榮子校訂 （傑作選集） 近松時代淨瑠璃集成

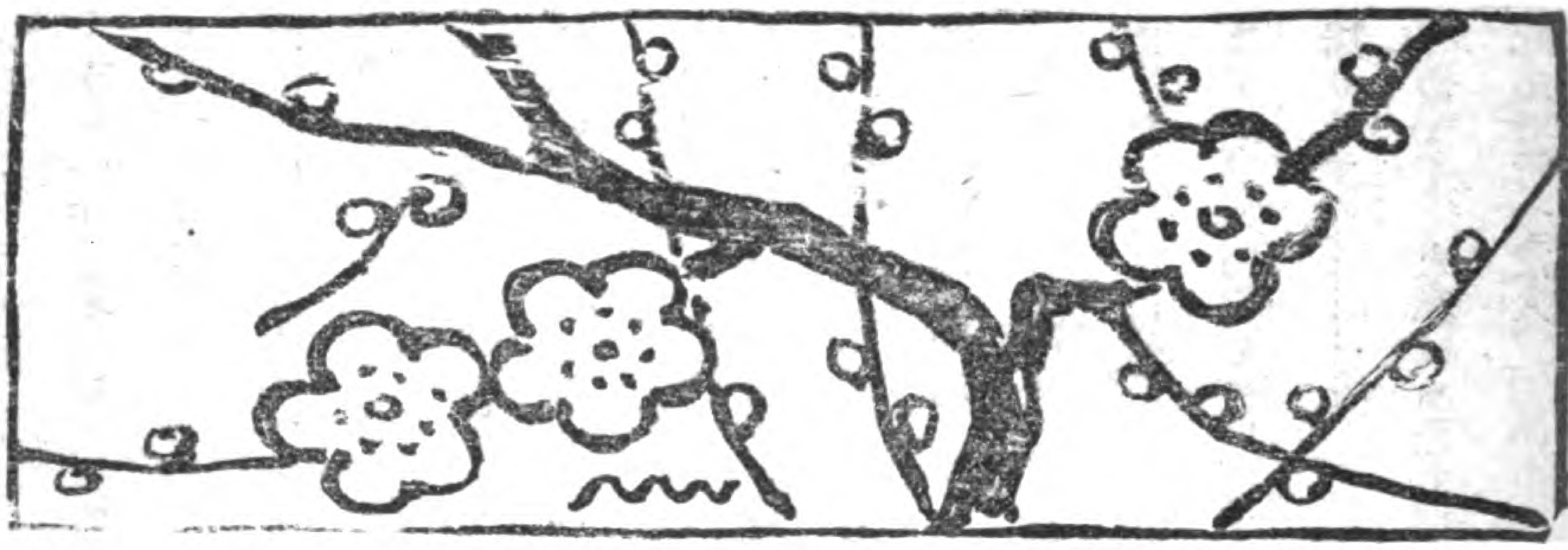
四六判最上製美本 壹千參百餘頁箱入

金五圓五拾錢 送料廿四錢

内容目次

曾我會稽山｜傾城酒呑童子｜嫗山姥｜釋迦如來誕生會｜百日曾我｜最明寺殿百人上﨟｜傾城反魂香｜出世景清｜平家女護島｜吉野都女楠｜雪女五枚羽子板｜國姓爺合戰｜百合若大臣野守鏡｜室町千疊敷｜日本振袖始｜雙生隅田川｜孕常磐｜信州川中島合戰｜關八州繫馬｜本朝三國誌｜其他

東京神田 長神保町七番地 大同館 振替貯金 東京 八七貳番



父の出郷

葛西善藏

ほんの一寸したことからだつたが、Fを郷里の妻の許に歸してやる氣になつた。母や妹たちの情愛の中に一週間も遊ばしてやりたいと思つたのだ。Fをつれて來てから丁度一年程になるが、この夏私の義母が死んだ時いつしよに歸つて、それもほんの二三日妻の實家に泊つて來たきりだつた。この夏以來私は病氣と貧乏とで隨分慘めだつた。十月いつぱい私はほとんど病床で暮らした。妻の方でも、妻も長女も、殊に二女は此頃やはり結核性の腹膜とかで入院騒ぎなどしてゐて、來る手紙も來る手紙もいゝことはなかつた。寺の裏の山の椎の樹へ來る鳥の啼き聲には私は朝夕不安な胸騒ぎを感じた。夏以來やもめ暮しの老いた父の消息も氣がかりだつた。まつたく絶望的な慘めな氣持だつた。

『こゝは昔お寺の出來なかつた前は地獄谷と云つて、罪人の頸を刎ねる場所だつたのださうですね』と、私は此頃ある人に聞いて、成程さうした場所だつたのかと、心に

思ひ當る氣がした。

昨年の春私を訪ねて來て一泊して行つた從兄のKは、十二月に東京で死んで骨になつて郷里に歸つた。今年の春伯母といつしよに遥々とやつて來て一泊して行つた義母は、夏には兩眼失明の上に慘めな死方をした。もう一人の從弟のT君はこの春突然やつて來て二晩泊つて行つたが、つひ二三日前北海道のある市の未決監から封緘葉書のたよりをよこした。

——其後は御無沙汰して居りました。七月號K誌「おみくじ」の作を拜見し、それに對するいたづら書きをさしあげて以來の御無沙汰です。いや御通知いたしかねてゐたのです。半僧坊のおみくじでは、

前途成好事—— 云々とあつたが、あの際大吉は凶にかへるとあの茶店の別ピンさんが口にしたと思ひますが、鎌倉から東京へ歸り、間もなく歸郷して例の關係事業に努力を傾注したのでしたが、慣れぬ商法の失敗勝ちで、つひ情にひかされ易い私の弱い性格から、遂にある犯罪を構成するやうな結果に立到り、表記の未決監に囚はれの身となり居ります次第、眞に面目次第もありません。

昨日手にしたC誌十一月號にあなたの小品が發表されてゐましたので、懐かしさの餘り恥を忍んで斯うした筆をとりました。それに依ると御病氣の樣子、それも例の持病の喘息とばかりではなく、もつと心にかゝる狀態のやうに伺はれますが、如何でございますか。折角お大事になさいますやう祈ります。私の身は本年中には解決はつくまいと覺悟して居ります。…………

あゝ！ と私はまたしても深い嘆息をしない譯に行かなかつた。まつたく救はれない地獄の姿だと云ふ氣がする。死んで行つた人、牢の中の陰鬱のT君、そして自分にだつてちつとも幸福ではない。

私も惨めであるが、Fも可哀相だつた。彼は中學入學の豫習をしてゐるので、朝も早く、晩は日が暮れてから遠い山井ヶ濱の學校から歸つて來るのだつた。情愛のない、暗い、むしろ陰慘な世界だつた。傷み易い少年の神經は、私の豫想以上に、影響されてゐるやうにも思はれた。

十一月の下旬だつたが、Fは歸つて來て晩飯を濟ますと早速また机に向つて算術の復習にかゝつた。私は茶店の娘相手に晩酌の盃を甞めてゐたが、今日の妻からの手紙でひどく氣が滅入つてゐた。二女は痲疹も出たらしかつた。彼女は八つになるのだが、私はその時分も冬の寒空を當もなく都會を彷徨してゐた時代だつたが、發々する當のない「雪をんな」と云ふ短篇を書いた時丁度郷里で彼女が生れたので、私は雪子と名をつけてやつた娘だつた。私には隨分氣に入りの子なのだが、薄命に違ひないだらうと云ふ氣は始終してゐた。私は都會の寒空に慄えながら、隨分彼女たちのことを思つたのだが、いつしよに暮すことが出來なかつたので、私は雪をんなの子を抱いてやるとその人は死ぬと云ふ郷里の傳說を藉りて、さうした情愛の世界は斷ち切りたいと、强ひて思つたものであつた。「雪子は死ぬだらう……」と、私は今朝の鳥啼きのことがまた思ひ出された。

『雪子はまた痲疹も出たらしいね。今日母さんから手紙が來たよ……』と、私はFに話しかけた。

『さう……』と云つて彼は私の顏をちらと視たが、すぐまた鉛筆を紙の上に走らした。

私もそれきり默つて盃を甞めつゞけてゐたが、ふと、机に俯向いてゐる彼の額に、かなり澤山の横皺のあることを發見して、ひとつは斯うした空氣から遁れたい氣持も手傳つて、

『ほう、……お前の額には隨分皺が多いんだねえ！ 僕にだつてこんなには無いよ。猿面冠者の方かね。太閤様だな。……ハ、ハ、ハ。……せい公さうだらう？』と茶湯臺の向うに座つてお酌をしてゐた茶店の娘に同感を强ひるやうな調子で

云つた。

『さうのやうですね。お父さんにはこんなにないやうですね』と、娘も何気なく笑つて二人の顔を一寸見較べる様子しながら云つた。

それが失策だつた。Fは默つてちらりと眼を私の顔に向けたが、それが涙で濡れてゐた。どんな場合でも、涙は私の前では禁物だつた。敏感な神經質な子だから、彼はどうかすると泣きたがる。それが、泣くのが自然であるのか知れないが、私は非常に好かないのだ、凶暴な人間が血を見て一層慘虐性を發揮するやうに、涙を見ると、私の凶暴性が爆發する。Fの涙は、いつの場合でも私に火の鞭であり、苛責の暴風であつた。私の今日の惨めた生活、痩我慢、生の執着——それが彼の一滴の涙に依つて、たとへ一瞬間であらうと、私の存在が根柢から覆へされる絶望と自棄を感じない譯に行かなかつた。この哀れな父を許せ！ 父の生活を理解して呉れ——いつの場合でも私はしまひには斯う彼に心の中で哀訴してゐるのだ。涙で責めるな！……私はまたしてもカアツとしてしまつた。

『何だつて泣くんだ？ これ位ゐのこと云はれたつて泣く奴があるか！ 意氣地無し奴！』

『だつて……人のことを……猿面だなんて……二人で馬鹿にするんだもの……』と、彼はすゝりあげながら云つた。

斯う聞いて、私は全身にヒヤリとしたものを感じて、口を緘ぢた。二人で馬鹿にする……この不用意な言葉が、私の腹のどんな底へ、重い彈丸を投じたものだ。成程そんな風に考へたのか、火鉢の傍を離れて自分はせつせと復習をしてゐる、母や妹たちのことを悲しく思ひ出してゐるところへ、親父は大胡座を搔いて女のお酌で酒を飲みながら猿面なぞと云つて女と二人で聲を立てゝ笑ふ、それが癪に障つたのは無理もないと私にも考へられたが、しかし兎に角泣くと云ふことを私は非常に好まなかつた。

『兎に角貴様のやうな意氣地無しは俺には世話が出來ないから、明日早速國へ歸れ！』と私は最後に云つた。

すぐにも電報と思つたが、翌朝方丈の電話を借りさせて、東京の弟の勤め先きへすぐ來るやうにとかけさせた。弟の來たのは晝頃だつた。

『實はね、Fを國へ歸さうと思つてね、……いや別にそんなことで癇癪を起したと云ふ譯でもないんだがね、實はもうこれ以上やれ切れないんだよ。去年もあんなことで年を越せなくて二人で逃げ出して散々な目に會つたが、今年はもつと狀態がわるい。身體の方ばかしでなく神經の方もだいぶ參つてゐるらしい。毎晩ヘンな夢ばかし見てね、K君のことやおふくろのことや、……俺は少し怖くなつた。兎に角早くこゝを逃げ出したい。僕も後から國へ歸るか、それとも西の方へ放浪にでも出かけるか、どちらにしても先きにFを國へ歸して置きたいから……』

『いやさう云ふ譯でしたらなんですけど、三月と云つてもぢきですからね、Fさんが中學に入りさへすれば、また私たちの方で預つてもど　にでも都合がつきますからね……』

「いや僕もそんなことも考へない譯ではないがね、僕も實はおやぢのところへ歸りたいんだよ。一切を棄てゝ、おやぢといつしよに林檎の世話でもして、兎に角　く活きる工夫をしたい。僕も死にたくないからね。このまゝで行つたんでは俺の健康も長いことはないと云ふことが、此頃だん／＼はつきり分つて來た。K君、おふくろ、T君はまたあんなことになるし、今度はどうしても俺の番だと云ふ氣がして、俺もほんとに怖くなつてゐた。こゝは昔地獄谷と云つて罪人の刑場だつたさうだが、俺は唯佛樣の居る慈悲の里とばかり思つてやつて來たんだがね、さう聞いて見ると成程この一年は地獄の生活だつたよ。こゝを綺麗にして出るとなると七八百の金が要るんだがね、逃げ出した爲めT君のやうな別な地獄へ投り込まれることになるか知れないがね、それにしても死神に脅かされて居るよりはましだと云ふ氣がするよ。僕は

どうかするとあの佛殿の地藏樣の座つてゐる眞下が頸を刎ねる場所で、そこで罪人がやられてゐる光景が想像されたり、あの白槇の老木に浮ばれない罪人の人魂が燃えたりする幻覺に惱まされたりするが、自分ながら神經がどうかしてゐる氣がして怖くなる……』と、私は弟の顏を見ると泣いても訴へたい氣持をそゝられた。

『いや、さう云ふ譯でしたらそれではFさんの方はさう云ふことにしませうか。兄さんの方は後でまたゆつくりと方法を考へて、國へ歸るにしても旅へ出るにしても、兎に角餘り無理をなさらない方がいゝでせう』と云つて弟は私の憔れた顏にちよつと覗入つたが、

『それにしても、さう云ふ氣持が出るのも一つは病氣のせゐなんでせうが、Kさんの時なんか今目を瞑ると云ふ間際までも死神だとか何だとかそんなことは云はなかつたやうですがねえ、さう云つてはなんですが兄さんは少しその禪の方へ、凝つてると云ふ譯でもないんでせうが、多少頭を使ひ過ぎる爲めもあるんぢやないでせうか、私なんかには分りませんけど……』

『そんなことないよ。禪とは別問題ぢやないか。誰が禪見たいな阿呆らしいものに引かゝつて、自分の生きる死ぬるの大事なことを忘れる奴があるか！』と、私はムッとして聲を勵まして云つたが、多少圖星を指された氣がした。

『それでは兎に角行李を詰めませうか』と、弟はおとなしく起つて、次ぎの室の押し入れからFの行李を出して來た。

學校へは急に鄕里に不幸が出來て歸ることになつたからとFに云はせて、學校道具を持つて來させた。晩のご飯を運んで來た茶屋の娘も殘つてゐて手傳つたが、私の腹の底は見透かしてゐるらしいのだが、口へ出しては云ひ出さなかつた。寺の老和尚さんも『さうかよ。坊やは歸るのかよ。よく勉强してゐたやうだつたがなあ……』と云つたきりで、お

婆さんも、いつも私がFを叱る度に出て來てはとめて呉れるのだが、今度は引とめなかつた。私たちの生活のことを知り抜いてゐる和尚さんたちには、斯うした結末の一度は來ることに平常から氣がついてゐるのだつた。行李の中には私たちの共用の空氣銃、Fが手製の弓をひく爲め買つて來た二本の矢、夏中寺内のK院の古池で鮒を釣つて遊んだ繼ぎ竿、腰にさげるやうに出來たテグスや針など入れる箱――さう云つたものなど詰められるのを、さすがに淋しい氣持で眺めやつた。妻に宛てた簡單な手紙も入れさせた。

『濟んだら一杯飲もうか』と云つて、娘に仕度をさせた。

『まだ出る頃ぢやないのか？』と、弟の細君のお産のことを訊いた。

『もうとつくに時が來てるんでせうから、この間から今日か〱と待つてるやうな譯で、今晩にもどうかと云ふ譯なんでせう』

『そりやたいへんだね。何しろ今年はみんなが運がわるいやうだからよつぽど氣をつけないと』

『身體の方にどこにもわるいところがなさゝうだから、大抵大丈夫だらうと思ふけど』

斯うして私たちは日の暮れるのを待つた。最初の動機は、Fの意氣地無しの懲しめと戒めとを兼ねて一週間も遊びに歸すつもりだつたのが、つひ自分ながら幾らか意外なやうな結果になつたのだつた。しかし斯うした場合だから迷はんで斷行じた方がいゝと私は強ひて氣を張つてゐたが、さすがにFと別れるのが物悲しく、これがつひに一生の別れでもあるかのやうな頼りない氣さへした。Fの方は昨晩から隨分悄げてゐたが、行李も出來て別れの晩飯にかゝつたが、いよ〱となると母や妹たちや祖父などに會へると云ふ嬉しさからか、私とは反對に元氣になつた。

『母さんとこで二三日も遊んだら、祖父さんの方へ行つてすぐ學校へ行くようにせ。僕もぢき歸る。どつちにしてもお

前の入學試驗時分までには歸るから、どこに居つても意氣地なくかゝつて泣いたりするな』と、私はFに最後の訓戒を垂れた。

すつかり暗くなつたところで弟は行李を擔いで、Fとの二人が茶店の娘に送られて出て行つたが、高い石段を下り延長寺の境内を通つて丁度門前の往來へ出た分と思はれた時分、私はガランとした室に一人殘つて悲みと寂しさに胸を嚙まれる氣持で冷たくなつた盃を嘗めてゐたところへ、電報！、と云ふ聲が聞えて、寺のお婆さんが取次いで持つて來て吳れたが、原稿催促の電報だらうと思つて手に取つて見ると、差出人が妻の名だつたので、私はハツとして息を呑んだ。

『雪子が死んだ……』さう思ふと封を切る手も慄えた。――チチシスアサ七ジウヘノツク――私はガアーンと頭を毆られた氣がして、呆然としてしまつた。底知れない谷へでも投り込まれたやうな、身邊一切のものゝ崩落、自分の存在の終りが來たやうな感じがした。

『どうかなさつたんですか？』と、お婆さんは私の尋常でない樣子を見て、心配さうに云つた。

『おやぢが死んだんださうです……おやぢが死んだんださうです』と、私は半分泣聲で繰返した。『兎に角にあいつらを呼んで來なくては……』

私は突嗟に起ちあがつて、電報を握つたまゝ暗い石段を驅け下り、石段の下で娘に會つたが同じことを云つて、夢中で境内を拔けて一氣にこぶくろ坂の上まで走つた。そして坂の途中まで下りかけてゐた彼等の後ろからオーイ〳〵F！……と聲をかけた。

『おやぢが死んだと云ふ電報だ。それで明日の朝女房が出て來ると云ふんだが、兎に角引返して吳れ』と、私は息を切らして云つた。

『おやぢが死んだ……？』と、弟も聲を呑んだ。
『おやぢが死んだからつて、あれが出て來るつてのも變な話だが、兎に角唯事ぢやないね……』
『さうですねえ……』
斯うして話しながら引返したが、變死、頓死――兎に角父は尋常の死方をしたのではないと云ふことが、私たちの頭に強く感じられた。室に歸つて來て幾度電報を繰りひろげて讀んで見ても、ほかに解釋のしようもなかつた。
『やつぱしこんなことだつたのか。それにしてもまさかおやぢとは思つてなかつた、雪子のことばかし心配してゐたんだが、此間から氣になつてゐた烏啼きや、ゆうべあんなつまらないことでFが泣き出したのも――多分おやぢは丁度その時分死にかけてゐたんだらうがね、それにしてもなんとか前におやぢから手紙の一本もありさうなものだつたがなあ……』
『それにしても、おやぢが死んだからつて嫂さんが出て來るつて云ふのも、どうも變だと思ひますがね……』
『しかしほかに判斷のしようがないぢやないか。兎に角死んだんだとすれば、尋常な死に方をしたもんぢやないだらう。それでは兎に角今夜お前たちは歸つて、明日の朝上野へ出て呉れないか。そしてすぐ電報を打つて呉れないか。今夜いつしよに行つてもお前とこでは寢るところもないんだし、今夜はよく眠つて氣を落付けて出て行きたいから』
『その方がいゝでせう。兎に角兄さんにしつかりして貰はないと、餘り神經を痛めてまた病氣の方を重くしても困りますからね。遲かれ早かれ一度は斯う云ふ時期が來るんでせうからね、まあ諦めるほかはないでせうよ』と、斯うした場合にも餘り狼狽した樣子を見せない弟は、斯う慰めるやうに云つて、今度は行李を置いてFと二人で出て行つた。
が翌朝十時頃私は寢床の中で弟からの電報を受取つたが、チチブジデキタ――と云ふ文句であつた。それで昨晩のチ

チシスのシがアの字の間違ひであつたことがすぐ氣付かれてホツと安心の太息をついたが、同時に何かしら惡き物にでも逃げ出されたやうな放心の氣持と、禪に凝つてるのではないかと云つた弟の言葉が思ひ出されて、顏の赧くなるのを感じた。

弟たちが出て行つた後私は一人で娘相手に酒を飮み續けてゐたが、私は座つて居るにも堪えない氣持で、盃持つ手の慄えもやまなかつた。

『押入れの袴を出して吳れ。これから老師さんへ獨參に行つて來るから』と、娘に云つた。

『もう九時でせう』

『何時だつて構はない……』

私は斯う云つて羽織と足袋を脫ぎ、袴をつけて、杉の樹間の暗い高い石段を下り、そこから降りかゝつてゐる老師のお寺の石段を、慄える膝頭を踏ん張り、合掌の姿勢で登つて行つたのであつた。春以來二三度獨參したことがあるがいつも頭からひやかされるので、すつかり怖げて了向に怠けて居るのだが、しかし斯うした場合のことだから、よもや老師はお見捨てはなさるまい、自分は老師の前に泣きひれ伏しても、何等か奇蹟的な力を與へられたいと、思つたのだ。蔦が厚く扉をつゝんだ開かずの門のくゞりから、寂寞とした境內に這入つて玄關の前に目をつぶつて突立つた。物音一つ聽えなかつた。暗い敷臺の上には老師の歸りを待つてゐるかのやうに革のスリツパが內へ向けて揃へられてあり、下駄箱の上には下駄が缺つて、白い籐のステツキなども見えたが、私の二度三度の強い咳拂ひにも、更に內からは反響がなかつた。お留守なのか知ら……さうも思つたが、私は何となく不安になつて來た。『老師さん！……』と私は渾身の力を下つ腹に入れて、叫んだ。……老師さん！……老師さん！……老師さん！……更に反響がなかつた。山裡に籠つて愴

燈の明るい窓障子の下に立つて耳を傾けたが、掛時計のカッタン〳〵と云ふ好い音のほかには、何にも聞えて來ない。私はまた玄關で二三度叫んだ。それから數株の梅の老木のほかには何一つなく清掃されてゐる庭へ出て、老師の室の前の茅葺きの簷下を、合掌しながら、最早不安でいつぱいになつた身體を强ひて歩調を揃へて往つたり來たりして、やはり老師さん！〳〵を繰返し續けたが、だん〳〵その叫び聲が自分ながら霜夜に啼く餓えた野狐の聲のやうな氣がされて來て、私はひどく悲しくなつて來て、私はそのまゝ地べたに身體を投げ出して聲の限り泣きたいと思つた。雨戸を蹴飛ばして老師の前に躍り出してやるか――がその勇氣は私にはなかつた。私は絶望と老師を怨じたい氣持から淚のにじみ出て來る眼をあげて、星もない暗い空を仰いだが、月とも思はれないに雲の間がひとゝころボーと黃色く明るんだ。『父だ！』とその瞬間にさう思つた。父の亡魂なのだ。不幸の子を父は遙々と訪ねて來て呉れたのだと思ふと私はまた新らしく淚が出て來たが、私は父を慕ふ心持で胸がいつぱいになつた。『お前も來い！ 不憫な子よ、お前の三十五年の生涯だつて結局闇から闇を彷徨してゐるに過ぎないんだが、私の年まで活き延びたつて、やつぱし同じことで、闇から闇に消えるまでのことだ。妄想未練を棄てゝ一直線に私のところへ來い。その醜態は何事だ！』父は暗い空の上から斯う云つた氣がして、私はフラ〳〵と昏倒するやうな氣持になつた。その梅の老木の枝ぶりも、私には誘惑だつた。私はコソ〳〵と往きとは反對の澁み足で石段を蹈つて來たが、兩側の杉や松の枝が後ろから招いでる氣がして、頸筋に死の冷めたい手觸りを感じた。……

『で、ゆうべあんなことで、つひフラ〳〵とあの松の枝にぶらさがつたはいゝとして、今朝になつてほんとに俺の正體は人間でなくて狐だつたなんと云ふことだつたら、多少痛快だつたな……』と、寢床の中で電報を繰返して讀みながら、さうした場合のことなどまで空想されて、苦笑を洩さない譯には行かなかつた。

弟とFは四時頃歸つて來た。

「おやぢどうした？」

「いや別にどうもなくて無事で來ましたがね、實は今度一と家の方の始末をつけ、片附ける借金は片附け、世帶道具などもすべてGに遣つてしまつて　畑と杉山だけ自分の名義に書き替へて、まつたく身體一つになつて出て來たんださうですよ。親戚へもほとんど相談なんかしなかつたものらしいですね。行李一つと夜具だけ上野までチッキをつけて、一昨日ほとんどだしぬけに嫂さんとこへ　つてすぐ夜汽車で來るつもりだつたんでせうがね、夜汽車は都合がわるいと止められたんで、一昨日の晩は嫂さんとこへ泊つて、昨日青森まで嫂さんに送られて一時の急行で發つて來たんださうですがね、私の方の電報はアスアサ七ジと間違ひなく來てますが、何しろひどく思ひ切つたもんですね」

「まあさうだな。でも思ひ切つて出て來てよかつたさ。身體の方はだいぶ弱つてるやうか！」

「いや脚が少し不自由なだけで、ほかはなかなか元氣のやうですよ。朝から早速飲んでましたがね、やうやく寢たもんですから……」

「なんにしても思ひ切つて出て來てよかつたよ。あゝして一人でゐたつて仕樣がないんだからね。さうかと云つて僕等が行つて整理をつけるとなると、畑だつて山だつて難かしいことになるからね、何しろおやぢうまくやつた、大出來だね」

「まあさうでせう。春になつて雪でも消えたら一度桐でも伐りに行かうなんて、なかなか吹いてますよ」

「それにしてもおやぢとしては隨分命がけの決心だつたのだらうからね、電報の間違ひ位ゐ偶然でないのかも知れないお、こんな間違ひがあると却つて長生きするもんだと云ふからさうであつて吳れるといゝがね、おふくろなんかの場合

のやうに、鎌倉まで來たはいゝやですぐ死なれたんでは困つちまふなあ』

『まさかみんながみんなそんなことも。……どうも兄さんの考へ方は』と弟は非難と冷笑の色を見せたが、言葉は續けなかつた。

『それでは大急ぎで仕事を片附けて二三日中に出て行くからね。……おやぢには出て來て呉れたんでたいへん安心して悦んでゐると云つて呉れ』私は斯う云つて弟を歸したが、それでは一昨晩の騷ぎの場合は父は私の妻の實家で酒を飲んでゐたのだし、昨晩のあの九時頃は多分盛岡附近を老の獨り身を汽車に搖られてゐた譯であるが、——かそれにしてもこのあわたゞしい出て來方は、何ものかに招かれての急ぎの途中ではないかと思ふと、私はまたしても暗い氣持に囚はれた。

——十年十二月——



秘密

廣津和郎

小池氏は何と云ふ事なく、唯もう氣がそわそわして、おちつけませんでした。それも無理ではないかも知れません。何故かと云ふと、三十四才と云へば、人生の半ばはあらまし過ぎ去つたわけです。その三十四才の彼に、今になつて急に、而も生れて初めて、若い美しい戀人が現れて來たのですから。

詩人である彼は、かねがね女について一種の理想――と云ふと少々月並に聞えますが、一種の妥協の出來ない趣味性を持つてゐたやうでした。それは彼の口吻にも、又彼の詩にも現れてゐました。彼の妻であり戀人である女は、第一に美貌の持主でなければなりません。次に、彼女は藝術についての豐かな感受性を持つてゐなければなりません。次に、彼女は快活であり、新らしい自覺した思想を持ち、自由を愛する女でなければなりません……。

彼と同年配の者は云ふまでもなく、彼よりずつと年の若い後輩でも、いつの間にか

ぽつりぽつりと次第に戀人を見つけたり、妻を探し當てたりして、それぞれに家庭を持つて行きましたが、その間にあつて、彼だけは唯ひとり今まで獨身生活を續けてゐました。それは前にも述べたやうな、女に對する妥協の出來ない、彼の趣味性に依るには、無論相違ありませんでした。けれども、又彼の友人達の多くの云ふところに依ると、彼が一體一般の女性から愛されない側の人間であるがために、今まで戀もなければ、家庭も出來なかつたのださうですが、或はそれも一理ないとは云はれません。——實際、世間の一般的の立場から云つて、小池氏は決して女に持てるやうな種類の男ではありませんでした。身長は五尺一寸そこそこでせう。それが瘠せてゐて、見るから小柄で、そして彼の容貌は、決して醜いものではありませんでしたが、その眼と云ひ、鼻と云ひ、頰と云ひ、唇と云ひ、何處となく總てが貧弱でした。男性的の强さ、さう云つたものが、彼の容貌には、少しもありませんでした。尤も、それは彼の好みの上にも現はれてゐて、彼は總ての荒々しきもの、傲慢に尊大に構へてゐるものを好みませんでした。彼は輕きもの、ひらひらとデリケエトに廻轉するもの、小刻みに波動するもの、さういふものの中に、或氣安さを覺えるのでした。さういふ自分の趣味を守ると云ふ點で、彼は確固たる根强さを持つてゐました。彼が花にたはぶれる蝶々のひらりひらりと翅を動かすその翅のリズムを歌つた詩には、彼のその特色が遺憾なく現れてゐました。彼は嘗て自分のその趣味性を主張した一つの論文を書いた事がありましたが、その中で彼は、小さなボオトが將に岸邊に着かうとして、そのへさきをくるりと廻轉する時の、そのくるりといふ快感が、何ものにも勝れたものである事を語つてゐました……

さういふ小池氏の事ですから、そのものごしの柔かさ、口の利きやうのおとなしさは改めて此處に云ふ必要はありません。彼は誰にも惡意を持たれませんでした。總ての女性も、彼を友人として愛する事には、決して異存を持ちませんでした。けれども、それだからと云つて、さうした彼を友人と思つてゐる女性の一人を摑まへて、誰かが、若し、

『小池君は實際好い人です。そして彼は獨身です。若しあなたが彼を愛してやつて下されば……』から勸めたと假定して御覽なさい。その女性は屹度次のやうに答へるに違ひがありません――

『ほんたうに小池さんは好い方ね。信頼出來る優しい方ね。けれども……（そこで一寸言葉を切つて、それから一寸首を傾げて、かう附加へて云ふでせう）でも、總ての男の中から、たつた一人の戀人を擇ばうと云ふ場合に、頭に浮んで來るやうな方ではありませんわ』

又彼の或友人の妹は、こんな事を云ひました。

『ほんたうに、お氣の毒な方ね、小池さんは……あの方なら、ほんたうに好い方よ。――誰かあの方を心から愛して慰めて上げる人はないものでせうか？』……けれども、彼女自身が彼を愛さうと云ふやうな語氣は、その言葉の何處にも含まれてゐませんでした。……

小池氏は始終淋しくて淋しくて堪りませんでした。彼は多くの女性の好意が、或限定されたるところまでは來ても、それから先には少しも這入つて來て與れないのを、だんだんに知るやうになりました。誰からも好意を持たれる、而も誰も自分を最後の一人として擇んで與れない……その淋しさを紛らはすために、彼は時々戀のかけらを賣る女達のところに出かけて行つたりしました。けれども、そこでも彼を無論歡迎しては與れませんでした。――彼は常に物足りなく、淋しく、そして惱ましかつたのです。

ところが、近頃になつて急に、そこに彼女が――冴子が、彼の前に現れて來たのです。

その出來事は餘りに急で、餘りに思ひがけませんでした。彼はそれを考へると、一種の不思議――神秘と云つても差支へないやうな感じに打たれて來るのでした。『おお、神のひきあはせ、微妙なる神のひきあはせ！』かう彼が日記のは

しに書き記したのも、決して無理ではありません。

それは今から未だやつと一ケ月ばかり前のことでした。彼は友人の歌人の横井の家に遊びに行きました。そこに偶然に冴子が來合はせたのです。

横井が二人を紹介すると、

『まあ、小池さん、小池さん……』から彼女は吃驚したやうな聲で叫びました。『ほんたうにまあ小池さんでございますの？　こんなに突然に御眼にかかれようとは、わたくし思ひも及びませんでしたわ』

『……………』

小池氏は、相手の妙に昂奮した樣子に、先づ度膽を拔かれてしまひました。一體彼は女に對して、一種のひけめを感ずるはにかみやでした。それが初對面の女から、そんな調子で物を云ひかけられたので、一層固くなつてしまつたのでした。

『一度お眼にかかりたいと、どんなに思つて居りましたでせう』

『はあ……』と彼は口の中で呟くやうに云つて、そこにきちりと坐つてゐましたが、眼を上げて、その冴子と云ふ女性の顏を見る勇氣が出るまでには、かなり時間がかかりました。が、彼は彼女を見ると、彼女が美しい女であつた事に二度吃驚しました。彼は何と云ふ事もなく眩しい氣がしたので、直ぐ又伏眼になつてしまひましたが、その一瞥の間に彼女が頰の豐かな、色の白い、鼻筋の美しく通つた、全體の感じが豐富で、立派で、又何處となく賑かな、魅力のあるものである事を、見て取つたのでした。——何と云つたらいいでせう。先づ文士並の細君には、一寸ない程、飛び拔けて美しい氣がしました。それが彼の心をときめかせました。殊にその眼、それは黑味勝で、円く大きくて、愛嬌を含んで

ゐて、ぢつと彼の顏を見守つてゐたのです。——恐らくその眼は、その横井の部屋で對座してゐた間ぢゆう、ぶつ通しに彼の顏に向けられてゐたに相違ありません。何故かと云ふと、小池氏が幾度顏を上げて見ても、その度にその眼は、彼に向つて大膽に微笑みかけてゐましたから。

『わたくしはあなたの詩の愛讀者なんでございますよ。——あなたの詩が日本で一番えらいと思つてゐるんでございますよ』こんな事を彼女は、フランクな、臆面のない、快活な調子で云ひました。『ほんたうに思ひがけませんでしたわ、今日突然にお眼にかかれようとは！』

『いや……』

横井が何かの用事で座を立つた時、冴子は、

『わたくしあなたの處に遊びに上つても好くつて？』伏眼になつてきちりと坐つてゐる小池氏の顏を覗き込むやうにして云ひました。

『どうぞ……』

『お邪魔ぢやございませんの？』

『いえ、決して……』

『さう。まあ、嬉しい！』彼女はいかにも嬉しいと云つたやうに、兩腕で自分の胸を抱くやうな恰好をしながら、云ひました。——日本人ばなれがしてゐる、小池氏は活動寫眞で見る外國の女優の表情を思ひ出しながらそんな事をぼんやり考へました。

その翌日、小池氏が起きて間もないところに、早速冴子は彼をたづねて來ました。長い間獨身生活をつゞけてゐる彼

は、牛込のある靜かな下宿の一室に住んで居りました。その翌日、彼女は又たづねて來ました。その翌日も……未だほんたうの戀を知らない小池氏は、さうして自分よりも十才以上も年の若い、美しい女性から、次第々々に戀の手ほどきを習ひ始めたのです。……

二人の間がどんな風に進み、どんな風に高潮に達して行つたかと云ふ事は、諸君の御想像にまかせませう。大體戀と云ふものは、その經驗の現在にあるものには、自分ばかりが、或は自分達ばかりが、そんなにまで高い感情を經驗してゐるものだと云ふやうな事を思ひたがるものです。併しそれは、或フランスの作家も云つてゐるやうに、彼等の祖先がやつて來たところのものの繰返しであり、又彼等の子孫がやるであらうところのちやんと型にはまつたものに過ぎないものです。小池氏と冴子との間も、恐らくはその例に漏れないでせう。……喃語、接吻、抱擁……

或朝小池氏は彼女を待つ間に、部屋の中を片づけてゐました。これも亦、彼の長い間の獨身生活のたまもので、彼は下宿の自分の部屋を、毎朝自分できちりと片づけなければ氣が濟まないのです。彼のきちんとした秩序を好む性癖は、總てのものが、その本來の場所に、一つでも置いてなければ、おちつく事が出來ません。北光線を好む彼の部屋には、下宿屋には稀らしいやうな洒落れた間窓が、北の方へ出來てゐます。その窓の前に、少し右寄りに彼の机は置かれてゐなければなりません。光線が少し左から來ると云ふのが、彼の好むところです。机の上のインキ壺の位置、吸取紙の位置、時計の位置……それから本箱の中の本の位置、部屋の隅の座蒲團の位置……

それが總て片づくと、彼は自分用のメリンスの奇麗な座蒲團を机の前に敷いて、その上に端然と坐つて——彼は胡坐を

と云ふものをかいた事がありませんでした――、それからトランプを出して、ペエシエンスを始めました。誰でも戀と云ふ新しい感情を經驗する時には、多少迷信的になるものです。小池氏は長い間の憧憬がやつと達せられた際なので、一層彼はそんな感情に支配されてゐました。つい一ケ月前まで、此遊戯は、彼に取つては所在ない退屈を紛らすための一つの時間つぶしに過ぎませんでしたが、今はそこにはまるで別な、新らしい意味が加はつて來ました。彼はそのペエシエンスがうまく行く時、直ぐに自分と彼女との間の未來の生活の幸福の暗示を感じました。その反對の時には、その反對の暗示を感じました……

併し彼は餘り長くは、そんな遊戯に耽つてゐる必要がありませんでした。彼がカアドを並べたり、集めたりする事を三四回繰返した時に、彼女の足音の梯子を上つて來るのが聞えましたから。……彼女は活潑な足取りの娘でした。

ドアがガチヤリと開くと、彼女はいつものやうに、にこにこしながら、飛ぶやうに部屋の中に這入つて來ました。そして驅け寄るやうにして、彼の側に行き、先づ彼の肩越しに、彼の脣を求めてから、

『あのね、今日はあたし道々考へて來た事があるのよ。……もうどうしても、それでないと、二人の間が、ほんたうでないと思ふの。』

『まあ、何です、まあ、坐つて、それからお話しなさい』

そこで、その時になつて、彼女は初めて着てゐたコオトを脫いで、それを如何にも無頓着に、きちりと小池氏が片づけたばかりの部屋の一隅に、投げ出すやうに置きながら、火鉢を間にして、小池氏と向ひ合つて坐りました。

『ねえ、今日は何から何まで、洗ひざらしに云ひつこするのよ。――あたしそれを考へて來たのよ。二人の間に、もう何の秘密もないやうにするのよ。ね、お互に、今までの戀の懺悔を聽らかし合ひませうね？――あなたのも聞き、あた

しのも殘らず話してしまひますわ』
『……』小池は一寸苦笑しましたが、併し彼には、彼女に抗ふ事は出來ません、そこでうなづいて見せました。
『ねえ、あなたも贊成でせう。あたし達の今後の關を考へると、どうしても此ままではゐられませんわ。何から何までさらけ出して、そしてお互に許し合ひませうね。どんな事があつても許して頂戴、あたしも、あなたにどんな事があつても許しますから……』
『……』小池氏は再びうなづきました。
『それぢやあ、あたしから始めてよ』と彼女は叫ぶやうに云ひ出しました。『あたしね、ほんたうに今から考へると、腹が立つのよ。……ええ、何も知らなかつたんですもの。一番初めは、十六の時よ。それは戀でも何でもないのよ。まるで夢中の間に、自家の書生に彼られましたの。——高商に行つてゐた男でね、秀才だからと云つて、お父さんが世話してゐたんですの。——あたし愛も何もなかつたんですよ。無理やりに……ねえ、あなた、許して下さつて?』
『……』小池氏はうなづきました。
『次は十七の時よ、あたし鎌倉に夏行つてゐたんですよ。そこで知り合つた帝大の生徒ですの。……あたしの方から、そんなに思つてゐたんぢやないんですけれどね、たうとうほだされたの。……でも東京に歸つて來てからは、もう何でもないんですの。……ねえ、あなた許して下さる?』
『……』小池氏は又うなづきました。
『それからね、その翌年にはね』かう云つてゐる中に、冴子の眼は、妙に熱情的にうつとりして來ました。彼女は何かその時分の事を、小池氏にはとても想像のつかないやうな事を思ひ出したに違ひありません。それが小池氏に何とも云

はれない嫉妬の念を起させたりしました。――冴子は一寸言葉を切つて、溜息をひとつしたかと思ふと、急に、『あたしその人の事を思ふと、ほんたうに可哀さうになるんですよ。それはそれはほんたうに氣の毒な人なのよ。……文學青年なの。早稻田の文科に入りたがつてゐたんですけれどもね、學費のない、貧乏な人だつたんですの。若し今ゐたら屹度小説家になつてゐてよ。立派な小説家になつてゐたと思ふわ。その頃書いたものだつて、それは熱情的なものだつたんですもの……』

『…………』

『あたし始終會つてゐたのよ、その人に。――お友達としてよ。ええ、それはおとなしい人でね、眞面目で、陰氣で、それはむつつりした人なんですものね、あたしなどに會つてゐる時でも、決して膝ひとつ崩さないやうな人だつたんですよ。――そして二人の間には、戀なんていふ言葉はひとつも出なかつたんですよ、最後まで。――その人が國に歸つて、それから死んぢまつたのよ。さう云へば、平生から、體の弱い、影の薄い人だつたわ。――そして死んでから、遺言だと云つて、その日記があたしのところに送られて來たのよ。それを讀んだらね、あたしわつと聲を張り上げて泣き出しちまつてよ』彼女は今は眼にいつぱい涙を湛へてゐました。『あたしの事ばかりが書いてあつたんですもの。……生きてゐる間は何もあたしに云はなかつたのに、本氣に、心の底から、あたしを愛して呉れたんですもの……』

『…………』

冴子も今は默りました。そしてハンケチを出して、眼を蔽うて、啜り泣いてゐました。

『その人の事が、あたし今でも忘れられないわ。――氣の毒な人だと思つて、可哀さうで、可哀さうで……』

『…………』

暫く經つと、彼女はハンケチを眼から離しました。

『それからね、その次は……』と云ひ出すと、今悲しみの熱情に火照つてゐた彼女の顔が、今度は一種何とも云はれない輕蔑の色に燃えて來ました。『あなた、Kと云ふ音樂家御存じ？』

『ええ、話した事はないけれど、顔は見た事があります。なかなか評判な人ぢやありませんか……』

『評判……』彼女は『ふん』と云ふやうな表情をして『何が評判だか。……それは卑屈な男なのよ。あたし音樂が好きでせう、だから音樂會なんかに始終出かけて行く中に、あのKがあたしに眼をつけたんですよ。そしてね、それはあたしの後ばかり追ひまはすのよ。厭な奴つちやありやしないの。……それでね、或晩、あたしを瞞して、自働車で待合に引つぱり込まうとしたのよ。――あたし啖を引つかけてやつてよ、ええ、顔によ。人を莫迦にするにも程があるんですもの……』

それから、彼女は何も幾つかの、戀の懺悔をしました。愛した事、愛された事、その時々によつて、彼女の表情は、喜びに輝いたり、悲しみに沈んだり、憤りに燃えたり、憐みに光つたりしました。――小池氏はそれを聞く毎に、淋しくなつたり、嫉妬に燃えたりしました。何といふ彼女は澤山の經驗を過去に持つてゐるのでせう。……それを考へると、初め小池氏には、何よりも不愉快でした。自分の前に、こんなに澤山の男を知つてゐる女の肉體を考へると、苦しくなりました。が、その中に、彼は妙に今度は羨望の念に打たれ始めたのです。二十一の彼女が、二十一年の間に、既にこれだけの經驗をしてゐる。それだのに、その自分の過去は、何といふみじめな、寂しい、荒涼たるものなのでせう。三十四年の間、自分はどうしてそんな荒涼たる中に生きてゐられたものなのでせう。

『併し彼女が今俺のところに來たではないか』と彼は考へました。さうだ 彼女が今や俺のところに來たのだ、この戀

の色どりの歴史を持つた女が。――さう思ふと、不思議な事には、彼の感情は、又も變化して來たのです。……最初不愉快から始まつて、羨望に變化した彼の感情は、今度は何となく滿足と得意とに變化して來たのです。何と云ひ表したらいいでせう。澤山に過去の經驗を持つた彼女が、たうとう最後にこの自分を拔んだ、さう考へれば、彼女は澤山の枝道を通つて來た後で、たうとう彼――小池氏に到達したものなのだ。最後のものに……

　小池氏は彼女が今し方侮蔑を以て語つたあのKと云ふ音樂家の事を思ひ出しました。Kは若手のヸオロニストとしてかなり評判の男です。小池氏はKが青年會館で、澤山の聽衆の前で、如何にも得意げに演奏した光景を見た事があるのを思ひ出しました。それは身長のすらりと高い、髪の房々とした、鼻の秀でた立派な男です。彼が若い美男の音樂家として、多くの女達の間に人氣のあるのを小池氏は知つてゐます。して見ると、あの美男のK、人氣者のKよりもこの冴子の眼には、自分の方が取りどころのある男に見えたわけなのだ。……そのひとつを考へただけでも、小池氏は得意になる資格が自分にあるやうに思はれました。

　彼は心の中で、ひそかに頬笑みさへもしました。

　すると、その途端に、今までかずかずの戀物語を、後から後からと並べ、悲しんだり喜んだり憤慨したりしてゐた冴子が、もう何も彼も喋り終つてしまつたと云ふやうに、にこにこと笑つて、

『あたしの話はこれだけよ。これで何も彼もおしまひよ。――ああ、胸が清々したわ。ねえ、あなた、みんな許して下さるでせう?』さう云つて、媚びるやうに小池氏の顔を見上げながら『さあ、今度はあなたの番よ。何も彼もすつかり話して頂戴。たとひどんな事があつても』と『どんな事』に力を入れて、『あたし許して上げてよ』

『……………』

『さあ、さあ、ねえ、すつかり話して頂戴』

『…………』

小池氏は此處まで來ると、何とも云はれない當惑したやうな感情が胸に迫つて來るやうな氣がしました。

『僕は何もないんですよ』と彼は勉めて氣輕に云ひました。

『ない？　嘘よ。嘘よ。そんな事があるもんですか。あなたにそんなことがあるもんですか。あなたは今になつて、あたしに打明けたくないのね。人に話さして置いて、御自分では匿さうとなさるのね。あなたはあたしを愛していらつしやらないのね』

『いや、そんな事はありません、冴子さん、僕はないんですよ』

『嘘ツ、嘘ツ』さう云つて、冴子はほんたうに腹をたてさうでした。

『…………』小池氏は腹の中で考へました。ほんたうに、彼には何の經驗もないのです。併しそれをほんとうに云つても、冴子は信じては呉れません。――それに考へて見ると、相手の彼女があんなに澤山の告白をしてゐるのに、それに對して、自分に何もない、と云ふのは、何となく肩身が狹い。三十四年生きてゐながら、戀ひとつしないと云つたら、何にしろ不自然です。――おまけに彼は、何かの本で讀んだ事があるが、男が餘り清淨だつたと云ふ事は、戀する女の心に、大して滿足を與へるものではない、寧ろ、男が立派な戀の經驗者である方が、女の戀の熱情を强めるものだ、と云ふ事を思ひ出しました。小池氏はそんな事を考へ出すと、何となく相手に對して、張り合ひたいやうな欲望を覺えて來ました。さうしてふらふらと、

『殆んど僕はさういふ經驗がないのです。でも、たつた一つあります』かう云つてしまはずにゐられませんでした。

『さうでせう、さうれ、御覧なさい』と冴子の眼は輝きました。『さあ、話して頂戴』

そこで小池氏は靜かにぽつりぽつりと語り出しました。

小池氏が何を語つたか、と讀者諸君はお思ひになるかも知れない。けれども、諸君はかうした獨身者而も詩人であるところの老獨身者が、一體戀と云ふものについて、どんなに豐かな想像力を持つてゐるものであるかと云ふ事を、理解なさらうとした事はありますまい。——若し小池氏の詩を、前から注意して讀んでゐた人があつたら、その人は彼のいろいろの詩の中に、常に假想された一人の戀人の存在してゐる事を、知つてゐられるでせう。——それは一人の完全な女です。それは美しき氣高き容貌を持ち、明かな知識と理解力とを持ち、女王のやうなゆるやかな抱擁性を持ち、そしてその感情は、淋しき一個の詩人の心の隅々を、すつかり包んでしまふところの優しいものなのです。

それを今小池氏は、或溫泉場に持ち出しました。小池氏がひとりで、淋しい詩の未定稿をふところにしながら、それを訂正しかたがたその溫泉場に行つてゐた時の事です。彼女は小池氏が滯在してゐた同じ下宿屋に、長い間滯在してゐたのでした。

『それは或金持の奥さんなんですよ。僕より年が二つ上でした。僕が二十七の時ですから、その人は二十九でした。ええ、併し二十九でも、一寸見には、二十を一寸出たばかり位にしか思はれないんですよ。夜會風な髮の結ひ方などする時には、もつとも隨分派手好きな人でしたがね、どうしても未だお孃さんとしきや見えないんです。……學校？……學校は虎の門ですがね、學校を出てから、亞米利加に一寸行つてゐた事などあるんですよ。……』

『まあ、隨分奇麗な方だつたでせうね』と冴子は熱心に云ひました。

『奇麗も奇麗でしたがね、それよりも品の好い人でしたよ。文學に理解を持つた人でね、外國のものなど澤山讀んでゐ

ましたよ。――たつた一人でその溫泉場に來てゐたんですがね、生活が非常につまらない、と云ふ事を始終口にしてゐましたよ。何でも良人が精神的な事には、まるで理解がない人なんですつて。金持や華族なんかには、よくあるタイプの男らしいんですね。妾を圍つたり、待合入りをしたり、そんな事ばつかりしてゐるらしいんですね。――それでその夫人は良人と荒々しく爭つたりする事が厭さに……良人を輕蔑してゐたんですよ……さうして、自分では自由に溫泉なんかに一人で來てゐたんですよ』

『その方とどうして戀をなさつたのか、聞かせて頂戴……』

『と云つたところで、極めて有り來りですがね』と今や小池氏は十分な餘裕を以て、微笑をさへその顏に浮べてゐました。自分でも此俄かごしらへの創作に、ちやんとした必然性が加はつて來た事を、確信してゐるのでした。『最初は僕のところに本を借りに寄越したのです。ええ、宿の女中を通してです。それから、僕の部屋に遊びに來るやうになりましたし、僕からその人の部屋に遊びに行くやうになりました……』

『まあ、美しいわ……』と冴子は呟きました。彼女の頰は熱して、彼女の眼はかなりの嫉妬と、又その語られた光景の美しさに對するセンチメンタルな感激とを、一緒に表してゐました。

『根本的な事にばかり興味を持つてゐる人でしたよ』と小池氏は語りつづけました。『話しにもキビキビと氣持の好い程理解が早いし、僕が書いた詩稿を讀むのが好きでね、僕の書いた氣持も、實に解る人でしたよ』

『あの……』と冴子は妙に恥しさうに口籠りながら、『あたしよりも、それぢやその方の方が、あなたの詩をもつとよく理解して？』

『いや』と小池氏は冴子の昂奮した樣子に、心の中から滿足の微笑を催しながら、『それはさうは云へませんよ。――そ

の人よりも、何と云つても、あなたの方が新時代ですからね』
『どうですか知ら。――さう思ふのは、あなたの買ひかぶりぢやなくつて?』
『いや、決して買ひかぶりぢやありませんとも。あなたは人生をあきらめてはゐないでせう。人生に希望をもつてゐるでせう。それだけでも、あなたの方が生々してゐますよ』
『さうでせうか』と彼女は答へて、『さうなら、嬉しいんだけれども……』
それから小池氏は、その女と如何に戀をして行つたかと云ふ事、併し今冴子が口を挾んだ言葉の手前、その人が人生に對してあきらめを持つてゐるので、たうとう彼の許へ、生活を壞して走つて來るだけの勇氣は示さなかつたと云ふ事などを――そこが既に過渡時代の婦人に過ぎないと云ふ事などを、いろいろと語りました。
冴子はそれを身動きもしないでぢつと聞いてゐましたが、小池氏が語り終つて暫くしてから、大きくひとつ溜息をして、
『他にはないの?』と云ひました。
『ええ、外には決してありません』と小池氏は誓ふやうに答へました。
『さう。……でも、ほんとうにその方とは美しい戀をなさつたのね。』さう云ひながら、熱情的に彼の方へすり寄つて來て、『それではあなたは今までに、その方とあたしつきりなんですね、愛して下さつたのは』
『さうです、二人だけです』
『ねえ、その方の方を餘計に愛しなすつたんでせう、あたしより』
『いやいや、そんな事は決してありません。その人は人の細君です。そしてあなたのやうに全部をもつて、僕のところに走つては來なかつたのです……』と云ひながら、小池氏は自分のその場限りの創作が、餘りに冴子に効果を與へられ

たのが、今や滿足を通り越して、少しく不安に、又不快になつて來ました。何か心の底に、氣持の惡い白々しさを感じて來ました。

『ねえ、あなた』と冴子は、たうとう情熱が爆發したと云ふやうに、彼の腕の中に身を投げて來ました。『今こそあたし達の間には、もう何の秘密もありませんのね。もうお互に何から何まで、みんな打明けてしまつたのね。あたし嬉しいわ。嬉しいわ』さう云ひながら、熱した唇で彼の唇を求めて來ました。

小池氏はその愛情に感じながら、心の中は妙にちぐはぐな、ぎごちない、冷たい感じ――一種の自責の念に、いつぱいになつて來ました。彼は自分の白々しさを冴子に覺られまいとするやうに、彼女と同じ熱情をみせうと努力しながら、彼女の唇を吸ひました。そして胸の中で

『俺は今までこの女に對して何の秘密も持つてゐなかつた。――ところが、今日になつて、彼女の秘密が打明けられたのに反して、思ひがけなく、自分は却つて新しい秘密を作つてしまつた――今自分の話した事が、みんな嘘だと云ふ事を、打明けたら、俺はどんなに救はれ、どんなに清々するだらう。……それだのに、ああ、俺にはその勇氣がない、その勇氣がない！』そんな事を、悲しげに呟いてゐました。（終）



生活の沼

宮地嘉六

一

何を求めて此の東京へやつて來たのだと問はれたならば私は下のやうに答へたであらう。

『正直な話が、私は私の値打があまりにK市の人々に、戀人にさへも分り過ぎた爲めに今一度新たな幻影で自分を包まずにゐられなかつたのです……彼女及び私の値打を知り過ぎたK市の人達が今一度私に對する善き意味のイリユウジヨンを甦らせてくれることを望んだからです。それには東京を選ぶ必要があつたのです……

然し其の私の心事は何と云ふ被害的ないたましいものだつたらう。それは丁度花合せに身をやつした一人の敗け目の男が持ち札の惡いのに絶望しながらも、なほ殘り少いめくり札に最後の僥倖を取りあてゝ、少しでも此の人生の零敗を免かれやうとする氣持にも似てゐたからである。さうである。大都會は希望に輝く自信ある青年の運命

の賭博場であるばかりでなく、實にまた私のやうな絶望者の最後の身の捨て場所であつたからである。

出獄後の吉村修三は民文社に身を置いてゐると云ふことだつたが、私は東京へ來て直ぐには彼を訪ねなかつた。民文社と云ふのは表面文藝代作引受所であつたが實は社會黨本部で、銀座裏通りに小ぢんまりとした其の事務所風の、氣のきいた構へを見せた。金文字入のスリ硝子のドアがそれであつた。私は或る夜、一度其所の前を通つて見たが、何となく一種妙な魅力を以て靜かに閉つてゐるスリ硝子のドアは内なる電燈に照らされて、民文社と書いた金文字を浮き出させ、長い間の獄中生活から出て來た同志達の疲勞的な落ちつきと、意味ある沈默とを思はせてゐた。

私が彼を訪ねなかつた理由は云ふまでもなく警察の干渉がうるさかつたからである。先づ工場にありついてからと思つて逢ひたいのを我慢した。何しろ警察では今後社會主義者と交通するならば飽くまで私の就職を妨げると云ふのであつたから仕方がなかつたのである。

然しやつと工場に働けるやうになると警察の脅し文句などを正直に守つてゐられなくなつたのは無論である。私は東京へ來てから三つきめに遂に堂々と民文社を訪ねて吉村に逢つたのである——五年ぶりであつた。

二

スリ硝子のドアを押して入ると玄關の右手は社員室で、狹い室には五六人の社員達がテーブルに向ひ合つてせつせとペンを馳らせてゐた。流暢なフランス語らしい外國語で電話の應答をしてゐる光景や、煙草のけむりや、豹のやうな目つきや、異樣な長髪や、土佐犬然たる顏やが一風異つた雰圍氣を見せてゐたので私はちよつと氣おくれを感じた。

「何か御用ですか。」社員の中では割合に平凡な丸顏の男が氣輕に取りついでくれた。

『吉村君はをりますでせうか。』

『をります。あなたは。』

『私は山田清六と申します。ちよつと逢ひたいのですが。』

『ぢや待つて下さい。』と丸顔は云つて、二階を仰向いて『吉村クウン。』と怒鳴つた。

『おうい。』

『ちよつと階下まで。』

間もなく降りて來たのは吉村だつた。私は笑顔でお辭儀をした。彼も近眼鏡の目を大きく見開いて私の豫想通りの表情で、それは數年と云ふ年月に思ひ切り愬へたい表情で『おう……』と迎へた。血色の好い笑顏は以前と少しも變らず、長い間監獄で暮して來たと思へないほどであつた。相變らずひどく吃る男であつた。

『い、いつ來た。意外だなあ、さあ上りたまへ――いや構はない。』彼は云つた。

私は云はれるまゝ遠慮しながら、二階へ上ることにした。通りへ面した鐵格子の窓のある六疊の部屋には机が一脚ほどあつて、吸ひがらでいつぱいになつた灰皿や洋書がだらしなく置かれてあつた。あまり風通しのよくない暑くるしい部屋である。

『まあ、君は丈夫で出られてよかつたね。刑期より早く出られたのは何よりだつたね。』

『あ、まあどうにか出て來た。そして君は……。』彼は私に訊ねた。

『僕：　僕は此年の三月に來た。』

『さうかね、君がこつちへ來てゐるとは知らなかつたよ。さうかねえ……あれからもう五六年になるが矢張逢へたねえ、

さあラクにしたまへ、構はない。今日は僕の方はひまなんだから、ゆつくり……』
『まる三年ぐらゐ中にゐたかね。隨分苦しかつたらう。』
『まあ、あんまり愉快でなかつたねえ。馴れるとそれほどにもなかつたが――君もちよつと入つたさうだねえ。そんな話をいつか立川から聞いたよ。』
『僕のはほんの僅かだつた。未決監に四ケ月ほどゐて、それですんだ。』
互に牢獄と云ふ別世界を見て來たことでは特別の友情を覺えずにゐられなかつた。
『K市の方はどうだね、志田君や竹田君などは達者でゐるかい。』
『あ、達者でゐる。だが大澤君はとう〳〵死んでしまつたよ。』
『さうだつてなあ。僕の事件で度々證人で喚び出されて病氣を押して遠いところを來てくれたが、豫審廷で逢つたのが最後だつた。あの時分もうひどく衰弱してゐたやうだつた。然し元氣な男だつたがなあ――あ何から話して好いか分らない此所は暑いから、そこらの氷屋へでも行かう。』吉村は洗ひ立ての浴衣に着替へた。それから私は彼の云ふまゝに横町の氷屋へ行つた。

三

『で、君は今どこにゐる。』彼はアイスクリームを匙で掬いながら、またいろ〳〵と私に尋ねかけた。
『芝にゐる。三田四國町の二番地……』
『矢張、ぢや工場で勞働してゐのか ゝ。三月に來たのなら何故もつと早く訪ねてくれなかつたのかね。』

『それがだねえ。僕は今度は警察にひどくなやまされたんでねえ。社會黨の連中と往復するならば工場で働くことは出來ないと云ふんだ。そして尾行をきびしくつけるもんだから仕方なしに工場にありつく爲めに來たいのを我慢してゐたんだよ。』私は云つた。

『相變らず君は正直だ。』と吉村は笑つて『そんなだつたら無理にもやつて來ればよかつたのになあ。』

話はK市の同志達のことに再び飛移つた。

『で志田君や竹田君は矢張あちらの工廠で働いてゐるのかね。』

『いや、工廠の方はとつくに解雇されて二人共今はやめてゐる。二百圓あまりの解雇手當を貰つて、そいつを元でにして、素的な商賣を始めてゐるよ。高利貸を始めてゐるんだが、それが大當りで、近頃では大分景氣が好いやうだ。』

『ほう、高利貸を、そいつは奇拔だなあ。ぢやもう社會主義なんか棄てゝしまつたのかね。』

『ところが、さうでもないやうなことを當人は云つてゐるがね。竹田君などはブロカー宣教師の直ぐ近所の學校の前で文具を始めてゐるが、店は妻君にまかせて、自分は毎日自轉車で羽織の背を風にふくらませながら市中を駈け廻つてゐるよ。何でも小商人等を相手に高い日歩でどん／＼貸しつけてゐるらしい。自分達の理想するやうな社會が早くやつて來るやうにするには逆に行く方が効果がある。高利貸をやつて反對の方面から經濟組織の缺陷を自覺させてやるんだ。なんて云つてゐるのさ。志田老人は竹田ほどにこせ／＼してはゐないがなか／＼惡辣の點では一枚役者は上手だと云ふことだ。それに好い金主がついてゐて大きい金を運轉させてゐるらしい。小ぢんまりとした家に住んで骨董物でもいぢくりながら、それや全く以前とは比べものにならない生活をしてゐるよ。』

『そいつは偉いなあ。』吉村は興味につられて聞くばかりだつた。

『それから、何でも君は志田君の娘と一緒になるやうな風だよ。僕はいつか大澤君の手紙で見たことがあつたが、その方はどうなつたのだ。君はもうK市で結婚でもしてうまくやつてゐることゝ思つてゐたよ。』

『ひところ、ちよつとさう云ふ話になりかけたが、變な工合になつたんでよした。』

『ちよつときれいな娘だつたぢやないか。』

『なに、大したこともない。』

『志田老人の方には娘を君にやるつもりがあつたらうと思ふがねえ、矢張妻君のつれ子で思ふやうに行かなかつたわけだらう。最初君を婿に所望してゐたさうぢやないか。』

『なに、さうでもない。』

私はこのことについては彼に聞いて貰ひたい氣持もあつたが、わざと事もなげに云つた。かうして大都會の華やかな人波の中に來て見ると彼女ほどの女はざらにゐると云ふ氣もして、失戀の傷口はもう殆ど痛みを感じなくなつてゐたのである。それに、久しぶりに逢つた彼に愚痴らしい話も云ひ出したくなかつたので。

四

二人は二杯目のアイスクリームを舐めながら、なほいろ〳〵の話を飛び〳〵に續けた。

『君。こつちへ來てから立川に逢つたかね。』吉村は云つた。

『まだ一度訪ねたきりだが、相變らず元氣だねえあの男は、君は時々逢ふかね。』

『殆ど逢はない。僕のことを何か云つてやしなかつたかね。』吉村は私の胸のあたりを見ながら氣になるやうに云つた。

『いや、別に聞かない。』

『僕はもうあの男を信用出來なくなつたので接近する氣はなくなつたんだ。』彼は云つた。

『さうかね。どうして。』私は敢て卽座に其のわけを聞かうとも思はなかつた。然し私はK市での彼等の親密さを知つてゐたので少し意外な感じもした。私は一時彼等と同宿してゐた時分、二人の相許した親密さを或る時は非常な抑制を以て傍觀したものであつたからである。彼等は社會主義と云ふ思想の上から私と云ふ一勞働者に極めて概念的な同情を見せてつき合つてはくれたが、或る意味では彼等二人の親密の犠牲にされてゐるやうな不快な感じをさへ私は自から經驗した。

　然し今は二人が以前ほど親密でないと聞くと何故かまた妙にもの足りない感じがした。それは私が彼等二人に對するいろ〳〵の、其の當時のいやな、またはもの足りなかつた感情は長い年月によつてすつかり淨化され、客觀化されて、かうした大都會で逢つてなつかしい追憶を樂しむ上からは二人が以前の通りであつてほしかつたゝめである。然し大抵の人間が何れ最後には仲たがひをするものだと云ふ意味で、私は彼等の今日を幾分期待してでもゐたやうな一種滿足を持たないではなかつた。

『然しK市ではあの男のことを皆がほめてゐるよ。立川と云ふ男は偉い人になつたと云つてゐる。敎會でも一時は惡く云つてゐたが矢張一部の人は感心してゐるさうだ。K市に新思想の種を蒔いて行つたのはあの男だと云つてゐる人は澤山あるよ。』

『それはさうかも知れぬ。あの男はちよつと人を魅するところがあるにはあるからねえ。だがようく接近してつき合つて見ると案外な男だよ。僕はあの男を買ひかぶつたとしか思へない。實に無責任で曖昧で、好い加減な男だ。僕はもの

事件の起る前まで彼の家にゐたんだがね、毎日もぐり代言風の得體の知れぬ男ばかりやつて來て、朝から晩まで何千圓何萬圓と云つたやうな大げさな雲を掴むやうな話ばかりしてゐるんだ。立川はさうした客を相手に大眞面目に金儲けを論ずるんだ。だが僕がゐた間に一つだつて物になつたことはありやしないんだ。そしてあの通りで何もしないで、居喰ひしてゐるんだらう。收入が全くない。遂には僕の所持品をどん〳〵勝手に質屋へ持ち出すのだからやりきれないさ。間もなく僕は監獄へ行つたもんだから何もかもめちやくちやにされてしまつた。それで平氣なんだから驚くぢやないか。』吉村は子供らしくむきになつて云つた。私はかう云ふ時の吉村には一層親しさを持つた。

『それはひどいな。』私は少し笑はずにゐられなかつた。

常に正義を説き、口を開けば火のやうな社會主義論を吐いて人を醉はせるほどの立川ではあつたが、何處かにづうづうしいやうな、人を喰つたやうなところもあるのは確かであつた。それに比べると吉村は氣の弱い正直な、まだ世ずれのしない男だつた。立川について彼がこぼすのは當然だと私は思つた。

然し立川の方では吉村を、意氣地なしの女々しい、小ぼけな、小細工を弄する救ひがたい奴だと云つてゐることを私は知つてゐたのである。

『まあ好いさ。』私は彼をなだめた。

『それはさうと、竹川君はブローカーの家の近所で文具店を始めてゐると云ふが——するとまだあのブローカーの奴、矢張K市にゐるんだね。』吉村は話を轉じた。

『ゐるよ。丘の上に立派な西洋館を新築したよ。そして市中をよく自働車で乘り廻つてゐる。子供や妻君を乘せて、自分は運轉手臺に腰かけてハンドルをとり、ブウ〳〵と威嚇的な警笛を鳴らして、傲慢面をして、まご〳〵してゐる者は

睨めつけたり叱りつけたりして狭い町を乘り廻してゐるよ。K市ではあれが一番最初に自働車を買ひ込んだ方だらうよ。』

『相變らず俗物だねえ。』吉村は云つた。

彼はK市で其のブローカー宣教師の秘書役のやうなことをやつてゐた。然し此の未來の小牧師は、其の時分東京から流浪して來た社會主義者の立川によつてすつかり思想を一變した。その點は私も同樣である。——彼は間もなくブローカー宣教師のもとを解雇された。それは教會及びキリスト教に反抗的氣勢を見せるやうになつたからである。彼はK市を去つて東京の同志に加つた。そして遂に大逆事件のまきぞへを喰つて五年の刑を宣告されたのである。

『一度監獄へ行つて來ると社會のありがたみが僕には分つたよ。出獄當時は、生活はそのまゝ立派な一つの藝術のやうにさへ見えた。此のまゝの社會で澤山だと云ふ氣がしたよ。』私は云つた。

『それは僕等だつてさう云ふ氣持がしたにはしたさ。出る時は嬉しかつたさ。世の中が珍らしくつて美しくつて生活は祭禮のやうに見えたよ。どんな仕事でもこつ〳〵やるのが愉快に思へてならなかつた。然しそれはほんの當分だ。』彼は云つた。

『それはさうだ。』

此の時リンネルの異人服を着た十二三の小娘が氷屋の店先を廻りかゝつた。

『ふうちやん。アイスクリームをあげるからいらつしやい。』吉村は其の子を手まねきした。小娘ははにかみながら行つてしまつた。

『あれは社長の娘だ。』吉村は私に云つて、『君はまだ社長のK氏に會つたことがないだらう。何ならこれから社へ行つて

紹介しても好いが。』

私は再び吉村と共に民文社のドアを押した。そして彼の紹介で始めて社長のＫ氏に會つた。

『社長、これは私がＫ市にゐる時分からの友人です。今芝の方の鐵工場で勞働をしてゐる山田淸六君です。』

『まあおかけなさい。』

小柄のづんぐりした、いがぐり頭の社長は、ペンを持つたまゝ底光りのする近眼鏡を私に向けて簡單なあいさつをくれた。――此の日、豫てから尊敬してゐた私にとつて一番偉い人物に始めて會つたのである。

五

『社長は一度でも逢つた人は決して振り棄てない人だ。かなり社交も廣い。社會主義者でない人間でもあの人を尊敬する人は澤山ある。意外の方面に援助者を持つてる人だ。』

吉村は私が二度目に訪ねた時、一緖に公園を散步しながらＫ氏について私に云つて聞かせた。

『あれで、いざとなれば捨て身になつてやる人だらうが。第二の△△事件のやうなことはないやうにと僕は望むねえ。銳い目つきをしてゐるぢやないか。社員に對してはどうだね。やかましいかい。』

『いや實に親切で溫和だ。めつたに小言などを云ふ人ぢやない。その代り一度言ひ出すとひどいよ。痛烈にやるね。僕はまだやられたことはないが――それや度量は廣い。』吉村は云つて『君のことを社長が訊ねたから僕はあらまし話して置いた。』

『さうかね。どんな風に……。』

『何、どんな人かと訊ねたから、かう〳〵で東京へ來てから警察の迫害で工場に入るのが困難だつたことなどを話して置いた。大へん同情してゐた。それから君が勞働をしながら文學を勉強してゐることもついでに話して置いた。』

『社長は僕を民文社の何かに使つてくれないだらうか。』

『さあ、それは頼んで見なきや分らないがね、今のところは社員はあきるほどゐるから駄目だらうと思ふが、そのうちに人がいるやうだつたら話して見よう。然し民文社の仕事だつて工場勞働と大した異ひはないよ君。終日つまらない文章の代作ばかりやつてゐるのも好い加減なものだ。まだ〳〵それよりか、晝間工場で働いて、夜分に宿へ歸つて讀書でもして勉強する方がましかも知れないよ。』吉村は云つた。

私は一應うなづいたが、幾分相手の心なさに失望を感じた。さう云ふことは誰もがよく云ふことであつたからだ。それは一度も工場勞働、筋肉勞働の苦痛を經驗したことのない者のよく云ふことだ。然し鐵工場でハンマやスパンナを握つて勞働することよりも輕いペンを持つて文字を書く仕事の方が數等高尚であることを誰だつて感じ得るだらう。それはどんなに貧乏な文士の類でもそれを感じない筈はないと私には思はれるのだつた。

『だが君は一度もやつたことがないからさう思ふんだよ。汗と油と石炭の煙と異樣な埃とで濁りきつた黑い空氣を吸つて工場勞働をやつて來たものでなくちや僕等の苦痛は分らないよ。そこではもう人間は消耗品と同樣なんだからねえ。戰爭よりも人命は悲慘に損はれてゐるよ。こんなことは君には分りきつてゐる筈だ。誰かと云つたやうに、終日勞働すると人間は野獸に近くなるさうだが實際さうだ。靑い草の裡の虫が、その草と同じ色をしてゐるやうに、人間も日の目の見えない工場の中で暮してゐると精神の色までがくすんでしまふ。見たまへ、監獄の看守は看守のやうな色をしてゐるぢやないかねえ君、質屋の番頭は質屋の番頭のやうな、人間はそれ〳〵異つた陰慘な職業的色彩を持つてゐるよ。さ

う考へると自分一生の職業は及ぶだけ撰擇することが必要になつて來るよ。』

『それはさうだがね……』

『僕は第一、何よりもよい空氣が吸ひたい。人間中で恐らく鐵工勞働者くらゐ悪い空氣を呼吸して生きてるものはあるまい。肺臓は炭團のやうだと云ふからねえ。そこへ行くと街の道路人足や河岸人足の方がまだ〳〵好い。』

『だつて此の塵煙朦々の大都會で好い空氣を吸ひたいなどはちと贅澤だね。』吉村は笑ひながら云つた。

『それはさうだ。唯、鼻や口から黒いものが出ないやうな空氣を吸へば僕には澤山なんだ。それからこんな傷だらけの黒い手をしてゐちやねえ君。戀だつて出來やしない』私は彼に手を出して見せた。彼は笑つた。

『無論そんな勞働を長く續けてゐる必要はないがね。そのうちに社長に頼んで見るよ。だからもうしばらく我慢してゐたまへ。何か文章を書いて僕の手もとまでよこして置いてはどうだ。君がどのくらゐ文章が書けるかを社長に見せた上だと話しがしよいから。』と吉村は云つた。

六

工場では決して私はなまけ者の類ではなかつた。人に負けないだけには常に働いてゐた。それはどんな勞働でもなまけ半分にやることは一層苦痛であつたからだ。それは機械と相對する勞働に於ては最も危險であつた。それればかりではない。一日の勞働時間を思ひなしで早める爲めには、いやでも熱心に働くより他になかつたのである。然し警察の方では私のことについてひどく干渉がましいことをした。工場の前には時々角袖が來て内を覗いた。工場主に對しては、私がどんな風に毎日働いてゐるか、果して勤勉であるかどうかを訊ねてゐた。

『君の事情はようく聞いて分つてゐるから、僕が好いやうに云つて置いた。ありや家の模範職工です。つてさう云つといたよ。まあ辛抱してやつてくれたまへ。』私の工場主は云つた。彼は實際に私の勤勉を認めてくれてゐた。さうなると私は一層彼に對して誠實に働かねばすまなかつたのである。ところで此の工場は私がどんなに忠實に働いてやつても盛大になる見込みはなかつた。損ばかりしてゐた。もと〳〵彼は工場主としては無經驗の男で全くの素人だつたのである。彼は古い慶應大學理財科出身で、そして長い間鐵道院にも勤め、此の鐵工場を始めるまでは名古屋の車輛係をしてゐたと云ふことで、其の關係から此所では鐵道用具の仕事がおもであつた。然し工場が手狹で、機械が不完全で、拔手は仕事の見積りさへも滿足に出來ない、たよりない拔手だつたので、たま〳〵出來上がつた仕事は檢查不通で突き戻され、鐵問屋には負債が出來、職工の給料さへ覺束ない有樣だつた。然し私はどん〳〵職工を拔き使つて儲けてゐる工場主に使はれるよりも何故か一種の張り合ひを感じて眞面目な氣持で働くことが出來た。かうなると私には使はれる身よりも彼の身の上の方が悲慘に思はれてならなかつたからである。彼は到底工場主と云ふ柄ではなかつたのである。溫良な紳士であつた。それほど苦しい中にも職工の給料は間違ひなく支拂つた。妻君は實業家の娘で、四十あまりの、しつかり者で、良人の爲めには實家の財産を隨分引き出した揚句であつた。

彼が此の古い工場を買ひ取つてから、まだ僅かに二年ほどだつたが、既に旋盤も發動機も其の他諸器具一切が抵當物になつてしまつてゐた。或る老職工が云つた。

『此の工場はいくら代が變つても榮えねえちふこんだ。何でもずつと以前に小僧がシャフトに卷きつけられて、ひでえ死にやうをしてからちふものは、此の工場が儲つたことはねえちふこんだでなあ。』

全く機械と云ふ機械は皆調子の惡いぼろ機械で、一日の間に三度ぐらゐ瓦斯エンジンの發火管は破裂した。其の都度

管を取り替へるには隨分手數を要した。それにシリンダーには幽かなヒビがまわつてゐて、何時パンクするか分らないと云ふ不安なしろものだつたのだ。

私は無論此の工場にいつまでも長く喰ひついてゐる氣はなかつたのである。少し金の餘裕がつき次第思ひ切つてやめる計畫をしてはゐた。然しそれがなかなか容易でなかつたのだ。十五日目毎に受取る勘定袋は知れきつてゐた。それは辨當代と間代を拂へば幾らも手に殘りはしない。それに酒場は吾々勞働者を勘定日に素通りさせるやうに出來てはしなかつたから。

七

或る日の夕方、ひよつこり吉村がやつて來た。私は丁度、終日の勞働に疲れて宿へ歸つて來たばかりだつた，私は狹い露路に向いた格子窓附の三疊の部屋に彼を迎へた。

『毎日今時分歸るのかね。』

『あ、此の節は夜業がないから。』

彼は私の部屋を見廻して笑つた。

『自働車をさける途端に鼻緒きれ、
　折も折とて水まき車、』

彼は壁にはりつけてある私の生活の歌を微笑しながら讀んだ。

『南京虫はゐないかね。』

『大丈夫だよ。』

『K市にゐた時分よりは少々君も悲惨だね。』

『それや……K市では職工でも床の間つきの部屋が借れるんだが、東京ぢやさうは行かないよ。だがこれでもなか〳〵探すには骨が折れたよ。』

私の宿は、家ぢゆうに、それはパンが腐敗しかけてゐるやうな、い、むんとする生ぬくい臭氣がたゞよふてゐた。私にはその原因がどうしても分らなかつた。家は二階と下とで四間ほどあつたが、皆それ〳〵夫婦者が住んでゐた。家主の婆さんは裏の四疊半にやもめで暮してゐたが、クリスチヤンで、それでゐてこすつからひがだつた。が時々教會の青年と一緒に街辻に立つて傳道をしてゐるのを私は見たことがあつた。——二階の六疊には區役所吏員の一家族がゐて、二十になる丸ぽちやの娘は電話局に勤めてゐた。鼻は高くなかつたが色白の娘で、然し彼女は私が惚れ込んでゐると思つていやに高ぶつてゐた。それゆえ、好きではあつたが私も我慢して一度も言葉を交はさなかつたが、此のむさくるしい不潔な部屋に辛抱してゐるには彼女の存在は私に必要だつたのだ。

『別嬪がゐるぢやないか。』吉村は云つた。

『あゝ勞働者町ではクインだ。』

『時に俺も部屋を探してゐるんだがねえ。』吉村は云つた。

『どうして。あの社にゐては悪いのかね。』

『實はあの社をよさうかと思ふんでね。』吉村は妙に臆病な目たゝきをしながら云つた。

『何故だ。』私は意外に感じた。

『まあ、散歩しながら話さう。』

それから二人は芝公園の方へ出かけて行つた。私はさつき彼が社をよしたいと云つた時の臆病な目たゝきをいろ〳〵に判斷して見た。

『どうして社をよすのかね。』二週間程前私が送つた文章を、彼は早速民文社の社長に見せてくれて。其のことの返事を聞かしてくれるものと思つてゐたが、彼の樣子ではそれどころではないらしかつた。

『君にだけ打ちあけるが大に慙愧の至りさ。』彼は幾度も同じやうな前置きをして容易に話さなかつた。

彼の告白によると民文社の女中の手を握つたと云ふのであつた。さすがに私は彼に對してちよつと輕蔑の情が起つた。私にはいつか見た　肥つちよの赤ら顔の女中の姿が目に浮んだ。

『全く慚愧の至りだがね……。』

彼が果して言葉通りに慚愧してゐるかどうかは別として、恐らく彼にとつては出獄以來の艶種であらうと私には思はれた。

『いや、分るよ君の氣持は、それは獄中生活を長くしたからだ。あそこへ一度入るとひどく慾望の標準が低下するものだ。それは女中だつて決して卑しむことは出來ないが……』

『うん、全くさうだ。然し慚愧の至りさ。』彼はどもりながら頻りに辯解した。

『でも其の爲めにあの社を自分から止さなくともよくはないかね。』私は云つた。

『いや、矢張いさぎよくよしたが好いと思ふんだ。社長はあんな人物で許してくれる人だが他の社員等が猛烈に攻撃するんでやりきれない。四面楚歌だ。』

私には想像がついた。どんなに輕蔑に値する男女關係でも人は單なる喜劇として許しはしないのであることを。彼の

行爲は確かに、あの豹のやうな目つきの持主や、土佐犬然たる面構へや、何れも一くせある民文社員達の間にあつて痛罵と袋叩きに値したに違ひない。

『ぢや君の盡力で僕はあの社に入れては貰へなくなつたね。』

『まあさうだ。然しそれとこれとは別さ。唯僕が特に君をあの社に推薦する資格はなくなつたわけだよ。君自身で直接あの社長に賴み込んだつて好いさ。あの人はそんなに狹量ぢやないから。』

『で君はあの社をやめて、何處かにうまい勤め口があるのかね。』

『これから早速奔走しようと思んだ。或る人が大阪の方の新聞社に添書をしようと云つてくれるんだが、大阪ぢやつまらないと思ふから。』

聞けば彼は昨夜から社の方に寢泊りしてゐないと云ふのであつた。

『ぢや今夜は僕のあの狹い三疊に二人で寢ようぢやないか。』

『あ、さう願ひたいなあ。』

私は曾て彼の初戀について彼の悲痛な物語を聞いたことがあつた。それは非常に特殊なものであつた。彼は二才の時に田舍の金持の家へ里子にやられて、其のまゝ其の家の養子になつたのである。すると時々實家の方の妹がやつて來た。彼はそれを實の妹とは知らなかつた。妹の方でも彼を兄とは知らなかつた。そして双方はやがて年頃になつた。彼は從妹をいつしか戀するやうになつてしまつた。双方の親はそれと知つて大に狼狽して二人が實の兄妹であることを彼等に云ひ聞かせた。そして彼の初戀は當然いたましい絶望に終つたと云ふのである。彼はその爲め養家を飛び出し、悲しみのあまり關西を流浪し遂にクリスチャン生活に身を委ねたのであつた。さうした悲劇的な戀物語に比べて今度の一件に

何と云ふ相違だらうと私は窃に思つた。『彼は悲劇役者から喜劇役者になつてしまつた……』と云ふ感じがした。

二人は公園を脱けて四國町通りの酒場でビールを飲んで、それから私の宿の三疊の部屋に寢た。

翌朝私は工場に出なければならなかつた。然し彼の爲めに一日休みたいとも思つた。

『いや、休まないでくれたまへ。僕も今日はいろ〱用があるから朝の間に出かけたいと思ふが、今夜も或は泊めて貰ふかも分らない。』

『い〻とも、それはい〻とも。』

彼は私と同時に寢床を跳ね起きた。

『ぢや、これから顔を洗つて僕の行きつけのめし屋で一緒に朝飯を喰べてはどうだね。』

『あ、さうしよう。』

それから二人は露路の水道口で顔を洗つて吾々勞働者の食堂へ彼を案内した。そこは此の界隈の鐵工場に働く獨身者が大勢集るめし屋であつた。吾々勞働者の終日の勞働力は其のめし屋の大鍋の味噌汁と南京米とによつて化成されるのであつた。彼等はそこで、實に馬のやうな食慾を滿すのであつた。

さすがに吉村は其のめし屋の入口まで來るとたじろいでしまつた。三年間監獄で馴らされた胃袋も、むさくるしい中の光景を見ただけでいつぱいになつたらしい。

「さあ、入りたまへ。』

大勢の勞働者等は目をぎよろつかせながら掻き込んでゐた。一見紳士とも見える吉村の姿を彼等は見咎めるやうに睨んだ。全く彼はこんな場所では紳士に見えたのである。私はか〻る場所に彼のやうな男を引つぱつて來るのは多少心配

だつた。何故なら彼等は自分の繩張に於て自分達より一段上の階級の人間を決して反感なしでは見ることの出來ない境遇に置かれてゐたからである。

吉村はまづさうに大どんぶりの飯を味噌汁で流し込んだ。元來彼は食慾にかけては勞働者に讓らない强健な胃袋を持つてゐる筈であつたが、此所ではひどく喰べなかつた。

『まづいかね。馬鹿にたべないぢやないか。』

『いや。充分だ。』彼は小聲で云つた。

そこで食事をすませてから私はついでに自分が毎日働いてゐる工場の有樣を彼に見て貰ひたくなつたので同伴した。

『まあ、俺がどんな仕事をしてゐるか見てくれたまへ。』

社會主義者としての彼が、まだ工場生活の實狀に疎いことを私は遺憾に思つてゐたので、彼をびつくりさせるに足ると思つたのである。

私の働いてゐる松内工場は此のへんでは三流どころの小つぽけな工場だつた。まだ朝出の時刻には早かつたので工場には職工等は出揃つてゐなかつた。唯火造師の目つかちと小僧が來てゐるきりであつた。

『お早う。』私は火造師に挨拶した。

工場の土間には此の數十日間で私達が仕上げた鐵道のブラケットが山と置かれてゐた。入口には丸棒の鐵材が筏のやうに束ねられて朝露に濡れて横つてゐた。機械場は鐵の削り屑と油とボロきれが、いつぱいに散らかつて、屠牛場のやうに慘憺な光景を見せてゐた。檢査不通で突き返へされたねぢボートは幾十日も置き晒しにされて、吾々勞働者の血に飽いた蛭のやうに赤く錆びたまゝ轉がつてゐた。

『これだ。僕達のやつてゐるのは、』

『うむ。これはひどい。たまらないねえ。なるほどこれぢや……。』彼は私の豫想通り驚歎の目を見張つた。

『何しろ相手が鐵と來てるからねえ。』

『ふむ……。よく君はやつてゐる。然しかうした中から新時代の藝術が生れなくちやならん。その意味で君の生活は勇ましく貴いと思ふよ。』

『何を云つてやがるんだい。』と私は此の時云ひたかつた。彼の云ふことはあまりに私には空虚に聞へたのだ。私はこんなことを云はれる度に自分の生活は馬鹿にされてゐるやうな氣持がするのであつた。

『まあ君、晝間仕事をしてゐる時の光景を一度見せたいよ。皆は汗と油と埃の中を泳いでゐるやうなものさ。』

私の云ひ方は決して誇張ではなかつたのである。

『君、これでも僕が勞働生活から早く脱したいのが無理なのか。ペンを持つ生活をしたいと思ふのが間違つてゐるだらうか。俺は此所より他に生きることは許されない人間に生れついてゐるとは思はれない。何だつていつまでもこんな屠殺場のやうな工場でぼろ〳〵の服を着て朝から晩まで働いてゐる僕に勇ましく貴いなど丶君は云つてくれるのだ。早くやめろと云つてくれ。もうこんな悲慘な生活の體驗はとつくに卒業してゐる筈の僕になぜ友達甲斐のあることを云つてくれないのだ。』私は彼にさう云つてやりたい氣がした。私は彼に囚人以外の囚人生活のあることを充分認識して貰はねばならなかつたのだ。

八

赤坂檜町の暗い露路裏の古腐つた門構への家にくすぶつて相變らず得體の知れぬ生活を續けてゐるのは立川であつた。

『實にあいつは見下げ果てた奴だ。もとはあんなではなかつたが、實に……』立川は私が訪ねるといきなり吉村の一件を云ひ出した。

『來やがつたら思ひきつて面罵してやらうと思つてるが、なか〳〵あいつ來やがらない。』

立川はいつもの癖で鼻をくん〳〵鳴らし、番茶をすゝりながら思ふさま吉村の一件を惡罵した。彼の口にかけると吉村と云ふ男は腰ぬけで、打算的で、破廉恥漢で、救ひがたいしろものであつたのだ。

一方の吉村から見ると立川と云ふ男は駄法螺吹で、無責任で、空想家で、親讓りの山師根性があつて到底信頼するに足りない人物であつた。なるほど立川の父に非常に豪放で狷介で、事業的野心家で、山師的なところの多分にある、トルストイのやうな容貌を持つた老人であつた。私はK市にゐる時分彼の父が一度彼に逢ひに來た其の時始めて見た。然し其の父は去年胃癌でなくなつたと云ふことであつた。現在彼の家に出入する多くの人物は、大抵は彼の老父の生前からの關係者であつた。

彼は私が訪ねさへすれば喜んで迎へた。然し彼は見たところひどく貧乏であつた。そのくせ若い居候を二人も置いてゐるのである。出入する客は、これも色のさめた紳士で、煙草などをいかめしく伸した三百代言風の垢じみた老人を私は行く度にそこで見受けた。いつ行つても二三人の客が來てゐる。そして例によつて何萬圓何十萬圓と云つたやうな大げさな問題が持ち出されてゐた。

『おい。今日はまあゆつくりして行けよ。もう少しで客が歸るから、ゆつくりして飯でも喰つて行けよ。』彼は私が歸り

かけるとさう云つて引き止めた。これはいつもの彼のくせである。そして私はそこでせい〴〵奴豆腐くらゐで晩餐をよばれて歸るのである。

『まあ、そんなにそわ〳〵して歸らなくても好いわちよいと。ゆつくりしていらつしいよ――うちでもねえ……』と妻君は妙に聲を殺して『うちでもねえ。近々まとまつたお金が入りさうなのよ。これからあなたにも好い話を聞かして上げたいことがあるのよ。うちでは、あなたがいつまでも工場なんかでくすぶつてゐるのを見殺しに出來ないと、それはつかり云つてるのよ。だからもう少しの辛抱よ。まあ今日はゆつくり晩までゐらつしやい。』と妻君は云ふのである。

彼女は今は既に見るかげもない古女房であつたが、K市の教會では花を咲かせた女であつた。八年前の名殘は失せて油つ氣もない頭髮を取て、ききのやうに引き詰めに束ねて、いつも小汚いなりをして赤ん坊に乳房をしやぶらせてゐた。もうすつかり良人の立川に同化されて、少しもくよ〳〵した風はなく、姉ご氣取で私を子分あしらひにした。

『好い話つてどんな話ですか。』

『それはまあ、後でゆつくり話すから待つてらつしやい。今度ねえ、うちの昔の學友が大きな印刷會社を始めることになつたの。そしてうちのに監査役になつてくれと云ふのよ。でもうちぢや御斷蒙つたの。うちぢやそれどころか、いよ〳〵養豚事業に着手しようとしてるので身體は二つあつても足りやしない。』彼女は云ふのであつた。

これまでに私は彼女から幾度これに似た話を聞かされたことであらう。彼女は以前に云たことさへ直ぐ忘れてしまふほど氣持が何うかしてゐるのである。

『吉村さんも隨分へんてこな人間になつてしまつたわねえ。民文社のおさんどんなんか引つかけたりしてさ……』彼女は笑ふのであつた。

私は彼女が立川と夫婦になる以前に吉村を愛してゐたと云ふことを少しばかり聞いて知つてゐた。

吉村自身はいつか此の立川の妻君と自分とのことを次のやうに私に語つたことがある。

『あの女だつて今はあゝやつてしら〳〵しいことを云つてゐるが、一時はさかんに僕に手紙をよこしたものだよ。』

彼れはK市でブーロカー宣教師の助手とし、教會に出入してゐた時分は全く色白の一見おとなしやかな美少年であつた。未來の牧師としての彼の若々しい說教振は婦人席の注目を惹いた。彼れは會話が巧みで英詩も讀めた。クリスチヤンではあるが詩人的であつた。ところで當時立川の妻君は女教師あがりで、其の教會のオルガンひきをしてゐたのである。そしていつしか此の年少な未來の牧師と彼女の目さしとは意味深くぶつかり合ふやうになつたのである。

彼女は或る時思ひのたけを年下の吉村に書き送つた。然し吉村は彼女をあまり好きでなかつたと云ふばかりでなく、一方立川が猛烈に彼女をものにしようとしてゐる矢先で彼は手控へしてゐた。そして遂に彼女は逡巡な吉村を口說くのがめんど臭くなつて心にもない立川の力強い握手にまゐつてしまつた。と云ふのであつた。

『あなた吉村さんに會ふの。あの人、家にはちよつとも來ないのよ。監獄から出て來て一度來たつきりなの。會つたらさう云つて頂戴。私達がこんなに貧乏してゐたつて、さう見きりをつけるもんぢやないつて。枯木に花が咲く時節もあるつて。さう云つてゐたと云つて頂戴な。』彼女は私に傳言した。

『うん、あんな奴は寄せつける必要ない。君會つたらさう云つてくれよ、おさんどんを引つかけて病氣を移すのも好いが、男らしく責任を持つてやれつて。女中なんかを慰むやうな人間になつちやおしまいだと俺が云つたつて。さまあ見やがれ。民文社では皆から排斥されやがつて、とう〳〵追ん出されやがつて、ハッハッ。』立川は例の調子で云ふのであつた。

九

民文社を追はれた吉村は其後ひどく一時窮した。然し不思議にいつ見ても彼の顏色は赤みを帶びて、肉感的であつた。吾々勞働者の失業者とは異つて麻の夏服をきちんと着て、銀縁眼鏡をかけて、カンパスの靴をはいてゐた。

『まあ見てくれ。これだ……』と彼はわざ〳〵上衣の釦をはづしてぼろ〳〵のシヤツを見せたが、なるほど私はそれを見て驚いた。彼は實に破れ障子のやうなワイシヤツを着てゐたからである。

彼は方々の雜誌社や新聞社に勤め口を探してゐたが、社會主義者で不敬罪と云ふ前科があるので雇ひ手がなかつた。止むを得ず或る婦人雜誌に雜文を寄稿したりして一時を凌いでゐた。

私を悲慘な工場生活から救ひあげてくれる筈の彼は今や宿さへも失つて、とう〳〵私の部屋に同居を申し込んだ。私は無論それを快諾した。然し彼と私との同居は無事には行かなかつた。二度ほど喧嘩をする必要に二人は遭遇したのである。それは極めて子供らしい喧嘩であつた。

彼は內心私に對して指導者的氣持を持つてゐたのである。私は最初の間はそれに甘んじた。彼は英語も澤山知つてゐ、本も私よりは澤山讀んでゐ、文章も私よりは上手であつた。で私はすべての場合に於て一歩彼に讓ることにしてゐたのである。然し私の彼に對する唯一の侮蔑は彼の文章が極めてマンネリズムであつたことだ。彼の書いた詩は何れも古臭い感じが私にはした。少しもフレツシユな近代性がなかつたのだ。彼はいろ〳〵の詩を私に見せた。其の都度私は少しもそれに感服出來なかつた。下のやうな詩であつた。

　晝は見渡す限り靑々とした稻田の、

まだ月の上らぬ暗い夏の夜、
若い蛙が聲を揃へて泣き續けてゐる
あちこちの家村の灯が、
黑ずんだ林の間にちらほら見えて、
凉しいやわらかな夜風が、
稻の香を闇にたゞよはす。
野歌の聲が、
遠くの土堤を過ぎ行く。
此の時、私は、
限りなきさびしみと、
そして若き日の追憶に誘はれた。
私は私の嘆きを自分の胸の中に聞いた。

此の詩は私には實にくだらないものであつた。で私は最早そんな詩は時代遲れだと云はんばかりに批評したのである。そして私は自分の一番得意の詩を彼に朗讀して聞かせたのである。喧嘩はそれからだ。

時計だつて
もと〳〵職工が心をこめてこしらへた。
針だつて、

振子だつて、
ゼンマイだつて、
齒車だつて、
皆職工が作つたのだ。
それだのに、
時計は、
一分間でも
吾々職工をば早く、
工場から出す爲めに急ぎはしない。

彼は私の詩は全くなつてゐないと云つた。粗野でデリカシイがないと云つた。でいよ〳〵私は彼に失望したのである。私は自分の詩について大に彼に對して主張した。そして彼の詩を否定した。彼は遂に蒼くなつて怒り出した。

それきり二人は一週間ほと全く口をきかなかつたのだ。これは非常に、狹い三疊の部屋に同居しゐるだけに苦しい馬鹿げたことだつた。然し彼も私も口をきかないことの忍耐强さを見せ合ふ爲めにはなか〳〵頑固であつた。遂に或る日

『僕等は一緒にゐない方が二人の爲めによいと思ふが君はどう思ふ。』私は口で云ふ代りに鉛筆で紙に書いて彼に筆談を始めた。すると彼もそれに應答する爲めに書いた。

『僕もさう思ふ。然し先月分の間代は僕が全部拂つたのだから此の部屋の權利は僕にあるので、君の方で何處かへ行つては如何。』彼はさう書いた。

『そんな馬鹿なことを云ふもんぢやない。間代は間代だ。此の三疊はもと〳〵僕が借りた部屋だ。そこへ君が轉げ込んで來たのだ。君の方から何處かへ移るのが至當だ。』

彼は蒼くなつて唇を顫はせた。

彼はいつの間にか涙をほろ〳〵落始しめた。すると私も悲しくなつてとう〳〵泣き出したのである。

『おいつまらない喧嘩はよさう。』私は云つた。

『無論……。』彼は云つた。

二人は斯くして和解したのである。

十

さて私は其の後も相變らず鐵工場の中で印度人のやうにまつ黑になつて働いてゐたが、いよ〳〵私にも或る決斷を促す時機が來た。一般に鐵工場は不景氣になつて、閉鎖する工場が頻出した。そしてこれまで損失ばかり重ねてゐた私の松内工場もいよ〳〵瀕死の狀態に陷つたのである。これは寧ろ私に、悲慘な工場勞働をきり上げる決心を固めてくれる意味では喜ばしいことだつた。然し私にはそれは一個の冒險であつた。何故なら、果して自分は鐵工場以外に於て生きるべく何をか爲し得るだらうかと云ふ不安を飛び越えねばならなかつたからである。

私は先づ、如何にすべきかを考慮した。此所で思ひついたのは淺草駒形町の蓄音機商會であつた。そこには松野團十郎と云ふ男がゐる筈であつた。私は此の男と一面識もなかつたが、私がK市を立つ際、紹介狀を書いてくれた私の下宿屋の主人の親友であるべき男であつたのだ。

『東京へ行つて若し工場に働けないやうだつたら一度會つて見なせえ。これやわしの若い時分の遊び友達で、わしからと云やあ此度何とかしてくれますわい。』と下宿屋の主人は私に云つた。然し私は松野團十郎と云ふ其名が何となく嫌ひで東京へ來てから早速訪ねる氣にならなかつたのである。云ふのは、普通人のくせに名優の名を犯してゐるのが氣に喰はなかつたのだ。何でも彼は其の蓄音機商會の番頭だと云ふことであつた。

『然し兎も角もかうなつては一度會つて見よう。』と私は決心した。私は彼のその團十郎と云ふ名によつて九代目團十郎の長い馬面と大きな目玉を聯想せずにゐられなかつた。

私は遂に其の團十郎君を駒形の蓄音機商會に訪ねたのである。ところが彼は全く私の想像とは異つてゐた。彼は四十四五の、丸顔の頤のしやくつた、釦のやうな小粒な目の所有者で、愛嬌のあるづんぐりした男であつた。

『私が松野團十郎です。』と彼は云つた。

『始めてお目にかゝります。實はK市の橋本和吉さんからあなたに紹介狀を貰つて來た者ですが……』私は一應の挨拶をして皺くちやになつてゐる封書を彼に差し出した。

『あ、さうですか。』彼は其の封書を開いて見て『なるほど……。さあ……今のところ早速お世話は出來かねますが、何とか考へて後日お知らせしませう。』彼は云つた。

『ありがたうございます。どうぞよろしく。』私は云つた。然し心ではたよりないと思つた。

『K市では矢張工廠へ勤めてゐたのですか。』

『はあ。』

『矢張機械の方ですか。』

『はあ。』

『では工場の仕事でもよければ私の方の工場へ頼んで上げても好いと思ひますが――蓄音機の方の仕事は小物ですがラクはラクです。尤も當今は少し不景氣で職工を減してはゐるやうですが。』

『ありがたう存じます。』私は云つた。工場の方なら何も此の人の世話を仰ぐほどのことはないと思つた。殊に蓄音機工場はあまり好ましくなかつたのである。身體はラクでも小物の仕事は不得手だつたので。

私は其のヵ顏の團十郎君に別れを告げた。それから仕方なしに淺草公園の方をぶら〳〵して松葉町の方へ出た。其の町で私は思はず一軒の口入屋を見附けた。店にはいろ〳〵の募集廣告の紙がはりつけてあるので、何氣なく立止つて眺めた。記者見習入用　俳優見習入用、寫字生入用、等の文字が私の目をひいた。かうした口入屋をあまり信用する氣はなかつたが、入つて聞いて見ることにした。

『俳優見習と云ふのはどう云ふ資格がいるのですか。』私は口入屋の主人に訊ねた。

『別に資格と云つてむづかしいことはありませんがね。お前さん俳優見習になつて見る氣かね。』

『なれるならやつて見たいと思ふんですがね、多少容貌やからだつきがよくなくちや出來ますまいからねえ。』

『なあに、お前さんくらゐの男つぷりなら大丈夫だ。』主人は冷かすやうな口元で斷言するやうに云つた。

『冗談云つちやこまる。』

『冗談ぢやねえ。本當ですぜ。手數料を一圓出しなせえ。わつしの方から紹介してあげるから。それや好い加減なこと云つて手數料をふんだくつて知らん面をする口入屋とは、わつしのところは違ひますぜ――なあに向ふは活動寫眞の撮影所でさあ。立廻りの稽古を二週間すれや日當一圓になるんだからこれほどうめえことはねえ。女つ子にやもてるし、

まあやつて見る氣なら行つて見なせえ。』主人は云つた。

私の目には松之助劇に出て來る大勢の家來共が立廻をする時の光景が浮んだ。工場で働くよりは其の方がましだと云ふ氣もしたが、思ひきれなかつた。

『それよりも記者見習の方の口はどうですかね。新聞社ですか、それとも雜誌社の方ですか。』私は更に訊ねて見た。

『どつちでもお前さんの好きな方へお世話しませうよ。その代り此の方は手數料は少し高うがすぜ。』口入屋は云つた。

『いくらだと云ふんです。』

『新聞記者見習の方は二圓と云ふことになつとるでなあ。』

『新聞は何新聞です。』

『今申込んで來とるのは牛込の方の啓蒙新聞ちふ新聞社ですがね。お前さん文章が書けるかね。なあに文章が少し書けれや好いと向ふぢや云ふんだが。』

啓蒙新聞と云ふのは全く私は聞いたことがなかつたが、兎に角、あたつて砕ける氣になつた。

『文章は少しは書けないこともないんだが……』

『ぢや行つて見なせい。』口入屋は無造作に云つて帳簿を取り出し、先方の所在を示した。

私は思ひきつて持ち合せの二圓を投げ出してしまつたのである。先づ文士生活に入る最初の階梯と思つたのである。

口入屋は直ぐに啓蒙新聞への紹介状を私に渡してくれた。

十一

啓蒙新聞社の所在は牛込矢來町であつた。二階造りの長屋の一軒に啓蒙新聞社と云ふ掛け札と共に、でかい鐵拳を書いた小形の新聞が格子窓にはりつけてあつた。そして別に記者入用と書いた貼り紙や、べた〳〵と赤い圏點入りのすご文句の掲示が貼りつけてあつた。

社長はあいにく不在であつた。老人が一人ゐた。

『もう歸る時分でがすから、お待ちなつて下さい。』老人は長火鉢の前に座りながら云つた。中の樣子は少しも新聞社らしくない。社員らしいものゝ影も見えず、女の氣もない家である。家は新建で木の香が匂つてゐた。私は其所の上り口に腰をかけて三十分ばかり待つた。すると、やがてゴム輪の俥が入口にぴたりと止つた。車上からフロックを着た山高帽の紳士が降りた。そして無言で私を一瞥して、威嚴を見せる爲めであらう、ひどくむづかしい澁面顏を作つて玄關から其のまゝ二階へ上つてしまつた。

車は自用と見えて、車夫は軒下に俥を横つけにしたまゝ裏の勝手口の方へ廻つて、ちやぶ〳〵汗を拭いてゐた。あれが社長だなと私は思つた。

『今歸りましたのがさうです。』と老人は私に云つて二階へ上つて行つたが間もなく降りて來た。

『どうぞお上んなすつて下さい。』老人は云つた。で私は二階へ上ることにした。件の社長はフロックの上衣を脱いで團扇で風を入れながら窓際の籐椅子に腰をかけたまゝ私を迎へた。金口をくゆらせながら。いきなりかう云つた。

『君は體格は丈夫のやうですねえ。國はどこです。九州か。九州男兒だね。よろしい。ちやが九州人の通つた跡は草も生えぬと云ふからなあ……はつはつはつ。』彼は大きく笑つた。まだどう見ても三十前後の私よりは一つ二つ年下かと思はれる齒並の惡い口元で無造作にものを云ふ男である。

『僕の新聞は筆でいかな　や腕力でもやつつけると云ふ主義だから、先づ體格の好い元氣な社員がほしいんだ。君は腕力はありさうだねえ。』彼は云つた。

私はちよつと答へにまごついた。

『どうかお役に立つやうならば御採用を願ひます。』

『君は今下宿屋にゐるのかね。なに……芝の方に間借りをしてゐる？……ぢや僕の家に置いてやるから來たまへ。其の代りに此所は女房も女中もゐないから飯も炊いて貰はにやならんかも知れん。』社長は云つた。

これは面白いと私は思つたのである。

『ありがたうございます。ぢや早速置いて頂きませう。』私は云つた。

『今晩からでも來たまへ。』

社長の言葉があまりに無造作だつたので私は多少不安であつた。然し彼は何と思つてか身元保證人も何も要求しないのである。今の場合これほど私にとつて好都合なことはなかつたのである。

私は其の翌日から置いて貰ふことにして一先づそこを辭した。

十二

私は確實に其の翌日から啓蒙新聞社見習記者たることを得た。家は老人と社長と私の三人であつた。老人は社長の父であつた。老人にとつては可愛い一人息子の社長は此の年よりをがみ／＼叱りつけてばかりゐた。私は先づペンを持つことよりも炊事の方を委かされた。女中兼書生であつたが私はそれに甘んじた。

此の啓蒙新聞は明年度の區會議員改選期に立つ候補者等のほところに狙ひを定めて一儲けしようと云ふ性質のものであることは私にも分つた。社長は朝から自用の俥に打ち乘つて駈け廻つた。或る時は私に自分のセルの袴をはかせ、絽の羽織を着せて名士訪問のお伴を命じた。『俺にはかう云ふ偉丈な體格の子分もゐるぞ』と云ふところを彼は見せる必要があつたのである。彼は小柄で痩せた男であつたから。

彼は私に口髯を伸ばせと命令した。そこで私は二週間目に彼の註文通りに鼻下に八の字髯を完成した。

更に彼は私に次のやうな註文をした。

『君、訪問先では僕に對して先生と云つてくれなくちやこまるよ。例へば候補者や其の他の名士の家を二人で訪問した場合だねえ。先方は僕と君とを客間へ通すだらう。そこで僕は君にかう云ふのだ。山田君今は一足先へ歸つてゐてくれたまへ。とねえ、すると君は、ぢや先生私は先へおいとまします。とさう云つて君は歸つてくれなくちやならん。君は其の偉丈な體格を先方に見せるだけで用は足りるのだから。』彼は私にさう云ふのである。私は無論それを承諾した。そして彼の註文通りに、訪問先では先生の命を拜して一足お先へ中座することを間違へなかつた。先生と云ふ私の敬語に對して彼は必らず敷島一個を以て慰勞した。實に彼は一面無邪氣な面白い男であつた。ところが或る日彼に對して非常な屈辱と不愉快との爲めに我慢の出來ないことが私の上に起つたのである。それはかうだつた。彼は立派な紋章入りの黒塗の腰高自用俥を持つてゐたが、通ひの車夫が腸を病んだ爲めに車の曳手がなくなつたのである。ところで彼は私にかう云ふのであつた。

『山田君。君の足は何文だね。此のゴム裏のヂキ足袋は君の足に合はないかなあ。ちよつと履いて見たまへ。』

私は妙なことを云ふと思つたのだ。其の瞬間私の胸にグツと或る不愉快な豫感が來た。

『俺に車を曳けと云ふか……。』然しまさかと私は自分で自分の豫感を打ち消した。

『私の足は十文半の足袋なら丁度好いんですが。』私は云つた。

『まあ、ぢやはいて見たまへ。今日は君に一つ御苦勞して貰ひたいがどうだね。俥夫の野郎二三日來れないと云ふんでこまつた。』彼は云つた。

『私に俥を曳けと云ふんですか。』私は此の時もうたまらなく癪にさわつたのである。

『いやかね。僕等は苦學生時分に辻俥も曳いたもんだがねえ。』

私は曳かうか曳くまいかと心で考へた。

『ぢや僕は今日限りおいとまします。』私の口から憤然とした言葉が飛び出した。すると私は自分の云つた言葉に更に昂奮を感じてしまつた。私はそのまゝバスケツトを提げて其所を失敬した。

十三

啓蒙新聞社を飛び出した私は全く途方にくれた。それは分りきつたことであつた。兎も角私はもとゐた三田四國町の宿へ行つて置いて貰ふより他に仕方がなかつたのである。もうそこには吉村はゐなかつた。

『まあ、あんたの行く先が分らん云ふて警察の方から何べんも聞きに來ましたがなあ、お前が知らん筈はないちふてなあ。私しやどんなに迷惑したか知んねえ。』宿の婆さんはいきなりさう云つた。そして私がどんなにもう一度置いて貰ひたいと頼んでも承知してくれなかつた。で私は再び姿を韜晦して二晩ほど公園の露臺に寢た。三晩目は赤坂檜町の立川の家に泊めて貰つた。そこで私は始めて吉村の消息を聞いた。彼はとう〳〵大阪の方へ行つて、邦文タイプライター商

會の飜譯係をしてゐると云ふことだつた。

『あいつもとう〳〵都落ちをしよつた。』立川は冷笑的に云つた。

私は立川の紹介で赤坂福吉町の常盤館と云ふ下宿屋にゐる早稻田商學士の坂本喜久男なる青年を訪ねることになつた。

『僕がさう云つたと云へば何とかしてくれる男だ。』立川は云つた。

私は早速其の下宿屋へ行つて見た。商學士坂本喜久男君は三十二三の私と同年ぐらゐの男で意外に善良な好人物であつた。織物タイムスと云ふ紡織界の機關雜誌を編輯してゐると云ふので、私を其の方へ使つて貰ふやうに、そして旁々下宿屋をも世話してくれるやうにとの、隨分虫の好い立川流の紹介であつた。

『どうか一つ、出來ましたらお願ひいたします。』私は賴み込んだ。

『さあ、實は今僕は織物タイムスの編輯をやつてゐるんですがねえ。實は僕も今のところは此の下宿屋にごろ〳〵して喰ひつめてゐる有樣で――然し君の事情を聞くと氣の毒ですな。此の下宿屋では、さあ、僕が云つても君を置いてくれるかどうか。何しろ僕も三月分ほど拂ひが溜つてるんで、はつはつは。』彼は笑ひながら云つて『まあ然し此の部屋に二三日ゐたまへ。構はない。』

彼は私を風呂屋へつれて行つた。そして夕飯には酒を馳走した。私は彼の人情深いのには驚いたのである。

『君は詩の方はやらないのかね。』彼は私に云つた。

『どうも詩は僕にはうまく書けません。』

『ぢや小說の方をやらうと云ふんだね。多くどんなものを讀んだかね。露西亞のゴルキーのものは好きぢやないかね。』

『露西亜のものはかなり讀みました。』

彼はそれから自分の作つた散文詩のやうなものを机の抽斗から出して酒を飲みながら私に見せた。

『あゝ氣持よく醉つた。矢張酒は相手がなくちや駄目だ。――僕が一つ讀むから聞いてくれたまへ。まづい詩だけれども。』

彼は讀み出した。

おう支那人よ。
猫背でおでこの支那人よ。
お前は日本へいつ來たい
此の場末の理髪店へ來てから隨分古いぢやないか。
金をためようとて、
おう何と耳掃除の上手な支那人よ。
長い耳搔で、
勿體らしく私の耳をほじくる支那人よ。
くすぐつたい支那人よ。
お前の顔は。
お前の持つ耳搔のやうに。
おう猫背でおでこの支那人……。

『どうだらう。君、此の詩はかなり僕の好きな詩なんだ。』彼は云つた。

『支那人に對する氣持はよく分りますね。』私は云つた。彼は嬉しさうだつた。

『ぢやもう一つ讀もう。』彼は更に讀み出した。

街を歩いてゐて、
または劇場で、
昔の戀人にそつくりの女を見た時、
俺はびつくりして、
身體中が汗ばむ。

彼女は結婚した。
然し彼女の良人は死ぬであらう。
そして彼女は遂に私のものであらう。
そして今度は私が死ぬ番だ。
そして彼女は三度目の良人を持つであらう。
强健な、がつしりした、
水夫のやうに頑丈な男を……。

此の詩は彼と云ふ人物を最もよく私に分らせた。

彼はもと文科を修めたいと思つたのだが、父親の許しを得ず、止むなく早稲田の商科に籍を置いた。卒業後は鐵道院に勤務した。然し勤め人生活がいやで間もなくやめて郷里へ歸つたのである。それから二年ほどして父の金を引き出して、すばらしい風采で再び東京へやつて來て女優と結婚した。が遂に別れてしまつた。彼は田舍の金持の家の次男だつたのである。彼の遊民哲學に從へば『人生はフォアボールで生きて行ける……』と云ふのであつた。これは野球のフォアボールのことで、社會組織が惡い以上は遊民生活は許容され得ると云ふ意味であつた。つまり投手が惡球を續けさまに四回出せばバットを棄てゝ一壘を踏むことが出來ると同じやうに、社會が惡球を投げつけるから自分は何もしないで遊んで生きて好いんだと云ふのであつた。

『時に僕には少しばかり取り前の金があるんだが、それがいくらでも取れると君にどうかしてあげたいんだが……』と彼は云つて机の抽斗から一通の借用證書を取り出し『これなんだがね。君、これを持つて先方へ押しかけて見る氣はないかね。君が行けば恐れていくらかでもくれるかと思ふんだ――先方は織物タイムスの社長だよ。』

私は先方を恐れさせて金を取ることはいやだつたが正當に取れる金ならば彼の代理でも行く氣になつた。

『社長がゐさへすれば必らず幾らかはよこすに違ひないよ。僕が行つたつて駄目なんだよ。僕を甘く見てやがるんでねえ。先方へ行つたらかう云ひたまへ。坂本は重病で下宿屋に寢てゐる。病氣は脚氣だとねえ。そこで、國の方からも金が來ないで困つてゐるから、どうか此の證文に對して都合してくれ。とかう云ひたまへ。』

私は其の借用證書を見て確實だと信じないわけに行かなかつた。で翌日早速彼の命を受けて日本橋大傳馬町の織物タイムス社へ行くことにした。

さて行つて見ると意外にむさくるしい家で、横町の露路をつきあたつたところの、ぼろ〳〵の二階で、家には三十あ

まりの小きたないかみさんが、垢じみた浴衣を着て乳呑兒を抱いてゐるきりだつた。入口には『織物タイムス社』と云ふ金文字の横看板が恥かしさうに掛つてゐる。

『あの、どなたです、あなたは。』ヒステリツクな聲でかみさんは云つた。

『私は坂本喜久男君の友人です。少し用があつてまゐりました。』私は云つた。

『おはいり下さい。』かみさんはさう云つて私を頭から足先まで見下した。

私は風通しのい、古い家の茶の間に上つた。かみさんは肩巾の廣い、男のやうにがつしりした女であるが、顔色はひどく蒼かつた。

『實は、外ぢやないんですが……』私は坂本商學士が云つた通りに、脚氣がひどくて下宿屋に寢てゐること、私は彼の親友であること、彼は今國の方から支送が貰へなくなつて困つてゐること、などを一應此のかみさんに話した。そして證文を彼女の前に取り出した。

『まあ、脚氣なんですか。それはいけませんねえ。』とかみさんは大して驚いた風もせずに『何しろたくがゐなくては私には一向分りませんから、どうとも御返事はいたしかねます。もう半年以上たくは歸らないので私もとんと困つてしまひます。さうおつしやつて下さいませ。』かみさんは云つた。

『あ、さうですか……。』私はそれ以上云へたかつた。見たところ貧乏暮しだ。それに亭主は半年も家に歸らないでは女房の身で可哀想だと云ふ氣がしみ〴〵した。

『ぢや、さよなら。』

『どうぞ、さうおつしやつて下さいませ。』私は何の爲めにわざ〴〵來たのか自分でも分らなくなつた。

『どうだつたかね。』宿へ歸ると商學士は微笑しながら云つた。私は先方の狀態やかみさんの云ひわけをそのまゝ彼に傳へた。

『亭主は半年以上も家には歸らないさうだ。』

『いや、そんな筈はない。何でも何處かに姿をかくまつてゐるさうだが、半年以上も家に歸らないなんて嘘だ。借金とりがうるさいから何處かに潜伏してるに違ひない。』商學士は云つた。彼は今更のやうに其の社長の隱れ家をどうかして突きとめたいと躍氣になつた。それには、京橋八丁堀幸町の杵稻と云ふ米屋へ行つて聞けば略ぼ分ると云ふのである。

『君も來てくれたまへ。かうなれば、どうしてもつき止めなくちや殘念だ。つき止めた上で訴へてやらう。』

『さうなると訴訟費用もかゝるから、もう仕方がない。あきらめたが好いだらう。』

『それもさうだな。』

私はおかしくなつた。私は彼と云ふ物が世間知らずのおぼつちやんであることがます〳〵分つたのである。

私は彼の部屋で八日間ほど居候で過ごした。下宿屋では三ケ月分ほど彼の宿料が溜つてゐる上に、私と云ふ居候が彼の部屋にのめり込んで、毎晩彼の相手をして幾本かの德利を空にし、そのまゝずる〳〵居据つてゐるので、宿の女主人は下宿人で彼女の情夫だと云ふ凄い男を何べんも彼の部屋によこした。

『御都合は如何でせう、間違ひのないところを伺ひたいのですが……』男は氣味惡い謙遜な調子で云つた。

『もう近いうちに國の方から金は來る筈ですがね。』商學士はかゝる場合に動じなかつた。然し私は彼と云ふ男が氣の毒になつた。此の上べん〳〵と彼の厄介になつてゐるのはもとより私の本意でなかつた。で遂に八日目にそこをおいとました。

十四

さてからうなると私は遂に銀座裏の民文社の他にたよるべきところを思ひつき得なかつたのである。一度でも曾つたことのある人間は決して無下にはしりぞけないと云ふ社長の親分肌を見たかつた。そして私は萬々そこへ行きさへすれば間違ひないと云ふ意味で私にはとつて置きの避難所だつた。

例のスリガラスのドアを押すと、此の日に限つて社内はがらんとして社長夫婦の睦まじげな姿に私は面喰つたのである。私は云はれるまゝに上つて椅子に腰をかけた。夫人にもおじぎをした。それから夫人が奥へ消えるのを待つて少々妙な作り聲で私は社長に次のやうに懇願したのである。

『私は先生にお願ひがあつてまゐりました。どうか私を何かに使つて頂きたう存じます。』

『さあ、此所も今經營困難で遠からず解散することになりさうで人が必要でないのだが……。』社長は卷煙草に火をつけた。

『でもございませうが……。』

『君は工場の方はどうしたのです。其方では大分金が取れるさうぢやありませんか。』

『いえ、此の節は全く不景氣で、それに私はどうかして文筆の方で生活したいと思ひまして……。』

『文筆の方でやつて行けると云ふ自信があるのですか。少々筆が動くのぢや迚ても……』社長はにやりと笑つた。

『御尤もです。ですが試みに何かやらして頂きたうございます。』

『さあ今のところ……』社長は當惑さうに目を落した。此の時、社長の夫人がそこにやつて來て、これから二人で何處

かへ出かける時刻が來たことを告げた。

『君は細い字を書くことはどうです。うまいかね——お前の方の寫字はまだ形つきさうもないならば、此の人にやつて貰つても好いが……』社長は夫人に向つて云つて『まあ君、ちよつと此のペンで此の原稿紙に書いて見て下さい。』

で私はそこで早速示された原稿紙に細字を十行あまり書いて見せた。しめたと思つた。

『うん、それくらゐに書ければよからう。ぢや、實はワイフの内職ですがね。それを君に當分やつて貰ひませう。』社長は云つた。

『ありがたう存じます。』いよ〳〵しめたと思つた。

それは萬朝報の俚諺正調を寫し取ることであつた。

『これは黑岩先生からの註文で此のまゝ保存するのださうだから、絶對に落字がないやうに、出來るだけきれいにやつて下さい。』

『かしこまりました。』

そこで私は明治二十年代から四十年代までの萬朝報の綴込の中から俚諺正調欄の都々逸を全部寫し取ることをありがたく引き受けたのである。此の時既に私の顏色は俄かに他人目には變つてゐたに違ひない。何故なら私には明日からの生活が笑ましく確定したからである。そして一時でもさゝやかな救ひを得ると云ふことは、其のさきにどれほどの難闘が、どれほど無數の困厄が待ち受けてあらうとも、私にとつては其の場合の嬉しさを奪ふことは出來ないものであつた。

私は一先、麻布三ノ橋の木賃宿に身を落ちつけて、翌月から上野圖書館へテクで通ふことを續けた。古い新聞 綴込

は上野圖書館の他にないのである。それには三ノ橋に宿を置くことは、非常に地理上不便であつたが、以前からの馴染のめし屋の附近を自分の根據地とする必要上止むを得なかつたのである。そこでは私の食費を一週目拂ひにしてくれたから。

さて私はかくしてやつと工場勞働から身を脱し得た。ハンマの代りにペンを持つ仕事にありついた。私にとつては寫字と云ふ低級な賃仕事も高尚な文筆生活と云ふ誇を感ぜしめたのである。もう油でべと／＼になつた仕事衣を着て、濁つた黑い空氣を吸つて、汗をだく／＼流して激しい勞働をする必要はなくなつたのである。それが私にとつて喜びでなくて何であらう。

『おう自分は今、かうして多くの學者達（實際私の目には圖書館の閲覽者達は皆偉い前途有爲の天才で學者の集會場のやうに見えたのである）の中に交つて、最高學府の帝國圖書館の特別閲覽室のバネ仕掛の椅子に腰をかけて、文字を書いてゐるのである。それによつて自分は生活してゐるのである。何と云ふ誇らしい生活だ。何と云ふえらいことだらう。』

實際私にはさう云ふ氣持がした。一躍して偉い人間達の仲間に入つたやうな氣がした。私は時々閲覽室の莊麗な高い天井を仰いだ。ニス塗の立派な欅の大テーブルを撫でた。ぶく／＼する椅子にじつと靠れて涼しい風の吹き込む窓を見やつてゐると俄に奏任官ぐらゐになつた氣持がしたのである。

そのやうな氣持で私は毎日萬朝報の粹な都々逸の文句を念入りに寫すのであつた。寫字は一枚二錢であつた。私は二十五枚平均で毎日やつて行つた。すると一週間目頃からひどく全身の疲勞を感ずるやうになつた。二十五枚ほど細字を書き上げると、夕方げんなりした。まるで毒藥でも呑んだやうな全身の倦怠と頭痛と惡感を催すのであつた。そして何故かひどく手首などが細く痩せ、頬がげつそりなつたやうな感じがするのであつた。

私はだん〳〵圖書館と云ふものも工場とは大した異ひはないと云ふ氣がし出して來た。私が批判、畏敬と羨望の念を以て見た此の堂々たる帝國圖書館裡の閲覽者達も、よく〳〵見ると、其の大多數はいたましい賣文の奴隷であることが分つて來た。其の一部は苦學的老書生であつた。若しくは哀れな安飜譯家であつた。朦朧無宿の文士であつた。そこには過度の書見から得た神經疲勞と營養不良の顏色が悲慘に充滿してゐた。

『あゝどこへ行つても社會は牢獄だ。』私は遂に嘆息した。そこには監獄の看守然たる監視人が見廻つてゐた。そして俯向いて居眠りをしたり、不完全なインキ壺を使用したりしてゐる者を見咎めた。

勿論最高學府の圖書館が牢獄であるべき筈はない。そこは貴くも知識の自由研鑽所である。然し現社會のあらゆる部面の人間は雇主から過度に虐役されるか、然らずんば自分自身の目的の爲めに自分で自分を雇主と同じ程度に虐役するかの二つより他にないのである。なるほど私は工場勞働をしてゐた時よりも自由であつた。自分に對して自分以外に誰も命令して仕事を強るものはなかつた。然し結局私は自由と云ふ主觀的な氣持に欺かれてゐたのである。私は一日二十五枚の寫字をするのでは到底人並の生活は出來ないのである。私は自分の能率を出來るだけ高めねばならなかつた。どんなことをしても三十枚は仕上げねばならぬと自分を鞭打つた。其の爲めに目がとつぷりと暮れてしまふまでテーブルに打つ伏してこつ〳〵書いた　そしてがつかりしながら圖書館を出て、電車賃を一杯の酒に代へる爲めには上野から麻布までてく〳〵歩いた。私は鐵工場と云ふ牢獄から圖書館と云ふ自由牢獄に轉じたに過ぎなかつた。そこには危險な機械がない。石炭の煙と油の臭ひによつて濁された有害な空氣がないだけであつた。

上野は何々博覽會の最中であつた。樂隊の囃と群衆とイルミネエションとは、あるがまゝの人生が幸福で申し分のないものであると云ふことを以て欺いてゐた。それでも終日工場で働いてゐた時分は、街を歩くこと、華やかな灯と人波

を見て自から欺かれることが唯一の樂しみであつたのである……。然し今や街は私にとつては疲勞と空腹と絕望とを一層色濃くする無情な背景に過ぎないものであつた。然し私はもと〱此の大都會を慕つて來た者であつた。そして此の大都會で所謂榮達と幸福とを得ようとして來た者であつた。そして私は今、自分の無力と奮鬪の不足から此の大都會を呪ひつゝあることを知らねばならなかつた。此所に於て私は恥ぢねばならなかつた。若しも私に此の大都會に對する呪ひが許されるならば、もつと根本的に、思想的に、無我的に、沒野心的に、戰鬪的に、人道的であらねばならなかつたのである。然し私の呪ひは一個の無力者の不平であつた、小なる自我主義者の愚痴であつた。高く澄み渡つた大都會の初秋の空は此の私の哀れな 屑を靜かに嘲笑つてゐるのであつた。

或る日のこと、電車の上から不圖叔母夫婦の姿を私は見つけた。これは非常な偶然であつた。もう八年間も逢つたことのない叔母夫婦の姿を、此の大都會の人波の中に私はどうして見出し得たであらう。それは自分ながら、あまりの偶然に胸が打ち顫えるほどだつた。彼等は博覽會見物に來たのに相違なかつた。叔父は田舍の洋物屋である。彼は昔から毎年一度や二度は雜紗を仕入にやつて來ることは私も知つてゐた。

彼等夫婦は今、それとは知らず歩いて行くのであつた。二人は或る唐物店の店先に立ち止まつた。私は此のまゝ見のがすべきか、電車を飛び降りて行つて會ふべきかを思ひ惑ふた。然し私は自分の現在の姿がどう思ふても恥かしかつた。其のうちに電車はどん〱馳つて二人が姿を後にしてしまつた。私の後悔は彼等と遠ざかるにつれて口惜しさを大にした。

「あゝ、何故俺は飛び降りなかつたらう。逢ひさへすれば俺の現在の貧乏は一時的にも救はれ得たに違ひないものを……」

然し彼等は私の此のみすぼらしい姿に出逢つて嫌惡と疑ひと恐れなしであり得たゞらうか。父の遺產の一部分をそこ

まかした彼等は、此の大都會のまん中で落ちぶれ果てゝゐる私から聲をかけられて、仰天なしであり得たらうか。然し恐らく彼等はうまく云ひわけをして逃げを張つたに相違ない。好い加減な宿所を云つて巧みに廻避したに相違ない。私はさう思ふと彼等に對する舊恨が一時に甦つて全身は狂猛な感情に燃え立つた。此の時電車はもう須田町に來てゐたが、私は今から飛び降りて引き返して行つても彼等の姿の後を狙つて其の宿を突き止めた上で戰慄させるに足る行爲にまで、自分の運命の暗示に從はふべきかを一瞬間考へ惑ふて血ぶるひした。と此の瞬間私は自分の相貌が確かに異様な緊張を以て車中の人々を怪ませてゐることに氣づいた。そして急に心を持ち直した。それは私の直ぐ側に可憐な云ひやうのないしとやかな情趣を湛ふた十六七の髮をお下げにした女學生が吊り革に片手を托して其の白い發育のよい二の腕にからまる下襦袢の袖を匂はせて、うつとりと上目で何かを見とれてゐるのにふと氣づいたからであつた。私は何故か彼女に恥かしい氣持がした。私はかうした可憐な小娘の爲めにも此の人生に飽まで奮戰しなければならぬやうな氣持になつた。

『さうだ。自分はこんな落ちぶれた姿を叔父等に見せてなるものか。他日のよりよい復讐の爲めにも……』私はあきらめた。

十五

萬朝報の都々逸の寫字は二月半ほどですんだ。然し私は其の後もなほ民文社との關係を保つことにした。

次に私は生命保險會社の勸誘文の代作を引受けた。これは私にとつては非常に苦心を要する仕事であつた。依頼者の註文では、白骨の御文章もどきの語呂と文體とを以て生命保險の効要を說き、人間一生を完ふするには是非共生命保險

に加入すべきであると云ふ趣意を表現しなければならなかつたのである。

『うまく出來れば一枚二圓ぐらゐあげたいと思ふが、まあ一つやつて見たまへ。まづければ一圓か一圓五十錢で我慢して貰はなくちやならぬ。』社長は云つた。

私は圖書館へ行つて白骨の御文章を先づ寫し取つた。それから保險講話と云ふ某博士の著書を探し出して、それを一讀した。そして、それによつて、保險とは一人の不幸な出來事を多數人を以て分擔する經濟的原則の應用であると云ふ大意を會得することが出來た。そこで私はいよ／＼文案の苦吟に沒頭したのである。『それ人間の一生は』から、『あなかしこ、南無阿彌陀佛』までの御文章の文句を、生命保險勸誘文の趣意にもじつて、首尾よく脫稿するまでには四日間を要した。私は此の最初の創作にどれほど心血を注いだことだらう。一代の名文を書かうと云ふ意氣込を以て仕上げねばならなかつた。

『それ人間の一生は……』私は此の御文章の冒頭を幾百度くり返し呟いたか知れなかつた。四日間と云ふ時日は御文章と保險のことより他に私は何ごとも考へる暇はなかつた。

全文で四百字詰め原稿紙二枚ほどあつた。私は社長が感服して最高の稿料を拂つてくれるであらうとの自信を以て民文社を訪ねた。

十六

『まあ／＼これくらゐならよからう。』社長は一讀して云つた。彼は決して私に慢心を起させなかつた。

民文社の[illegible]散は私にとつて非常な經濟的打擊であつ[illegible]のは無論である。更に再び生活の[illegible]を失ふて、いろ／＼の勞働

を試みたのはそれからであつた。ふとした思ひつきから三河島の燒繪工場で一月ほど燒繪の仕事をもやつて見た。夭折した天才畫家で詩人の村山槐多君と知り合つたのも其の燒繪工場である。私はそこでいろ〳〵の畫家と知り合つた。私は少年時代に繪が好きで少しは心得てゐたのである。仕事は多く新年の贈物に使ふニッポのポンの廣告板であつた。兎とお月樣を描いて、NIPONOPONと羅馬字を燒き込むのが仕事だつた。一枚五厘の燒繪を私は毎日百枚宛仕上げたがさすがに天才畫家の村山君には及ばなかつた。彼は猛烈な精力を以て正午までに私の一日分の仕事をしてしまつて、さつさと美術院の研究所へ出かけて行くのである。

一月ほどやつて見たが私は此所でも永續きがしなかつた。といふのは工場主はもとは洋畫家で佛蘭西へも行つて來たと云ふことを何かにつけてほのめかす男であつたが、人の話では彼の繪は全くものになつてゐないと云ふのであつた。そこでとう〳〵彼は燒繪を始めたのだが、いつも茶褐のルバシカなどを着込んで美術家氣取りで仕事場を立ち廻つてゐた。四十五六のなか〳〵拔け目のない才人で、藝術家らしい容態と商賣人らしい狡猾さとが此のくらゐよく調和しきつてゐる男を私は見たことがなかつた。彼は職人達を巧に激勵して最高度までに能率を釣り出して、そしては單價率を引き下げて勞働力を搾取することをもよく心得てゐた。私は彼が藝術家であると云ふことに於てさうした狡猾さをどうしても我慢しきれなかつたのである。でやめた。

私には社會と云ふものがもうあまりに見え過ぎてゐて何をやつても愉快に最後まで續けられなかつた。私はさうした自分を一面には悲しんだ。どんな生活にも默々として忍從してゐる他人の我慢強さが或る時は心から望ましかつた。

さて民文社解散後のK氏は麹町永田町の小ぢんまりした二階家に住つて單獨で賣文生活を營んでゐた。浮世顧問と書いた立札が私の目を惹いた。或る日私は通りかゝつたので彼を訪ねたのである。

『其の後どうしてゐる。』彼は私のやつれきつた顔を見て云つた。

『どうも何をやつても面白くやれません。私はどうしたら好いでせうか。』

此の訊ねはあまり彼の同情を惹かなかつた。

『それは愚痴だよ君。何をやつても面白くないとはどう云ふ意味だね君。分りきつたことぢやないか。』彼は私を睨めつけて云つた。

『いゝえ、何をやつて見ても馬鹿々々しくてやる氣になれないのです。どんなに忠實に働いても正當に酬ゐられないと云ふことがです。』

『それは分りきつたことだ。愚痴だと云ふものだ。』

『何故愚痴だとおつしやるのです。』

『君はあまりに分りきつたことを云ふから愚痴だとしか云へないよ。』彼は非常に氣味の惡い冷笑を以て私をぎろりと見た。

『何をやつても正當に酬ゐられない。何をやつて見ても馬鹿々々しくて出來ないなら、どうすれば好いのだ。それを考へないやうな人では僕には話が出來ない。』

『それは私だつて考へてゐます。ですから私はこんな世の中では何もしたくないのです。ソォアボール……』

彼はから〳〵と苦笑した。

『何もしないで生きて行けるならば文句はないぢやないか。』依然として彼は冷笑をやめなかつた。

いやにコンモンセンスなことを云ふなと私は思つた。

『あなたのおつしやることはよく分りました。私はあなたに愚痴を訴へてまことに相すみませんでした。』

『意氣地がなければすべてを諦めるか、さもなくば思ひきつて革命家になるか、その二つより他には行き途はなからう。』

『であなたは。』

『僕等も意氣地がないから、かうして貴文の徒で其の日〳〵を生きてゐる。仕方がないぢやないか。』

『私は何もしないで生きてゐたいのです。それが現社會に對する私の勝利です。』

『それもよからう。然し結局それでは死んでしまふより他はないだらう。さうなると死ぬことが最極の勝利であるわけだ。』

『いや私は水をのんでも生きて行きます。死ぬのはいやですから。』

『や、これは困つた人が出來た。一體水をのんで幾日ぐらゐ生きられるのだい君――一體君には生きることが正しいのか、死ぬのが正しいのか。それを先づ聞かう。どう考へるのだ。』

『生きることが正しいと思ひます。だが……。』

『ぢや生きなくちやならんぢやないか。』

『こんな社會に忍從してもですか。』

『仕方がない。皆がこんな社會に甘んじてどうともしないのだから仕方がない。皆が意氣地がないからだ。臆病で弱蟲だから……』

彼はそれ以上何も云はなかつた。

十七

私は遂に死なざらんが爲めに再び工場勞働者たることを甘んじた。何故なれば私の生活はパンだけでは最早すまされなかつたからである。强い酒がなくては生き甲斐を感ずることが出來なくなつたからである。それには到底一個五厘め燒藷や一枚二錢の寫字や、または白骨の御文章を生命保險の勸誘文に作り替へたりしてゐたのでは一杯の安ブランデーにもありつくことは不可能だつたのである。鐵工場の濁つた黑い空氣を吸つても、酒の飮めるやうな勞銀が私には必要になつた。

私は遂に田町の田岡鐵工場に身體を賣り込むだ。其所の機械場の職工長は以前から少しばかり知つてゐたので、彼は私の哀願を容れて、忙しくはないが使つてやらうと云つてくれたのである。仕事は瓦斯會社のコックであつた。川口の鑄物工場から荷馬車で運んで來るヅク鑄物のコックが工場の炭小舍の前には山と積まれてゐた。私は每日そのコックの穴の荒ぐりをやらされた。此の工場はすべて個數勞銀制度で、一個二錢のコックの荒ぐりを私は朝の七時から夜の七時までに八十個をやつてのけた。一圓六十錢と云ふ一日の勞銀を得るにはかなりに骨は折れたが、飮みたい酒がのめると云ふことで辛抱した。然しさすがに十二時間をぶつ續けに働くと肩から腕にしびれを感じて、がつかりした。相手はヅク鑄物と來てゐるので削り粉は眼や口の中へ飛び込んで、手も顏も炭燒男のやうに黑くなつて、風呂屋へ行つて洗つても毛穴に染み込んだ黑いものは容易にとれやしないのである。

然し私はさうした生活をしてゐる間にも文學のことを考へた。ゴルキーの全生涯を自分の全生涯にあてはめて考へることを唯一の激勵とした。

此の頃から私は立川の紹介で、或る文科大學生のグループによつて月々催される座談會に顏を出すやうになつた。彼等は『奇蹟』と云ふ同人雑誌を出して理想主義的ネオロマンチシズを文壇に標榜し、中には既に文名をなしてゐるのもあつた。彼等は皆、所謂教養に於て欠くところのない上品な青年達であつた。私の如き一勞働者が彼等に接近することは全くの奇緣であつた。私は毎月二回の座談會には必らず出席した。工場を早じまひにして、風呂屋へ行つて特別に顏や頭や汗臭い身體を淸めて、そして私はいそ〳〵と出かけたのである。彼等の思想や藝術上の立場は非常に高踏的で貴族的なものであつたが、私は彼等によつて自分を少しでも啓發したいと思ひ、其の教養に於て、環境に於て彼等と私は泥沼と公園ほどにかけ離れてゐたにもかゝはらず、イグノラントな一勞働者としての私は謙遜と自卑とを唯一の保護色として努めて近接した。然しさうした態度さへも何等誇るべきものを持たない人間の卑屈さと同樣に或る時は見えたに相違ない。私はそれを承知してゐた。そこでは筋肉勞働の慘苦やパン問題や社會主義や其の他實際問題に屬する反抗的感情は內省不足の人間の問題として侮蔑された。社會に對しては頑强な私は一時全く自尊心といふものをそこでは失つた。

然し私が彼等に近接したことは決して私にとつて無益でないことをやがて信じ得た。何故なら彼等は社會がよくて惡くても人として持たねばならぬ積極的な精神を――それは極めてお目出たい理想主義的なものではあつたが――語り合ふことに熱心であつたからだ。彼等が社會の改善よりも個々人の人間としての完成を先に空想してゐることに對しては堪まらなく私は不滿であつたが、少くも、境遇に苛まれ、荒廢しかけてゐる一勞働者の私にとつては、うるはしい理想を模倣することだけでも無意味でないことのやうに思はれた。

「人生はフォアボールでもいけない。どんな惡球なでも打ち飛ばすだけの氣力がなくちやいけい。强打者でなくてはいけない。境遇に敗けてはいけない。すたれ者になつてはおしまひだ。一兵卒でもよく戰ふ者は士官以上の名擧の戰死を

遂げ得る。俺は如何なる境遇にも最後まで戦はねばならなかつた……死ぬまで……」これは全く彼等によつて暗示された貴重なものであつた。

中央公論大賣捌所

同	神田區表神保町	[illegible]屋
同	京橋區銀座三丁目	東海堂
同	京橋區元數寄屋町	北隆館
同	日本橋區本石町	至盛堂
同	本郷區本富士町	誠春堂
大阪市北區梅田町		盛文館
同	北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前		共盛社
同	四條西洞院	前田大誠社
名古屋市	富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目		日韓書房

◉定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾四錢
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓貳拾四錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓四拾八錢
	以上郵稅共	

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾七圓六拾八錢の割さなれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

一誌代郵稅　[illegible]
一振替貯金　口座は東京三十四番なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるゝを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
- 一金一圓迄　金六錢
- 一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
- 一金拾圓迄　金八錢

一中央公論及婦人公論　代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十一年一月二十五日印刷納本
大正十一年二月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木西三

發行所　東京市本郷區本郷三丁目六番地　中央公論社
電話　（小石川）一四四
電信略號　コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.